

ポケットモンスター
let's goリーリ
エ！

夢叶

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

アニメポケットモンスターを絡ませており、主人公はリーリエとしています。ポケモントレーナーとなったリーリエが

カントー地方を舞台に新たな仲間や新たなポケモンと出会いながら旅をしていく物語となっています。

リーリエはサトシとピカチュウが帰国した二週間後にカントー地方を訪れる設定となっておりです。

カントー地方が舞台とされておりますが、出てくるポケモンはカントーのみあらず出していきます。

至らぬ点があると思いますが、よろしくお願いします。
気軽に読んでいただけたらいいと思います。

目次

はじめに	1
手持ち	9
第一章	
第一話 新たな物語	17
第二話 マサキを訪ねて	20
第三話 新たな目標	25
第四話 始まりの町へ	31
第五話 二人の訪問者	38
第六話 忍び寄る【R】	44
第七話 研究所での決戦	55
第八話 昔と今	65
第九話 新たな仲間と初ゲット!!?	80
第十話 常盤での出会い	96
第十一話 彼女の願い	111
第十二話 森の怪物	134
第十三話 VSニビジム 最初の試練	166
第十四話 暴走	212
第十五話 少年とポケモン達	254
第十六話 チャンピオンの実力	295
第十七話 細くも樫の木	324
第十八話 オツキミ山の独裁者	

第三十六話	幹部登場	1003
第三十七話	V S タママシジム 苧環	1017
第三十八話	スイレンとイーブイ	1058
第三十九話	彼岸の守り神	1079
第四十話	前向きロケット団	1106
第四十一話	起きてよ！カビゴン！	1141
第四十二話	三番勝負 V S アイラ	1167
第四十三話	二人の絆	1185
第四十四話	どんどん行くよ！ドンバ	

トル ①	1231
第四十五話	どんどん行くよ！ドンバ
トル ②	1284
第四十六話	どんどん行くよ！ドンバ
トル ③	1326
ポケットモンスターG 番外編	
A C T 1	1358
A C T 2	1366
A C T 3	1374
A C T 4	1391
A C T 5	1407

始めに

詳細設定

お目通しいただきありがとうございます。

今さらながらですが、この小説における大まかな設定を記載して置こうかと思います。

理由としましては、この物語はアニメポケの方と同時進行で開始したため、今後のアニメポケの展開を最終回まで自分なりにどう物語が進んでいくか予想を立てていきながら執筆していききました。

そのためアニメポケと絡ませていると詳細したのにも関わらず、話が噛み合わなくなっている事で、読者の皆さんを混乱させているのではと思います記載する事にしました。

すでに此方を読まれている方々には遅くなってしまう申し訳ありません。

そして新規の方々は此方の詳細を確認にした上で楽しんで頂けたらと思っております。

す。

尚、アニメで追加された要素は回収していくつもりでいますのでよろしく願います。

『人物について』

リーリエ

ゲームの方に基づいて母の後遺症の回復の手がかりを見つける目的としてパート

ナーのシロンと一緒にカントー地方へと足を運んだ事になっています。

- ・ポケモンに触れなかった過去
- ・シルヴァアデイとの和解
- ・ゼットリングと氷乙の所持などは取り入れています。

ルザミーネ

ルザミーネはゲームの方の設定に基づいて書かれています。
手持ちはアニメの方で揃えています。

グラジオ

ウルトラホールでの戦いとルザミーネの救出後、エーテル財団の代表代理へと就任とゲームに基づいた設定となっています。

サトシ達とは面識あり

手持ちに関しましてはアニメの方で基づきます。

サトシ

『島巡り』

四島の試練、大試練は全て達成

『Zクリスタルの所持数』

アニメと同じ

『ポケモンリーグ』

アローラリーグはウルトラビーストの襲撃により延期という設定。

そのアローラリーグに向けてサトシとピカチュウは修行のため一時的に帰国しているという設定です。

『手持ち』

・ピカチュウ

技構成は「エレキボール」から「エレキネット」へと変更あり

・ニャビー

ガオガエンにはククイ博士のガオガエンとの激闘の末に進化しました。そこはアニメに遵守していきたいので進化はさせずにニャビーのまま進めさせていただきます。

・アーゴゴン

サトシ達と面識はありますが、まだベベノムだった頃にウルトラホールでお別れした所から時間は止まっている事にします。

・モクロー とルガルガンは変更なし。

・メルメタルは現時点ではサトシの手持ちにはいませんが、今後の展開で回収していきます。

『ゲッコウガ』

歴代のサトシのポケモン達も登場させて行きたいと思っています。プニちゃんと一緒にアローラの危機を察知したゲッコウガがウルトラビーストとの戦いにおいて再開を気にサトシの元へと戻った事にしました。

『ロトム』

サトシと一緒にマサラタウンへと着いて行かずにククイ博士の元へと止まる。

マオ

- ・ゼットリングと草Z入手済み
- ・手持ちはアママイコ
- ・現時点でのシエイミの加入はなし

カキ

- ・Zクリスタル数はアニメと同じ
- ・手持ちはバクガメス、ガラガラ、リザードン

スイレン

- ・ゼットリングと水Z入手済み

- ・手持ちはアシマリ
- ・現時点でのナギサの加入はなし

マーマネ

- ・ゼットリングと虫Z入手済み
- ・手持ちはトゲデマルとクワガノン
- ・クワガノンは進化条件とやらの関係で、カントーでの進化は難しいと判断したため、すでに進化済みという設定で行きます。

ククイ博士

- ・正体がロイヤルマスクとはサトシ達にはバレてません
- ・バーバネット博士とは夫妻
- ・手持ちはアニポケの方で基づく

- ムサシ・コジロウ・ニヤース・ソーナンス
- ・ロケット団は本部の命令により一時帰還
- ・ゼットリングと悪Z・ミミツキユ乙所持
- ・キテルグマ達はついてきてません

タケシとカスミ

アローラ組とは面識はなしという設定でいきます。(プリンもです)

宜しく願います。

手持ち

シロン (ロコン アローラの姿)

タイプ こおり

性別 ♀

性格 おとなしい

特性 ゆきがくれ

技構成

【れいとうビーム】【こおりのつぶて】【こごえるかぜ】【ムーンフォース】

リーリエの最初のパートナーにして一番の相棒である。ニックネームのシロンはリーリエが卵の頃から育てている時に名付けられていた。その由来は白くてコロコロと転がるだからそうだ。

落ち着いた性格もあって寄せ付けない空気を漂わせていたのだが、リーリエが空振りしたモンスターボールに自らの意思で入ったり、リーリエを護るために勇敢にロケット団に立ち向かったりと、リーリエにはすぐに懐いていた。当時はピカチュウ達の輪の中

に入ろうともしなかったが、スクールの仲間たちと共に過ごしていくにつれて、自分からスキンシップを取ったりする様子などが見られるようになった。しかしリーリエから離れると寂しくなり不安になるためリーリエの側からなるべく離れないようにしている。

ポケモンバトルでは、普段の性格からは一変して勇ましく立ち振る舞い、リーリエも驚くようなバトルを披露していく。

ムツクル ↓ ムクバード

タイプ ノーマル・ひこう

性別 ♀

性格 がんばりや

特性 いかく

技構成

【つばめがえし】【はがねのつばさ】【かげぶんしん】【でんこうせっか】

カントー地方にてリーリエが初めて捕獲に成功したポケモンであって上空から相手の出方を伺ったりなど、その高度なバトルスタイルは野生の頃から備わっていた。

ムツクルの頃から根性があつて、勝負に敗れたその次の日にはリーリエを特訓へと

引つ張ったりと、とにかく負けず嫌いな性格をしている。
オツキミ山ではズルズキンを相手に果敢と立ち向かい、その最中でムクバードへと進化を遂げた。

キモリ

タイプ くさ

性別 ♂

性格 れいせい

特性 しんりよく

技構成

【ギガドレイン】「あなをほる」【でんこうせっか】「はたく」

トキワシテイで知り合った少女、スマレから譲り受けたポケモン。

スマレがリーリエにキモリを託そうとした時は彼女と一緒にポケモンリーグに出る夢を持っていたため、彼女から離れる事を激しく拒んでいた。しかしスマレの想いやリーリエの優しさに触れたことをきっかけに、その夢を叶えるためにリーリエの手持ちに加わる事になった。

冷静でそのクールな性格もあってそんなに感情を表へと出したりしないので、最初は

シロン達と仲良く出来るか心配していたが、カノンやサトルのポケモン達との特訓に付き合っただけで、問題が起こると真つ先に仲間を助けようと前へと出たりと、仲間のためなら身を呈して闘う。その様は他のポケモン達からも信頼されている。

だがリーリエに対して忠誠心が強いのか、その行き過ぎた行動は時にはリーリエも困らせたりと度々騒動を起こす引き金を引いてしまう事もある。

コイキング ↓ ギャラドス

タイプ みず・ひこう

性別 ♂

性格 ゆうかん

特性 いかく

技構成

【たいあたり】【かみつく】【アクアテール】【りゅうのいかり】

旅の途中で傷だらけに倒れていた所をサトルとカノンが発見して、傷の手当てをしたが出来いの始まり。通りすがりのトレーナーからは弱いポケモンというレッテルを貼られて、全く相手にされない事が悔しくて、傷だらけになりながらも特訓しようとするなど無茶を繰り返したりする。その行動はよく水辺で一緒にいたブイゼルにも止めら

れていた。ロケット団との戦いの後、頑張り屋で勇敢に戦う姿に目を光らせたリーリエからの誘いをきっかけに手持ちに加わる事となった。

数々のバトルの中ではリーリエの起点にもすぐに応えてくれたり、うずまきカップでは自分よりも大きな体を持つミロカロスを倒すなどその強さは本物である。自分を信じてくれるリーリエのためならどんな相手であろうと戦う。その強靭な意志はギャラドスへと進化した今でも変わらない。

ズルズキン

タイプ あく・かくとう

性別 ♂

性格 いじっぱり

特性 じしんかじょう

技構成

【からてチョップ】【とびひざげり】【あくのはどう】【もろはのずつき】

リーリエに出会う前は多くのズルツク達を引き連れる親玉であり、ピイヤピツピとオツキミ山に生息する他の野生のポケモン達を追い出してはオツキミ山を占拠していた。

ジュンサーから捕獲の依頼を受けた多くのトレーナー達を追い払う程の実力を持ち、そのカリスマ性はズルッグ達を平伏させていた。

手持ちに加わった後は主人であるリーリエに対して心を開くこともなく指示をも聞こうともしない。しかしズルズキンといつか心を通わせられる日が来る事を信じているリーリエの純粋な気持ちにはたまに気を向ける事もある。デイグダの洞窟では敵の攻撃からリーリエを守った事もあり、主人であるリーリエを完全に信用していないわけではない。

そんなある日、ロケット団に捕まった自分を守る姿やシロン達に向ける優しさに気づくことが出来た事により信頼を寄せる事が出来た。イワヤマトンネルで出逢った四天王のシバとのバトルをきっかけに晴れて本当のパートナーになる事が出来た。

ヒノアラシ

タイプ ほのお

性別 ♂

性格 すなお

特性 もうか

技構成

【かえんほうしゃ】【ニトロチャージ】【スピードスター】【えんまく】

旅の途中で衰弱していた所を助けたのが出会いのきっかけ。後にヒノアラシを捨てたトレーナーのスワマとのバトルで共闘をしたことにより、自分に対し真っ直ぐに接してくれるリリーエに付いて行く事を決めた。

バトルでは【ニトロチャージ】で加速したり【えんまく】で目眩ましなど、色んなスタイル展開して行く。相手の実力に圧倒されて不安になる事もあるが、リリーエからのエールがあれば背中への炎を吹き出しては気合を入れ直す。

ゼニガメ

タイプ みず

性別 ♀

性格 さみしがり

特性 げきりゆう

技構成

【みずてつぼう】【アクアジェット】【しろいきり】【こうそくスピン】

サトシのゼニガメが団長を務めるゼニガメ消防団の団員であった。手持ちじゃない時からリリーエや他のポケモン達と親しい愛柄でもあり、うずまきカップではリリーエ

とは息の合ったバトルをして行った。別れ際、サトシのゼニガメに背中を押されて貰った事により正式にリーリエの手持ちへと加入した。消防団仕込みで鍛えられたその目は暗闇の中であると砂煙が舞う中であろうと確実に相手の姿を捕らえる事ができる。

ヒトツキ

タイプ はがね・ゴースト

性別 ♂

性格 おくびよう

特性 ノーガード

技構成

【れんぞくぎり】【かげうち】【きんぞくおん】【おいうち】

ポケモンタワーに向かう途中で出会った。性格はかなりの臆病であり、リーリエのリユックやモンスターボールの中へとすぐに逃げ込んでしまう。リーリエの手持ちに入ったのもデントの叫び声に驚いてリユックサックの中へと逃げ込んだ際にモンスターボールの開閉スイッチに触れてしまった事がきっかけである。

第一章

第一話

新たな物語

新たな一日を告げるかのようにゆつくりと朝日が昇る。

それと同時に一人の少女が海を眺めていた。白を基準としたシャツとスカート。腰まで長くのぼした金髪をポニーテールに纏めた少女はゆつくりと照らされた朝日の光を浴びていた。船は故郷であるアローラ地方を離れ、まもなくカントー地方へ上陸しようとしている。

「お嬢様！ その格好ですと肌寒いですよ。まだ早朝まもないのでありますから」
ロフトから一人の使用人が慌てて上着を持ち、あがってきた。

「大丈夫ですわ。ジェームズ！ このぐらいいいなんともありません。
ちようど太陽の光が当たって暖かいですもの」

そう彼女はガッツポーズを取りながら笑顔でかえした。

「ジェームズ。お母様の具合はどうでしたか」

「御安心を、これといってなんの異変もありません」

「そうですか。よかった」

「カントー地方へ上陸しましたら、すぐに車を手配します。手配次第マサキ様の元へすぐに向かいましょう」

「はい！」

そう少女がカントー地方へやってきた理由はウルトラビーストの神経毒によつて衰弱された母を助けるためである。

完全に回復するまでにいたらないため、過去にポケモンと融合してしまった前例があるマサキという人物を訪ねれば何か分かるかもしれない。そのため彼女は使用人のジエームズと一緒にカントー地方へとやってきたのである。

「これで奥様の体調がよくなればいいのですが……」

「大丈夫よジエームズ。きつとよくなるわよ。絶対に」

「そうですね。そうでございますな！」

お嬢様を慰めるべきが逆に慰められてしまった。トレーナーズスクールやエーテル財団の事件を通して頼もしくなられた姿をみて、ジエームズは少女の成長を改めて感じた。

【ピンポンパンポーン】

その直後、アナウンスが鳴り響いた。上空ではキャモメの群れが船と同じ進行方向に

飛んでいた。その先に見えてきたのは

「御来場のみなさま、長旅お疲れ様でした。まもなくカントー地方へ上陸いたします。お忘れ物なき様、ご上陸の準備をお願いいたします。」

見えてきたカントー地方。ジェームズは一足さきに上陸準備のためロフトへと戻って行った。

「あれがカントー地方。」

すると少女は一つのモンスターボールを取り出し、その開閉スイッチを開いた。中から出てきたのはトレーナーズ・スクールで卵から孵化させ大切に育ててきたポケモン。アローラ地方の環境の変化で氷タイプに分類されたポケモンロコンであった。少女はロコンを抱え、もうすぐあの地に足を踏み入れようとなるカントー地方を見つめた。

「ロコン。あそこに見えますのがカントー地方。サトシとピカチュウの故郷です。」

波風にあたりながらロコンも少女と同じようにカントー地方を見つめた。少女の名前はリーリエ。新たな大地 新たな出会い それと同時に少女の新たな物語も始まるうとしていた。

第二話　マサキを訪ねて

クチバシティ。カントー地方の港町であり地方からやってきた観光客は必ずここを訪れる。もちろん地方のトレーナーもだ。そのためカントーのトレーナーは待ち構えてはバトルを申し込んでくるので港町の外れのほうにはいくつものバトルフィールドが設備されている。いま、まさにバトルの真っ最中だ。

「ゲンガー　　！『シャドーボール』!!?」

「ニドリーノ！かわして『どくづき』だ!!?」

アローラ地方でもポケモンバトルはもちろんあるが、やはり他方に生息しているポケモンのバトルは自然とみてしまう。特にニドリーノはアローラには生息していないポケモンなためリーリエもつい目をやってしまう。バトルの申し込みを恐れロコンは一度モンスタールールにしまっている。リーリエもバトルの経験はアローラにいた頃、マオ達と遊び感覚でやってみただけで公式での試合経験はない。

友人以外の人とのバトルはやっとならないのだ。

「お嬢様！お待たせしました」

クチバシティにあるレンタカーを借りてきたジエームズは後部座席にリーリエの母

であるルザミーネを寝かせ、リーリエも助手席へと乗った。

「それでジエームズ。マサキさんのお宅はわかりましたか」

「大丈夫です。どうやらハナダシティの岬に住んでいらっしやると聞いてきました。それでは行きますよ」

車はクチバシティを後にしてハナダシティへと向かった。

クチバシティからはそんなに離れていないためものの30分ぐらいでハナダシティへと到着した。そこからハナダの岬にある一軒家がポケモンボックス管理人マサキの自宅である。

「さあ、つきまたぞよ。お嬢様」

「はい。ありがとうございます」

車から降りたリーリエはすぐにマサキの自宅のインターホンを鳴らした。

「こんにちは。マサキさんはご在宅でしょうか。アローラ地方というところから来ました。リーリエと申します。マサキさんいますか」

すると、ドアが開き茶髪の青年が顔を出した。

「アローラ地方とはまたそないな遠いところから わいになんの用でつか？」

関西弁を喋る青年 どうやらこの人がマサキさんらしい。

「ボックス管理の不具合なら任せておき。この天才発明家マサキさんの手にかかれば朝飯前や！」

「あのすいません。そのことではないのです」

「ん？ それではない？」

「はい。お話を聞いて下さいませんか」

リーリエとジエームズはルザミーネをベッドに寝かせ、マサキに事情を説明した。

「なるほどな。たしかにわいはコラッタというポケモンとそんないな経験をしたことはあんやけど。あれは自分の機械による不具合やったからすんなり対処できたんやわ」
「やっぱり、ダメか。そうリーリエが肩を落としたとき」

「せやけど、調べればなんとかなる気はするかもしれへん」

「マサキ様。それを言いますと？」

ジエームズの疑問にマサキはこう答えた。

「世の中にはポケモン研究者の理論を覆すポケモンはまだ存在するんや。直接脳裏に語りかけてくるテレパシーを持ったポケモンもおれば、まだ確認されたことのない進化を遂げるポケモンもおる。あんさん達とこの出身であるアローラもそうや。リージョーフォームやZ技やって最近になって知った人もいるぐらいや」

「理論を覆す…」

リーリエ自身もそう感じたこともあった。カントーからやってきた友人サトシもそうだ。相性をひっくり返すバトルスタイルやまだ野生のポケモンと普通に心を通わす不思議な魅力。また、エーテル財団との戦いにおいては途中で再開を果たしたゲッコウガとはメガ進化とは全く違う進化、キズナ現象を放っていた。サトシと出会ったことで、真実は本に記されたこと全てではないとリーリエはそう思うようになったのだ。

「せやから、そのウルトラビーストというんか。ポケモンでもなんでもないseitらことやって、ちゃんと調べたことも無いからルザミーネさんの治療法が見つからんやろ。せやったら、全身全霊をかけて調べていけばその治療法やって見つかるかもしれへんしな。任せておき！他の研究者にも当たって調べみるわ。」

「マサキさん！ありがとございます!!!」

リーリエは嬉しさのあまりマサキの両手を握った。突然のことにマサキの顔はドテガバシの嘴のように真っ赤になった。

「え…ええって！せつかくアローラから来てくれたんやもん。」

わいやってそのウルトラビーストって奴らにも興味あるしな」

照れ臭そうに言うマサキを前に改めてお礼を言うリーリエとジェームズ。 出口の見えない迷路からようやく光が差し込んできたようだ。

第三話 新たな目標

「そうか。ありがとなりーリエ。ジェームズさんも」

「もう、当然じゃありませんか兄様。助け合うのが家族ですもの」

その日の夜、リーリエはアローラにいるグラジオに今日のことを報告するために電話を掛けていた。現在グラジオはエーテル財団の復興のため一時的に代表代理を務めることになった。また、国際警察とともに散り散りになったウルトラビーストの保護も行った。おかげで、一連の事件によって失われたエーテル財団の信頼は取り戻しつつある。保護施設も新たに建設してウルトラビーストだけでなくこの事件で傷を負ったポケモンの保護も行なっている。

「お坊ちやま ありがとうございます。奥様の会社をここまで立て直して下さいまして」

「俺のほうこそジェームズさんには感謝しきれないですよ。リーリエと一緒にカントーまでついて行ってもらってありがとうございます」

バラバラになった家族がようやく一つになった。リーリエは自然と涙が溢れて来た。

「おいおい頼もしくなったと思いきや泣き虫リーリエに逆戻りか？」

「もうやめて下さいよ。兄様！」

そう言つてからかつたグラジオ本人も久しぶりに兄妹らしい会話ができたのか、少し鼻声になつてゐる。二人が幼少時代から屋敷に使えていたジエームズもこの光景を懐かしく思つたのか。二人よりも大粒の涙を流してゐた。そんなジエームズをみたリーエとグラジオの笑い声が少しの間だけ続いた

「母さんの件はマサキさんに任せるとしてリーリエはこれからどうするつもりだ？」

「私も暫くカントーの方についてお母様の看病を続けようと思つています。お母様を残してアローラに帰るのもなんですし」

リーリエはルザミーネの看病に専念すると決めていたがグラジオはある提案をリーリエに伝えた。

「リーリエ。このカントー地方旅してみる気はないか？」

「えっ？」

突然のグラジオからの一言にリーリエは驚いた。

「リーリエには母さんのことや俺のことですいぶん辛い思いをさせちまつただろ。ポケモンにも触れなくなるほどの大きな心の傷もつけてしまった。母さんや俺の身勝手さがお前から自由を奪つた」

「そんな、兄様！ 私そんなこと何一つ思つてなどいません」

「お前がそう思っていないくてもお前を悲しませたのは確かだ。だから、リーリエにはいままで背負わせてしまった枷を全部外してもらって、何事にも囚われず自分が思うがままに羽ばたいて欲しいと思うんだ。新たなこの地で！新たな自分と共に！」

旅 一人のポケモントレーナーとして…:

トレーナーズスクールでもサトシからいままでの旅の話などを聞いたりもして少し興味を持つようにはなっていた。カントー地方を訪れたときも一瞬だけ高揚感が湧き上がっていたのも事実だ。できることならやってみたい。だけど、体調が安定してきているからといってまだ寝たきりの母を置いてしまつていいものか。その罪悪感もがリーリエを悩ませてしまった。

そんなリーリエの様子をみたジエームズは優しくリーリエの肩に手を置いた。

「お嬢様、わたくしはお坊ちやまの提案には賛成でございます。奥様を残して行くのに対して躊躇う気持ちは分かります。ですがお嬢様には誰かのために行動を移すだけでなく、今度は自分自身のための道も歩いて欲しいのもわたくしジエームズの願いでもあります。卵からロコンが生まれ、ロコンを初めて抱いたお嬢様を見てわたくしはとても嬉しかったでございます。お嬢様が再びポケモンにふれあう楽しさを取り戻してくれたように、自分らしさを取り戻して頂きたいのです。」

「ジエームズ：。」

「わいも賛成やな！」

声のほうに振り返ると、マサキが立っていた。

「リーリエはん！この際やつてみたらええやないか？なーにお母さんのことは任せておき！そんで持つて目を覚ましたお母さんに自分の成長した姿を見せたりや！」

「マサキさん」

「……。」

「わかりました。私やってみます！」

リーリエはカントー地方を旅することに決めた。その決心した彼女にマサキはあることを提案した。

「せやったら、ポケモンリーグを目標にジム巡りをしてみたらどうやろう?」

「ジム?」

「アローラという島巡りみたいなもんだよ。各ジムにいるジムリーダーとの勝負に勝って勝者の証であるジムバッジを八つ集めるんだ。それがポケモンリーグの出場資格になるんだ」

「ポケモンリーグ…」

その話を聞いたリーリエの決断は早かった。

「私、そのジム巡りに挑戦してみます!そして優勝してお母様をびっくりさせるのです!」

いきなりの優勝宣言をはなつたリーリエに三人は笑いだした。

「いきなり優勝宣言ってマジかよリーリエ!」

「これはとんでもない新人が現れたみたいやな!」

「えええ!そんなに笑うことですか!」

「よいではありませんか。目標はつねに高く持つというのは」

「ジエームズまでえええ!!?」

顔を真っ赤にしたリーリエをいよいよに三人の笑い声が収まる気配はない。それと同時にこの三人を見返してやりたいと強く思うようになったリーリエであった。

第四話 始まりの町へ

翌朝、リーリエはマサキの自宅が目覚めた。ポケモンセンターに泊まろうと思っていたが、グラジオとの連絡が終えた頃はもう夜10時をまわっていたので仮眠室を貸してもらったことになった。たまに研究仲間と徹夜ごしになることもあり仮眠室だけでも6部屋あるのは驚きだ。

「おはようございます。お母様」

一緒のベッドで眠っていたルザミーネに朝の挨拶を交わしながら軽く頬にキスをした。このまま眠れる森の美女のお話通りに目が覚めてくれたらいいのに。そんなことを思いながら、まだ重たい瞼を擦りながら洗面所へと向かった。

着替えをすませ、リビングに向かうとすでにジェームズが朝食の用意をしていた。昨日のうちに聞いたリーリエとマサキのリクエスト通り、私にはパンやコーンスープやスクランブルエッグといった洋食メニュー。マサキにはご飯と味噌汁と卵焼きといった和食メニューが置かれた。ジェームズはその人の好みに合わせて多種多様な料理は作れるようにしているため彼が作れない料理はない。もちろん味の方も一流だ。

「おはようございます。ロコン」

モンスターボールから出てきたロコンはリーリエを見るなりすぐに顔を舐めてきた。これがロコンなりの朝の挨拶であるらしい。ロコンの食事はリーリエが担当している。リーリエはそのポケモンの好みに合わせてポケモンフーズをブレンドしているのだ。朝食のにおいにつられてようやく起きてきたマサキとテーブルを並べて朝食をとった。

「うーん。ほんま美味いですよ。ジエームズさん」

「ほほっ。お口に合って何よりでございます」

「ジエームズの料理は世界一なのですよ」

「どのようなご注文も申された通りに用意する。それがわたくし使用人としての使命であるのでございます」

朝食を終え、ジエームズが用意した紅茶を飲みながらマサキは二人にこれからのことを話した。

「ルザミーネさんの件についてはオーキド博士にも聞いてみようと思うんや」

「オーキド博士ですか」

「せや！何よりもオーキド博士はポケモン研究家の中でも世界的権威でもあるしオーキド博士なら力になってくれるかもしれへん。せやからいまからルザミーネさんも連れてマサラタウンに行こうと思つとるんやけど、それでええか」

「私もからするとオーキド博士が力を貸して下さるのであれば是非、お願いしたい

です」

「私もです!」

「決まりや!ちよつと待つてくたせい。いまからオーキド博士にアポ取つてきますわ」

そう言つて、急いでマサキはオーキド博士に連絡を取りに行つた。

マサラタウン　それを聞いたリーリエはある友人の姿を思い浮かべた。それはジエームズも一緒のようだ。

「お嬢様。マサラタウンと言いますと　サトシ様のご出身では」

「ええ!　　そうですね　ジエームズ。久しぶりにお会いできるかもしれません。ねえ、ロコン」

そう言つと、ロコンも大きく尻尾を振つてる。ロコン自身もピカチュウに会いたいよ
うだ。その後、オーキド博士と連絡を取つたマサキが戻り、ルザミーネを車椅子に乗せ
たうえマサラタウンへと出発した。

マサラタウンへはクチバシティにある電車から乗れば行けるよう

おおよそ40分の乗車で目的地マサラタウンへと到着した。とても空気が澄んだ町であり、ロコンもまだ見ぬ町だというのにはしやぎ回っている。そのぐらい人もポケモンも過ごしやすい町であるのだ。

その町に建っている大きな風車がある家がオーキド博士の研究所だ。

「博士。お忙しいなかせいません」

「おおーマサキか。なーに大丈夫じゃよ」

出迎えてくれたのは、トレーナーズスクールのオーキド校長の従兄弟であり、カントー地方のポケモン研究者オーキド博士である。

ジエームズは白手袋を外すとオーキド博士と握手を交わした。

「アローラ地方から参りました。ジエームズと申します。この度は無理言ったお願いをお受け頂きましてありがとうございます」

「さぞよ大変だったでしょう。わしもできる限り誠意を尽くしていきます。さあ、中へ」

オーキド博士の招きによりリリーリエ達は研究所へと入っていった。リビングにはオーキド博士の助手のケンジとオーキド博士のパートナー

ロトムがいた。すぐにルザミーネをマサキとケンジとでベッドに寝かせたあと、ウル

トラビーストのことなどオーキド博士に説明をした。

「分かりました。まずはそのウルトラビーストの生態について調べないといけませんな」

「ええ、それが一応保護されているウルトラビーストはいるのですが

興奮状態が収まらず、調べようにも手に負えない状態なのです」

「そうですね。でしたらそのウルトラビーストがこつちの世界に通ってきたというウルトラホールについて、ククイ博士を通してそのデータの解読から入ってみましょう。そこでもウルトラビーストの力の生態エネルギーを測ることもできると思いますしな」

オーキド博士のおかげでやるべきことがわかり、リーリエは少し安心した。そんなリーリエにオーキド博士は

「リーリエちゃん安心してください。お母さんは必ず助けてみせるからね」

その言葉を聞いたリーリエは自然と涙が溢れてきた。このままお母さんが二度と起きないかもしれない不安から解放され、もう一度オーキド博士に頭を下げた。それをみたロコンも慰めるかのようにリーリエの足に自分の体をこすりつけて来た。

「ほお、これがアローラ地方に生息しておる氷タイプのロコンなのじゃな。資料でみたことがあるが実物をみたのは初めてじゃ。アローラへ行くサトシに預けた卵はこつ

ちでいう炎タイプのロコンじやからの」

それを聞いたリーリエはおもわず

「そうですわ博士！ サトシはいまこちらにいるのでしょうか」

「あつ… サトシか。それがまた修行の旅に出ってしまったのじゃ」

「えっ… そうなのですか」

「アローラで起こった事件でアローラリーグの開催時が伸びてしまったから、それに向けてポケモン達を調整すると言って武者修行に出たのじゃ。じゃが、ジム巡りをするわけでもないから定期的にはマサラタウンには帰ってくるんじゃないが。昨日また手持ちを変えて行ってしまったんじゃないよ」

「そうでしたか」

久しぶりにサトシと再会できると思ったので、がっくり肩を落としてしまった。

「せや博士！リーリエはん。ここカントーのポケモンリーグに挑戦するんやわ」

「ほお！そうか そうか」

「はい！お母様が目が覚めた時に強くなった私は見て頂きたいと思ひまして、それに自分を高めていきたいとも思ひまして」

「そういうことなら！おーいケンジ！ リーリエちゃんにポケモン図鑑と新人用のポケモンを渡してあげてくれないか」

ケンジと呼ばれた青年はモンスターボールとポケモン図鑑を持ってくると

「博士、忘れていませんか。今日新人トレーナーが来る日ですよ」

「あつ！そうであつたか」

その直後、インターホンが研究所に鳴り響いた。どうやら新人トレーナーがポケモンを貰いにきたようだ。

第五話 二人の訪問者

「こんにちは!!? ポケモンくださいーい!!!」

「そんなに大声で言わなくてもいいよ。カノン」

研究所に訪れたのは薄紫色のセミロングヘアをした天真爛漫な笑顔を向けている少女とそれとは正反対で帽子を深々と被り少し長めの黒髪をしたおとなしめの少年の二人だった。どちらもリーリエと同じ年ぐらいみたいだ。そのうち薄紫色の髪を持つ少女はリーリエのロコンを見ては目を輝かせ、一目散にロコンの元へ駆け寄った。

「なになに!この子あなたのロコン? すごい!!? 白いロコンなんて初めて見た! 色違いなのかな」

その少女の明るさを前にリーリエは押されてしまい、軽くパニック状態になってしまった。そんなリーリエを見かねた少年は慌てて彼女を止めに入った。

「落ち着いてカノン。その女の子もロコンも困ってるよ」

「えっ?」

その少年の一声で少女は我に返った。

「それにそのロコンは色違いでもなんでもないよ。たしかアローラ地方というところ

で環境の変化によって突然変異を遂げたポケモンだよ。ちなみにそれをリージョンフォームと言つてロコンの場合は炎から氷タイプに変わるんだ」

「へえ、そうなんだ。よく知ってるねサトル！」

「ええ……いや……それ授業で教わったじゃん」

あれ？ そうだつけど顔をするカノンと言つた少女とそれを見て呆れてしまったサトルという少年のやりとりにおもわずリーリエは笑つてしまった。

「あれれ、そんなに笑わなくてもいいんじゃないかな？」

「ごめんなさい。ついっ」

笑っているリーリエをからかうかのように覗き込んだカノンは

さらに質問をぶつけてきた。

「それじゃ、あなたアローラから来たの？」

「はい。一身上の都合により、こちらの方に」

「そうなんだ。じゃあ、お互いに初めてどうしだね！」

人見知りを一切しないカノンはリーリエの手を握つてよろしくの挨拶を交わした。リーリエもどことなくマオと性格が似ているカノンに不思議と親近感が湧いてきた。

「よーし！ それじゃ私の友達も紹介するね♪」

そう言う彼女がリーリエにウインクをした後、一つのモンスターボールの開閉ス

イツチを開いた。中から飛び出して来たのは炎タイプの

こぎるポケモン ヒコザルだ。

「おおっ！ヒコザルか。シンオウ地方の初心者用ポケモンの一体じやな」

「えっ？シンオウ地方」

オーキド博士の言葉にリーリエは疑問に思った。ヒコザルはカントーのポケモンではない。ましてや野生では滅多に出現しないシンオウ地方のポケモンを彼女はなぜ持っているのか。すぐさまカノンにはリーリエに説明した。

「私もともとはシンオウ出身なんだ！小さい時たまにナナカマド博士の研究所に遊びに行ったりしてね！その時にこのヒコザルと仲良くなったんだよね！ ね、ヒコザル♪」

そう語りかけてきたカノンにヒコザルも元気よく応答した。見ていてもわかるくらい二人はいいコンビである。ヒコザルを抱きかかえたカノンはサトルの方を見た。

「はいはい！ サトルくん！なにヤドンみたいにポケうつとしているのかな？ はやくサトルの相棒も出して！ 出して！」

「あ… ああ！ わかってるよ」

サトルも自分のボールを取り出した。そのボールはモンスターボールではなく、なつき度マックスの効果を持たされるフレンドボールだった。そしてそのフレンドボール

の開閉スイッチが押され中から飛び出して来たのはカントーでおなじみの電気タイプのねずみポケモン

ピカチュウだ。元気よく飛び出したピカチュウはすぐにサトルの肩の上に登ってきた。その光景をみてリーリエはおもわず微笑んだ。

「あれ？ リーリエどうしたの？ サトルの顔がやばかった？」

「カノン。それはどうやばいの？」

「いえ、私の友人にもピカチュウを相棒にしている人がいました。サトシって言うんですけど、そのピカチュウもサトルさんのピカチュウと同じですぐに肩に乗ろうとするのですよ」

そう言ったリーリエに二人は目が点となった。

「あの… どうなされました？」

「すぐさまカノンは口を開いた。」

「リーリエ。サトシと友達なの？」

「ええ！ そうですけど… わああ!!？」

すぐさまカノンは先制技のねこだましを繰り返したかのようにすぐさまリーリエの両肩を掴んだ。あまりのことにリーリエは目を丸くして怯んでしまった。そんなリーリエにおかまいなしにカノンは同じことを繰り返してくる。

「すごい！リーリエって サトシの友達なの！」

「えっ…… ええ、そうですね。それって一体」

「だって！ カロスリーグでは準優勝者！バトルフロンティア制覇も成し遂げ、オレ
ンジ諸島のポケモンリーグでは優勝！その他の大会でも高実績を讃えてるんだよ！し
かもまだ私たちよりも六つぐらい下の時からだよ！このマサラタウンのヒーローみた
いな人なんだから！」

「やっぱり、サトシはすごい方なのですな」

「すごいってもんじゃないよ。マサラタウンのトレーナーズスクールの卒業生はみんな
憧れてるんだよ！ だからサトルだって最初の相棒にピカチュウを選んだぐらいだ
しね」

「なっ!!？ いいだろ！ そんなこと言わなくても！」

サトルは恥ずかしくなりさらに深々と帽子を被ってしまった。

たしかに初めてポケモンリーグに出場したのは10歳のとき。

大人の人でも勝ち進むのが難しい本戦まで勝ち進んでしまうなんてそう考えてみれば
すごいことだ。そんなサトシの話で盛り上がっているなかそろそろ本題へ入ろうとい
わんばかりにオーキド博士はリーリエ達を呼び止めた。

「おほん！ サトシの話で盛り上がっていると悪いが

そろそろよろしいかのおお？」

オーキド博士がそう言うのとケンジに続いてカントーの初心者用ポケモンが姿を現した。

第六話 忍び寄る【R】

時代の流れと同時に、ポケモン制度も大きく変わっていった。

まず一つ目はポケモントレーナーの資格についてだ。サトシが初めてトレーナーとして旅立つ頃は10歳からトレーナーになる権利を与えられていたが、他方からの野生ポケモンの加入のこともあってポケモンに対する知識や戦闘経験が身についてない状態で旅をさせることは危険行為と判断したポケモン協会は新たに

【ポケモン義務教育制度】

をつくることにした。これは全ての子供達が6歳になると、トレーナーになるにならないに関わらずトレーナーズスクールでポケモンの生態や技やタイプや特性。さらには戦い方や捕獲の仕方を学ばせなければならぬ教育のことである。そして9年間の義務教育を受けた生徒はトレーナーズスクールを卒業すると同時にポケモン取り扱い免許証となるトレーナーカードが発行されるのである。そしてようやくポケモントレーナーになる許可を得ることができるのだ。

二つ目は手持ちポケモンに関してのことだ。新人トレーナーが旅立つ際に所持するポケモンは最低でも二体所持しなければならないことも義務つけられた。それは途中

で所持ポケモンが戦闘不能となり戦う手段がなくなった状態で、野生ポケモンに襲われる危険性を無くすためである。連れていくポケモンもある程度の戦闘経験を積んでいるポケモンと決められているので、トレーナーズスクールでは講義だけでなく実際にポケモンバトルをする授業も実施されている。もちろん新人用に渡されるポケモン達もポケモンバトルの訓練を受けたうえで新人トレーナーに渡すことになっている。こうして多くの新人トレーナーはトレーナーズスクールで一緒に学んだポケモンと各地方で渡される新人用ポケモンの二体を連れて旅に出ることが主となっている。

新人トレーナー達が安心して旅立つてもらうために、こうして改変されたのであった。

「うわああー可愛い!!!」

現れた新人用ポケモンにカノンは大はしゃぎである。ポケモン図鑑を持ってきたケンジと一体のフシギダネに連れられて カントーの新人用ポケモンの二体 フシギダネとヒトカゲが現れた。

あれ？ 二体？ と思つたリーリエはオーキド博士に聞いてみた。

「オーキド博士。たしかカントーの新人用ポケモンはあと水タイプのゼニガメもいると思うのですが…」

そう言う博士は一瞬だけ困った顔を見せた。新人トレーナーとなるカノンとサト

ルの二人も事情を察したか。少し締まりのなくなった表情をしている。

「実はのう。カノンちゃんとサトルくんがくる前にもう一人の新人トレーナーが先に研究所を訪れたんじや。それで早く旅に出たいと言うから先に選ばしてしまったのじや。」

オーキド博士の弱々しい発言からして、かなり強引なトレーナーであったことはたしかだとリーリエは思った。

「まあ、あいつはスクールの時からそうだったもんね」

「カノンさん。お知り合いなのですか？」

「うん！同じクラスの同級生だよ。本当はそいつとサトルと三人でオーキド博士の研究所に行く予定だったんだけど」

「待っていられなくなつて、僕たちに断りもなく先にポケモンを貰いに行つて、先に旅にでてしまったところかな」

アハハと愛想笑いをするカノンと困り果てたサトルにつられてリーリエも愛想笑いでも返した。

「まあ、そんなことよりポケモン選ぼつと！ほらサトルはやく！前に来なつて！」

「うん。待つてよ」

「じゃあ、私はこの子！」

「てっ!!? 早くない」

サトルが二体の前に行こうとした直後、カノンはあるポケモンを抱えて君に決めた！とコールした。選んだポケモンはフシギダネだ。

「私はこの子にするから。サトルはヒトカゲで決まりダネー！」

当然、カノンがフシギダネを選んだとなると自動的にサトルはヒトカゲを手にするこ
とになる。

「…まあ、カノンはもうすでに炎タイプのヒコザルを所持しているから。同じ炎タイ
プのヒトカゲを選んでしまうとパーティのバランスが悪いもんね。わかった。僕はヒ
トカゲにするよ」

すると、ヒトカゲは口から小さな火の玉をサトルの前に放射した。それに驚いたサト
ルは後ずさりした際にバランスを崩して、しりもちをついてしまった。それをみたリー
リエとカノンは二人一緒におもわず笑ってしまった。

「いきなりなんだよ。ヒトカゲ〜」

「あはは…そりゃ、ついで見たいな感じで選ばれたから怒っちゃったんじゃない
!」

「あはは… そうかもしれないね！」

笑いすぎて涙が少し滲んできたリーリエとカノンに一体のフシギダネがお得意のツ

ルを使ってハンカチを二人の前に差し出した。リーリエとカノンはお礼を言ってフシギダネからハンカチを受け取った。その紳士的なフシギダネを見たリーリエは新人用のポケモンではないことがすぐに分かった。

「このフシギダネはオーキド博士のポケモンなのですか？」

すると、オーキド博士はその質問に喜んで答えた。

「いや、このフシギダネはサトシのポケモンじゃよ」

「えっ！　そうなのですか！」

そのフシギダネはサトシがカントー地方での旅の途中に出会ったポケモンであり、いまままでゲットしたポケモンの中でも長い付き合いがあるポケモンだ。とても面倒みがよく、今は研究所のポケモンたちをまとめるリーダー的な役割を行なっている。新人用のポケモン達の面倒も見ているのもこのフシギダネだ。

「初めまして、フシギダネ。私はリーリエ！」

サトシの友達です。こっちは私のパートナーのロコンです。」

リーリエの自己紹介と一緒にロコンもフシギダネに挨拶をした。フシギダネも二本のつるを伸ばしてリーリエの手とロコンの前足につるを巻きつけた。これがフシギダネなりの握手だそうだ。

カノンとサトルのポケモン選びも終え、研究所のみんなはゲームズが用意してくれ

た紅茶を飲みながらソファーに腰をおろしていた。

「リーリエもカントー地方を旅するんだね」

「はい！ポケモンジムを巡ってポケモンリーグに挑戦しようと思っています」

「僕たちと同じだね。僕とカノンもジムを回ってバッチをゲットして、ポケモンリーグに出場するつもりでいるんだ」

「するつもりじゃなくて、絶対に出るの！」

ふふつ　それじゃあ、私たちはライバルってことになるね」

「そうですね。まずは一緒にポケモンリーグに出れるように頑張りましょう」

「うん！　そうだね！　よっおおし！」

お互いがんばりーりーだね♪」

「が… がんば…　リーリエ　ですか？」

「うん！　がんばりーりー！」

「もうっ!!?　何を言ってるんですか！カノンさん」

「わあお！今度はおこりーりーエだ！可愛いく　怒ってる顔も可愛いよりーりーエ！」

顔を真っ赤にして恥ずかしがるリーリエ。それを見てはさらにからかい続けるカノン。その様子を見てやれやれと思いつつ紅茶を楽しんでいるサトル。これから始まるうとする冒険に胸を弾ませている三人の新人トレーナーの図がそこにあった。

「ほほっ。これはみんな良きライバルが出たようじゃの」

この光景を微笑ましくみていたオーキド博士は紅茶を飲みながら言った。

「ライバル 同じ目標を持つもの同士 」

その言葉がリリーエのやる気を更に募らせていった。カノンもサトルもきつと同じ気持ちでいるであろう。

その直後、三人の情熱の炎を吹き飛ばすかのように研究所の庭のほうから大きな地響きが鳴り響いた。

その振動は研究所へと伝わり、持っていた紅茶がティーカップから溢れ落ちてしまった。かなりの衝撃であったことがわかる。

「何事でございますか!」

「なんや なんや!! 何が起こったんや」

「博士!これは一体」

「分からん。とにかく行ってみよう」

博士の言葉を合図にみんなは研究所の中庭へと走りだした。

地響きが鳴った場所へ行ってみると、そこには円形型の大きなクレーターが出来ていた。大きさからみるとかなりの爆薬を投了されたのであろう。何者かの手によって。

「これはーこれはーポケモン研究家のオーキド博士どの　お忙しい中失礼致しましたぞ」

リーリエたちの目の前にはおよそ15人ぐらいの黒の制服を身に纏った男女が立っていた。リーリエはその人達の制服に記されていた

【R】マークを見て、この人たちがどのような集団であるのか瞬時に理解した。トレナーズスクール時代にも人間の言葉を話すニヤースを連れ二人組とは何度も遭遇したことがあるからだ。

そうカントー地方のポケモンマファイア

ロケット団だ。団員たちはそれぞれモンスターボールを手にするとリーリエたちを威嚇してきた。

「悪いが、ロケット団のさらなる発展のためこの研究所にいるポケモンたちをすべて頂かせていただく。抵抗するのであればどうなるかわかってるだろうな」

他の団員たちも不敵な笑みを浮かべながらこちらを見下している。あの人数相手にどうすればいいのかと考えていたら、博士の助手を務めているケンジがリーリエたちの前に立ち、自分の腰のベルトに装着されたモンスターボールを取り出し博士の方を向いた。

「ケンジは僕がなんとか食い止めてみせます。」

博士は子供達を安全な場所に避難させたあとジュンサーさんに連絡して下さい」

「無茶じゃケンジ！あの人数では一人では対処できない」

「ですが、このままでは」

博士の言う通りだ。ケンジ一人であの人数を相手にするのは無茶である。しかし、このままでは解決策が見つからないのも事実だ。

「ですが、このまま固まっついてはどうかすることも出来ません。ケンジ様のおっしゃる通り、誰かがあの者たちを食い止めなければなりません」

そう言うと、ジェームズもモンスターボールを手に取りリーリエたちの前に立った。

「ジェームズ！」

「博士！ここはお任せ下さい！わたくしとケンジ様とでなんとか足止めします。早く」

二人の言葉にオーキド博士は止む得なく了承した。

「分かりました。お二人ともどうか無茶だけはせんように！」

「分かりました！」

「お嬢様たちのことよろしくお願いします」

「ジェームズ！無理はしないでください」

そう言葉を残しリーリエたちは研究所へと走り出した。

「ほう、どうやら やられてみねえとわかんないようだな」

ロケット団員たちは一斉にモンスターボールを解き放した。

「行きましょう ジェームズさん」

「では、参ります」

二人もモンスターボールを投げ入れた。

「頼むぞ！ハッサム」

「お願いしますぞ！ オドリドリ」

ケンジとジェームズを残し、リーリエたちは急いで研究所へと帰ってきた。だが、

「おっと！ジュンサーに応援を頼もうとしているけど」

「悪いが そうはさせない」

研究所の前には二人の男女が立ち塞がっていた。考えてみれば、任務を確実に遂行するためにあの団員たちをまとめている人物がいなくてのは不自然であった。見るからに先ほどの団員たちとは違う空気を漂わせている。

「なんなの！ あなたたちは!!？」

カノンの質問に答えるかのように、その二人組は名乗りをあげてきた。

「何だかんだと聞かれたら」

「答えないのが普通だが」

「まあ、特別に答えてやろう」

第七話 研究所での決戦

カントー地方を拠点に持つ犯罪組織

〔ロケット団〕

ポケモンの力を利用した世界征服を目論み、カントーとジョウトを中心にポケモンの強奪や洗脳といった悪事を行っている。

最近では、さまざま地方のポケモン捕まえカントーに輸入しては、その戦力を伸ばしつつある。カントー地方に多くの他の地方のポケモンが住み着いてしまったのは、これも原因の一つとされている。

そしていま、オーキド研究所はロケット団の襲撃に遭っていた。

「地球の破壊を防ぐため」

「地球の平和を守るため」

「愛と誠実な悪を貫く」

「キュートでお茶目な敵役」

「ヤマト！」

「コサブロウ！」

「宇宙を駆けるロケット団の二人には」

「シヨツキングピンク桃色の明日が待ってるぜ」

「なーんてな」

「ボツツー!!?」

自分たちの代名詞とも言える口上を終えたその二人組はヤマトとコサブロウ。ロケット団の中でもエリート候補であり、その実力はロケット団のボス サカキからも期待されている。

そのカリスマ性も多くの団員にも憧れており、このような作戦にも進んで協力をしてくれたりとても慕われている。

「まずはあんた達が持っているポケモン全て 私達に渡してもらおうか」

「博士。子供たちを傷つけて欲しくないなら、我々の言うことを聞いた方が身のためだぜ」

ロケット団の二人はゆっくりとリーリエ達の元へ歩いてきた。カノンもサトルも初めて目の前にした犯罪組織を前に恐怖が込み上げていた。そんな二人の肩に手を置いたオーキド博士は優しく微笑みかけた。

「みんな。わしの後ろに隠れておるのじゃ」

博士はリーリエ達を後ろに下がらせて、モンスターボールを片手に戦闘準備に入っ

た。フシギダネもロケット団の二人を睨みつけては威嚇している。

「悪いが、子供たちにも研究所のポケモンにも指一本触れさせはせぬぞ！」

「あら、逆ろうつてんの？ だったら力づくで奪い取るまでよ！ いくわよ！ コサンジ！！？」

「おう！ って違う!!？ コサブロウだ!!!」

ヤマトとコサブロウもモンスターボールを取り出しポケモンを繰り出す。中から現れたのはダークポケモンのデルビルとさかだちポケモンのカポエラーだ。

「フシギダネ！ お前さんも力を貸してくれ！」

ゆけっ！ ロトム!!？」

オーキド博士も自身のポケモンであるロトムを繰り出し、フシギダネと共に戦いに挑む。

く
く
く
く

リーリエ達がヤマトとコサブロウに出くわした頃、ケンジとジエームズもロケット団員との戦いが繰り広げられていた。

「ハッサム！」「スピードスター」！！？」

「オドリドリ！」「めざめるダンス」！！？」

ケンジは、はさみポケモンのハッサム。ジエームズは、アローラ地方のメレメレ島の花の蜜によりぱちぱちスタイルとなったダンスポケモンのオドリドリを繰り出していた。

幸いにもロケット団員の手持ちポケモンは

コラツタやズバットやポチエナとそんなに能力値が高くないポケモンで一人一体ずつではあったが、流石に二人で十五人を相手にするのはそう楽ではなかった。やっと五体目を倒したところでケンジのハッサムは息を切らし始めていた。

「ハッサム！大丈夫か！！？」

ハッサム自身はまだ行けるとケンジの方を向いてうなづいてはいたが、ハッサムの体力はもう底を尽きかけていた。

ケンジのハッサムはストライクだった時にオレンジ諸島のマーコット島で出会った。野生だった頃、群のリーダーを長年務めていたポケモンだったため高齢で体力的に長時間戦うことが出来ないのだ。

それにケンジもこのロケット団員をまとめているリーダーらしき人物がいなことには疑問を持っていた。

方が一、この団員を倒したとしてもこの作戦を企だてたリーダーと残りの団員が研究所に向かっているとしたら、他の手持ちポケモンは体力温存のためにとむやみに出すことが出来ないでいた。だが、ケンジの考えが当たっているとしたら早くこの場を乗り切らないといけないのは確かだ。

「ケンジ様！ これを!!？」

押ししてるように見えるが、追い込まれているのは自分たちの方かもしれないと思ったケンジにジエームズはあるものをケンジに手渡した。受け取ったものを確かめたケンジはジエームズのやろうとしていることを理解し、ジエームズにうなづいた。

「それではいきます！」

ジエームズの掛け声と共にオドリドリは踊りの体勢をとった。

「オドリドリ【フラフラダンス】!!？」

オドリドリは優雅にダンスを始めると次々とポケモン達は混乱状態へと陥ってしまった。

【フラフラダンス】は周囲にいる全てのポケモンを混乱状態にする技である。もちろん、一緒に戦っているハッサムもこの技の対象であったがケンジはジエームズに渡され

たものをハッサムに手渡した。それは混乱状態を治すキーの実だ。受け取ったキーの実のおかげでハッサムは混乱状態にならずに済んだ。

「おい！てめーらしくかりしろ！」

オドリドリのフラフラダンスで混乱状態になったロケット団員のポケモン達は目を回しており、真面に戦える状態ではなくなった。

「よし、ハッサム！【つるぎのまい】だ!!？」

ハッサムは【つるぎのまい】で自身の攻撃力を上げた。すると、オドリドリもハッサムの【つるぎのまい】を真似ては自分の攻撃力を上げてきた。

「ほほっ、オドリドリの特性 “おどりこ” でございます。場にいるポケモンが踊り系の技を使用されますと、その直後に自分も使用することができるオドリドリ専用の特徴でございます」

お互いに攻撃力が高まった状態。もうこの戦いの勝敗は決まったのも同然である。

「決めます。ハッサム！【メタルクロー】!!？」

「オドリドリ！【おうふくビンタ】!!？」

ハッサムは左からオドリドリは右から攻めるようにして攻撃を繰り返した。技を受けたロケット団員のポケモン達は次々と戦闘不能へとなっていく。彼らに戦う術はもうない。モンスターボールを戻した後、脱兎の如くその場を逃げ出した。

ケンジとジエームズの勝利である。

「やりましたな。ケンジ様！」

「はい！ですが、博士達が心配です。すぐに博士達の元へ向かきましょう」

二人は自分たちのポケモンをモンスターボールへ戻すと、急いで研究所へと向かった。

~~~~~

「デルビル！【かえんほうしや】！！？」

「カポエラーー！【まわしげり】！！？」

「フシギダネ！【つるのムチ】！！？」

ロトム！【シャドーボール】！！？」

デルビルの【かえんほうしや】とロトムの【シャドーボール】がぶつかっては爆風が起こり、フシギダネの【つるのムチ】とカポエラーの【まわしげり】がぶつかる。

「デルビル！「かみくたく」!!？」

爆風によって視界を遮られてしまったロトムにデルビルの技「かみくたく」が決まっていた。ゴーストタイプのロトムに悪タイプの技は効果は抜群。ロトムはそのまま戦闘不能となっていました。

「ロトムよく頑張った！戻るんじゃない」

ロトムが倒されフシギダネ一体となっていました。オード博士。いくらサトシのポケモンだからといえ、二体を相手にするのは難しいしヤマトとコサブローにはまだ別のポケモンも持っている可能性もある。状況は極めて困難であった。

「マサキさん。マサキさんは戦えないんですか？」

「すまない。わいはポケモンバトルどころかポケモンも持っていないんやわ」

オード博士の後ろでこの戦いを見守っているリーリエ達。ケンジとジェームズはまだ戻ってくる気配はない。このままオード博士一人に戦いを任せるのは危険すぎる。

「私、助けに行ってくる」

と、カノンはヒコザルが入ったボールを取り出しオード博士の加勢に向かおうとしていた。だがカノンが前に出ようとした時、カノンの腕をサトルは掴んだ。

「無茶だよ。相手はロケット団なんだよ。学校の授業とは意味が違うんだぞ」

「だからって、このまま指を啜えて見てるだけなの？あのままだったら、博士が負けちゃうよ」

「まだ、バトルの経験が浅い僕らが行ったところで返って足手まといになるだけだよ」

「だったら、このまま負けるのを待ってればいいの？サトルは自分の大切なポケモン達が取られてもいいんだ！」

「そうは言ってはないだろ！ただ無計画に突っ込んだところで博士の力になれないってことだよ！」

言い争う二人にリーリエは……。

「私が行ってきます!!?」

リーリエは力強く言ったのである。そんなリーリエにサトルは慌てて止めに入った。

「リーリエさんも何言ってるんだよ。それに向こうのポケモンは炎と悪タイプのデルビルに格闘タイプのカポエラーなんだ。リーリエさんの氷タイプのアローラロコンでは相性最悪なんだよ」

確かに氷タイプのポケモンは炎と格闘とは相性が悪いはずだ。しかしリーリエは笑顔で二人にこう返した。

「ですが、サトシなら迷わず助けに行くと思うんです」

その言葉にサトルは黙り込んでしまった。

「リ……リーリエ」

心配そうにリーリエを見つめるカノン…。

「カノンさん。がんばりリーリエしてきます」

そう笑顔で告げた彼女はモンスターボールを手に戦いの場へと走っていった。その走り行く後ろ姿は、カノンとサトルの目には二人の憧れでもある少年と重なってみえたのであった。

## 第八話 昔と今

「どうやら、ここまでのようね。博士」

ロトムを失ったいま、フシギダネ一体で二体のポケモンを相手に戦っているオーキド博士だったが、このままだとフシギダネの体力が尽きるのは時間の問題だ。

ケンジ達に向こうでの戦いを終え、こちらに加勢してくることを願っていたがこちらに向かつてくる気配はない。

しかしここで自分が負けてしまうと、次に狙われてしまうのはリーリエ達。負けは許されない緊張感がオーキド博士に焦りを感じさせる。

「さあ、止めと行こうか。カポエラー【まわしげり】だ!!?」

コサブロウの指示のもと、カポエラーは空中に飛び上がり攻撃の体勢に入る。足を横に腰を回しながら繰り出す蹴りは、フシギダネに向かって蹴り出された。オーキド博士は急いでフシギダネに回避の指示を出そうとしたその時、勢いよく放たれた氷の塊がカポエラーの足に向かって命中したのである。

「なんだ!?」カポエラー。一旦下がれ!」

予測不能な攻撃に驚いたコサブロウはすぐにカポエラーを自分の元へ戻らせた。カ

ポエラーの技が決まる前に一瞬でダメージを与えた氷の塊による攻撃。

「今のは…【こおりのつぶて】？」

【こおりのつぶて】相手の素早さに関係なく氷の塊を素早く相手に放つ氷タイプの新制技。だがその技はもちろん、フシギダネが放った技ではない。その技はオーキド博士の後ろから放たれたものであった。すぐにオーキド博士はその技を放った方角に目をやると、そこには戦う決意の目をしたリーリエとそのパートナーシロンの姿がそこにあった。

「大丈夫ですか？博士！」

「リーリエちゃん!!？」

安否の確認を取ったリーリエはすぐにオーキド博士の元へと向かった。

「間に合ってよかったです！」

「ああ…。しかし、リーリエちゃん。なぜここに…」

「皆さんとここのポケモン達を護るためです!!？」

そう言い放ったリーリエの目からは静かな闘志を感じられた。オーキド博士は不思議とリーリエをとどめようとはしなかった。

「あらら、お嬢さん。もしかして私たちと戦うつもりでいるのかしら?」

「はい。戦うつもりでいます」

「そうか。なら新人トレーナーとして旅立つ前に、お兄さん達が社会の厳しさについて教えてやろう」

デルビルとカポエラーは攻撃体勢をとり、二人からの指示を待つ。シロンもフシギダネの隣に立ち、相手二匹に身構える。

リーリエは考えた。タイプの相性はこちらが不利であり、自身のバトルの経験も浅い。サトルに言われた通り、無計画に突っ込んでいくのは命取りだ。シロンと比べてフシギダネの方はサトシのポケモンであってバトルも多く経験もしているはず。ここはフシギダネが戦いやすい場を作ることが最優先であるとリーリエは判断した。

「いきまず。シロン！【ごごえるかせ】です!!？」

シロンは大きく息を吸うと、一気に冷気を放射した。それは相手二匹を同時に包み込めるほど範囲がとて広い攻撃だ。【ごごえるかせ】はダメージを与えるだけでなく、相手の素早さを下げる効果もある。まずは相手を鈍足状態にさせて、相手二匹の行動を鈍らせることがリーリエの狙いだ。しかし、その技の効果はヤマトとコサブロウも知つてのことだ。

「あまいな。カポエラー！【ワイドガード】!!？」

カポエラーは仲間のデルビルも護れるほどの大きなバリアーを展開した。【ワイドガード】は味方全体に当たる攻撃を防ぐ技。シロンの攻撃はそのままバリアーによつて

防がれてしまった。

「狙いはよかったがそんなことも知らない我々、ロケット団ではない」

「その通り。デルビル！ロコンに【かえんほうしゃ】!!？」

すぐさまデルビルはシロンに向かって攻撃を仕掛けた。デルビルが放った炎は真面に喰らえば一気に戦闘不能へと持っていかれてしまうほどの威力であった。

「フシギダネ！【つるのムチ】で助けるんじゃ！」

すぐにフシギダネは一本のつるをシロンの身体に巻きつけ、自分の方へと引っ張った。間一髪のところではシロンは相手の攻撃から逃れることができた。

「ありがとうございます。博士！フシギダネ！」

「うむっ。じゃが、まだ終わつとらんぞ。フシギダネ！今度は向こうに【つるのムチ】じゃ!!？」

「躲せっ!!!」

フシギダネの攻撃をデルビルとカポエラーはジャンプして躲した。躲した方角に向かってリーリエは次の指示をシロンに命じた。

「【こなゆき】!!？」

「【かえんほうしゃ】!!？」

シロンの冷氣とデルビルの火炎がぶつかり合う。しかしレベルの差がついてしまっ

たのか、シロンの攻撃はデルビルの攻撃に押し負けてしまった。シロンの冷気をかっ消した炎炎がシロンとフシギダネに襲いかかる。

そんな時フシギダネはシロンを護るために自らシロンより前に立って、その攻撃を受けに行ったのだ。草タイプに炎タイプの攻撃は効果は抜群。フシギダネは大ダメージを負ってしまった。

「大丈夫か！フシギダネ!!？」

心配するオーキド博士にフシギダネは根性で返事を返した。シロンの無事を確認したフシギダネは自分は大丈夫だと優しくシロンにうなづいた。

やはりサトシみたいにはいかなないものなのかと自分のせいで傷つけてしまったフシギダネを見てリーリエは少々落ち込んでしまった。

「大丈夫じゃ。それより少しお願いがあるのじゃが、聞いてくれぬか？」

そんなリーリエを励ますかのようにオーキド博士はあることを提案した。落ち込んでいる暇はない。リーリエはすぐに切り替えてはオーキド博士の指示を聞いた。

「分かりました。シロン！もう一度【こなゆき】です!!？」

指示の元、シロンの冷気は再びデルビルとカポエラーに襲いかかる。シロンもリーリエの想いに応えるかのように、さっきの【こなゆき】よりもパワーのある攻撃を繰り出していた。

「なんどやろうと同じこと！カポエラー！」「ワイドガード」!!?」  
「シロン！そのまま【こなゆき】を続けて下さい！」

さつきと同じように防がられてしまったがシロンが攻撃を止めることはなかった。その威力を保ちながら冷気を放射し続けている。

相手の二匹もガードしているとはいえ、止むことがない攻撃に視界も遮られてしまっているため次の一手を練り出せないでいた。そんな相手の攻撃にヤマトとコサブロウも不思議に思った。ダメージも負わせていない。このまま攻撃を続ける意味もない。ただ、自分たちのポケモンの足止めにしかなってはいないと…

足止め!!!

そう脳裏を過ぎった二人はフシギダネの方を確認した。フシギダネは自分の象徴ともいえる背中にある大きな種に太陽のエネルギーを貯め込んでいた。エネルギーが蓄積された種は徐々に光始めていた。それを見たヤマトとコサブロウはすぐに行動を移した。

「くそっ!!? 本当に足止めだったとは」

「もういいわ！すぐに攻撃に切り替えるわよコサンジ。あの技を食らったところでたいしたダメージにならない」

「だから！コサブロウだって… ええい、そんなこと言ってる場合じゃないか。カポエ

ラー！「ワイドガード」を解除しろ」

「デルビル！もう一度ロコンに「かえんほうしゃ」!!？」

カポエラーはバリアーを解除したのち、すぐにデルビルは攻撃を仕掛けた。

「躲して下さい。シロン！」

躲すと同時にシロンの攻撃は止んだ。そして、まるで主人の考えがわかっているかのようにすぐにカポエラーはフシギダネに向かつて走り出していた。

しかし、すでにフシギダネは蓄積したエネルギーを解き放つ準備は完了していた。

「フシギダネ！「ソーラービーム」!!？」

フシギダネは貯めた太陽のエネルギーを一気にカポエラー目掛けて放射した。しかし、そのエネルギーはカポエラーの右に大きく外れてしまい、鮮やかな七色の光を咲かせながら上空へと消えてしまった。技が外れてしまったのだ。

失敗…。その二文字がリーリエの頭を過ぎった。さらに追い討ちをかけるかのようにヤマトとコサブロウは高笑いをあげていた。

「あつははは！どうやら絶好のチャンス逃してしまったようね」

フシギダネの大技が外れたいま、次の作戦の意向が思い当たらない。もう奇跡が起きない限りどうしようもないこの状況。もうダメかと思ったその時…

突然、上空からロケット団に目掛けて二種類の風の刃に見立てたエネルギー波が飛ん

できた。上空を見上げてみるとそこには、ケンホロウとファイアローの二体の鳥ポケモンがいた。おそらくさっきのはこの二体が繰り出した技だったのであろう。

「おおっ！ 以外にもこんな速く駆けつけに来てくれるとは。助かったわい」

オーキド博士は上空にいる二体のポケモンを見ては大きく手を振っていた。

どうやら、先ほどの「ソーラービーム」は攻撃をするためのものではなく仲間を呼ぶために放ったものであったようだ。さらに、助けに来てくれたのはあの二体だけではなかった。

前方からはものすごいスピードで向かってくる二つの影が見え、近づいてくるにつれその正体はつきりとした。現れたのは頭に炎を宿したポケモンのゴウカザルと腕に生えた大きな葉っぱの刀を持ったポケモンのジュカインだった。さらに後方からは大きな顎を持つポケモンのワルビアルと鋭い牙を持ったポケモンのフカマルが地中から姿を現した。

その四体はヤマトとコサブロウを取り囲むかのようにして戦闘体勢に入った。この状況にヤマトとコサブロウは流石にお手上げのようで、デルビルとカポエラーをモンスターボールへと戻した。

「止むえない。退却だ！ 出てこいッポツポ【すなあらし】!!?」

コサブロウはモンスターボールからツポツポを繰り出すと、自分たちを包み込むかの

ようにして砂嵐を発生させた。砂嵐がはれるとそこには二人の姿はなかった。

ロケット団を追い払うことができたリーリエは肩の荷がおりたのか、シロンを抱きかかえながらその場に座り込んでしまった。

「ありがとうリーリエちゃん。君とポケモンのおかげでロケット団を追い払うことができた」

「いえ、やっぱり私は博士の足を引っ張っていただけだったのでは……」

「そんなことはない！君が助けに来てくれなかったら、いまごろどうなっていたか……。君の勇気が研究所のポケモン達を救ってくれたのじゃよ」

すると、援軍に駆けつけてくれたゴウカザルを始めとしたポケモン達はリーリエの元へ近寄ると嬉しそうに鳴いていた。それはまるでありがとうと言っているようでリーリエも笑顔で返事を返した。

「リーリエ!!!」

カノンは涙を流しながら、後ろから勢いよくリーリエに抱きついた。

「よかったよ!!!リーリエ!!!心配したんだから!!?」

「もう、カノンさん！苦しいですよ」

慰めるようにリーリエはカノンの頭を優しく撫でた。サトルも慌ててリーリエの元へと駆け寄ってきた。

「リーリエさん！無事でよかったよ。本当に」

「はい。ご心配をお掛けしました」

リーリエの笑顔をみたサトルも安心しきったのか、その場に崩れ落ちてしまった。

こうしてロケット団の手から研究所のポケモン達を護ることができた。学外での始めてのポケモンバトルは、やり遂げることが出来た達成感と同時に自分の不甲斐なさを改めて実感する結果となった。

もつと強くならなくてはならない。リーリエはバトルの疲れで膝の上で眠っているシロンを撫でながらそう思うのであった。

~~~~~

ロケット団が立ち去った後、すぐにジュンサーさんによる現場検証が始まった。

研究所のポケモン達は爆発が起きた直後、サトシのポケモン達が中心となってオーキド博士が指定した避難所へ誘導してくれたおかげで全員無事だったようだ。ロケット団と戦ったリーリエは事情聴取を聴かされ、それは夜まで続いた。

「お疲れ様です。お嬢様！この度はわたくしが付いていながらもお嬢様を大変、危険

な目に合わせてしまいましたして誠に申し訳ありません」

「謝ることはありませんわジェームズ。おかげで研究所のポケモン達を護ることができましたもの。それにシロンも一緒でしたし」

「左様でございますか。すつかりお嬢様も立派になられましたな。お疲れでしょう。夕食の準備が終えるまで、お休みになられて下さい」

そう言いつつジェームズはキッチンへと向かった。リーリエはリビングのソファアに腰を置き、今日の戦いで汚れてしまったシロンの手入れを始めた。

「シロン。今日はありがとうございます」

無茶なことをさせてしまいましたですが、これから多くのトレーナーやポケモン達と出会うながら一緒に頑張っていきましょう」

シロンもリーリエの言葉に返事をするように小さく吠えた。シロンの返事を聞いたリーリエはつい嬉しくなり、シロンを優しく抱きしめた。

「あつ、事情聴取終わったんだリーリエ」

声が聞こえた方へ目をやると、手を小振りに振っているカノンがいた。リーリエを見つけたカノンはリーリエの隣に座り、シロンの頭を優しく撫でた。

「リーリエはやっぱりすごいよ。ロケット団相手にあそこまで戦えるなんてね」

「そんなことはありません。博士が付いていたからこそ何とかなっただけですし、もつ

と自分一人で戦える力を身につけなくてはならないと思いしらされただけです」

そんなことを話していると、サトルもリーリエとカノンの前に現れた。しかし視線はリーリエ達を見ようとせず、ただ下を向いていた。

「どうしたんですか？サトルくん」

サトルの様子が少しおかしいと感じたリーリエは心配そうに聞いてみた。サトルは重たそうな口を開いてリーリエ達の方へ目をやった。

「二人に謝りたくてね」

突然、二人に謝罪の言葉をならべたいと言ったサトルにリーリエとカノンは驚いた。そんなサトルにカノンは思わず口を開いた。

「どうしたのよサトル。急に謝りたいなんて、私達に何かした？」

「……」。ロケット団に二人が戦いに行こうとした時、僕は二人を止めただろ。僕もあの時は誰かが手助けしてやらないといけないことぐらい分かってたんだけど、まだ戦い慣れていない僕らがロケット団なんかには敵うわけがないと勝手に決めていたんだ。現実ばかりを見て、研究所を護りたいと言った二人の意思と助かる可能性を僕は否定してしまった。リーリエさんがオーキド博士を助けに行かなかつたら今頃、研究所のポケモンも僕たちのポケモンもロケット団に奪われていたのかもしれないのに二人を止めただ後、どうするかも考えてなかった。論理的なことをばっかり言ってた自分が情けな

い。無計画に突っ込んでいたのは僕のほうだった。本当にごめん」

サトルは自分の無知さを痛感させていた。これから旅立つトレーナーとして大切なこと

が自分には欠けていたのだと。足元へまた視線を逸らしてしまったサトルにリーリエは口を開いた。

「気に病むことではありませんよ。サトルくんは私達のことを心配してくれて言ってくれたことは分かっています」

そう言うと、リーリエはカノンとサトルに自分がトレーナーズスクールに通っていた時の思い出を話し始めた。

「私もサトルくんと一緒でした」

「えっ…僕と?」

「私はスクールに通っていたときは、ポケモンバトルおろかポケモンに触れることすら出来なかったのです」

「えっ! そうだったの」

「はい。なのでポケモンに触れなくても学校の授業や本に書いてあることが全て正しいと思っていました、ここに記されたことの筋が通っていれば法則性に基づいて理屈が通っているものだと思っていたのです」

リーリエは少しシロンに目線を落としてからさらに話を続けた。

「ですが、サトシに出会ってスクールのみんなと一緒に授業を受けたりフィールドワークをしていくうちに、本には書いていない、新たな発見を見つけることができたのです。シロンを初め他のポケモン達にも触れるようになってからも分かったこともたくさんありました。この時、私の考えが如何に一方的なものであったか。私は感情的に考えることも必要だと知ることができたのです。昔の私でしたら、ロケット団と戦おうなんて思ってもなかったと思います」

そんなリーリエの話聞いたサトルは思った。まだ自分が知らないこともある。スクールで教わったことがすべてじゃない。その言葉はサトルに強い印象を与えたように少し笑顔が戻った。

「サトル。私のほうこそポケモン達がどうなってもいいんだとか言ったりしてごめん」カノンもサトルに続いて謝った。お互いに謝ってばかりのこの状況がおかしくなったのか、三人はお互いに笑い合った。

「なんか謝ってばかりで調子狂っちゃうよね。よし！もうこの話はこれでおしまい！おしまい！」

「そうですね。カノンさんの言う通りです！」

元氣よく言い放つリーリエにカノンは何か不満そうであった。

「カノン！」

「えっ？」

「リーリエはトレーナーズスクールの友達にも“さん”付けなのかな？それだとまだ私達と壁を置いているみたいで、なんか嫌だな〜」

意地悪そうに言うカノンにリーリエは改めて彼らの名前を呼んだ。

「はい！　これから友達としてもライバルとしてもよろしくお願いします。カノン！サトル！」

故郷であるアローラを旅立ち、マオ達とも暫く離れることになったリーリエ。少し寂しい気持ちはあったが、いま同じ目標を志す新たな仲間と出会うことができた。これから始まる冒険もリーリエにどんな出会いが待ち受けているのだろうか。さあ、明日はいよいよ旅立ちの時だ。

第九話 新たな仲間と初ゲツト!!?

ロケット団による研究所の襲撃事件から翌日、この日リーリエとカノンとサトルはポケモントレーナーとして旅立つ日がやってきた。…はずだったのだが

「すまん、リーリエちゃん。新人用のポケモンのことなんじゃが、すぐには用意ができていなくてのう。」

そのはずだ。オーキド博士から新人用のポケモンを受け取るには申請届けを提出しなければならぬ。リーリエも急な申し立てのことだったので仕方ないことだと分かっていたが、規則上により旅に出るには所持ポケモンは二体と決められているのでリーリエはトレーナーとして旅にでることが出来ないのだ。

暫く、新人用のポケモンが用意されるまで研究所で待つしかないが、それがいつになるか分からない。悩んだ故カノンはあることを提案した。

「オーキド博士！連れて行くポケモンは戦闘経験を十分に経験しているポケモンならいいんですよね」

「うむっ！そうじゃな」

「だったら、リーリエの二体目はこれから捕まえに行けばよくないですか！野生ポケモ

ンならそれなりに戦闘経験を積んでいるはずですし！」

「じゃが、そもそも野生ポケモンのエリアに入ることも出来ないのでは」

あつ：…そうかと思つたカノン。それを見かねてサトルは説明を加えた。

「フィールドワークの授業と同じように僕とカノンがリリーエのポケモンの捕獲のサポートにまわるのはどうでしょうか。禁止されているのはあくまで所持ポケモン不足による野生ポケモンエリアへの浸入です。僕たちと一緒に入ればその基準を超えられませんし、野生ポケモンに襲われる危険性もなくなります」

「おー！それだよ！私が言いたかったこと♪」

「私もそれでよろしいければ、ぜひお願いしたいです」

所持ポケモン二体までというのは飽くまでトレーナーは一人で旅立つものだと考えたい。さうえて作られた規則であり、他のトレーナーと一緒に安全が確保されるのは確かだ。

しかし博士から新人用のポケモンを受け取らず旅に出たトレーナーは前例としてないため、一緒に行動すればいいからと言ってリリーエに旅の許可を出していいものか分からなかった。だが、ロケット団と戦いでリリーエの実力を知ることができたオーキド博士は特別にサトルの提案を受け入れることにした。

「それじゃあ、カノンちゃんとサトルくんはしっかりとサポートの方を頼んじやぞー！」

「はい!!」

「そういうことなら、リーリエちゃんにはこれを渡しておこうかの」

そう言つてオーキド博士から渡されたのはポケモン図鑑だった。だが、カノンとサトルが貰つた図鑑よりも大きいサイズの図鑑だ。それはリーリエが初めて目にしたものでもなかつた。

「これは…ロトム図鑑ですか？」

「ロトム図鑑？」

カノンとサトルに説明しようとした途端、博士のではない一体のロトムが図鑑に入り込んだ。すると起動とともに図鑑は宙に浮き、ロトムが目を覚ます。

『アローラ！ユーザーリーリエ！よロトしく！ん？ここはアローラじゃないロトか？』

「喋つた!!」

突然のことにカノンとサトルはついていけない。

「カノン！サトル！これはロトム図鑑と言いました…」

『そこはボクが説明するロト!』

リーリエが説明しようとしたがロトム図鑑は割つて入つて自分から説明し始めた。お喋りな性格は変わらないのですね…リーリエはこのやり取りに懐かしく思えた。

『ロトム図鑑は他の図鑑と違ってポケモンのデータはあらかじめ入つてはいないロト。』

出会ったポケモンからデータを集めてそれを図鑑に保存する。それがロトム図鑑ロト
!」

ロトムはカメラ機能を使って、リーリエのパートナーのシロン。カノンとサトルのポケモンヒコザルとピカチュウそしてフシギダネとヒトカゲを写真で撮り始めた。

『このようにして写真に収めることで、出会ったポケモンの記録がどんどんアップデー
トされていくんだロト。』

「つまり、出会うことで図鑑が埋まっていく自己学習型のポケモン図鑑ってこと?」

『そういうことロト!』

ロトムの自己紹介も無事に終わることができた。ロトム図鑑はこれからリーリエの旅の仲間として一緒に行動することになる。

「ですが博士。この図鑑はどうして私に…」

自分用の新人ポケモンが用意されていないのなら、ポケモン図鑑も用意されていない
と思っていたのでリーリエは少し驚いていた。するとテレビ携帯から一人の人物が現
れた。

『僕からのプレゼントさ!リーリエ!』

そこに映っていたのは、トレーナーズスクールの担任でもあったククイ博士だった。

「お久しぶりです!ククイ博士!」

『リーリエ！久しぶりだな。随分見ないうちにたくましくなってきたんじゃないか！』
久しぶりの再会の喜びにリーリエはテレビ携帯に映っているクワイの元へ駆け出した。

『実は君のお兄さんからリーリエがトレーナーとしてカントーを巡るって聞いたんだ。だからリーリエの旅のサポートをしてあげるようにと急いでロトム図鑑をそっちに贈ったんだ！』

「ありがとうございます。博士！」

『しかしリーリエがトレーナーとして旅に出る日がくるとはなあ。スクール時代の時は正直考えもしなかった。ルザミーネさんのことは僕やオーキド博士達に任せて、トレーナー修行しつかりやってこい！ロトム。リーリエのこと宜しく頼むぞ！』

『任せるロト！他の図鑑と同様、ポケモンデータの解説機能も搭載されてるからリーリエがまだ見たことのないポケモンでも大丈夫ロトよ！』

するとロトムはサトルに近づきピカチュウの解説を始めた。

『ピカチュウ ねずみポケモン』

尻尾を立てて、周りの気配を感じ取っている。むやみに尻尾を引っ張ると噛み付く』

ロトムは自分の解説が合っていることを証明するかのようになり、サトルのピカチュウの尻尾を引っ張る。

「あああああああああ!!!」

驚いたピカチュウは電撃を繰り返した。サトルの肩に乗っていたため、もちろんサトルも電撃を食らうはめになった。

『嘯み付くくじやなくて電撃口トか!!』

サトルとロトムの断末魔が鳴り響く。それをカノンは口を開けて大きく笑い、リーリエはサトルに申し訳ないと思いつつ、口を隠しながら笑っていた。その様子をククイ博士は懐かしそうに見ていた。

リーリエは寝室に使った部屋に戻り、旅の道具の最終確認を行っていた。終えたリーリエはリュックを背負い、ルザミーネの元へ向かった。

行ってきます。お母様

リーリエはそう告げ、シロンと一緒に寝室を後にした。

研究所を出た三人に強い風が吹いていた。

その風が吹いた方を向くとそこは広大な草原が広がっていた。いよいよ始まる冒険。三人の門出を祝うかのように太陽の光が神々しく輝いていた。

「お嬢様。お気をつけて」

「ジエームズ。お母様のこと宜しくお願いします。」

「それじゃあ、三人ともしつかりのう！」

「はい！行つてきますす!!」

三人は見送るオーキド博士たちに手を振り

旅立っていった。三人の旅がよりいいものになるようにと願いながら三人の姿が見えなくなるまでオーキド博士たちも手を振り続けた。

~~~~~

ポケモントレーナーとして旅立ったりリーリエ。研究所で出会ったカノンとサトル。そして新たな仲間ロトム凶鑑と一緒に次の町であるトキワシティに向かっていた。そんな中リーリエは手持ちがロコンのシロンだけということもあり、まずは野生ポケモンを捕獲するところから始まった。そしていま、その真つ最中だ。

「シロン！」「こなゆき」!!?」

シロンの冷気は野生のポツポを包み込んだ。ポツポはあまりの寒さに身体を震わせ、地面に倒れこんでしまった。

「よし！効いてる」

「いまだよ。リーリエ！」

二人の合図とともにリーリエはモンスターボールをポツポに目掛けて投げた。そのままポツポはモンスターボールへと吸い込まれていき、開閉スイッチが完全に閉まるまでのカウントダウンが始まった。ボールは右に揺れ、左に揺れ、あともう少しのところ  
で…

「あつー」

ポツポはモンスターボールから出てきてしまった。すぐにリーリエはシロンに次の技を指示しようとしたが、ポツポは「すなかけ」でシロンに砂をまきあげた。かかった砂が目に入り視覚を奪われてしまったシロン。その隙を見計らってポツポは逃げ出してしまった。初めての捕獲は失敗に終わった。

「大丈夫ですか シロン！」

すぐにシロンの元へ駆け寄ったリーリエは急いでシロンの目に入った砂を水で洗い流してあげた。砂を洗い流したシロンはリーリエを見るなりしよんぼりとしていた。

「そんなに気を落とすことはありませんよ」

そんなシロンの頭をリーリエは優しく撫でてあげた。

「惜しかったね。リーリエ」

「はい。なかなか上手く行きませんが、まだまだこれからです。次は必ずゲットしてみせます」

「あはは！その意気だね」

そう言って、カノンはリーリエの手を引っ張るようにして起き上がらせた。すぐに口トムもシロンの状態の確認にかかった。

『大丈夫口ト！シロンはそんなにダメージを負ってない口ト！安心する口トよ！』

「そうですか！ありがとうございます。口トム」

シロンに怪我はなかったことを知り、優しく抱きかかえた。シロンも尻尾をふりながら元気よく鳴いた。

「もうすぐお昼だから、そろそろ休憩をいれよつか。時間的に野生ポケモンの探索はまだできるし」

「そうですね。みんなでお昼にしましょう」

リーリエたちは岩場に腰を下ろし、旅立つ前にジェームズが作ってくれたサンドイッチを取り出して昼食をとった。ポケモン達もリーリエが作ってくれたポケモンフーズ

を美味しいそうに食べ始める。

「みんなも美味しそうに食べてる！」

「ポケモンごとに好みに合わせて作るなんてすごいよ」

「ふふっ！ポケモン達も口に合ってくれたようでよかったです」

そんなポケモン達を見ながら、三人はこれからのことを話し合った。

「次はどんなポケモンに挑戦してみよっか」

「図鑑で生息地を調べてみたけど、初心者としてはポツポココラツタがやっぱり無難かな」

「でしたら、その二匹を中心に探したほうがいいのですか？」

「そうだね。でもポケモンバトルのことを考えると空中戦を得意としたポケモンはいた方が心強いと思う。出来れば鳥ポケモンを仲間に加えたところだね」

『この辺りに鳥ポケモンが生息している確率は20%口ト。もう少し他を探索したほうがいい口トね』

その時ポケモン達は何かの気配を感じたのか周りを見渡し始めた。すると上空から一匹のポケモンがポケモンフーズ目掛けて急降下してきた。フーズの一粒を奪ったそのポケモンは近くの木の枝に留まり食べ始める。リーリエ達も急いでそのポケモンの方へ目をやった。

「あの、ポケモンは？」

すぐにロトムはそのポケモンの写真を撮り、解説を始めた。

『ムツクル。むくどりポケモン。』

たくさん群れで行動している。体は小さいが羽ばたく力は非常に強い』

現れたのはシンオウ地方の鳥ポケモン、ムツクルだった。

「ムツクルか。ほんと昔のカントー地方だったら考えられないポケモンが現れたね〜」

「うん。だけどムツクルは単体での弱さをカバーするために普通は群れで行動しているポケモンなんだけど、他に仲間いないのかな」

「でしたら、あの子ひとりぼっちなのでしょうか」

そんなムツクルを見たりーリエはすぐにリユックから空のモンスターボールを取り出した。

「決めました！私、あのムツクルをゲットしてみます！準備はいいですかシロン！」

リーリエの合図とともにシロンも前に出る。食事を終えたムツクルも翼を広げてはこちらを睨みつけてきた。どうやら向こうもこの勝負を受けて立つようだ。

「シロン！【ごごえるかぜ】!!？」

シロンの冷気がムツクルに目掛けて繰り出された。一瞬にしてムツクルは上空へと飛びその技をかわした。スピードはかなりのものだ。あつという間に空へと飛んだムツクルはシロンの出方を疑うかのようにその周りを飛び始めた。

「それでしたら【ごおりのつぶて】です!!？」

次の攻撃と切り替えたシロンだが、空を飛び回るムツクルのスピードを捉えることが出来ず外してしまった。シロンの動きが止まったところをムツクルは透かさず、嘴を尖らせ【つつく】攻撃を仕掛けた。シロンは技を出し終えた一瞬の隙を狙われムツクルの攻撃を食らってしまう。

「シロン!!」

ムツクルの攻撃を食らったシロンは踉蹌めきながらなんとか立ち上がる。しかしムツクルの攻撃が止むことはなかった。今度は一気に急降下をすると翼を鉄のように硬化させ、再びシロンへと襲いかかる。

「シロン！躲して下さい！」

今度はリーリエの指示が早かったためシロンはギリギリのところでもツクルの攻撃を躲した。ツクルの攻撃した場を見ると、地面が大きく抉り取られていた。威力はなかなかのものだ。

『いまのは「はがねのつばさ」ロト!』

「あのムツクル鋼タイプの子を使えるのか」

「リーリエ! 頑張れ!!!」

鋼タイプの技は氷タイプのシロンには大きなダメージが与えられてしまう。だが、相手は空中戦を得意としている鳥ポケモン。むやみに技を繰り出したところでは簡単に躲されてしまう。

するとムツクルはもう一度「はがねのつばさ」でシロンに攻撃を仕掛けてきた。急降下して近づいて来るムツクルを前にリーリエはある策を思いついた。

「シロン! 自分の周りに「ここへ来るかぜ」です!!?」

シロンは自分の周りに冷気を繰り出した。冷気によつて冷やされた空気は白い霧を発生させ、そのままシロンを包み込んでいきシロンの姿を消してしまった。姿を見失ったムツクルは慌てて攻撃をやめ、距離を取ってからそのまま空中で止まった。

相手の動きが止まっているこのチャンスが無駄にするわけにはいかない。リーリエはすぐにシロンに攻撃の指示を送った。

「今です！…【こおりのつぶて】!!?」

白い霧の中から氷の塊がムツクルに目掛けて放たれる。シロンの姿を捕らえられなかったムツクルは判断が遅れ、シロンの攻撃は見事に命中した。

「【こなゆき】!!?」

追い討ちをかけるようにシロンの【こなゆき】もムツクルに決まった。氷タイプの技を連続に食らってしまったムツクルはそのまま地面へと倒れこんだ。

『ムツクルの捕獲率！70%ロト!』

「はい！それでは行きます！お願いしますモンスターボール!!?」

すぐにリーリエはモンスターボールをムツクルに投げた。そのままムツクルはモンスターボールへと吸い込まれていき、開閉スイッチが完全に閉まるまでのカウントダウンが始まった。ボールは右に揺れ、左に揺れ、そして…

カチツ!!?

開閉スイッチが閉まる音がした。それは捕獲成功の合図を意味していた。モンス

ターボールが止まったことを確認したりーリエは急いでモンスターボールを取りに向かった。モンスターボールを手に取ると持っている方の腕を空高く伸ばし、喜びの表情を見せた。

「やりました！ムツクル ゲットです!!やりましたよ！シロン!!?初めてのゲットです！」

シロンもりーリエに飛びつき嬉しさのあまり一緒になってその場を飛び跳ねた。

「おめでどう！りーリエ」

「やったね！」

『よかった口ト！捕獲大成功だ口ト！』

すぐにカノン達もりーリエの元へと駆け寄った。

「ありがとうございます。みなさんが手伝ってくれたおかげです！」

「何言ってるの！りーリエとシロンが頑張った結果だよ！」

「そうだよ。それよりムツクルをモンスターボールから出してみようよ」

「そうですね！ムツクル出てきて下さい！」

モンスターボールから元氣よくムツクルが飛び出してきた。ムツクルはすぐにりーリエの肩に留まった。

「これからよろしくお願いします。ムツクル！」

ムツクルも元気よくリーリエに挨拶をしてからシロンや他のポケモン達にも挨拶を交わした。

初めてのゲットを体験したリーリエはまだその喜びを隠せないでいた。こうしてリーリエ達は新たな仲間と一緒に目的地であるトキワシテイへと歩き出すのであった。

## 第十話 常盤での出会い

「見えてきた！トキワシティだ！」

街が見えてくるなりカノンは嬉しそうに言った。そのカノンに続いてポケモン達も騒ぎ出した。

基本的にポケモンはモンスターボールに入れておくものだが、こうしてモンスターボールに入れずに一緒に連れて旅をするトレーナーもそう多くはない。

「日が落ちる前に着いてよかったですね」

「そうだね。もうクタクタだよ僕は」

「サトルは体力なさすぎ〜 そんなんじや、これからの旅も大変だよ♪よし、今からみんなで街まで競走!!? 行くよヒコザル！」

そう言うと、カノンに続いてヒコザルは街の方に向かって駆け出して行った。その走りはさつきまでの旅の疲れを感じさせていないほどであった。

「待って下さいよ！カノン！」

「えっ、ちよつと！そんなに走らなくても」

そのカノンを追いかけるようにしてリーリエとシロンも走りだした。その後サト

ルとピカチュウも慌てて二人の跡を追って行った。

~~~~~

「はあはあ…そんなに…走…らなくても…はあ…いいのに…」

「大丈夫ですか。サトル？」

『走った後に止まるのは心臓に負担がかかる口ト！歩きながら呼吸を整えた方がいい口トよ！』

サトルが疲れ果てていることに気づいたリーリエも走るのをやめた。カノンはいとうとそのまま先へと行ってしまい姿が見えなくなってしまった。

「カノンには…あとで…きつく…はあ…言っておかないと…はあ…いけないね」

「そ…そうですね…」

顔には出ていないが、サトルの静かな怒りのオーラはリーリエにも伝わっている。それはピカチュウにも伝わっているのか少し主人であるサトルとは距離を置いて歩いている。

暫く歩いて行くとカノンの姿が見えてきた。カノンはそのまま向こうの木々を見ているようで立ち尽くしていた。カノンの姿を見るなりサトルは前にいたリーリエを追い抜き、カノンの元へと歩み寄る。

「カノン…君は少し周りのことを考えて…」

「しっ！静かにして」

サトルの説教をかき消すようにカノンは二人に静かにするよう合図を送った。カノンは何かを見つけたようでリーリエもサトルもカノンが指差す方へ目を向けた。そこにいたのは全身緑色のトカゲのようなポケモンだった。すぐにロトムの説明が始まった。

『キモリ もりトカゲポケモン』

足の裏の小さなトゲを引つ掛けて掛けて垂直な壁を登ることが出来る。太い尻尾を叩きつけて攻撃をする。』

そこに居たのはハウエンの新人用ポケモンとしても渡されるポケモン、キモリだっ

た。キモリは太い木の枝に寄りかかっているようにして座っていた。目線は空の方を見つめておりリーリエ達には気づいていないようだ。

「キモリか。どうしてこんな所に」

「分かんないけど、トレーナーらしき人が居なさそうだし野生かな？よし！今度は私がゲットしようかな♪」

カノンにはヒコザルを連れてキモリの方へ向かった。その気配に気づいたキモリもカノンの方へ目をやった。

「キモリ！いきなりで悪いけどあなたをゲットするね！ヒコザル【ひのこ】!!？」

吐き出された無数の火の玉がキモリに繰り出される。キモリもすぐに「タネマシニング」で相殺させた。ぶつかり合う二つの技は爆発を起こし、周りは煙に包まれる。煙が晴れるまでヒコザルは様子を伺っていたが、煙の中から飛び出したキモリはすぐさまに【でんこうせっか】をヒコザルに食らわせた。

『あの戦い方リーリエがムツクルをゲットした時と同じ戦法だ口トよ!』

「戦い慣れしている。やっぱり何処かにトレーナーがいるんじゃないか？」

「ですが、その人らしき人影はどこも見当たりません」

キモリの攻撃を食らったヒコザルは、すぐに立ち上がりカノンの指示を待つ。

「ヒコザル！とっておきいくよ！【かえんぐるま】!!？」

ヒコザルは尻尾の炎を大きく燃やし、その炎を全身に包みこんだ。炎を纏ったヒコザルはそのままキモリに突進した。キモリは「タネマシガン」で応戦しようとしたが、燃えさかる炎の前では成すすべなくそのままキモリがいる場へと撃墜した。

「やったあ!!」

カノンはヒコザルの「かえんぐるま」は決まったと思いそのままガッツポーズを取った。すぐに空のモンスターボールを取りキモリに投げようとしたが、そこにキモリの姿はなかった。代わりにキモリがいた所には一つの大きな穴が出現していた。撃墜したように見えたがそうではなかったのだ。

「えっ!!」

「キモリの姿がありません」

「もしかして…カノン！気をつけて！」

姿を消したキモリに動揺してしまったカノンとヒコザル。サトルの忠告も虚しく、ヒコザルの足元から出てきたキモリの拳がヒコザルにヒットしてしまった。

さらにふらつくヒコザルに大きな尻尾を利用した「はたく」を食らわせ、ヒコザルをそのまま吹き飛ばした。後ろにあった大きな木に体を叩きつけてられてしまったヒコザルは目を回してしまい戦闘不能となる。

ヒコザルにもう戦う力が無いと分かったキモリは木をつたって林の中へと消えてし

まった。

「ヒコザル!!!」

カノンはすぐにヒコザルの元へと駆け出した。ヒコザルは相当なダメージを負ってしまった。

『【あなをほる】地面タイプ。ヒコザルには効果は抜群ロト!』

「カノン! 急いでヒコザルをポケモンセンターに連れて行きましょう!」

「もうここから街には近いはずだ! 急ごう!」

カノンはヒコザルを抱えすぐにリリーリエ達は急いでトキワシティへ駆け出した。

くくくく

緑色の木々に囲まれた街、トキワシティ。マサラタウンに続いて豊かな自然に囲まれたその街は人もポケモンも穏やかに暮らしている。新人トレーナーが旅の疲れを癒すのに最初に訪れる街として最適な街だ。

「ジョーイさん。ヒコザルをお願いします」

街に到着してすぐにリリーリエ達はポケモンセンターでジョーイさんにヒコザルを預けた。すぐに担架に乗せられたヒコザルはジョーイとナスポケモンのラッキーと一緒に診察室へと運ばれて行った。心配そうにヒコザルを見つめているカノンにリリー

エとサトルは元気づけようとポケモンセンター内のカフェにカノン連れ出した。

「ポケモンバトルでポケモンが傷つくのは仕方のないことだよ。カノンがそんな顔をしているとカノンのために戦ったヒコザルが後で申し訳ないと思っちゃうだろ？」

「そうですね。私たちトレーナーやポケモンが安心して旅に出たりポケモンバトルをすることができるのはポケモンセンターがあるおかげなのですから、ヒコザルは元気になつて戻ってきますよ！」

『全国のポケモンセンターは専門学校を卒業した優秀なジョーイさんとそのナーズポケモンがそのポケモンに合った適切な治療を施しているロトよ！ポケモンセンターの安心度は100%だから心配いらないロト！』

「…そうだね。ありがとう二人とも！ロトムもね！」

二人とロトムの言葉にすっかり元気を取り戻したカノンはケーキを追加注文した。

ポケモンセンター内に設備されている食堂や温泉、宿泊等はトレーナーカードを提示すればすべて無料で利用することができる。トレーナー修行を育んでやっていけるようにポケモン協会が考えて提示した案だそうだ。

呼び出し放送でヒコザルの治療が終わったことを聞いたカノンはジョーイさんの元へと向かった。すっかり元気になったヒコザルはカノンの姿を見るなり飛び込んできた。

「うわあ！もう元気になったねヒコザル！ジョーイさんありがとうございました！」

「いえいえ、またのご利用をお待ちしております」

そう告げたジョーイさんはすぐに他のポケモンの治療へと向かった。ヒコザルの元気な姿をみたリーリエとサトルもホッとした様子であった。

「よかったですね。ヒコザル」

リーリエの言葉にヒコザルも元気に返事を返した。

「そろそろチェックインしに行こうか。早く行かないと泊まれる部屋が無くなってしまいかもしれないからね」

「じゃあ、もし泊まれる部屋がなかったら野宿ってことだよね！私、一度やってみたかったんだよね！」

「そうですね！綺麗な星を見たりポケモンたちの声を聞きながら旅の話しをするのも旅の醍醐味って感じでいいですね！」

「僕は出来れば、暖かい布団で寝たいけどね…」

以外にも野宿する気にいる女子たちを背にサトルは急いで泊まれる部屋がないか見に行っただ。

幸い泊まれる部屋が見つかり二部屋借りることができた。

「サトル♪寂しいなら一緒の部屋でもいいんだよ」

「それはダメだろ！リーリエだっているんだし。大体女子と同じ部屋で寝るのなんて、そんな破廉恥なことは…」

「はい！勝手にムキになってるサトルくんは置いて、ご飯食べに行こうかりーリエ」
「えっ！ちよつと待つてよ!!」

ポケモントレーナーは一人で旅立つ者が多いがリーリエはこうして二人と知り合うことができている。サトシの話の中でも一緒に旅ができるトレーナーがいるのは良いものだと思っっている。サトシの話の中でも一緒に旅ができるトレーナーがいるのは良いものだと思っっている。サトシもこんな気持ちだったのかなと、カノンとサトルを見ながらそう思っていた。

食堂へ向かおうと前を向いたその時、リーリエは目を丸くしてその場に立ち止まった。

『リーリエ！どうした口ト？』

「あれを見て下さい」

そうリーリエが言った先にはキモリがいたのだ。キモリは花束を手に持ち、小走りにポケモンセンターから出て行った。

「あのキモリもしかしてカノンとバトルしたキモリかな？」

「たぶんそうかも」

するとそのキモリの跡を追うかのようにシロンとヒコザルもポケモンセンターの外

へ飛び出して行った。

「あつ、待って下さい！シロン!!?」

「ちよつと！ヒコザル!!?」

慌ててリーリエ達もシロンとヒコザルを連れ戻すべくポケモンセンターへ飛び出した。

辺りを見渡すと、シロンとヒコザルはそのままポケモンセンターの隣に建てられた大きな建物の中へと入って行った。その建物は人間の大きな総合病院であった。

『ヒコザルとシロンはあの病院の中に入ってたロトよ』

「たぶんキモリの跡を追ったんだろね。病院に入ったということは、やっぱりあのキモリ誰かのポケモンだったんだよ」

「それではどうして一匹であの木にいたのでしょうか?」

「それはあと！今はヒコザルとシロンを連れ戻さないと!」

そのままリーリエ達は総合病院の中へと入って行ったが、シロンとヒコザルの姿はどこにもなく見失ってしまった。流星に病院内を探し回るわけにも行かないので、リーリエ達は受付で看護師に聞くことにした。

「わかりました。そのお客様のポケモンが跡を追いかけたとされているキモリなのですが入院されている患者様のお一人に心当たりありますので、そちらにいるかもしれません

ん」

「本当ですか」

看護師さんに聞いた情報によると、キモリを連れてくるトレーナーが一人ここの病院で入院検査をしていることを聞いた。その病室に案内しようと看護師が受付から出てきたその時、

「あの、もしかしてこの子達のことでしょうか？」

リーリエ達は声が出た方に振り返ると、膝にキモリを座らせた車椅子の少女がそこにいた。その隣にはシロンとヒコザルの姿もあった。

「シロン。勝手にポケモンセンターから出ては行けませんよ。みんな心配してたんですから」

「ヒコザルもだよ」

無事にシロンとヒコザルを見つけることができたリーリエとカノン。二匹も二人を見つめるなり勢いよく飛び出してきた。

「わたくしたちのポケモン達を見つけてくださいますありがとうございます。わたくしはリーリエと申します」

『私はロトム。よロトしく』

「私はカノン！ありがとうございます」

「僕はサトル。えっ……と……」

「私はスマレって言います。無事に見つかってよかったです」

スマレと名乗った少女は車椅子を前にリーリエ達へと向かった。キモリも膝から下りてはシロン達の前へと行く。リーリエは前屈みになりキモリと目線を合わせた。

「ごめんなさいキモリ。跡をつけるような真似をしてしまいました」

リーリエに続いてシロンとヒコザルもキモリに謝って頭を深々と下げた。キモリはそんなリーリエ達に気になっていないと首を横に振った。

「ねえ、やっぱりあなたあの時のキモリだったりする？」

カノンの質問にキモリは首を縦に振り返事を返した。

「っ？キモリを知ってるんですか？」

「うん。トキワシティに入る前にね。実は野生のポケモンかと思ってゲットしようとしたんだけど、振り返ちにされちゃってね」

「うん、とても強かったよね。そのキモリ」

「そうなんですか？私まだキモリとバトルしたことがないのだけど……」

カノンとサトルの言葉に首を傾けながらスマレはキモリの方を向いた。キモリはスマレから目を逸らし何事も無い態度をとる。キモリの性格を良く知っているスマレはそこまで気を止めることはなく、視線をシロンに写した。

「リーリエさんのロコンは白くて綺麗。本で知ったのだけどこれはアローラの姿のロコンですよ。もしかして、リーリエさんはアローラ出身なの？」

「はい。今はシロンと一緒にポケモントレーナーの修行のためここカントーを旅しているのです」

「そうなんだ。…私は小さい時から身体が弱くてとてもポケモントレーナーとして旅するのは難しいんだけど、いつかはキモリとこの広い世界と一緒に旅が出来たらいいなって思ってるんだ」

そう言うスマイレにキモリはスマイレの手に自分の手を重ねた。そんなキモリをスマイレは優しく微笑みかけた。

「そういえば、キモリはハウエンのポケモンのはず。スマレさんはもしかしてハウエン出身の方なんですか？」

サトルはキモリは見ながらスマイレに質問をした。

「実はそうなんです。ハウエンの時はシダケタウンという小さな街に居ただけで、最近になってここトキワシティに病院を移したんだ」

「どうしてトキワシティに？」

「空気が綺麗で温かみのある街ということもあるのだけど、トキワシティの名の由来は木の葉が常に緑色で色を変えないという常磐という言葉から来ていると聞いてね。緑

色の木々に囲まれたこの街なら私にとってもキモリにとっても住みやすいと思ったからなの」

スマレの言葉にキモリも頷いた。トキワシティは二人にとっては互いに条件が一致している街なのである。

暫くリーリエ達とこれまでの旅の話スマレとしてしていると消灯時間が来てしまったのか、スマレは病室に戻らなければならなくなった。病室へ戻ろうとしたスマレにカノンは

「スマレって外出たりしても大丈夫？」

と聞いて来たカノンにスマレは

「ええ…そんなに遠くなければだけど」

不思議そうに応えた。

「だったら、明日また迎えにいくね」

スマレと会う約束をしたカノンにリーリエはカノンの目的を聞いた。するとカノンは笑顔でリーリエとサトルに返答した。

「明日、ポケモンバトル大会を開きます」

それはカノンによる突然の計画だった。

第十一話 彼女の願い

翌朝、カノン主催によるポケモンバトル大会が開催されることになった。朝食を終えたリーリエはカノンとサトルがスマレを迎えに行っている間にある人物に連絡を取っていた。

「アローラー！って、そちらはもう夜でしたね！」

「アローラ、リーリエ！そっちは朝か。こうも時差があると連絡があまり取りづらいくらいけど、久しぶりに話せて嬉しいよ！シロンも元氣そうでよかった！」

リーリエに続いてシロンもその連絡相手に大きく返事を返した。その人物はアローラ地方にあるアイナ食堂の看板娘でもあるリーリエの友達の一人、マオだった。

「他のみなさんは元氣ですか？」

「元氣だよ！卒業してもみんなが集まったりしてるからね。それよりも、お母さんのことはククイ博士に聞いたよ。よかったねリーリエ！」

「はい。ですが、まだどうなるか分かりませせんが……」

「ダメだよリーリエ！そんなマイナス思考で考えちゃ！リーリエが信じてあげなくてどうするの？！」

「そうですね。そのためにお母様に強くなったわたしを見てもらうために、こうして旅に出たのですから」

「そうそう！落ち込んでいるよりもいつも元気なのがリーリエの取柄なんだから！」

久しぶりにマオと話せたリーリエは旅のことやマオから聞いたアローラのことなどをたくさん話した。時間はあつという間に過ぎてしまい、スミレを連れてカノンとサトルがポケモンセンターへと帰ってきた。

「それじゃあ、また連絡しますね。マオ！」

「うん！そっちに行つたとき、私にもリーリエの友達を紹介してよね！」

「はい！……つて……紹介ですか？」

「時期に分かるよ！それじゃあ」

マオと連絡を終えたリーリエはマオが最後に言つた言葉を不思議に思いながらも、カノン達が待つバトルフィールドへ向かつた。

~~~~~

「ただいまより！カノンちゃん主催によるポケモンバトル大会を開催しまつす!!? それ

では、第一試合両者前へ！」

先ほどカノンが用意したくじ引きにより、対戦相手が決定した。最初はリーリエとスマイレによるバトルだ。

最初は体力的にスマイレを参加させても大丈夫なのかと思ったが、スマイレは少しなら大丈夫だと言うことなので様子を見ながら参加してもらおうことにした。

「スマイレさん！よろしくお願いしますね！」

「（こちらこそよろしく！リーリエちゃん！」

お互いに挨拶を交わしたところでスマイレはポケモンをバトルフィールドへ向かわせた。

スマイレのポケモンはもちろんキモリだ。

キモリを見て自分も前へと行こうとしたシロンだがリーリエに手を前に出され止められてしまう。

「ごめんなさいシロン。今日はコンビネーションを高めるためにも、ムツクルで行こうと思っっているのです。シロンはまた今度ね！」

不満そうであるシロンだったが、渋々リーリエに承諾した。

「それでは！ムツクル出て来て下さい！」

リーリエはモンスターボールを取り出すと勢いよくバトルフィールドに投げた。

ボールの中から元気よくムツクルが飛び出してきた。

「ムツクル！これがわたくしと貴方との初めてのバトルです。頑張りましょう！」

リーリエの言葉にムツクルも自慢の羽を広げて大きく鳴いた。

「飛行タイプか。相性は悪いけど頑張つて行こうキモリ！」

スミレの掛け声にキモリも自分の闘志を燃やした。お互いのポケモンが出揃ったところ得意よいよ。ポケモンバトル開始だ。

「では、始め!!!」

カノンによる勝負開始の合図と共にキモリとムツクルは戦闘態勢を取り始めた。睨み合う両者。先に攻撃を仕掛けたのはムツクルだった。

「ムツクル！【つつく】!!?」

「キモリ！躲して【はたく】!!?」

嘴にエネルギーを蓄えたムツクルはキモリに向かって突進する。迫り来るムツクルをギリギリまで惹きつけたキモリはそのまま右へと躲す。ムツクルの後ろを取ったキモリは大きな尻尾を使つて、後ろから攻撃にかかる。キモリの技が決まると思つた瞬間

「ムツクル！【かげぶんしん】です!!?」

姿が消えたと同時に、ムツクルは無数の自分の分身を展開させキモリの周りを取り囲

む。

「えつと……この場合どうしたら……」

今回がバトルするのが初めてのスマレはこの状況をどう打破するか悩んでいた。その感情がキモリにも伝わったのか、キモリはすぐに複数のムツクルに向かつて「タネマシガン」を放った。無数に放たれた種はムツクルの分身を次々と消していき、一瞬にしてムツクルの分身は消えてしまった。

「キモリ……。ありがとう！」

キモリはすぐにスマレの方を向くと軽く頷いて返事を返した。そんな二人のバトルをカノンはワクワクさせながら見ていた。

『いい勝負しているロト！』

「ええ、リーリエもだけどスマレもやるじゃん！ねえ、サトル！」

「……………」

「サトル？」

「えっ！……ああ……そうだね」

サトルは何か考えていた様子であった。どうかしたのかカノンはサトルに聞いてみようと思ったが、二人のバトルの熱気にそれはかき消されてしまった。

「ムツクル！もう一度【つつく】です!!？」

「躲して！キモリ!!？」

再び迫り来るムツクルの攻撃を今度はキモリは「あなをほる」で躲した。地中に潜ったキモリを見つめるためリーリエはムツクルに急速上昇するよう指示をだす。リーリエとムツクルは注意して周りを見渡していると、ムツクルのすぐ後ろからキモリが地中から飛び出した。すぐにスマイレは指示を出す。

「キモリ！「タネマシンガン」!!？」

キモリの攻撃がムツクルに迫り来る。

「ムツクル！「はがねのつばさ」で振り払って下さい!!？」

翼を硬化させたムツクルは自分の体を回転させながら、無数に撃ちだされた「タネマシンガン」を次々と弾き返した。全弾、弾き返したムツクルはそのまま攻撃に入る。

「はたく」で迎え撃って!!？」

迫ってくるムツクルにキモリは大きな尻尾を振り払った。二匹の攻撃はぶつかり合ったことで小さな衝撃波が生まれた。その反動で二匹は後ろへと後ずさりした。技の威力は互角のようだ。

「やるね！リーリエちゃんのムツクル!!？」

「スマイレさんの方こそ！キモリもすごく強いです!!？」

「でも負けないよ！「でんこつせつか」!!？」

「こちらは「つつく」です!!?」

二人の指示で攻撃を仕掛けようとした二匹の前に、何処からともなく「ヘドロばくだん」による攻撃が飛んできた。

『これは一体、何が起きた口トか?』

爆風によつて巻き起こった砂煙の中から二人の人物が立っていた。その人物は以前にオーキド研究所を襲撃しに来たあの二人組だった。

「なん口トか?と聞かれたら」

「答えないのが普通だが」

「まあ 特別に答えてやろう」

その二人が名乗りをあげようとした時、カノンはすぐに大きな声でその二人の名前を叫んだ。

「あんたたちはオーキド研究所を襲った奴らね! たしか…ヤマトとコサンジ!」

「違あああう!! コサブロウだ!!」

「それより、何でまたここに?」

「何つて! ここトキワシティに訪れようとしたトレーナーに片っ端からバトルを挑んでくる強いキモリがいるって情報を聞いたから、そいつを捕まえに来ただけよ!」

「それでキモリを発見したところに偶々、お前達が居たってだけだ」

ロケット団の目的がキモリだと知ったスマレは急いでキモリを自分の元へ戻らせた。

「あの、あなた達が言っているそのキモリはたぶんわたしのポケモンなんですが……」

「そうみたいね！でも、そのキモリが野生ではないからと言って引き下がる我々ロケット団ではないわ」

「その通りだ。野生でないならそのキモリを奪うまでだ」

トレーナーのポケモンだったからと言って引き下がるような奴らではない。ロケット団の二人はすぐに自分達のモンスターボールを取り出した。

「出てきな！ヤミラミ!!？」

「出てこい！グラエナ!!？」

研究所で繰り出したポケモンとはまた違うポケモンを繰り出したヤマトとコサブロウ。その二体はジリジリとスマレとキモリに迫って行く。初めて悪の組織を前にして恐怖に震えているスマレの元にキモリを渡してはならないと、リーリエがロケット団の前へと立ち上がった。

「あつ！あんたはあの時のジャリガールね」

「丁度いい。その白いロコンもこっちでは珍しいポケモンだ。キモリとまとめて頂いてやる」

二人の合図とともにヤミラミとグラエナは威嚇を始めた。カノンとサトルもリーリ

エとスミレの元へ急いで駆け出した。

「サトルはスミレを安全なところまで連れてって！リーリエ、私も一緒に戦うね！行くよヒコザル！！？」

カノンはリーリエと一緒にロケット団に立ち向かい、サトルはスミレの車椅子を引いて安全な場所へと連れて行った。

「子供だからって手加減はしないよ！ヤミラミ！【パワージェム】！！？」

「グラエナ！【シャドーボール】！！？」

「シロン！【こなゆき】！！？」

「ヒコザル！【ひのこ】！！？」

四体の攻撃はぶつかり合い、中央で大きな爆発が生まれた。

「グラエナ！【かみつく】 攻撃だ！！？」

「シロン！【こおりのつぶて】！！？」

シロンよりも先に攻撃を仕掛けたグラエナだが、シロンの先制技によりグラエナはそのままダメージを負った。

「ヤミラミ！【シャドークロウ】！！？」

「ヒコザル！ 躲して【ひのこ】！！？」

ヤミラミの攻撃を躲したヒコザルはそのままヤミラミに火の玉を浴びさせた。攻撃

を食らった二体は蹠蹠めきながらも直ぐに体勢を立て直すと次の指示がでるまで身構えた。

旅の中で多くの戦闘経験を積んできたリーリエ達。そんな彼女達の成長にヤマトとコサブロウは少しばかり驚いているようだ。

「よし、ここなら安全だと思うよ」

「ありがとうサトルくん！」

スマレを安全な場所へと置いたサトルは自分のモンスターボールを取り出すと二人の加勢に向かおうとしていた。

だがその時、突然自分達の方向に先ほどと同じく「ヘドロばくだん」が撃ち出された。その方向を向くと、奴らのポケモンであるツボツボがサトルとスマレの前に現れたのだ。

「くっ！僕だってやるぞ!!?頼むヒトカゲ!!?」

サトルもヒトカゲを繰り出し、バトルを始めた。

「ヒトカゲ！【ひのこ】!!?」

無数に飛び散る火の玉がツボツボに向かって放たれるが、それをツボツボは自分の殻に籠ってガードした。さらにサトルはヒトカゲに「ひっかく」攻撃を指示するも、再びガードされてしまった。

ツボツボは全ポケモンの中でも防御力が優れており、虫と岩の両方のタイプを持つポケモンだ。ヒトカゲの攻撃はどれもツボツボには大したダメージを与えられないでいた。

「くっ！ヒコザル!!？」

カノンはサトルを助けに行こうとしたが、ヤミラミがサトルの元へ行かせないようにその場に立ち塞がる。

「悪いけど、助けに行こうなんて思わないことね！」

「まずはあのジャリボーイから片付けてやるか！やれツボツボ！〔ヘドロばくだん〕!!？」

ツボツボの〔ヘドロばくだん〕はヒトカゲに命中してしまった。攻撃を受けたヒトカゲは追加効果で毒状態になってしまい徐々に体力が奪われていく。戦闘不能寸前のヒトカゲに追い打ちをかけるようにツボツボは再び〔ヘドロばくだん〕を撃つ構えを取った。

万事休すかと思つたその時、地中から飛び出したキモリがツボツボに一撃を食らわせた。

「キモリ……よし、そのままツボツボを〔はたく〕で吹き飛ばして!!？」

〔あなをほる〕が決まつたツボツボに今度は〔はたく〕でロケット団がいる方向にツボ

ツボを弾き飛ばした。

ツボツボはそのまま飛ばされた先にいるグラエナの口がっしりとはまってしまい、二体はもはや戦闘出来る様子ではなくなってしまった。

「なんだと!!?」

あまりにも突然なことにヤマトとコサブロウは呆気に取られてしまった。

「今ですシロン! グラエナとツボツボに向かつて【こなゆき】です!!?」

シロンの冷気がグラエナとツボツボの二体を包み込み、二体は一瞬にして氷漬けになってしまった。

「なあ! グラエナ! ツボツボ!」

「何やってるのよ! ヤミラミ! 【シャドークロー】!!?」

「ヒコザル! 【かえんぐるま】!!?」

ヒコザルは火炎を纏ってヤミラミに突進する。ヤミラミも影を纏った爪でヒコザルに切りかかるとするが、とっさにヒコザルはヤミラミの攻撃を躲してそのままヤミラミに【かえんぐるま】を決めた。

技を食らったヤミラミは氷漬けになったグラエナとツボツボぶつかり、そのまま三体はヤマトとコサブロウに目掛けて吹き飛ばされた。飛んできた三体の下敷きになるヤマトとコサブロウはもはや次の指示を出す余裕がなくなってしまった。

「行きますよシロン！」

リーリエの指示のもとシロンは全身を光らせ始めた。その光は旅立つ前にみた太陽のような眩い光ではなく、月のようなどても神秘的な光だった。その光は一つの大きなエネルギーの塊となり一気に放たれる。その技の名は：

【ムーンフォース】！！？」

「うわああああああああああああああああああ！！！！」

放たれた月のエネルギー砲はそのままロケット団を吹き飛ばした。

「くっく！次会ったら覚えておきなさい！」

「俺達ロケット団の恐ろしさはこれからだ！」

「やな気持ち！！！！」

キラツ！！？

ロケット団はそのままロケットが月に向かうような速さで空の彼方へと消えて行った。

ロケット団との戦いを終えたリーリエとカノンは急いでサトルとスマレの方へ向かった。二人とも無事のように、ヒトカゲもサトルが持っていたモモンの実のおかげで

毒状態から解放された。

「ヒトカゲごめんよ。僕がちやんと指示を出していたらこんなことに…」

うまくバトルをすることが出来なくて落ち込むサトルにヒトカゲは自分は大丈夫だと元氣よく飛びついた。

「ヒトカゲも元氣そうだし大丈夫だよ！それにトレーナーがそんな顔をしてると自分のために戦ってくれたポケモンに申し訳ないんじゃないかなかったの？」

「…そうだね。ありがとうカノン！」

自分が言われたことをそのまま返して励まそうとしたカノンにお礼を言ったサトルはヒトカゲの頭を優しく撫でた。

「ありがとうねキモリ。貴方を守らなくちゃ行けなかったのに逆に貴方に守られちゃったね」

「それよりもなんでロケット団はスマレのキモリのことを知ってたんだろう？野生のポケモンでもないのにね」

「その事なんだけど…」

不思議そうに頭を傾けながら言うカノンを見たサトルはカノンの疑問に伝えてあげるように説明をし出した。

「ロケット団の二人はトレーナーに勝負を挑むキモリの情報を耳にしたって言ってたか

ら、おそらくその情報はキモリと戦ったトレーナーから広まったんだと思うよ」

「トレーナーから？じゃあスマイレのキモリはそんなに多くのトレーナーと勝負をしたってこと？」

「僕はそうだと思う。リーリエとスマイレさんのバトルを思い返せばね、その根拠もあつたし」

そう、サトルはリーリエとポケモンバトルをしているスマイレのキモリを見てはいくつか不自然な点を発見していた。スマイレの指示とは別に「タネマシンガン」を放ったり、回避の指示をすると「あなをほる」で躲したりと、まるでスマイレにいま自分が使える技を見せてあげているような戦い方をしていた。そんなキモリの行動をサトルは気になつていたので。

その点を含めてサトルは一つの結論をスマイレに聞いてみた。

「スマイレさん。もしかしてキモリが「タネマシンガン」や「あなをほる」を使ったこと知らなかったんじゃないかな？」

「えつと……うん。そんな技キモリが覚えていたなんて今日初めて知つたよ」

「それがなんなのサトル？」

「今言つた二つの技はどれもキモリが自然に覚える技ではなく、練習しないと所得できない技なんだ。昨日スマイレさんにキモリと戦つたことを話たらキモリと一緒にバトル

をした事がないと言っていた。それなのに何故、一緒にバトルをしたことがないポケモンが独学でこの二つの技を身につけようとしたのか？」

サトルの疑問を理解したのかりーリエが口を開く。

「キモリはスミレさんに内緒でトキワシテイに訪れるトレーナーの方々との勝負を受けていたということですね」

「内緒で？」

「特にマサラタウンから旅立った新人トレーナーの多くは、一番近い街であるトキワシテイに向かいます。それを知ったキモリは街に入るトレーナーを待ち伏せていたのではないかと思います」

「キモリと私達が初めて会ったの偶然じゃなくて、キモリが私達がここに来るのを待っていたってことなの？」

「そうだと思うね。それに戦う相手がほとんど新人トレーナーだったらオーキド博士から貰っているポケモンとは多くバトルを積んできたはずだよ。だったらフシギダネはともかく、ヒトカゲ対策に「あなをほる」をゼニガメ対策に「タネマシンガン」を所得したというならキモリがその二つの技を覚えた理由と辻褄が合うね」

説明し終わるとキモリは大きく頷いていた。その様子からサトルの推理は正しかったのだと四人は納得した。

「そうだったんだね。キモリ」

キモリの行動を知ったスミレはキモリを呼ぶと自分の膝に乗せ優しく微笑みかけた。

「キモリはホウエンにいた時からずつと私のそばに居てくれたから病院生活の中でも退屈する日はなかったんだ。だけど、時々思うことがあるの」

「思うこと？」

「……私のせいでキモリが本当にやりたいことが出来ないでいるんじゃないかなってね……。キモリと毎日いる日は楽しいよ。でも、やっぱり私は……キモリにはここだけではなくてもっと広いところを冒険させてあげたい。そう思うようになったんだよね」

車椅子をぐるりと回転させたスミレはリーリエ達の前に立つ。リーリエ達もスミレの方に目をやるとスミレの目は何かを覚悟したようにキリツとした目をしていたが、それと同時にその瞳の奥には寂しげな感情も伝わってきた。

「みんなにお願いがあるんだけどいいかな？」

スミレは重々しい口を開いてリーリエ達にあるお願いをした。その内容はスミレの口から出て来るとは考えもしなかった内容であった。突然のことに困惑するリーリエ達。しかしスミレの真つ直ぐな目からはそれは冗談ではないことだと伝わった。スミレがリーリエ達にお願いしたいことそれは……

「キモリと一緒に連れてってあげてくれない？」

突然のことにリーリエはスマレに問いかける

「どうしてですか？スマレさん!!!だってスマレさんはキモリと一緒に旅をすることが夢だったのでは……」

「それは私の願望だよ。その夢がいつか叶うかも分からない根拠もないものだよ。そんなものにキモリをいつまで待たせる気なんて出来ないよ」

キモリを旅に出させる。それはスマレとキモリが離れ離れになることを意味するものでもある。戸惑うリーリエ達とキモリにさらにスマレは話を続けた。

「それに私にはもう一つどうしても叶えたい願いがあるんだよね」

「願いですか？」

「うん！それはね。キモリが心優しいトレーナーとこの広い世界を旅をして、新しい仲間と出会ったり、そしていつかはキモリがポケモンリーグで戦っている姿を見たい」

！それが私のもう一つの願いなんだ！他のポケモンと同じような経験をさせてあげたい！ここに閉じこもっているよりもキモリには私の分までこの広い世界を見て欲しいんだ！だから！……だから……キモリのこと……お願いしても……いいかな？」

スミレは寂しい気持ちを我慢するようにキモリのモンスターボールをリーリエ達の前に差し出そうとした。その時……

ガツ!!?

「キモリ!!!」

スミレの手から無理矢理に奪い取ったモンスターボールを手にキモリは、そのままリーリエ達に離れて行つた。スミレと離れたくない、そんな思いがキモリから伝わってくるような感じがした。

「いま、キモリがスミレさんに内緒で多くのポケモントレーナーの方々とバトルをしていた理由がなんとなくわかりました。」

「理由？」

「スミレさんが安心して旅に出られるようにキモリはスミレさんを護れるぐらいに強くなるうとしていたんですよ。ポケモンバトルをしていた時もキモリはスミレさんの様

子を見ながらバトルをしていましたし、少しでもスマレさんの身体に負担がかからないように自分の判断で動ける力を身につけようとしていたのですよ。そうですねキモリ」

優しく語りかけてくれるリーリエにキモリは大きく頷いた。スマレと同じようにキモリにも叶えたい夢と実現したい願いがあった。二人のそれぞれの願いの真意を知ったりリーリエはゆつくりとキモリの元へ歩み寄る。

「スマレさんは叶う根拠のない未来を追い続ける願いではなくキモリには今を歩き出すことが出来る新しい願いを持つて欲しいと思っっているのです。ですがそれをどう受け止めるかは貴方自身が決めることです。無理矢理連れて行こうとは思っていませんので、そんなに警戒しなくても大丈夫ですよ。キモリがスマレさんのことが大好きな気持ちには私達も知っていますから！」

リーリエの暖かい感情が伝わったのか、キモリは徐々に冷静さを取り戻した。そしてキモリはスマレの方を向くとこれまで過ごしてきたスマレとの思い出が回想となつて頭の中に流れ込んできた。

自分が野生だった頃、その日は雨が降っていた。止むを得ず近くの木の下で雨宿りしている、近くの家の窓から中に入ると呼びかけられた。その呼びかけた人物こそスマレだった。初めて人の優しさに触れたキモリはいつしか頻繁に彼女の元を訪れ

るようになり、やがて彼女のパートナーとなった。あの時、一緒にポケモンリーグの継をテレビで観ながらいつしか一緒にあの舞台に立つ約束を交わしたことも今でも覚えていいる。忘れるわけがない。その約束を果たすためにキモリは強くなるうとしたのだから……

その想いはスマレも同じだった。だけど、それは必ず叶うか分からないのも事実。だからこそスマレは自分の分までキモリには、広い世界を見て回って欲しいと思うようになったのだ。スマレのためにと行動してきたキモリ。なら、今スマレのためにしてあげて自分を成せばいいのではと、スマレの今の想いを感じ取ったキモリは次第にそう考えるようになった。それが彼女の願いがああの時の願いに繋がるのなら……

キモリは一步一步前に進む。進む先は違うが目線はスマレの方を見ていた。キモリは覚悟した表情でスマレに軽く頷いた。それに対してスマレは笑顔で大きく頷いた。彼女を見て安堵したキモリは自分が持っているモンスターボールをある人物に差し出した。一人のトレーナーの想いと一体のポケモンの覚悟を悟ったその人物は差し出されたモンスターボールをキモリの手と一緒に優しく握りしめた。スマレとキモリの想いを覚悟を、そして願いを受け止めるかのように……

「それじゃ、スマレ！私達もう行くね！」

「身体には気をつけて」

「うん！みんなも気をつけてね」

リーリエ達は次の街であるニビシテイへ出発しようとしていた。その中にキモリもいた。キモリはもう一度スマレの手を握りお互いにゆっくりと抱き合った。寂しさはあるがキモリの主人がスマレであることは変わらない。離れていても二人の想いはずっと一緒である。その気持ちをしっかりと再確認した。そして新たにキモリと一緒に旅をしてくれるトレーナーに目を向けた。

「キモリのことよろしくね！リーリエ！」

「はい！任せて下さい！そして必ずスマレとキモリの夢を必ず叶えてみせます！」

「うん！キモリもしっかりね！」

リーリエとスマレはお互いに握手を交わした。そんな二人にカノンとサトルは次のことを話し始めた。

「だけど、リーグ前にはまた会えるよりリーリエ！スマレ！」

「え？そうなんですかカノン」

「実はここトキワシティにもポケモンジムがあるんだけど、そのジムはカントー最強と言われているいまの僕達のレベルじゃ太刀打ちできないジムなんだ」

「私達はトレーナーズスクールで聞いたことがあったから分かっていただけどりーリエに伝えてなかったなあと、今さっき思い出したんだ。ごめん♪ごめん♪」

「そうだったんですね。それでしたらまたここを訪れることになりそうですから、また会えますよ！スミレ！」

「うん！また会おうね!!!」

こうして、お互いに再開を約束しりーリエ達は次の街であるニビシティへ旅立った。

スミレの想いを胸に旅立ったキモリをスミレは手を振り続け、キモリも自分の背中を押してくれたスミレに手を振り続けた。それはお互いの姿が見えなくなるまで続いたのであった。

## 第十二話 森の怪物

## トキワの森

トキワシティとニビシティの境にあるカントー最大の森。ここにはたくさん草や虫タイプのポケモンが多く生息している。多くのトレーナーはニビジムに挑むために修行の場として利用されている。

そんな中、リーリエ達もニビシティに挑むためのトレーニングを兼ねてトキワの森に足を踏み入れていた。何やら、技の練習をしているようだ。

「ヒコザル！ヒトカゲ！」

【あなをほる】！！！！

ヒコザルとヒトカゲはキモリから「あなをほる」を教わっていた。ニビシティは岩タイプのジムなため、それに有効な地面タイプの技はどうしても覚えて置きたいのだ。そんな二匹もキモリの指導もあつてか、徐々にコツが掴めてきたようで少しずつ形はなってきた。

『だいが出来てきてはいるロトね』

「はい！二匹ともかなりいい感じですよ」

「そうだね。少し休憩を入れようか」

二匹の疲れを癒すために、サトルは近くで採取したオレンの実を取り出し二匹にそれぞれ手渡してあげた。この森は色々な木の実もなっていて野生のポケモン達にとつてはとても住みやすい環境のようだ。

主に森を住処にしているムツクルやキモリ、フシギダネやピカチュウはとても気持ち良さそうにしている。

「ピカチュウはとても嬉しそうですね」

「うん。実は僕のピカチュウはここトキワの森で出会ったんだ。」

「そうだったんですか」

「まだ、進化前のピチューだった頃にね」

そう言うと、ピカチュウの方を目にやるとピカチュウは木の実を見つけ出しそれを美味しそうに食べていた。久しぶりに帰ってきた故郷にピカチュウはとても機嫌いいようだ。

「ニビシテイに着くまでには「あなをほる」は完璧にマスターして置きたいね」

「でも、ヒコザル達もだんだんと出来てきてはいるし！もう一踏ん張りすればいけるよ！これも指導してくれるポケモンがいるおかげだね。付き合ってくれてありがとね。」

キモリ！」

お礼を言うとキモリは軽く頷いた。トキワシティから一緒に旅に出たばかりであったが、もうすっかりキモリはみんなとも馴染めてはきたようだ。クールな性格でもあって、あまり笑うことは無いがシロンを初めとした他のポケモン達との輪の中には入っていているようで、その様子をみたりリーリエは少しばかり安心していている。

「ですが、サトルは大丈夫でしょうか？」

「えっ、何が？」

「いえ、変なつもりで言ったわけではないのですが……。ニビシティは岩タイプのジムだとお聞きしましたので、今のサトルの手持ちポケモンでは少し厳しいのではないかと思うのです」

リーリエの言っていることは最もであった。岩タイプのジムであるなら炎タイプのヒトカゲは相性的に不利。相手はジムリーダー。「あなをほる」をマスターしたところでそう簡単に勝てる相手ではない。

さらには岩タイプには地面タイプを持っているポケモンが多いため電気タイプのピカチュウも相当不利である。リーリエにはキモリ、カノンにはフシギダネとみたいに、この時点でサトルは相性からして有利なポケモンが手持ちにいないのだ。

「この際サトルはここで草タイプのポケモンを仲間にした方がいいんじゃない？」

『そういうことなら、草タイプのポケモンがどこに潜んでいるかサーチしてみるロトよ』  
すぐにロトムはこの辺りに生息しているポケモンの情報をかき集めた。

『この森に草タイプのポケモンが生息している確率は80%ロト！かなりの数のポケモンが多く生息しているロト！…だけど、どんなポケモンがいるかまではわからないロト』

「それなら任せて！え…つと…」

新人トレーナーのサポートナビとして有能なロトム凶鑑だが、自己学習型のため生息しているポケモンの出現率は分かるが、どんなポケモンが生息しているかまでは分からないのが欠点などところである。自分のポケモン凶鑑を取り出したカノンはすぐにトキワの森に生息している草タイプのポケモンを調べ始めた。

「ここにいる草タイプのポケモンは…ナゾノクサ、ハネッコ、キノココ、スポミー、マスキツパ、それと…」

すると、何処からともなく木の上から一体のポケモンが飛び掛かってきた。そのポケモンは丁度、真下にいたサトルの頭めがけて飛び込んできた。

「いったあああああああいいいいいいいい！！」

サトルに飛び込んできたそのポケモンは自分も相当痛かったのであろう、頭の痛みに耐えながらもすぐに三人の前に飛び出した。

「くっ!!? 一体何なんだよ」

「このポケモンは?」

リーリエ達に現れたのは葉っぱの帽子を被った芋虫のようなポケモンだった。だが、それはキャタピーではない。ロトムはいつものようにそのポケモンの解説を始めた。

『クルミル さいほうポケモン

虫・草タイプ

葉っぱを噛み切り口から出す粘着糸で縫い合わせる。自分で服を作るポケモン』

「クルミルって言うのですね。わたくし始めて見ました」

「私もだよ。たしかこのポケモンも元々は……ハウエンのポケモンだった気が!」

「イツシュ地方だよ。いてて……本来クルミルはイツシュのヤグルマの森に生息しているポケモンなんだ」

「そうなのですね。それにしても、くすつ……。凄く元気な子ですね!!?」

クルミルはリーリエ達を見るなり、その場でジャンプを繰り返していた。野生にして

は珍しくトレーナーを見ても何処かへ逃げ出したりしないポケモンであり、むしろただらない愛着を見せていた。

「そうだ！サトル。この子ゲットしたら！」

「え？」

「この子なんか人懐っこそうだしいいと思うよ。それに結構可愛いし」

カノンの提案に少し考えたサトルだが、リーリエに言われたこともある。空のモンスターボールを手にとるとヒトカゲを自分の前に出す。

「よし！やってみるか。頼むヒトカゲ！」

サトルの掛け声とともにヒトカゲも小さな火の玉を口から出し、やる気の様子を見せた。それをみたクルミルは逃げることはなかった。どうやらヒトカゲとの勝負を受けてくれるようだ。

「ヒトカゲ！【ひのこ】!!?」

無数の火の粉がクルミルに向かっていく。クルミルは口から糸を出し、近くの木の枝に糸をくつつけると、そのまま吐き出した糸を辿るようにして移動しヒトカゲの攻撃を躲した。攻撃を躲したクルミルは今度はヒトカゲに向かって糸を放射した。

「次は【ひつかく】だ!!?」

その糸をヒトカゲは鋭い爪で糸を切りさく。だがクルミルは怯むことなくヒトカゲ

の頭上から糸と「はっばカッター」を交互に繰り出しながら攻撃する。

「やるね。あのクルミル」

「ええ、やはりフィールドがクルミルとつて戦いやすいのもあると思います」

サトルがクルミルとバトルしている中ピカチュウは何かの気配を感じたのか、辺りを見渡し始めた。ちよくちよくピカチュウの頬袋に電気が流れると、さらに気になり出したピカチュウは近くの木へと駆け登った。そんなピカチュウの行動にリーリエは不思議に思った。

「ピカチュウ、どうしたのですか?」

リーリエの呼びかけに気づいていないのか、ピカチュウは辺りを見渡し始める。すると気配を感じたピカチュウの目に止まった木の影から電撃が放たれ、それがヒトカゲに直撃してしまった。

「ヒトカゲ!!!」

あまりにも突然なことにサトルはすぐにヒトカゲの元へ駆け寄った。

「大丈夫か? ヒトカゲ」

「えっ、いまの電撃は?」

『クルミルが放ったものではない口ト。それにこの近くに別のポケモンの気配がする口

トよ』

その犯人はすぐに分かることになる。その木の影から一体のポケモンがクルミルと同じように飛び出してきた。そのポケモンはピカチュウよりも体が小さい、ピカチュウに似ているポケモンだった。

『デデンネ アンテナポケモン』

電気・フェアリータイプ

ヒゲがアンテナの役割。電波を送受信して遠くの仲間と連絡を取り合うのだ』

カロス地方に生息しているポケモン、デデンネ。どうやらピカチュウはデデンネから発生された電気の帯を感じとっていたようであった。初めて見るその愛くるしい姿にリーリエとカノンは惚れ惚れしてしまった。

「わああ、可愛い!!!」

「電気タイプだけでなくフェアリータイプも併せ持っているのですね！それにしても可愛いです！」

『二人はすっかりメロメロ状態ロトね〜』

見惚れている二人には気にも留めず、デデンネはクルミルの元へ駆け寄ると少し慌てた様子でクルミルに訴えかけていた。デデンネの話に何のことやらと、思っているクルミルにデデンネは呆れた様子でクルミルの背中を軽く叩く。どうやら、この二体は仲間であることはこの二体のやり取りから何となく察しがついた。

今度はリーリエ達の方へ向いたデデンネは同じ電気タイプのパカチュウの元へ向かうと何やらパカチュウに話始めた。デデンネの話を聞いて慌てた様子になったパカチュウはすぐにサトルの方を向くと必死に鳴き始めた。

「何かを知らせたい?」

「「えっ?」」

「パカチュウのこの様子から見るとデデンネは僕達に何か伝えたいことがあるみたいだよ。もしかして:クルミルも何かを伝えるために僕達の前に現れたんじゃないかな」

すると、デデンネは何処かへ駆け出しに行くとその後に続いてパカチュウとクルミルも走り出す。少し離れたところで足を止めると、リーリエ達に振り向いたデデンネは手でこちらに招く仕草を始めた。

『付いて来い。そう言ってるみたいロト』

「とにかく行ってみましょう!」

デデンネの仕草を見て、瞬時に理解したリーリエ達も急いでデデンネの後を追いか

に行った。

~~~~~

暫く走つていくと、前から一軒のツリーハウスが見えてきた。その中に入っていくデデンネ。続けてクルミルとピカチュウもその建物の中に入って行った。

ピカチュウの後を追うようにその建物の中に入るとサトルに気づいたピカチュウはサトル元へ戻って行った。ピカチュウが手元に帰って来てくれて安心したリーリエ達は目を前にやると、一人の人物の影が見えてきた。そこに居たのは甲冑の鎧を身に着けている戦国時代にいる侍の格好をした一人の青年であった。

「むっ、お主達は?」

「えつと…勝手に上がりこんでしまつてすみません。僕達は別に怪しい者ではありません。さつき知り合つたクルミルとデデンネに連れられてここまで来たのです」

「旅の途中のトレーナーでござるな。しかしここは拙者が入り口の前に立ち入り禁止の立札を立てたはずなのでござるが…どうやら、虫ポケモン達に食べられたようござるな」

よく周りを見てみると、デデンネやクルミル以外にもたくさんポケモン達がこの家の中にいた。その様子は何かに怯えている感じなのか、お互いに身を寄せ合いながら端の方で震えていた。この様子からやはり何かあったに違いない。

「あの…おサムライさん。立ち入り禁止と言いますと、やはりこの森で何かあったのですか？」

「そうでごさる。」

そういうと甲冑の青年はリーリエ達を木で出来たソファーに座らせると、説明し始めた。

「拙者はここを拠点として、訪れにくるトレーナーに出会ってはバトルを申し込み、ポケモン修行を育んできたでごさる。まあ…それは昔の話で、今はここトキワの森のポケモン管理官を務めているでごさる」

「おおっ！リーリエのキモリと一緒にか！」

「カノン…。話を晒させないで……」

「……本題に入ろう。カントーの環境の変化により様々な多くのポケモンが住み着いてきているのはお主達も知っていると思う。それにより他のポケモン達との縄張り争いが絶え間なく続き、本来住んでいたポケモン達が追い出されてしまうケースが出てきたのでござる。」

「まあ、それはおいといて。ピジヨットが留守をしている間に別のポケモンがここトキワの森を縄張りにしようとしている奴が出て来たのでござる」

「そっか、クルミル達はそれを私達に伝えたかったのね」

等の本人はと言うとそんなことも忘れてサトルに対して闘志をあらわにしていただけであつたが、クルミルが攻撃的になつていたのも今回のことが影響しているのではないかと思う。

それに自分の手持ちであるピカチュウの故郷が大変なことになつていたのであれば見過ごすわけにはいかない、何に力になりたいと思つたサトルはサムライ青年に情報を教えて貰おうとした。

「サムライさん。その今トキワの森を征服しているのはどんなポケモンなんですか？特徴とか何でもいいから知つていることを教えてくれませんか？」

サトルの問いにサムライ青年は答えた。

「うむ。全体が紫色で体の大きい割にはとても素早いポケモンでござる。タイプは【どくばり】や【メガホーン】といった技を使つてくることから毒と虫タイプだと思つてござるよ。」

すぐにサトルはポケモン図鑑を取り出すと毒と虫ポケモンに絞つて、該当するポケモンを探した。

「このポケモンですか？」

「おお！其奴でござる！」

そのポケモンはやはりカントーに生息していないはずのポケモンだった。その見た目から獯猛なイメージが強いポケモンでもあった。

『ペンドラー メガムカデポケモン

虫・毒タイプ

素早い動きで敵を追い詰め頭のツノで攻撃する。とどめを刺すまで容赦しないとて
も攻撃的なポケモン』

「ペンドラーか。これは厄介なポケモンだね」

「こんなポケモンに出会ったら、私達みたいに旅に出たばかりのトレーナーには無理だよー」

ペンドラーの図鑑データを確認したサムライ青年は今度はあるポケモンを調べて欲しいとサトルに注文する。

「このペンドラーとやらの進化前のポケモンはいるのでござるか？居たら其奴も調べて貰いたい」

「わかりました」

すぐにサトルはペンドラーの進化前に値するポケモンであるフシデとホイーガをサムライ青年に見せた。その二体を見た彼の表情は次第に固くなり、眉間にしわを寄せながら首を少し横に傾けた。

「…やはり、可笑しいでござる」

「可笑しいとはなんですか？」

「拙者はここに生息しているポケモン達のことは全て把握しているでござる。しかし其奴の進化前であるそのポケモン達の姿は確認していないでござる」

「つまり、ペンドラーの進化前のポケモンをここには生息していないということ？」

「ここには何年も住んでいる拙者が言うのだ間違いない。つまり進化して現れたポケモンではないということでござる」

これほどの他方からのポケモンがカントーにいたのでそのポケモンもトキワの森にいますと考へても不思議ではないと思つたが、その進化前のポケモン達はこの森に住み着

いていないことが判明された。

なのにペンドララーが突然として現れた理由。それは……

「誰かに捨てられたポケモン?」

それはカントーの生態を変えた原因の一つでもあり、人間の身勝手さが巻き起こした最も卑劣な行いであった。

「そうだとしか考えられないと思うよ。進化前のポケモンもない、それなのに突然としてこの森に現れたポケモンってことからね」

「それが本当なら酷いよ。だってせっかく仲間になってくれたポケモンにそんなことするなんて!許されることじゃないよ……」

トレーナーとして旅に出たばかりのリーリエ達にはとても考えにくいことだ。リーリエ達と同じくポケモントレーナーを夢に見た者がなぜそんなことを平気でやれるものなのかと、静かな怒りと胸の痛みがこみ上げてくる。

すると、何処からかデデンネは慌てた様子でサムライ青年の元へと向かった。髭に少しばかり電流を発していたその様子を見て、サムライ青年もすぐにその場を立ち上がる。

「どうしたんですか?」

「おそらく奴が現れたでござるよ」

「奴つてペンドラーのこと？」

「デデンネの髭はアンテナの役割になつていいて、電気を使って他の電気タイプのポケモンと交信をすることができるのでござるよ。たぶん、野生のピカチュウからの SOS をいま受け取つたのでござるな！デデンネ！案内するでござるよ」

家の外に飛び出したデデンネの跡を追うようにサムライ青年もすぐに外に出た。

「私達も行つてみよう！」

カノンの一言に真つ先にサトルのピカチュウは外へと飛び出して行つた。同じ電気タイプのピカチュウならデデンネが行つた場所までわかつていたのであろう、ピカチュウを先頭にリーリエ達もペンドラーが現れたという場所へと向かつた。

くくくく

見渡す限り木々が生い茂っている。一回でも方向を間違えると、一瞬で迷い込んでしまふであらうトキワの森。だが、いまのリーリエ達はそんな心配はなかつた。同じく繰り返される光景には気には止めず、ピカチュウは木から木へと走りぬく。それを追うようにリーリエ達も無事に目的である場所にたどり着いた。そこには先ほど先に向かつ

ていたサムライ青年とデデンネ。そして、すっかり怯えきっているピチューとピカチュウ達が身を寄せ合っている。

「野生のピチューとピカチュウだ！」

サムライ青年の隠れるとの合図ですぐにリーリエ達は茂みに身を隠した。サムライ青年が指指した向こうにはポケモン図鑑で調べた通りであった、ペンドラーの姿を確認した。

『いた口ト！あれがペンドラー口ト！』

「大きい……」

「また、他のポケモン達の住処を奪っているのでござるか。慣れない環境に放り出されイラつく気持ちは分かるが、これ以上はもう好きにはさせられないでござるよ！」

茂みから身を乗り出したサムライ青年はペンドラーの前にと立ちふさがった。突然現れた人間にペンドラーは威嚇を始めた。リーリエ達は自分達が今まで見てきたポケモンとは違う迫力差に一瞬、身ぶるいをしてしまった。だが、そんな中サムライ青年は震え上がるどころか一步と前にと進むとペンドラーを説得しにかかる。

「ペンドラー殿！お主が辛い気持ちは分かる！だがここで暮らすには他のポケモン達のも事も考えるでござるよ！お主には協調性というものを持たねば……」

説得は虚しく、ペンドラーはすぐさま毒液をサムライ青年の少し前に向けて放たれ

た。当たらないように攻撃を仕掛けたというと次はこのままで済まさないというペン
ドラーからの忠告であろう。

「おサムライさん!!!」

「くっ、ならば仕方ないでござる! 出陣でござるよ!」

放たれたモンスターボールからは一体のポケモンが出現した。もうこうなれば戦う
しかペンドラーを大人しくさせる手段がない。

『カイロス くわがたポケモン』

虫タイプ

自分の体重の二倍もある相手をツノで挟み軽々と持ち上げる。寒い場所では体の動
きが鈍る』

カイロスの出現にさらに興奮したペンドラーは頭の上の角を身ぶるいさせ、攻撃体勢
に入る。

「覚悟するでござる！カイロス！」「はさむ」攻撃!!？」

カイロスは自慢の鍔を大きく広げ、ペンドラーに向かって走り出す。それに対抗するようにペンドラーは角を前に出し、虫タイプ最強クラスの技「メガホーン」を繰り出す。

「受け止めるでござる！」

ペンドラーの猛攻をカイロスは自慢のパワーで受け止めた。さらに鍔でペンドラーの体を掴むとそのまま自分の体重の倍以上もあるペンドラーを軽々と持ち上げた。

「すごい！」

「そのまま投げ飛ばすでござる！」

投げ飛ばされたペンドラーは木に叩きつけられてしまった。ダメージを負ったペンドラーに攻撃の手を緩めることなくカイロスはすぐ様次の攻撃を仕掛けに行く。

だが、もうすでにペンドラーは次の攻撃を繰り出していたことにサムライ青年もカイロスも気づいていなかった。毒エネルギーが帯びた長い尻尾がそのままカイロスを横に大きく振り払ったのだ。それなりに距離はあったのだが、胴体が長いペンドラーには関係のないことであつた。

「カイロス!!!」

『今のは「ポイズンテール」だロト!』

「しつかりするでござる。カイロス！」

勝利を確信したのか、笑みを浮かべるペンドラーはさらに【どくばり】で追い討ちを掛けた。

「【ひのこ】!!」

無数に放たれた毒針は何処からか放たれた火の粉よって消されてしまった。ペンドラーは知らなかったのだ、自分が戦っている相手がサムライ青年のカイロスだけではなかったのだと…火の粉が放たれた方角に目を向けるとそこには三人のトレーナーが立っていた。

「お主達!!」

「私達にも手伝わせて下さい!」

「あのペンドラー相当強いけどみんなで力を合わせれば倒せない相手じゃないね」

「うん!それじゃ行ってみますか!」

さらにイラつきが増したペンドラーは唸り声を上げトキワの森全体を轟かせた。その威圧は辺りの野生ポケモン達が一斉にして逃げ出してしまうほどである。だがそんなものに負けるかと、リーリエ達もそのポケモン達もバトルの体勢を取り始める。

「シロン!【こなゆき】!!? キモリ!【タネマシガン】!!?」

「ヒコザル!ヒトカゲ!【ひのこ】!!」

シロン達の攻撃が一斉に放たれた。しかしペンドラーはその巨体に似合わず、物凄い

スピードでシロン達の攻撃を意図も簡単に躲いだのだ。

さらに攻撃を続けるのだが当てることができない。何を隠そう、ペンドラーは自身のステータスの中でも攻撃よりも素早さが最も高いポケモンなのだ。

「ダメ！早すぎるよ〜」

「あの素早い動きを封じない限り、わたくしたちの攻撃が当たりません。どうすれば……」

素早さを封じるにもシロンの「ごごえるかぜ」も当たらなければ意味がない。頭を悩ませる中、サトルはクルミルの方へ目をやるとある策を思いついた。

「そうだクルミル！君の粘着性が高い糸ならペンドラーの動きを封じることができないかもしれない！」

自分の帽子を縫い合わせるほどの粘着性の高いクルミルの糸なら、あのペンドラーの動きを少しばかりか止めることが出来るかもしれない。サトルの一言にクルミルを打ってくれるように、小刻みにジャンプしながらそれを表していた。

「ですが、攻撃が当たらなければ意味がないのでは……」

「……僕に考えがある。いいみんな！」

すぐにサトルは簡潔に自分が考えた作戦をリーリエとカノンに伝えた。リーリエはさらにモンスターボールからムツクルを取り出すと、二人はすぐにサトルの指示のもと自分達のポケモンに指示を出す。

「お願いします。ムツクル！キモリ！」

「ヒコザルもお願いなね！G o !!?」

「ピカチュウも頼む！」

ムツクルはペンドローの周りを飛び、他三体は木から木へとつたつて同じようにペンドローの周りを駆け回り始めた。

振り払おうとペンドローは攻撃を仕掛けるがキモリ達は反撃することなくその攻撃を躲し続ける。すると攻撃を続けるペンドローの動きが急ブレーキがかかったようにその場で止まってしまった。キモリ達の動きに気を取られすぎたのか、足元に目をやるとそこら中に糸が張り巡らせておりそれに足を取られてしまったようだ。

「よし、上手くいった！」

キモリ達がペンドローの気を引いているうちにクルミルは糸をペンドローの行動範囲に張り巡らせていたのだ。それに気づかないペンドローがその糸を絡ませて動きを封じる。これがサトルが考えた作戦だったのだ。

ペンドローは必死にその糸から逃れようとするが、へばりつく糸から中々脱出できないでいた。

「フシギダネー！「つるのムチ」!!?」

さらに動きが止まったペンドローにフシギダネはつるでがっちりと拘束し、暴れない

ようにペンドラーを押さえつけた。

「シロンー！【ごごえるかぜ】！！？」

さらにリーリエはシロンの技で攻撃を仕掛ける。

『糸が切れるロト!!!』

更新の力でなんとか糸の呪縛から解き放たれたペンドラーはシロンの方を目にやると、毒針を放射する体勢を取った。だが、もうすでにリーリエ達は次の攻撃の指示を送っていたことにペンドラーは気づいていなかった。

先程までペンドラーの周りを駆け回っていたキモリとヒコザルの姿はもうなかった。毒針を放射しようと頭を前に乗り出したペンドラーに向かって、地中から三体のポケモンが飛び出した。【ごごえるかぜ】の追加効果もあったと思うが、判断が遅れたペンドラーはその攻撃を躲すことが出来なかった。

「【あなをほる】!!!」

練習していた技が成功した。キモリとヒコザルとヒトカゲのトリプル攻撃は見事にペンドラーに決まった。虫タイプも加わっているので効果は抜群までにはいかなかったが、故とうとした毒針エネルギーも暴発し、そのダメージも合わさったこともあり十分なダメージを与えることができた。

フラつくペンドラー。キモリ達を呼び戻すとサムライ青年は最後の1撃をペンド

ラーに食らわせた。

「いまでござる！カイロス【ギガインパクト】!!?」

ノーマルタイプ最強の物理技が決まる。衝撃波が辺りに広がりその威力は凄まじいものであった。流石のペンドラーもこの攻撃を食らってしまったとなればもう戦う力が残されていない。カイロスに吹き飛ばされた後、その場で気絶してしまった。

「行けっ、モンスターボール！」

サムライ青年が投げたモンスターボールはペンドラーに向かって投げ出される。そのままペンドラーは吸い込まれていき、モンスターボールの開閉スイッチはしっかりと閉められた。

「ペンドラー捕獲完了でござる」

ペンドラーの捕獲が無事に完了されたことを知った野生のポケモン達は安心した様子でリーリエ達の周りに集まっていく。

「やりましたね」

「ああ…お主達が協力してくれたおかげでござる。忝ないでござる」

サムライ青年は深々とリーリエ達に頭を下げた。それに続くかのように野生のポケモン達もありがとうと言わんばかりに一齐にリーリエ達の周りで騒ぎ始めた。さつきまで静かだったトキワの森が急に騒がしくなり、リーリエ達はトキワの森にはこんな

多くのポケモン達が住んでいたのだと、改めて知ることが出来た。

「そのペンドラーはどうするのですか？」

「そのまま保護施設に預けるでござるよ。ペンドラーの侵入経路についても調べないといけないでござるからな」

悪いようにはされないようで安心するリーリエ達。ペンドラーは好き勝手に暴れていたのではなく慣れない土地での生活によるストレスによって引き起こされた物であることは分かっている。一番辛かったのはペンドラーであったことは忘れてはいけないのだ。

「これもすべてサトルのおかげだよね」

「えっ…：僕が？」

「そうですよ。サトルの適切な作戦のおかげで無事にペンドラーを保護することができたのですから。とてもカツコ良かったですよ」

「そ…：そんなことは…」

「あくサトル、リーリエにカツコ良いって言われて照れちゃたのかな〜♪」

「つつ!!?」 だけどもみんなが力を合わせてくれたからこそ、この問題を解決できたんだし僕一人のおかげではないよ！それにクルミル達のおかげでもあるんだから、ありがとう

うクルミル！」

赤面した顔を誤魔化すようにサトルはクルミルに目をやる。クルミルもその場で小刻みにジャンプしていると、いきなりサトルの胸に向かって体当たりしてきた。

「いてて…いきなりどうしたんだよ。クルミル？」

痛がるサトルに御構い無しにクルミルはサトルに笑顔を向けている。問題が解決したのにも関わらずクルミルはサトルの元を離れようとしなかった。その様子を見たサムライ青年は笑いながらサトルに話かけた。

「はははっ！どうやら、クルミルはお主のことを気に入ったようでごさるよ。」

「えっ？」

「お主の戦いぶりを見て、自らお主のことを主人として認めたということでごさるな」

「そうか…クルミル。もしよかつたら僕と一緒に旅を試してみないかな？」

サトルの問いにクルミルは大きく返事をする。どうやら、サトルの手持ちに加わってくれようだ。

「やったね！サトル！」

すぐにサトルは空のモンスターボールを取り出すとそれを見たクルミルはサトルから少し離れて行った。クルミルの目つきは鋭くなり体をウズウズさせながらサトルを睨みつけている。

「どうやら、バトルはして欲しいようでございな」

その様子から悟ったサムライ青年はサトルに言い放った。その挑戦を受けてあげるようにヒトカゲも小さく鳴き始めた。

「よし分かった。バトルしよう。クルミル！」

合図とともにヒトカゲとクルミルはお互いを睨め付けあった。先手を繰り出したのはヒトカゲだ。

「ヒトカゲ！【ひのこ】!!?」

ヒトカゲの火の粉がクルミルに繰り出されると、クルミルは自分の糸を木の枝に貼り付けそのまま上へと登っていく。木々の茂みに隠れるとそのままヒトカゲに攻撃を繰り出していく。

『木々に身を隠して【はっぱカッター】を決める。良い作戦口ト!』

「これじゃあ、最初に戦ったときと同じだよ」

身を潜めるならこつちだつて、サトルはヒトカゲを後ずさりさせると次の攻撃の指示を言い放つ。

「それなら…ヒトカゲ！【あなをほる】!!?」

ヒトカゲも地中に潜って身を隠す。ヒトカゲの姿も見えなくなったと同時にクルミルも攻撃の手を休めた。ヒトカゲの様子を確認しようと茂みから姿を現わすクルミル。

すぐにサトルはヒトカゲに指示を送った。

「【ひのこ】!!?」

地中から飛び出したヒトカゲはクルミルに火の粉を放った。咄嗟の判断でそれを躲したクルミルはすぐにヒトカゲに糸を放射した。

「もう一度【あなをほる】!!?」

すぐにまた地中に身を隠すヒトカゲ。出てきては攻撃をし躲されれば地中に潜るの繰り返し、周りはヒトカゲが掘ったいくつもの穴が広がっている。ヒトカゲのヒットアンドウェイ戦法が暫く続く中、再び地中へと潜るがそのまま姿を見せなくなった。

「ヒトカゲ、出て来ませんね」

「サトル。何考えてるんだろ?」

ヒトカゲの攻撃が止んだ事に気になるクルミルは木から降りると、ヒトカゲが掘った穴を覗き込みヒトカゲの様子を伺おうとしていた。

「今だ、ヒトカゲ!そのまま【ひのこ】!!?」

ヒトカゲは地中に潜ったまま火の粉を放つ。火の粉は地中を掘り進む事で出来た通り道を通って、無数の穴から次々と火柱が立ち上がるようにして放射された。すぐに木へと移って躲そうとしたクルミルだが、近くの穴から放射された火柱によって空中へ吹き飛ばされてしまった。

「ひっかく」だ!!?」

地中から飛び出したヒトカゲはそのまま空中で身動きが取れないクルミルに攻撃を決めた。火柱のダメージも負っているクルミルはそのまま地面へと倒れ込む。

『クルミル捕獲率82%口ト!』

「今だよ! サトル!」

「うん! よし、行け! モンスターボール!」

モンスターボールに吸い込まれていくクルミル。開閉スイッチが閉まるまでのカウントダウンが始まった。左右に大きく揺れていたモンスターボールは開閉スイッチが完全に閉まると一緒に止んだ。

「よし、クルミルゲットだ! お疲れ様ヒトカゲ! よく頑張ったね!」

「うむ! 見事なゲットだったでござるよ!」

「おめでとうございます。サトル!」

「ありがとう! よし、出てこいクルミル!」

モンスターボールが出てきたクルミルにサトルは腰を下ろし、改めてクルミルに挨拶を交わした。

「クルミル! これから宜しくねって…わあ!!?」

サトルがクルミルの頭を撫でようとした瞬間、クルミルは糸でサトルの体をグルグル

巻きにした。クルミルは身動きが取れずそのまま倒れこんでしまったサトルに寄り添った。その顔はとても満足気であつた。

『なるほど、これがこのクルミルの愛情表現みたい口トね』

「うゝ、誰か…助けてくれないか？」

こうしてサトルは新たにやんちゃで元気一杯なクルミルを新たに自分の手持ちに迎へ入れたのであつた。

~~~~~

「この道を真っ直ぐに行けばニビシティに着くでござるよ」

「はい！ありがとうございます」

サムライ青年の案内により無事にリーリエ達はトキワの森を抜けることが出来た。次の街ニビシティに迎うとしたその時、茂みから現れたデデンネは三人にそれぞれオレの実をプレゼントした。

「森を護ってくれたお礼のようでござるな」

デデンネからオレンの実をリーリエは満面の笑みで受け取った。

「ありがとうございます。デデンネ」

リーリエはそうお礼をいうと、デデンネはそのまま木をつたって森の奥へと消えてしまった。

正直なところデデンネをゲットして置きたかったなあという気持ちもあったが、また安心して森に住めるようになり嬉しそうだったデデンネに森から離れさせることが出来なかった。リーリエに続いてカノンとサトルも森の中へ消えて行ったデデンネにありがとうと、伝え大きく手を振った。

「本当にお主達には感謝しているでござるよ。ありがとうでござる。ジム戦頑張るでござるよ。」

「はい！それじゃあ、僕達はこれで！」

「うむ、達者で！」

サムライ青年に別れを告げたりーリエ達はニビシティへと旅立って行った。

さあ、ジム戦の日はもうすぐだ！

## 第十三話 VSニビジム 最初の試練

ニビは灰色の石の色。険しき山合いのある街。

ニビシティに到着した頃には夜の六時をまわっていた。明日のジム戦に備えるためリーリエ達はポケモンセンター内に設備されているバトルの施設でポケモン達の調整を行っていた。

「シロン！【こなゆき】!!?」

「クルミル！【はっぱカッター】!!?」

「はい、そこまで！」

「それじゃあ、ポケモンセンターへ行ってみんなを回復させに行こう」

明日のこともあるため早めに調整を終わらせたリーリエ達はポケモン達をボールに戻すとジョーイさんの元へ向かった。ポケモンの回復をお願いをしにカウンターへと向かおうとしたが、そこには多くのトレーナーの列が並んでいた。おそらくニビジムに挑んだトレーナー達であろう。その中にはバッチを見つめている者もいれば悔しそうにしている者もいる。そのトレーナー達の様々な感情が次第に伝わってきたリーリエ達は少しばかり緊張が走ってきた。

並んでから三十分ぐらい経ったであろう、ようやくリーリエ達の番が回ってきた。

「ジョーイさん！ポケモンの回復お願いしまーす♪」

「はーいー！」

カノンの呼びかけに奥から返事が返ってきた。だが、その声はジョーイさんのものではなく明らかに男性の声でした。不思議に互いの顔を見合わせたリーリエ達の前に現れたのは五つぐらい年上の白衣を身に纏った青年だった。

「あれ、ジョーイさんではない？」

主に全国のポケモンセンターはジョーイさんが行っているものであるもので、治療室から現れたその青年にカノンは不思議に思った。

「ああ、ジョーイさんなら他のポケモン達を診察しているよ。俺はここのジョーイさんの助手をやっている者なんだ」

「助手ですか？」

「簡単にいえば、見習いポケモンドクターってところかな」

ポケモンドクターはジョーイさんと同じくポケモン達の治療を行う役柄である。ポケモンスクールと同じく養成学校は数多く存在している。だが、医療専門分野というものもあってそこに入学できる生徒の数は限られている。厳しい試験を受かった者だけが学園の入学が許されているのだ。

リーリエ達の前にいるその青年はその学校の卒業生であり、今はここニビシティのポケモンセンターを始めとしていろいろな所で研修を行っている見習いドクターなのである。

「ポケモンドクターか！カッコイイ!!」

「あはは、ありがとな。でも自分はまだまだ修行中のみ。一人前になるまでもっと経験を積んで行かないといけないけどね」

その青年の話を聞いているリーリエ達に、一匹のピカチュウがカウンターに上がってきた。

「ピカチュウ!!」

サトルのピカチュウではないと分かったリーリエは少し驚くようにしてを叫んだ。リーリエとほぼ同時に叫んだそのポケモンドクターの青年も少しはつとしていた。

ピカチュウ…もしかして……

二人はほぼ同時にピカチュウがやってきた方向に目を向ける。するとそこには……

「すみません！私のピカチュウもお願いします」

一人の少女がカウンターへと向かってきた。よく見るとリーリエ達の前にいるそのピカチュウはメスであった。

「あつ、はい。お預かりしますね！」

そのままピカチュウを預けた少女はそのまま何処かへ行ってしまった。

「まあ、ここに居るわけないか」

「まあ、ここに居るわけないですよね」

「えっ??」

~~~~~

テンテンテレテン♪

回復が終えた知らせが鳴った。

「お待ちどうさま、預かったポケモンはみんな元気になったぞ」

「「ありがとうございます」」

先ほど知り合った青年から預かったモンスターボールを受け取ると、一斉にモンスターボールからポケモン達を出してあげた。出てきたポケモン達はみんなすつかりと元気になっていた。

「タケシくん、お疲れ様！今日はもうこれで上がって貰っても大丈夫よ」

「いえいえ、まだ手伝うことがあれば自分におまかせ下さい」

カウンターから顔を出したジョーイさんにすぐさまタケシと名乗る青年はジョーイさんの手を取り始めた。その様子にリーリエ達は哑然としていた。

「「えっ??」」

「それからもし宜しければ仕事終わりには疲れた体を癒すために、彼方のカフェでゆっくりとお茶でも…つつ!!」

ジョーイさんにデートのお誘いをしようとしたタケシ。するとすぐに後ろから感じる鋭い痺れに耐えきれずそのまま後ろの方へ倒れ込んでしまった。

「し・び・れ・び・れ」

痺れて倒れてしまったタケシはそのままとあるポケモンに足を引つ張られ何処かへ引きずり去っていく。

おそらくタケシの手持ちの内の一体であるのであろうか。ロトムは解説を始める。

『グレッググル どくづきポケモン』

毒・格闘タイプ

毒袋を膨らませて不気味な音を辺りに響かせる。猛毒をにじませた指先で相手を攻撃する』

「諸に【どくづき】を食らってたよね」

「大丈夫なんでしょうか？」

「いや、大丈夫そうではないと思うけど…」

あまりの出来事に呆然とするリーリエ達。それに失笑していたジョーイさんはまあ大丈夫だと思うことはリーリエ達に伝えておいた。

「あなた達、新人トレーナーみたいだけど。もしかしてニビジムに挑戦に？」

「はい！リーリエとサトル、この二人も含めた私達で挑戦しに行くんです！」

「そうなのね。だったら、タケシ君にジムのこと聞いてみたらいいわよ！」

「「タケシ君？」」

「そっか！もしかしたらと思ったが君たちはニビジムに挑戦しに来たんだな」

毒の痺れから解放されたタケシはゆっくりとリーリエ達の元へと戻ってきた。

「わあ！復活はやつ！」

「あのお身体は大丈夫なのですか？」

「ああ、あれはいつものことだから心配ないよ」

「いつものことって…」

『毒ポケモンの技を受けても、自力で毒を鎮静させてしまうトレーナーとは。これはデータアップロードだロト！』

これに驚いたロトムはタケシを写真に撮ると自分のデータに保存した。リーリエ達も世の中にはいろんな意味で凄いトレーナーがいるんだなあと、思うのであった。

「へえ、これが噂に聞くロトム凶鑑か！初めてみたがとても凄い発明だな」

『そう！ロトム凶鑑はすげーロト！』

「あの、すみません。タケシさんはジムのことで何かご存知なのでしょうか？」

ジョーイさんが言ったことに疑問を持ったリーリエはタケシにその意味を探った。タケシもロトムからリーリエ達の方に目をやると乱れた白衣をきちんと整え、改めて自

己紹介から始めた。

「俺の名前はタケシ。ニビジムは俺の弟が務めているジムなんだ」

「そうだったのですか」

「それにタケシ君は元ニビジムのジムリーダーでもあったのよ」

「元ニビジムの!!!」

「まあな!」

元ジムリーダーと聞いたリリーリ工達は自然と肩に力が入り背筋をピンと伸ばした。

元々ニビジムのジムリーダーを務めていたタケシは、自分はポケモンバトルをするよりも、ポケモンを育てることに生きがいを感じるようになり、ジムリーダーを目指していた弟に正式にジムを任せるとポケモンブリーダーとして旅に出ていたようだ。

度重なる旅の中の経験でシンオウ地方のジョーイさんと病気にかかった多くのポケモン達を救ったことから本格的にポケモンドクターになることを決意したのだ。

「ジム戦は明日の朝に来るといいよ。弟には俺から言っとくから」

「そうですか。それでしたらよろしくお願いします」

「おっけ!それじゃ、ジムまで俺が連れて行ってあげるよ。明日はオフだから大した用事もないからね。明日、ポケモンセンターまで迎えに行くよ!」

「はい!!!」

これ以上仕事の邪魔になってはいけないので、タケシとは明日の早朝にホームで待ち合わせをする約束をして一旦別れることにした。

夕飯を食べながら明日のジム対策について話し終えると、三人はすぐに寝室へ入って行った。旅の疲れが一気に出てきたのか、リーリエ達はすぐに布団に寝転がるとそのまま眠ってしまった。

~~~~~

カーテンを閉め切っていない窓から入り込む朝日に眩しそうに目を擦りながらリーリエ達は起床した。

別室で眠っていたサトルと合流したリーリエとカノンは一階のレストランで朝食を済ませ、タケシとの合流場所となるポケモンセンターのホームで腰を下ろしていた。

「おはよう！おつ、どうやらポケモン達も気合入ってるようだな」

暫くして、約束の時間通りにタケシはポケモンセンターへと到着した。リーリエのポケモン達もみな気合十分なのか、溢れてくる闘志をタケシに見せていた。

「あつーええつと…おはようございます。き…今日はよろしくお願ひしますー!」

「リーリエ、それはジムリーダーに言うセリフじゃない?」

「えつ…は、はい!そう…でした…ね!あはは…」

ジム戦が近づいてくるからか、リーリエは緊張のあまり普段の丁寧口調からまるで口ポットのようなガタゴトの口調に変わってしまった。そんなリーリエを見たタケシは優しく震えているリーリエの肩に手を置いた。

「ふふつ、どうやら緊張しているようだね。無理もないジム戦はポケモン協会が認めたプロのポケモントレーナーとの真剣勝負だからね。だけど、トレーナーがそう緊張してしまうと一緒に戦ってくれるポケモン達にもその不安が伝わってしまう。何よりも大切なことは楽しむことだ。」

「はい!」

「うん、それじゃあ行こうか」

タケシの言葉とシロン達の顔を見たりリーリエの緊張は次第に和らいできた。一旦ポケモン達をボールに戻したりリーリエ達はポケモンセンターを出て、タケシと共にジムへと向かった。

「ここがポケモンジム」

リーリエ達はニビジムの前へとやってきた。岩タイプ専門のジムとはあって、建物全体はゴツゴツとした岩によって覆われていた。

かかって来い!!!

と言わんばかりか、扉の前に立つだけでもその圧が伝わってくる。

「それじゃ、入ろうか」

タケシの合図と共に、ジムの扉はゆっくりと開いていった。

「ジロウ！挑戦者を連れて来たぞ」

「はーいー！」

タケシの呼びかけに応え、一人の少年が出迎えてきた。この人がジムリーダーなのか？現れたその人物は見た感じリーリエ達よりも二つぐらい年下の少年みたいだった。イメージしていたジムリーダーの想像図とはけっこう違っていたのだが、タケシが呼んできたというのなら、この少年はポケモン協会によって実力を認められたトレーナーであることは間違いない。

「こんにちは、僕がここニビジムのジムリーダーのジロウです。話は兄さんから聞いています。チャレンジャーは三名で宜しいですか？」

「はい！リーリエと申します。」

「私はカノン」

「僕はサトルです」

「分かりました。ジムのルールなのですが、基本は三対三によるシングルバトルです。どちらかのポケモンがすべて戦闘不能になってしまうとバトル終了です。なお、ポケモンの交代はチャレンジャーのみに許されます。」

チャレンジャーを確認するとジロウはここでのジムのルールを説明した。タケシが務めていた時はニビジムは二対二のルールであったが、チャレンジャーの実力を正確に知るためという事もあって、ジムリーダーを引き継ぐと同時にジムのルールを変えたみたいだ。

ただ、ジムのルールはあくまでもジムリーダーとしてチャレンジャーの実力を測るためであるので必ずそのジムのルールに従わなければならないという事ではない。もちろん、カノンのように手持ちが三体所持していないトレーナーも挑戦しにやってくる。

その場合の使用ポケモン数はチャレンジャーの所持ポケモンの数によって決めらる。

『誰から挑戦するロト？』

ロトムの一言にジム戦を受ける順番を決めてなかったリリーエ達は顔を見合わせる。

「うくん…：シンプルにジャンケンで決めようか」

「そうだね！よっし、ジャンケン♪」

「あつ、ちよつと待つて下さい」

カノンの突然のジャンケンコールによつてジム戦を受ける順番を決めた。ジム戦をやる順番を決め終わったリリーエ達はジムリーダーに連れられジム戦を行うバトルフィールドへと案内された。

ジムのバトルフィールドはジムリーダーが得意とするポケモンのタイプに合った環境作りとなっている。ニビジムの場合は岩タイプのジムであるため、岩山の地平をイメージとしたフィールドとなっている。

ジムリーダーとチャレンジャーはそれぞれ指定されたトレーナーサイドへと立った。その他の人達はチャレンジャーへの助言等は禁止されているため観戦席へと移動する。

しかし、見慣れていないポケモンのタイプをポケモン図鑑で調べることは禁止されていないので、助言は無しという条件でロトムも一緒に連れてもいい許可が出た。

「これにより、ジムリーダーのジロウとチャレンジャーのリーリエとのジム戦を開始します。まずはジムリーダー、ポケモンをバトルフィールドに！」

審判による試合開始コールと共にジロウはポケモンを繰り出した。ジム戦では先にジムリーダーがポケモンを出す決まりがある。ジムリーダーが繰り出したポケモンを見てチャレンジャーはどんなポケモンを使って対応してくるか見極めるためだからだ。

「行けっ！イワーク!!!」

ジロウが繰り出したのはカントーのポケモンの中でも重量級のポケモンの内の一体でもあるイワークだ。

《観戦席》

「大きい〜」

観戦席で観ているカノンは初めて生でみるそのポケモンの迫力に圧倒されている。

『イワーク いわへびポケモン』

岩・地面タイプ

地中をおよそ八十キロのスピードで掘り進んでいる。通った後は、デイグダの住処となる』

「ジロウのやつ、いきなりイワークとはね。さて、リーリエさんはどんなポケモンを使う

か」

そう言うタケシはリーリエの方に目をやると少しだけ顔を歪めてしまった。それはリーリエはポケモンを繰り出す所か小刻みに震え出していたからだ。どうやら、また緊張が振り返ってきたようだ。

「やっぱり、まだ緊張しているみたいだね」

「あつ…大丈夫だよ、リーリエ！えつと…そうだ！玉葱だよ！リーリエが今戦おうとしている相手は何個も繋がっている玉葱なんだよ！」

「野菜と思つて戦えば緊張が和らぐと言いたいと思うけど…無理があるんじゃないかな」

と言いつつもサトルもリーリエの事を心配ではないわけではない。すぐにリーリエの元へ駆け寄つてやりたいと思うが、試合が始まっているため、もうただ見守つてあげることしか出来ないでいた。

### 《ジム戦》

リーリエも旅を通して、トレーナーだけでなくロケット団やレベルが高い野生のポケモンとのバトルはこなしていた。だが、それは今までカノンやサトルのように一緒に戦ってくれる友達がいたため心細いとは思わなかったからである。ましてや、ジム戦は

一般トレーナーとのバトルとは違う。ジムバッチを獲得するためには勝たないといけないプレッシャーや凄腕のジムリーダーとの真剣勝負というのもあって、さらにリーリエの鼓動は早くなる。

その様子を見たシロンはリーリエの首筋に少しの冷気を吹きかけた。

「ひゃん!!えつと…シロン?」

突然のことにリーリエは緊張する気持ちを忘れてはシロンに目をやる。シロンは心配いらないと呼びかけてると同時に半身心配そうにリーリエに目をやっていた。冷静さを取り戻したリーリエはタケシの言葉を思い出す。

自分が不安がってはシロン達にもそれが伝わってしまう

リーリエは気持ちを落ち着かせるため深呼吸を行なった。そして両手で祈るようにして握りしめたら、そのまま黙祷を始めた。黙祷の中、今までの旅の経験。そしてアローラみんなの事を思い浮かべる。そんな中、リーリエにポケモンとのふれあう楽しさを教えてくれたある一人の人物を思い浮かべた。その人物の顔を思い浮かべると不思議と安心してきた。震えが止まったリーリエに笑顔が戻った。

少しばかりか、どんな困難にも立ち向かっていく貴方に私は憧れていました。私がこうして旅に出る決意ができたのも貴方に追いついてみたいと思ったのもきっかけの一つです。

初めてのジム戦。シロン達と何処までやれるか分かりませんが：

どうか…少しだけでもいいので：

サトシ…わたくしに力を貸して下さい。

黙祷が終わり、改めてジムリーダーと対峙する。このジム戦に挑む誠意とともにリーリエは一回お辞儀を交わすと、最初のポケモンをバトルフィールドへと放った。

「お願いします…シロン!!!」

リーリエの掛け声と共にシロンは元気よくバトルフィールドへと立った。

### 《観戦席》

「リーリエ！」

「どうやら、もう大丈夫のようだな」

リーリエの顔を見て安心したカノンとサトルは自分達の胸をそつと撫で下ろしていた。互いのポケモンが出揃った所でいよいよリーリエの初のジム戦が始まる。アローラでいうとこれがリーリエの第一の試練だ。

「それではバトル開始!!」

### 《ジム戦》

「こちらから行きます！イワーク【たいあたり】!!?」

先手を取ったのはジロウだった。初級技とはいえイワークのような身体の大きいポケモンの体当たりは真面に喰らえばひとたまりもない。イワークはその身を大きく揺らすとシロンに目掛けて一直線に向かっていく。

「シロン！躲して【こなゆき】です!!?」

体当たりを躲されたイワークはそのまま岩壁へと撃墜する。無事に攻撃を躲したシロンはイワークに向けて冷気を放った。放たれた冷気はイワークにヒットし、イワークはその寒さに身を震わせている。地面タイプを併せ持っているイワークに氷タイプの技は効果は抜群だ。

「効いています。続けて【こころえるかぜ】です!!?」

「イワーク【がんせきふうじ】!!?」

シロンは攻撃の手を緩めることはなく、すぐに攻撃を放った。するとイワークは岩石を自分の周りに積み立てるとそれが壁となり、シロンの攻撃を封じた。そして、その壁にイワークは自分の身を隠した。

「【たいあたり】!!?」

イワークは作り上げた岩石の壁ごと壊し、シロンに向かって体当たりを仕掛けた。壁のせいでイワークの動きが見えていなかったシロンは回避するまもなくそのままイワークの技を食らってしまった。

「シロン!!!」

体当たりを受け、吹き飛ばされたシロンはそのままフィールド上の岩石に叩きつけられてしまった。だが、かろうじて何とかシロンは戦闘不能を免れることが出来た。

### 《観戦席》

「攻撃技を防御に使うとは、流星はジムリーダーってところだね」

ジムリーダーの戦いを見ていたサトルはリーダーエを心配すると同時にジムリーダーの戦い方に関心を持っていた。

## 《ジム戦》

「大丈夫ですか？ シロン！」

リーリエの呼びかけに元氣よく応答するシロン。まだ大丈夫なようだ。

「何とか耐えましたね。イワーク！ 『たたきつける』 攻撃!!？」

「躲してイワークに飛びついて下さい！」

今度は大きな尻尾を使ってイワークはシロンを叩きに行った。その攻撃を躲したシロンはイワークの尻尾に飛び乗るとイワークの顔に目掛けて、イワークの胴体をそって走りだした。

「なるほど、そう来たか。イワーク 『りゅうのいぶき』 !!？」

イワークは龍のような唸り声を上げるとともに物凄い息吹をシロンに向かって放った。迫り来る息吹にシロンは吹き飛ばされそうになるが、なんとか堪えては負けじとイワークの顔目掛けて走りだす。

「負けないでシロン！ 『こおりのつぶて』 !!？」

イワークにある程度近づくことができたシロンはすぐさま氷の塊をイワークに向かって放った。勢いよくイワークの顔面にヒットするとイワークは蹠踉めくと同時に息吹が止んだ。

「イワーク！【がんせきふうじ】だ!!？」

「【こおりのつぶて】!!？」

すぐにイワークは無数の岩でシロンに攻撃を仕掛けようとしたが、先制技である【こおりのつぶて】を先に食らってしまった。氷タイプの技を二連続受けてしまったイワークの体力は徐々に減らされていく。

「そこです！【こなゆき】!!？」

「負けるなイワーク！【りゆうのいぶき】!!？」

シロンの冷気とイワークの息吹がぶつかり合う。だが体力の限界が来ていたのかイワークは思った以上のパワーを出すことが出来ずそのままシロンの冷気に押し返されてしまった。

「イワーク!!」

押し返されたと同時にイワークはシロンの攻撃を受け、ゆっくりとその場に倒れてしまった。

「イワーク戦闘不能！ロコンの勝ち！」

「やった！大丈夫ですか？シロン！」

最初の勝ち星を取ることが出来たリーリエ。しかし、シロンも結構なダメージを負っていた。心配そうにリーリエはシロンを呼びかけるとシロンは元気よくリーリエに向かって鳴き始め、心配ない様子を見せた。

「お疲れ様イワーク！なかなかファイトのある戦いでしたよ。ですが、次はこうはいきません。頼むぞ！イシツブテ!!!」

ジロウの二番手はイシツブテだ。だが、そのイシツブテはリーリエがよく知っているイシツブテとは姿が違っていたためリーリエは少しばかり驚いていた。

「イシツブテ!? お願います。ロトム！」

『お任せを！』

ロトムはイシツブテのデータを開いた。

『イシツブテ がんせきポケモン』

岩・地面タイプ

石ころとは見分けがつかないポケモン。頑丈な体を相手とぶつけ合いながら硬さを競い合う』

「なるほど…地面タイプを持っているのですね」

## 《観戦席》

「リーリエ。イシツブテを見て少しびつくりしてたけど、イシツブテにもシロンみたいに他の地方とは異なる姿が存在するんだっけ？」

「うん！ そうだね。ちよつと待ってて」

サトルは自分のポケモン図鑑を取り出すと、イシツブテのデータを探した。

『イシツブテ がんせきポケモン』

アローラの姿 岩・電気タイプ』

「ん？ どれどれ、見せてくれないか？」

アローラのポケモンを見たことがないタケシもサトルが表示したポケモン図鑑を興味津々に見ていた。

「アローラのイシツブテは電気タイプを持っているのか。リーリエさんのロコンを見た時から気にはなっていたんだが、まだいろいろなポケモンがいるんだなあ」

また一つポケモンの不思議な生体を知る事が出来たタケシは一人静かに頷いていた

## 《ジム戦》

リーリエは元気そうに振舞ってはいるが、無理をさせてはいけなそうと思ひシロンを一

旦戻すことに決めた。

「シロン、暫く休んで下さい」

リーリエの指示を聞いたシロンはリーリエの元へと戻っていった。シロンが戻ったと同時にリーリエは二番手のポケモンをモンスターボールから繰り出した。

「次はこの子で行きます！お願いします。ムツクル!!」

リーリエの二番手はムツクルだ。唯一リーリエの手持ちの中ではこのジムのポケモン達とは相性が悪いポケモンでもある。

「行ってみましょう、ムツクル！まずは…」

「イシツブテ！【ステルスロック】!!？」

ムツクルに指示を出そうとしたリーリエよりも先にイシツブテが光のエネルギーを放ち攻撃を仕掛けた。だが、その攻撃はムツクルには攻撃を決めようとはせず、光のエネルギーはムツクルの周りに飛び散り、無数の岩を浮かべたのである。

「そんな！【ステルスロック】!!!」

技の知識もある程度は持っているリーリエはこの技の主旨を理解していた。

### 《観戦席》

「何あの技？」

「岩タイプの子「ステルスロック」だよ。場にいる相手に攻撃するのではなく、次に出てくるポケモンにダメージを与える技だよ」

「そう、つまりあの技が発動したことでリーリエさんはむやみにポケモンチェンジをすることが出来なくなつたという所だね」

「え、なんでよ！だつてチャレンジャーの交代は許されてるんでしょ！なんかズルくない？」

カノンの方はジムリーダーのその技の使用に不満を抱いているようであるが、そのことも含めてタケシは説明した。

「たしかにズルいように見えるが、これもジムリーダーの責務としてジロウはリーリエさんを試しているんだ」

「試す？」

「ジムリーダーはただ勝ち続ける為だけに挑戦者と戦っているわけではない。戦術やその場の判断力、バトルの中でそういった挑戦者の秘めたる力を引き出してあげること、ジムリーダーの役目でもあるんだ」

タケシの話の聞いたカノンとサトルは改めてジムリーダーという役職を再認識した。このバトルを通してトレーナー達は勝つだけでなく、様々なバトル技術を自分の経験値として受け取り、成長の糧となっていく。訪れるチャレンジャーに対して、ジムリー

ダーの想いというのを知る事が出来た。

そして今まさに、ジロウはリーリエに一つの試練という物を与えているのだ。

### 《ジム戦》

「ステルスロック」はバトルが終わるまで効果は持続する。ポケモンを交代するタイミングを過えば一瞬にして敗北に繋がる。それにノーマルと飛行タイプの技は岩タイプのイシツブテには効果は薄い。相性の悪いムツクルでどう戦いますか？」

ジロウから降された課題。それがリーリエには重みとなつて押し掛かつてくる。

「行きますよ。イシツブテ！」「ころがる」攻撃!!？」

考える間もない。イシツブテは自身の体を丸め、縦に向かって高速回転をしながらムツクルに向かって突進してくる。

「ムツクル！」「かげぶんしん」です!!？」

ムツクルは自分の分身を創り出すとそのままイシツブテの攻撃を躲した。

「はがねのつばさ」!!？」

上空へと舞い上がったムツクルは急降下しながら、硬化させた自分の翼をイシツブテの頭上に振り下ろした。

「鋼タイプの技か。イシツブテ受け止めろ!!？」

ムツクルの攻撃が決まる直後、イシツブテは手刀で繰り出されるムツクルの翼を真剣白刃取りで受け止めたのだ。

「えっ!!!」

「イシツブテ【ロックブラスト】!!?」

イシツブテはそのままムツクルを捕まえたまま、石の弾丸をムツクルに決めた。一発…二発と続き、最後の一発をイシツブテはムツクルの翼を離れた状態で打ち込んだ。攻撃を受けたムツクルはそのまま後ろに吹き飛ばされてフィールドに設置されている岩石に叩きつけられた。

「ムツクル!!!」

「続けて! 【ころがる】 攻撃だ!!?」

さらにイシツブテはムツクルに向かって転がっていく。飛行タイプに対して岩タイプの技は効果は抜群。戦闘不能は免れたが、もうすでに虫の息であった。飛んで躲かわず体力はムツクルにもうなかった。

「戻って下さい! ムツクル!!?」

間一髪の所でムツクルをモンスターボールへと戻すことが出来た。

「うん。【ステルスロック】を警戒して倒れるまで戦うと思っていたがいい判断です」

ジロウが言った通り、岩によるトラップをリリーエはもちろん警戒していた。しか

し、後続に繰り出される他のポケモン達には申し訳ないが戦闘不能寸前のあの場面でムツクルを戻さない選択はリーリエにはなかった。

ムツクルを戻すと、リーリエは別のモンスターボールを取り出し三体目のポケモンを繰り出した。

「お願いします。キモリ！」

バトルフィールドにキモリが現れた同時に「ステルスロック」によるトラップが作動した。無数の岩がキモリの周りに浮上すると、一斉にキモリに向かって追撃し始めた。

### 《観戦席》

「あつ、「ステルスロック」が！」

「これはけっこうプレッシャーになるね」

### 《ジム戦》

「草タイプ。今度は有利なタイプで来ましたか！」

「【ステルスロック】により多少ダメージ」

食らってしまったキモリであったが、土埃を払うと対戦相手であるイシツブテを睨みつけた。先ほどの攻撃は逆にキモリの闘志に火をつけたみたいだ。

「行きましようキモリ！【タネマシガン】です!!?」

「イシツブテ！【ロックブラスト】だ!!?」

キモリとイシツブテによる攻撃はぶつかり合い相殺した。パワーは互角のようだ。

「次は【あなをほる】です!!?」

「イシツブテ！地面の動きを感じ取るんだ!!?」

キモリは地中へと身を潜めると、イシツブテは静かに目を閉じると神経を集中させ始めた。地中を掘り進んでいくキモリを野生の頃に培った直感力でイシツブテは自分の真下から飛び出したキモリの攻撃を寸前の所で躲した。

『ピピピイイ!!キモリの動きを読んだロト!』

これには流石のロトムは驚き、思わず声を上げてしまった。

「イシツブテ！【ほのおのパンチ】!!?」

キモリの攻撃を躲したイシツブテは炎を纏った拳でキモリを攻撃した。

「キモリ!!」

攻撃を受けたキモリはそのまま地面に叩きつけられてしまった。何よりも炎タイプの技を受けてしまったキモリには思った以上のダメージが入ってしまった。

《観戦席》

「炎タイプのを覚えてるの！」

「くっ!!?草タイプ対策に覚えさせていたんだ」

タイプの相性で勝っているキモリが追い詰められていることにカノンとサトルは驚いていた。カノンはリーリエを心配に手を震わせ、冷静にバトルを見ていたサトルもだんだんと熱が入ってきたようで、強く拳を作りながらリーリエの試合を観ている。

### 《ジム戦》

一発だけであつても相当なダメージを食らってしまったキモリ。フラつきながらも根性で立ち上がった。

「キモリ、大丈夫ですか！」

心配するリーリエにキモリはゆっくりと頷く。

「もう一度【あなをほる】です!!?」

再び地中に身を隠したキモリ。これではさっきと同じ展開を迎えてしまうぞ!

「イシツブテ!キモリが出て来たところに【ほのおのパンチ】だ!!?」

イシツブテの直感力を信じているジロウは冷静に指示を出す。イシツブテももう一度気配を感じながらキモリが現れるのを待った。そして、その気配を気づいたイシツブテはゆっくりと自分が立っている下に目をやった。

イシツブテが空中へとジャンプした同時に真下から岩石が吹き出した。拳を高く上げて攻撃体勢に入るイシツブテ。しかし、キモリが現れる様子はなかった。

「えっ!」

これに戸惑ったジロウははれてくる土煙の中で岩石が吹き飛んだ場所に目をやると、そこには大きな穴が出来ておりその穴の中にはキモリが身を潜めていた。

そう、キモリ自身はまだ地中から飛び出していなかったのだ。

「タネマシガン」!!?」

穴の中から放たれるキモリの「タネマシガン」は空中で身動きが取れないイシツブテにヒットした。効果は抜群だ。

「決めさせていただきます!キモリ、「はたく」攻撃です!!?」

今度こそ地中から飛び出したキモリは背後に回り、大きな尻尾で力強くイシツブテを真下へと叩いた。落下のスピードも加り、勢いよく地面に叩きつけられたイシツブテは目を廻してた。

「イシツブテ戦闘不能!キモリの勝ち!」

「やった！ありがとうございます。キモリ！」

《観戦席》

「すごいリーリエ！」

「うん！リーリエの方はまだ一体も失っていない。これなら行けるよ」

「たしかにポケモンの数だけでは勝ってはいるが、リーリエさんのポケモン達はみんなダメージを負っている。まだこの勝負はどっちに転ぶか分からないぞ」

スコア的にはリーリエに軍配が上がっているのは確かであるが、状況的にキツイのはリーリエの方でもあった。最後まで何があるか分からない。それはリーリエも分かっている。

《ジム戦》

「お疲れイシツブテ。リーリエさん、先ほどのキモリの動きにはすっかり騙されてしまいました。お見事です」

「ありがとうございます！」

「さあ、これが僕の最後の一体だ！行けっ!!？」

こうして、ジロウの最後のポケモンがフィールドに放たれた。現れたポケモンはリーリエも見たことがないポケモンだった。

『ヨーギラス いわはだポケモン』

岩・地面タイプ

主に土を主食としている。大きな山ひとつ食べ終わると成長のため眠り始める』

現れたのはジョウト地方で確認されたポケモン、ヨーギラスだ。フィールドに立つなりヨーギラスは凄まじい雄叫びをあげた。恐らくさつきまで戦ったイシツブテやイワークよりも強いポケモンであると、リーリエはそう感じた。

「キモリ行けますか?」

イシツブテ戦での戦いに勢いがついたのか、キモリは溢れんばかりの闘志を燃やしていた。その気持ちにこたえるようにリーリエはキモリのまま行くことに決めた。

「キモリ！『タネマシガン』です!!?」

先手必勝。勢いよくジャンプしたキモリは無数の種をヨーギラスに向かって撃ち込んだ。しかし、ジロウとヨーギラスは慌てる様子が無い所か躲す素ぶりを見せていなかった。

「避けない!?!?」

その光景にリーリエは驚いていた。キモリの技が迫ってくる。するとジロウはゆつくりとヨーギラスに技の指示を出した。

「ヨーギラス！『てっぺき』だ！」

鋼タイプの技、『てっぺき』。自分の体を鋼の様に硬化させて防御力を高めたヨーギラスは迫り来るキモリの攻撃を受けた。キモリの技は確かに決まったはずだ。

だが煙がはれると、そこにはほぼ無傷の状態で立っているヨーギラスの姿があった。

### 《観戦席》

「いくら防御力を高めたからと言って効果は抜群の技を受けても、あの程度のダメージしか与えられていないなんて…」

ヨーギラスの行動には、カノンとサトルも驚いていた。

## 《ジム戦》

ヨーギラスの行動に驚いたリーリエだが近づいた隙を狙おうと、すぐにキモリに指示を出した。

「【でんこうせっか】です!!?」

「ヨーギラス! 【ストーンエッジ】!!?」

自慢のスピードでヨーギラスに迫るキモリ。ヨーギラスは自分の体に二本の白い光の輪を包み込ませると、自分の周りに多数の鋭利な石が現れ、相手に向かって放たれた。迫り来る石の乱射をキモリは自慢の瞬発力で躲していく。

しかし、何発も撃ち込んでくる「ストーンエッジ」との差が生まれてしまったようで、あともう少しの所でその内の一つがキモリに決まってしまった。その後、連鎖するかのように無数の石がキモリに命中していく。

「よし! 【あくのはどう】!!?」

さらにヨーギラスは手から悪意に満ちた黒と紫の光線をキモリに放つ。躲しきれなかったキモリはそのまま黒いオーラに包み込まれてしまった。

「キモリ!!」

キモリの安否を確認するリーリエ。土煙がはれると、そこにはボロボロになりながらも根性で立ち上がっているキモリの姿があった。

「大丈夫ですか！キモリ!!?」

リーリエの方にキモリは目をやる。キモリは軽く笑みを浮かべ、軽く拳を上げたが……  
「あつ……」

そのままフラつき始めるとゆっくりと地面に倒れ込んでしまった。

「キモリ戦闘不能！ヨーギラスの勝ち！」

《観戦席》

「キモリ……負けちゃた」

「イシツブテの「ほのおのパンチ」が思った以上に効いていたんだね」

《ジム戦》

「戻って下さいキモリ！ありがとうございます。後はゆっくり休んで下さい」

これでリーリエも一体が戦闘不能になってしまった。ヨーギラスの方はキモリとのバトルを感じさせていないほど、パワーが溢れていた。スピードで攪乱させて一気に

チャンスを狙って行くことに決めたりーリエはいま残っている二体の中でスピードが速いポケモンを繰り出した。

「もう一度お願いします。ムツクル!」

再びバトルフィールドに姿を現したムツクル。それと同時に無数の岩がムツクルの周りを浮上すると、そのまま追撃した。

「ムツクル!!!」

岩のトラップによってダメージを負ったムツクルはそのまま地面に倒れ込む。その後、根性で翼を広げて空へと舞い上がった。

### 《観戦席》

「【ステルスロック】は岩に対する相性分のおよそ八分の一のダメージを負ってしまう。ムツクルには相当なダメージが入ったな」

「りーリエ。苦しくなってきたね」

タケシの説明の通りだと飛行タイプのムツクルは普通なら戦闘不能になっても可笑しくないダメージを負ったはずだ。バトルの流れはジロウになってきたことに少しながらカノンとサトルは感じていた。

《ジム戦》

「ムツクル!」【はがねのつばさ】!!?」

「ヨーギラス!」【ストーンエッジ】!!?」

翼を硬化させ急降下するムツクルに無数の石が乱射される。

「さらに【でんこうせっか】!!?」

【でんこうせっか】によるスピードも加わったムツクルは無数の石を躲し着ることが出来た。そして、そのままヨーギラスに硬化させた翼を当てることに成功した。

《観戦席》

「決まった!」

「【でんこうせっか】によってさらにムツクルのスピードを加速させるなんていい作戦だよ」

《ジム戦》

「もう一度、【はがねのつばさ】!!?」

「【てつぺき】でガードしろ!」

再びヨーギラスに迫るムツクル。もう一度技が決まると思ったが、体を硬化させた

ヨーギラスは腕でムツクルの「はがねのつばさ」を受け止めた。

「ばかぢから!!?」

ムツクルの攻撃を止めたヨーギラスは物凄いパワーでムツクルを叩きつけた。

「ムツクル!!!」

格闘タイプの技はムツクルには効果はいまひとつであったが、もうすでに虫の息でもあったムツクルを戦闘不能にさせるのには、十分すぎる威力であった。

「ムツクル戦闘不能!ヨーギラスの勝ち!」

「ありがとうございます。ムツクル!よく頑張ってくれました」

《観戦席》

「残りはシロンだけか」

「ああ…。リーリエさんの勝敗はロコンの氷タイプの技を上手く決められるかどうか」

かかってるね。だけど、そう一筋縄にいかないのがジロウだ」

「頑張れ！リーリエ！シロン！」

### 《ジム戦》

「最後は貴方です。お願いしますシロン！」

リーリエの指示にシロンは大きく吠える。リーリエの最後のポケモンが今、バトルフィールドに現れた。

「気合いが入ってるようだね。さあ！これが最後のバトルだ!!？」

最後の戦いをむかえたこの最初のジム戦。そこには試合する前、緊張のあまり体を震わせていたリーリエの姿はどこにも無かった。泣いても笑ってもこれで勝者が決まるのだ。

「シロン！【ムーンフォース】!!？」

「ヨーギラス！躲して【ばかぢから】!!？」

月のエネルギー砲をヨーギラスに放つシロン。その技をヨーギラスはジャンプして躲すと、パワーを貯めた右腕でシロンに迫ろうとしていた。

「【こおりのつぶて】です!!？」

シロンも氷の礫でヨーギラスに迎え撃った。重なり合う二つのパワーの衝撃波によ

りシロンとヨーギラスはお互いに後ろの方へと吹き飛ばされてしまった。

「シロン!!!」

「ヨーギラス!!!」

なんとか立ち上がったシロンはすぐに体勢を立て直した。ヨーギラスはとうとうすぐに立ち上がってはいしたが、その表情は少しばかりか辛そうであった。やはり【てっぺき】で防御力を上げていたとはいえ、攻撃が効いていないというわけではなかった。ここに来てキモリとムツクルの頑張りが形となつて現れたのだ。

しかし状況がリーリエ達に向いているとは限らない。シロンの体力も限界が近いし、長引かせるのも危険であった。

ヨーギラスに有効なのは氷タイプの技。しかし、むやみに撃つた所で躲されたり、イワークの時みたいに岩タイプの技で壁を作つて防いだりしてくるかもしれない。一体どうすれば……

……壁を作る……

一瞬にしてリーリエの脳裏に何かが閃いた。一か八かに賭けてみるしかない。覚悟を決めたリーリエはシロンを呼ぶ。卵の時からずっと一緒にいたシロンも口に出さず

ともリーリエの考えが不思議と分かっていた。お互いに軽く頷きかけると、すぐにその策を実行に移した。

「シロン！ダツシユです!!?」

シロンは渾身の力で地面を大きく蹴り、ヨーギラスの方へと走って行った。

### 《観戦席》

「えっ?ヨーギラスに向かっていくよ」

「リーリエは何を考えているんだ」

突然のリーリエとシロンの行動に二人は目を見開いてしまった。

「でんこうせっか」のようなスピードに乗っていない、これでは「ストーンエッジ」の格好の的になってしまう。

### 《ジム戦》

「シロン!そのまま【こおりのつぶて】です!!?」

「何するか分からないけど、これで止めです。ヨーギラス!【ストーンエッジ】!!?」

「シロン!そのまま氷をもっと大きく!!?」

容赦無くヨーギラスの攻撃がシロンへと撃ち込まれた。だがシロンは氷の塊を形成

するとすぐに撃つことはなく、その形を保ちながらゆっくりと周りの空気を冷やしながら氷の塊を大きくしていった。大きく形成された氷の塊は次々に撃ち込まれていく石の弾丸から護る壁となり、シロンはヨーギラスの攻撃を跳ね返ししながら前へと進んで行く。

「なるほどね。ヨーギラス！『ばかぢから』に切り替える!!?」

「ストーンエッジ」から『ばかぢから』に切り替えたヨーギラスはその氷の塊に向かって拳で殴りつけた。ヨーギラスの攻撃で碎かれていく氷の塊は周りに飛び散った。だが、それ以上に驚くことはシロンの姿を確認しようとして氷の後ろに目をやると、そこにいるはずのシロンが忽然と姿を消していたのだ。

「えっ!!?」

突然の事に驚いたジロウもヨーギラスも辺りを見渡しシロンを探し始めた。だが、碎けた氷の破片によって視界を遮ぎられてしまい、良く見渡すことが出来ない。焦りを感じたヨーギラスは必死に目を凝らして探していると、背後から何かの気配を感じた。

振り替えてみると、そこにはシロンの姿があった。気づいた時にはシロンは口を大きく開いて攻撃体勢に入っていた。

「シロン！最大パワーで『こなゆき』です!!?」

ありったけの力を込めて、シロンはヨーギラスに凄まじい冷気を浴びさせた。あまり

の勢いにヨーギラスは空中へと飛ばされてしまった。

「くっヨーギラス！」「ストーンエッジ」！！？」

「【こおりのつぶて】です！！？」

なんとか空中中で体勢を立て直したヨーギラスだったが、技を発動する前にシロンの氷の礫がヨーギラスに命中した。

「ヨーギラス!!!」

技を受けたヨーギラスはそのまま地面へと落下していく。倒れたヨーギラスは目を回し、再び立ち上がる様子はなかった。

「ヨーギラス戦闘不能！ロコンの勝ち！」

よって勝者はチャレンジャー、リーリエ！」

勝負は決した。リーリエの勝利だ。

「やったあああああああああ!!!」

『見事な勝利ロト！』

リーリエの喜びに応じて、シロンも急いでリーリエの元へと駆け寄ると元気よくリーリエの胸の中へと飛び込んだ。

「シロン！よく頑張りましたね!!!お疲れ様です！ありがとうございます!!!」

リーリエはシロンを優しく抱きかかえるとそのまま自分の頬をシロンの頬に重ね合わせた。シロンも嬉しそうに鳴いていた。

### 《観戦席》

「勝ったああ！リーリエが勝った！」

「すごいよリーリエ！」

「ああ…見事なバトルだった」

カノンとサトルも自分の事のようにリーリエのジム戦勝利を祝った。久々に熱いバトルを観たタケシも大きな拍手を送っていた。

ジム戦を終えたリーリエの元にジロウがやって来た。リーリエも頑張ってくれたムツクルとキモリをモンスターボールへと出すと、二体もシロンと一緒にリーリエの前

へと並んだ。

「リーリエさん！貴方の臨機応変な対応。そしてそれに応えてくれるポケモン達の戦いぶり、実に見事でした」

「此方こそありがとうございます。わたくしやシロン達にもとてもいい勉強になりました」

そしてジロウはリーリエの前に綺麗な布で覆ったお盆トレイを差し出した。そこには銀色に光り輝くバッチが添えられていた。

「それでは受け取って下さい。これがニビジムを降した証、グレーバッジです」  
「ありがとうございます」

リーリエはそう一札を交わすと、グレーバッチを受け取った。

「グレーバッジ！ゲットです!!」

リーリエがグレーバッチを持っていている手を高く上げると、シロンを含めた三体も喜びの声をあげた。

こうして、リーリエの初めてのジム戦は見事な勝利に終わった。

だが、ポケモンリーグに出場するためにはあと七つ集めなければならない。次なる挑戦を胸に、リーリエは暫くシロン達とこの勝利の喜びを分かち合うのであった。

## 第十四話 暴走

午前中のリーリエのジム戦を終えてから、午後からの試合はカノンが挑戦することになった。リーリエと同様、白熱としたバトルが続いていき、そして遂に勝負が終えようとしていた。

「ゴローン戦闘不能！フシギダネの勝ち！」

よって勝者はチャレンジャー、カノン！」

「やったああ！お疲れフシギダネ♪」

「おめでとうございます！カノン」

「やったね。カノン！」

「うん！」

無事にカノンは勝利を収めることが出来た。流石に緊張していたのか、バトルが終わったと同時にカノンはその場で崩れ落ちてしまった。

「ニビジムを降した証、グレーバッチです」

「ありがとうございます♪」

バッチを受け取ったカノンはヒコザルとフシギダネと一緒に喜び合っていた。さあ、

最後はサトルの出番だ。改めてサトルはジムリーダーのジロウに挑戦をお願いしようとしたが、ジロウは申し訳なきようにサトルに答えた。

「それでサトル君はなんだけど…回復させているとはいえ連続のバトルはヨーギラス達には負担が大きすぎる。ですからサトル君のジム戦は明日に回してもいいですか？」

確かにこうも連戦が続いてしまうとジロウのポケモン達は普段通りの力を発揮出せない可能性がある。

「分かりました。それでしたら明日また伺います」

了承したサトルは改めて明日の朝一番に挑戦させて貰う約束をジロウと交わすと、リーリエ達はポケモンセンターへと帰っていった。リーリエ達がジムを跡にした後、今回の反省点を含めてタケシはジロウに今日のバトルの事について話しかけた。

「お前もどうだったジロウ？二人のバトルは」

「僕の方こそいろいろと勉強になったよ。特にリーリエさんのバトルスタイルは何となくサトシさんと似ていましたね」

それはタケシも感じていた。ポケモン達の力を信じ、ポケモン達の特徴を生かした臨機応変なバトルスタイルをして戦うリーリエの姿は何となくサトシと重なって見えていた。

「そうだったな。あいつ…いま何処で何してらんだらうな」

何処か懐かしそうにタケシは、ジムの天井に設置されているスプリングカラーを見ながらそう思っていた。

~~~~~

ポケモン達を回復し終えたリーリエ達は夕食を取っていた。ポケモンセンター内のレストランはバイキング形式であり、各々自分達が食べたい分だけ持っていけるのである。

自分のを取り終えたカノンは席の方へと目をやるとサトルの姿がない事に気付いた。カノンはすぐに先にテーブルについているリーリエに聞いて見た。

「リーリエ。サトルは何処行ったか知ってる？」

「サトルなら明日の調整しに行つてくると言っていました。お手伝いしようと思ったのですが、様子を見るだけだから大丈夫だと」

「そっか♪サトルもあんなに頑張るとは感心！感心！」

サトルは明日のためにポケモン達の再調整を行なっている事を知ったリーリエとカノンは先に食事を済ませて置くことにした。

「それにリーリエは最初はどうかと心配したよ。急にまた緊張したりするんだもの」

「本当にご心配をお掛けしました」

「だけど、バトル前に目を瞑ってからは気持ちに余裕が生まれたよね！あの時は何を思ってたの？」

今日のジム戦の事を話そうとしたカノン是真っ先にその話題を切り出した。正直、緊張して今にも倒れそうだったリーリエはどう立ち直ったのか、バトルとは関係ないが少し気になっていた。質問されたリーリエは少し頬を赤らめながら答えた。

「今までの旅とアローラにいた時の自分を振り返ったのです。特にアローラにいた頃はポケモンバトルの楽しさをサトシから教わっていました。それで彼の事を思い浮かべたら急に安心することが出来たんです。」

仲間達との思い出が今のリーリエの力の源になっているのかもしれない。そう嬉しそうなりーリエを見ていたカノンは確信めいたようにリーリエにもう一つの疑問をぶつけた。ぶつちやけ、これが一番聞きたかったことかもしれない。

「……ねえ、リーリエ」

「はい？」

「前から気になっていたんだけどさあ…」

カノンの目が真剣ですね。何なのでしょう。そう思いながらリーリエはカノンの質問に耳を傾けた。そして…カノンはご飯を口に頬張りながらリーリエに聞いてみた。

「リーリエってサトシのこと好きなの？」

突然の如くにリーリエの断末魔がポケモンセンター内に響き渡った。

「うわああ!!ちよつとリーリエ!!?」

突然の事に驚いたカノンにはリーリエを落ち着かせ始めた。もう答えを聞く余裕がなくなつた。リーリエはただいま混乱状態だ。おそらくリーリエの頭にはたくさんのアチャモが輪になって回っているであろう。

「きゅ…き…急に…何を言い出すのですか!!?カノン!」

「いやいやいや、だって何となくそう思えるもん!サトシの事を話すリーリエ。なんだから楽しそうだし、少し顔を赤らめたりするもん!!?」

わたくしが…サトシのことを…

そんな事考えたことも…

混乱する中、サトシの顔を浮かべるリーリエ。カノンに言われたからという事もあつたのか、浮かべるだけでも熱が出るぐらいに

リーリエは壊れた…

「計測しないで下さい!!!」

『あれえええええ!!!』

「ロ…ロトム!!!」

リーリエの【はたく】攻撃がロトムに決まった。叩かれたロトムはそのままおもしろいきり遠くの壁に叩きつけられてしまった。もう手に負えない…さらに混乱するリーリエを冷やして落ち着かせようと思ったシロンは冷気を放つ。

「えっ!?？」

マイナス五十度の冷気がリーリエに包み込まれる。シロンもこんなに取り乱すリーリエを見たことがなかったため相当焦っていたのであろうか、力の加減が出来ずそのままりーリエは氷漬けになってしまった。

「わあああ！リーリエがあああ!!!」

ひとまず騒ぎが収まったが、また別の問題が起きてしまった。

~~~~~

バトル施設でサトルはポケモン達の技の調整を行っていた。三体ともコンディションは良く明日のジム戦に気合が入っている。その気合が新たな成長の糧となったのか、その内の一体のヒトカゲは新たな技を覚えたようだ。

「このタイミングにこの技を…すごいよヒトカゲ！」

明日のジム戦に対抗できる技を覚えてくれたようで、ヒトカゲも嬉しくその場を小刻みにジャンプを繰り返している。

すると、サトルはピカチュウの方へと目をやると少し不安げな表情を浮かべる。

「ピカチュウ。やっぱり僕は…」

あることを気に欠けているサトルは自信無さそうに呟くと、ピカチュウは頬の電気袋

から発生させた静電気をサトルの指に放つ。ピリツとした感覚に驚いたサトルはピカチュウに目をやる。ピカチュウの真剣な目を見たサトルは決心した表情でピカチュウの頭を撫でる。

「ごめんピカチュウ。トレーナーである僕が信じてあげないといけないよね」

ピカチュウと同じようにヒトカゲとクルミルもサトルに寄り添うようにして近づいてきた。頼りになる自分のポケモン達を見たサトルは胸を張って立ち上がると、改めて自分の決意を固めた。

「明日は僕達の初めてのジム戦だ。トレーナーとしてまだ未熟だし、頼りない所もあると思うけど、それでも僕と一緒に戦って欲しい。だから…明日はみんなが…がんばりリーエして行こう!!!」

サトルなりに和ませようと必死にボケをかました。恥ずかしがるサトルに三体は笑いだす。その光景を見たサトルも一緒になって笑い出した。暫く笑いあってからサトルは三体ともにポケモンセンターへと戻っていく。

「なんか、騒がしいね」

ポケモンセンターでは少しレストランの方で騒つく様子が見られた。その原因が自分の知り合いが引き起こしていたことは今のサトルは知るよしもなかった。

ちなみにリーリエは無事に人口冬眠から目覚めたようだ…

~~~~~

「待つてましたよ。サトル君」

「おはようございますジロウさん。今日はよろしくお願いします」

翌日、再びリーリエ達はニビジムに訪れた。気合が入っているのかサトルはポケモン達をモンスターボールに入れずにいた。

リーリエとカノンは観戦席へと移動し、サトルとジロウは向かい合うようにしてトレーナーサイドへと立った。

「これにより、ジムリーダーのジロウとチャレンジャーのサトルとのニビジムのジム戦を開始します。使用ポケモンは三体。どちらかのポケモンが全て戦闘不能となりますとバトル終了となります。また、ポケモンの交代はチャレンジャーのみ認められます。まずはジムリーダー、ポケモンをバトルフィールドに！」

審判の合図と共にジロウは最初のポケモンを繰り出した。

「行けっ！イシツブテ!!？」

「最初はイシツブテか。よし」

リーリエ戦では「ステルスロック」などを使いかなり手強そうだったポケモン、イシツブテが今回のジロウウの一番手らしい

「頼むぞ！クルミル!!？」

サトルの戦法は草タイプを持つクルミルだ。イシツブテに対して相性はいいが、虫タイプも備わっているため岩タイプのももクルミルには効果は抜群だ。最初は互いに弱点がつかれている者同士のバトルとなった。

「それではバトル開始!!」

？サトル vs ジロウウ？

「イシツブテ！【ロックブラスト】!!？」

「クルミル！【いとをはく】!!？」

イシツブテによる岩の弾丸がクルミルに向かって打ち出される。その攻撃をクルミルは口から発射した糸をフィールドに設置されている岩にくっつけ、自分の体ごとその岩に向かって糸を辿るようにしてイシツブテの攻撃を躲した。これは初めてサトルが

クルミルと戦った時に見せた戦法だ。

「今度は相手に向かつて【いとをはく】!!?」

今度はイシツブテに向けて糸を発射し、イシツブテの体を縛り上げた。

「そのまま投げ飛ばせ!!」

そのままクルミルはイシツブテを糸で縛り上げたまま、遠心力を使って勢いよく投げ飛ばした。投げ飛ばされたイシツブテは勢いよく岩に叩きつけられた。

《観戦席》

「す…すげえ」

『あれがクルミルのパワーロトか!』

《ジム戦》

クルミルのフルパワーにより岩に叩きつけられたイシツブテは結構なダメージを負っていた。その様子を見たクルミルは自慢げに胸を張っている。

「いいね。イシツブテ! 【ころがる】 攻撃!!?」

「はっばカッター」で迎え撃て!!?」

体を高速縦回転でクルミルに向かつて走り出すイシツブテ。そのイシツブテに向かつてクルミルは無数の葉の刃で応戦する。だが、そのクルミルの攻撃をパワーで弾き返されてしまい、イシツブテによる攻撃はそのままクルミルに決まってしまった。

「クルミル!!!」

イシツブテの転がるを食らったクルミルは岩におもいつきり叩きつけられてしまい、その衝撃で崩れ落ちる岩の瓦礫の下敷きになってしまった。焦り始めたサトルに追い打ちをかけるようにジロウはあの技を繰り返し出す指示をイシツブテに送った。

「イシツブテ! 「ステルスロック」!!?」

交代して出てきたポケモンを襲う技。クルミルがすぐに攻撃する事が出来ないこのタイミングでジロウはこの戦いを有利な方へと進めるために仕掛けようとしていた。

《観戦席》

「えっ? ここで「ステルスロック」?」

「トラップを仕掛けることでさらにサトルにプレッシャーを与えに行っているようです」

あの攻撃の恐ろしさを身を持って体験はしたりリーリエとカノンはお互いに冷や汗を流していた。

《ジム戦》

岩のトラップを仕掛けようとイシツブテは光の線をクルミルの周りに打ち出した。「ステルスロック」を貼られたら厄介だ、サトルはクルミルの根性を信じて技の指示を送った。

「クルミル！「はっばカッター」!!？」

サトルの思いが届いたのか。クルミルは「はっばカッター」で瓦礫ごと弾くと、そのままイシツブテの「ステルスロック」を仕掛けようと打ち出された光の線を打ち消した。そして、阻止するだけでもなくそのままクルミルの攻撃はイシツブテにも決まったのだ。

「今だ！「いとをはく」で縛り上げろ!!？」

「イシツブテ！「ほのおのパンチ」!!？」

ふらつくイシツブテに糸で縛り上げようとしたが、イシツブテは炎を纏った拳でクルミルの糸を燃え消した。イシツブテは苦しい表情を浮かべていながらも、根性で「ほの

おのパンチ」で攻撃をしようとクルミルに向かって突進していく。

「はっばカッター」!!?」

そんなイシツブテを止めるようにクルミルは再びを攻撃を始めた。クルミルの攻撃はイシツブテに当たったが、怯むことなくそのままクルミルに「ほのおのパンチ」を食らわせた。この攻撃により四倍ダメージを負ったクルミルはその場で倒されてしまった。イシツブテも攻撃を決めた途端、全ての力を出し尽くしたようであり、ふらつきながらその場で倒れてしまった。両者が再び立ち上がる様子はなかった。

「イシツブテ・クルミル！共に戦闘不能！」

《観戦席》

先鋒から激しい戦いを見せた二匹のバトルは同時に戦闘不能となった。その息詰まる戦いをリーリエとカノンは固唾を飲んで見ていた。

「相打ち…ですか」

「息が詰まるバトルだったね」

《ジム戦》

サトルとジロウはそれぞれのポケモンをモンスターボールへと戻した。

「戻れイシツブテ！ご苦労様でした」

「戻れクルミル！ありがとう！ゆっくり休んでくれ」

戦ってくれたポケモンにお礼の一言を述べた後、ジロウは二体目のポケモンをバトルフィールドへと放った。

「行けっ！イワーク！！？」

その大きさに圧倒されながらもサトルは二体目を放った。

「頼むぞ！ヒトカゲ！！？」

サトルの合図と一緒にヒトカゲは小さな火の玉を口から放ち、気合いをあげた。両者のポケモンが出揃った所で審判による開始のコールが入った。

「ヒトカゲ！【あなをほる】！！？」

「イワーク！地面に向かって【たたきつける】！！？」

弱点を突こうとヒトカゲは相性の良い地面タイプの技を仕掛けた。するとイワークは大きな尻尾でフィールドに向かって叩きつけた。フィールド全体に地鳴りが起こった。それによって生まれた衝撃波でヒトカゲは地面の中から叩き出されてしまった。

「ヒトカゲ!!!」

「今だ! 【たいあたり】!!?」

空中へと放り出されたヒトカゲにイワークは体当たりを仕掛けた。

「ヒトカゲ! 【メタルクロー】!!?」

負けじとヒトカゲは鋼のように硬化させた爪でイワークの体当たりを受け流すようにして躲した。さらに躲した先にある岩を蹴り上げてイワークの方へと飛び出すと、そのまま硬化させた爪でイワークは切り裂いた。硬い岩をも切り裂いてしまうほどの爪に引っ搔かれたイワークには十分なダメージが入った。

《観戦席》

「えっ! 【メタルクロー】!!?」

「ヒトカゲ! 【メタルクロー】を覚えたのですか!」

見たことがない技を決めたサトルのヒトカゲを見たリーリエとカノンは驚いた様子であった。

《ジム戦》

「イワーク!!!」

鋼タイプの技を受けたイワークはジロウの呼びかけが聞こえると、頭を左右に大きく振った。これにより気を取り直したイワークは再びヒトカゲを見つめ始めた。

「ヒトカゲ! 『あなをほる』だ!!?」

「イワーク! 『がんせきふうじ』!!?」

穴を掘って身を隠して、近づいた所で「メタルクロー」決めようと考えたサトルはヒトカゲに「あなをほる」を指示したのだが、イワークは岩石をヒトカゲの前後左右に打ち込むとそのままヒトカゲを挟み込んだ。

「あっ! ヒトカゲ!!!」

岩石に挟み込まれてしまったヒトカゲは身動きが取れないでいる。

《観戦席》

『捕まってしまったロト!』

「あれじゃあ、逃げられないよ」

《ジム戦》

「ヒトカゲ！ 脱出するんだ！」

脱出するにも岩石によってがっしりと体を固定されてしまっている。脱出しようともがけぼもがうほど岩石が体に食い込んでいく。

「イワークー！ 『たいあたり』 !!?」

身動きが取れないヒトカゲに攻撃の手を止めるジムリーダーではない。大きな体を捻じ曲げイワークは勢いよくヒトカゲの方へと向かって行く。もう、この攻撃を防ぐ手がない。イワークの攻撃がヒトカゲに決まるのを黙って見てるしかなかった。

凄まじい破壊音とともに、イワークの体当たりは岩石に捕まっているヒトカゲに撃墜する。何も出来なかった、目の前で岩石が崩れ落ちていく。まるで自分の無力さを痛感させるように…

「ヒトカゲ戦闘不能！ イワークの勝ち！」

何も…出来なかった…

「…ごめんヒトカゲ。ゆっくり休んでくれ」

静かにサトルはヒトカゲをモンスターボールへと戻した。

まだジム戦に負けた訳でもないが、何とも言えない敗北感がサトルを襲う。さらには自分のポケモンを見捨てるような罪悪感も感じるようになり、自分の無力さがサトルの

自信をコップに徐々に罅が入るようにだんだんとへし倒されて行く。気力が無くなりつつあるサトルはそのまま呆然と立ち尽くしてしまった。

「チャレンジャー！ 次のポケモンを」

審判の声に反応したピカチュウは自分からバトルフィールドへと立った。そんなピカチュウの様子をみたサトルは自然と我に帰った。ピカチュウも頬の電気袋から電気を発しながら真剣な目でサトルを見ている。

反省はバトルが終わってから、サトルは一度深呼吸をして気持ちを落ち着かせた。

「全力でやろう！ ピカチュウ!!？」

ピカチュウの気持ちに伝えてからバトルを少し中断させてしまった事に対してジロウに深々とお辞儀返した。

気力が戻ったサトルであったが、リーリエとカノンとロトムは何処と無く心配で仕方がなかった。

「うん！ それじゃ、行くよ！ イワーク【りゆうのいぶき】!!？」
「ピカチュウ！ 【でんこうせっか】!!？」

イワークは息吹をピカチュウへとおもいつきり吐き出した。それをピカチュウは自慢のスピードで攻撃を躲すと一直線にイワークの元へと向かった。だが【でんこうせっか】はイワークには効果が薄い。だが、サトルの狙いはこの後だ。

「そのまま！『アイアンテール』!!?」

【でんこうせっか】のスピードで一気にイワークに近づいたピカチュウは鋼のように硬化させた尻尾でイワークの頭を叩きつけた。これはリーリエがやった時の戦法だ。

鉄のように硬い一撃はとても大きいものであり、イワークはその勢いに負け地面へと叩きつけられた。

《観戦席》

「決まったー！」

『効果は抜群だロトー！』

カノンとロトムはさっきの心配が一気に無くなったように声をあげた。

「……………」

「リーリエ！心配ないって！さあ、応援しよー！」

さっきのサトルの様子心配になってしまったんだらうと、思ったカノンは軽くリーリエの肩を叩いた。それに反応したリーリエはカノンに軽く笑みを浮かべた。だけど、リーリエが少し黙り込んでいたのはカノンが思っていたのとは違う。

「あつ…いえ、ここまで一緒に旅をして来たのですが、こうしてサトルとピカチュウと一緒に戦っているの初めて観たなあと思ひまして…」

『そういえば、そうロトね!』

そう、オーキド研究所から一緒に旅をしてからここまでサトルがピカチュウと一緒にポケモンバトルをしているのは、今見ている試合がリーリエにとって初めてだった。

《ジム戦》

「もう一度! 『アイアンテール』!!?」

「イワーク! 『たたきつける』 攻撃!!?」

両者とも、自身の尻尾を使った攻撃をぶつけ合う。パワー互角で二体はそのままぶつけ合った反動で後ろに下がる。

「イワーク! 『りゆうのいぶき』!!?」

「ピカチュウ! 『10万ボルト』でガード!!?」

空中に飛び出していて回避が出来ないピカチュウは電撃でイワークの攻撃を相殺させた。だが、爆風に吹き飛ばされてしまいピカチュウはおもいつきり地面に叩きつけら

れてしまった。

「【がんせきふうじ】だ!!?」

さらにイワークはヒトカゲの時と同じよう岩石でピカチュウの体を拘束した。

「【たいあたり】!!?」

イワークはピカチュウを捕らえている岩ごと体当たりで粉碎した。ピカチュウはそのまま瓦礫の下敷きとなってしまった。

《観戦席》

「そ…そんな」

『残念だけど、勝負は…決したみたい口トね』

「……………」

この絶望的な状況にリーリエとカノンとロトムは悪しからずサトルの敗北を考えてしまった。

電気技も効かず、さらに控えのポケモンがあと一体いる。イワークを倒せたところでピカチュウの体力が十分に残っている確証がない。

考えたくないが…考えてしまうのだ

《ジム戦》

「ピカチュウ！ 戦闘ふ…!!?」

審判によるピカチュウの戦闘不能の判断が下されようとしていた

その時…

突然の地鳴りとともにフィールド全体が大きく揺れ始めた。

「なんだ!?」

突如のことに周りを見渡し原因の元を探そうとするジロウ。するとピカチュウが埋まっている瓦礫から凄まじい電撃が発せられた。その電撃により吹き飛ばされた瓦礫の中からボロボロになりながらも、立ち上がるピカチュウの姿があった。ピカチュウの姿に安心したりーリ工達であつたが、ピカチュウの様子を目を凝らしてよく見てみると何か可笑しいと悟つた。

ピカチュウの目は血走つていており、雄叫びを上げながら、電気袋から溢れ出る電気を大きく周りに放つていた。

《観戦席》

『ピピピピ!!信じられないロト!ピカチュウの電圧が一気に上昇しているロト!』

「それよりも、ピカチュウの様子がなんか変ですよ!」

電撃を垂れ流しに発しているピカチュウ。その電撃によってリーリエとカノンの髪は静電気によって上へと浮かび上がってしまう。つまりピカチュウの電撃は観戦席までに影響をもたらすぐらいに強いということが分かるのだ。

「やあ、どうだい? サトル君のジム戦は」

固唾を飲んでジム戦を見ているリーリエ達の後ろから仕事の休憩の合間をとってジムの様子を観にきたタケシの姿があった。

「タケシさん!!! それが…」

「これは…一体」

リーリエ達の不安げな顔から察したタケシはバトルフィールドに目をやると、電撃を発しながら雄叫びを上げているピカチュウの姿に驚愕していた。

《観戦席》

「ピカチュウ!!! 落ち着くだ! ピカチュウ!!!」

サトルは必死にピカチュウを呼ぶものもピカチュウはそれに応えてくれない。それ

どころかピカチュウはサトルの指示を聞かずに電撃を自分の身に纏うとそのままイワークに向かって突進していく。

凄まじい電気エネルギーと一緒にピカチュウはイワークへと向かっていく、空かさずジロウはイワークに攻撃の指示を出した。

「あれは…【ボルテッカー】?!? イワーク【たいあたり】だ!」

地面タイプのイワークに電気技は効果がない。弾き返すぐらいはためジロウはピカチュウと同じように物理攻撃をイワークに命じた。

ピカチュウとイワークがぶつかり合うと大きな衝撃波が会場全体に鳴り響いた。それによって吹き飛ばされた二体。煙がはれるとそこにはさらに闘争心を先立てている一体と目を回して戦意喪失している一体の姿があった。

「イ…イワーク戦闘不能!ピカチュウの勝ち」

なんと、勝ったのはピカチュウだった。

《観戦席》

『理解不能ロト!!!イワークに電気タイプが効いたロトか!!!』

予想もしない出来事にロトムも目を回していた。この状況にリーリエとカノンも驚きを隠せないでいた。

「いや、効いてないよ」

「えっ?」

その謎を解明するようにタケシは徐ろに口を開いた。

「ピカチュウの『ボルテッカー』の威力が強すぎて、その衝撃でイワークが吹き飛んだんだ。その証拠にピカチュウは反動ダメージを負っていない。『ボルテッカー』が決まったのであれば、与えた分のダメージが自分に跳ね返ってくるはずだ」

ピカチュウの技が決まったのではなく、二体が生んだ衝撃波によって吹き飛ばされたことによってやられた。それだけピカチュウの電撃の威力が上がっていることを意味していた。だが、なぜピカチュウの電撃がここまで高くなったのか。何か知っているのではないか、リーリエは長年サトルと連れ添っているあるある人物に聞いてみた。

「カノン…何か知っていますか?サトルのピカチュウのこと!」

リーリエの問いにカノンは引きつった顔で横にゆっくりと首を振った。

「知らないの…それにサトルとピカチュウが戦っている所を見るのも私も初めてなんだ」

「どういふことですか？」

「トレーナーズスクールでのポケモンバトルの実技の時も、サトルはピカチュウを使わず私のヒコザルを借りて、授業を受けてたんだ。その時はピカチュウがバトルすることが怖いからと聞いただけだったけど……まさか、あれが原因なの……」

この表情からカノンは何も知らなかったのであろう。だけど……カノンの話からサトルはピカチュウを使ってバトルをしようとはしなかった。

つまり……サトルはピカチュウがこうなることを知っていたことになる

《ジム戦》

「……よし」

呼吸を整えたジロウは最後のポケモンを繰り出した。

「なあ！ジロウ……」

「あのポケモンは？」

そのポケモンの登場に驚くタケシと新たに繰り出された大きなドリル頭につけたポ

ケモンに首をかしげるリーリエ。ロトム図鑑説明が入った。

『ドサイドン ドリルポケモン

地面・岩タイプ

岩を手のひらの穴に詰めて筋肉の力で発射する。稀にイシツブテを発射することもある』

「切り札はリーリエと戦ったヨーギラスと私と戦ったゴローンを繰り出してくると思ってたけど……」

「ですが、あのドサイドンというポケモン。なんだか、とても強い力を感じます」

《ジム戦》

「落ち着くんだ！ピカチュウ!!!」

何度もピカチュウを呼びかけるサトルであつたが、サトルの声には気にも止めずに暴走し続けるピカチュウは地面のタイプのドサイドンには全く効かない「10万ボルト」を連続で浴びさせていた。

必死に呼び止めようとするサトルと暴走し続けるピカチュウ。その様子をジロウは黙って見ていた。ジム戦に挑戦してくるトレーナーの中には今の自分のレベルに合っていないポケモンを繰り出してくることもある。そのため、主人として認めていないポケモンが好き勝手にバトルをして強引にジム戦に勝とうとしようとすることは珍しいことではない。

サトルはそのトレーナーとは違うことはわかっている。この状況は突然に起きてしまった事故と変わりないと。だが、一度始まってしまったジム戦を終わらせることは出

来ないのも事実だ。

「ドサイドン！」「ロックブラスト！！？」

ドサイドンが動きだす。掌から岩石をピカチュウに発射していくとピカチュウは「10万ボルト」で相殺する。さらに「ボルテッカー」でドサイドンに向かっていく。

「メガホーン」で迎え撃て！！？」

それを自慢の角でピカチュウに迎え撃つ。電気技は効かないがドサイドンは少しずつ押し出されていた。ドサイドンのパワーが押し負けていることにジロウは驚いていた。

「ドサイドン！」「がんせきほう！！？」

力一杯にピカチュウは振り払うと、両手の掌を重ねると、大きな岩石を形成し出した。「がんせきほう」は岩タイプの中でトップクラスの技。その技がピカチュウへと放たれる。だが、そのドサイドンの切り札とも言える技をピカチュウは「10万ボルト」で再び消し飛ばしたのだ。

『信じられない口ト！「がんせきほう」を「10万ボルト」で相殺した口トか!!!』

ピカチュウのとてつもない力に圧倒されるリーリエ達。だが、ピカチュウが度々息を切らしている様子も一緒になって表れていた。

「ピカチュウ！なんだが苦しそうですよ」

「それにさつきから自分勝手に攻撃しているだけで、サトルの声が聞こえていないみたい」

もう見ていられないこの状況。リーリエは苦しそうなピカチュウを見ていられず下を向いてしまった。

《ジム戦》

苦しそうに冷や汗も掻いているピカチュウ。さらに雄叫びを上げるとドサイドンに向かつて飛び出そうとしていた。

このままだとピカチュウの状態が危ない。ピカチュウが飛び出した直後にサトルは

「戻れ!!!ピカチュウ!!?」

空かさずフレンドボールにピカチュウを戻した。ピカチュウを戻したサトルを見て、

まだジム戦終了ではないが、真つ先にカノンはサトルの方へと駆けて行つた。カノンを見てリーリエとロトム。そして、タケシもバトルフィールドへと駆けて行つた。

真つ先にサトルの元へと向かったカノン。彼の顔を覗き込もうとするが、深々と被つた帽子のせいでその表情は見れないが、その体は震えていて、口元に目をやると軽く下唇を噛み締めていた。

「サトル……」

カノンはそつとサトルの腕を掴むと、それに気づいたサトルはカノンに目をやる。涙目になっていゝるその目を拭うとゆつくりと頷くと、ジロウに目をやり深々と頭を下げた。

「すいません。き……棄権します」

「……分かりました」

ジロウはゆつくりと審判に合図を送る。

それを見た審判はこの勝負の判決を述べた。

だが、それは予想だにしていなかったことだった。

「このバトル！ ジムリーダー、ジロウはチャレンジャーのレベル規定外のポケモンを使用したことによる反則負けとみなす！ よって、このバトルの勝者はチャレンジャー、サトルとする！」

「「えっ!!」」

思いもしなかった結果にサトルとカノン、そしてリーリエも声を揃えて声をあげた。

「一体…どういふことなのですか?」

「言葉通りの意味だ。ドサイドンを繰り出した時点でジロウの負けが決まっていたんだ」

訳がわからないサトルに元ニジムのジムリーダーであるタケシが説明した。

「ジムリーダーが使用するポケモンのレベルは、現時点で挑戦者の所持しているバッチの数によって決められているんだ。だが、ジロウが最後に出したドサイドンはバッチ数が六個以上持った挑戦者に使用されるポケモン。まだ、バッチを持っていないサトル君を相手に戦わせるポケモンではないんだ」

つまりジロウは今のサトルと戦わせるべきではないポケモンを繰り出して来たということだ。それじゃ、なんでこんなことをしたのか。悩むサトルにトレーナーサイドへとジロウはゆっくりと歩み寄って来た。

「サトル君のピカチュウがそれ以上に強い力を感じたからです。おそらくドサイドンでなければ、間違いなく他のポケモン達は一撃で倒されていたと思います。」

そう言うとうジロウはサトルの前にジムバッチを差し出した。

「グレーバッチ?」

「力を制御できずに暴走していたとはいえ、自分の反則負けには変わりありません」
「いや、それでは実力で手にしたという意味にはならないはずです！個人的にはそれで勝利を得ることが出来たとは思えません。バッチを受け取る資格は…僕にはないです！」

ジムリーダーの反則負け。だがサトルはこの勝敗に納得いかない。この難しい状況にタケシはある提案を二人に述べた。

「それなら、また後日に再試合をしたらどうだ？ピカチュウを抜かして、二対二のシングルバトルで、どうだろジムリーダー」

タケシの案に考えこむジロウであったが、その案にサトルは空かさず答えた。

「僕はそれでも大丈夫ですが、いいですか？」

「はい。俺もそれで構いません」

これにより、サトルのジム戦は仕切り直しという形になった。

サトルの再試合の日程を合わせたリーリエ達はジムを後にした。昼食の時間になりそうであったためポケモンセンターへと向かった。

「ごめん二人とも。本当なら今日にでも次の街に向かえたのに、僕のせいで足止めを食らってしまっ…」

サトルは弱り切った声でリーリエとカノンに謝罪した。そんな様子を見た二人は優

しく笑顔を向けていた。

「わたくし達はそんなこと思ってませんよ！サトル!!？謝ることはありません」

「そうだよ！気を落とさない♪落とさない♪」

「あ…ありがとう。二人とも」

「それよりもサトルのお身体が心配ですよ。ポケモンセンターに着きましたら、まずはゆつくり休みましょう」

何よりもサトルのことが心配で仕方がなかった、リーリエとカノンは少し笑顔が戻ったサトルの顔を見て安心した。

ポケモンセンターに着くなり、すぐに三人はサトルのポケモン達をジョーイさんに預けるとレストランへと向かった。朝食を終えたと同時にサトルのポケモン達の回復が終わっていた。ボールから飛び出したヒトカゲとクルミル。そして、ピカチュウも元気よくサトルに飛びついて来た。

「よかったです。みんな元気になって！」

「それにピカチュウも落ち着きを取り戻したみたいだね」

「うん」

そういうと、サトルはピカチュウの頭を優しく撫でた。気持ちよさそうにしているピカチュウを見たサトルはゆつくりと立ち上がると二人の前に立った。

「さっきのピカチュウを見て二人ともびっくりしたよね…」

申し訳なさそうに言うサトルにカノンは口を開いた。

「サトル…トレーナーズスクールの時からピカチュウを戦わせたくなかったのはさっきの理由なの？」

そう言うサトルはゆっくりと頷いた。

『ピカチュウが電気エネルギーを両方の頬袋で貯めるように、電気タイプのポケモンは電気エネルギーを貯蔵できる場所がある口トよ！ピカチュウが暴走したのは電気エネルギーをうまく体に貯めることが出来なかったのが原因だと思う口トね！』

「いや…それだけでは無いと思うんだ」

その言い方からサトルはピカチュウが暴走することは分かっていたが、なぜそうなるかはサトルにも分かっていないようだった。ピカチュウを優しく抱き抱えながらサトルは意を決した表情をリーリエとカノンに向けた。

「さっきの事も含めてみんなに話しておくよ。僕と…ピカチュウとの出会いを…」

サトルとピカチュウとの出会い。

それは、まだサトルがトレーナーズスクールに通う前の話。心安らぐトキワの森での出逢いから始まったのだ。

『了解！さあ、始めようとするか』
同時刻、不敵な笑みを浮かべながらその人物はポケモン博物館の中へと入って行っ
た。

第十五話 少年とポケモン達

「さ……い！……ここがトキワの森なんだ！」

「サトル君！そんな先に行ってしまうと、逸れてしまうぞー！」

「ご……ごめんなさい。ボルグ博士！」

初めて野生に生きるポケモン達を前に胸を弾ませ、走り出そうとしていたサトルをボルグは優しく注意を促した。

碧深き渡るトキワの森。父の知人であるボルグという研究員に連れられ、サトルは初めて野生ポケモン達が潜むエリアへと足を踏み入れた。

もうじき、十歳の誕生日を迎えるということで、将来ポケモントレーナーとして旅立つに日に備え、自分のパートナーとなるポケモンを探しに訪れたのだ。

「初めてのフィールドワークに気持ちが悪く弾んでしまうのは分かるが、ポケモンを持っていないサトル君にはここは危険地帯でもあることは忘れずにな」

「はいーいー！」

ボルグの言いつけにサトルは元気よく答えた。見渡すと気持ちよさそうに日向ぼつ

こをしているキヤタピーや進化の時をじっと待っているトランセル、そしてトキワの森を訪れたサトルを歓迎するかのように太陽の光に照らされ銀色に輝く鱗粉を撒きながら頭上を一斉に飛んで行くバタフリーの姿があった。

それからいろいろなポケモンに出会うもののサトルは目的としているポケモンは見つからないでいた。

「ところで、サトル君が探しているポケモンは何かね？」

最初のポケモンはすでにサトル自身の中で決まっているのか。ここまで出会ったポケモンに気にも止めずに探し回っているサトルにボルグは疑問を抱いていた。サトルは満面の笑みでボルグの質問に答えた。

「それはもちろん、ピカチュウだよ！」

「ほう…ピカチュウか。それはまたなぜ何だい？」

「僕もサトシみたいなトレーナーになりたいからだよ！そんなサトシの最初のポケモンもピカチュウだからね」

先日に行われたカントーリーグセキエイ大会。そこで初出場ながらも唯一マサラタウンのトレーナーで予選を勝ち抜きベスト16入りまで果たしたサトシの戦いをテレビ中継で観ていたサトルは彼のいちファンとなっていた。いつか彼と肩を並べられるようなトレーナーになりたい。だから、彼と同じで最初のポケモンはピカチュウと決め

ていたのだ。

そんなサトルの話聞いた最中……

ズドーン

!!!!!!!!!!!!

地鳴りと共に森全体を覆うような鋭い雷が、頭上高く発せられると同時に大きな雷鳴が鳴り響いた。

「なんだ、いまの電撃は？」

空を見上げると雲ひとつない快晴。つまりさっきの雷は電気ポケモンによるものと推測したボルグはサトルを連れ、雷が起こった場所へと急いで駆け出した。

目的地に到着すると、周りの木々は押し倒されており焦げた形跡があった。この有様から凄まじい威力であったことを物語っている。そしてそこには身体の至る所から電流を発しながら苦しんでいる一体のポケモンの姿があった

「博士！あのポケモンは？」

「ピチューだ……」

ピカチュウの進化前に該当するポケモン。そのピチューは自分の中に溜まった電気を出そうと光のように辺り一面に散乱した。

「危ない!!!」

電気がサトルに当たらないようにボルグは自分を縦にしてサトルを電流から守った。

「行けっ！ライボルト!!？」

ボルグはピチューと同じ電気タイプのポケモンであるライボルトを繰り出した。ライボルトはすぐにピチューの元へと駆け寄ると自分の前足でピチューの身体を押さえ込んだ。すると、再びピチューの体から電気が辺り一面に放出された。

暫くして大きく放たれた電気はだんだんと治っていく。ライボルトがピチューから離れるとピチューはぐったりとその場で気を失っていた。

「ピチューが……」

「大丈夫だ！ライボルトの避雷針を利用して貯蔵できない分の電気を少しライボルトに流しただけだ。それよりも一度ポケモンセンターに連れて行かないと！」

ピチューを抱えサトルとボルグは急いでトキワシテイのポケモンセンターへと走り出した。

~~~~~

ポケモンセンターに辿り着つき、そのままピチューは治療室へと運ばれて行った。

数分後、安心した顔で治療室から出たジョーイさんは二人の元へと駆け寄った。

「大丈夫です。ピチューはすっかり元気になりましたよ!」

「ありがとう!ジョーイさん!!!」

ピチューの無事を知ったサトルはポケモンセンター内に響き渡るぐらいの大きな声でジョーイさんにお礼を言った。

「ですが…」

「何か問題でも?」

仕事の疲れでもなさそうだ。少し声を凝らしたジョーイを見てボルグは訳を聞いた。

「目を覚ましましたら、私を見るなり急に暴れて出してしまいました:」

それを聞いたサトルは無我夢中に治療室の中へと走り出していた。呼び止めようと急いでサトルの跡を追うボルグ。それにつられるようにしてジョーイも跡を追った。

治療室はガラス越しからポケモンの様子をトレーナーが見ることが出来るようになっていた。そこからサトル達は中の様子を覗いてみると、辺りを警戒しながら両頬の電気袋から電気を発しながら身構えているピチューの姿があった。サトル達に気がつ

くと目を鋭く尖らせては牙を剥き出しながらこちらを睨んでいた。その表情はピチュー特有の愛くるしさがなかった。人間への憎しみ。そんなものだけが感じられた。

「あの様子だと…我々人間に酷い事をされたのであろうな…」

その言葉を聞いたサトルはすぐに治療室の中へと入る扉の前に立つと中へと入っていった。

「サトル君！ダメよ、危ない！」

サトルの思いもよらない行動にジョーイはサトルを連れ戻そうとしたが…

「ボルグさん？」

「……は少し様子を見てみましょう」

止めに入ろうとしたジョーイさんをボルグは肩を掴んで止めた。人に懐いていない野生のポケモンに近づこうとするまだ幼い年頃の少年。今すぐにも止めるべき状況であることは分かっている。だが、サトルのポケモンに対する思いやりの感情がピチューの閉ざした心を開かせることが出来るのではという、実に根拠のない考えであるが、不思議とそれに賭けてみたいとボルグはそう思ってしまった。

サトルは治療室に入るなり、ピチューの元へと近づいていく。あまりピチューを刺激させてはいけないようサトルはピチューと同じ目線になるように体勢を少し下げたままピチューの元へと向かった。

「こんにちは、ピチュー。僕はサトル。僕は君に酷い事をしないよ。だから、大丈夫！こつちにおいで…」

電撃を仕掛けてこないだけよかったが、ピチューは近づくサトルを見ては唸り声をあげながら警戒している。だけど、今のサトルには恐怖心ではなくピチューを助けてあげたいという気持ちが強かったのであろう、サトルは御構い無しにピチューの頬に手を差し伸べようとしていた。

「君は僕の事が嫌い？」

サトルの手が近づいてくることにさらに身構えるピチュー。いつ攻撃されてもおかしくない。それでも…

「僕は君が好きだよ！」

サトルはピチューの頬に優しく手を置いた。ピチューが電気を貯め込んでいるのは両頬にある電気袋。そこに手をやると感電してしまう危険性もあったが、不思議なことにあれだけ電気を発していたのにもかかわらず、サトルは何事にもないように優しくピチューの頬を撫でる。するとピチューはサトルに対する警戒心が消えていき、少しずつ落ち着きを取り戻して行った。やがてサトルの気持ちを通じたピチューは自分の頬に置かれたサトルの手を優しく擦り合わせてきた。

「どうやら、もう大丈夫のようですね」

「ええー！」

ピチューの暴走が止まったことを確認したボルグとジョーイも治療室へと入っていった。再びピチューの方へと見たボルグの目にはさつきまで凶暴に暴れていたとは嘘のようにサトルに甘え始めたピチューの姿があった。その光景を見たボルグはある一つの提案が浮かんだ。だが、原因不明の暴走を引き起こすポケモンをまだ幼いサトルに任せていいのか。

だが…それ以上にこのピチューの暴走を止めたサトルの包容力に感心を持ったボルグはどうしてもサトルにピチューを任せてみようと思った。

「サトル君、そのピチューをパートナーにしたらどうだ？君が探していたピカチュウの進化前でもあるわけだしな」

突然のボルグの案にサトルは驚いた様子でいたが、サトルはピチューの方へと一瞬目をやっつてから元氣よく答えた。

「うん！する！！」

それにはピチューも元気よくサトルに続いて答えた。

「だったら、これを…」

そう言うと、ボルグは一つのモンスターボールをサトルに手渡した。

「フレンドボールだ！このボールはジョウト地方のボール職人であるガンテツという人が作ったモンスターボールだ。材料となる緑ぼんぐりにはポケモンの気持ちを落ち着かせる香りが強く、それに鎮静効果もある。そのぼんぐりから作られたこのフレンドボールでゲットされたポケモンはなつきやすくなるし、万が一またピチューが暴走したりしてもこのボールに入れてあげれば、落ち着かせることが出来ると思う」

「ありがとう。ボルグさん！」

「ただし、またあんなことが起きてしまうといけないから無理にピチューにバトルをさせないこと！それだけは約束だ」

「はい！これからよろしくね。ピチュー！」

???????

リーリエとカノンは飲み物が入ったコップを両手で握りしめながらサトルの話聞いていた。サトルとピカチュウの出会い。そしてピカチュウの身に起こる謎の症状。サトルの話聞き終わったにも関わらず、二人はコップに口をつけることなく、握りしめたまま固まっていた。

「普通に暮らしたり多少のバトルは大丈夫なんだけど、バトルで大きなダメージを負ったりすると、さつきみたいに暴走して制御出来なくなってしまうんだ。だから、ピカチュウにはその原因が分かるまでバトルはあまりさせないようにはしていたんだ。」

「それだったら訳を話して、私みたいに二対二して貰えるようにジロウさんに頼めばよかったのに…」

「そう考えたけど、でもそれを提案すると二人とも絶対に訳を聞きに来るだろ。そのせいで二人ともピカチュウと接しづらしくなると思ったからさあ…」

まだ旅立ってから日は浅いが、ここまで一緒に旅をしてサトルとピカチュウの悩みに気づいてあげられなかったことに対してリーリエは自分を責めてしまった。だが、そのリーリエよりも…

「ごめん…サトル」

いつものような天真爛漫な彼女とは違った。少し口を濁し、少し低めなトーンでカノンと言った。

「スクール時代からいつも一緒にいるのにサトルとピカチュウにそんな悩みがあったことに気づいてあげられなくて、ごめんね。友達なのに…」

「いや、謝るのは僕の方だよ。ここまで一緒に旅をして来たのに、そんな大事な事を二人に打ち明けようとしなかった。カノンとリーリエがピカチュウの事について話して僕

度を変えるような人達じゃない。だけど、頭で分かっているでも消極的な方へと考えてしまふ僕の悪い癖のせいで、ずっと……ずっと……黙って隠してしまった……」

悩みを打ち明けられなかったことに対して自分を責め続けるサトル。そんな彼の震えている手をそっとリーリエは自分の手を重ねた。

「リ……リーリエ？」

急なことにサトルは一瞬驚いてしまった。一度、深呼吸をして心を落ち着かせたりリーリエは真つ直ぐな目でサトルの方へと向いた。

「わたくしは自分の悩みを平気で打ち明けるような人はいないと言いますが、誰にだって打ち明けるのが怖くないという人はいないと思います。その一言でその人達との関係性がどう変わってしまうのか、どんなに頭の良い方でも人の感情までも正しい正解を導き出すことは出来ません」

……………。

「サトル、顔上げてください」

俯いていたサトルはリーリエの一言で顔を上げた。もう一度、二人の顔を見たサトルは不思議と気持ちが落ち着いてきたような感じがした。それは、二人がいつもと変わら

ない表情でサトルを見てくれたからかもしれない。

「サトル。話してくれてありがとうごさいます。ですが、これだけは約束して下さい。これから一緒に旅をしていく仲間なのですから、もう一人で抱え込まないで下さい。もう隠し事は無しですからね！」

固いことはいらない。その言葉だけでもサトルは救われた。少し鼻声となつてしまった声でサトルは返事を返す。ピカチュウの暴走の件には驚きもした。だけど、その事を知ることが出来た事でより一層、三人の絆をもっと深めていくことができたと思う。それはリーリエだけでなく、カノンもサトルもそう思ったはずだ。その証拠にあれだけ落ち込んでいた二人に笑顔が戻ったのだから……

「そうそう♪それぐらいのことで私達がピカチュウを怖がつたりすると思つてたく♪サトルは一人で考えすぎなんだよ！友達なんだから隠し事はこれからなーしだよ！」

いつもの感じに戻ったカノンは人差し指をサトルの口元に押し付けた。サトルの口元から離すともう一度軽く笑みを浮かべた。それを見て安心したサトルは緊張が解けたように肩の力が降りていた。

話も終わり三人は一度、自分たちの部屋に戻ろうと移動しようとしたその時……

ドッゴーン  
!!!!!!

建物全体が地響きで揺れ始めた。それほどの衝撃音が鳴り響いた。

「何！何！なんの音？」

揺れがおさまるとリーリエ達はポケモンセンターの窓から音が鳴った方角へと目をやった。その方角からは黒い煙が立ち昇っていた。

「あそこは…確か科学博物館があつた場所です！」

「何が起きたんだろ？」

「とにかく行ってみようよ！」

三人はポケモンセンターを飛び出すと一目散に科学博物館の方へと走り出して行った。

~~~~~

科学博物館は大きく損傷していた。リーリエ達が科学博物館に到着すると、そこにはタケシとジロウの姿があった。

「タケシさん！ジロウさん！」

「三人共！」

「何かあったんですか？」

「科学博物館が何者かに襲撃されたみたいなんだ」

「襲撃…まさかロケット団？」

「分からない。だが、今日は休館日だったから負傷者が出なかったのが不幸中の幸い

だった」

タケシとジロウから現場の状況を聞いたリーリエ達。その直後、一台の白バイが科学博物館へと向かってきた。

「ジュンサーさん」

「みなさん、怪我はありませんでしたか？」

「自分たちは大丈夫です。」

「それは良かった。だけど、何が起こったとでもいうのかしら……」

その時、建物の中から如何にも感じの悪いトレーナー達が現れ、モンスターボールを持つとリーリエ達を包囲した。突然のことで困惑するリーリエ達を嘲笑うかのように、科学博物館から少し長めの緑色の髪をした青年が現れた。

「おっと、これはこれはジムリーダーさん。随分とお早い登場で……」

その男は挑発じみた態度を取りながら、リーリエ達に歩み寄ってきた。慌ててジュンサーはその青年に問い詰める。

「御前達一体何者なの？ ロケット団なの！？」

「さあな！ 素直に答えるわけでもないけどよ！」

その青年が指で音を鳴らすと同時に、周りのトレーナー達は一齐にモンスターボールからポケモンを繰り出した。そのトレーナー達もリーリエ達を嘲笑いながら、ゆつくり

とその距離を縮めていく。同じ戦闘服を身につけているが、彼らの胸元にはロケット団の象徴でもある「R」マークが印されていない。

「悪いが、大人しくしてもらおうからな。ジムリーダーとその御一行様達もよ。お前ら！ここは任せたぞ〜」

「待ちなさい!!!」

そう言い残すと青年は一人、科学博物館の中へと姿を消した。跡を追おうとしたがその青年の仲間のトレーナー達に行く手を塞がれてしまった。そのトレーナー達も自分のポケモンに合図を送ると、一斉に戦闘体勢へと切り替えていた。

やむを得ない。タケシは二つのモンスターボールを放り投げた。

「出てこい！ウソツキー！グレッグル！」

繰り出されたタケシのポケモン達も放たれた同時に戦闘体勢へと入っていた。それが続いてカノンもヒコザルとフシギダネをモンスターボールから出現させた。その後、タケシとカノンは同時に三人の方へと振り返る。

「ジロウ！お前はあいつを追ってくれ!!？」

「リーリエ！サトル！ここは私達に任せて！二人はジロウさんと一緒にあいつを追って！」

二人の言葉に三人は了承した。ここで全員足留めをくろう訳にはいかない。それに

これは単なるテロ行為ではないことはリーリエ達も分かっている。きっと科学博物館内にある何かを狙っているのに違いない。

「あの男の後は僕達で追います。ジュンサーさんはできるだけ増援を呼んでください」

「わかったわ！みんな気をつけて!!!」

「「はい!!!」」

タケシとカノンとジュンサーを残してリーリエとサトル、そしてジロウはその青年の跡を追って科学博物館の中へと入って行った。

~~~~~

跡を追っていくリーリエ達が行き着いたのは科学博物館内に設備されているポケモン化石研究所だった。

「出てこい！ドサイドン！」

ジロウは自身の切り札でもあるドサイドンを繰り出すと、ドサイドンを先頭にして研

研究室の中へと入って行った。化石研究所ともあれば、化石ポケモンがいるはずと思っていたリーリエとサトルであったが、化石から蘇ったポケモン達は古代の環境をそのままに再現したポケモンエリアへと移されるため、化石ポケモン達が危険な目に遭わずに済んだ。

「まあ、彼奴らだけでお前ら全員を足止めとは考えてなかったし、ジムリーダーとその他二名ぐらいいは俺の跡を追ってくると思ったださあ」

薄暗い影に隠れていた青年はリーリエ達が研究所に入ってくるのを待っていたかのように、不敵な笑みを浮かべながら立っていた。化石研究所に向かったのであれば、ジロウはその青年の狙い為何なのか理解した。

「そうか…御前達の狙いは化石復元マシンだな！」

「ビンゴ〜！化石ポケモンを蘇らせることが出来る素晴らしい化学発明品。これを俺たちがもつと有効に活用してやろってことだよ」

化石ポケモンを蘇らせることに使われる化石復活マシン。主に化石ポケモンの生態を研究するために使われるマシンであるため世間には出回っていない代物だ。それどころか、このマシンさえあれば化石ポケモンを何体でも蘇らせることができる。それが悪の手に渡ってしまうようなことがあれば、とても大変なことだ。

リーリエはシロンを前にして、残りのモンスターボールを手を取った。

「貴方がこの発明品を使って何をなさるかわかりませんが、見過ごすわけにはいきませんー！」

リーリエが続いてサトルも前に出る。

「うん！その化石復元マシンをお前なんかには渡さない！」

「そうか…なら止められるもんなら止めてみるよ！」

青年がまた合図を鳴らすと、海岸へと押し寄せてくる波のように何百体の小さなポケモン達が壁から天井からと一斉にドサイドンの体に纏わり付いてきた。一瞬にしてリーリエ達と青年の前に小型ポケモン達による大きな壁が造られた。

「このポケモン達はたしか…」

リーリエはそのポケモン達に見覚えがあった。確か、トキワの森で図鑑広げたときに表示されたポケモンだ。

「トキワの森で僕たちが会ったペンドラの進化前、フシデとホイーガだ」

「ドサイドン！振り払うんだ」

体に纏わり付てきたフシデとホイーガをドサイドンは大きく体を振り回して振り払おうとする。だが、フシデとホイーガの毒攻撃でドサイドンは毒状態になってしまった。徐々に体力が奪われていくドサイドンはだんだんと力が抜け始めてきた。それを見かねたリーリエはシロンを前に出し、粉雪でドサイドンの体にへばりついているフシ

デ達を追い払おうとした。するとサトルのモンスターボールからクルミルが勢いよく飛び出してきた。

「どうしたんだ、クルミル?」

クルミルの性格から自分も加勢したいがために出てきたのかと思っただけ、何かが違う。クルミルはその青年に対して身を震わせ野生独特の警戒心を露わにしていた。

「クルミル……まさか!!!」

いつもと違うクルミルにサトルはある一つの結論が浮かび上がった。

フシデとホイーガ

ペンドラーの進化前

トキワの森

誰かに捨てられた

次々と頭の中へと表示されるキーワードを頼りにサトルはその青年に聞いたです。

「もしかして、トキワの森のペンドラはお前が離れたポケモンなのか！」

自分のクルミルのあの様子。きつとトキワの森出身のクルミルだからこそあのペンドラと同じ匂いをあの青年から感じ取ったのかもしれない。そんなサトルの言葉に「さあな、何々のことやら？」

青年は惚けた表情で軽く舌を出しながら見下した目で答えた。確証はない。トキワの森の件に関してはあの男の仕業なのか分からない。だけど、今は化石復活マシンをあいつに渡さない事が先決だ。

「皆さん！出てきて下さい！」

「ヒトカゲも頼む！」

手持ちのポケモンを繰り出したリーリエとサトル。だが、溢れんばかりにいるフシデやホイーガに行く手を遮られてしまい思うように動くことができないでいる。

「出てこいドラピオン!!？」

リーリエ達が戸惑っている隙に、ボールから飛び出したドラピオンは二本の頑丈な爪で化石復活マシンを引き剥がそうとした。

『まずい口ト！化石還元マシンが!!!』

「ムツクル！キモリ！ドラピオンを止めて下さい！」

唯一、空中から仕掛けることができるムツクルと垂直な壁でも登ることができキモリはフィンデ達の群れを躲しながら、ドラピオンの方へと向かって行く。化石復活マシンを引き剥がそうとするドラピオンに近づくことが出来た二体は空中へと飛び、リーリエの指示を待つ。

「させつかよードラピオン！『ミサイルばり』!!?」

ムツクルとキモリの接近に気づいた青年はドラピオンに攻撃の指示を出す。指示に気づいたドラピオンは一度化石復活マシンを離すと、両腕の爪から針状の光線を二体に向けて放った。惜しくも二体はドラピオンの攻撃を躲すことが出来ずに喰らってしまった。

「あのドラピオン、レベルが高すぎる！」

「戻って下さい！ムツクル！キモリ！」

一撃で戦闘不能となった二体をリーリエはモンスターボールへと戻した。二体を倒したドラピオンはもう一度、化石復活マシンを掴みに掛かろうとしていた。それを見た

サトルはフレンドボールを取り出した。

「頼む！ピカチュウ！！？」

大きく投げ込まれたフレンドボールはフシデ達の群れを追い越し、その中からピカチュウが飛び出した。飛び出すと同時にピカチュウは電気袋から電気を放つとすぐに攻撃態勢へと切り替えた。

「ピカチュウ！〔10万ボルト〕！！？」

「ちっ、ドラピオン！〔クロスポイズン〕！！？」

体勢が不安定な空中でピカチュウは標的であるドラピオンに向けて、一気に電撃を放った。そのピカチュウの攻撃にドラピオンは具現化した毒の刃を叩き込んだ。衝突した二つの技は激しい爆発音と共に互いを相殺した。

「ひょえ、あのピカチュウなかなかパワーあるな」

自身の切り札でもあるドラピオンの技が打ち消されたことに青年はサトルのピカチュウの実力に驚いていた。

「【アイアンテール】！！？」

「【どくどく】！！？」

ピカチュウの攻撃がドラピオンに入る直後、近づいてきたピカチュウに向けてドラピオンは毒液をピカチュウに付着させた。

「ピカチュウ!!!」

毒液を浴びたピカチュウは徐々に苦しみ出した。「どくどく」は単なる毒状態ではなく時間が経つにつれて減らされいく体力量が大きくなる猛毒状態になってしまうのだ。そんな猛毒状態の苦しみからピカチュウの体力は底尽きかけていた。しかし、相手のドラピオンは攻撃を止めようとしなない。

「やれやれドラピオン! 「クロスポイズン」 !!?」

「弾き飛ばせ! 「10万ボルト」 !!?」

再びぶつかり合う両者の攻撃。しかし、猛毒状態が響いてしまったか。さっきみたいなの攻撃力を出せなかったピカチュウの攻撃はドラピオンの攻撃に押し返されてしまった。電撃を打ち消した毒の刃はそのままピカチュウに決まってしまった。

「ピカチュウ!!!」

「手こずりさせやがって、ドラピオン! 早く化石復活マシンを奪って引き上げるぞ!」

ピカチュウの戦闘不能を確信した青年はドラピオンを自分の元へと戻そうとした。

その時、

!!!!!!  
!!!!!!  
ピカッー!!!!!!  
!!!!!!

凄まじい電撃が一直線に天井へと伸びていく。神々しく光り輝く雷撃の中から全身を振るわせるほどの雄叫びを上げたピカチュウが赤く血走った目でドラピオンを睨みつけていた。

「あっ！」

「何だ！何だ！」

何が起きたか分からない青年。再びドラピオンはピカチュウの方へとかまえた。

「ヒトカゲ！【ひのこ】!!？」

僅かに数少なく密集しているフシデとホイーガのピンポイントを捉えたサトルはヒトカゲの炎タイプ攻撃でフシデ達を退ける事が出来た。通り道ができたそこをサトルは一目散に駆け出して行く。

「リーリエ！ジロウさん！こっちだ！」

フシデとホイーガの壁から脱出したサトルはリーリエ達をこっちに誘導させようと呼びかけた。サトルの声を聞いたリーリエとジロウはサトルのヒトカゲが追い払った場所へと急ぐ。だが、フシデとホイーガは素早い動きでサトルが穴を開けた通り道をすぐに塞いでしまった。

「リーリエ！ジロウさん！」

「サトル！貴方は早くピカチュウの元へ向かって下さい。わたくし達なら大丈夫です

!

リーリエの言葉を受け、サトルは我を失い暴走するピカチュウの元へと向かった。

「ピカチュウ！僕の声が聞こえる!?？」

走りながら必死にピカチュウを呼ぶサトル。だが、その声はピカチュウに届いていない。ピカチュウは四方八方に電撃を放ちながら、研究室全体に響き渡るような唸り声を上げ続けた。その内の電撃がドラピオンの方へと向かうとドラピオンは避けることなく大きな二本の爪でピカチュウの電撃を食い止めようとした。だが、さっきと比べものにならない威力にドラピオンは受け止めきれずにそのまま押し倒されてしまった。

「なあ!!?・ドラピオン!」

そのままピカチュウの電撃に押し返されてしまったドラピオンはその場に崩れ落ちた。ドラピオンが倒れたにも関わらず、我を忘れているピカチュウはそのまま四方八方に電撃を放っていた。

「落ち着くんだ!ピカチュウ!!」

ピカチュウの元へと駆けつけたサトルは自分の両腕でピカチュウを抱き上げた。だが、サトルの必死の呼びかけはピカチュウの耳には届いていない。自分の中で暴発的に起こる電撃を制御仕切れずに苦しみ悶えている。跳きこうとしたピカチュウはサトルを巻き込んだまま電撃を放つ。

「サトルー！」

急いでリーリエ達もサトルの元へと駆けつけたのだが、無数に湧き出てくるフシデとホイーガの群れに行く手を阻まれてしまう。

「シロン！【こなゆき】!!？」

「ヨーギラス！【ストーンエッジ】!!？」

『ダメだロト！いくら攻撃してもキリがないロト!!!』

いくら倒しても数が多すぎるフシデとホイーガは群れをなす。さらに取り囲まれていたため何処からともなく毒針などの攻撃が飛んでくる。その技を避けながら時には喰らいながらも戦っているシロンとヨーギラスの体力はもう限界に近づいてきてしまっている。

ピカチュウの電撃に包み込まれたサトル。だが、それでもサトルはピカチュウを呼び続けた。

「ピ……ピカチュウ！この力にのまれるな！耐えるんだ！ピカチュウ!!!」

容赦無く襲いかかる電撃に負けじとサトルは何度もピカチュウの名前を叫ぶ。こうなった場合いつもはボールに戻して解決してきたのだが、それじゃダメだ。

まだ、幼かった自分の無責任な事であれピカチュウをパートナーに選んだのは自分だ。パートナーに選ばれたそのピカチュウが頼れるのは主人である僕だけだ。だった

ら、僕がそんなことで逃げ出してはダメなんだ。

「正気に戻ってくれ!!!ピカチュウ!!!」

ありつたけの声で叫んだサトル。すると、徐々に自分の体に流れる電流が少し弱くなっていくことに気がついた。ピカチュウの様子は、さっきまで血走っていた目が少しずつ穏やかさを取り戻しつつある。暴走が止んだのだ。

「あつ!ピカチュウが!!!」

『ピカチュウの正気が戻った口ト!』

正気を取り戻しその場でぐったりと崩れ落ちるピカチュウ。ことの重大を理解したピカチュウは頭をサトルの胸に押し付けながら、申し訳なさそうにサトルの顔を見上げていた。

「大丈夫だよ、ピカチュウ。…ごめんね、無理をさせちゃって…」

サトルはゆつくりとピカチュウの頭を撫でた。それに安心したのかピカチュウはそのまま眠ってしまった。

「そのピカチュウ、なかなか強いじゃねえか。土産としてそいつも頂くのもありだな!それに…」

ピカチュウの暴走が止まったことを見計らった青年はサトルを見下すようにして吐

き捨てた。

「等のピカチュウさんのトレーナーはそのピカチュウの力を全然使いこなせてないみたいだしよ！あつははははは！！！！」

青年は研究室全体が鳴り響いくほどの声量で笑い始めた。それに動じず、サトルはピカチュウを抱えたまま青年を睨みつけた。

「お前が言うように僕はトレーナーとしてまだ未熟者だよ。自分のポケモンが苦しんでいるのに何もしてやることも出来ない。それどころかピカチュウを苦しめないようにとバトルさせてこなかったけど、本当はまた暴走してしまうピカチュウが怖くて、向き合おうのがただ怖かったただだったかもしれない。心配している振りをしているだけで、自分のポケモンが苦しんでいるときに何もしてやる事が出来なかった」

再びピカチュウに目をやるサトル。静かに眠っているピカチュウを見て、決意した表情でもう一度青年の方へと目をやった。

「だけど、もう逃げない。ピカチュウはあの時から今日までこんな僕についてきてくれたんだ。それに答えてあげるためにも僕はピカチュウのこの力とも向き合っていく！これからも、ずっとだ。ピカチュウの苦しみは必ず僕が救い出させてみせる！！」

「くっくカッコいいな！カッコ良すぎて笑いが止まらねえや！だったらその大好きなポケモンと一緒にぶっ飛ばしてやるよ！ドラピオン！！？」

青年の掛け声とともにドラピオンは攻撃体勢に入る。それと同時にサトルの手持ちポケモン、ヒトカゲとクルミルはサトルとピカチュウを護るようにしてドラピオンに向かい合う。ドラピオンはその二体を威嚇するように大きな声で吠え始めた。それに負けじとヒトカゲとクルミルも一緒になってドラピオンに向かって吠え始めた。すると

「クルミル!?」

突然、クルミルの体が発光し始めた。眩い光に包まれたクルミルは新たな姿と新たな力を授かろうとしていた。

「あれは…」

「進化が始まったんだ」

光が止み、目を凝らして見るとそこには

クルミルの新しい姿があった。すぐにロトムは図鑑を開いた。

『クルマユ はごもりポケモン

むし・くさタイプ

クルマユの進化系。葉っぱで体を包み込んで寒さを防いでいる。クルマユが住む森では木々がよく育つとも言われている』

「凄い、進化したのですね！」

「サトルさんの気持ちにクルマユが新たな力を得て応えてくれたみたいだ」

「素晴らしいロト！トレーナーのために進化するポケモン。ロトムは今！とても感動しているロト!!!」

「クルマユ：いや、クルマユ！」

ピカチュウを抱きかかえながらサトルはゆっくりと立ち上がった。

自分のことを信じてついて来てくれたピカチュウとヒトカゲ。そしてこんな自分の気持ちに応えて進化したクルマユ

今度は僕が応えてあげる番だ!!

「よし、クルマユ! 【くさぶえ】だ!!?」

進化と同時に新しい技を覚えたクルマユは自身の葉に口を当て繭に包まれたような心地よい音色を奏でた。その音色を耳にしたフシデとホイーガに絶え間ない睡魔が襲いかかった。

「フシデ達が」

『くさぶえ』の効果で眠り状態になったロト!』

リーリエとジロウの行く手を遮っていたフシデとホイーガは次々と眠り状態となつてその場で眠りに落ちて行く。

「行くぞ!!? ヒトカゲ!」【ひのこ】!!? クルマユ【はっぱカッター】!!?」

すぐにサトルは二体に攻撃の指示を下した。二体の攻撃はドラピオンに直撃した。二体による同時攻撃を食らったドラピオンは蹠跟めき始めるとそのまま背を向けた。

「よし・クルマユ! もう一度【くさぶえ】だ!!?」

油断してはならない。いくら進化したとはいえ敵のドラピオンのレベルは相当なものであることは分かっている。しかも毒タイプのポケモンでは草タイプのクルマユとは相性が悪い。このままゴリ押しして攻撃するよりも眠らせてドラピオンを行動不能にした方が勝算はある。クルマユはサトルの指示通りに再び草笛に入る。

よし! これで…

!!!!!!!  
ド  
ツ  
ツ  
ツ  
ン  
!!!!!!!

一瞬だった。ふらつきながらもドラピオンは長い尾を使って草笛を吹く直前にクルマユと隣にいたヒトカゲを同時に薙ぎはらった。

「勝った気でいたようだが残念だったな。ドラピオン！「ミサイルばり」!!？」

追い討ちをかけるかのようにドラピオンの攻撃が二体にヒットしてしまった。技を喰らった二体はそのまま後ろにいるサトルの方へと吹き飛ばされた。万事休す、二体の体力は底を尽き掛けていた。

「【クロスポイズン】!!？」

「ヒトカゲ！クルマユ！」

畳み掛けるように再度ドラピオンは攻撃を仕掛けた。自分のポケモン達はモンスターボールへと戻してやればいいものだが、ドラピオンの攻撃はヒトカゲとクルマユどころか後ろに立っているサトルをも巻き込むほどの大きな攻撃エネルギーを放っていた。迫り来るドラピオンの攻撃。応戦しようと駆けつけるリーリエ達であるがシロンもジロウのドサイドンもヨーギラスも走っていく体力はもう残っていないかった…

ダメだ。間に合わない。

ドゴツツツンンンン  
!!!!!!!

ドラピオンの攻撃に飲み込まれていくサトル。それをただ見ていることしか出来ないかったリーリエ達。衝撃音が止むと同時に研究室内では、勝利を確信して高笑いしている青年の声と必死にサトルの名前を叫ぶリーリエの声だけが響いていた。

サトルの安否を確認しようとしてリーリエは頭の中で思い浮かんでくる最悪な状況を振り払いながらもサトルの方へと目をやった。煙が晴れていく。すると、一つの人影が見えてきた。

ある  
一  
体  
の  
ポ  
ケ  
モ  
ン  
の  
影  
と  
一  
緒  
に  
…

「なっ!??!」

『良かった口ト!!!!!!』

「リーリエさん!!! サトル君は無事ですすよ!」

青年の驚いた表情。そして、ロトムとジロウの歓喜の声が響いた。

「よ……よかつ……た」

サトルの姿をようやく確認し安堵したリーリエはその場で崩れ落ちる。ドラピオンの攻撃がサトルに直撃されたと思っただが、サトル含めてサトルのポケモン達も無事だった。

サトルも自分自身の身に何が起きたのか分からずにいた。ゆっくりと自分の前に目をやると、一体の大型のポケモンがサトルの前に立ちふさがっていた。このポケモンの立ち位置からサトルは自分がこのポケモンに護ってくれたのだと理解した。

鋼鉄の四本の腕を持つそのポケモンはドラピオンの技のダメージを諸共しなかった。「クロスポイズン」を防いだにもかかわらはず、そのポケモンはサトルの前から離れようとしなかった。そのポケモンは通常とは違って銀色に輝くボディをした色違い。そのポケモンはサトルを護りながら再び青年のドラピオンに向けて攻撃態勢を取った。

『メタグロス てつあしポケモン

はがね・エスパークタイプ

四本の足を折り畳んで空中に浮かぶことが出来る。四つの脳はスーパーコンピューターよりも優れている』

サトルを護ったポケモン名はメタグロス。それと同時に研究室の入り口から一人、銀髪の青年が入ってきた。

「珍しい石を見つけたから調べてもらおうと思って来たんだけど……どうやら騒がしいことが起きているようだね」

銀髪の青年は中へと入っていく。顔が見えてくるとここにいる全員は目を丸くした。

その青年とは初めて会うのだがその青年を知っている。銀髪の青年は自身の手持ちであるメタグロスの元へと近づくと、サトルの肩に手を置いた。

「大丈夫だ。後は僕に任せてくれ」

メタグロスと合図を取る銀髪の青年は胸元に飾したキーストンを握り締めながら、静かな闘志を燃やしていた。

## 第十六話 チャンピオンの実力

突然襲撃された科学博物館。その場に向かったリーリエ達の目の前に現れた謎の集団。二手に別れてリーリエとサトルとジロウは主犯である青年を追っていく。奴の目的は化石復活マシンの強奪。それを防ぐべくリーリエ達はその青年に戦いを挑む。

だが、行く手をフシデ達に阻まれてしまい、なんとか切り抜けることが出来たサトルはただ一人青年と戦う。途中、クルマユの進化もあり、サトルの有利に見えたのだがドラピオンの猛攻によりサトルのポケモン達は皆、戦闘不能寸前にまでに追いやられてしまった。

絶対絶命だったその時、てつあしポケモンメタグロスを連れたトレーナーがリーリエ達の前に現れたのであった。

「サトル！大丈夫でしたか？？」

「うん！大丈夫だよ！」

サトルの元へと駆け寄るリーリエとジロウにサトルは大きく返事を返した。サトルの手を取るとリーリエ達はそのメタグロスのトレーナーに目をやった。

「本で読んだことがあります。まさか、お会いすることができなんて…」

「コーン!!?」

リーリエだけではない。サトルもジロウもそして、敵である青年も目の前の人物に唾然としていた。冷や汗を掻きながらも、青年は口を開いた。

「ダイゴだと…!!?」　ホウエンのチャンピオンがなぜここに…」

なんと、サトルをドラピオンの攻撃から護ってくれたメタグロスのトレーナーはホウ

エン地方の最強トレーナー。

チャンピオントレーナーダイゴであったのだ。

「君が何者なのかは聞かないが、これ以上続けるのなら僕が相手になろう！」

「メーター!!!」

ダイゴの言葉に反応してメタグロスは四つの鉄足から貯めたパワーを一気にエネルギー波として周りに放った。

そのエネルギー波がリーリエ達の肌走る。一瞬、微力な痺れが身体中を駆け巡ったような感じがしたリーリエ達は、メタグロスから放つそのエネルギーからそのレベルの高さを肌で感じた。

そのエネルギーはその青年にも伝わっているはずだが、身を持って知ったのにも関わらず、そいつは逃げ出すどころか、まるで幼児のような無邪気に狂気に満ちた笑顔を浮かべていた。

「チャンピオンが直々に相手をしてくださるとは…ポケモンバトル好きの俺にとっては有難いことじゃねえか！」

そう言い放った青年は再度自分のモンスターボールからドラピオン以外のポケモンを繰り出した。

「タッタタタタ!!？」

ボールから飛び出したそのポケモンは口に縫いつけられているジッパーを外しては、自分の主人と同じく不気味な表情で笑い始めた。

「あの…ポケモンは!?？」

『任せるロト!』

『ジユペッタ ぬいぐるみポケモン』

ゴーストタイプ

強い怨念がぬいぐるみに宿りポケモンになった姿。口を開けると呪いのエネルギー

が逃げてしまう』

ドラピオンとジュペッタ。その二体でダイゴのメタグロスに受けて立とうとする。すぐに青年からの攻撃の指示が入った。

「ドラピオン！ 【ミサイルばり】 !!?」

「ジュペッタ！ 【おにび】 !!?」

「ドーラアアア !!?」

「ペッタアアア !!?」

ドラピオンとジュペッタによる攻撃がメタグロスに向けて放たれる。だが、迫り来る無数のエネルギー波と火の玉の攻撃に対し、ダイゴは動じる様子が出なかった。

「メタグロス！ 【サイコキネシス】 !!?」

「メーター !!?」

サイコパワーでメタグロスは、不規則に襲いかかる相手の攻撃エネルギーを一瞬にして空中で停止させたのだ。

「す…すごいです!!!」

『全弾止めたロト!!!』

「サイコキネシス」のパワーにリーリエ達は驚きを隠せないでいた。すると、メタグロスはそのままサイコエネルギーを相手のエネルギー波にコーティングさせると、全弾相手に目掛けて跳ね返したのだ。

「クロスポイズン」!!?」

「シヤドーパンチ」!!?」

跳ね返された自身の技をドラピオンとジユペツタは打ち消そうとした。だが、メタグロスの「サイコキネシス」の威力も重ね合わされていることにより、通常よりも威力が倍になっていったのか。凄まじい衝撃波が周りに錯乱しそのままドラピオンとジユペツタは後の方へと押し返されてしまった。

力の差が歴然だ。誰から見ても勝敗の行く末は何方になるのかは言うまでもない。

だが、ダイゴはチャンピオンとして一度取り行われたバトルに気を緩めてしまうような事はない。その目は相手を全力で倒すという鋭い眼光を尖らせていた。

「悪いが舐めてかかったりはしない!全力で行かせてもらおうよ!」

空かさずダイゴは自分の胸元に飾した宝石を手にする。その宝石はダイゴの意志に反応したかのように輝きを放ち始めた。

すると同時に、メタグロスの足に装着されていた宝石も光輝きだした。

「あ…あれは！」

目の前で起きている光景に三人は釘付になっている。ただ一人、リーリエはそのパワーエネルギーを何処か懐かしくも感じていた。

エーテル財団との戦いで見せてくれたサトシとゲッコウガの力と似ていると…

「虹の煌めきよ、絆となれ」

ダイゴの持つ宝石とメタグロスの持つ宝石から放たれた光は一筋の線となり、お互いを結び合わせる。

まるでトレーナーとポケモン。互いの絆が一つになるかのように…

「メタグロス！メガシンカ!!!」



そのパワーと共にメタグロスは二体目掛けて突進して行く。ドラピオンとジュペッタは青年の指示を聞かずともその技を避けようとするのだが、二体はその場から動けなかった。回避することは頭の中では分かっている。だが、迫ってくるメタグロスのパワーに圧倒されてしまい、不思議と体が動かなくなってしまったのだ。

気がついた頃には二体はメタグロスの攻撃に吹き飛ばされてしまった。そのまま二体は戦闘不能となる。

「戻れ！」

ドラピオンとジュペッタをボールに戻した青年はそのまま顔を伏せてしまった。

「勝負はあったみたいだね」

メタグロスを前に一歩一歩と青年の元へとダイゴは歩み寄って行く。だが、顔を上げたその青年の顔は誇らしげた表情をしていた。

「バーカー！チャンピオン相手に全力で戦って勝つてると思う訳ねえだろうがよ!!!」

すると、青年は一つのUSBメモリーを取り出すと、遠くの方にいるリーリエ達にも見える高さにまで上げた。

「化石復元マシンの本体の入手には至らなかったが、このマシンの設計図のコピーは取れたし、まあ、任務成功だな！」

迂闊だった。青年は最初っからダイゴと真正面に戦う気などなかったのだ。ドラピ

オンとジュペッタはデータをコピーするまでのただの罫だったのだ。

目的を果たした青年は別のモンスターボールを取ると少し後ろへと下がっていく。

「つうわけで、ここらでとんずらかせて貰うぜ！フリージオ！」  
「くろいきり」  
「？」

ボールから解き放たれたフリージオは黒い冷気を青年を取り囲みながら膨張させていく。膨張された黒い霧はやがて辺りに散りばつていくと、そこにいるはずの青年の影は煙のように消えてしまっていた。

「逃げられたか……」

戦いを終えたメタグロスはメガシンカエネルギーを解き、通常の姿へと戻った。

リーリエ達はダイゴと共に博物館の外にいるカノンとタケシと合流するべく研究所を後にした。

外へ出るとジュンサーの増援も駆けつけており、青年の仲間だったゴロツキのトレナー達は一人残らず確保されていた。科学博物館から出てくるリーリエ達に気づいたカノンとタケシは三人の元へと駆け寄った。

「リーリエ！サトル！」

「カノン！」

「二人とも大丈夫だった？」

「うん。平気だよ！カノンも無事でよかったよ」

「ジロウ。あいつは」

「逃げられたよ。化石復元マシンの設計データを持ってね……」

「そうか、だけどマシンの本体は取られずに済んだんだ。頑張ったな。ジロウ！」

正直、ジムリーダーとしてまんまと設計データを目の前で盗まれてしまったことに対してジロウは自分の無力さに情けなかった。

だが、そんなジロウにタケシは被害を最小限に押さえることが出来たことはジムリーダーとして立派だったと、タケシはジロウの両肩に優しく手を置いた。

「ああ、だけど兄さん！その……化石復元マシンを守ってくれたのは……」

ジロウがそう言いかけると、科学博物館からもう一人の影が見えたことに気がついた。その人物の影を見たタケシに緊張が走った。

「久しぶりだね。タケシくん！」

「貴方はダイゴさん!!!ど…どうもご無沙汰しております」

昔、一度だけホウエン地方の石の洞窟で互いに顔合わせしているタケシとダイゴは再開を分かち合い、お互いに握手を交わした。

「えええ!!!ダイゴさん!!?あのホウエン地方のチャンピオンの!!?」

カノンに至っては目の前にいる別の地方のチャンピオントレーナーを目の前にして歓喜している。

「しかし、ダイゴさん!なぜこちらに…」

「バトルピラミッドのジンダイさんに会いにね。ちやうど珍しい石も見つかったから、それを診てもらおうと思つてニビシティを訪れたんだが…とんだ災難にあつてしまつたようだ」

博物館の方へと目を散らつかせながら話すダイゴにリーリエとサトルはダイゴの元へと駆け寄つた。

「ダイゴさん」

リーリエの言葉にダイゴはリーリエ達の方へと目をやった。

「初めまして、わたくしはリーリエと申します。先程は危ない所を助けて頂いてありがとうございました。どうぞございました」

「僕はサトルです。あの…本当にありがとうございました」

リーリエに続いてサトルも助けてもらったお礼を述べ、お辞儀を交わした。その二人につられてカノンも会釈する。

「みんなに怪我はなくてよかったよ。だけど、あまりこういった無茶はしないようにね」  
「はい…」

実力をつけたとはいえ、考えてみれば犯罪者に立ち向かうのはあまりにも無謀すぎたことだ。

もし、ダイゴが助けに来なかつたら今頃どうなっていたかと思うとリーリエ達はダイゴに注意された事を、染み染みと自分達の行いに反省した。

「それにしても、あいつらは何者だったんだ。ロケット団…でもなさそうだったし…」  
タケシの言葉を聞いたこの場にいる全員が一斉に考察し始めた。

あの青年は最後まで自分達の正体を明かすことはなかった。仮にロケット団としてもカントー地方を拠点としている犯罪組織をカントーの人達で知らぬ者はいないはずだ。ロケット団であることを隠す必要性も全くもってない。

それに青年が連れていたゴロツキ達にもロケット団の象徴である【R】のマークも見

当たらなかつた。

後に、其奴らによつてカントー地方全体がある大事件に巻き込まれてしまふとは、その時のリーリエ達には知る由もなかつた。

『こちらグロット！化石復活マシンの設計データはちゃんと頂いてきたぜ！』

『データって…あんた奪ってきたのは本体じゃないの!?？』

『仕方ねえだろが！あいつらだけならまだしも…チャンピオンに來られちゃ勝ち目なんてねえーだろー!』

『うわあ！逃げた！逃げた！おじげづいて逃げたんだく!』

『…黙れ、猿が…!』

『はあああああ!!!』

『いいではありませんか。化石復活マシンの入手には成功したのだから…グロットの判断は正しかったと私は思いますよ』

『流星は姉えーさん！どっかの野生人とは違うぜ!!』

『誰が！野生人よ!!!』

『お前から通信機で大声だすなつて。耳痛えだろうが！それからグロツトは早く戻つてこい。ボスさんも首をトロピウスのように長くして待つてゐるぜ』

『あいさー!!!』

~~~~~

その夜、回復し終えたポケモン達をジョーイから受け取ったリーリエ達は各自のポケモン達のケアへと回った。カノンもサトルも無事に元気になったポケモン達を見ては安心してゐる。サトルに関してはボールから飛び出したクルマユにいきなり体当たりを諸に食らった所だった。進化して姿が変わったクルマユであったが、クルミルの時からそのやんちゃな性格は変わっていないようであった。

「シロン。気持ちいいですか？」

「コーン!!？」

同じく自分のポケモン達の元気な姿を確認したリーリエはシロン達のブラッシングを始めていた。

「ちよつと貸してみてくれないか？」

声が出た方へと向くとそこにはタケシが立っていた。タケシにブラシを渡すと、リーリエに代わってシロンの毛並みを整え始めた。

気品で主人であるリーリエにしか触られることを許されなかったシロンであったが、タケシのブラッシングが気持ちいいのか、抵抗する素振りを見せなかった。そのシロンの姿にリーリエも驚いている。

「流石ですね。タケシさん！」

「昔、俺もロコンを手持ちに加えていたことがあったんだ。その時、こうして良くブラツシングをしたもんさあ」

タケシがシロン達のブラツシングをしている時、クルマユの攻撃から解放されたサトルはフラつきながらソファアーへと腰を下ろしていた。

「サトルさん」

「ジロウさん」

疲れ果てたサトルの元にジロウがやって来た。ジロウはポケットからケースを取り出すと、サトルの目の前にそのケースを開いた。

「えっ……これは……」

その中からはニビジムバッジのグレーバッジが光輝いていた。

「サトルさんに差し上げます」

突然のジロウの言葉にサトルは目を丸くする。

「いや……でも……ちゃんとしたジムバトルを受けさせてもらってもないのに……」

公式戦のルール以外でバッジを受け取ることに疑念を感じるサトルにジロウは話を進めた。

「復元マシンを守ってくれたお礼なんかではありません。博物館での戦いをみればもう

再戦しなくてもサトルさんとポケモン達の実力は確かめることができました。それにあのジムでチャレンジャーのレベル規定外のドサイドンを繰り出してしまったわけでもある。ジムのルール上で僕がサトルさんに負けたのは事実です」

再度、ジロウはサトルにグレーバッジを差し出した。

「受け取って下さい。ジムリーダーとしてサトルさんはこのジムバッジを授かるのに相応しいトレーナーです！」

その力強い言葉を聴いたサトルは静かに首を立てに振った。そのままサトルはバッジをすぐには受け取らず、バッジを持っていない反対の手でジロウに握手を交わした。

「ありがとう。ジロウさん！このバッジに誓って胸を張っていけるように頑張るよ！」

そう言いサトルはグレーバッジを受け取った。そのあと、感謝とこれからのトレーナーとしての決意表明と共にもう一度ジロウと握手を交わした。

これによりリーリエ、カノン、そしてサトルは一個目のジムバッジを手に入れた。三人は自分たちのグレーバッジをバッジケースから取り出すと、お互いに見せ合うとその喜びを共有し合った。

「それじゃあ、僕はここで失礼させてもらおうよ」

メタグロスの回復を終えたダイゴはこのままポケモンセンターに泊まることなく、ニビシテイを跡にしようとしていた。ダイゴの声に反応したリーリエ達は急いでダイゴ

の元へと向かうともう一度、ダイゴにお礼を言った。

「ダイゴさん！本当にありがとうございます。」

「そんな…。礼ならもういいよ」

「リーリエとサトルから聞きました！あーあ、私も見たかったなあ。メガメタグロス!!」
「僕も初めて見たけど、凄い力ですよねー！」

「ええ！メガシンカはトレーナーとポケモンとの絆の力で進化する進化を超えた進化である。とわたくしもスクールで習いました。能力値だけでなくポケモンによつてはタイプや特性も変わるポケモンがいるとも聞きます。わたくしも生でメガシンカを見るのは…初めてですー！」

「ん？リーリエなんか言葉を濁さなかった？」

少し言葉を詰まらせたリーリエに不思議に思ったカノンはリーリエに語りかけた。すると、リーリエはエーテル財団との戦いを思い出しながら話し始めた。

「実は…メガシンカではないのですが、それと同じような現象を見た事があります」
「似たような…現象？」

続けて不思議に思ったサトルにリーリエは少し頷きながら話を進めた。

「はい。本来メガシンカにはキーストンと特定のポケモンを持つメガストーンが必要となるのですが、それを必要としなくても絆の力でパワーアップする現象です」

その話を聞いたダイゴはある人物の像を思い浮かべた。丁度、リーリエ達と同一年、各地を旅している彼ならと、ダイゴはその人物の名をリーリエに解いた。

「もしかして…サトシ君の事かい!?!?」

ダイゴの口から出たその人物の名にリーリエは瞬時に反応した。

「ダイゴさん!サトシの事を…存知なのですか!」

「うん。ホウエンとカロスと二度ね」

「もしかして…カロスリーグの中継で観たあれ!?!?」

カノンとサトルはテレビで観たカロスリーグの事を思い出した。

その場面があったのは一回戦でのVSチルタリス戦でのことだ。チルタリスの技「りゅうせいぐん」を躲したゲッコウガの身体が水泡によって包み込まれたその時、一瞬にしてゲッコウガの姿が変化したのだ。その衝撃的な瞬間を今でも二人は覚えている。その時も二人はメガシンカとばかり思っていたが、やはりメガシンカではないのか…

三人にダイゴは今の時点でわかつている所までリーリエ達に説明を始めた。

「僕らもサトシ君とゲッコウガのあの力は一体何なのかはまだ分かってはいないが、間違はなくメガシンカと同等の力であることは確かだ。メガシンカエネルギーも専門に調べているカロス地方のプラターヌ博士と一緒に僕らはそれを《キズナ現象》と呼んでいるんだ」

「キズナ…現象」

新たに追加されたワードに三人は狐に包まれたような感じが走った。それと同時にスクールでも教わっていないポケモンの新たな力を知ることが出来たことに高揚した。「さて、そろそろ僕は行くよ。君達もこれからのジム戦頑張つてね!」

リーリエ達の今後の旅のエールを送ると、ふと目線をリーリエ達のポケモンの方へと下ろした。その内のポケモン達に目を向けたダイゴの顔の表情筋が少し上がっているように見えた。

「あの…何か?」

ダイゴの表情に不思議に思ったリーリエはダイゴに問いかけた。

「ふふっ! また何処かで会おう。」

その一言だけを交わした後、ダイゴはポケモンセンターを跡にした。ダイゴはリーリエ達のポケモンを見て何を感じていたのか。その理由は分からなかったが、また旅の何処かで会えることを願い、去るダイゴに手を振った。

「あああああ!!!」

「うわあ! どうしたの…カノン?」

突然のカノンの叫びにリーリエ達はカノンの方へと目をやる。カノンは少し身体を小刻みに震わせながら、リーリエ達の方へと目をやった。カノンの表情は何かの後悔し

たような感じだった。

「サイン…貰つとけばよかった…」

「あつ!!?」

カノンのその一言にリーリエとサトルも軽く後悔したのであった。

~~~~~

「次から近いジムはハナダシティにあるハナダジムですね。ポケモンリーグに出るにはあと七個のジムバッジが必要です。頑張つて下さい!」

「ありがとうございます」

「それじゃあ…」

翌日、次の目的地をハナダシティと決めたりーリエ達はジロウに別れを告げ、出発しようとしていた。その矢先…

「おーい!待ってくれ!!!」

一人の人物が慌ててリーリエ達を呼び止めようとしていた。

「タケシさん!!」

急いでこつちに向かってくるタケシとジョーイの姿を見たリーリエ達は足を止めた。タケシは大きなリュックサックを背負っていることに気づいたリーリエはタケシに問いかけた。

「タケシさんも何方か向かわれるのですか?」

「実はクチバシテイでこれが開催されるらしいんだ」

タケシは質問に答えるべく、一枚のチラシをリーリエ達に見せた。そこには「アローラ祭」という文字が大きく書かれていた。

「アローラって、たしかリーリエの出身だよね?」

「ええ…」

アローラの文字に反応したカノンにリーリエは戸惑いながらも返事を返した。暫くチラシに書かれている「アローラ祭」という文字を眺めていると、リーリエはトキワシテイのポケモンセンターでマオが言っていたことを思い出した。

「あんなにそっちに行ったとき、私にもリーリエの友達を紹介してよね!」

「はい！……って………紹介ですか？」

「時期に分かるよ！それじゃあ」

「も????????????」

「もしかして…マオはこのことを」

マオの言葉を理解したリーリエは一人そつと頷いた。

「この祭りにはアローラのポケモン達とふれあうことも出来るらしいんだ。俺はまだアローラのポケモンと接したことがないから、これはポケモンドクターを目指すものとしてアローラのポケモン達の生態も見ておきたかったんだ。

それで、俺はクチバシティへと向かうんだが、なんにせ開催は一ヶ月後。それまでどうするか考えているのだが…」

そう言いかけたタケシにリーリエとカノンとサトルは同時に声に上げた。

「それだったら、一緒に行こうよ！タケシさん」

「うん！一緒に旅した方が楽しいもんね」

「はい！もちろんです！」

「ああ、クチバシティまでよろしく！」

「此方こそ宜しくお願います！」

リーリエ達との承諾を得たタケシはその後にジョーイさんの方へと振り向いた。

「すみませんジョーイさん！少しの間だけお暇を取らせてもらって…」

「そんなこと気にしないで下さい。タケシ君には本当に助かって貰ってるし、立派なポケモンドクターになるためですもの、私はいつでもタケシ君の味方よ」

「ジョーイさん!!!」

タケシは周りの人達の気には止めず、そつとジョーイの手を取った。

「暫しのお別れですが、自分とジョーイさんの愛の糸はイトマルの糸のように固く結ばれておりま…」

ドシユツツツツ  
!!!!!!

「し・び・れ・び・れゝ」

「ケケケケケケ!!!」

.....。

「みなさん、に…兄さんのことよろしくお願いします」

「「あ…はい…」」

タケシを引きずながら歩いているグレッグルを先頭にリーリエ達も旅立つことにした。

「それではわたくし達はこれで！」

「さようなら」

ジロウと別れたリーリエ達は新たにタケシをメンバーに加えて、次の目的地であるハナダシテイへと向かうのであった。

## 第十七話 細くも櫛の木

新たにタケシをメンバーに加え、次の街であるハナダシティへと向かっているリーリエ達は見晴らしのいい草原でランチを楽しんでいた。

「タケシの作ってくれた料理どれもとても美味しいです!」

「うん!これは絶品だよ!」

「サンキュー!こんなにも喜んで食べて貰えたら、これからも作り甲斐があるな」

タケシ特性のシチューを頬張りながら、リーリエ達は味の感想を述べていた。ポケモン達もそれぞれの好みに合わせたタケシ特性のオリジナルブレンドを含んだポケモンフーズを食べている。それぞれのランチを楽しんでいる中…

「……………」

カノンはご機嫌ななめのような顔だ。

「ど…どうしたのかノン?」

「どこか調子でも悪いのですか?」

「何か嫌いなものでもあったか?」

様子がおかしいと感じた三人はそれぞれカノンに声をかける。すると…



その声に木影で休んでいたポツポツ達の群れが一斉に飛び出した。突然のことにみんなも腰を抜かしてしまった。

「急にどうしたんだよ!」

突然のことにびびくりしたサトルにカノンは自分の顔を寄せては、ジト目でサトルを睨みつけた。

「どうこうもないよ〜! サトルもリーリエも着々と仲間を増やしているのに、私だけ野生のポケモンゲットしてないんだよ! これってどう思うよ!!!」

「どう思うって言われましても…」

カノンの危機迫る表情にサトルは固まってしまった。まさにアーボに睨まれたニョロモ状態。「へびにらみ」ってこんな感じなのかなあ…

『たしかにこの旅の中でまだ新しいポケモンをゲットしていないのはカノンだけロト』

リーリエはムツクルとキモリ。サトルはトキワの森でクルミルをゲットしている。二人は初めてゲットした喜びを知っているが、カノンはその現場を見ているだけで自分がゲットした喜びをまだ感じていないのであった。そんなカノンの様子を見たタケシ

はある提案を提示した。

「なら、まだ日が暮れるまで時間はある。ここらでフィールドワークしてみるのもいいかもな」

タケシのその案にリーリエとサトルも賛成した。

「僕とリーリエのゲットもカノンの協力のおかげでもあるからね。今度は僕たちがカノンのゲットをサポートする番だよ！」

「そうですね！そうしましょう。ねえ！カノン」

三人の言葉にカノンの顔から笑顔が戻った。

「ありがとう！みんな♪よーし捕まえに行くぞ!!!」

一気に元気を取り戻したカノンはすぐに野生ポケモンエリアへと向かおうとする。だが、今はまだ食事の時間。食事が済んでから探しに行けばいいと言うサトルにカノンはごめんと、照れ笑いしながら自分の席へと戻って行った。

自分たちの食事を食べながらポケモン達の美味しそうに食べる様子を見ていた。すると、何かに気づいたサトルはリーリエに声をかけた。

「リーリエ、ムツクルとキモリは？」

「えっ!?」

サトルの言葉に気づいたリーリエはシロン達の方へと向くと、誰も口につけていない

ポケモンフーズがのった皿が二つあったことに気がついた。

「シロン。ムツクルとキモリは何処にいるか知ってる？」

「コ……ン？」

シロンも首を傾げては困った表情を浮かべる。

「ムツクル！キモリ！何処にいるのですか！？」

リーリエはムツクルとキモリの名を呼ぶが、二体からの返事はなかった。

「ムツクル！キモリ！」

「クルツ!!？」

鳴き声に気づいたリーリエは見上げて見るとムツクルの姿があった。上空から舞い降りてきたムツクルはリーリエの肩へと停まった。

「どうしたんですか？ムツクル？」

リーリエの質問にムツクルは少しリーリエの元を離れると、「はがねのつばき」を発動させ、空を切るかのように架空し始めた。その様子からリーリエはムツクルのやりたい事が分かった。

「もしかして……バトルの練習がしたいのですか？」

「クル!!？」

ムツクルは大きく頷いた。

「おお！気合い入ってるな。ムツクル！」

「やっぱ、この前のジム戦を気にしてるのかな。ムツクルはジロウさんのポケモンを一体も倒せなかったし……」

「ク……クル〜」

サトルの一言にムツクルはがっくりと肩の力を落としてしまった。

「ちよつと、サトル！」

「あつ!!?ご……ごめん、ムツクル！」

急いでサトルはムツクルに対し自分の失言を謝罪した。

ニビジム戦はムツクルにとつては相性からにしても厳しい戦いであった。それでもリーリエはムツクルが頑張ってくれたことにはとても感謝しているし、数にキリがあつたからという理由で苦手な相手と戦わせた事に対してムツクルには申し訳なかつたとも思っている。

だが、ムツクルも同じように自分はリーリエのために戦っていたのか、気にしていたようであった。

「それならムツクル！わたくし達はバトルの練習を致しましょう。次のジム戦に備えて力をつけましょう！」

「クルツ!!!」

『だったら、ポケモンゲットしに行く人とポケモンバトルの練習をする人と二手に別れるロト』

「それなら、カノンの方は僕がつくよ」

「じゃあ、俺がリーリエの練習に付き合うとするか」

「はい、宜しく願います！」

それぞれのペアーは決まったが、リーリエはまだ自分の元へと戻ってこないキモリの事が気になり辺りを見渡し始める。

「だけど、ムツクルは見つかったのですが、キモリは一体何処へ……」

「ん、この辺りは木々はキモリにとってはいいのかもしれないな」

「もしかしたら、野生のポケモンを見つける途中に見かけるかもしれないね」

「まあ、あのキモリなら心配いらないと思うし♪任せてよリーリエ！」

「そ……そうですか。それでしたら、宜しく願います」

「よっし、行くぞ！ポケモンゲットだぜ♪」

「あつ、待つてよ！」

こうして、カノンにはサトル。リーリエにはタケシとそれぞれペアーを組んで、ポケモンの捕獲とポケモンの育成へと別れたのであった。

~~~~~

「ヒコココ!!?」

「ピツカア!!?」

カノンとサトルは林の中へと探検していると、外れに大きな湖を発見した。底が見えるぐらい澄んでいるその水は野生のポケモン達には最適な水飲場であろう。

「ヒコココ!」

「どうしたの? ヒコザル」

ヒコザルが指差す湖の方へと見ると、一体のポケモンがカノンとサトルの前に現れた。

『マリル みずねずみポケモン

水・フェアリータイプ

ルリリの進化系。伸び縮みする尻尾を浮き袋にして水中へと潜る。流れの速い川でも平気に泳ぐことができる』

図鑑の説明通りマリルは自分の尻尾を両手で掴むと、その尻尾の浮力で水面に浮きながら気持ちよさそうに泳いでいた。

「マリルか！水タイプのポケモンを加えるのもいいんじゃないかな」

「うん！よしあの子に決めた！」

カノンはモンスターボールからマリルと相性のいいフシギダネを繰り出した。

「フシギダネ！【はっぱカッター】！！？」

「ダネツ！！？」

いきなり飛んできたフシギダネの攻撃に即座に反応できなかったマリルに「はっばカッター」を決めることができた。

「行っつけー!!?」「たいあたり」!!?」

「ダネツダア!!?」

「はっばカッター」を受けて、ふらつくマリルにフシギダネの体当たりも決まった。吹き飛ばされたマリルはそのまま目を回してしまった。

「カノンいまだよ!」

「うん!マリルゲットよ!」

カノンは勢いよく空のモンスターボールをマリルに向かって投げ入れた。

すると…

ドオオン
!!!!!!

「えっ!!」

マリルに投げたモンスターボールは何者かによつて弾き返されてしまった。

「あれは!?」

マリルの前に現れた一体のポケモンにサトルは空かさずポケモン図鑑を開いた。

『ブイゼル うみイタチポケモン』

水タイプ

首の浮き袋を膨らませて、水面から顔を出しながら辺りを警戒している。尻尾をスク

リユウのように回して泳ぐ』

ブイゼルはそのまま「ソニックブーム」でフシギダネに攻撃を仕掛けた。ブイゼルの攻撃を受けたフシギダネはカノンの方へと吹き飛ばされてしまった。

「フシギダネ!!!」

ブイゼルに押し倒されたフシギダネをカノンは抱きかかえた。

ブイゼルはマリルの方へと向くと、マリルに無事の確認を取った。その後、ブイゼルはマリルを自分の後ろへと下げて、サトル達に威嚇し始めた。

「どうやら、あの二体仲間みたいだね」

ブイゼルは頬を大きく膨らませるとそのままサトル達の手前に「みずてっぽう」を放った。水しぶきにサトル達はブイゼルの攻撃に圧倒されてしまった。

「くっ!!? 頼む、クルマユ!!!」

「マユ!!?」

「クルマユ! 「くさぶえ」だ!!?」

クルマユの草笛の音色がブイゼル達の方へと奏でる。それと同時にブイゼルとマリルは水中へと潜っていった。

水中へと潜ったとしても完全に外からの音が聞こえなくなる訳ではないが、音だけでも小さくすることができる。これにより「くさぶえ」の効力を薄くさせる事が出来たため、二体は眠り状態を回避することができたのだ。

「潜って躲された!」

「そんなのあり!!!」

そしてブイゼルは尻尾の尾をスクリユーのように回し始めると、そのまま水中へと飛び出した。水を自分の身体に纏わせながらクルマユに体当たりを仕掛けた。

「クルマユ!!!」

ブイゼルの「アクアジェット」に吹き飛ばされたクルマユをサトルは自分の胸で受け止めた。マリルも水面から飛び出すと、ブイゼルと同時に「みずてっぽう」を放った。

二体の攻撃がサトル達に当たると思ったその時：

バシユユユユユ
!!!!!!!

【タネマシンガン】による攻撃が二体の攻撃をかき消したのだ。【タネマシンガン】が放たれた茂みからキモリがサトル達の前へと飛び出した。

「キモリ！」

「助かったよ。ありがとう！」

「キャモ!!？」

二人の声にキモリは頷いて返事を返す。すぐにキモリはブイゼル達に目をやると、そのまま前屈みになって戦闘態勢に入った。

ブイゼルも突然飛び出して来たキモリを睨みつけた。今にも二体は次の攻撃に入ろうとしたのだが…

「リル！」

「ブイ？」

「リルリル!!!」

「ブ…ブイ」

そんなブイゼルを見かねたマリルはブイゼルを止めようと説得に入った。マリルの

言葉にブイゼルも戸惑いながらも次の攻撃を繰り出すのを辞めた。

「なんか…様子が」

「うん、なんかソワソワしてるよね」

マリルの止め方にどこか慌ただしく感じたサトル達もフシギダネとクルマユをモンスターボールへと戻した。

ブイゼルはマリルに説得させられると、何かを渋った表情でキモリの方へと歩いて行った。戦う意思をブイゼルから感じなくなったキモリも警戒することを辞めた。キモリの前へと近づいたブイゼルはキモリにゆっくりと話しかけた。ポケモンの言葉はサトル達には分からないが、ブイゼルの話を聞いているキモリの表情がだんだんと曇っていく所から、何かまずいことが起きていることが分かった。

ブイゼルの話を聞いたキモリはサトル達の方へと向く。それを見たサトル達はキモリの元へと駆け寄った。

「キモリ、ブイゼル達の身に何かあったの？」

サトルの言葉にキモリは静かに首を立てに振った。

「ブイ！」

すると、ブイゼルはサトル達にこちらに招く仕草を行なった。

「ついて来て、って言ってるのかな…」

「たぶんそうだと思う」

ブイゼルはそのまま深く頷くと、マリルを連れて水端に沿って泳ぎ始めた。事情を悟ったサトル達もブイゼル達の跡を追って行った。

~~~~~

『録画準備完了！いつでも良いロトよ！』

「コーン!!?」

リーリエとタケシは、ムツクルの新しい技の練習をしていた。

「行きますよムツクル！「つばめがえし」です!!？」

「クル!!!」

「受け止めろ！ウソツキー!!？」

「ウソツキー!!？」

一気に急降下したムツクルはそのままエネルギーを溜め込んだ嘴でウソツキーに突進する。そのムツクルの攻撃をウソツキーは両腕を前にクロスしてガードした。

「よし！だんだんと様になってきたんじゃないか」

「はい！タケシのアドバイスのおかげです」

少しだけ後退りされたウソツキーの様子からムツクルのパワーに関しては申し分はない。

だが、「つばめがえし」は一気に急降下して相手の死角に入ってから攻撃を繰り出すという必中技である。つまりウソツキーが攻撃を受け止めることができたということは、ウソツキーにはムツクルの姿が視覚に入っていたことになる。

「リーリエ！タケシ！」

「サトル、カノン!!？、それにキモリも！」

ロトムが録画したバトルビデオを見ながら再度リーリエとタケシはもう一度練習に

入ろとすると、遠くの方から湖で出会ったブイゼルとマリルを連れて急いでリーリエとタケシの元へと走ってくるサトル達の影が見えて来た。

「さっき、あの辺りの水辺でこのマリルとブイゼルに出会ったんだけど…」

「そしたら、この子が…」

「これは大変だ。急いで治療をしよう！」

サトルの腕に抱きかかえられていたのは全身傷だらけのポケモンだった。その様子を見たタケシは急いでそのポケモンの治療へと移った。

『コイキング さかなポケモン

水タイプ

跳ねることしか出来ず、全ポケモンの中で一番弱いポケモンとして分類されている。なぜ跳ねているのかは研究者にも分からない』

傷ついたコイキングをタケシは素早く丁寧に治療していく。ブイゼルとマリルは心配そうにコイキングを見守っている。

「よし、あとはラッキーの「たまごうみ」で体力を回復させてあげれば終わりだ。頼んだぞ、ラッキー」

「ラッキー!!?」

ラッキーはタケシの指示の元に「たまごうみ」を発動する。ラッキーの回復技によりコイキングの傷は見る見るうち消えていく。あれだけ傷だらけになっていたコイキングの身体には擦り傷も一つも無くなっていた。

「コイキングは大丈夫でしょうか?」

「ああ…もう大丈夫だ! 暫くしたら元気になるだろ」

「よかったね。もう安心して大丈夫だよ!」

「コン!!?」

「キヤモ!!?」

「リル!!?」

「ブイ!!?」

コイキングの治療を終えたタケシは一瞬キモリの方へと向くと、すぐに鞆から別の傷薬を取り出した。

「キモリ、お前もなんかゲガしてるみたいだな」

三人もキモリの方へと目をやると確かに腕や足首に擦り傷がついていた。カノンの話からブイゼルとは直接戦ったわけでもないため、その時についた傷でもないと言する。リーリエはキモリから訳を聞こうとしたのだがキモリはリーリエと目を合わせようとはせずその質問に答えようとはしなかった。

「コ…ココ!!?」

「見て!コイキングが」

カノンの言葉にリーリエ達はコイキングの方へと振り向いた。目を覚ましたコイキングはゆつくりと静かに起き上がった。その後、ブイゼル達を見つけると元氣よくその場で飛び跳ね始めた。その様子をみたブイゼルとマリルも急いでコイキングの元へと向かった。

「これならもう心配しなくて大丈夫だ」

元気になったコイキングを見て、ブイゼルとマリルはリーリエ達に頭を下げた。

「いいって！お礼なんて〜」

「治療したのはタケシなんだけどね…」

誇らしげに言うカノンにサトルは静かにツツコミを入れた。

~~~~~

「じゃあね!!!」

ブイゼル達はもう一度リーリエ達にお礼を言った後、水路を渡って行ってしまった。

「カノン、よかったのゲットしておかなくて」

「いいよ。あの三匹の仲を引き裂くようなことなんて私には出来ないからね」

「ちよつと残念そうにカノンは首を傾げながらサトルに返事を返す。リーリエ達はそれぞれ荷物を手に取ると、目的地であるハナダシティに向かう準備をした。

「それでは行きましようか」

リーリエの合図で歩き出そうとしたが、ただ一人タケシは難しい表情でブイゼル達と別れた方へと目をやっていった。

「タケシ？」

リーリエはタケシに問いかけた。タケシはリーリエ達の方へと振り返ると、自分が思った疑問を話し始めた。

「あのコイキング相当なダメージを負っていたから、なんか気になつてな」

「確かに、いたるところ傷だらけだったもんね」

「どうやら、タケシはコイキングの怪我が何があつて負つたものか気になつていないようだ。あの怪我からリーリエ達はブイゼル達に何かの事件に巻き込まれたのではないかと考え始める。すると、何かを思い出したサトルはゆっくりと口を開いた。

「あの…もしトキワの森のペンドラーみたいに他方から来たポケモンがまたこうして暴れていたとして、ブイゼル達は元いた場所を追い出されていたとしたら…」

トキワの森での出来事、もしそうだとしたら大変なことだ。

「あの三匹の跡をつけていこうよ」

行ってもたつてもいられなくなったりリーリエ達はブイゼル達の跡を追って行くことにした。

~~~~~

ブイゼル達の跡を追って、暫く水路を沿って歩いて行くと大きな川岸に辿り着いた。そこには数多くの水系ポケモン達が集まっていた。

「ハハハ…」

リーリエ達は茂みの影からその様子を伺っていた。すると、水ポケモン達は一対一にバトルを始めた。その中にはさつきリーリエ達と別れたブイゼル達の姿もあった。ブイゼルも自分より体の大きいポケモンシザリガーとバトルを始めていた。

そんな中、ポケモン達のバトルが繰り広げられている奥に岩場に腰を下ろして座っている一体のポケモンの姿がリリーリエ達の目に止まった。

「あのポケモンは」

ロトムは素早くそのポケモンの写真を撮って解説を始めた。

『ニョロボン おたまポケモン

水・格闘タイプ

強靱な筋肉を持つ。太平洋を休むことなく泳ぎ続けることが出来る。ニョロボンの真似で泳ぎを学ぶ子供も多い』

ニヨロボンの合図にバトルは始まり、バトルは終え、その繰り返しである。それを見たタケシはここがどのような場所なのかが分かった。

「わかったぞ。ここはこの辺りに住む水系ポケモン達の道場みたいところだ」

「それじゃあ、ここでお互いに強さを磨きあっているってことなんですね」

「すごい。私こんなの初めて見たよ」

人間が立ち入ることは決して許されないこの野生ポケモン達の緊迫とした雰囲気の中でリーリエ達はブイゼル達の方へと視線を変えてみると…

「ブイブイブ!!?」

「ココツ!!?」

「ブイブウ!!?」

ブイゼルとコイキングは何やら揉めているように見えた。どうやら、組手に参加しようとしているコイキングをブイゼルとマリルが止めているようであった。

「当たり前だ。まだ回復しきってないのに…」

「コイキング!!!」

「コーン!」

「ちよっ!リーリエ!!!」

見ていられず、その場を飛び出したリーリエはコイキングの元へと駆け寄った。だが、いきなり人間が侵入してきたことに驚いたニョロボンは鳴き声で周りのポケモン達を集めた。ニョロボンの司令に気づいたポケモン達は各々の訓練を一時中断すると、リーリエに対して威嚇し始めた。それを見たタケシ達も慌ててリーリエの元へと駆け寄った。

「違うんだニョロボン！俺たちはここを荒らしにきたんじゃないんだ」

タケシの言葉に耳を貸そうとしないポケモン達。だが、ブイゼルとマリルとコイキングは必死にリーリエ達は危害を加えるような人達ではないことを伝え始めた。コイキングの治療の痕跡も見せてはニョロボン達を説得させる。事の様子が分かったニョロボンは威嚇しているポケモン達を引き下げた。

「分かってもらえたみたいだな」

「リーリエも！コイキングが心配なのは分かるけど」

「ご……ごめんなさい」

「コーン……」

先走った行動に反省するリーリエを前にそれでもコイキングは組手に参加しようとしていた。

「ダメですよコイキング！まだ怪我は完全に治っていないのですから！」

「なんで、そんなになるまで…」

『ここは、このロトムにお任せロト!』

事情を聞こうとロトムはコイキングに話しかける。ロトムもまたポケモン。それをヒントにロトム図鑑には新たにポケモン翻訳機能が内蔵されたのだ。

『そういうことロトね』

「ロトム。コイキングは何て言ってるの?」

『コイキングはここを通りかかるトレーナーに何度も出会すことがあるロト。だけどコイキングだからという理由だけで誰にも相手にされない。それが悔しくて何としても強くなるためにここで必死にトレーニングしているみたいなんだけど…』

「ブイブイ」

『張り切りすぎて、大怪我をすることがただ絶えないとブイゼルは言っているロト』

年々、ポケモン研究員は新たに発見されたデータによって今まで図鑑に明記されていたポケモンの生態文の変更もいろいろと行なってきたのはいるが、コイキングの最弱という肩書きはいまだに消えないでいる。実際、新型のポケモン図鑑として開発されたロトム図鑑にもその説明が記載されているぐらいだ。

「まあ、見た目の判断で弱いと決めつけられて傷つくのは分かるんだけど…」

「こんなトレーニングを続けると強くなるどころか身体を壊しちゃうよ」

「ココツ…」

そんなコイキングの様子をみたリーリエはある提案をみんなに提示した。

「それでしたら、わたくし達も修行のお手伝いをさしてあげたらどうでしょうか？」

「リーリエ？」

「わたくし…なんだかこの子の事ほっておけなくなってしまうましたし…ど…どうでしょうか？」

少し自信なさげに答えるリーリエであったが、彼女の意見に反対する者はいなかった。それどころかここにいるニョロボン含む野生のポケモン達もみな賛同していた。

「リーリエ！それ、ナイスアイディアだよ！」

「そうだな。ちょうど、リーリエのムツクルも特訓中だったわけだし。傷ついたポケモンの治療は俺に任せてくれ」

「ラツキー!!？」

「キャモ!!？」

「キ…キモリ!!？」

「クルツ!!？」

「ムツクルも!!？」

「あはは！リーリエのポケモン達はみんなバトル好きだよね♪」

キモリもムツクルも体を大きく動かしてはいつでもバトルができるようにストレッチを始めた。すると、その様子を見たブイゼルはキモリに近づくと拳をキモリの前に突き出した。

「ブイツ!!?」

「キャモ…」

二人はやる気満々だ。キモリのトレーナーとしてリーリエもブイゼルに勝負を申し出た。

「分かりました。ブイゼル！手合わせお願いしてもいいですか？」

もちろんと、ブイゼルは首を縦に振った。思いっきりバトルができるようにリーリエ達は河岸へと移動した。さっきまで組手を取っていた野生のポケモン達もキモリとブイゼルの戦いを見学しようとするの木の腰を下ろしていた。

「よく見ておくんだぞ。他のポケモンのバトルをみるのも立派な修行だからな」

「ココツ!!?」

タケシの教えをしつかりと聞いたコイキングも今から始まるバトルを目を凝らしてみようとする。

「キモリ！【タネマジガンです】!!?」

「キャモ!!?」

「ブー！」

先制攻撃を繰り出したキモリの「タネマシンガン」がブイゼルに向かって放たれた。無数に迫ってくる種の弾丸をブイゼルは「みずてつぼう」で全て撃ち落とした。その後、すぐさまブイゼルは尻尾をスクリューのように回し始めると周りの川水を自分の周りに纏わせ、キモリに向かって突進する。ブイゼルの「アクアジェット」が炸裂した。

「キヤモ！」

「大丈夫ですか!?!」

「キヤモ」

効果はいまひとつなため何とか耐えたキモリであったが、すでに頬袋を膨らませてパワーを貯めていたブイゼルの「みずてつぼう」がキモリに目掛けて放たれた。

『凄いパワーの「みずてつぼう」だロト!』

「[でんこうせっか] !!?」

キモリは「[でんこうせっか]」のスピードに乗ってブイゼルの攻撃を瞬時に躲した。そのままブイゼルに突っ込んでいくキモリに、ブイゼルは同じ先制技「アクアジェット」で迎え撃つ。迎え撃つた両者の攻撃は爆風の反動とともに後退する。

「はいーそこまでー!」

タケシの合図により、キモリとブイゼルのバトルは引き分けに終わった。

「頑張りましたねキモリ。ありがとうございます。グイゼル！」

バトルによって、互いの力を認め合ったグイゼルとキモリは握手を交わした。力を出し切った二体はとても満足気な表情をしていた。

「よし！次は…」

次の練習を始めようとしたその時：

ガツシヤヤヤヤ  
!!!!!!!

「なんだー！」

音がした方へと振り返ると、木々を薙ぎ払いながらこちらに進んでくるサイホーンの形をしたメカが現れた。

そのメカはリーリエ達の前に停車する。コックピットが開き出すとその中からは見覚えのある二人組が現れた。

「なんだかんだと聞かれたら」

「答えないのが普通だが」

「まあ！特別に答えてやろう」

「地球の破壊を防ぐため」

「地球の平和を守るため」

「愛と切実な悪を貫く」

「キュートでお茶目な敵役」

「ヤマト!」

「コサブロウ!」

「宇宙を駆けるロケット団の二人には」

「シヨッキングピンク桃色の明日が待ってるぜ」

「なーんてな!」

「ボツツ!!?」

現れた二人組にリーリエとカノンは

「ヤマト!!」

そしてサトルとタケシも

「コサンジ!!」

声を揃えて二人の名を叫んだ。

「違うコサブロウだ!!!名乗っているだろ!!!」

いつものように名前を間違えられたコサンジ：いやいやコサブロウはリーリエ達にツツコミを入れた。

「お前達！まだこんなことやっているのか！」

「あら、久々にみる顔もあるわね」

「何を言い出すかと思えば、我々はロケット団！滅ばぬ限り悪事の道突き進むのは当然であろう」

『それよりも何ロト！そのメカは!!!』

「これか！これはルンバ博士が…」

ピリッツ

突如、無線が鳴る。

ピッ

「もしもし」

『ナンバである!!!』

「……」

「ナンバ博士に作ってもらったんだよ」

「それよりも何しにここへ来たんだ！」

「それはサンバ博士が…」

ピリッツ

再び鳴る。

ピッ

『ナンバである!』

「……。」

「ナンバ博士が水ポケモン達の生態について調べたいと頼まれたから、この水ポケモンを全部いただきにきたんだよ」

今回のロケット団の目的はこのポケモン達の捕獲と聞いたリリーエはシロン達を前に出して身構えた。

「そんなことさせません!」

「なくに言ってるの?今回私たちが狙っているのは野生のポケモンよ!人のポケモンじゃないわよ」

トレーナーの資格を得た者が野生のポケモンを捕獲するのは保護施設エリア以外でなら許されている。だが、ポケモンを悪事として扱っているロケット団となれば意味が違ってくる。

「だけど、ロケット団みたいな悪い人達に渡ってしまうのであれば話しは別だね」

「そうよ!それにそのボンバ博士に何を言われたとしても……」

ピリッ

鳴る。

ピッ

「パープルジャリガール！あんたによ！」

カノンはヤマトから無線機を受け取った。

『ナンバである』

「……。」

ナンバ博士はどんな耳をしているのだろう。ここにいる全員がそう思っているに違いない。

「その……ナンバ博士に頼まれたからって、こここのポケモン達がロケット団なんかが悪用されてたまるものですか！」

カノンはヤマトから渡された無線機をヤマトに投げつけながらそう言い放った。

「そうか！なら、力づくで止めてみる！」

「とおう!!」

メカの中へと入ったロケット団は水ポケモン達の捕獲に掛かった。メカの口から大きな網が発射されニョロポンを含む他の水ポケモン達はその網に捕らえられてしまった。

「ああ！ポケモン達が!!!」

「ブイイイ!!」

みんなを助けるべくブイゼルは「アクアジェット」でメカに突進する。だが、頑丈なメカにそのパワーは跳ね返されてしまい後ろへと後退する。

「ブツ!!」

「ダメだよブイゼル!」

「ブイ?」

もう一度、向かって行こうとしたブイゼルをサトルは呼び止めた。

「相手はポケモンじゃないメカなんだ。力任せに行った所で勝算はない。ここはみんなで協力し合わないとダメだ!」

「ブイ…」

サトルの言葉にブイゼルは攻撃しに行く事をやめた。ロケット団はリーリエ達のポケモンも奪おうとリーリエ達に向かって前進してやってくる。すると、足元に目をやったサトルはある策を思い浮かべた。

「ブイゼル! マリル! あのメカの足元に「みずてつぼう」だ!」

『ピピツ!!? 一体どうするつもりロトか?』

「お願いだ!」

サトルを信じてマリルとブイゼルは「みずてつぼう」をメカの足元に目掛けて放った。

水の勢いだけであのメカは止めることは出来ず、メカはそのまま一直線に向かって行く。

「そんな攻撃効くわけないでしょ」

「無駄な抵抗はもう辞めるんだなあ……つと！」

するとメカは地響きを鳴らしながら空回りし始めた。いきなりの事にロケット団は慌ただしくなる。

「なになに！……どうなってるのよー！」

「ダメだ！……操縦がきかない！」

メカに乗っているため足元に目をやれないロケット団には何が起きたかわからないが、リーリエ達にはその原因をしつかりと目で捕らえていた。

ここの土は水辺に近いこともあって湿った柔らかい土で出来ている。そこに水をかけてやることで水を多く吸収してしまったことに泥が生まれて、メカはそのぬかるみにはまって動けなくなってしまうのだ。

「そうか！……これが狙いだったのか！」

「流石！サトル♪よっし！フシギダネ！〔はっばカッター〕でロープを切るのよー！」

「ダネ！！？」

ロケット団が動けない隙にカノンにはフシギダネに網を切るよう指示を出す。この葉

の刃で網を切り、ニョロボン達は急いで脱出する。全員の無事を確認したニョロボンは全エネルギーを集中させた拳をロケット団のメカに向かって強烈な一撃を食らわした『ニョロボンの【きあいパンチ】 ロト!』

ニョロボンの一撃でロケット団のメカは操縦不能となってしまった。動かないメカを捨ててロケット団はコックピットから姿を現わす。

「よくもやってくれたわね!」

「こうなったらポケモンバトルだ!」

「出てこい! グランブル!!?」

「ツポツポ!!? お前も行け!」

「グラ!!?」

「ボツツ!!?」

メカが壊れたぐらいで引き下がる二人ではなかった。ロケット団は意地でも水ポケモン達を根こそぎ奪う気だ。

「シロン! 行きますよ」

「コーン!!?」

「ココツ!!?」

「コイキング?」

ロケット団と戦おうと前に出たリーリエとシロンにコイキングは自分が行くと跳ねてはアピールする。自分達の住処を荒らそうとしたロケット団を許せないのであろう。コイキングの想いを知ったシロンもここはコイキングに任せると後ろへと後退する。リーリエはコイキングとコンタクトを交わすとコイキングを前に出して戦闘体勢へと入った。

「一緒に戦いましょう！コイキング！」

「ココツ!!?」

「コイキングに何が出来ると言うのよ！グランブル！「たいあたり」!!?」

「グラツ!!?」

「ココツ!!!」

「続けて「かみつく」攻撃よ!!?」

「グラアア!!!」

グランブルの体当たりを受けてコイキングは後ろへと吹き飛ばされてしまった。陸地に跳ねられ身動きがうまくとれないコイキングにグランブルは強靱な顎でコイキングを噛みつきにかかった。

「コイキング！「はねる」です!!?」

「ココツ!!?」

「アツハハハ!!!」

「はねる」をした所で！」

「何が起きるわけでも…」

何かを思いついたリーリエの指示でコイキングは「はねる」を繰り返した。「はねる」はダメージも与えられないし、何の効力もないという技ではあったのだが…

「やったあ!!!」

「何が起きたあああ!!!」

噛みつきこうと前乗めりになったグランブルの顎下に向かってコイキングは力一杯跳ねると、そのままグランブルを空中へと吹き飛ばしたのだ。吹き飛ばされたグランブルはコイキングと共に空高くにまで昇っていく。跳ねることしか出来ないと言われ続けているコイキングのジャンプ力に驚愕した瞬間であった。

『リーリエ！あのコイキング「とびはねる」が使えるロトよ！』

「わかりました！コイキング「とびはねる」!!!」

「ココツ!!?」

ロトムがスキャンしたコイキングのデータからリーリエはコイキングに技の指示を送った。空中で身動きがとれないグランブルに向かって、コイキングは一気に急降下して体当たりを食らわせた。技が入ったグランブルはそのまま地面へと叩きつけられた。

「グランブル!!!」

考えもしなかったことにヤマトは動揺を隠せないでいた。

「ツボツボ【ヘドロばくだん】だ!!?」

「フシギダネ!!!」

状況がまずいと感じたコサブロウはツボツボにフシギダネに向かって攻撃の指示を出す。ツボツボの攻撃がフシギダネに向かっていくと、何処からか放たれた【みずてつぼう】がツボツボの【ヘドロばくだん】を打ち消しフシギダネを守った。【みずてつぼう】が放たれた方へと振り向くと、そこにはマリルがいた。

「ありがとうマリル!」

「リル!」

お礼を言われたマリルはカノンに向かって笑顔で返事を返した。

「ツボツボ! 【ジャイロボール】だ!!?」

「ボツツ!!?」

「ブイゼル! 【アクアジェット】だ!!?」

「ブウウ!!?」

ツボツボの【ジャイロボール】とブイゼルの【アクアジェット】がぶつかり合う。押し合いはブイゼルに軍配が上がり、ツボツボはそのままぬかるんだ泥へと飛ばされた。

「マリル！」「みずてつぼう」！！？」

「リル！！？」

「だああ!!!ツボツボ!!!」

メカと同じように水を浴びたツボツボの体はぬかるんだ泥にはまって身動きが取れなくなってしまうた。

「グランブル！」「かみつく」攻撃！！？」

「グラ…」

「どうした？グランブル！」

『グランブルは「とびはねる」の追加効果で麻痺して動けない口ト！』

「コイキング！ツボツボに「たいあたり」です！！？」

「コオオオ!!!」

コイキングの行進の体当たりをツボツボに食らわせるとそのまま吹き飛ばされたツボツボは後方にいたグランブルと衝突した。硬い殻を持つツボツボとぶつかったグランブルは目を回してしまった。

「マリル！」

「ブイゼル！」

「【みずてつぼう】!!!」

目を回している二体に向かってマリルとブイゼルの両方の「みずてつぼう」が炸裂した。二体はそのままロケット団に向かって吹き飛ばされた。

「今だラッキー！」「たまごばくだん」!!?」

「ラッキー!!!」

ロケット団のメカに向かって、ラッキーの光り輝く大きなたまごが迫っていく。

「うわああああ」

ラッキーの「たまごばくだん」を撃ち込められたメカはそのまま爆発した。爆発に巻き込まれたロケット団はそのまま空高く吹き飛ばされて行った。

「くっっ！またしてもか！」

「覚えておきなさいよ!!!」

「やなきもちいい!!!」

キラッ

水平の彼方へと飛ばされたロケット団を見送ったリーリエ達はみんなの無事を確認

する。

「みんな無事のようによかったです」

バトルを終えたコイキングはリーリエの近くの岸まで泳いで渡ってきた。

「ココツ!!？」

「凄かったですよコイキング! 貴方はもつと自信を持っていけば大丈夫ですよ」

「コーン!!？」

「クル!!？」

「キャモ!!？」

「コツココ!!？」

初めて言われたその言葉にコイキングの目からは涙が滲んでいた。その後、コイキングは何度もリーリエにお礼を言い続けた。

「マリル。さつきは助けてくれてありがとうね」

「ダネツ!!？」

「リルル!!？」

「もうくすぐつたいよ♪」

カノンとマリルもすっかりと仲良くなったようだ。その光景をリーリエ達は微笑ましく見ていたのであった。

~~~~~

「それじゃあ、行こうか」

ポケモン達に別れを告げたリーリエ達は荷物を持って出発しようとしていた。

「リルル!!?」

「マリル?」

そんなリーリエ達の跡を追いかけるようにマリルはカノンの元へと駆け出して行った。急な別れに寂しく感じたのか。マリルはカノンの足にしがみついたまま動こうとしない。そんなマリルの様子にカノンはしゃがみこんで、視点をマリルの目線の高さに合わせた。

「だったら私と一緒に来ない?マリル?」

「リルル!!?」

マリルはその場に飛び跳ねながら元気にカノンに返事を返した。

「ブイブイ!!?」

「ブイゼル?」

「ブイ!!?」

「もしかして、僕に?」

すると、ブイゼルもまたサトルの元へといくと、自分も連れて行って欲しいとアピールする。

さらなる強さを求めて、いろいろなポケモン達と戦ってみたくなったブイゼルはロケット団での確かな判断力で指示を出したサトルを見て、サトルの元についていくことを決めていたようだ。

「よっし! わかった!」

「ピツカア!!?」

カノンとサトルはモンスターボールを取り出すと、マリルとブイゼルはそのまま開閉スイッチを押して、自らボールの中へと入って行った。

「マリル! ゲットだぜ♪」

「ヒココツ!!?」

「宜しく! ブイゼル!」

「ピツカア!!?」

「カノン! サトル! おめでどうございます」

「やったな! 二人とも」

二人はモンスターボールからマリルとブイゼルを出して、もう一度顔合わせをした。すると、二体はコイキングの元へと駆け寄ると、一緒に行こうと言っているのか。二体はコイキングに手を伸ばしていた。それを見たリーリエもシロンと一緒にコイキングの元へと駆け寄った。

「コイキング。良ければ貴方の強くなりたいたいという願いわたくしと一緒に叶えて行きませんか?」

「ココツ!!?」

「どうでしょうか」

「コーン!!?」

「ココツ!!!」

「ありがとうございます。一緒に頑張りましょう!」

リーリエもモンスターボールを取り出すと、コイキングの額に開閉スイッチを押した。コイキングもそのままモンスターボールの中へと入って行った。

「コイキング! ゲットです!」

「コーン！」

「リーリエもおめでとう！」

「一気に仲間が増えたな」

「はい！」

コイキングもモンスターボールから出すと、リーリエ達はコイキング達と共にニョロボン達が住む川岸と別れを告げた。

「さようなら！みんな」

「元気でね！」

「ココツ!!!」

「リルル!!!」

「ブイブウ!!!」

ニョロボン達も手を振りながらコイキング達の旅立ちを見送った。新たな仲間と共にリーリエ達はハナダシティへと旅立ったのであった。

・細くも樫の木

みかけは貧弱そうに見えるけど強靱な意志を持つ。

第十八話 オツキミ山の独裁者

次の街ハナダシティに向かっているリーリエ達。今日はもう夕暮れ時、オツキミ山付近のポケモンセンターで宿を取ることになった。

「もうすぐポケモンセンターに着く頃だ」

「やっとかく。僕はもうクタクタだよ」

「サトルはもう少し体力つけたほうがいいと思うよ」

いつも通りカノンはサトルを茶化していると…

「コーン？」

何かの気配に気づいたシロンは辺りを見渡し始めた。

「どうしたのですか、シロン？」

「ヒッコ」

「ピカ？」

「ヒコザル？」

「ピカチュウもどうしたんだ？」

シロンに続いてヒコザルとピカチュウも辺りを見渡し始める。三匹はリーリエ達か

ら離れると、茂みの奥の方へと入って行った。

不思議に思いながらもリーリエ達もシロン達の跡を追いかけては茂みの奥へと入って行った。すると、そこには二体のポケモンが身を寄せていた。

「ピイとピツピだー！」

『これは、さつそくデータアップロードだロト！』

サトルがそのポケモン達の名前を言うと、すかさずロトムはそのポケモン達の解説に入った。

『ピイ ほしがたポケモン

フェアリータイプ

そのシルエットからお星様の生まれ変わりだと信じられている。ピイをよく見た場

所には流れ星が落ちてくると噂されている』

『ピッピ ようせいポケモン

フェアリータイプ

ピイの進化系、満月の夜には仲間を集めてダンスを踊る。月の光を浴びて浮かぶこともできる』

「だが、なんでピイとピッピがこんな所に？」

『たしかに、ピイとピッピは主にこの先にあるオツキミ山の周辺を住処にしているはずだ。でも、ここからオツキミ山までまだ少し離れてるロト！』

そう、ピイとピッピは滅多に人前に姿を現さないとされている珍しいポケモンだ。だから、タケシとロトムは自分たちの住処から離れた場所にいるピイとピッピに対して疑問を浮かべているのだ。

「コーン？」

「ピイ…」

「ピッピ…」

「ねえ、なんか元気がないみたいだよ」

「これはオツキミ山で何かあったのかもしれないな」

「ポケモンセンターに着きましたら、ジョーイさんに聞いてみましょうか？」

「そうだね。ジョーイさんなら何か知っているかもしれない」

「ジョーイさんには俺が聞く！」

「はい…はい…」

シロン達に付き添ってもらいながらピイとピツピを連れてリーリエ達はオツキミ山のポケモンセンターへと急いで向かった。

「見えてきましたー！」

「おお!!!あの方はー！」

ポケモンセンターの近くまで行くと、急にタケシは何かを見つけたかのようにポケモンセンターの方へと全速力で走り出した。リーリエ達も目を凝らしてみると、ポケモンセンターの前にはジュンサーさんの姿があった。

「ジュンサーさん!!!」

いつも通り、タケシはジュンサーに口説きにはいる。

「もう自分の心は貴方に逮捕されてしまいました」

ズシャン!!!

「しびれびれ〜」

「ケツケケケケ♪」

『全く懲りない口ト』

グレッグルに引きづられるタケシを置いて、リーリエ達はジュンサーのもとへと向かう。

「こんにちは、ジュンサーさん。あの…何かあったのですか？」

「それが、じつはね…」

「ジュンサーさん!!」

声がした方へ向くと、オツキミ山から二人のトレーナーが慌ただしくオツキミ山から走ってきた。

「あいつ強すぎて俺たちの手に負えないですよ」

「すみませんが、他をあたって下さい」

そう言い残してトレーナー達は急いでポケモンセンターの中へと入って行った。

あの二人の様子を見てオツキミ山で何かあったことは確かなようだ。ジュンサーは改めてリーリエの質問に応えた。

「それがね。オツキミ山を独占しているポケモンが出て来たの」

「オツキミ山を!!!」

「そうか…それでピィやピッピはそいつに恐れてオツキミ山から降りて来たのか」

「タケシ！復活はやつ!!」

「やあ！」

毒の痺れから解放されたタケシも加わった所でジュンサーはさらに説明し始める。

「それでね。腕の立つトレーナーにそのポケモンの捕獲をお願いしているのだけど、そのポケモンがなかなか強くてね。それに他のポケモンと群れを成しているからゲットしに行ったトレーナーたちはみんな返り討ちにあってしまふの」

「そのポケモンはどんなポケモンのですか？」

ジュンサーから聞いたそのポケモン達の名前をカノンとサトルはポケモン図鑑で調べ始めた。

『ズルツグ だつぴポケモン

悪・格闘タイプ

視線が合った相手にいきなり頭突き攻撃を仕掛ける。皮を首まで上げて防御の体勢を取る。ゴムのような弾力でダメージを減らす』

『ズルズキン あくとうポケモン

悪・格闘タイプ

ズルツグの進化系。縄張りに入つて来た相手を集団で叩きのめす。キック攻撃でコンクリートブロックを破壊する』

「ズルツグにその進化系のズルズキンか」

「怖そうなポケモンですね」

「グループを作っているのなら、おそらくこの進化系のズルズキンがリーダーであることは間違いないな」

「じゃあ、この親玉を倒せばいいってこと？」

「そうだね」

ポケモン図鑑から目を離れたリーリエ達はオツキミ山の方へと振り向いた。

さっきのトレーナー達の様子からズルッグとズルズキンのレベルは相当なものであることが分かった。ジュンサーからの話でも何人者のトレーナーが逃げ帰っていると聞いている。そんなポケモンに勝てるであろうか。もし、また無暗に突っ走ってニビシテイでの科学博物館の時みたいに太刀打ちできなかつたらどうしようとしてリーリエ達は考えてしまった。

「コーン……」

「シロン」

シロンは寂しげな表情でリーリエを見つめている。ふと、パイとピツピの方にも目をやると二匹とも身体を震わせながら怯えていた。

「やはり……放っておくわけには行きません」

そう呟くとリーリエはカノン、サトル、タケシと目を合わせる。三人もリーリエと同じ気持ちのようだ。リーリエの考えに賛同し、ゆつくりと頷いた。

「ジュンサーさん！わたくし達に任せて貰えないでしょうか！このまま見過ごすわけには行きませんか」

『そうロトよ！これはカントーを巻き込むほどの大事件ロトよ！引き下がるわけにはいかないロト！』

「いや、そこまでにはなつてないでしょ♪」

これから強敵と戦うというのにロトムとボケとカノンのツツコミで一気に緊張感が抜けてしまった。だけど、逆にみんなの気持ち軽くなったのでよかつたと思う。

「分かりました。みなさんご協力感謝致します」

リーリエ達は一度ポケモンセンターでポケモン達を回復させ、最低限の準備を整えたうえでオツキミ山の中へと入って行つた。

~~~~~

オツキミ山は流れ星が頻繁に観測される山と言われ、ポケモンの進化に必要とされる月の石がよく発掘されることでも有名である。

内部には何処にあるか分からないがおつきみ広場と呼ばれる空間がある。そこには

巨大月の石が供えられており、満月の夜になるとその周りをピィやピツピ、ピクシー達  
が神様を祀る踊りが行われるのだ。その様子からピツピ達は宇宙から来たポケモンで  
はないかという説が出回ったのだ。

「まずはズルズキン達の生態や弱点をしっかりと分かっておかないといけないよね」

「ロトム。先ほどの凶鑑のデータからズルズキン達について調べてもらえませんか？」

『お安いことだロト！』

リーリエ達はまずオツキミ山を探索しながらズルズキン達の情報を集めた。

『ズルツグとズルズキンは何方とも悪・格闘タイプ。この二体に有効なタイプは共通し  
ているロト！つまり、飛行タイプ。格闘タイプ。フェアリータイプが有効ロト！』

「ありがとうございます。ロトム！それでしたら、わたくしは飛行タイプのムックルで  
すね」

「俺は格闘タイプのグレッグルだ」

「私はフェアリータイプのマリルがいるよ♪」

「僕には有利なタイプはいないけど、サポートするぐらいなら大丈夫だよ」

「お願いねサトル！トキワの森の時みたいに頼りにしてるんだから！」

それぞれが繰り出すポケモン。そして各々の役割を決めながら、リーリエ達は洞窟内  
を探索して行く。

「コン?」

「どうしたのですかシロン?」

「ねえ!何か聞こえないか?」

すると、いきなり真上から空気を切る音が聞こえて来た。その音に気づいたリーリエ達は見上げると、何がこちらに飛んでくる影が見えた。その影はもうスピードでリーリエ達の手前へと落ちると、その衝撃でリーリエ達は思わず尻餅をついてしまった。

「きゃあああ!!!」

「何だ!!!」

「何かが飛んできました!」

ゆっくりとその場に立ち上がると、目を凝らして一面に舞う砂煙の中に浮かび上がる影を凝視する。その影の正体はリーリエ達が探していたポケモンだった。

『ビビッツ!!!ズルッグだロト!』

飛んで来た正体はズルッグだった。突然の事に驚いてしまったが、驚いている暇などリーリエ達にはなかった。見ると彼方此方にそびえ立つ岩山の後ろから、次々にズルッグ達が顔を見せていた。そしてリーリエ達の方へと一斉に睨みつけてきた。

「早速、囲まれたか」

「ズキイイイイ!!!」

数十匹はいるであろう。あまりの数の多さにサトルはあらかじめこの場合の対策として一体のポケモンをモンスターボールから繰り出した。

「クルマユ！『くさぶえ』だ!!?」

「マユ!!?」

真つ向から攻めるのは勝算は低いと判断したサトルはクルマユの草笛で眠らせることにした。クルマユの草笛によりズルツグ達は次々と眠っていく。

「おお!!!困った時の草笛だ♪」

「これでしたら、心配ありませんね」

安心したリーリエ達であったが、右端の岩陰の方から飛び出したズルツグがクルマユに向かって頭突きを仕掛けた。

「クルマユ!!!」

「えっ！ちよつと起きるの早くない!!?」

攻撃を仕掛けてきたズルツグの方へと目を向けてみると、目を覚ましていたのは一体だけではなかった。草笛によってまだ眠っているズルツグもいれば、すぐに目を覚ましては攻撃の体勢をとるズルツグもいた。それを見たタケシは何かを思い出したようだ。

「そうか！『だっぴ』か!!?」

「だっぴ?」

「ズルツグの特性だ。暫く経つと自身の状態異常を自力で回復させることが出来るんだ」

「それって…つまり…」

「ズルツグに対して眠り攻撃は余り期待できないということになります！」

「そんなく!!!頼みの草笛が!!!」

その言葉通りズルツグ達は一齐にリーリエ達に向かって突進していく。

「ピィィ!!!」

「あつ!ピィ!ピツピ!」

ズルツグ達の攻撃に恐怖を感じてしまったピィとピツピはその場から一目散に逃げてしまった。

「ダメだ!いったん引こう!!!」

マシンガンのように続けざまに飛んでくるズルツグ達の頭突き攻撃に為すすべがなく、リーリエ達は一旦その場からすぐさま退散することにした。

~~~~~

「ハア…ハア」

「なんとか…振り切ったね」

ズルツグ達が追いかけてこないことを確認した後、岩山を背にして休息を取ることにした。ズルツグ達の攻撃を切り抜けたリーリエ達はもう一度体制を立て直すべく作戦を考え直すことにした。

「どうしましょう。あんなに数のズルツグ達を一度に相手にするのは、相当厳しいと思います」

「これは…親玉のズルズキンを倒すしか手がないな」

「だけど、それこそズルズキンと対峙している時に仲間を呼ばれたら。それこそ大変だと思うよ」

「くっく!!せめてズルツグ達の考えていることが分かれば苦労しないんだけどなあ」

「まあ、それが出来たら確かに苦労はしないとと思うけど…」

サトルのその言葉にリーリエ達は全員一斉にロトムの方へと振り返る。

『えっ?』

~~~~~

『いや〜♪いい天気ロトね〜』

再びロトムは愛想良く振舞いながらズルツグ達の方へと近づいていく。その様子を岩山の影からリーリエ達は覗いていた。

どうやら、ポケモンの言葉の通訳機を内蔵されているロトムならズルツグ達がオツキミ山を潜伏した理由を聞けるかもしれないと考えたようだ。

「ロトム…大丈夫でしょうか」

「コロン…」

「わ…分からないけど、もしロトムがズルッグ達から暴れまわっている理由を聞き出すことができたなら、すぐに解決できそうだけどね」

「まあ、そこはロトムに任せるしかないな」

「頑張れ。ポケモン通訳機♪」

その言葉通り、だいぶわざとらしいのであるが、ロトムはズルッグ達に近づくと、すぐさま計画を実行に移した。

『君たちが好き好んで暴れまわるようなポケモンではないことは君たちのその純粹さに満ちた目を見れば分かるロト。さあ、何か困ったことがあればボクに遠慮なく話してみるロトよ』

すると、先ほどまで目を細めて警戒心を先立てていたズルッグ達であったが、ロトムのその言葉に落ち着きを取り戻したみたいだ。警戒するのをやめた一体のズルッグがロトムの方へと近づいて行つた。

「あれ？…なんか良い感じじゃない？」

透き通つたその目には邪神はいない。作戦は成功した。



『ピピツ!!?ボクの手には…負えないロト…』

ロトムの元へと駆けつけた途端、さつきと同じようにズルツグ達はリーリエ達の周囲を取り囲んだ。もう、話合いの余地はない。リーリエはシロンを前に出すと、すぐさま攻撃を仕掛けた。

「シロン！【こなゆき】!!?」

「コーン!!!」

格闘タイプのズルツグには効果はいまひとつであるが、今までのバトルの経験からパウアアップしたシロンの粉雪はズルツグ達を一齐に吹き飛ばすぐらいの威力にまで誇っていた。

シロンの人吹だけでも前方を数十体で固めていたズルツグ達は後方へと吹き飛ばすことができた。

この調子なら大丈夫だと安堵した。その時

!!!  
ズキイイイイイン!!!

洞窟内に突然として響き渡る鳴き声にリーリエ達は思わず身震いしてしまった。だが、それはリーリエ達だけではない。さつきまで敵意を表していたズルツグ達も互いの顔を見合わせながら焦り始めた。山彦のように響き渡った声は徐々に止んで行くと同時に、その声の主がリーリエ達の前に姿を現した。

『出たロト!!!』

リーリエ達の前に現れたのは、オツキミ山に入る前に図鑑で確認したもう一体。ズルッグ達を率いるそのポケモンであった。

「親玉の…ズルズキンだ！」

再び雄叫び上げたズルズキン。それと同時に主ポケモンのように吹き上げられたオーラに押されてしまい、リーリエ達は思わず後ずさりしてしまった。しかし、押されながらもすぐにサトルはピカチュウを前にカノンとタケシもそれぞれのモンスターボールを片手に取ると、一斉にポケモンを繰り出した。

「頼むぞ！ピカチュウ！」

「ピツカア！！？」

「お願い！マリル！」

「出てこい！グレッグル！」

「リル！！？」

「グー！！？」

「シロン！【こなゆき】です！！？」

「ピカチュウ！【10万ボルト】！！？」

「マリル！【みずてっぽう】よ！！？」

「グレッグル！【どくばり】だ！！？」

一斉攻撃を繰り出すシロン達にズルツグ達はその攻撃を躲すのに精一杯だった。変則的に向かってくる攻撃に、ズルズキンも自分の攻撃に移せないでいた。さつきとは打って変わってリーリエ達が優先し出している。

「いいぞ！みんな！」

次々に攻撃が決まって行くが

「ズキイイイ！」

凶に乗るなあ。と言わんばかりにズルズキンは再度雄叫び上げると、一瞬にしてシロン達の猛攻撃を一瞬にして腕を使って大きく一振りに打ち消したのだ。

やはり進化系であるズルズキンは他のズルツグ達よりも明らかにパワーが違っていた。さつきよりも鋭い目つきで前のめりに顔を突き出してきたその表情にリーリエ達に緊張が走る。

「えっ？」

そのズルズキンの表情に何かを感じたのか。リーリエの顔は徐々に雲がかかったのかのように青ざめていく。

「どうしたのリーリエ！」

それに気づいたカノンはリーリエの肩に手を置いた。

「はい。あのズルズキンから……」

「ズキイイイ！」

だが、リーリエの言葉を遮るようにズルズキンはシロン達に向かって攻撃を繰り出すべく猛烈な威圧を漂わせながら飛びかかってきた。

『来るロト！』

ドス黒いエネルギーを拳に纏うとズルズキンはシロン達にその拳を振りかざした。

「グレッグル！〔かわらわり〕!!?」

「ピカチュウ！〔アイアンテール〕!!?」

それに対抗すべく、ピカチュウとグレッグルは同時にズルズキンの手刀を自分たちの技で受け止めた。だが、ズルズキンのパワーによって二体はそのまま地面へと叩きつけられてしまった。叩きつけられた二体は立ち上がると、ゆらゆらとふらつき始めた。ズルズキンの攻撃に相当なダメージが入ってしまったからと思ったが、ピカチュウとグレッグルは千鳥足になっている様子からこれはダメージによるものではないと分かった。そう、二体は混乱状態に堕ちていたのだ。

「混乱してる！」

「【いばる】でも使ってきたのか!!?」

【いばる】ズルズキンは相手を混乱状態にさせる技があるならこの技があがるだろう。

だが、この技は相手を混乱状態にするだけでなく、相手をイラつかせ闘争心露わにし、攻

撃力までも上げてしまうというリスクもある技。だが見た所、二体の攻撃力は上がっている様子はない。「いばる」による技ではないのか。そんな事を考えている間に二体に向かつてズルズキンは再度攻撃を仕掛けた。黒いオーラを纏わせた一撃を決めて来た。

「ピカチュウ!!!」

「グレッグル!!!」

「なんだあの技は!!!」

「ロトム!あのズルズキン、なんて技使ってるの?」

次々に繰り出す意図のわからないズルズキンの攻撃。リーリエの指示にロトムはズルズキンのデータからそれに該当する技を調べ始めた。だが…

『からない…』

「えっ?」

予想だにしない答えが返って来た。

『分からないロトム!こんな事がありえるロトか!あのズルズキンが使っている技、どれもデータにないロトム!!!』

「それって…一体」

そんな事にサトルとカノンも自身のポケモン図鑑でズルズキンを調べ始めた。確かにロトムと同様、二人のポケモン図鑑でもあのズルズキンが使ってきた技が一つも当て

はまらないでいる。ありもしない事に理解が追いつかないでいる。そんなリーリエ達にズルズキンは容赦なく技を繰り出して行く。

「ム…ムツクル！お願いします！」

「クルツ！！？」

咄嗟に向かってくるズルズキンに格闘タイプと相性のいい飛行タイプのムツクルをリーリエは空かさずモンスターボールから出した。

「シロン！【ムーンフォース】！！？」

「ムツクル！【つつく】！！？」

二体の効果は抜群の技がズルズキンに向かって放たれる。ズルズキンはダメージを受けながらもムツクルに向かって飛びかかる。

「危ない！ムツクルが！」

「【かげぶんしん】で躲して下さい！」

いくつもの自分の分身がズルズキンの周りを包囲したが、ズルズキンは思いつきり回転して、分身ごと拳でムツクルを薙ぎ払った。

「ムツクル！！！」

地面へと追撃したムツクルをリーリエは急いで抱きかかえる。さらにズルズキンの指示の元、ズルツグ達の頭突きの嵐が巻き起こる。

『絶体絶命ロト!!!』

怒涛の攻撃を繰り返すズルッグに予想だにしない技を繰り出すズルズキンにリーリエ達は苦戦を申し立てられる。勝利を確信したズルズキンはリーリエ達を見下すようにして見ていた。だけど、負けるわけにはいかない。残りポケモン達も場に出そうとモンスターボールをかがげると：

「ズキイイイイ!!!」

「えっ? なになに?」

突然吹っ飛ばされたズルッグ達。その光景にズルズキンも目を丸くした。背後から何かの気配に気づいたリーリエ達は同時に振り返た。

「ピイにピッピ!」

「それにピクシーも!」

現れたのはズルッグ達の数に負けないぐらいのピイとピッピ。そしてピクシーだ。その中にはオツキミ山に行くまでに会ったピイとピッピもいた。

どうやら、先ほどのピイとピッピが仲間を引き連れてリーリエ達に加戦してきたのだ。自分たちの生まれ育ったここオツキミ山を護ろうと戦ってくれているリーリエ達の姿に自分たちも勇気を貰ったのであるうか。リーダーであるピクシーの合図に一斉に魅惑的な鳴き声をズルズキン達に向かって発した。

「これは…」

『「チャームボイス」ロト!!!』

フェアリータイプ技「チャームボイス」その技にズルッグ達は次々と吹き飛ばされて行く。中には、ピクシー達に向かって頭突きを仕掛けようとするが、声の壁に阻まれてしまい、届く前に再度吹き飛ばされてしまっていた。

それに効果は抜群の技だ。ズルッグ達には相当なダメージが入る。倒れて行く仲間たちを見ながら、どうする事も出来ないズルッグ達は一目散に逃げ出して行った。

「やったあ!!!」

「いやまだだ!」

喜ぶのはまだ早い。タケシの言った通りまだ一体のポケモンがまだリーリエ達の前に立ちほだかっていた。

「ズルズキンがまだ…」

「ズーキイイイイイイン!!!」

「リーリエ! 危ない!!!」

仲間を失ったズルズキンは自分のいま目の前にいるリーリエに向かって攻撃を仕掛けた。その攻撃を防ごうとムツクルはズルズキンに体当たりした。

「ムツクル!!!」

ムツクルは天井へと高く舞い上がるのと同時に

「クルウウウウ!!!」

ムツクルは洞窟内に響き渡るほどの鳴き声をあげた。そして!

「あっ!!!」

眩い光に包まれると、ムツクルは新たな姿。そして力を授かるうとしていた。一回り大きくなったそのポケモンは再び鳴き声を洞窟内に響き渡らせた。

『ムクバード むくどりポケモン

ノーマル・飛行タイプ

ムツクルの進化系。大きなグループを作って行動する習性がある。森や草原を飛び

回る』

「進化…ムクバード!!!」

進化と同時にムクバードは両翼を前に出し、威嚇し始めた。突然の進化にズルズキンも少しばかりか戸惑い、焦り始めているように見えた。その感情を振り払おうと、ズルズキンはムクバードに向かって飛びかかった。

ムクバードへと向かってくるズルズキンを前にリーリエは冷静にムクバードに指示を出す。その意図を察したムクバードもじつとズルズキンの方を見ながらリーリエの指示を待っていた。

「ムクバード！「つばめがえし」です!!?」

ここに来るまでずっと練習していた技。ムクバードは目にも止まらぬ速さで急降下すると、一気に嘴に風のエネルギーを貯め込みながらズルズキンの方へと攻撃を仕掛けた。ムクバードが煙のように消えたように見えたズルズキンは体勢を崩し、もう相手を見下す余裕などもすつかり無くなっていった。

「ムツクバアアア!!!」

「ズキイイイイ!!!」

ムクバードの「つばめがえし」がズルズキンの腹部辺りに決まった。

「決まった!!!」

『効果は抜群ロト!!!』

そのままズルズキンは後ろに聳え立つ岩山に思いっきり叩きつけられた。

「ズツ…ズ…ズ…ズ…ズ…ズ…」

流星に蓄積されたダメージが悲鳴を上げてきたようだ。一度は立ち上がるが、そのままふらつき始めると岩山を背にそのまま座り込んでしまった。ズルズキンからもう戦う力が残っていないと分かったりーリエはすぐに空のモンスターボールをバツクから取り出した。

「お願いいたします。モンスターボール!」

開閉スイッチが開き、ズルズキンはモンスターボールの中へと吸い込まれていった。完全にモンスターボールが閉まるまでのカウントダウンが始まる。ここまでの受けたダメージは大きい。出てこられたら真面に戦える体力がまだ残っているか難しい。そのまま収まってくれるか祈るしかない。そして…

カッチ!!?

祈りが通じた。完全に閉まった音が洞窟内に響いた。ズルズキンの捕獲に成功したのだ。

「や…やりました〜」

「やった〜」

無事にズルズキンをモンスターボールに収めたることが出来た。緊張が解け、脱力感が一気に出てきたリーリエ達はその場に崩れ落ちてしまった。

そして、ポケモン達を早くポケモンセンターへと連れて行くべく、リーリエ達は下山した。

~~~~~

「ご協力ありがとうございました！これで本来オツキミ山に生息しているポケモン達もこれで元の日常に戻れたはずです」

「いえ…」

ズルズキンの捕獲の成功をジュンサーに伝えた後、回復を終えたポケモン達を受け取りにジョーイの元へと向かった。ズルズキンに結構なダメージを負わされたピカチュウとグレッグもすぐに元気になるほど、シロン達は元気になっていた。

「みんな大した怪我を負っていなくてよかったです」

「うん！」

「ピッ!!!」

足元から聞こえた声に反応してリーリエとカノンはずと足元に視線を向けると、オツ

キミ山付近で出会ったあの時のパイとピツピがいた。

「あれ？この子達って…」

「あの時のパイだな」

それに気づいたサトルとタケシもリーリエとカノンの元へと駆け寄った。すると、パイはリーリエのスカートの裾を軽く引つ張ると今度はピツピが手をこちらに招く動作を行なった。その後、二体はポケモンセンターの入り口付近で足を止めると、もう一度リーリエの方へと振り向いた。

「ついてきてと言ってるのでしようか？」

リーリエ達はパイとピツピの跡を追うことにした。パイとピツピに連れられてオツキミ山の中へと入って行く。暫くして、中を歩いて行くと一つの大きな空間へと辿り着いた。

「これって…」

その中心に人一倍に大きな岩石が添えられていた。過去にここを訪れたことがあるタケシはその岩石が何なのかはすぐに分かった。

「これは月の石だ」

「月の石？？」

「それじゃあ、ここがおつきみ広場って言われる所なのか」

「ああ！ここでピッピ達はこの月の石の周りを輪になって神様を祈る踊りを始めるんだ」

タケシの説明通りピッピ達は月の石の周りで踊り始めた。満月の光がスポットライトのようにピッピ達と月の石を照らし始めると、その光に反応して月の石もより光輝き始めてきた。神秘的なダンスと月の光の神々しさにリーリエ達は見惚れてしまった。

「綺麗!!」

『タータアアップロードロト!』

「こんな光景に出会えるなんて！わたくし、とても感動しています」

「僕たちにお礼をしているのかな…」

「きつと、そうだろうな」

~~~~~

ピッピ達の神秘的なオツキミ山での夜が明け、リーリエ達はポケモンセンターで出発の準備を整えていた。

「ズルズキンはばっちり回復していますよ」

「ありがとうございます！ジョーイさん！」

治療のほかにくっつかの生体検査を行なったズルズキンはシロン達よりも一足遅くにジョーイから受け取った。

「それで、そのズルズキンはどうするの?」

「預けようにもジュンサーさんもないよね」

受け取ったのはいいが、すでにジュンサーはポケモンセンターを跡にしていた。てっきり保護施設へと預けられると思っていたのだがこの場合、ズルズキンをゲットしたのはリーリエとなるため、ズルズキンの主人はリーリエとなる。よって

「ゲットして貰いたかったから、このまま連れて行くのもありじゃないか?」

タケシの一言により決まった。ズルズキンは正式にリーリエの手持ちに加えることにしたのだ。

「そうですね!出て来てください!」

「ズキイ…」

モンスターボールから出たズルズキンは受けた傷も癒えてすっかり体力も回復していた。だが出てきたのはいいが、主人となるリーリエに背を向けてはうつすらとこちらを睨みつけているだけで、無愛想だ。

「あの…ズルズキーン!今日から貴方はわたくし達の仲間です。これから宜しく願いますね!」

「コ…ン」

「ムクバー!!?」

「キャモ…」

「ココツ!!?」

戸惑いながらも返事をするシロンとキモリ。逆に新たな仲間が増えて喜んでいるムクバードとコイキング。反応はそれぞれ違うが皆はズルズキンを歓迎しているようだ。リーリエもズルズキンと握手しようと手を差し伸べる。

「ズキイ!」

「あれ?」

だが、ズルズキンはその手を握ろうともせず、再びリーリエに背を向けてしまった。その態度にシロンは困り、キモリは苛立ちを立てていた。ムクバードとコイキングも啞然とした表情を浮かべていた。そんな四匹にリーリエも苦笑いで返した。ズルズキンの様子を見たタケシは優しくリーリエに語りかける。

「旅を通してこれから仲良くなつて行けばいいさあ」

「そうですね!みんな戻つてください!」

リーリエはシロンを残してキモリ達をモンスターボールに戻すと、ポケモンセンターを出て行った。このまま行けば、今日の昼時には着くであろう。次のジム戦のことを考

えながらリーリエ達はハナダシティに向かっていく。

「ピッ!!!」

すると突然、ピイの鳴き声に気づいたリーリエ達はオツキミ山の方へと目を向けた。そこにはピイとピツピ、ピクシー達がリーリエ達に手を振っていた。

「ズルー!!!」

さらにはあれほど暴れていたズルッグ達も穏やかなそうにリーリエ達に手を振っていた。どうやら、ズルッグ達はそのままオツキミ山に居座るつもりでいるようだ。だが、笑顔を向けて手を振っているその表情からはもう昨日みたいな闘争心を先立っていない。これからはピツピ達と仲良く暮らしていくのであろう。

「さようなら!」

「ズルッグ達もみんなと仲良くするのよ!」

オツキミ山のポケモン達と別れを告げたりリエ達は次の街ハナダシティに向かって出発した。二個目のバッジがリーリエ達を待っている。

「そういえば、リーリエ？」

「はい？」

「ズルズキンと対峙した時、リーリエなんか言いかけてたことあったよね？あの時、何があったの？」

「それが……。今朝はもう見えてなかったのですが、昨日のズルズキンからは少し霽のような物が見えたのです」

「霽？」

「あれ……みなさんは気づきませんでしたか？」

「いや……僕たちには何も」

「何が見えたんだ？」

「それが……」

「黒い……オーラのようなものなんです」

## 第十九話 神秘の町

「着いたぞ！ハナダシティだ！」

ハナダは水色。神秘の色。花咲く水の街

リーリエ達は二つ目のジムがあるハナダシティに到着した。水の街だけであって、ハナダシティにはいくつかの噴水広場が設備されている。その水しぶきによつて生み出されたマイナスイオンが大きな効果を発揮しており、街全体がとても澄んでいる。

そのおかげなのか、長旅の疲れが一気に解けた感じがした。

「くっく!!!旅の疲れの一杯に効くねえ」

「なんだか叔父さんっぽいですよ。カノン」

ポケモンセンターに到着後、サイコソーダーを飲みながらロビーでくつろいでいると、バトル施設の方では多くのトレーナーが集まっていた。

リーリエ達もその中に入っていくと、思った通りだ。カメールとドクケイルによるポケモンバトルが行われていた。

「ドクケイル！【サイケこうせん】だ!!?」

「ドツケツ!!?」

「押し返せカメール！【みずてつぼう】!!?」

「カメツ!!?」

色鮮やかに光り輝く光線と水鉄砲がぶつかり合う。辺りを爆煙がフィールドを覆うと、それに紛れててカメールはドクケイルの後ろに周った。

「今だ！【みずのはどう】!!?」

カメールの【みずのはどう】が決まるとドクケイルは水の球体へと吸い込まれていった。さらに水の振動によって大きく頭を震わされてしまったドクケイルはその反動のせいで混乱状態になってしまった。

「とどめの【ロケットずつき】だ!!?」

「カメエ!!?」

カメールは自分の頭を甲羅の中へと引つ込めると、照準をドクケイルに合わせた。貯めたパワー頭部に込めて、そのままドクケイルに向かって突進した。

混乱状態により自分のトレーナーからの回避の指示に反応せず、そのままカメールの【ロケットずつき】がドクケイルに決まった。この攻撃によりドクケイルは戦闘不能となった。

「よっしやああ!!!これで十連勝!」

「カメエ!!?」

勝負が決まりカメールは自分の主人とハイタッチを交わした。その後、ドクケイルのトレーナーと含めて、二人のトレーナーの健闘を讃えるかのように周りの人達から拍手が巻き起こった。

「なかなかいいバトルだったな」

「はい。カメールとの息もぴったり合っていました」

そのバトルにリリーリエもタケシも拍手を交わした。そんな中、驚いたように目を丸くしてカメールのトレーナーを見ていたカノンとサトルは一斉になって声をあげた。

「ソーちゃん!!」

「ソー……ちゃん?」

すると、自分を呼ぶ声があったのか。カメールのトレーナーは周りを見渡した。

そして、カノンとサトルと目が合うとそのトレーナーはサトルとカノンに手を振った。

「おお!サトル!カノン!」

~~~~~

「いや〜こんな所で会うとはなあ！どうだったよ！俺の華麗なるバトルは!!!」

「うん。流星はソーちゃんだって感じだった」

「んだよ！その感じって！」

ソウタと名乗るオールバックにした金髪が特徴のカメールを連れたそのトレーナーはどうやらカノンとサトルの知り合いのようだ。

リーリエとタケシに目をやると、ソウタは親指で自分を指しながら自己紹介を始めた。

「そういや、自己紹介してなかったな。俺はマサラタウンのソウタ！サトルとカノンはポケモンスクールの同期なんだ！」

「そうだったんですね。初めましてわたくしはリーリエと申します」

『僕はロトム。どうもよロトしく』

「うお！これポケモン図鑑かよ！おもしろ〜」

「俺はタケシだ。君のことは弟から聞いているよ」

「弟？」

「新人ながら手強いチャレンジャーだったてな。俺の弟はニビジムのジムリーダーなんだ」

「ああ、ジロウさんか！」

初対面であつたが、ソウタの人見知りのない性格につられてリーリエとタケシは自然に彼と話すことができた。互いの自己紹介を終えてソウタはシロンを見つけると、研究所で初めて会つた時のカノンと同じように目を輝かせ始めた。

「こいつはリーリエのロコンか?!?色違いなんて初めてみたぜ！」

シロンをロコンの色違いと勘違いしたソウタにサトルは訂正を行なつた。

「違うよソーちゃん。リーリエはアローラ地方出身でね。このロコンはリージュンフォームで変化した氷タイプのロコンだよ」

「へえ〜そうなのか。初めて知つたぜ！流石はサトルだな！」

「いや…授業で習つたじゃん…」

「このやり取りも研究所であつたような…」

そんなことを思いながらリーリエはソウタが連れている二体のポケモンに目をやつ

た。

「クチート!!？」

「カメツ!!？」

リーリエと目が合った二体のポケモンは元氣よくリーリエに挨拶を交わした。

「クチートに……こちらのポケモンはカメラでですね」

『そうロト!』

さっそく、ロトムは二体の写真を撮るとデータに保存した。

『クチート あざむきポケモン

鋼・フェアリータイプ

鋼のツノが変形した大きな顎を持つ。大人しそうな顔に油断していると、突然振り向きバクリと噛みつかれるので要注意』

そうロトムはクチートに近づきながら解説を行っていると：

バツク!!!

『ロトオオオオオ!!』

凶鑑解説の通り、ロトムはクチートの顎に思いっきり噛み付かれたのであった。

「悪い！悪い！これが俺のクチートの挨拶なんだわ！」

「とてもワイルドな挨拶ですね……」

「コン……」

「もうソーちゃん！リーリエのポケモン凶鑑なんだから壊れたらどうするのよ！」

「カノン。そこは……ロトムの心配をしようよ」

暫くして、クチートの顎から解放されたロトムはふらつきながらもカメールの解説を行なった。

『カメール かめポケモン』

水タイプ

ゼニガメの進化系。フサフサの尻尾は長生きのシンボルと言われている。甲羅の傷は強者の証』

カメールの解説を終えたロトムにリーリエはお疲れ様と声をかけると同時に…

「ゼニガメの…進化系」

カーキド研究所の頃を思い出した。

「カーキド博士。たしかカントーの新人用ポケモンはあと水タイプのゼニガメがいると
思うのですが…」

「実はもう。カノンちゃんとサトルくんが来る前にもう一人の新人トレーナーが先に研
究所を訪れたんじゃない。それで早く旅に出たいと言うから先に選ばしてしまったんじゃない」

あの時の言葉を思い出したりリーリエはカノンとサトルに目をやった。

「あつ！もしかして研究所でカノンとサトルが言っていた人というのは…」

「そのまさかだよ!!」

「ん?何がだ」

リーリエの一言をきっかけに何かを思い出したようにカノンとサトルはソウタに迫った。

「そうだよ思い出した!ソーちゃん!なんで私達が研究所に着く前に勝手にポケモンを選んで行っちゃうのかな!」

「何だよ、俺は悪くねえだろ!そもそも約束の時間になっても来なかったお前らが悪い!」

「ちなみにソーちゃんは何時に行つたの?」

「んなこと決まってるじゃねえか、サトル!朝一番に行くつて約束したんだから、日が昇つたのと同時にだわ!」

「「「……………」」」

オーキド博士が少し困り果てていた理由がなんとなく分かった気がした。

「ところでお前らバッジはどれぐらい集まつたんだ?」

話は急に変わつてソウタはジム巡りの話題へと持つてきた。実はソウタもリーリエ達と同じようにジム巡りの旅をしているのだ。

「私達、研究所からずっと一緒に旅してたから私とサトルとリーリエは同じでバッジは

今の所まだ一つよ」

「そうか！そうか！まだ一つか♪」

三人のバッジの数を聞いたソウタは腕を組むと、高らかに笑い出した。それと一緒にクチートとカメールもソウタと同じように笑い出した。その姿に少しカノンはムツとした

「そういうソーちゃんは何個ゲットしたのよ…」

イジケながらもソウタにも同じ質問を返すと、ソウタは自分のバッジケースを取り出した。

「俺はざつとこんな所だな」

自慢げにバッジケースを開くと、そこにはニビジムのグレーバッジと今からリーリエ達が挑戦するハナダジムのブルーバッジ。その他にも二個のバッジが光り輝いていた。

「ええ!!もう四つも揃えたの!」

「旅に出たの僕らとは一日違いだったよね」

「なのに、もうこんなに集めたのですか!」

「まあな!こんぐらいは最強トレーナーの俺としては朝飯前よ!」

短期間で四つのバッジを獲得したソウタにリーリエ達は目を見開つきばなしだ。するといくつかのバッジを見たタケシはある疑問をソウタに問いかけた。

「見た所ハナダシジムのブルーバッジは持っているみたいだが、何でまたハナダシテイに?」

ハナダジムのバッジを獲得したのであれば、次の街へと向かっていくのであろうが、それでもハナダシテイにいるソウタに不思議に思ったのだ。その質問にソウタはこう答えた。

「それがよ! オツキミ山にももの凄い強いポケモンが現れたと聞いてよ! カントーリーグで優勝するためにも是非ともそいつを手持ちに加えたいなあと思つてな。ハナダシテイに戻ってきたんだよ!」

ソウタが言っていることに即座にサトルは口を開いた。

「ソウちゃん。それがそのポケモン…もうリーリエがゲットしちやつたんだよね」

「はああ!!! マジかよ!!!」

「え…ええ」

ソウタが言っているオツキミ山に現れた強いポケモン。間違いなく以前リーリエがゲットしたズルズキンのことだ。

「何だよ。先越されちまつたのか」

悔しそうにソウタは頭を抱えると…

「じゃあ! 仕方ないか!」

「切り替え早っ!!!」

瞬時に切り替えては、リーリエの前に自身のモンスターボールを突き出した。

「だつたらリーリエ！俺とバトルしようぜ！」

「バトルですか?!？」

「もちろん！リーリエが使うのはそのオツキミ山でゲットしたポケモンなあ！俺はクチートで行くわ」

いきなりのバトルの申し立てに驚くリーリエにサトルは慌てて口を開いた。

「ちよつとソーちゃん！僕らはハナダシティに着いたばかりだし、リーリエも疲れてるだろうだからさあ」

リーリエの体調を気遣ってソウタに注意するサトルにリーリエは

「いいえ。わたくしなら大丈夫ですよ」

サトルに軽く合図を交わすと、自分のモンスターボールを手に取った。

「おお！話が分かる。じゃあ、早速バトルだ!!!」

「はい！」

ソウタの強引な性格に引つ張られて、一同はもう一度バトル施設へと向かって行くのであった。

~~~~~

「審判は俺がやろう」

審判役にはジムリーダーの経験があつたタケシが務むことにした。

「気合い入れて行くぞ。クチート！」

「クチイ!!？」

ソウタの掛け声と共にクチートはバトルフィールドに踏み入れると、角をリーリエに向かつて突き出した。凶鑑解説通りの鋼の顎がバツクリと大きく開き始めた。

ちなみにクチートはトレーナズスクールの頃から一緒にいたソウタの一番の相棒だ。

そのクチートの闘志にリーリエも勢いよくモンスターボールをフィールドへと投げ入れた。そしてモンスターボールからは中腰姿勢でクチートを睨みつけているズルズキンが飛び出した。

「お願いいたしますね。ズルズキン！」

「ズキイ……」

「ズルズキンか。強そうだな。頑張ろぜクチート！」

「クチイ!!？」

「それではバトル始め！」

タケシの開始の合図と同時にクチートは大きく腕を振り回し始めた。

「こつちから行くぜ！クチート！【ようせいのかぜ】だ!!？」

「クチイ!!？」

クチートはそのまま回していた腕を前の方へと振ると、それにより薄桃色に輝く突風を生み出すとズルズキンに向かって放った。

「ズルズキン！躲して【からてチョップ】です!!？」

【ようせいのかぜ】はズルズキンには効果は抜群である。ここは攻撃を受けないようにリリーエは回避の指示をズルズキンに出したのだが…

「……………」

「どうしたのですか。ズルズキン！躲して下さい！」

声は届いてるはずなのだが、ズルズキンはその場から動こうともしなかった。

それどころか、ズルズキンはリリーエの指示とは別に両手の平を合わせると黒い渦の様なものを形成しだした。【あくのはどう】だ。その技を【ようせいのかぜ】に向かって放つとそのまま相殺させてしまった。打ち消されてしまったことに驚くクチートにズ

ルズキンは薄つすらと笑みを浮かべた。

リーリエはというと自分の指示とは違った行動を取ったズルズキンに動揺してしまつた。

「【ようせいのかぜ】を打ち消しちゃつた」

「だけど……リーリエは躲せて指示をしたんだよね……」

「……………」

その感じは二人のバトルを見ていたカノンとサトル……そしてタケシにも伝わつていた。

「やるな、だったらこれでどうだ！【かみつく】!!?」

「ズルズキン！もう一度躲してから【からてチョップ】です!!?」

「ズキツ!!?」

今度は指示通りにズルズキンは手刀の体勢を取つたのだが、リーリエの指示を無視して躲さずにクチートの攻撃を真っ向から受けたのだ。

「ズ……ズルズキン!!?」

何処ともない嫌な感じ、それはだんだんと確信へと変わつて行く。

ズルズキンはリーリエの言うことを聞くつもりがない。そのズルズキンはまた指示とは別に勢いよくジャンプすると勝手に次の攻撃へと切り替えた。空中へと飛び出し

たズルズキンはそのままクチートに向かって膝蹴りを仕掛けた。

「躲せー！」

ソウタの指示にクチートはギリギリの所でズルズキンの攻撃を躲した。

「ズ…キーン…」

攻撃を躲されたズルズキンはそのまま地面に自分の膝を強く打ち付けてしまった。クチートにダメージを喰らわせるのは逆にズルズキンには大きなダメージが躲された代償として受けてしまった。

「ズルズキンにダメージが！」

「今のは【とびひざげり】だと思うよ。あの技は躲されると逆に自分にダメージが跳ね返ってきてしまうリスクがある技なんだ」

サトルの解説の通りズルズキンは自分の膝を両手で押さえつける。痛みが緩和した所でズルズキンはクチートに対して怒りの感情を表した。

怒り狂ったズルズキンは「あくのはどう」をクチートではなく四方八方に打ち続けた。いきなりのズルズキンの暴走にバトルをどころでは無くなってしまった。

「ズルズキン落ち着いて下さい！きやあつ！！」

バトルが始まった時からリーリエの指示を聞こうとしなかったが、今は完全にリーリエどころか誰からの声も聞こえていないようだ。

「戻って下さい!」

止むを得ず、リーリエはズルズキンをモンスターボールへと戻した。騒動が収まりリーリエはその場に崩れ落ちてしまった。その様子にカノン達はリーリエの元へと急いで駆け寄った。

「大丈夫!リーリエ?」

「はい…わたくしは大丈夫です。皆さんはお怪我はありませんでしたか?」

「俺たちは大丈夫だ」

「何だ何だ。ズルズキンはどうしたんだよ?勝手に暴れて?」

「それが…わたくしにも何が何だか…」

突然のことに頭の中を整理しきれないでいる。だが、分かっているとあればズルズキンはリーリエの言う事を全く聞いてないことだ。そんなズルズキンのモンスターボールを不安気に見ていたリーリエにタケシは口を重たそうに開いた。

「リーリエ。モンスターボールは野生のポケモンを捕獲するための道具であって、ゲットしたポケモンを強制的に言う事を聞かせるような道具ではない。ゲットされてもそのトレーナーの実力を認めない。そういう考えを持つポケモンがいても珍しいことではないんだ」

「そ…そうなんですな」

野生のポケモンがゲットされるといふのはそのトレーナーの実力をポケモン自身が認めた証でもあるとも言われている。戦いを通してそのトレーナーの実力や根性を測るポケモンもいるそうで、稀にツタージャのようなにトレーナーの実力に見切りをつけると、自分からそのトレーナーを捨ててしまうポケモンもいるぐらいなのだ。

それからリーリエはズルズキンのモンスターボールへと視線を落とすとそのまま塞ぎ込んでしまった。ズルズキンとの間にある大きな壁があるような感じもしてしまい、どうしたらいいのかも分からない。

「なくに！これからズルズキンと仲良くしていけばいいさ！焦る必要は無いんじゃないやねえか？」

「そうそう♪ソーちゃんの言う通りだよリーリエ！こういう時こそがんばりリーリエだよ」

「くつつす!!?そのフレーズも久々に聞きましたよ！」

「そうですね」

ソウタとカノンの声に励まされてリーリエはゆつくりと顔を上にあげた。

「そうと決まれば、ポケモン達を一度ジョーイさんに診てもらってから、ジムに行こうぜ！お前らのジム戦も見てみたいしな！」

そう言うのと四人はポケモンセンターへと入っていた。

シロンやコイキングのように自らリリーエを主人として認めてくれたポケモンもいれば、ムクバードのようにバトルを通して絆を深めたり、元は別のトレーナーのポケモンであったキモリがリリーエを慕うようにポケモン達にもいろいろな想いを持ちながらトレーナーについて行っていることを尊重しないといけない大切さを改めて知ることが出来た。

まだズルズキンとも出会ってから日が浅い。まだお互いに知らないことばかりであるが、いつかズルズキンとも心を通わせることを願いながらリリーエはズルズキンのモンスターボールをバックの中へと閉まうと四人の跡を追ってポケモンセンターへと入って行った。

~~~~~

ポケモン達の回復を済んだリリーエ達はソウタを先頭にしていよいよハナダジムへと向かった。

「いいか！ハナダジムは水タイプのジムだ。しかも、フィールドは水のフィールド。足場は水に浮かぶ円にかいた浮島だけでとても不安定だ。水系ポケモンと空中戦を得意とするポケモンがいた方が戦いやすいかもな！」

「てっ、いつから先輩になった気分でのよ」

「まあ、経験者の言葉は信憑性があるし心強いけどね」

不思議なことに楽しい会話をしているとあつという間に目的地に着いてしまうものだ。気づくとリーリエ達は大きなジュゴンのイラストが貼られている施設へと辿り着いていた。

「ここが目的地であるハナダジムだ。」

「なんかニビジムと違ってジムって感じじゃないよね」

「ハナダジムはジムと水中バレーショーと兼用しているからな。ジムのバトルフィールドは時々、水中ショーとして使われることもあるんだよ」

その水族館みたいな外見に本当にジムなのかと少し首を傾げたサトルにタケシは説明を加えた。

一同はジムの中へと入ると、すぐ目の前には大きな水槽が貼られていた。流石は水ポケモンのジムだけのことはあって、各地方のいろいろな水系ポケモンが泳いでいた。その光景にロトムはたくさんデータのデータが得られると言って、ハナダジムの水ポケモン達にカメラを回すとその情報を収集していった。

「あら、いらっしやい。ハナダジムへようこそ」

水ポケモン達に見惚れているリーリエ達に向かって一人の女性が近づいて来た。黄

色のロングヘアーをしたお嬢様気質の女性にタケシは一瞬にして前へと腰掛けた。

「お久しぶりです！サクラさん!!!」

「あら、タケシくん！」

「北風のスイクンの様にやって参りました！この再開の喜びを共に分かち合いましょ
…」

ズシユユユン!!!

「しびれびれ〜」

「ケツケケケケ♪」

「タケシさんって面白い人だな！」

「うん…そうだね」

この光景にソウタを除く三人はもう見飽きていた。引きずられて行くタケシを後に代表としてリーリエはサクラに挨拶をした。

「こんにちは。わたくし達はハナダジムに挑戦しに参りました。サクラさんがジムリーダーでしょうか？」

リーリエの言葉にサクラは笑顔で返事を返した。

「いいえ、ここのジムリーダーは私の一番下の妹のカスミなのよ。でも、ごめんなさい。今

日はチャレンジャーが三人もいらっしやったから、いま戦っている人で今日は閉めちゃうと思うの……」

申し訳なきように謝る様子からリーリエ達は日を改めて出直すことを告げると、そんな四人を慌てて引き止めるようにしてサクラは一つの提案を述べた。

「折角来て頂いたのに悪いわ……」

「そうだ！ だったら、バトルの見学でもしていかない!?？」

「えっ……それは……」

「大丈夫よ！ バレないように上のサイドステージから覗けば！ 行きましょう！」

「あ……あの……」

呼び止めるリーリエ達の声を聞かずにサクラは手招きしながらバトルフィールドへと案内し始めた。

「なんか自由な人だね」

カノンの言葉に一同は賛同しながらもサクラの後を追いかけていった。

~~~~~

サクラに連れられてリーリエ達はバトルフィールドを全体的に見渡せるサイドステージへと案内された。

ハナダジムはソウタの言った通り、水系ポケモン達が戦いやすい水のフィールドとなっていた。そして、ジムリーダーサイドには自称おてんば人魚の如、カスミが立っていた。そしてカスミを見つめるチャレンジャーサイドには一人のトレーナーが立っていた。オレンジ色のショートカットにサングラスを被せたその少女は一礼するとすぐに集中モードへと切り替えていた。

「これより、ジムリーダーカスミとチャレンジャーノゾミとのハナダジム、ジム戦を始めます。使用ポケモンは三体。どちらかのポケモンが全て戦闘不能になりますと、バトル終了となります。なお、ポケモンの交代はチャレンジャーのみ認められます。それでは始め!!!」

「出て来て! マーイステディ!!!」

審判による開始の合図により、カスミはモンスターボールからポケモンを繰り出した。ニビジムと同様、ジムリーダーから先にポケモンを繰り出すところは同じのようだ。

「タッツ!!?」

カスミが一番手に繰り出したのは元からカントーに生息していた水系ポケモンのタッツーだ。

《観戦席》

『タッツー ドラゴンポケモン』

水タイプ

サンゴの陰を住処にしている。危険が迫ると墨を吐いて逃げる。背中の子ヒレを上手く使って前を向いたままでも前後左右に移動することができる』

ロトム凶鑑解説が終わると、

「……」

「タケシ!? どうかしたのですか?」

タケシの驚いた表情にリーリエはタケシに問いかけた。

「ああ、それが……」

リーリエの呼びかけに反応したタケシは質問に答えようとしたのだが、チャレンジャーの呼び声とともにモンスターボールがフィールドへと放たれたのを知り、フィールドの方へと目をやってしまった。

《ジム戦》

「行つけ！ニヤルマー!!!」

「ニヤルマー!!？」

チャレンジャーが繰り出したのはニヤルマーというホウエン地方で確認されたポケモンだ。

ニヤルマーは尻尾をスプリングのようにして着地すると、その反動を利用して空中へと大きくジャンプした。ジムのライトがスポットライトのようにニヤルマーを光り輝かせていた。

《観戦席》

「ニヤルマーだ!」

「わたくし初めて見ました」

初めて目にしたポケモンにリーリエはロトムにニヤルマーの解説を求めた。

『ニヤルマー　ねこかぶりポケモン

ノーマルタイプ

気に入らないと爪を立てるが、たまに喉を鳴らして甘える性格が一部で大人気だ。尻尾で新体操のリボンのような美しい動きを見せる』

図鑑解説の通りによるとニヤルマーの最大の武器は尻尾にあるであろう。今から始まるバトルに胸を高鳴らせているが、タケシの言いかけた事を思い出したリーリエはも

う一度タケシの方へと振り向いた。

「タケシはあのチャレンジャーの方をご存知なのですか？」

「ああ、シンオウ地方を旅していた時に知り合ったんだ」

そう続けると、タケシは眉間にしわを寄せながら、顎に手を置くと難しそうな表情を浮かべていた。

「だけど、なぜトップコーディネーターのノゾミがカントー地方に来てジム戦をやっているんだ？」

「トップコーディネーター？それってポケモンコンテストのことなの？」

ポケモン：コンテスト？ トップコーディネィ：ネーター？

聞いたことがない単語に首をかしげるが、これから始まるバトルから少しでもジムリーダー対策に繋がるヒントを探ろうと、リーリエは疑問に思いながらもバトルフィールドに再び目を向けた。

### 《ジム戦》

ここでおさらいしてみると、ソウタの言った通り水のフィールドで水系以外のポケモンは数カ所にある浮島を足場変わりにして戦わなければならない。こうなれば、水系を

得意とするジムリーダーの方が有利とも見えるし、チャレンジャーには敵しすぎるとも思える。このバトルではよりチャレンジャーは判断力が勝負の鍵になるとも言えよ。

「ニアルマー！ 【シャドークロー】 !!?」

「ニアルル!!?」

先制したのはチャレンジャーだ。ニアルマーは自身の自慢の爪に黒い影を纏わせる。さらにその影は大きくなり爪を形成させると高く飛び上がったのは急降下でタツツ目掛けて突進した。

「タツツー！ 墨で体を隠して!!?」

「タツツツ!!?」

タツツーは寸前のところで水面に潜ると墨を名一杯に放った。これは「えんまく」による技ではなくタツツーが持つ本来の性質であろう。

ニアルマーはタツツーの姿を見失うと、攻撃の手を辞めては浮島へと着地した。無用に攻撃をして外してしまうと相手の攻撃の糸口を誘ってしまうからというニアルマーの独自の判断だ。

「もう一度飛べ！ニアルマー！」

ニアルマーは凶鑑明記に記された通りに尻尾を使って、天井に向かってジャンプした。鳥ポケモンに負けないほどの頭上まで上がったニアルマーは再び爪を立てた。

「水面に「シャドークロー」!!?」

「ニヤル!!?」

今度は水面に向かって思いっきり「シャドークロー」をぶつけた。その衝撃により生み出された波は他の波とぶつかり合い、荒々しく水面を揺さぶり始めた。その波に押し出されたタツツーは水面から顔を出した。強く押し出される波に身動きが取れていない。大きく揺れる波に飲まれているタツツーに次の攻撃を加えることは難しいが、水を通すこの技には関係がなかった。

「【10万ボルト】!!?」

水は電気を通す。水面深くまで潜られると効果はあまり期待できないが、水面近くまで上がってきたのであれば水系のタツツーには大ダメージを与えることができる。一面に帯びた電撃はタツツーに向かって走り出す。

「タツツー!飛んで!」

カスミの発言にチャレンジャーもリーリエ達も驚いた。タツツーが飛ぶ!!?そんなことが…

タツツーは押し寄せる波に踏ん張りながらも、下に向かって口から水を放射すると、ジェット機のように上へと飛んだ。波から解放されたタツツーは同時に【10万ボルト】も躲すことにも成功した。

「【ねっとう】よ!!?」

「タツツ!!?」

タツツはそのまま熱湯をニヤルマーの頭上へと放たれた。上から一気に降り注ぐ熱湯は水中スクリーンのように範囲を広げては足場が不安定なニヤルマーに降りかかった。

「ニヤル!!!」

熱湯を浴びてしまったニヤルマーはそのまま追加効果で火傷を負ってしまった。これによりニヤルマーの物理攻撃は大幅に下がってしまった。

「続けて【バブルこうせん】!!?」

そんなニヤルマーに容赦なく次の攻撃が降りかかる。だが、チャレンジャーは一ミリも焦りを見せずにすぐに対処へと向かった。

「ニヤルマー!尻尾を使うんだ!!?」

ニヤルマーはスプリングラーのような尻尾を回し始めると、無数に打ち出された【バブルこうせん】を次々に絡め取って行った。この状況にカスミは思わず驚いてしまった。

「そのまま投げ返せ!!!」

「【バブルこうせん】!!?」

絡め取られたタツツの技をニヤルマーは投げ返す。タツツは続けて「バブルこうせん」を放つとニヤルマーが飛ばした「バブルこうせん」をかつ消した。流れを自分に向けるためにカスミはすぐに指示を出す。

「きあいだめ」!!？」

パワーを集中し始めたタツツを見てチャレンジャーは急いでニヤルマーに指示を出す。

「ニヤルマー!」【シャドークロー】!!？」

すぐにニヤルマーは攻撃を仕掛けたのだが火傷状態なため思う以上にパワーを発揮できていなかった。

「タツツ!」【バブルこうせん】!!？」

ニヤルマーの攻撃は次のタツツの攻撃を防ぐことが出来なかった。

「ニヤルル!!!」

「ニヤルマー!!!」

タツツの攻撃に吹き飛ばされたニヤルマーはその場で倒れてしまった。

「ニヤルマー戦闘不能。タツツの勝ち」

《観戦席》

「おお!」【きあいだめ】で攻撃を急所に当てやすくしたうえでの攻撃か。こりや、効いた

だろうな」

「だが…それだけではない」

熱が入ったソウタの言葉にタケシが付け加える。

「おそらくカスミのタツツの特性は《スナイパー》だろうな。急所に当てた技の威力をさらに上げる特性なんだ。これにより【きあいだめ】と特性の効果で急所に当たった【バブルこうせん】の威力がさらに高まったんだ」

「つまり、いまの攻撃は補助技と特性の効果によるコンボなのですわね！」

「そんなところだ！」

リーリエとタケシの解説に三人も納得した表情を浮かべた。何よりも技だけでなくポケモンの性質も上手く活用した二人のバトルセンスにジムリーダーだけでなくチャレンジャーの方の方も上級トレーナーであるとリーリエ達は感じた。

### 《ジム戦》

「ご苦労だったね。ニヤルマー」

戦闘不能になったニヤルマーを戻すと、焦り始めたのか。少し表情が曇ってきてしまった。

これが…ポケモンジムバトル

コンテストバトルみたいには行かないか…

何よりもニヤルマーはノゾミの一番の相棒だ。パートナーノゾミのチームの中でも数々の試練を乗り越えてきた猛者でもある。ニヤルマーを先発に出して流れをこちら側に向けようとしたのだが、そう上手くは行かなかったみたいだ。

ノゾミはいったん落ち着きを取り戻すためにここカントー地方に訪れる前にジム巡りの提案を進めてくれた先輩とのやり取りを振り返ったのであった。

## 第二十話 ノゾミの研鑽

く ジョウトのポケモンコンテストく

「ニヤルマー！ 【10万ボルト】 !!?」

「ムウマージ！ 【シャドーボール】 !!?」

「ピジョット！ 【フェザーダンス】 !!?」

「【シャドークロウ】 !!? 【おにび】 !!?」

しまっ…

「ラプラス【ぜったいれいど】!!？」

「ニヤルマー、ムウマージ、バトルオフ！よって優勝はサオリさんでございます」  
????????????????

シンオウ地方でのグランドフェスティバルで優勝後、ノゾミは次の地方でのトップコーディネーターの称号を得るために旅を回っていた。しかし、そのトップコーディネーターの肩書きが足枷になってしまふとは旅立つ前のノゾミはまだ知らなかった。

トップコーディネーターを目指す者としてコーディネーターの多くはノゾミの名を知らない人はいなかった。彼女の姿を見れば誰もが振り向いては彼女を警戒をしていた。だが、その視線が返つてノゾミには大きなプレッシャーとしてのしかなかったのだ。シンオウ地方のトップコーディネーターとして誰よりも以上に華麗に見せなければならぬと思ひ込み結果的に実力が空回りしてしまうことが目立つようになった。そして、常に上を見て戦つてきた彼女が消沈してしまう出来事があった。

ジョウトのコンテストでの決勝。その相手はサオリというカントー地方のトップコーディネーターであった。他地方のトップコーディネーター同士のバトルだけあって、この日のコンテストは多くの人が注目していた。だが、その戦いは呆気なく終わった。私は逆転不可能と思えるぐらいの之差でポイントを減らされてしまふ所が、自分の二体をあつけなく戦闘不能にさせられてしまった。同じトップコーディネーターとい

う称号を手にはしているとはいえ、実力の差は歴然としていた事に強気な性格の彼女であつたが、抜け殻のように何も考えられなくなつてしまつた。

ここに来て彼女は停滞期に入つてしまつたのだ。

### キツサキシテイ

シンオウ地方の北陸に位置する。寒さに覆われており、年中雪が降り続ける。時にはダイヤモンドダストも観測させることもあるこの街はノゾミの出身地でもある。

地元へと戻つたノゾミは初心に還り、昔の映像を元に研究を行つた。

いや…

一から出直すというのは良く言ひすぎた。

本当は…退化していく自分から逃げたんだ。

また、負けるという事から…

一つの頂に立つてから次の頂への一步を踏み出せないでいる。

ヒカリも私に追いつこうと頑張っているのに今の自分を見せてやれない。

そんな私にスズナせんばいはある提案を持ちかけた。それを聞いた時は今でも驚いている。

「私がジム巡りを…」

キツサキシティのジムリーダーズズナ。彼女が提案してきたのはまさかのジム巡りの挑戦だった。その言葉にノゾミは理解ができなかった。コンテストバトルとジム戦では試合の形式は違いすぎる。それなのになぜズズナは提示してきたのか。それはズズナなりの真意があったのだ。

「私ね。ノゾミとヒカリちゃんとの決勝戦を見て思ったんだけどね。もしあの時、宣言時間がまだ少しでもあったら、勝ってたのはヒカリちゃんだったかもと私は思うんだ」

それは私も少しながら思っていた。ヒカリとの決勝はそれは本当にわずかな僅差だった。もしあの時、時間ままでまだ足りていたら、ヒカリに負けていたかもしれない。

そんなことを思いながらもスズナはさらに説明を付け加えた。

「ノゾミは自分のポケモン達の技の発動前の姿勢を華麗に見せたり、時には相手の技を利用してポケモン達を輝かせては相手のポイントを奪うのがノゾミのコンテストバトルスタイル。一方でヒカリちゃんやんはノゾミと同じようにコンビネーション技などでポケモン達を輝かせていたけど、ポケモン達の技の威力もポケモンの魅力の一つとして見せていたよね。そこがヒカリちゃんにあつてノゾミには無かったものよ」

スズナの言葉を聞いてノゾミは理解した。自分のポケモン達に足りなかったのは攻撃力だ。コンテストとなると関係ないのではないかと思うが、実際にはそうではない。

「どんなにポイントを減らされようと戦闘<sup>バトル</sup>不能<sup>オフ</sup>にすれば逆転ができる。勝ち上がるために最良の手段でもあると言える。技の組み合わせが鍵となるが、ポケモン達の個々の強さという点ではヒカリに劣っている部分があると感じた。

「一緒に旅をしてきたサトシ君の影響でもあるかな。ジム戦もコンテストも一緒にあってお互いに磨いてきたから、ヒカリちゃんはそのスタイルを掴むことが出来た。彼と出逢っていないければ今のヒカリちゃんはいなかったと思うわ」

今の私に足りない…もの…

「先輩…私…」

??????????????

この挑戦はきつと今の私を大きく前進させてくれる。だけど挑戦するからには中途半端にこなしたりはしない。ジムバッチを集めるのならリーグにも出場する。そしてリーグ優勝を目標に全身全霊、ありったけの力をニヤルマー達と一緒にぶつけていく！

自身の胸に手を当ててはノゾミは一旦大きく深呼吸をした。ゆつくりと息を吐きながら次のプランを頭の中で整理をし、次のモンスターボールを手に取った。

「リーファイア！Ready, GO!!？」

「ファイア!!?」

ボールから出ては宙返りを見事に決めたりーファイア。着地の瞬間に空に舞う少量の水しぶきがその美しい毛並みを輝かせた。

《観戦席》

「草タイプのにーファイアか」

「可愛い!!!」

「確かイーブイの進化系の一つなんですよね」

『その通りロト!』

『リーファイア しんりよくポケモン

草タイプ

イーブイの進化系。植物のように光合成をするためリーファイアの周りは澄んだ空気に包まれる。争いを好まないが仲間を守る為ならば尻尾の葉っぱを尖らせ刃に変えて戦う』

ロトム の 凶 鑑 解 説 が 終 え、 タ ッ ツ ー 対 リ ー フ ィ ア の 試 合 が 始 ま る う と し て い た。  
 ス コ ア は ジ ム リ ー ダ ー の カ ス ミ が 残 り 三 体。 対 し て ノ ゾ ミ は 残 り 二 体 と な る。 こ の  
 先 の 展 開 は ど う な る か。 リ ー リ エ 達 は 次 に 始 ま る 試 合 に 集 中 し た。

### 《ジム戦》

「リーファイア！ 『マジカルリーフ』 !!?」

「タツツー！ 『バブルこうせん』 !!?」

双方の技がぶつかり合うと、すぐさまカスミは次の指示を繰り出した。

「タツツー！ 『れいとうビーム』 !!?」

「タツウ !!?」

草タイプ の 弱 点 と な る 氷 タイ プ の 技 を 繰 り 出 し た。 だ が、 ノ ゾ ミ は そ の 技 を 待 つ て い  
 た か の よ う に 微 笑 ん で い た。

「リーファイア！ そのまま待機！」

「ファイア !!?」

指示通りリーファイアは前屈みの体勢で迫り来る「れいとうビーム」を前に静止した。

## 《観戦席》

そんなノゾミの指示に驚いた一同。

ソウタとロトムは思わず声を上げてしまった。

「おいおい！ 当たっちゃまうぞ！！？」

『理解不能。理解不能。リーファイアに氷タイプのは効果抜群ロトよ！』

二人の声につられてリーリエ達もノゾミの意図が分からないままその光景を見ていたのだが、

「まさか……」

ただ一人タケシだけは何かを思い出したような顔をしていた。

## 《観戦席》

水系ポケモン以外は行動範囲が狭まっているハナダジムでは躲すのも至難である。迫り来る「れいとうビーム」をリーファイアはノゾミの指示が来るまで一歩足りとも動こうとしないでいる。誰もが勝負を投げたと思えない状況下でノゾミは右手を大きく上げた。

「今だリーファイア！ 回転しながら【つばめがえし】！！？」

【れいとうビーム】の直撃を食らう寸前にノゾミはリーファイアに指示を出した。リー

フィアは軽く微笑むと体を大きく右に回し始めた。遠心力によって生み出される風のエネルギーは鋭く優しくリーフィアを包み込んだ。しかし、リーフィアが飛び込んだ先はタツツが放った「れいとうビーム」が向かってきている。ギリギリまで引きつけて躲すのかと思いきやそのままリーフィアは一直線に飛び込んだ。誰もがもうダメだと思っただが、直撃と同時に水色に発光したその光の先では信じられないことが起こっていた。

直撃したと思った「れいとうビーム」はリーフィアの作り出す風の肩に取り囲まれ、リーフィア本体には当たらずに外へと逃がされていた。さらに受け流したところか、リーフィアを包み込むように氷を形成し始めた。見る見るうちに大きくなったその氷はリーフィアを包み込んだまま矢の如くタツツに向かって直進する。

あまりの予想だにしない事にカスミは慌てて指示を出すもの間に合わずタツツはそのまま直撃を受けてしまった。衝撃で飛び散った氷の破片の中からリーフィアは華麗にフィールドに浮かぶ浮島に着地する。その前には目を回したタツツが浮かんでいた。

「タツツー戦闘不能！リーフィアの勝ち！」

「よし！上手くいったね。リーフィア！」

「フィア!!？」

ノゾミは軽くガッツポーズを取ると、リーフィアも振り向いては返事を返した。  
観戦席ではそんな二人をリーリエ達は呆然としながら観ていた。

### 《観戦席》

「今のって!」

「もしかして、氷のアクアジェット?!?」

「おいおい…もしかしてあの技か!」

「こおりの…アクアジェットですか?」

サトルとカノンとソウタの言葉にリーリエは首を傾げた。サトル達の話によるとシンオウリーグの中継でサトシのブイゼルがやつてのけた相手の技を利用した攻撃らしい。流石はサトシ。臨機応変な事をすると思つたやさき、その事を聞いたタケシは自慢げそうに口を開いた。

「あの技は元々一緒に旅をしていたヒカリっていうトレーナーが考えたコンテスト技なんだ。なかなか上手く出来なかつたけど、サトシがその技を完成させたんだ。まさか、ノゾミがやってくるとは思わなかつた」

「つまり…ノゾミさんのリーフィアのあれはポケモンコンテストによって生み出された技なのですね。相手の技を取り組んだコンビネーション技!本には決して載っていない

「い戦法！間近で観ることができてわたくし感激です!!!」

「「「「.....」」」」

「ん?」

一瞬時が止まった。コンビネーション技の説明よりもタケシのある一言にリーリエ達は同時にタケシの方へと振り向いた。何のことだと思おうタケシにリーリエは質問をしようとしたのだが、カスミが二体目のポケモンを繰り出した事で、リーリエ達はもう一度バトルフィールドの方へと振り返った。

《ジム戦》

「行くのよ。スターミー!!!」

「フツ!!?」

カスミの二体目はエスパークタイプを合わせている水タイプのポケモン。スターミーだ。

「次はスターミーか。リーファイア! エスパークタイプの技には気をつけていくよ!」

「ファイア!!?」

こう見えて水ポケモンの中でも素早さの数値が高いポケモンだけの事もあって、ノゾミはリーファイアに注意を促した。

「リーファイア!」【マジカルリーフ】!!?」

「ファイア!!?」

「スターミー!」【バブルこうせん】!!?」

「フツ!!?」

お互いに遠距離系の技を放った。放たれた二つの技は相殺された。

「リーファイア!」【リーフブレード】!!?」

爆煙の中をリーファイアはジャンプしては尻尾の葉を刃に変えて、スターミーに斬りつけに飛び出した。瞬時にリーファイアの攻撃に気づいたカスミは指示を出す。

「スターミー! もう一度」【バブルこうせん】!!?」

「【かげぶんしん】!!?」

近づけさせまいとスターミーは「バブルこうせん」を放つ。それをリーファイアは自分の分身を作り出してはスターミーを戸惑わせる他、次々とスターミーの攻撃を躲して行く。

「まずいわ!! スターミー! 水の中へ!」

スターミーは攻撃を止めると、リーファイアの攻撃を寸前の所で躲した。

「そのまま! こうそくスピン! !!?」

水中に潜ったスターミーは自身を高速回転させながらリーファイアに向かって突進していく。攻撃を仕掛け終わると水に潜っては姿を消す。攻撃を躲した所で隙がないためにリーファイアはスターミーを捕らえることができないでいる。

「飛べー! リーファイア!!!」

スターミーによる連続攻撃から逃れる為にそのままリーファイアは天高くまでジャンプした。そしてすぐに攻撃に移した。姿が捕らえられないが、この技なら関係ない。

「マジカルリーフ! !!?」

虹色に輝く葉をリーファイアは撒き散らした。不思議な事にまるで葉の一枚一枚に意志を持っているかのように、葉は水中で姿が見えていないスターミーに向かって行っている。

「【サイコウエーブ】!!?」

「マジカルリーフ」は必ず当たる必中技。スターミーは不思議な念波光線で対抗した。双方の技が激突すると、フィールド上の水がスターミーを中心に前後左右へと波打ちを立てた。そのおかげで中心にいるスターミーの姿をノゾミとリーファイアは捕らえることができた！

「今だ！」「リーフブレード」!!?」

「スターミー！もう一度【サイコウエーブ】!!?」

「ファイアアア!!!」

「フツウウウ!!!」

落下の速度も加わったリーファイアの「リーフブレード」とスターミーの「サイコウエーブ」が激突した。【サイコウエーブ】は使うたびに技の威力が上がる技であり、一発目よりも大きな念波光線でリーファイアを押し返そうとした。だが、リーファイアは負けじと雄叫びを上げながら力一杯に念波光線事スターミーに葉の刃を振りかざした。

二つの衝撃に爆煙と爆風が生まれた。その衝撃波に飛ばされないように身構えるカスミとノゾミの目の前では割れていた水が再び元の形へと戻り、二体を飲み込んだ。暫くしては静かに揺らいでいる水の中から二体のポケモンが浮かび上がってきた。

「スターミー！リーファイア！共に戦闘不能！」

結果は両者ドロ。懸命に闘った二体をカスミとノゾミはお礼を言いながらモンス

ターボールへと戻した。これで両者共に残すポケモンは一体ずつ。次がラストバトルとなる。ベテラントレーナーの二人の実力にリーリエ達は一言も発さずに固唾を飲んでいた。

ここまでハードな闘いをしてきたカスミは気分を一旦落ち着かせるためにノゾミに談笑を持ちかけた。

「ジムとコンテスト。その両方を挑戦してくるチャレンジャーもここ最近多くなってきたから、私なりにコンテスト技の対処法も勉強してきたつもりだけど…貴方の創造力には驚かされるわ。流石はトップコーディネーターね!」

「ありがとうございます!ですが、まだバトルは終わっていませんよね!」  
「そうね!」

カスミは最後の一体であろうモンスターボールをノゾミの前に向けた。

「ジム戦としては初心者であると思うけど、貴方の實力に見込んでハナダジム!私の切り札を貴方にぶつけるわ!」

カスミの切り札。つまりハナダジムの主ともいえるポケモンだ。その言葉を聞いたノゾミに一気に緊張が走った。

「行くのよ!マーズステディ!!!」

自分の決め台詞と一緒に力一杯にフィールドにモンスターボールを投げた。

「ギャラアアアアア!!」

青白い光と共にモンスターボールから出てきた全身に青い鱗に覆われ、三叉の角が特徴のそのポケモンは赤い眼光でチャレンジャーを睨みつけては雄叫びを上げた。その雄叫びに吹き飛ばされそうになるノゾミの目の前に降臨されたその強敵に怖気付く所か不思議と胸が踊っていた。

「ギャラドスか…」

《観戦席》

「くつつ！すげー迫力だぜ！」

「ギャラドスですね！」

『ギャラドス きょうあくポケモン

水・飛行タイプ

コイキングの進化系。非常に凶暴な性格。ギャラドスを怒らせたある街は一晚のうちに焼き尽くされて跡形もなくなつたと言われている。破壊の神と呼ぶ地方も存在する』

## 《ジム戦》

目の前にした強敵にノゾミも最後の一体が入ったモンスターボールを手に取った。一度そのモンスターボールを見つめると、カスミの方へと顔を上げた。

「カスミさん！私は最後のこの闘い！こいつと全力でぶつかっていきます！」  
するとノゾミはある物を取り出した。それを見たカスミの目は鋭くなった。

「…面白いわね。だったら私も全力でぶつかっていくわ！」  
それを見たカスミもノゾミと似たある物を取り出した。

## 《観戦席》

「一体…何を話てんだ？」

『ん…あの二人から強い力を感じるロト！』

誰もが二人の会話の意図を探っている中、リーリエとサトルはまさかという顔をしていた。そう、二人だけはかつてそのある物を目にしてきた事があるからだ。

## 《ジム戦》

「さあ行って！エルレイド！GO!!」

「エルレイド!!？」

ノゾミの最後のポケモンがバトルフィールドへと放たれた。

### 《観戦席》

「エルレイド……」

そのポケモンをカノンはポケモン図鑑をかざした。

『エルレイド やいばポケモン

エスパー・格闘タイプ

キルリアの進化系。誰かを守ろうとすると伸び縮みする刀で戦う。居合の名手で礼儀正しいポケモンである』

### 《ジム戦》

「さあ！最初っから飛ばして行くよ！エルレイド!!!」

「エルレイ!!?」

「私達も行くよ！ギャラドス!!!」

「ギャア!!?」

両者同時に自分のポケモン達に合図を送ると、同時にある掛け声をバトルフィールド全体に響き渡るように上げたのだ。

「メガシンカ!!」

「エルレエエエイイイイ!!!」  
「ギャアアアアラアアアア!!!」

二人のトレーナーは自身のキーストーンに呼応すると、二体の持つメガストーンも激しく光り出した。ギャラドスには凶暴さが増しエルレイドには清く優雅な立ち並びに姿を変えた。

## 《観戦席》

「なんだ！なんだあれ！！」

初めてみるその現象にソウタは身を乗り出した。カノンも空いた口が塞がらないぐらいに呆然としている。

「やっぱり…」

「メガ…シンカ!!!」

## 《ジム戦》

光り輝く発光と共にメガシンカエネルギーで姿を変えた二体は大きく身構えた。

さあ！最後のバトルだ！

「ギヤラドス！【あまごい】!!?」

「ギヤラ!!?」

「エルレイド！【つるぎのまい】!!?」

「エルレイ!!?」

ギヤラドスは再度雄叫びを上げると、室内にも関わらず、その中に雨雲を発生させた。ポツリと一滴落ちるとすぐに激しい豪雨となった。その雨に打たれながらエルレイド

は神経を集中させると自身の刀を鋭く尖らせた。雨に濡れたその刀は美しく磨きかかり一段と鋭く見えた。

「行けっ！」「しんくうは」!!?」

「ギャラドス！」「ハイドロポンプ」!!?」

エルレイドの真空波とギャラドスの猛撃の水流が打ち出された。二つの技がぶつかり合うとギャラドスの「ハイドロポンプ」がいつも簡単にエルレイドの「しんくうは」を打ち消した。

「躲して！」

とつさにエルレイドはその技を躲したが、「ハイドロポンプ」の衝撃で水が大きく揺れると、バランスを崩してしまった。

「【あまごい】の効果が大い。防ぎきれないか！」

天候を味方につけたギャラドスの攻撃にノゾミとエルレイドに緊張が走る。

### 《観戦席》

怒涛の戦いの中、サトルとリーリエとタケシによる考察が始まっていた。

「ギャラドスはメガシンカすると水・悪タイプに変化するから、エルレイドの格闘技が決まれば大きなダメージを与えられるよ」

「ですが、それはエルレイドのエスパ―技はギャラドスに効果が無いとも捉えられます。

反対にギャラドスの悪タイプもエルレイドには効果は抜群。技が一つ封じられているとなればエルレイドよりも有利であると考えられます」

「それに、『あまごい』によつて水タイプの威力が上がっている故に降り注ぐ雨が視界を少しでも遮る働きも兼ねている。水のフィールドを上手く作っているカスミの方が有利と言えるな」

### 《ジム戦》

ギャラドスの牙とエルレイドの刀が交じり会う音が響きあう。引いては打ち。引いては打ちと二体のポケモンは少量のダメージに抑えながら交えていた。だが、状況下はリリーエとタケシの推測通りになる。

悪タイプと変わったギャラドスに対して効かないエルレイドの得意技「サイコカッター」もギャラドスの攻撃を凌ぐための防御技となっているし、雨で視界が遮られる所か唯一の足場も滑りやすくなつていて、うまく動く事が出来ないでいる。

「エルレイドー！」

ノゾミは何度も呼びかけてはエルレイドが混乱しないように注意を払っていた。

「【しんくうは】!!?」

「【ハイドロポンプ】!!?」

二つの技がぶつかり合うと大きな水しぶきが立ち上る。ノゾミはギャラドスの動き

に注意するようにエルレイドに呼びかける。

「ギャラドス!!!」

カスミの声が聞こえると同時に、水しぶきが晴れるとギャラドスの姿がなくなっていた。だが、ここまでの闘いでノゾミにはギャラドスの行動パターンを読んでいた。水中に潜つての下から攻撃だ。その証拠に薄っすらと水の底から黒い影が浮かんでいる。

エルレイドはその場からジャンプすると、ギャラドスが顔を出す瞬間に格闘タイプの技を決めようと身構えた。

だが、一枚上手だったのはカスミの方だった。

「ギャラドスー! 『ほうふう』 !!?」

ギャラドスは水中から顔を出さずに、フィールドの水と一緒に激しい竜巻をエルレイドを包み込んだ。中心にいるエルレイドはその竜巻に封鎖されてしまった。

「どお? このコンボは! これを打ち破ったチャレンジャーは一人もないんだから!」

【つるぎのまい】で攻撃が上がったとしても激しい竜巻にエルレイドの技で打ち消すのは難しかった。しかし、これを前に諦めるノゾミではない。悩みに悩んだノゾミはある策をエルレイドに指示を出す。

「エルレイド! 『しんくうは』 !!? 同じ回転で打て!!!」

「お…同じ回転?」

「エルレイ!!?」

ノゾミの指示通りエルレイドはギャラドスが作り出した竜巻の回転方向と同じに真空波の竜巻エネルギーを中心に放った。力任せに突破するよりも、性質を利用する。同じ方向に内側から膨張させたエルレイドの竜巻がギャラドスの竜巻を一気に錯乱させた。

「ぼうふう」を打ち消しちやっただけ……」

突破された事がなかったこのコンボを打ち勝ったノゾミとエルレイドに驚いていたのだが、そんな暇はない。そのエルレイドの方をみると竜巻によって天井に届く位置にまで高く飛んでいた。

「【つるぎのまい】!!?」

さらに攻撃力を上げたエルレイドを見て、カスミはすぐに指示を出した。

「ギャラドス! 【かみくだく】!!?」

水中から大きく飛び出したギャラドスはエルレイドに向かってその大きな牙を具現化させたエネルギーを放った。空中で身動きがとれないエルレイドにギャラドスの「かみくだく」が迫る。悪タイプの技はエルレイドに効果は抜群。だが勝負を決めようと急かせすぎたのか、それはギャラドスを近くまで引き寄せるためのノゾミの策だとはカスミに気づいていなかった。

エルレイドは「つるぎのまい」で大きく刀を舞ったその風圧によって雨雲を打ち消した。打ち消した部分から差し込むフィールド上を照らすスポットライトの光にギャラドスは目を奪われてしまった。

しまったと思ったがもう遅かった。次の指示を出そうとするカスミの前にノゾミはありつたけの力で指示を出した。

「エルレイド！『インフアイト』!!？」

「エルレイイイ!!！」

四段階攻撃力が上がった力でエルレイドはバランスを崩したギャラドスの懐に飛び込むと突撃する。

拳の猛攻にエルレイドの最後の拳がギャラドスを思いつきり水面へと叩きつけた。

「あっ!!！」

大きく上がった水しぶきがリーリエ達がいる観戦席まで上がった。

水の中からはメガシンカエネルギーが解かれたギャラドスが浮かんでいた。浮島に着地したエルレイドはノゾミの方を見ると拳を高く上げた。それを見たノゾミも同じように拳を上げた。

「ギャラドス戦闘不能！エルレイドの勝ち！よって勝者はチャレンジャー、ノゾミ！」

審判の判定により、ノゾミの勝利となった。

「ありがとうギャラドス。ゆっくり休んでね」

「エルレイド。ご苦労様」

互いに健闘してくれた二体をモンスターボールに戻すと、バトルフィールドの中心で握手を交わした。バトルに負けたカスミもとても満足げな表情をしていた。

「ありがとうノゾミ！貴方のコンテスト技には惑わされてばかりだったわ」

「こちらこそ！カスミさんとのこの試合で華麗に技を見せるだけじゃダメだと改めて分かりました。これを経験にポケモン達の技の威力も魅力の一つとして磨いて行きたいと思います」

「ありがとう！じゃあこれ受け取って！ハナダジムを降した証、ブルーバッジよー！」

「ありがとうございますー！」

初めて手にしたジムバッジをジムバッジケースに閉まった。ポケモンコンテストと違った胸が熱くなるようなこの闘いはノゾミのこれからの糧になるだろう。シンオウ地方を回っていた頃では考えられなかった闘いに高まる感情を抑えながらノゾミは大きく深呼吸をした。ここ始まるんだ。

かのじよ  
ノゾミの研鑽が

二人の健闘に観戦席からは大きな拍手が巻き起こっていた。

## 第二十一話 VS ハナダジム 水のフィールド

「サクラ姉さん。なんで勝手なことをするの！」

ノゾミとの試合が終わり。何処となくサイドステージから聴こえてくる拍手に目をやると、そこには自分の一番上の姉であるサクラとタケシ。そして大勢の一般トレーナーの姿があった。

それを見て驚いたカスミはすぐにサクラから事情を聞くと、身勝手な姉に対して注意を促し始めた。

「だって、折角いらしてくれたトレーナーさん達に何もせずに戻ってもらうなんて出来なかつたもん」

「だけど、私はともかくチャレンジャーのことを考えてよ！あんたもよタケシ！元ジムリーダーなら解るでしょ！」

「いや〜すまん」

カントーにいながらも互いに忙しく、あまり顔を合わせる事がなかったため久しぶりに会えて内心嬉しかったのであったが、軽率な行動を取った二人に言いたい事で頭が一杯になってしまった。

「あら、なんの騒ぎ?」

「おお!!!アヤメさん!!!」

と、カスミの二番目の姉のアヤメが帰ってくると、脱兎の如くタケシはアヤメの元へと駆け寄った。

「相変わらずお美しい。どうでしょうか。この後、一緒にお茶でも」

グ  
リッ

「いてててててて!!!」

「まだ話は終わってないでしょ!」

そんなタケシにカスミは耳たぶを引っ張りながら、アヤメから引き離れた。そして、

「なになに?どうしたの?」

「おお!!!ボタンさん!!!」

今度は三女のボタンが帰ってくる。

「貴方の心の恋人。自分タケシがここハナダジムへと戻って参りました。」

ズ  
シ  
ユ  
ン  
!!!

「しびれびれ!!!」

「ケツケケケケケ!!?」

【どくづき】で麻痺したタケシをグレッグはカスミの元へと身を渡した。渡し終え

たグレッグはそのまま自分のモンスターボールの開閉スイッチを押すと戻って行った。

「タケシさんって本当肉面白い人だな！」

「うん…そうだね」

「あはは…」

サクラとタケシが怒られている中、そんなリーリエ達の方には一人の人物が歩み寄って来た。

「やあ！あんた達。観戦席に座ってた人達だよね」

リーリエ達の方へ歩み寄って来たのは、先ほどカスミとのバトルに勝利して、ジムバッジを手に入れたノゾミだった。

「あつはい！あの…ごめんさい。盗み見るような真似をしてみました…」

「大丈夫だよ！だけど…コンテストと違って下手に緊張したから、なんか恥ずかしいな」  
すぐにリーリエは勝手に試合を見学してしまった事を謝ると、ノゾミは照れ臭そうに笑っていた。

そんなノゾミにカスミの説教から逃れたタケシが歩み寄る。タケシの姿を見たノゾミも軽く手を上げては合図を送った。

「久しぶりだな！ノゾミ」

「久しぶりだねタケシ。そうか！あんたとサトシはカントー出身だったよね！」

タケシとの再会を終えた後、リーリエ達の前に振り返ると自己紹介を始めた。

「私はシンオウ地方のキツサキシテイのノゾミ。訳あつてカントーでジム巡りをしてるんだ」

「シンオウ地方!!!」

シンオウ地方と聞いたカノンは一歩前進すると、目を輝かせながらノゾミの手を握った。

「実は私もシンオウ地方出身なの！小さい時にカントーに引っ越してきたんだけどね！」

「そ…：そうなんだ」

突然の事に驚くノゾミをそっちのけにカノンの質問漬けのマシンガントークが吹き荒れる。これを見かねたサトルはすぐにカノンの肩に手を取るとそのまま引き離れた。

終始一同はカノンの破天荒さに苦笑いをした。

「そうだ。ノゾミ！どうしてカントー地方に来てジム巡りをしに来たんだ？コンテストの方はどうした？」

「ああ…：やっぱり変に思うよね。なんせ昔の私はジムとコンテストを掛け持っている人を嫌ってたんだからね…」

ジムとコンテストの両方のチャレンジは一つの事に全力に取り組めていない姿勢だと嫌悪していた。そんなノゾミがジム挑戦しているのにタケシが疑問に思っている事は無理もない。ノゾミはふとモンスタールボールから自身の相棒であるニヤルマーを出してあげると、ニヤルマーの顎を撫でながらその質問に答えた。

「ちよつと停滞しちゃってね。今の私に足りない部分…一から鍛え直すという意味で挑戦しているんだ」

「そうか…で、どうだ!!? ジム戦をやった感想は」

「コンテストとは違う熱さを感じたよ。サトシがあんなに熱くなる理由も分かるな。てっ、あいつの場合は熱くなりすぎってのもあるけど!」

「あははは! それもそうだ!」

そんな二人の談笑を聞いていたリーリエ達はある事を思い出した。思い出したリーリエはすぐにタケシに問いだした。

「そうだ! タケシ。貴方に聞きたいことがあります!」

「?」

~~~~~

「まさかこんな偶然がこうも重なるとはなあ！」

「僕たちも驚いたよ。まさかタケシがサトシと一緒に旅をしていた仲だったなんて……」

「俺もさあ。しかしあのサトシが留学とはなあ。彼奴のことだ口々に勉強としかしないだろ」

「あ……それは一理あるわ」

「確かにサトシは常識では通用しない所もあるからね」

「ここまで一緒に旅をしてきたのにも関わらず、こんな接点があったとは今になって分かった。」

「そのままりーリ工達はノゾミとタケシと同じようにサトシと旅をしていたカスミを加えて、ポケモンセンターでお茶をしていた。」

「それよりも聞かせてよ！サトシさんと旅した話！」

目を輝かせているカノンの他、サトルとソウタも大きく頷いていた。自分たちの憧れているトレーナーと旅をしていた人が目の前にいるのなら話を聞きたいのは当然の反応だ。カノンの問いにまずは最初に旅を一緒に同伴したタケシとカスミが口を開いた。

タケシが初めてサトシと出会ったのは自分がニビジムのジムリーダーをしていた頃に挑戦者として現れたのがきっかけだった。その後、サトシにジムバッジを渡したと同時に自分の父に背中を押された事もあって、世界一のポケモンブリーダーになるべくサトシと旅を始めた。

カスミはというとタケシみたいに最初から友としてではなく、ただ自分の自転車を壊された修理代を支払わせるために行ったと言った方が正しいのであろう。ただ、そのきっかけがなければサトシと旅をする事はなかったと思うと、少しばかりその最悪な出会いには感謝している。

そのまま今のリーリエ達と同様にジム巡りの旅をしてやつとの想いで八つのジムバッジを集めたサトシは始めてのポケモンリーグへと出場した。ただ、ほんとうどのバッジはお情けなんだけど、という言葉にはリーリエ達は少しひっかかてしまった。

ポケモンリーグの話題に変わるとその当時を中継でみていたサトルとカノン。そしてソウタも話題に加わった。

「確かセキエイ大会はリザードンの戦意喪失で負けたんだよね。その後にはリザードンと

はどうやって仲良くなったの？」

「あーそれはね！」

カスミの話からカントーのポケモンリーグが終わった後、オレンジ諸島のポケモンジムへと挑戦しに行ったと言う。その途中、一時的に離脱したタケシに代わって、ケンジを加えて旅をしたと言う。そう、リーリエ達がオーキド研究所で出会ったオーキド博士の助手のその人だ。

そして、道中のポケモンバトルので強敵トレーナーとの勝負に敗れたりザードンをサトシは夜通し看病した事をきっかけに心を開いたという。今はサトシの主力ポケモンとして活躍している。なお、オレンジ諸島でのポケモンリーグは優勝を果たしている。だが、オレンジリーグは他の地方とのポケモンリーグとは異なるために優勝してもチャンピオンリーグへの参加資格が得られるわけではなかった。

オレンジ諸島での旅を終えた後にはタケシと再会を果たすと、そのままジョウト地方へと向かったと言う。

「でも今じゃ本当に想像つかねえよな。だってその次のジョウトでのシロガネ大会。あの時のリザードンVSカメックスの闘い凄かったもんな！」

「うん！サトシさんとリザードンの強い信頼関係はテレビ越しでも伝わって来たからね！」

ここまでの話を聞いてサトシとリザードンの関係には意外だったようだ。タケシ達の話からサトシも今の自分と同じような壁にぶつかっていた事にリーリエも驚いていた。

「そーいや、何でホウエンリーグでは他のポケモン達を使わなかったのかな？今までにゲットしたポケモンを使えば優勝は出来たはずなのに…」

「ホウエン地方では初心に戻って、最初のパートナーのピカチュウだけを連れて新たな気持ちで旅を始めたみたいなんだ。だからホウエンリーグではホウエン地方でゲットしたポケモン達で挑もうと最初から決めていたんだ。」

「私が一番好きなのはシンオウリーグかな。何よりもゴウカザルVSエレキブル！手に汗握りながら観ていたもん。ねえ、ヒコザル！」

「ヒココツ!!?」

「そしてイツシユリーグにカロスリーグ！」

「あそこでルカリオに進化してしまうのは想定外だったね」

「惜しかったよな」

「ゲッコウガにはびつくりしたよ！まさかメガシンカとはまた違う進化をしちゃうなんてね！」

「それは私も観たわ。あの水タイプの子でしょ。欲しいなあ」

「相変わらずだな。カスミは！」

「あはは！私はジョウト地方まで一緒に旅をしてきたんだけど、彼奴の無鉄砲振りに着いて行くのは大変だったわ」

「ふふっ！それはわかる気がします」

「だけど、一緒に旅をしたからこそ彼奴からもいろいろと教えられた事もあるのよね」

「ああ、そうだな。今は何処で何してるのかな…」

ふと、タケシの一言につられてリーリエはサトシを思い浮かべながら天井へと目線を当てた。そんなリーリエにカスミは好奇心満載な表情でリーリエに問いかけた。

「ねえ、今度はアローラにいた時のサトシの事教えてくれない？」

「はい！もちろんです！」

~~~~~

後半はアローラでのサトシとの話が盛り上がった。気がつけば日は落ち、空の暗転と共に月が顔を出していた。

そのまま夕食を終えると、カスミはジムへと戻り、リーリエ達はそれぞれの宿泊先へと荷物を降ろした。ネグリジエに着替えたリーリエはシロンを抱きかかえながら、光る満月を眺めながっていた。

「サトシの旅の話。わたくしが学校へ行き、休みの日には部屋で本読んでいた頃には、サトシはいくつもの地方を転々と旅をしていたのですね。自分の足で踏み込んで行ったからこそ、得られた経験を自分の中へと吸収して、自分を作り上げて行ったのですね。外に出ないと分からない事は本当にたくさんありますね。シロン！」

「コーン!!？」

旅をしていればいずれ再会できると思っただのですが、本当にサトシは今何処にいるのでしょうか。まだ旅を始めてもうすぐ一ヶ月となりますが、少しばかりが強くなったわたくしを見て貰いたいものですね。

「わたくしは…彼に…近づけたのでしょわか」

シロンの頭に自分のあごを乗せながら、サトシの事を思うリーリエに…

「えっ!? サトシさんに？」

「!!」

突然、部屋から現れたらカノンに驚いた。今回はハナダジムの対策を練るために一人の時間も必要なのかと思ひ、部屋はみんなバラバラになっている。だから、リーリエの様子を覗きに来たカノンにリーリエは驚いたのだ。そして、カノンは少しばかり頬に赤みが混じっているリーリエを見てはカノンは悪そうな顔でリーリエの顔を覗いた。

「大丈夫だよリーリエ！この事は私とのだけのひみ。つ♡たがらね！」

「ちよ／／カ!!!カノン／／／」

「私も出来る限りのサポートはしてあげるからね♪」

「だ／／だから／／!!!そんなんじや、ないですってええええええ／／／／／／／／／／／／」



ハナダジム戦！リーリエの二回目となるジム戦だ！

「ただいまより、ジムリーダーのカスミとチャレンジャーのリーリエによるハナダジム、ジム戦を開始します。使用ポケモンは三体。どちらかのポケモンがすべて戦闘不能になりますとバトル終了となります。なお、ポケモンの交代はチャレンジャーのみ認められます。」

ジムのルールはニビジムと変わらない。呼吸を整えたリーリエは先にカノン達がいる観戦席の方へと振り返った。

「シロン！今日は応援お願いね！」

《観戦席》

「コーン！！？」

リーリエの呼び声にシロンは大きく返事を返した。今回はシロンはお休みのようだ。

「シロン。今日は一緒に応援しようね♪」

「コーン！！？」

「さて、リーリエがどんなバトルするか楽しみだね！」

リーリエの今の実力を興味津々に眺めるノゾミと一緒にカノン含む四人もリーリエの二回目のジム戦を見学する。

《ジム戦》

「行くのよ。ヒトデマン！」

「ヘア!!?」

審判の合図と同時に先に繰り出したのはジムリーダーのカスミだ。カスミの先鋒はヒトデマン。昨日見たスターミーの進化前に該当するポケモンである。

「一体目はヒトデマンですね」

『お任せを』

すぐにロトムはヒトデマンの写真を撮ると解説を始めた！

『ヒトデマン ほしがたポケモン

水タイプ

海辺に多く生息している。夜になると中心のコアが赤く輝き出す。まるで星のよう

に見える』

昨日とは違うポケモン。やはりノゾミさんの時とは全く選出が異なりますね。ここは水のフィールドでわたくしのポケモンの中で自由に動き回れるのは…この子です！

「コイキング！お願い致します！」

「ココツ!!？」

リーリエが選んだのは同じ水タイプのポケモンのコイキング。リーリエの手持ちに

加わってからの初陣にコイキングは気合が入っている。水のフィールドって事もあるが、何よりもリーリエのコイキングは頑張り屋であり自分の信念を貫こうとする強情な部分もある。先鋒に選んだのもその勢いで流れ掴むためでもあるとも言えよう。

### 《観戦席》

「リーリエの一体目はコイキングだ」

「水系同士のバトルか！面白くなりそうだな。頑張れよリーリエ！」

ソウタの声援に気づいたリーリエはさらに気合が入る。もう一度コイキングとコンタクトを取ったその後、すぐにコイキングはヒトデマンと向かい合った。

### 《ジム戦》

「いくわよ。リーリエ！」

「こちらも全力で行きます！」

それぞれの意気込みを述べた同時に：

「バトル開始!!」

審判による試合開始の宣言が下された。

?リーリエVSカスミ?

「さあヒトデマン！『バブルこうせん』!!?」

「へア!!?」

先に攻撃を仕掛けたのはカスミの方だ。無数に撃ち込まれた泡の砲弾が一齐にコイキングに向かって行く。水系のコイキングにとって効果はいまひとつであるが、追加効果で素早さを下げられてしまう場合もあるため、直撃は避けたいものである。

「コイキング! 【はねる】 です!!?」

「ココツ!!?」

コイキングは尾を勢いよく水面に叩き込むと、その反動で天井に向かって飛び上がった。ただ跳ねるだけのこの技も使い方によつては緊急回避にもうつつけの技だ。

「そのまま 【たいあたり】 です!!?」

「コツ!!?」

「へアツ!!!」

一気に急降下した体当たりはヒトデマンのコアの中央部位を捉えた。世界最弱と言われたポケモンにしては、リーリエのコイキングの物凄いパワーにカスミは一瞬目を見開いていた。

急降下で勢いがついたとはいえ、あのパワー…あのコイキング相当鍛えられているわね。

リーリエのコイキングの攻撃力から見て良く育て上げられているとカスミは感心し

た。

「ヒトデマン！【こうそくスピン】よ!!?」

「もう一度【たいあたり】です!!?」

「ヘア!!?」

「ココツ!!?」

それぞれの技の指示を聞いた二体は水中へと潜ると同時に互いにぶつかり合う。地上とは違って自由に泳ぎ回れる水系ポケモン同士の水中バトルは迫力がある。観戦席にいたカノン達にもそれは伝わっていた。

元々カスミは物理攻撃しか覚えられないコイキングに対し、接近戦に持ち込まれないためにも特殊攻撃で距離を取っていくつもりでいたのだが、リーリエとコイキングの根性を前に真つ向勝負を受けて見たくなつたみたいだ。目の前のトレーナーを見て熱くなるのは誰かの受け売りなのかもしれない。

「ココツ!!!」

「ヘア!!!」

二人の指示の後からコイキングとヒトデマンはどちらとも勢いが衰える事なく激しいぶつかり合いの嵐を巻き起こしている。息を切らしながらも負けじと突っ込んで行く二体を見ればいつ体力が尽きてもおかしくないのは上級トレーナーでも初級トレー

ナーでも理解できる。

次です…あの攻撃で一気に決めます！

もう一度、コイキングとヒトデマンがぶつかり合うその瞬間にリーリエは別の指示を下した。

「コイキング！」「じたばた」です!!?」

リーリエの指示を聞いたコイキングは体を大きく揺らし始めた。「じたばた」は体力が残り少ないほど威力が増す技であり、その最大威力は二百もなる。最強物理技とも称される「ギガインパクト」を超える威力を発揮するのだ。この攻撃力ならヒトデマンの「こうそくスピン」ごと吹き飛ばすのは容易いと思っただが…

やっばりね…そうくると思っただわ。

コイキングが覚える技を全て理解しているカスミにはリーリエの手の内を読めていた。カスミの指示がなくともヒトデマンは攻撃をするのを止めると、接触するギリギリの所で躲した。攻撃が躲されたコイキングの真下に潜ったヒトデマンは距離を取ると頭頂部の先端部位をコイキングに向けた。

読まれていたリーリエはとっさのヒトデマンの行動にすぐに対処する事が出来なかった。

「ヒトデマン！」「みずてつぼう」!!?」

勢いよく噴射された水流はコイキングに攻撃を食らわせただけでなくそのまま外へと一気に押し出しては放り出した。打ち上げられたコイキングは身動きが取れない状態になってしまった。そこに追い打ちをかけるようにして水面から顔を出したヒトデマンはさらに攻撃を仕掛けた。

「いまよ！【バブルこうせん】!!?」

「へアア!!?」

「コイキング！もう一度【じたばた】です!!?」

「ココココ!!?」

空中で身動きが取れないコイキングにヒトデマンの攻撃が迫りくる。だが、その攻撃をコイキングは体を揺らし始めると尾を使って次々と弾き返しては防いでいく。

「そのまま【とびはねる】!!?」

「コオオ!!?」

全ての【バブルこうせん】を防いだコイキングはそのまま猛スピードでヒトデマン目掛けて突進していく。風のエネルギーを纏っているため、先程食らわせた【たいあたり】よりも攻撃力は増しているであろう。

「ヒトデマン！【ダイミング】!!?」

「へア!!?」

迎え撃つきだ。ヒトデマンはいったん水の中へ潜ると、水の衣を纏いながら一気に水面から飛び出した。

まるで空と海の衝突だ。それぞれの技がぶつかり合うと、火花を散らしながらの押し合いが始まった。一瞬でも気が緩むとやられてしまうこの場面、一步も引かない二体はやがて大きな衝撃波と同時に水面へと叩きつけられてしまった。

「コイキング！」

「ヒトデマン！」

暫くの静寂の中、二人に緊張が走った。やがて二体のポケモンが水面から現れた。

「コイキング 戦闘不能！ ヒトデマンの勝ち！」

水面から顔を出したコイキングは目を回していた。最初の勝ち星を手にしたのはカスミだった。

《観戦席》

「軍配が上がったのはカスミさんの方か」

「コイキング…頑張ったのに」

「コーン…」

《ジム戦》

「ココツ…」

勝負に敗れたコイキングはそのままリーリエの元へと戻った。勝利を得られなかったことに落ち込んでいるコイキングにリーリエは優しく頭を撫でては励ました。

「ありがとうございます。コイキング。良く頑張ってくれましたね！」

「ココツ…」

「これからもっと頑張って行けば良いのです！今はゆっくり休んでください」

「ココツ!!?」

リーリエの言葉に笑顔が戻った。元気になったコイキングを見て安心したリーリエはモンスターボールへと戻した。

モンスターボールへと戻した後、すぐにリーリエはヒトデマンの状態を確認した。

コイキングのおかげでヒトデマンもかなりのダメージを受けているはず。まだ勝負は終わっていません。頑張ってくれたコイキングのためにも絶対に勝ちます。

決意を新たにリーリエは二体目のポケモンをバトルフィールドへと投入した。

「キモリ！お願い致します！」

「キヤモ！！？」

「キモリ！相手は水系のポケモンです！この場では水中では上手く動けない貴方の方が不利ですが、落ち着いて勝ちを取りに行きましょう！」

「キヤモ！！？」

気合十分に飛び出したキモリはリリーリエの忠告を聞くと、そのまま対戦相手であるヒトデマンを睨みつけた。そんなリリーリエのキモリにカスミは身構えた。

「草タイプね。行くわよ！ヒトデマン！」

「ヘア！！？」

カスミの合図にヒトデマンもさらに気合を入れ直した。そして審判による開始の合図が下された。

「新しい力をぶつけて行きましょう！キモリ！〔エナジーボール〕です！！？」

「キヤモ！！？」

先に動いたキモリは両手を合わせると、翠緑に輝くエネルギー砲をヒトデマンへと放たれた。キモリの新しい技に驚いているカノン達の声が響きながらヒトデマン目掛けて放たれた。

「ヒトデマン！〔こうそくスピン〕！！？」

「へア!!?」

ヒトデマンは水中に潜ってキモリの攻撃を躲したら、そのまま高速回転を加えた体当たりをキモリに仕掛けた。

「躲して!」

スピード自慢のキモリはギリギリのところを躲す。昨日のノゾミのスターミの「こうそくスピン」を見る限り、また水中に潜られてしまわれては捕える事が出来ない。そうはいくものか。

「キモリ!水面に向かって「はたく」攻撃です!!?」

「キャモ!!?」

リーリエの指示でキモリは大きく尻尾で水面を叩いた。衝撃で水しぶきが舞う中、ヒトデマンはそのまま水中から弾き出された。そしてキモリはヒトデマン目掛けて飛び出した。

「来るわよ!ヒトデマン【みずてっぼう】!!?」

「へア!!?」

ヒトデマンは向かって来るキモリに攻撃を仕掛けようとしたその瞬間

「へ…へア…」

ヒトデマンの攻撃をする手が止まってしまった。何が起こったか分からないカスミ

はヒトデマンの様子を伺う。見た感じ身体が痺れてしまっているようだった。

「まさか！麻痺してるの!!!」

そうヒトデマンはさっき受けたコイキングの「どびはねる」の追加効果により麻痺状態になっていたのだ。ヒトデマンには特性《しぜんかいふく》があるが、ジムリーダーの交代は認められない。そのルールによってヒトデマンの特性も活用されない。動きが止まったヒトデマンに向ってキモリは距離を詰めて行った。

「【エナジーボール】!!?」

「キヤモ!!?」

動けないヒトデマンに接近できたキモリは「【エナジーボール】」を押し当てた。緑色の発光とともに吹き飛ばされたヒトデマンはそのままカスミを通り越してジムの後の方の壁へと叩きつけられた。カスミはヒトデマンを呼びかけるも、ヒトデマンは壁に張り付いたままコアが点滅しながらぐったりとしてしまった。

「ヒトデマン戦闘不能！キモリの勝ち！」

「やった！ありがとうございます。キモリ！」

「キヤモ!!？」

コアの点滅はヒトデマンの戦闘不能を知らせるものだったようだ。

一体目を倒せた事にリーリエとキモリはお互いにガッツポーズを取った。

「ありがとうヒトデマン。ゆっくり休んで」

ヒトデマンの状態を見抜けなかった事を反省してからカスミはリーリエの方へと顔を向けた。

「行くのよ！スターミー！」

「フツ!!？」

カスミの二番手はその進化系のスターミーだ。昨日のノゾミ戦では「こうそくスピ」や「サイコーウエーブ」を使ってくる事は分かっている。その技に注意するよう頭の中で整理すると、次の試合に集中した。

「始め!!」

「キモリ！【エナジーボール】です!!？」

「【こうそくスピ】よ!!？」

キモリが打ち出した技をスターミーは「こうそくスピ」で軌道を変えながら躲すと、キモリに向かっていく。

「でんこうせっか!!?」

躲されてもプランはあった。次にキモリは物凄い速さでスターミーへと近づいていく。これはニビジムでも見せた「でんこうせっか」のスピードを利用しての追い討ち攻撃だ。一気にスターミーへ近づいた直後に「エナジーボール」を当てるのがリーリエの狙いだ。そして、その狙い通りにキモリはスターミーへと近づく事ができた。そして、すぐにキモリは「エナジーボール」を放つ体勢を作った。

「まずい! スターミー!」【こぼれるかぜ】!!?」

「フツツ!!?」

「キヤモ…」

「キモリ!」

だが、カスミはすぐにスターミーに別の攻撃の指示を下すと、スターミーは横回転したまま冷気でキモリを吹き飛ばした。

「負けないでキモリ! もう一度【でんこうせっか】です!!?」

「キヤモ!!?」

リーリエは再度同じ作戦でスターミーに接近しようとしたのだが、さつきよりも明らかにスピードが落ちてしまっている。すぐにキモリの接近に気づいたスターミーはそのまま【こうそくスピン】で弾き返した。

## 《観戦席》

「おい！キモリのスピードが落ちてるぞ！」

「【ごこえるかぜ】の追加効果で素早さを下げられたんだ」

シロンも使う技なので、追加効果にはリーリエも分かっていたのだが、まさか元から素早い種族値を持つキモリが肉眼でもすぐに追いつけてしまわれるほど素早さが下がっているとは思わなかったのであろう。

## 《ジム戦》

弾き返されたキモリはジムの壁にひつついていた。冷やされた足を見ては辛そうな表情をしていた。下唇を噛み締めながらリーリエの指示を待つ。

「キモリ！【エナジーボール】!!？」

「スターミー！【サイコーウェーブ】!!？」

「キャモ!!!」

自慢のスピード愚か動作まで若干鈍ってきたキモリよりも先にスターミーの攻撃が決まってしまった。吹き飛ばされたキモリは水中へではなく近くに設置されている浮島へと不地着する。

「続けて【バブルこうせん】!!？」

「フツ!!？」

さらに起き上がれていないキモリに「バブルこうせん」が襲いかかる。すぐにリーリエはキモリのモンスターボールを取り出した。

「戻ってください！キモリ！」

間一髪のところまでキモリをモンスターボールに戻す事が出来た。

「危ない所だったわね。さあ、次はどの子で来るのかしら」

互いに手持ちが二体であるのにカスミは余裕そうな表情を見せる。まだ隠している手段があるのかとリーリエの頭の中を遮るが、両手で軽く両頬を叩くと、集中と自分に言い聞かせた。

「ムクバード！お願い致します！」

「ムックバー！！？」

リーリエの最後のポケモンはムクバードだ。空中戦を得意とするムクバードにはどんなフィールドが来ても関係はなかった。

「行くわよ！スターミー！」「こごえるかぜ！！？」

「フツ！！？」

「躲して！」「でんこうせっか！！？」

「ムクツ！！！」

今度は「こごえるかぜ」を躲すと、スターミーの背後へと回り込んだ。そのままスター

ミーに体当たりを仕掛けるムクバードにカスミはすぐに指示を出す。

「スターミー！潜って！」

スターミーは水中へと潜ると、ムクバードの攻撃を躲した。だが、水中に潜ったとなると、昨日見た「こうそくスピン」の連続攻撃が来るかもしれない。リーリエはすぐにムクバードを上昇させて距離を取らせた。

「【こうそくスピン】!!?」

「【かげぶんしん】!!?」

案の定。リーリエの読んだ通りの攻撃が飛んで来た。それをムクバードは複数の分身を作り上げて躲すと同時にスターミーを惑わした。

「それなら、スターミー!!!」

カスミの指示にスターミーは再び水中へと潜る。すぐに出て来ようとはせずに、スターミーは体を大きく回転させると渦潮を発生させた。その渦潮は大きな水流とともに空中にいるムクバードへと放たれた。

「ムッククク!!!」

「ムクバード!!!」

立ち昇る水流を纏った竜巻にムクバードは吹き飛ばされた。スターミーは水中にいるため攻撃が届かない。大きく巻き起こる渦潮に太刀打ちできないでいる。

## 《観戦席》

「地形を利用した水ポケモンならではの技だね。流石はジムリーダー。見せてくれるね」

「んだよ。俺の時はあんな事してこなかったぞ！」

カスミの咄嗟の判断に一同は驚いていた。対して威力が高くない「こうそくスピン」をこうもアレンジを加えて攻撃力を倍増させるなどジムリーダーとしてでなくベテラントレーナーとしてカスミの強さを感じた。

## 《ジム戦》

「どうしたら…」

激しく巻き起こる竜巻はだんだんと範囲を広げてはムクバードを再び飲み込もうとする。竜巻を見続けたリーリエは昨日見たカスミのギャラドスの暴風を対処したノゾミのエルレイドを思い出すと一つの案を絞り込んだ。

「ムクバード！体を回転させながら「はがねのつばさ」です!!？」

ムクバードは翼を硬化させると、体を右に回転させ始めた。

「そのまま竜巻の中に!!!」

「ムックバアアア!!!」

ムクバードはそのまま竜巻の中心部へと一直線に突っ込んで行った。中心部は無風

であり、僅かな空洞になっっているはずであった。そこを辿れば水中に潜っているスターミーに攻撃を決める事が出来る。さらに回転を加えることによって渦潮の回転力をも利用して攻撃力を高める働きも加えている。一直線に突き進んで行くムクバードは底にいるスターミーの姿を捕えると、そのまま遠心力で威力を上げた硬化させた翼をおもいつきり振りかざした。

「フツ!!!」

振りかざされた翼によって、衝撃でプールの水が割れると攻撃を受けたスターミーはそのまま水中の外へと放り出され浮島に不地着した。ムクバードはそのまま割れたプールの水からすぐに飛び出すと、そのままスターミーに向かって行く。

「頑張つてスターミー!」「バブルこうせん!!?」

「ムクバード!」「かげぶんしん!!?」

すぐに立ち上がったスターミーは「バブルこうせん」でムクバードを狙い撃ちする。それをムクバードは再び分身を作り出してはその技を躲した。

「そのまま【でんこうせっか】!!?」

「クルルル!!?」

分身を残したままムクバードは一直線にスターミーへ突っ込んで行く。異様なスピードと前後左右にどれが本体か見分けがつけられない分身達を引き連れたまま、ムク

バードの「でんこうせっか」が決まった。

「【こここえるかぜ】!!?」

「【つばめがえし】です!!?」

蹠跟めきながらもスターミーは冷気をムクバードに向かって放つ。それをムクバードを負けじと嘴にエネルギーを集中させると、冷気の突風に押されながらも急降下しつつスターミーに向かって突撃した。

追撃されたスターミーはそのまま後ろの方へと吹き飛ばされると、ヒトデマンと同じようにコアが点滅してしまった。

「スターミー戦闘不能!ムクバードの勝ち!」

スターミーの戦闘不能が審判の口から下されると、ムクバードは空中を飛び回りながら勝利を喜んだ。

「やりましたね!ムクバード!」

「クルル!!?」

「お疲れ様。スターミー。ゆっくり休んでね」

《観戦席》

「やるね！リーリエ」

「ああ！【つばめがえし】も物に出来たようだな」

「かつこいいよ！ムクバード!!!」

「コーン!!？」

《ジム戦》

スターミーを戻したカスミはルアーボールを手にした。それを見たリーリエとムクバードはすぐに集中モードへと入った。

現時点では二体を残しているリーリエの方が有利とも見えるが、最後まで何が起きるか分からないのがポケモンバトルだ。水のフィールドからも不利な状況は変わらない。ないことはリーリエには分かっている。

「リーリエ！この子が私の最後のポケモンよ!!!」

「はい！」

「行くのよ！サニーゴ！」

「サゴサゴ!!？」

カスミの最後のポケモンはサニーゴだ。

『サニーゴ さんごポケモン』

水・岩タイプ

サンゴの枝は太陽の光を浴びると七色にキラキラと輝きとても綺麗。折れても一晩で元通りに生えてくる』

水岩タイプであるなら、ムクバードの「はがねのつばさ」なら大ダメージを与える事が出来る。だが、それはサニーゴも同じである。リーリエはムクバードのこのままの勢いに任せて続投させることに決めた。

「ムクバード！「はがねのつばさ」!!?」

「クルル!!?」

「サニゴツ!!」

ムクバードの攻撃は見事にサニーゴの頭部に直撃する。岩タイプは鋼タイプの技に弱い。サニーゴは頭部を抑えながら悶えている。

「いいですよ。ムクバード！もう一度です！」

「ムックバー!!？」

手応えを感じたリーリエは再度ムクバードに同じ指示を出す。ムクバードもスピードに乗っては硬化させた翼で空を切りながらサニーゴへと迫って行く。だが、すぐにカスミはサニーゴに指示を出す。

「サニーゴ！『パワージェム』!!？」

「サニゴツ!!？」

指示を聞いたサニーゴは宝石のように神々しく光り輝くエネルギー砲をムクバードに向けて放った。放たれた『パワージェム』はムクバードに直撃する。

「大丈夫ですか!!？ムクバード!!!」

「ムック!!？」

技を受けてプールへと急降下していくも、なんとか翼を広げたムクバードは不着寸前の所で体勢を立て直した。

立て直したもののムクバードは蹠踉めきながら飛行していた。岩タイプの技も、もちろんムクバードには効果は抜群である。

もう一度の接近攻撃は危険ですね。でしたら、サニーゴの様子を伺うのが適切。

リーリエはムクバードに後退するよう指示を出す。

「ムクバード……ここは【かげぶんしん】です!!?」

「ムック!!?」

さらに分身を出現させてはサニーゴの周りを取り囲む。安全な対策を取ったつもりでいたのだが、それはいとも簡単に崩されてしまった。

「【みずのはどう】!!?」

サニーゴは球体状に形成させた水のエネルギーを分身するムクバードではなく、プールにと放った。プールに放たれた「みずのはどう」は振動によって大きく四方八方へと波打ちをあげた。

飲み込まれたムクバードの分身が次々と消えていくと、本体を残したままムクバードを押し出した。

「立て直して……【でんこうせっか】です!!?」

「ムック!!?」

「【パワージェム】!!?」

「サゴ!!?」

押出されたものの力一杯に翼を広げたムクバードは猛スピードでサニーゴに突っ込んでいく。その予想外のカウンターにカスミもサニーゴもすぐには対処できないと思っていたのだが、幾多の挑戦者と戦ってきたハナダジムのジムリーダーを甘く見てし

まった。

ムクバードが接近する方へとサニーゴは「パワージェム」を放つ。躲すすべがなくそのままムクバードに直撃する。

「ムクバード!!!」

気力を果たしたムクバードはそのままプールへと不着してしまった。

「ムクバード戦闘不能！サニーゴの勝ち！」

二回目の攻撃には流石のムクバードも耐える事が出来なかった。

「戻って下さい。ムクバード！ありがとうございます。ゆっくり休んでください」

懸命に戦ったムクバードを戻すと、最後の一体を解き放つ。

「行きましょう！キモリ！」

「キヤモ!!？」

飛び出したキモリは軽やかに浮島に着地を決めた。その様子はスターミー戦でのダメージ感じさせないほどであった。

ハナダジムは終盤へと向っていく。

「キモリ！【エナジーボール】!!?」

先手必勝に相性の良い草タイプの技を放ったキモリの技はサニーゴへと向っていく。するとカスミは冷静に対処する。

「サニーゴ！【ミラーコート】!!?」

「サツゴ!!?」

躲さずにキモリの【エナジーボール】を受けたサニーゴはそのままそのエネルギーをキモリへと跳ね返した。跳ね返されたエネルギーはキモリを包み込んだ。包み込まれたキモリは雄叫びを上げながら吹き飛ばされてしまった。

《観戦席》

「跳ね返された!!」

「そうなんだよ！あのサニーゴこの技を使ってくるから厄介だったんだよ！」

リーリエを含む観戦席でバトルを見ているカノン達もサニーゴの【ミラーコート】に驚いていた。だが、驚いていたのは跳ね返された事ではなく、その威力にだ。

【ミラーコート】は自信が受けた特殊ダメージを倍返しに跳ね返す技だ。サニーゴは

岩・水タイプ。キモリの草タイプの技はサニーゴには通常よりも四倍近いダメージを受けてしまう。そのダメージを倍返しされてしまったら、キモリには相当なダメージが入ったのは間違いないな」

ジョウト地方で一緒に旅をしていたタケシにはカスミのサニーゴが「ミラーコート」を使ってくるとは予想していた。それよりもキモリの「エナジーボール」を受けてもサニーゴはすぐに攻撃に移せるほどでいた。おそらく「エナジーボール」の直撃を食らう所でわざと震めて受けるダメージを最小限に抑えていたのかもしれない。受けたダメージをおさえた所であっても、キモリに跳ね返ってくる四倍ダメージの倍返しの威力はかなりのものだ。

「だけど、「ミラーコート」はサニーゴもダメージを受けないと発動できないんですよ！  
だったら、まだリーリエの方が優先だよ」

「コン＝?」

カナンの言ったように、技を受け流されようとも震めたダメージは蓄積されれば長くは持たない。それに「ミラーコート」を発動させる前にサニーゴを先頭不能にすればいいのも確かだ。だが、カスミのサニーゴにはあの技も持っていることはタケシ以外に知る者はいない。

《ジム戦》

「キャ…モ…」

「大丈夫ですか！キモリ！」

サニーゴの【ミラーコート】には驚いたが、リーリエもカノンと同じような事を考えていた。【ミラーコート】の長所と短所を理解しているリーリエの目は諦めていなかった。

だが、ここでタケシが予想していたもう一つのサニーゴの技がカスミに指示される。

「サニーゴ！【じこさいせい】!!？」

「サツニ!!？」

その技も使えることにリーリエは唾然とした。サニーゴは自身を光り輝かせると、見る見る内に受けた傷が治して行く。光終えたサニーゴを見ると小刻みにジャンプしている元気に回復したサニーゴの姿があった。

【ミラーコート】に【じこさいせい】によるコンボ。受けたダメージを回復させられてしまえば、どう立ち回ればいいのか分からない。今は戦いの中でその攻略法を見つけない。見つかない。

「キモリ！【でんこうせっか】です!!？」

「サニーゴ！水の中へ」

キモリの【でんこうせっか】を避けるとサニーゴはキモリの技が届かない水の中へと

避難した。

「【じこさいせい】!!?」

さらに安全な水中の中で【【じこさいせい】】で回復する。

「水面に【はたく】攻撃です!!?」

「キャモ!!?」

「サニゴツ!!」

ヒトデマンの時にやった戦法でキモリはサニゴを水の中から引つ張り出すと、すぐにサニゴの姿を捕らえた。

「今です! 【エナジーボール】!!?」

「【みずのはどう】!!?」

吹き飛ばされたサニゴにキモリは【エナジーボール】を叩きつけるも、サニゴはそれを【【みずのはどう】】で相殺させた。

「【【じこさいせい】】!!?」

「サニツ!!?」

まさか…  
もしかしたら…

じこ…さいせい

何かを察したりリーリエは何か八かではあるけど、その可能性に賭けてみる事を決めた。その真剣な目はキモリにも伝わっていた。キモリも自分の主人であるリーリエに全てを任せる気である。キモリと相槌を立てるとキモリに指示を出した。

「キモリ！【エナジーボール】です!!？」

「キヤモ!!？」

《観戦席》

「えっ！【エナジーボール】!!!」

「【ミラーコート】の倍返しを食らっちゃまうぞ！」

「たしかに冷静な判断ではないみたいだね」

《ジム戦》

わたくしの読みが正しければ…カスミの次のこうげきは…

「サニーゴ！ 【ミラーコート】 !!?」

「サニゴツ!!?」

「躲して下さい！」

再びキモリの「エナジーボール」を受けたサニーゴはそのまま力一杯に跳ね返した。跳ね返された技はキモリに迫ってくるが、瞬時にキモリはそれをジャンプで躲した。するとすぐにリーリエは：

「もう一度！『エナジーボール』!!?」

なんとすぐに「エナジーボール」をキモリに指示を出す。カノン達は再びサニーゴの「ミラーコート」の餌食になってしまおうのではないかと思っていた。だが、

「サニーゴ！『パワージェム』!!?」

今度は「ミラーコート」ではなく別の技でキモリの技を相殺させて防いだ。

やはり、そうですよね。

何かを確信したリーリエはふと笑みを浮かべると、それに気づいたカスミはふとリーリエに笑みを立てて返した。

### 《観戦席》

リーリエの破天荒な攻撃の指示にサトルは突然に何か閃いたかのように、その場に立ち上がった。

「そうか……これは逆に『ミラーコート』封じになっているんだ！」

「『ミラーコート』封じ? どういうことだよ? サトル?」

最初の「エナジーボール」を「ミラーコート」で防いだのだが、二回目の「エナジー

ボール」は「パワージェム」で打ち消した。この一部始終を見てサトルの閃きは確信に変わった。

「ミラーコート」を発動するには倍返しにする技を受けなければならぬ。だけど、それはサニーゴにとつては大きな負担になるんだよ。その証拠にサニーゴは小まめに「じこさいせい」で回復しているからね」

サトルの言つた事にカノンとソウタはまだ意図を掴めていない様だが、それを聞いてサトルの言っている事を理解したノゾミも口を開いた。

「なるほどね。一回の【じこさいせい】だけでは完全に回復するのに追いつけていない訳だね。一見して強力な技とも見えるけど、全ての技を【ミラーコート】で対処してしまえば先に力尽きるのはサニーゴの方になる」

「そういう事だよー」

それを聞いてやつと分かったカノンとソウタは同時に声を揃えた。

「それに気づいちゃうなんて、凄いやりーリエー！」

「コーン!!？」

サトルとノゾミの説明で「ミラーコート」の欠点を知る事が出来た。

分析から勝つための糸口を探り当てながら、大きな逆境を跳ね返していくりーリエの力強さに元ジムリーダーでもあつたタケシは感心していた。

## 《ジム戦》

リーリエの観察力にはカスミも驚かされた。多くの挑戦者はサニーゴの「ミラーコート」を前に萎縮してしまうのだが、リーリエは諦めず戦いの中から勝利への活路を導き出して来た。

「本当に…驚かせてくれるわね」

初心トレーナーとは思えない諦めない強情な精神。カスミにはリーリエとサトシが重なって見えているようだった。

「どうしました？カスミ」

「なんでもないわ。さあ、行くわよ！泣いても笑ってもこれがラストバトルよ！」

「はいー！」

カスミの声にリーリエも大きく返事を返した。両者の気合の入った声にキモリもサニーゴも一段と身構えた。

「キモリ！【エナジーボール】！！？」

「サニーゴ！【みずのはどう】！！？」

二つの技は一気に衝撃波とともに相殺された。

「【でんこうせっか】です！！？」

その衝撃波に飛ばされないように堪えながら、キモリは思いっきり地面を蹴り出すと

一直線にサニーゴへと突っ込んでいった。

「迎え撃つて!」

キモリのスピードから躲するのが難しいと判断により、サニーゴは躲さずに硬いボディでキモリの「でんこうせっか」を受けた。効果はいまひとつであったが、キモリの強烈な体当たりにはサニーゴも決めたキモリも後退した。

「ジャンプです!!」

「キャモ!!?」

さらに今度は地面を大きく蹴ると、キモリは天井高くまで大きくジャンプした。サニーゴの姿を捕えると、両手を前に出した。

「【エナジーボール】!!?」

「【みずのはどう】!!?」

再び両者の技が激突した。さつきとは力一杯に込めて放ったため、すぐに相殺はされずに重なり合うエネルギーから火花を散らしながらの押し合いが始まった。

一気に肩を付けようとリーリエはもう一度【エナジーボール】を指示するわ。それから一度回復させてから【ミラーコート】で勝負を決めるわ。

そう読んだカスミはサニーゴに【じこさいせい】を指示する。だが、ふとキモリの方へと目をやったカスミは目を見開いた。

キモリは空中に跳んだまま尻尾を大きく回し始めたのだ。そしてそれを見たリーリエは力一杯にキモリに指示を出した。

「キモリ！【エナジーボール】に【はたく】攻撃です!!？」

「キヤアモ!!!」

キモリはそのまま尻尾でぶつかり合う【エナジーボール】を力一杯に下へと叩きつけた。叩きつけられた【エナジーボール】はそのまま一気に押し出されては【みずのはど】を打ち消しながら、サニーゴの方へと撃ち込まれた。

「サニゴツオオオ!!!」

押し出されたスピードにサニーゴは気づくも躲す時間がないまま、そのまま緑の発光に包み込まれてしまった。

「サニーゴ!!!」

サニーゴを呼びかけるも、【エナジーボール】の衝突により爆煙が生まれた。爆煙が晴れた頃にはプールで目を回しているサニーゴの姿が確認された。サニーゴの様子を見た審判は大きく手を上げてコールした。

「サニーゴ戦闘不能！キモリの勝ち！」

よって勝者はチャレンジャー、リーリエ！」

「やったあ!!!やりましたよ。キモリ！」

「キャ…キャモ!!?」

審判の声にリーリエは大きく跳び上がった。勝負が終えたキモリがリーリエがいるトレーナーサイドに戻ると、リーリエは思いっきりキモリを抱きしめた。キモリは若干頬が赤く染まりながらも、涼しげな表情で返事を返した。

《観戦席》

「勝ったああああ!!!」

「コーン!!!」

「凄くいいバトルだった!」

勝負を終えた二人に大きく拍手が巻き起こった。

《ジム戦》

「お疲れ様。サニーゴ!」

「サゴ…」

「気にしないで!よく頑張ってくれたわ。ゆっくり休んでね」

サニーゴに感謝の意を伝えると、すぐに休ませてあげるようにルアーボールへと戻した。ルアーボールをしまうと、カスミは今日のジム戦で頑張ってくれたコイキングとムクバードも加えて喜び合うリーリエの元へと向かった。

「やるわねリーリエ。凄く楽しかったわ!」

「カスミ。お手合わせして頂いてありがとうございます！」

互いに握手を交わすと、カスミはポケットから青く光る雫をモチーフにされて作られたバッジをリーリエの前に差し出した。

「さあ！受け取って、ハナダジムを降した証のブルーバッジよ！」

「ありがとうございます！カスミ！」

お礼を言つてカスミからブルーバッジを貰うと、そのまま天高く掲げた。

「ブルーバッジ！ゲットです！」

「ココツ!!？」

「キャモ!!？」

「ムツクバー!!？」

こうしてリーリエは二つ目のバッジを手にした。

~~~~~

「一緒に行けたらって…思ったけどな」

「ごめん。アローラの水系ポケモンには興味があつただけど、急にジムを閉めることはできないわ」

その後、カノンとサトルのジム戦を終えてはその後みんなで祝勝会を挙げた翌日、リーリエ達はクチバシテイへと旅立とうとしていた。

一緒にアローラ祭に参加しに行かないかとタケシに誘われたのだが、急にジムを閉める事は出来ないと残念そうにカスミは断った。

「何処かでサトシにあつたら、宜しく！って伝えといて！」

「ああ！」

「五人はこれからのジム戦頑張るなさいよ！ポケモンリーグには私も応援しに行くから！」

「ありがとうございます。カスミ！」

「うん！がんばりーリエ！」

「がんば…りーリエ？」

「気にしないで下さい／＼／＼／」

こうしてカスミと別れたリーリエ達はハナダシティを後にした。しばらくの間、アローラのポケモンに興味を持ったソウタとノゾミも加えて一同はクチバシティへと旅立った。

第二十二話 友情の灯火

見事二つ目のジムバッジを手にしたリーリエ達は開催間近になったアローラ祭に向けてクチバシテイへと向かっていた。

「うめー!!! サトル達こんな美味い飯喰いながら旅して来たのかよ!」

「どうよ! 羨ましいでしょ♪」

「なんでカノンが威張ってるの?」

「本当に美味しいよ。私にも教えて欲しいほどだよ」

「だな! タケシ、おかわり!!!」

「おう! たくさん食べてくれ」

ハナダシテイで出会ったソウタとノゾミもメンバーに加えた一同は暫しの休憩を挟んでランチタイムを楽しんでいた。

「そういや、リーリエは?」

「ああ…リーリエなら彼処にいるよ」

リーリエを探すカノンにノゾミは向こう岸へと指をさした。その方角にはリーリエ

とオツキミ山で捕獲したズルズキンの姿があった。

「ズルズキン！わたくし特製のポケモンフーズ。良かったら食べてみませんか♪」

「……………」

「……………美味しいですよ♪貴方もきつと気に入ってくれると思いますの！」

「……………」

「えつ…と、もし今は食欲なければまた後にしましょうか？」

「zzzz…」

「うっ／／／」

「おい…泣きそうだぞ」

『リーリエに対するズルズキンのなつき度はおよそ1.5%ロト』

「余計な事しない方がいいと思うよ。ロトム」

「リ…リーリエ!!!ほら！こっち来て一緒に食べよ!!!」

なかなかズルズキンと打ち上げれずに、今にも泣き出してしまいそうなリーリエを力ノンはリーリエの手を引いて、食卓の方へと向かっていく。

そんなリーリエをズルズキンは少し振り向いては目をやるが、そのまますぐに眠った。その様子からノゾミもリーリエとズルズキンの今の関係性がどういうものかは察した。

合計五杯もおかわりしたソウタは満腹な腹を叩きながら立ち上がった。

「食った！食った！食ったらバトルの練習だ！付き合えサトル！」

「いや…僕はまだ食べ終わってないよ」

「んだよ。じゃあ、自主練でもして待ってるからな！行くぞ！クチート！」

「クチート!!？」

そのままソウタはクチートを連れて、林の中へと入って行った。

「忙しい所はサトシに似てるね。ソウタは」

「言われてみればな」

そんな会話をしていると、さつき林の中へと潜って行ったソウタが慌てた様子で戻って来た。

「みんな！ちよつと来てくれ!!!」

慌てた呼びかけにリーリエ達はすぐにソウタの元へと駆け寄った。昼食を取っていたポケモン達に留守を任せてから全員がソウタの元に集まると、そのソウタの跡を追いつながら林の中へと入って行った。

入ったと言つてもすぐの場所だった。茂みを掻き分けた先には、木々に囲まれた巨大な岩山が聳え立っていた。そして、ソウタはその岩山の少し上辺りの所を指差した。

「あのポケモンは……」

『ボクにお任せをロト!』

そこに居たのはポケモンだった。そのポケモンは身を丸めながら此方の方を警戒しながら、リーリエ達を見下ろしていた。

『ヒノアラシ ひねずみポケモン』

炎タイプ

臆病な性格でいつも身体を丸めている。背中から炎を噴き上げて身を守る。怒った時の勢いは良いが、疲れている時は不完全燃焼してしまう』

ロトムの説明により、そのポケモンはジョウト地方の初心者用ポケモンとしても渡されている炎タイプのポケモン、ヒノアラシである事がわかった。周りにトレーナーらしき人物が見当たらない所、野生なのかもしれない。野生ではあまり確認されるのが難しいポケモンであるため、リーリエ達は暫くヒノアラシに釘付けとなった。

そして、ある事にリーリエ達は気づいた。少しばかりか呼吸がしづらしばらく弱っている様子でもあった。その状態からあのヒノアラシは怪我をしているのではないかと推測する。

「かなり弱ってるみたいだな…すぐに治療を…」

タケシはすぐにヒノアラシの状態を見ようと近づいて行った。それを見たヒノアラシは…

「ヒノオ!!?」

すぐにリーリエ達に向かって炎を放った。繰り出されたヒノアラシの攻撃はリーリ

工達のすぐ足元よりも前の方へと放射された。

「【かえんほうしや】だ！」

『弱っているとはいえ凄いパワーロト！』

野生ポケモンとは思えない威力の火炎放射に放ったヒノアラシの様子を見ると、今度は冷や汗を少し掻きながらさつきよりも呼吸が乱れているのが分かった。一刻も早く治療しなければならぬと判断したタケシはすぐにサトルの方へと目をやった。

「サトル！クルマユの【くさぶえ】を頼む！」

「分かった！」

サトルは急いでクルマユを呼びに走った。

「頼む！クルマユ!!!」

「マユツ!!?」

連れて来たクルマユの草笛でヒノアラシは静かに眠った。

タケシはそのまま眠ったヒノアラシを抱えて岩山を降りると、すぐにいい傷薬など必要な回復道具を手にして治療を行った。治療を続けていくと、少しずつタケシの表情が曇ってきている様に見えた。何かに引つ掻かれた傷などから何かの事故に巻き込まれたわけではなく、明らかに他のポケモンによる攻撃によって負った傷である事がわかった。その傷は一刻も早く治療しないといけないぐらいの深手だったと言う。

「よし！これで大丈夫だ！」

『流石はタケシだロト！』

「ありがとうございました。タケシ」

リーリエ達に見守られながらも、ヒノアラシの治療は無事に終わった。治療終えたがヒノアラシはまだぐっすりと眠っていた。

目が覚めた後、刺激させて体に負担を掛けてはいけなと思ったリーリエ達はヒノアラシが目覚ます前にここから離れる事を決めた。

起きた時に体力をつけられる様にヒノアラシの側にオレンの実を置くと、そのままリーリエ達はヒノアラシと別れた。留守を頼んだポケモン達をモンスターボールに戻しては近くのポケモンセンターへと向かい始めた。

~~~~~

「どのポケモンセンターに來てもポケモンバトルは耐えないね」

日没後には雨が降ると予想されていたので、それまでにリーリエ達はポケモンセンターに着くことが出来た。

「あいつ…大丈夫かな…」

ソウタはヒノアラシと別れた方へと向いていた。最初にヒノアラシを見つけただけあって、ここポケモンセンターへと向かう道程の途中でもソウタはヒノアラシの事を気にかけていた。タケシからの怪我の状態を聞いたからでは、また他の強いポケモンに襲われないかどうか心配なのだ。

「きつと、大丈夫だよ。ソーちゃん」

そんなサトルの言葉にソウタも頷いた。オレンの実も置いてきたのだ。それを食べればもうぼつちり回復しているはずだ。と言い聞かせては心配事を振り払った。

すると、バトル施設ではそんなもやもやとした気持ちを一気に吹き飛ばしてしまうぐらいの白熱としたバトルが行われていた。

興味を持ったリーリエ達はすぐにバトル施設へと向かった。そこで戦っていたのは、ここカントーではノーマルタイプと分類されているラッタと顎の周辺を炎で覆っている大きいポケモンが対峙していた。

「おお!!あのポケモンなんだ?」

「あれはエンブオーだ」

「エンブオー?」

タケシからそのポケモンの名前に聞き覚えがない一同にロトムは空かさずそのポケモンの解説を行った。

『エンブオー おおひぶたポケモン

炎・格闘タイプ

炎の顎髭を蓄えているポケモン。髭の炎が燃え上がるのは気合が入った証。パワーとスピードを兼ね備えた格闘技を身につけている。』

ロトムの解説が終わったその直後、そのエンブオーの「かえんほうしゃ」がラッタに炸裂した。炎に包まれたラッタはそのまま戦闘不能となった。

「あく、ラ…ラッタ…」

「俺たちが勝ったのは当然の結果だ。この『ファイアウオーリアーズ』に敵などいるものか」

勝利を得たエンブオーのトレーナーは高らかに笑い出すと、エンブオーをモンスターボールへと戻した。戻したエンブオーのモンスターボールを仕舞うとすぐにラッ

タのトレーナーの方へと歩き出した。

戦ったトレーナー同士、互いの健闘を讃え合うための握手を交わすのかと思いきや、そのエンブオーのトレーナーはとんでもない事を口にした。

「さあ出せよ！お前の中の強いポケモン！」

なんと負かした相手からポケモンを奪い取ろうとしているのだ。

「何あいつ！」

エンブオーのトレーナーを睨むカノンを前にすぐにソウタはそのトレーナーも方へと走り出した。

「おいおい！お前！負けた相手からポケモン取ろうと済んじやうねえよ！」

ソウタはラッタのトレーナーの前に立つと、エンブオーのトレーナーを睨みつけた。

「なんだ？お前には関係ないだろ！」

突然出てきたソウタに呆れた表情で返事を返した。そのトレーナーにソウタに続いてノゾミも歩み寄っては言い返した。

「たしかに関係ないけど、あんたの今のやり方を見て黙って見過ごす訳にはいかないよ！」

出てきたソウタとノゾミだけでなく他の四人の人影に気付いたエンブオーのトレーナーは面倒臭くなったのか。何も言わずにその場を立ち去った。



食を取り始めていた。

「他方からやって来て本当に迷惑もいい所だわ！」

「まあまあ、もう済んだことだ。気にせずには食べようじゃないか」

スワマに対して物凄く頭にきていたのか文句を言いながら料理を食べているカノンをタケシは慰めていた。

そんな矢先、噂をするとリリーリエ達が座っている近くにスワマの声が聞こえた。その発声音は彼の声を聞きたくなくても、自然に耳の中へと入ってしまうほど大きなものだった。

「まあ、こんな所だな。今日もいい収穫だったぜ。よくやったなエンブオー！」

彼はエンブオーを連れては大量のモンスターボールを並べては高らかに笑っていた。

そして、すぐに耳を疑う事を言い出したのだ。

「やっぱり強いポケモンはこうやって手に入れた方がいいさあ。地道にポケモンを育てあげるなんて、そんなまどろっこしい事してられっかよ。あのヒノアラシも捨てて正解だったわ」

!!!!!!!!!!

「野生では珍しいし、技もそれなりに使える物を持つていたから思わず捕まえたけど、バトルになると弱すぎて話になんねえからな。見たかエンブオー！彼奴をあつ岩山に置いた時の反応よ！逃したのに連いて来るわ。来るわ。思い出しただけでも笑っちゃまうよな!!!」

岩山に置いて行つた。との発言からそのヒノアラシはポケモンセンターに来る前にリーリエ達治療したヒノアラシであつた事が分かつた。

「おい……てめー!!!」

「ちよつとソーちゃん!!!」

怒りが頂点に達したソウタは止めるサトルの声を振り払うと、スワマの方へと向かつ

ていく。ソウタの接近に気付いていなかったスワマはそのままソウタに襟元を掴まれてしまった。

「痛つてな！何だよ。お前！」

「ざっきのどういう意味だ！」

ソウタの危機迫る表情にも気にも止めずにスワマはその口を開いた。

「意味も何もそのままの意味さ！俺の満足いくレベルにあのヒノアラシは達していなかった。だから捨てた。それだけのことだ！」

「くっ!!!」

「落ち着きな。ソウタ」

ソウタの肩にノゾミはそつと手を置いた。止められたソウタはそのままスワマを掴んでいた手を離した。乱れた服を整えながら険悪そうに見るスワマにノゾミは話し始めた。

「手持ちのポケモンを逃がすことはそう珍しくない。あんたに限らずやっているトレーナーもいるから、その点に關しては、とやかく言うつもりはないよ」

その後、ノゾミは少し声のトーンを上げると続けて話を進めた。

「だけどね！あんなに傷ついた状態で逃がすことはないんじゃない！少なくとも傷つけてしまった時はまだあんたの手持ちであったはずだ！バトルで傷ついたポケモンはす

ぐにポケモンセンターで診せて上げる事はトレーナーの役目として絶対に怠ってはいけない事だと思おうよ！」

ノゾミの言葉に跡を追ってきたリーリエ達も静かに頷いた。だが、その言葉を打ち消すかのようにスワマは不敵な笑みを浮かべると、そのまま反論し始めた。

「はあ？ どうせ捨てるポケモンをわざわざポケモンセンターで治療受けさせてどうするんだよって話だ！ 逃した時点であいつはもう俺の手持ちじゃない。その後、どうなるかなんて知った事じゃねえわ!!!」

その無責任な発言には流石に殴りかかろうとしたソウタを止めたノゾミも手を震わせていた。

「あんた…想像以上のクズだね」

その怒りに答えるかのように、轟く雷鳴と同時に窓の外から雷の光がポケモンセンターを照らした。

「あ…雨」

天気の詳細は当たったみたいだった。そして雷によって会話が遮られてしまったためか、スワマはリーリエ達に背を向けるとその場を立ち去った。

「おい！ 待てよ!!!」

ソウタの声に気にも止めずに立ち去るスワマの方を見ていると、突然に思い出したか

のようにカノンが声を上げた。

「ねえ！あのヒノアラシ！まだあの岩山にいるんじゃない!!」

スワマの会話からは捨てられても彼の元へと行こうとしていたと言う。怪我が治つたとしても、まだあそこで彼が来るのを待っているとしたら…

最悪な事態を想定してしまったリーリエ達はジョーイさんからレインパーカーを借りると、急いでヒノアラシがいたあの岩山へと駆け出しに行った。

~~~~~

降り注ぐ豪雨。鳴り響く雷鳴。行く手を遮る突風。それでもリーリエ達は休む事なく走り続けた。そして、ヒノアラシを見つけたあの岩山へと到着した。

『いたロト!!』

ロトムが指した先には、岩陰に身を潜めては雨風を凌いでいたヒノアラシの姿があった。やっぱり、まだ彼処を離れていなかったんだ。すぐにヒノアラシの元へと近づこうとソウタは岩山を登り始めたその時。

突然に草むらから現れたオニスズメ達がヒノアラシを攻撃し始めた。

「やめろ！オニスズメ!!!」

ソウタの声に反応すると、その内の一体がソウタに攻撃を仕掛けた。

「シロン！【こなゆき】!!?」

「コーン!!!」

すぐにリーリエはシロンの【こなゆき】でオニスズメを振り払った。

すると、残りのオニスズメ達も一斉に攻撃を仕掛けたリーリエ達に向かって飛びかかってきたのだ。

「フシギダネ！【つるのムチ】!!?」

「ニヤルマー【シャドークロー】!!?」

前方から飛んできたオニスズメをカノンとノゾミとで対抗した。

「クチート！【ようせいのかげ】!!?」

「シロン！【こなゆき】!!?」

さらに真上から攻撃を仕掛けたオニスズメをソウタとリーリエで追い返した。

「ピカチュウ！〔10万ボルト〕!!?」

最後にサトルのピカチュウで全羽のオニスズメを一網打尽にした。尻尾の避雷針により雷の力を受けた〔10万ボルト〕のパワーにオニスズメ達は為すすべもなくその場を退散した。

無事にオニスズメを追い払ったリーリエ達はすぐに雨で冷え切ったヒノアラシの体を毛布で包んだ。タケシはすぐにラッキーとクロバットをモンスターボールから出現させた。

「ラッキーは〔たまごうみ〕!!?クロバットは超音波を頼む!」

ラッキーの力で回復させた後、クロバットの超音波で心電図を通してヒノアラシの脈を計り始めた。

「しっかりしろよ!ヒノアラシ!!!」

すぐに毛布に包んだヒノアラシをソウタは抱きかかえると、そのままリーリエ達はポケモンセンターへと急いで戻った。

~~~~~

ポケモンセンターに到着後、すぐにジョーイにヒノアラシを診せた。すぐにジョーイはヒノアラシを連れて救急治療室へと運んだ。

そして三十分後、ヒノアラシを抱きかかえたジョーイがリーリエ達の前に現れた。

「ジョーイさん！ヒノアラシは…」

「大丈夫よ！タケシ君の応急処置のおかげもあつてすぐに回復したわ」

「そうですか…よかったです」

日中にタケシが治療したばかりであつたために大事に至らなかつたのは幸いであつた。さつきまで傷だらけで体を震わせていたヒノアラシだが、治療室から出てきた表情を見ればもう心配はいらないようだ。

「ヒノ!!!」

「みなさん！ヒノアラシが…」

いきなり何かを見つけたのか。ジョーイの腕から離れたヒノアラシは一目散にある者へと駆け寄つて行つた。

そう…

「なんだ、お前……」

あの男スワマにだ。ちようど、自室へと戻ろうとした姿を目撃されたみたいだ。

「ヒノ！ヒノ！」

見つけてはヒノアラシはスワマのスボンの下を引つ張りながら何かを訴えているようだった。

その様子からこのヒノアラシは自分の手持ちにいたポケモンである事に気付いた。だが、かつての自分の手持ちにいたヒノアラシをスワマは何事もないように冷めきった目でヒノアラシを見ていた。

「ヒノアラシ！」

「あつ……お前」

「何だ……またお前らか」

ヒノアラシを追っていたリーリエ達と鉢合わせになった。リーリエ達が来てもヒノアラシは一切こつちには振り向かずスワマの方をジッと見ていた。

あの嵐の中でポケモンセンターに連れて助けて上げたのはリーリエ達の方であったのだが、やはり自分の主人。どんな形であろうと、ヒノアラシはこれほどスワマを慕っていたという事は今のヒノアラシの姿を見れば誰にでも分かっていた。そんなヒノアラシの姿を見たサトルはただ一人スワマの方へと近づいて行った。

「サトル?」

サトルの行動に疑問を持ったカノンであったが、サトルはその口を静かに開いた。

「確かに最初つから強いポケモンもいるし、弱いポケモンだっている。だけど、どんなポケモンだって努力次第では必ず強くなれると僕は思っている。勝ちたいなら強いポケモンを使えばいいという君の考えを否定するつもりはないけど、ポケモン達と信じて二人三脚に頑張つて強くなつて行くのも悪くないんじゃないかな? その方がバトルに勝つた喜びはもつと大きな物になると僕は思うんだ!」

力強くサトルはスワマに訴えた。トレーナーとして旅立つ前はあまり自分から前に出る性格でなかったのに、今の自分の行動には驚いていた。

サトルの言葉に背中を押されたリーリエ達も力強くスワマの方へと目をやった。同じようにスワマにもサトルの言葉を聞いてから考え方を改めて欲しいと思った。

しかし…

「それがめんどくさいんだよ…」

「えっ?」

その言葉にサトルだけでなくリーリエ達も耳を疑った。スワマの目は厳しくこちらを睨んで来た。その目からは何かしらの憎悪が感じられた。

「お前も…」

そしてその目は自分の足に寄り添うヒノアラシに向けられた。それでも離れないヒノアラシに対して苛立ちが最高潮になったスワマはおもいつきりヒノアラシがしがみついている反対の足を上げ始めた。

「いつまで俺に寄り添っていやがんだああああ!!」

「ヒノアラシ!!!」

そして、そのままヒノアラシを蹴り飛ばしたのだ。ヒノアラシはサトルの一步手前の所まで放り出されてしまった。

「おい！お前何しやがんだ!!!」

「まだ病み上がりなのよ!!!」

ソウタとカノンも同時にヒノアラシは抱きかかえるサトルの元へと駆け出した。スワマは荒々しく息を吐き出しながらサトル達を睨み返した。

「つたくよ！マジでバカなポケモンだわこいつ！俺はもうお前の事なんてどうも思っ  
ねえんだよ!!!」

「ヒノ…」

「俺はなあ。ポケモンを捨てる時は自分もつらい思いをしている様な振りをするんだよ！そうしないといつまでも引きずる奴が出てくるからだ！あーあ!!!別れのつらさの振りしとけば大概のポケモンは諦めてくれるのによ！」

何か切れたのか。スワマは平然と吐き捨てるようにヒノアラシを罵り始めたのだ。

「あんた！自分が何を言ってるか分かってるの!!!」

「お前！それでもトレーナーか!!!」

流石のスワマの言動や行動にノゾミも滅多に感情的にならないタケシも口を揃えてはスワマを非難した。

それなのに、スワマはポケモンセンターを利用して他のトレーナー達の間にも気には止めずに、トドメを刺すような言葉を力一杯放った。

「何とでも言ってる！力こそ正義だ！トレーナーが才能あるポケモンを求めるのは当然だろうがよ!!!」

「ふざけないで下さい!!!」

ここにいる誰もがその人物に目が集まった。その人物は震える両手でスカートの裾を握り締めながら声を上げた。涙で滲む敵意を持つその目はスワマに向けられていた。

「ヒノアラシの辛さを貴方は何も感じて上げられていないのですか！ポケモンは貴方が強くなるための道具ではありません!!自分のしゅ：親から見放されてしまったこの痛みが：どれほど辛くて苦しいものか：貴方は知っていますか!!!」

過去の自分と照らし合わせるかのようにリーリエは思った事を吐きだした。感情的になり涙声になりながらも叫んだ。

少しの沈黙が空くとスワマは何事も言わずに立ち去る事なく、今度は自らリーリエ達の元へと近づいてきた。

『な…何か用口トか!!』

リーリエを守るように前に出たロトムの声にスワマは応えた。

「そこまで言うなら実力を見せて貰おうじゃん!?」

「実力…」

「そのヒノアラシと俺のポケモンで対一のバトルだ。勝つたら、土下座でも何でもしてやるよ!」

言い争うに疲れを感じたのか分からないが、スワマは白黒はつきりつける提案を述べた。

「よし! だったら俺が…」

「相手はお前じゃくて、お前だ!」

勝負を受けようと前に出たソウタを退けてはスワマはある人物を指差した。

「わ…わたくしですか?」

スワマが指名したのはリーリエだ。

「お前…なかなか可愛いかもなあ」

リーリエを指名するとスワマはニヤリと笑うと、さらに条件を述べてきた。

「ただしお前が負けたら俺の女になれ! その条件なら勝負してやってもいいぞ!」

「お前!! いい加減にしろよ!」

流石の事にソウタはブチ切れた。今にもスワマに殴りかかろうとする勢いで前に出た。そんなソウタをリーリエは呼び止めた。

「待つてください！ソウタ!!!」

呼ばれた事に気付いたソウタはリーリエに振り返る。そして、リーリエの決心がついた目を見ては後退りした。

そして、今度はリーリエがスワマの前へと踏み込んだ。

「分かりました。お受け致しましょう！」

「ちよっ…待つてよ…リーリエ!!!」

無茶な条件に止めようとするカノンにリーリエは心配ないと頷く。

「大丈夫です！」

その表現を見たカノンは止める事が出来なくなった。そして、再びリーリエはスワマの方へと向くと一気に表現が固くなった。

俺が負けるかよ。と不敵に笑うスワマに対し、リーリエはさらにスワマを睨み返したのだ。

~~~~~

ヒノアラシを連れてリーリエはバトルフィールドに立った。向かい合うスワマはすぐにモンスターボールをフィールドへと投げ入れた。

「出てこい！クイタラン!!!」

「クイイ!!?!」

『クイタラン アリクイポケモン』

炎タイプ

尻尾の穴から空気を吸って体内で炎を燃やす。炎を舌の様に使い攻撃する』

ロトムの説明からクイタランはヒノアラシと同じ炎タイプのポケモンである事が分かった。クイタランは両腕の鋭利の爪を立ててはヒノアラシを威嚇する。凶鑑では長い舌がクイタランの武器かと思われたが、あの爪もクイタランにとっては最大の武器には違いない。

バトルが始まる前にリーリエはヒノアラシとコンタクトを交わした。

「ヒノアラシ！全てわたくしに任せて下さい！」

「ヒノ…」

リーリエはヒノアラシに呼びかけるものの、ヒノアラシは自信なさげそうに返答した。

その姿はこのバトルを見守っているカノン達にも不安が伝わっていた。だが、互いのポケモンが出たからには始めるしかない。タケシによる試合開始のコールが宣言された。

「それでは、バトル開始！」

?リーリエVSスワマ?

「クイタラン! 【ほのおのムチ】だ!!?」

「クイ!!?」

クイタランは特徴である長い舌を伸ばすと、炎纏わせながらヒノアラシに向かって攻撃を仕掛けた。

「躲して下さい!」

リーリエの手持ちではないが、ヒノアラシはリーリエ指示に従っていた。足元を狙ってきた【ほのおのムチ】をヒノアラシはジャンプで躲した。

「行きますよ! 【かえんほうしゃ】!!?」

「ヒノ!!?」

着地したすぐにヒノアラシは背中から炎を吹き出すと口の中で炎を溜め込んだ。ヒノアラシは貯めた炎をクイタランに向かって放射しようとした。

「ヒ:...」

だが、放射した直後にヒノアラシはクイタランの後にいるスワマと目があった。

元トレーナーと戦うことに躊躇いがあったヒノアラシは溜め込んだ炎エネルギーを

消すと放射するのを止めてしまった。

「ヒノアラシ!!?」

『ビビツ!何故、攻撃をしないロト!』

攻撃を止めたヒノアラシに驚くりーリエの不意をつくようにクイタランはヒノアラシに接近した。

「クイタラン!「みだれひつかき」!!?」

クイタランはその鋭利な爪でヒノアラシを連続で切り裂き始めた。

「ヒノオオ!!!」

「ヒノアラシ!」

「コーン!!?」

クイタランの攻撃にヒノアラシはかなりのダメージを受けてしまった。まだ戦闘不能にまでダメージは受けていないが、その目からはスワマと対峙しなければならないのかという迷いが見られた。それはりーリエもシロンにも伝わっていた。

『りーリエ!このままじゃまずいロト!』

ロトムの言う通り。このままでは負け待っただけだ。観戦席にいるカノン達からの声援が聞こえるもヒノアラシには逆にそのせいで頭を悩ませてしまう事になった。

闘志が感じられないヒノアラシに対してスワマは呆れた表情をした。

「ははっ！力が無い上に頭の悪いポケモンだったな。あんなだけ罵倒したつてのにまだ俺のことを主人と見るんだな」

負ける試合ではない余裕からかスワマはもうバトルには集中していなかった。クイタランも顎の周囲を掻きながら詰まらなそうにしていた。

その態度にリーリエは不謹慎に思っているのは言うまでもない。勝ちたい。あんなトレーナーに負けたくないと思っている。

しかし、リーリエがどんなにヒノアラシのためにと思っているか臨んだ勝負であっても、一緒に戦ってくれるポケモンの気持ちが変わらないとその想いは無となる。

「時間の無駄だ！終わらせろクイタラン！〔だいもんじ〕！！？」

「クイイイ！！？」

炎タイプの中でも強力な技を放つクイタランは一気に尻尾から大量の空気を吸い込み始めた。徐々に腹部周辺が熱が籠ったように赤くなると、大の字に形成された炎エネルギーをヒノアラシに放った。迫り来る「だいもんじ」を前にもヒノアラシは呆然と立ち尽くしていた。その目からは躲す気力が無いほど虚ろんでいた。

「ヒノアラシ！！！」

「ヒノ!!?」

鋭く尖った声が聞こえたヒノアラシは反射的に体が動いた。【だいもんじ】を躲した事よりも声がした方が気になったヒノアラシはすぐに声の主であるリーリエの方へと振り向いた。

やっと試合開始から初めてリーリエとのコンタクトを合わせる事が出来た。すぐにリーリエはヒノアラシに呼びかけた。

「貴方の気持ちはわかります。ですが、貴方が彼に立ち向かう覚悟が無ければこのままでは負けてしまいます」

その言葉を掛けなくてもヒノアラシ自身も分かっているはず。だけど、言わない訳にはいかなかった。分かりきっている事を改めて聞かされたヒノアラシはさらに自身なさげに下の方へと視線を下げてしまった。

「ですから、ヒノアラシ…」

そんなヒノアラシにリーリエはさつきよりも大きな声で呼びかけた。
「スワマ彼のために戦いましょう!」

「ヒノ…」

「「えっ!!?」」

「はあ!!?」

リーリエの発言にカノン達や対戦相手のスワマも顔を歪めていた。この発言の意図が全く理解ができないのだが、リーリエは満面の笑顔でさらに続けた。

「彼に自分は弱くない所を見せてあげるので！僕は強いんだと！貴方の期待に応えられると！彼の元に戻りたければこのバトルに勝って貴方の实力を見せてあげればいいのです！」

「ヒノ…」

「まだ出会ったばかりのわたくしであります、お願いします！それまでわたくしと一緒に戦って下さい！」

まだ出会ったばかりの…いや、手持ちでもない自分の事を優しく真剣に向き合っているリーリエにヒノアラシは黙ったままリーリエを見つめる。

そして…

「ヒノ!!?」

迷いが吹っ切れた。ヒノアラシは再度、対戦相手の方へと振り返った。それはスワマにはなくクイタランにだ。ヒノアラシはもう一度、背中から一気に炎を吹き出すと力一杯叫び始めた。

「本当にリーリエは凄いトレーナーだよ」

今にも消えそうであった小さな灯火に決意の炎が灯った。ポケモンの心を動かすリーリエの素質には驚くばかりだ。

「ヒノアラシ! 【スピードスター】です!!?」

「ヒノオ!!?」

「ちっ!!クイタラン! 【ほのおのムチ】で撃ち落とせ!!?」

「クイ!!?」

無数の星型のエネルギー弾を炎を纏わせた舌で防いで行く。だが、やる気を取り戻したヒノアラシの攻撃には力強さがあった。さつきまでと様子が変わった事にまずいと思つたスワマはすぐにクイタランに指示を出した。

「クイタラン！【だもんじ】だ!!?」

スワマは一気に勝負を決めるため大技をクイタランに指示した。クイタランが再び尻尾で周りの空気を溜め込もうとしたその瞬間をリーリエは見過ぎなかった。

「今です！ヒノアラシ！【えんまく】!!?」

「ヒノオオ!!?」

放たれた煙幕はクイタランの周りを包み込んだ。痛くも痒くもないその技をスワマは高らげに笑っていた。

「目眩しのつもりか！そんなんでなあ…」

「クツ…クイ!!!」

「どうした！クイタラン!!?」

煙幕など敵にはないと思っていたスワマだが、突然むせりだしたクイタランを見ては慌てた様子を見せた。何をされたか分からないスワマにリーリエは口トムを前に説明を始めた。

「ポケモン図鑑の明記通りなんです。クイタランは体内で炎を生成する際には尻尾の穴から空気を体内へと取り入れる必要があります。ですが、このように煙幕が充満されてしまった以上、十分に空気を溜め込むことが出来ないはずですよ！」

「くっつ!!!」

クイタランの生態を上手く利用したりリーリエの戦法にスワマはさつきまでの余裕がすっかり無くなってしまった。

「自分のポケモンじゃねえのに…なんでこんなに息があつてやがんだよ…」

戸惑いが隠しきれずに漏れた声を噛み締めていた。

「ヒノアラシ！【スピードスター】!!?」

「ヒノオオ!!?」

「クイイイイ!!!」

「くっそ!!!クイタラン！【きあいだま】!!?」

「クイイイ!!?」

「【でんこうせっか】です!!?」

「ヒイノオ!!?」

「クウウ!!!」

ペースは一気にリーリエ達に傾いた。以外にも素早さ関係は互角ではあったが、クイタランのパワー系攻撃を前には、ヒノアラシの先制攻撃に追いついていない。

ヒノアラシの【でんこうせっか】がクイタランの腹部に命中すると、足を滑らせては後へと倒されてしまった。

すぐに起き上がるも、上空には反動で飛び上がったヒノアラシが口を開いてクイタラ

ンに攻撃を向けていた。

「行きます！最大パワーで【かえんほうしゃ】です!!?」

「ヒノオオ!!?」

【かえんほうしゃ】がクイタランへと放たれた。炎タイプの攻撃は効果はいまひとつだが、ヒノアラシの力一杯込めた攻撃は受け止めきれないほどのパワーを放っていた。

「クツ…クイ…イ」

「クイタラン!!!」

ヒノアラシの炎技を受け続けたクイタランは発火爆発を引き起こすと、そのままクイタランは力無くし後へと崩れ落ちて行った。

「クイタラン戦闘不能！ヒノアラシの勝ちだ！」

『勝った口ト!!!』

「勝ちましたよ！ヒノアラシ!!!」

「ヒノオオ!!?」

タケシのコールにより勝負に勝ったりリエは急いでヒノアラシの元へと駆け寄った。優しく頭を撫でられたヒノアラシはシロンと一緒に喜び合った。

「やったあ!!!」

「勝ったぜええ!!!」

その後、カノン達もリーリエの元へと駆け寄った。みんなでヒノアラシの勝利を褒めたえると、自身持つことができたのか。さつきまでと違って足を小刻みにしながら喜びを体で表現した。

「戻れ、クイタラン！」

スワマはクイタランを戻すと、そのままリーリエ達の元へと向かった。

『何か文句あるロトか？！』

近づくスワマにみんな身構えるように警戒した。だが、スワマはさつきと違って穏やかな雰囲気を出していた。

「いや、俺の負けだ。素直に負けを認めるよ」

いちやもんをつけてくるかと思いきや、スワマはあっさりと自分の敗北を認めた。

人が変わったように振る舞うスワマに動揺するが、そんなリーリエ達を置いてヒノアラシに視線を合わせた。

「済まなかったなヒノアラシ。才能が無いと言ったのは俺の間違いだったよ」

ヒノアラシに自分がした事を謝るとさらに話を続けた。

「なあ！まだお前が俺の事を忘れられていないんだったら戻って来るか？」

「ヒノ…」

「もう一度俺と組んで最強の『ファイアウオーリアーズ』を結成させて行こうぜ！」

そう言つて、スワマはヒノアラシを手を差し伸べた。

「ヒノアラシ……」

「コーン……」

スワマの元に戻ることがヒノアラシの願いであつたかもしれないが、さつきまでのスワマのヒノアラシに対する態度を見てしまうと、素直に送り出してやる事が出来なかつた。

ヒノアラシが望むなら戻らせてあげたい。だけど、素直に送り出してあげられない。そんな矛盾とした複雑な気持ちがあつて交互していた。

「さあ行こうぜ！ヒノアラシ！」

「ヒノ……」

リーリエはそんなヒノアラシを見てみると、さつきまではスワマの元に戻りたいと思つていたはずなのに何故か分からないがリーリエの方へとチラつかせながらもスワマの元に戻る事に躊躇つている様子を見せていた。

「何迷う事があるんだよ！ほら、来いよ！」

今度は自分の元へと連れようとスワマはヒノアラシの手を取ろうとした。

その瞬間、ヒノアラシは後退りした。その行動にリーリエ達もスワマも、ヒノアラシ本人も驚いていた。

「だけど、これではつきりしたみたいだ。

「どうやらお前の元には戻らないみたいだな！」

タケシの言葉にヒノアラシも自分の今の気持ちは何処に傾いていたのかが分かった。そんなヒノアラシを見てスワマの顔つきがまた変わった。

「だったら…力尽くで奪ってやるよ!!!」

すると、モンスターボールを片手に攻撃を始めようとした。

「出てこい！エンブオー！こいつら纏めてやっちまえ…」

「ヒノオオ!!!」

「コーン!!!」

「ヒコオオ!!!」

「ピイカアチュウウ!!!」

攻撃を仕掛けるスワマからリーリエ達を守ろうとヒノアラシは「かえんほうしゃ」を放った。さらにシロンとヒコザルにピカチュウもそれぞれの技をスワマへと放った。

「くっ／＼／覚えてろおお!!!」

丸焦げになったスワマはそのままエンブオーのモンスターボールを仕舞うと、一目散に逃げ帰って行った。

「いい気味よーべえ!!!」

「ヒコココ!!?」

「ポケモンを育てるよりも、まずは己を育てるんだな!」

こうしてスワマとの件に決着がついた。

「助けてくれてありがとう。ヒノアラシ」

「コン!!?」

「ヒノ…」

自分達を守ってくれたヒノアラシにリーリエは感謝の言葉を伝えた。そのままヒノアラシはリーリエ達と見つめ合った。

暫くの静寂した中、ソウタが一步前へと踏み出した。

「リーリエ。お前がゲットしてあげてくれ」

突然のソウタの言葉にリーリエは驚きながらソウタに返答した。

「ですが、ソウタはあんなにヒノアラシの事を思っていたのではありませんか。でしたらソウタがゲットされた方が…」

「心配していたのはみんな一緒だろ。だけどヒノアラシがこうして立ち直る事が出来たのはリーリエが力になってくれたおかげだけ。このヒノアラシに相応しいトレーナーはリーリエだと俺は思う」

「ソウタ…」

リーリエはゆっくりと振り返った。想いはみんなソウタと一緒にいたい。何よりもヒノアラシが望んでいる。

リーリエは頷いて承諾すると、モンスターボールを取り出した。そして、ありったけの声でヒノアラシを誘った。

「一緒に行きましょう！ヒノアラシ!!!」

「ヒノ!!!?」

その言葉を待っていたかのようにヒノアラシはリーリエの元に向かって飛び出した。

リーリエが持っていたモンスターボールに自らの手で開閉スイッチを押すとモンスターボールへと吸い込まれて行った。カウントダウンが始まるまでもなくヒノアラシはリーリエのモンスターボールにすっぽりとおさまった。

「やったねリーリエ!」

「はい!!!」

こうしてリーリエは新しく初の炎タイプとなるポケモン、ヒノアラシをゲットした。

リーリエとヒノアラシの友情の灯火はこれからの冒険の中でどう明るく照らしていくのであろうか。

第二十三話 ポケモンバトル

?三年前?

【マサラタウン ポケモンスクール】

「ヒコザル戦闘不能!クチートの勝ち!」

「よっしやあ!いいぜ!クチート!!!」

「クチツ!!?」

「何やつてるのよサトル。大丈夫ヒコザル!??」

「ヒココ…」

「あ…あんな勝ち方ある訳ないだろ。相性的に炎タイプのヒコザルの方が圧倒的に有利のはずなのに…」

「それは俺が天才だからだろ。授業の成績はトップだけど、実戦になるとダメだな。サトルは」

「なあ!!!ヒ…ヒコザルの「ひのこ」を食べて防ぐなんてやり方なんて、ソーちゃんは発想

が無茶苦茶すぎなんだよ！」

「だけど、勝ちには勝ちだぜ！クチートの性質を上手く使った俺の勝利の結果には変わりはないぜ♪サクトル君♪」

「くっ／＼／＼」

こんな戦い方。僕は全く理解できない。

????????????????

クチバシテイを目指すリーリエ達。

今日のところはリーリエ達はその途中にある街。ヤマブキシティのポケモンセンターで一泊することにした。

「さあ！ジム戦だ！ジム戦！」

「ちよつと待つてよ！ソーちゃん！」

そう。ここヤマブキシティにもポケモンジムがあるのだ。

ヤマブキシティが見えてきたその直後、急に丘を下って走り出すソウタをリーリエ達は跡を追いかけながらヤマブキシティゲートをくぐって行つた。

「てか、ソーちゃんはヤマブキシムには挑戦した事があるの？」

道に迷うことなくポケモンジムへと向かっていくソウタを見てサトルは一度ソウタはヤマブキシムに挑戦しに行つた事があると思つた。サトルの声にソウタは胸を弾ませながら答えた。

「おう！今回を入れると八回目だな！」

「は…八回目なのですか！」

ここまでの旅を共にして、ソウタのポケモントレーナーとしての実力は新米トレーナーとは思わせないほどの実力である事は分かつた。

ポケモンセンターでの野試合でも幾多のトレーナーを相手に負けなしであつたソウタが七度も負けているジムリーダーがいる。リーリエはソウタの発言に驚いていた。

暫く走っていくとポケモンジムのロゴマークが貼られている建物が見えてきた。その瞬間にソウタの高揚感が次第に強くなってきた。強敵と戦える喜んでるソウタは本当にサトシと似ている所がある。

てか、マサラ人はみなそうなのか？

「見えた！見えた！ナツメさん!!!もう一度ジム戦お願いしまーす!…くほっ!!!」

ジムの扉に向かって飛び出したソウタであったが、自動ドアは迫るソウタに反応せず、そのままソウタはクチートと一緒に扉に正面衝突した。

「大丈夫？ソウタ！」

「いてて…なんで開かないんだ」

『なんか書いてあるロト!』

ロトムが指した先には一枚の張り紙が貼ってあった。そこにはこう書かれていた。

『勝手ながら申し訳ありませんが、暫くジムを休館いたします』

まさかの休館の知らせだったのだ。

~~~~~

ヤマブキシジムが閉まっていたため、一同はポケモンセンターへ向かうとした。

「仕方ないよ。ジムリーダーも忙しいかもしれないだし」

ジム戦が出来なかったソウタをなだめるようにサトルは声をかける。

「それか、修行の旅に出たりしてね♪」

「ジムリーダーだぜ？そんな訳ないだろ」

「いや、そうとも言えないよ」

カノンの言葉をソウタは否定すると、ノゾミはそれを指摘した。

「私の地方にいるジムリーダーのメリッサさんは武者修行で良くジムを留守にする事はあるんだよ」

「ジムリーダーが修行に出向く事があるのですか？」

「ああ、ジムリーダーもただ挑戦者を待っているだけではなくて、挑戦者から学んだことを生かして鍛え直すジムリーダーは結構いるもんだぞ」

『タケシも元はジムリーダー。サトシとも旅に出たのもそれが理由ロト』

「いや、俺の場合は元々なりたかったポケモンブリーダーを目指して旅に出たんだ。その時はジムは帰ってきた親父に頼んだんだ」

「ジムリーダーもいろいろと大変なのですね」

ジムリーダーについては以前ニビジムでもタケシからいろいろと聞いた事もある。ジムリーダーも一人のトレーナー。そうやって挑戦者と真剣に向かい合う事で自身も鍛えている事にジムリーダーの偉大さをもう一度知る事になった。

「ねえ、ソーちゃん。ヤマブキジムのジムリーダーはどんな人なの？」

「おう！ジムリーダーのナツメさんはエスパーポケモンの使い手。強すぎて全く歯が立たなかったんだよ」

「エスパータイプ。確かに強そうですね」

「そうなんだよ！だからいつも一体目に完封されちゃうんだ」

その言葉を聞いて一同はまた驚いた。ジムは基本三対三のバトル。つまりジムリーダーは一体だけで三体のポケモンを倒した事になる。その事実には驚かないトレーナーはいないだろう。

「さて、この後みんなはどうする?」

「わたくしは一度、ジエームズと連絡を取りにいけます」

「私も友達と少し話してくるよ」

「俺は旅の整備品の買い出しだな。サトル達は どうする?」

「そうだな…」

ポケモンセンターに着いたリーリエ達はまず先にポケモン達を回復させた後、宿泊する部屋を男女別に取りに行ったのだが、その後、日没まで時間が充分に残ってしまった。

リーリエとノゾミは連絡。タケシは買い物。ソウタはというとクチート達のモンスターボールをもってはすぐにバトル私設の方へと行ってしまった。特にやることがないければ、ポケモン達の特訓をと考えていたのだが、そんなサトルをカノンは下から覗き込見始めた。

「じゃあ、サトル。私とデートでもしよつか♪」

カノンからのデートという発言にサトルは少し顔を赤らめた。

「デ／／／デートって／／／／ま…まあいいけど…」

「へえ〜デートって事は否定しないんだ〜」

「／／／!!!」

からかい上手のカノンさんにギクシヤクされたが、特にする事が見つからないのでサトルはカノンと一緒にヤマブキシティを回ることにした。

~~~~~

ヤマブキシティはカントー地方の中央に位置する街で東西南北と四つのゲートから入るようになっていた。

最近では最大都市なだけあって隣のジョウト地方からの観光客が来日しやすいようにとコガネシティと繋ぐリニアが設備された。中心部にそびえ立つ「シルフカンパニー」本社を初めてとして、サトルとカノンは幾度なく建っている高層ビルに驚きながら街を観光していた。

「初めて来たけど流石は大都市だね。」

「ねえ！あそこのクレープ屋さん行こうよ！」

見つけたクレープ屋に向かってサトルの手を取るとカノンは全速力で走り出した。

「モモンの実のクレープとオレンの実のクレープお願いします♪」

それぞれのクレープを買うと、二人は公園の噴水広場の前のベンチへと腰掛けた。

クレープに噛り付くと、物凄い激的な甘さにカノンは身を少し震わせた。

「ん／＼／やっぱり激甘すぎる〜」

「だ…大丈夫?」

「別に甘いのは苦手じゃないけど、甘すぎるのはやっぱり限度があるよ〜」

モモンの実は木の実の中でも甘さが最も際立つ木の実だ。その甘い香りに野生のポケモンが引き寄せられてしまうぐらいに糖が高い。

「これ飲む?」

「ありが…とう」

その甘さに耐えられないカノンにサトルは少し苦めなブラックコーヒーの缶をカノンに手渡した。これを飲んで少しでも甘さが引いたらと思つて渡したサトルであつたが、渡されたカノンはサトルの顔を見るなり、薄っすらと頬が赤くなつていく。何のことが分からなかつたサトルであつたが、カノンが放つた一言に全てを理解した。

「ねえ…これつて飲みかけだよね?」

「えっ…：：うわあああ!!!」

自分が鈍感だつたわけではない。慌ててサトルは立ち上がると、手をばたつかせなが

ら必死に訂正しようとする。

「ごーごめん!!! つい昔の癖で!」

「ち…違う! 別に嫌ってわけじゃくて…」

理解されるとさらに恥ずかしさが上ってきたカノンもサトルと同じように手をばたつかせ始めました。

気まづくなった二人は暫く互いの顔を合わせようとせず沈黙してしまった。何か別の話題を出そうにも、噛みしめているその口を開くことができないでいる。

そんな二人に…

「押っ忍!!! 君たちもしかして旅のトレーナーかい?」

「うわあ!」

「きゃあ!」

突然サトルとカノンの前に現れたのは道着を着こなした如何にも厳つそうな男性と同じ道着を着こなした若い男性集団だった。腰に巻いた帯をしっかりと締め直すと、気合が入った声で二人を見つめていた。

その圧倒的な威圧に二人は反射的に首を立てに振ってしまった。

「やはりそうか! ならここを訪れたという事は我がヤマブキジムの挑戦者と見た!」

「我がヤマブキジムの」

「もしかして…ジムリーダー？」

「押忍!! そうとも！」

自らヤマブキジムのジムリーダーと名乗る男にサトルとカノンはさつきとは違って、互いの顔を思わず見合わせた。

「でも、ヤマブキジムは暫く休館するって…」

「どうだ挑戦者！ 受けるのか?!? 受けないのか?!?’」

「「押忍!!!’」

「「……………」」

~~~~~

「押忍！私がヤマブキジムのジムリーダーのノブヒコと申す。挑戦者は君ら二人でいいか！」

「あ…はい」

「押忍！よろしくお願いしまーす！」

二人はノブヒコの導きにより道場へと招き入れられた。その道場の看板にはジム施設を表すロゴマークが貼られていたので本当にジム施設だったのだと思った。

サトルとカノンのは奥の大部屋へと進めらると、その中はシンプルなバトルフィールドが設置されていた。すぐにノブヒコはトレーナーサイドに立つとサトルを指差した。指名されたサトルはすぐにノブヒコと同じくチャレンジャー側のサイドに立った。後にされたカノンは審判台が立つてあるすぐ近くの所で待機するよう言われてそちらの方へと移動した。

「押忍！ただいまより、ジムリーダーのノブヒコとチャレンジャーのサトルによるヤマブキジム、ジム戦を開始する。使用ポケモンは三体。どちらかのポケモンが全て戦闘不能となりますとバトル終了となります。なお、ポケモンの交代はチャレンジャーのみ認められます！」

審判を任せられた弟子の一人がジムのルールを説明を行なう。その他の者達はバト

ルフィールドを取り囲むようにして座っていた。

「押忍！俺の一番手はこいつだ！気合だ！！ワンリキー！」

「リキー!!？」

「ワンリキーか…」

ノブヒコは力一杯にモンスターボールをバトルフィールドへと放った。中から現れたワンリキーは自慢の力瘤を見せると己の力強さをアピールしてきた。

『ワンリキー かいりきポケモン

格闘タイプ

全身が筋肉となっており子供ほどの大きさしかないのに大人百人を投げ飛ばせる。一日中修行しても物足りない。』

ここのジムの雰囲気的に思ってたけど、ここのジムのエキスパートは格闘タイプか。

凶鑑をしまったサトルは最初の一体を決めると、モンスターボールを取り出した。

「よし頼むぞ！ブイゼル！」

「ブイ！！？」

ブイゼルが出てくるなり、ワンリキーはブイゼルに挑発をする。それに対してブイゼルはワンリキーを睨み返した。

「試合開始！」

？サトルVSノブヒコ？

審判のコールが響いた直後、指示を待たずにワンリキーはブイゼルに向かって走り出した。

「ワンリキーー！【からてチョップ】！！？」

「リキ！！？」

スタートが出遅れたブイゼルに向かってワンリキーは早くも距離を詰めてきた。サトルはすぐに先制攻撃でブイゼルをワンリキーと真っ向からぶつけた。

「ブイゼル！【アクアジェット】だ！！？」

「ブイ！！？」

両者のぶつかり合いと同時にそれぞれの技のエネルギー波によって後ろへと吹き飛

ばされた。

「大丈夫ブイゼル!!? 来るよ!」

「ブイ!!?」

吹き飛ばされたブイゼルは倒れる事なく踏み止まった。サトルからの応答に答えるとすぐに身構えてはワンリキーの出どころを疑った。

だが、そのワンリキーはブイゼルとの衝突後、吹き飛ばされるとそのまま目を回して倒れていた。

「ワンリキー戦闘不能! ブイゼルの勝ち!」

「おおお!!! ワンリキー!!!!」

「えっ…」

「ピカ…」

「ブイ?」

「えっ…勝っちゃったの?」

「ヒココ…」

ノブヒコはバトルに敗れたワンリキーを抱きかかえると、その場で悔し涙を流した。それにつられて他の道場の人達も一緒になって涙を流しながら、ワンリキーの健闘を讃えた。

それよりもあっさりとジムリーダーのポケモンの一体を倒してしまった事にサトルもピカチュウもブイゼル。そしてそのバトルを見届けているカノンとヒコザルも思わず唾然としていた。

~~~~~

ポケモンセンターではリーリエはオーキド研究所で母ルザミーネに付き添っているジエームズと連絡を取っていた。ルザミーネの容体は悪化することはなく、ウツロイドの神経毒の血清から解毒薬も改良中である事を伝えられた。

「そうなのですね。ジエームズありがとうございます」

「コン!!?」

『奥様にも今のお嬢様のお姿をご覧に頂いて欲しい者です。お嬢様も見ない間にこんなに立派になられて、ジムバッジもお二つも獲得なされてジエームズは感激であります』

!!!

「大袈裟ですわよ。ジエームズ」

「アローラ祭が終わったら、一度研究所の方へと戻ろうと思います」

『分かりました。その時はご馳走作ってお待ちしております。その時はお友達も連れて』

「はい！それではまた連絡いたします！」

『はい。良い旅を』

一方ノゾミもホウエン地方で修行している友人と連絡を取っていた。

『ちよつと！ポッチャマ!!!私はいまノゾミと話してるんだから邪魔しないでよ!』

『ポチャ!!?ポッチャマ!!?』

「相変わらずだね」

停滞してから暫く連絡を取れていなかったため、久しぶりに会えた事にノゾミも背負っていた重荷が外れたかのように健やかな気分になっていた。

『でも良かった。これでも心配してたんだからね』

「ごめん。少しの間コンテストは離れるけど、怠らないように鍛錬は積んでいくから」

『私もホウエンのポケモンコンテストで必ずグランドフェスティバルで優勝するわ。私の目標はいつでもノゾミだもの。今度は必ず貴方に勝つわ!』

「ありがとう！私もこの旅で何か見つけたりそんな気がするよ」

『ノゾミなら見つかるよ！大丈夫！だいじょーぶ♪』

「あんなの大丈夫はあてにならないけどね」

『何ですよ！ふふっ／＼／＼じゃあ、私もうすぐコンテストだから切るね。タケシに宜しく言つといて！後、サトシも何処かで会ったら』

「うん。それじゃあ」

同じタイミングで通話を終えたノゾミとリーリエはすぐに合流した。

「ノゾミ！終わりましたか？」

「うん。今丁度ね」

そして、ポケモンセンターのゲートから大量に買い物袋を背負ったタケシと腕を回しながら大らかな気分にいるソウタとも合流した。

「こつちも買い出しは終わったぞ」

「俺もだ！今日も全勝！全勝！」

「クチ！！？」

残りはサトルとカノン。リーリエはすぐにロトムを通してカノンにメッセージを送った。送つてからものの数分でロトムへとカノンからのメッセージを受け取った。受け取ったメッセージをロトムは読み上げる。

『カノンからメッセージが届いたロト! どうやら、別のヤマブキジムにいるらしいロト』
カノンからの返信に一同は驚いた。

「別の? ヤマブキジムは二ヶ所あるのですか?」

「はあ? そんなの俺知らないぞ?」

「うん…。ジムはここ数年でたくさん建設されるようになったが、同じ街に二ヶ所のジムが建てられるのは聞いたことないぞ」

二人がいるいまのジムをソウタとタケシは違和感を覚えていた。そんなタケシに一人の男が話しかけてきた。

「あれ? 君はタケシ君では」

「貴方はもしかして…」

顔見知りなのかタケシはその男と握手を交わした。タケシから事情を聞いたその男は思い当たる節があつたのか。少し頭を掻きながら説明した。

~~~~~  
サトルが挑戦しているヤマブキジムではノブヒコが二体目のポケモンを投入しようとしていた。

「押忍！行けっニョロボン！」

「ボン!!？」

「二体目はニョロボンか…」

「ブイ!!？」

同じ水系同士に火がついたのか。ブイゼルは一段と毛を逆だてると、そのまま身構えた。

「ブイゼル！「みずてつぼう」だ!!？」

「ブイ!!？」

「こつちも気合の「みずてつぼう」だ!!？」

「ボン!!？」

同時に放たれた水鉄砲はそのまま押し合いに入る。だが、パワーは二段階進化系のニョロボンに及ばずそのままブイゼルは押し出されてしまう。

「回り込むんだ！」

サトルの指示にブイゼルは水鉄砲によって濡れた床を利用して、上手くニョロボンの背後へと滑り込んだ。パワーには敵わないが、スピードに関してはブイゼルの方が一枚上手だ。その素早い動きにニョロボンはブイゼルが自分の後ろに回られた事に気付いていない。

「ブイゼル！「かまいたち」!!?」

「ブイ!!?」

スクリューの働きを持つその尻尾でブイゼルは風を生み出す。風の刃へと形成されていくそのエネルギーをニョロボン向かって放つ。

「後ろだ！ニョロボン「しんくうは」!!?」

ブイゼルの攻撃に気付いたノブヒコはすぐにニョロボンに指示を出した。ノブヒコの声にニョロボンは後ろへと振り返ると同時に、真空波を鎌鼬に打ち込んだ。

「打ち消された！」

「ブイ!!?」

技の威力は「かまいたち」の方が大きい。しかし、初級の技で打ち消してしまうニョロボンのパワーに力任せの攻撃は危ないと悟った。

「戻ってブイゼル！」

サトルはブイゼルを戻す事に決めた。ブイゼルをモンスターボールを仕舞うと、ピカ

チュウに目を向けた。

「ピカチュウ！ここは君で行く！」

「ピカ！！？」

サトルの声に応答し、ピカチュウはバトルフィールドへと立った。苦手な電気タイプが相手でもニョロボンは恐れる事なく仁王立でピカチュウの出方を見つめた。その自身は主人のノブヒコも一緒だった。

「ニョロボン！【しんくうは】！！？」

「ボン！！？」

「【アイアンテール】で打ち消すんだ！」

「ピツカア！！？」

ピカチュウはニョロボンの方へとダツシユすると、真空波を硬化させた尻尾で打ち消すと、そのままニョロボンの頭上へとジャンプした。

「いまだ！【10万ボルト】！！？」

「ピツカアチュウウウ！！？」

「ニョロボン！【ビルドアップ】だ！！？」

頭上から放たれた電撃に対して、ニョロボンは躲すどころかそのまま筋肉を膨張させては力を込めた。しかし…

「ボーン!!!」

ニヨロボンは電撃が浴びてしまうとそのまま後退してしまった。

「何故だ！防御を上げたのに!!!」

ノブヒコは防御を上げてピカチュウの電撃を耐え凌がせる作戦に出ていたようだが、その事にサトルは指摘し始めた。

「あの…【10万ボルト】は特殊攻撃ですから、防御を上げてても意味ないのでは…」  
「ぬおお!!!そうだったか!」

サトルの訂正を聞いてノブヒコは両手で頭を抱えながら大声をあげた。その様子にサトルとピカチュウは少し調子が崩れてしまったのは言うまでもない。

「なんか、ジムリーダーにしてはなんか威厳というのがないよね」

「ヒコ…」

それはカノンも一緒だったようだ。

「だが、上がったのは防御だけではない！攻撃もだ！ニヨロボン！【きあいパンチ】だ!!」  
「？」

「ボン!!?」

ノブヒコは失敗を取り返すようにして、ニヨロボンに再度指示を出した。しかし、その技の選択もミスだったようだ。【きあいパンチ】は拳に力を集中させなければいけな

いが、集中が途切れて仕舞うと、上手く力を貯められなくなってしまふ。つまり、攻撃を受けてしまったら失敗してしまう技なのだ。

それを知っていたサトルはピカチュウに攻撃の指示を出した。

「ピカチュウ！【ボルテッカー】!!？」

「ピカピカ!!？」

電撃を纏ってピカチュウはそのままニョロボンへと突進していく。パワーを貯めている最中はニョロボンは攻撃する事ができない。

「ピカピッカア!!？」

そのままパワーが貯まる前にピカチュウの【ボルテッカー】がニョロボンに炸裂した。

「ニョ…ロ…」

「ニョロボン!!!」

電気タイプ最強クラスの技を受けたニョロボンはそのまま目を回してしまった。

「ニョロボン戦闘不能！ピカチュウの勝ち！」

「やったね！ピカチュウ！」

「ピッカアチュ!!？」

二勝目もサトルとなった。ピカチュウとハイタッチを交わすその様子をノブヒコは楽しげに笑い出した。

「なかなかやるぞよ。少年！だが、そう簡単にバッジは渡さんぞ!!!」

気合を入れ直したノブヒコは最後のモンスターボールを取り出した。

「押忍!!! 全身全霊！気合だああ!!!」

道場内に響き渡る発声量と一緒にノブヒコの最後のポケモンが放たれた。

「あのポケモンは……」

そのポケモンは同じく道着を着こなししており、正座をして精神統一をしていた。そして、モンスターボールから解かれたと知ると、黙祷した目を開いては気合の一言を言い放った。

『ダゲキ からてポケモン』

格闘タイプ

帯を締めると気合が入りパンチの破壊力が増す。修行を邪魔すると怒る。』

「ピカチュウ休んでくれ！」

「ピカ!!？」

静かなる気迫。サトルはあのダゲキがこのジムの切り札であると思った。

反動ダメージもあつて多少ダメージを受けているピカチュウをそのまま続投せず、一旦休ませる事に決めた。

「よし！ヒトカゲ！」

「カゲ!!？」

サトルはピカチュウを戻してヒトカゲを出した。尻尾の赤く燃え上がる炎をさらに大きく燃え上がらせたヒトカゲは自身に気合を入れていた。そのヒトカゲの様子にダゲキはその闘志に一礼を加えた。

「開始!!!」

「ダゲキ【ビルドアップ】だ!!？」

「ダゲキ!!？」

「ヒトカゲ！【ひのこ】だ!!？」

「カゲ!!?」

ニヨロボンと同じようにダゲキはパワーを貯めた。光り輝く膨張する筋肉がその攻撃力を思い知らせてくる。パワーを貯めるその隙にヒトカゲは火の粉を放った。

「【からてチョップ】で粉碎だ!」

「キツ!!?」

ヒトカゲの火の粉を振り払ったダゲキはそのままヒトカゲの頭上へとジャンプした。

「そのまま【からてチョップ】!!?」

「ヒトカゲ! 【メタルクロー】だ!!?」

頭上から振り下ろされる主刀にヒトカゲを硬化させた爪で対抗した。ダゲキの方へと飛び出すと、そのままダゲキの手刀とヒトカゲの硬化した爪が衝突した。

「カゲエ!!!」

「ヒトカゲ!!!」

だが、攻撃力を上げていたダゲキの攻撃に押されてしまい、ヒトカゲをフィールドへと叩きつけられてしまった。

「まずは一体だ! ダゲキ! 次は【ローキック】だ!!?」

次にダゲキは空中で一回転すると今度は踵落としを仕掛けた。ダゲキの接近に気付いたヒトカゲであったが、すぐに体を退かす時間がないほど距離を詰められていた。

「ヒトカゲ！「あなをほる」!!?」

起き上がったてで躲す時間がないならと、サトルは穴を掘って躲す様にと指示を出した。サトルの狙い通り瞬時に下へと潜ったヒトカゲはダゲキの攻撃を躲す事に成功した。

「何iiiiiii!!!」

攻撃を決められなかったダゲキの背後へとヒトカゲは飛び出した。

「今だ！【ひのこ】!!?」

「カゲエ!!?」

「ダアア!!!」

「続けて【りゆうのいかり】だ!!?」

火の粉によって躊躇めいたダゲキに今度は青白い炎を放った。竜の形状となった青

い炎はダゲキに襲いかかる。

「ダゲキ！「からてチョップ」!!?」

又もやダゲキは手刀でヒトカゲの攻撃を防いだ。押されながらも気合でヒトカゲの青白い炎をたた切った。攻撃技を防御として使うダゲキの攻撃力は並大抵の強さではない事をサトルとヒトカゲは再認識も兼ねては痛感させられた。

「ダゲキ！「きあいパンチ」!!?」

ヒトカゲの攻撃を打ち消したその右手で今度はニョロボンの時と同様に力を蓄え始

めた。しかし、「きあいパンチ」の欠点は分かっている。

「パワーを貯めている今がチャンスだ！ヒトカゲ！「メタルクロー」!!？」

ヒトカゲの攻撃はそのままダゲキに命中した。これでなんとか「きあいパンチ」を防ぐ事が出来た。次の一手をと考えようとしたその時、ダゲキの技がヒトカゲを捕らえた。ダゲキの技を防いだサトルは次の一手を考えようとしたその時…

「カゲ!!!」

「ヒトカゲ!!!い…今のつて…」

ヒトカゲはダゲキの攻撃を受けてしまった。しかもその技は「きあいパンチ」だった。「押忍！我がダゲキは技だけでなく精神も鍛えておる。何事にも恐れぬその闘志。怯むことなどない!!!」

怯むことは…ない

「そうか…あのダゲキの特性は《せいしんりよく》か…!!!  
!!………?」

いや、待てよ。【きあいパンチ】と《せいしんりよく》は全く関係ないはずだ。特性《せいしんりよく》は怯むことがない特性だ。その特性を使えば【きあいパンチ】を発動できるのではと思う人達もいると思うがそれは違う。それに【きあいパンチ】が発動できないのは

『集中力が途切れてしまったために』のはずだ。

精神力を持ったポケモンは怯ませる技を受けても攻撃する事が出来るが、技を受けた直後に集中力が途切れるため【きあいパンチ】を出す事は出来ない。そのはずなのに攻撃が決まってしまった。

それはつまり自身も攻撃されている感覚に気に留めないぐらい精神を研ぎ澄ませていた事で集中力は途切れる事なく【きあいパンチ】を放つ事が出来たみたいだ。

そんな事が実際にあるのか。いや、今更何を言っているんだ。とサトルは自分に言い聞かせる。

この旅の中で理屈では通用しない経験をいくつもしてきた。ポケモン勝負に正解はない。ワザや特性の使い方。その無茶苦茶な発想や根拠がぶつかり合い、調和されて、思いも寄らない事が起きるのがポケモンバトルなんだ。

「虫の息だな！ダゲキ【ビルドアップ】だ！」

ヒトカゲの状態を見て、すぐに攻撃をしてこないと分かったノブヒコはヒトカゲを倒した後も考えてダゲキに攻撃と防御をもう一度あげるように指示を出した。

「これだとどめだ！少年！【からてチョップ】だ!!？」

ヒトカゲの頭上にジャンプをしたダゲキは攻撃を振りかざした。体力の消耗が底にきている状態では穴を掘って躲すとしても間に合わない。だけど、ヒトカゲの目は諦める事なくダゲキの方を睨みつけていた。そのヒトカゲの諦めない気持ちはサトルにも伝わっている。

ヒトカゲに早く指示をと…サトルは自分自身でも思いも寄らない事を口走った。

「ヒトカゲ!!! 嘯み付いて受け止めるんだ!!!」

「カアゲ!!?」

ヒトカゲは自分に振りかざしてくるダゲキの手刀目掛けて嘯み付いてダゲキの「からてチョップ」を防いだ。

「な…何!!!」

「出来た!!!」

攻撃力を上げているのにも、ダゲキの手刀を防いだヒトカゲにさらに予想だにしない事が起こった。

「カアゲエエエエエ!!!」

ダゲキの手刀を振り払い、カ一杯に吠えたヒトカゲの体が青白い光に包まれた。爪も牙も一段と鋭くなり、一回り大きくなっていくヒトカゲに目が離せない。

「ヒ…ヒトカゲ」

「リザアアアアア!!!」

オレンジ色の炎を靡かせて赤く大きな体になったそのポケモンは姿が変わったと同時に炎を天井に向かって放射した。

その姿にサトルは喜びと同時にポケモン図鑑を開いた。

『リザード かえんポケモン

炎タイプ

ヒトカゲの進化系。燃えたぎるような性格でいつも戦う相手を探している。強敵と立ち向かうと気分が高ぶり尻尾の炎が青白く燃え上がる事もある』

バトル中の進化も予想に反した事だ。サトルは一つの試合で起こった破茶滅茶な出来事に対して笑みがこぼれた。

「進化とは！なかなかの気合と根性だ！さあ来い!!!」

「ダゲキ!!?」

ノブヒコとダゲキも進化したヒトカゲを前にさらに気分が高揚したのか。今までに聞いた押忍を今日一番に響かせた。その声に負けないようにサトルもリザードに指示を出した。

「行くぞリザード! 進化した力を見せるんだ! 【かえんほうしゃ】だ!!?」

「ザアア!!?」

新たに【かえんほうしゃ】を覚えたりザードの炎は一直線にダゲキに向けて放たれた。その火炎放射をダゲキは両腕を前にクロスさせてガードした。

ヒトカゲの時と比べ物にならない火力にダゲキは少しずつ後ろの方へと押されてしまっていた。

「むむ!!! なんとこの威力!」

「ダゲエ!!!」

火炎放射を大きく両腕を広げて弾き飛ばしたダゲキは息を少し荒らしながらも身構えた。しかし、火炎放射が晴れた先にはリザードの姿は無く、代わりに一つの大きな穴が出現していた。

「なあ!!! 下だ! ダゲキ!」

「ダゲキ!!!」

察したノブヒコはダゲキに注意を促すものの、ダゲキの足元からリザードは「あなをほる」でダゲキをアツパーで空中へと放り出した。

「メタルクロー」だ!!？」

「ザア!!？」

リザードはジャンプをして一瞬にして飛ばされたダゲキの上を取ると、下に向かってダゲキを切り裂いては地面へと叩き落とした。

叩き落とされたダゲキは蹠踏めきながらも立ち上がった。着地したりザードはそのまま両爪を立ててはダゲキを威嚇する。そんなリザードを前にダゲキは拳を前にして身構えた。

「全ての力を拳に貯めろ!!ダゲキ!「きあいパンチ」!!？」

「キイイ!!」

「ザアアア!!？」

右拳に再び力を込め出したダゲキをリザードはそのパワーが解放されるのを待つかのようにダゲキを見つめている。

それは戦いの余裕から出てきたものではない。真正面から互いの力を打つかつて行きたい闘志の表れによるものだ。ボロボロになりながらも戦ってくれた二体のポケモン達の意味を尊重しようと、サトルもマイルも自分のポケモンの想いを了承した。

「行くぞー！少年!!!」

「はい!!!」

ダゲキのパワー貯めが終わった。リザードも大きく息を吸い出した。勢いよくまた燃え出した尻尾の炎が次の攻撃を繰り出す合図に見えた。二体からひりつく緊張感がサトルとダイル。その試合を見届けているカノンにも伝わっていた。

「ダゲキー！【きあいパンチ】だ!!?」

「リザードー！【かえんほうしゃ】だ!!?」

ダゲキがリザードに向かって走り出した直後にリザードの火炎放射がダゲキに襲いかかる。ありったけの力で放射された火炎放射をダゲキは拳で応戦する。

「ダ…ダゲ…」

火力と周りから吹き荒れる熱風に身体中の体力が奪われるも、ダゲキはリザードの火炎放射を押し出しては前へと進んでいく。

リザードもそんなダゲキの様子を見て、火力を上げていく。それに応えるようにリザードの尻尾の炎がさらに燃え上がると、リザードの体から赤きオーラが立ち昇った。

「ザアアア!!!」

「ダゲエエエ!!!」

リザードの特性《もうか》によりさらに火力が上がっていく。リザードの熱意だけで

なく、サトルの闘志も加わった火炎放射にダゲキは太刀打ちするべくが無くなった。

そのまま火炎放射に包まれたダゲキはその場に倒れた。

「ダ…ダゲキ戦闘不能！リザードの勝ち！よって勝者はチャレンジャーサトル！」

「やったよー！リザード！」

「ザア!!？」

バトルが終了した直ぐにリザードはサトルの方へと飛び出した。姿は変わっても中身はヒトカゲの頃の人懐っこさは変わっていなかった。抱きついてきたリザードに倒されたサトルの元へとカノンは急いで向かった。

「やったね！サトル！」

「うん！」

ダゲキをモンスターボールに戻したノブヒコはサトルの方へと歩み寄る。

「サトル殿。君とポケモン達の熱き友情。しかと見させて貰ったぞ！より高みを目指してこれからのポケモン修行を育むが良い」

「はい！」

「押忍！では！」

清々しいバトルの相手をしてくれたサトルと固い握手を交わすとその場を立ち去ろうと背を向けた。

「ちよくと待つてよ。ジムリーダーさん♪」

背を向けたノブヒコをカノンはその笑顔と裏腹の威圧を向けた。その視線に背筋が凍りついたノブヒコは少しずつ視線をサトルとカノンの方へと向いていく。

「な…何かな。お嬢ちゃん」

「サトルは勝ったんでしよう？ だったら渡す物があるよね」

「わ…渡す物。さて、何んだけなく」

「ダ…ダケ〜」

サトルも勝負の余韻のせいで忘れていた事を思い出した。そうだ。ジムバッジだ。だけど、ノブヒコの様子からジムバッジを渡さないよりも渡せないような様子に見える。

慌てるノブヒコを前に大部屋の扉が勢いよく開いた。そこにはリーリエ達と知らない大人の男の人が立っていた。

「それは出来んだろ。そもそもここは公認のポケモンジムではないのだから」

「カノン！サトル！」

「リーリエ！それにみんなも！」

「ちよつと今のつて！どういう意味？」

男の声にノブヒコは核心を突かれてしまったようだ。そして、サトルとカノンも同時に顔を見合わせては驚いた。混乱する二人にもう一度その男は説明を始めた。

「言葉通りの意味さ。ここはポケモン協会から公認を貰っていないポケモンジム。ジムでもなければ彼はジムリーダーでもない」

「ええええええ!!！」

ここがポケモンジムではない事が分かったサトル達にノブヒコは弟子共々と土下座して謝罪をした。

話を聞いてみると、どうやら自身のトレーナー修行のためにジムリーダーと偽ってジム巡りをする実力のある猛者とバトルに引つ張ろうとするためだったと言う。

しかし、そのせいで本来のヤマブキジムと間違われてしまうのも事実。ノブヒコはもうこういうことはせぜにちゃんとポケモン協会のジム認定試験を受けるために修行をする事を誓った。

「騙してすまなかった。ジムバッジは授けられんが…」

サトルとカノンの前に立つと、一人の弟子が二つのモンスターボールを手にダイルの元へと渡った。その二つのモンスターボールを取ったダイルは開閉ボタンを押した。

「エビシエ!!?」

「サワア!!?」

中から二体のポケモンの姿が現れた。

「パンチの帝王エビワラーとキックの破壊神サワムラーだ。どちらか一体を授けよう！」

~~~~~

「はあくなんだったんだろ」

「でも、いい修行にはなつたよ」

ヤマブキジム道場からポケモンセンターに帰って来たリリー工達は夕食の時間まで

ロビーのソファでぐったりとしていた。

「まあ、ヒトカゲはリザードに進化したし、カノンはエビワラーゲットだし、結果オーライじゃねえか！」

「ザアド!!?」

「エビシエ!!?」

ポケモンを受け取ったのはカノン。無理に連れてこられた故にバトルも出来なかったためのお詫びの印なのか。サトルから譲渡の権利を譲って貰った事でカノンは四体目に格闘ポケモンエビワラーを入手した。

「ナツメが戻るのはまだ先だが、前よりももっと力をつけて戻ってくるらしいから。楽しみにしていてくれ」

「はい！ありがとうございます！」

「それじゃあ！」

「え…消えた」

そう言つて、リーリエ達と一緒にいた男は額に手を当てた瞬間にその場から一瞬にして消えてしまった。

「ああ、ナツメさんのお父様は正真正銘の超能力者だからね」

「へえ〜そうなんだ〜」

何かと振り回された一日だったためカノンはタケシの一言に途方にもない返事で返した。

何がともあれ、ヤマブキシティを出ればクチバシティまでもうすぐだ。明日の事を話しながらリーリエ達の夜は更けていくのであった。

~~~~~

【小ストーリー】

明日の事で眠れなくなったリーリエとカノンはバトルの特訓をしていた。

「ありがとうリーリエ！付き合って貰っちゃって」

「ヒコ!!？」

「そんな構いませんよ!」

「コーン!!？」

「サトルもどんどん力つけてきてるから私も頑張らなくちゃと思ってね」



## 第二十四話 VS ダークカイリユ

目的地のクチバシテイまであと少しの所まで来たリーリエ達。そよ風に当たりながら、ランチを楽しんでいる中、リーリエは今日もズルズキンと打ち解けようと頑張っていた。

タケシにも教わってズルズキンの好みに合わせたポケモンフーズを持って、コミュニケーションを取って行くもののズルズキンはそれに対して興味を示すどころかリーリエとも目を合わせようとしなかった。

「今日もダメ？」

「ええ……」

諦めて自分の昼食を取りに戻ろうとしたその時、

「ズキッ!!!」

ズルズキンに向かって攻撃が放たれた。突然のことに驚いたリーリエはすぐに技が放たれた方角へと目をやった。そこには、ズルズキンを睨みつけては怒りを露わにしているキモリが立っていた。

「キヤモ!!? キヤアモ!!!」

「ここまでのズルズキンの主人であるリーリエに対する態度に我慢が出来なかったのか、キモリは鋭くズルズキンを叱責し始めた。

「ズツツ!!?」

「おいおい! 待って待て!」

「やめろ! 二人とも!!!」

攻撃を受けたズルズキンは物凄く怒り始めているのは言うまでもなかった。普段の強面からさらに怒り狂ったズルズキンの表情には思わず足が竦んでしまう程だった。

だが、リーリエはすぐに喧嘩を始めようとする二体の間にすぐに入って行った。

「止めて下さい! キモリ! ズルズキン!」

リーリエの呼び声に我が戻ったキモリとズルズキンは構えることをやめた。しかし、ズルズキンはリーリエの登場に驚いていただけで、すぐにキモリの方へと見直すと、両手を合わせて「あくのはどう」を撃つ体勢に入った。シロンの注意のおかげで早く気づいたリーリエはズルズキンのモンスターボールを取り出した。

「戻って下さい! ズルズキン!」

ズルズキンをモンスターボールに戻したリーリエはゆっくりとキモリの方へと振り返った。

「キモリ…気持ち嬉しいのですが、急に攻撃なんてしたら誰だって怒りますよ!」

「コーン!!?」

「キャモ…」

ズルズキンの態度に許せなかったとはいえ、リーリエの言う通り。キモリは先走ってしまつた行動に深く反省した。

「返せ!泥棒!!!」

すると、いきなり大きな声がリーリエ達の耳の中へと入ってきた。

『向こうの方からロト!』

何処からかと辺りを見渡すと、それに気づいたロトムの後を追って行く。

声がした方へと進んで行くと、そこに道端で倒れている男性の姿があつた。

「大丈夫ですか!」

すぐに男性の元へと駆け寄るリーリエ達はゆっくりと男性の体を起こしあげた。

目立つた外傷はないようだが、男性は一呼吸したうえでゆっくりと口を開いた。

「きゅ…急に二人組の…男に…私のポケモンが…」

男性の焦る様子や言動からリーリエ達はポケモンを奪われてしまつたのではないかと推測する。すると、リーリエ達の元へと一台の白バイクがこちらに向かつてきた。

「どうしたの?」

「ゼニツ!!?」

「ジュンサーさん!」

立ち寄ったジュンサーに事情を説明した所、ジュンサーは思い当たる節があるような表情を浮かべた。

「ポケモン泥棒。もしかしたら…」

「知っているのですか?」

「通報があつたの。ここ近辺でポケモン泥棒を働く二人組がいるっていう情報ね。私たちは其奴らの行方を追いにここまでやってきたの」

「ゼニツ!!?」

「二人組って、もしかしてロケット団?」

「いや、僕たちが知っている二人組じゃないよ。この人も二人組の男の人って言うてたし」

ロケット団か。それともポケモンハンターなのか。一刻も犯人逮捕をしなければもつと被害が増えてしまう。ジュンサーは男性から二人組の男の特徴などを聞き始めた。

「犯人は私達が必ず捕まえます」

「ど…どうか、お願い致します」

ジュンサーはそのまま男性の証言から逃げた先に向かつて歩き始めた。

事の事情を聞いたリーリエ達は互いにアイコンタクトを取ると急いでリーリエはジュンサーを呼び止めた。

「ジュンサーさん！わたくし達にも出来ることはありませんか？」

「うん！人数は多い方がいいもんね♪」

「私達はジム巡りの旅をしているトレーナーです。腕には自信があります」

そう言うリーリエ達にジュンサーは一般トレーナーを巻き込んでしまうのはどうかと、少し躊躇っている様子であった。しかし、ノゾミが持つキーストンからメガシンカポケモン使いつて事やリーリエ達は皆バツジ二つ以上を持つ実力のあるトレーナーである事がわかった。

悩んだすえジュンサーはリーリエ達にも犯人逮捕の協力をお願いする事にした。

「わかったわ！お願いしてもいい？」

「はい!!!」

こうして、リーリエ達はジュンサーと共にポケモン泥棒を追う事に決めたのであった。

~~~~~

『ゼニガメ かめのごポケモン

水タイプ

甲羅に閉じこもり身を守る。相手の隙を見逃さず水を吹き出して反撃する。丸い形と表面の溝が水の抵抗を減らすので速く泳ぐ事ができる』

ロトムがゼニガメのデータを取り終えた直後、ジュンサーはすぐにタケシの方へと目をやった。

「遅れちゃったけど、久しぶりね。タケシ君」

「はい。ゼニガメ！俺のことは覚えてるか？」

「ゼニゼニ!!？」

タケシが呼びかけた一体のゼニガメはタケシに目を向けると、元氣よく頷いた。手を取って再開を喜ぶタケシとゼニガメの姿にサトルは大体の意図が分かっていた。

「タケシ！そのゼニガメってもしかして」

「ああ！サトシのゼニガメだよ！」

やっぱり。ジョウトのシロガネリーグで使っていたサトシのゼニガメを観ていたサトルは一早く察しがついていた。

それを聞いた他のみんなもサトシのゼニガメに注目が集まった。

「へえ、サトシのポケモンなんだね。この子は」

「ちょうど今の俺たちみたいにくちバシテイに向かう途中だったかな。そこでゲットしたんだ」

ゼニガメを仲間に加えた定期を話すと、タケシは他のゼニガメ消防団員を見てある事に気がついた。

「ですが、いつものゼニガメ団のメンバーではないみたいですね」

そう、サトシのゼニガメがリーダーとして活動していた他のメンバーではない事に気がついた。

「ええ！今はポケモン消防団は規模を増やして色々な水ポケモン達もいるわ。ゼニガメ団もその一つだね。初代にいたゼニガメ達をそれぞれをリーダーにして、五つのグループに分けているのよ」

すると、一体のゼニガメがシロンに話しかけてきた。

「ゼニ!?？」

「コン？」

「ゼニツ!!？」

「コーン!!？」

すぐに打ち解けあつた二体はそのまま一緒に並んで歩いていった。

「あらら、もう友達になつたの?ゼニガメ」

「この子女の子なのですか?」

「消防団には雌のポケモンはあまりいないから、同じ女の子がいてこの子も嬉しそうですね」
世間話はそれぐらいに、タケシは本題となるポケモン泥棒の情報についてジュンサー

に質問した。

「いつからそのポケモン泥棒が現れるようになったんですか?」

「私に要請があつたのは今さつきだったの。彼らから奪われたポケモンの被害は昨日で数十件に及ぶわ」

『たつた昨日でそんなにロトか!!!』

「ええ…ただの泥棒にしては足取りが掴みづらい計画的な犯行だわ。私が睨むにはその二人組は上の命令で動いている可能性があるの」

「二人だけじゃないってことね」

「だから、貴方達がついて来てもらう事に対してちよつとはどうしよつかと思つたけど、反対はなかつたわ。なにより、元ジムリーダーのタケシ君にキーストンを所持しているノゾミさん。それにジムバッジを二つ以上も所持しているリーリエさん達。これほど心強いって事はないわ」

ジュンサーから言われた事に照れくさそうに表情を歪めるリーリエ達の前に二人組の人影が見えてきた。

「おい、あそこに誰がいるぞ」

何かを見つけたソウタがゆっくりと指した方へと見て見ると、その二人組は大きな袋を担いでは、土がついた一つのモンスターボールを祓っていた。異様に大きな袋を持っている事に不審に思つたジュンサーはこの二人組はそのポケモン泥棒ではないこと推測した。

断言ではないが、見るからに怪しそうな二人を前にして黙るつもりはなかつた。

「そこまでよー！」

「な！何く!!!ジュンサー!!!」

ジュンサーの姿を見たその二人組は思つた以上の動揺を見せていた。

「おい！トロイ!!!これって俺たち見つかつちまつたオチじゃね?」

「だから言つただろ！へボー！兄貴の命令無視に欲なんて出すからだろ！」

「やっぱり、上があるのね。貴方達の親玉はどこなの!!?」

ジュンサーの質問に答えることなくヘボイとトロイはそれぞれ一つずつモンスターボールを取り出すと、思いつきり投げ入れた。

「出てこい!ドゴーム!!!」

「行つてこい!アリアドス!!!」

「ドゴオ!!?」

「アリアリ!!?」

『ドゴーム おおごえポケモン

ノーマルタイプ

木造の家を粉々にするほどの大声を出して相手を痛めつける。足を踏みならしてパワーを貯めている』

『アリアドス あしながポケモン

虫・毒タイプ

お尻からだけでなく口からも糸を出すので見ただけではどちらが頭なのか分からな

い。常にお尻から出す特別な一本の糸を辿って行くと巢に繋がっている』

「ここを通さないって所を見ると、あの先に親玉いるってことだね」

そう口にしたサトルは自分のモンスターボールを取り出した。それを見たソウタもモンスターボールを取り出すと、リーリエ達の前に立った。

「ここは俺とサトルで何とかするから、みんなは先に行ってくれ！」

『二人で大丈夫ロトか！』

「心配ねえって！」

ここで全員で足止めされる訳にも行かないのは先決だ。ここはサトルとソウタに任せることにした。

「分かった！二人とも後でね！」

カノンの呼び声に相槌を立てたサトルとソウタ。二人に任せてリーリエ達は二人が阻む奥の道へと進んで行った。

「おいおい！行かせちまっていいのかトロイ！」

「兄貴なら心配ねえさ！へホイ！俺たちはちやちやと此奴らを倒してポケモン奪っちゃえばそれでいいんだしよ！」

ヤンキー口調で平然と喋り出す二人を前にして、身構えたサトルとソウタはそれぞれの手にしたモンスターボールを投げ入れた。

「頼んだよ！クルマユ!!!」

「俺はこいつだ！出てこい！ヒヒダルマ!!!」

「マユ!!!？」

「ダルヒヒ!!!？」

「ヒヒダルマ？」

『ヒヒダルマ えんじようポケモン

炎タイプ

体内で1400度の炎を燃やす事でダンプカーをパンチで破壊するほどのパワーを作っている。戦いで弱まると岩のように動かなくなる。心を研ぎ澄まし精神力で戦うのだ』

サトルはクルマユ。ソウタは炎タイプのエんじようポケモンのヒビダルマを繰り出した。四人のポケモンが出揃うと、すぐにヘボイが動き出した。

「ドゴーム! 【ハイパーボイス】!!?」

「ドゴオオ!!?」

「ヒビダルマ! 【かえんほうしゃ】だ!!?」

「ダルオオ!!?」

大きく息を吸い込んだドゴームが放った大音波を前にヒビダルマは火炎放射でドゴームの技を相殺した。打ち消された技から発生した煙が目眩しとなってしまった事により、サトルとソウタはすぐ近くの木にアリアドスが葉っぱの茂みに身を潜めながら接近している事に気付いていない。

「アリアドス! 【ナイトヘッド】!!?」

「アリリ!!?」

お尻の糸で体をワイヤーのように吊るして降りてきたアリアドスは禍々しい黒紫色のオーラを放ち始めた。その技の威力にクルマユとヒビダルマは前へと踏み出せないでいた。微かにその技の衝撃波を打たれながらもサトルはクルマユに指示を出す。

「くっ!クルマユ!アリアドスに【はっぱカッター】だ!!?」

「マユユ!!?」

力一杯に葉の刃をクルマユはアリアドスの方へと撃ち始めた。クルマユの攻撃に気づいたアリアドスは主人のトロイの指示がなくても自分からお尻から出した糸を切ると、クルマユの攻撃をなんなく躲した。しかし、ただ躲しただけではない。躲しながらもクルマユとヒヒダルマの方へと顔を向けていた。

「今だアリアドス!」
「クモのす」!!?」

「あつ!!!」

「足が!!!」

それぞれの足元に糸で作られた包囲網を二体とサトルとソウタの方へと撃ち込まれてしまった。アリアドスの糸で足を固定されてしまったサトルとソウタは必死に蹴くが、なかなか抜け出す事が出来なくなってしまった。

「よっしや!ドゴーム!」
「じしん」だ!!?」

勢いよくジャンプしたドゴームは全体重を乗せて勢いよく降下していく。跳びはねる事が出来ないサトル達にドゴームの地震攻撃が迫ってくる。何とか脱出の糸口を探ろうと必死に頭を悩ませているサトルを前にソウタはヒヒダルマに叫んだ。

「させつか!!!ヒヒダルマ!」
「サイコキネシス」で動きを止める!!?」

「ダルヒイ!!?」

炎タイプでありながら、エスパークタイプの技を使えるソウタのヒヒダルマは両目を青白く光らせると、着地寸前のドゴームの動きを制止させた。

「おお!!!」

「何だよ!!!」

【サイコキネシス】をかけたのはドゴームだけでなく、アリアドスにもトロイとヘボイにもかけていた。一気に二人と二体の動きを止めたソウタのヒヒダルマのパワーにサトルも驚いていた。

「そのまま投げ飛ばせ!」

「ヒヒダルム!!?」

一気に後ろの方へと投げ飛ばされた泥棒二人組はそのまま自身のポケモン達の下敷きにされていた。

「今だクルマユ! 【いとをはく】!!?」

「うおおおお!!!」

「か…絡まって…うわあ!!!」

蜘蛛の巣で動けないもののクルマユは自分たちがされたのと同じように、糸で泥棒二人組をそのまま縛り上げていく。身体中に糸で縛られた泥棒はバランスを崩すと、地面へと倒れ込んでしまった。

「よし！もうあいつら攻撃の指示を出す余裕もなくなってるぞ！」

「今だクルマユ！【むしのさざめき】だ!!？」

「マユマアア!!？」

クルマユは自分の両手の葉を擦り合わせると、それにより発生された音波を一気に解き放った。

「ぎやあああ!!！」

吹き飛ばされた二人組にもうなす術はなくなっていた。

「よっしやあ！やったぜサトル！」

「うん！ソーちゃんもナイス！」

勝機を失った二人を見たサトルとソウタは勝利のハイタッチを交わした。

勝利に喜んだクルマユもすぐにサトルの元へ向かうと糸でサトルを絡めると勢いよく飛び込んできた。

「うわああ!!！よ…よくやったよ。クルマユ」

「マユ!!？」

「ナイスファイトだったぜ！ヒヒダルマ！」

「ダルヒヒ!!？」

それぞれの主人の元に戻ったクルマユとヒヒダルマにも労いの言葉を上げてから、二

体をモンスターボールへと戻した。

「くっ……くっくっ」

「俺たちが……こんなガキ共に……」

サトル達に敗れたヘボイとトロイは唇を噛み締めながら悔しそうにしていた。

「ソーちゃん！僕たちも行こう！」

「そうだな！」

ポケモン達を戻したサトルとソウタは逃さないようにクルマユの糸で木に縛り付けたヘボイとトロイを置いて、リーリエ達の跡を追おうとしていた。

その時……

ビビビッ

!!!!!!!!!!!!

トロイのズボンのポケットから何かしらのサイレンが鳴り響いた。その音を聞いたヘボイとトロイの表情はだんだんと希望が見えてきた顔をしていた。その表情に何らかの違和感を感じたサトルとソウタは同時にピカチュウとクチートを場に出しては辺りを警戒し始めた。

「ミラーボレーダーの反応。まさか!!!」

「兄貴!!!助けに来てくれたのか!!!」

そう叫んだ直後、何処からともなく陽気な音楽が徐々にサトルとソウタに近づいてくる。音がする方へと目をやると、そこには何とも強調的なアフロヘアをした派手めの全身紫色のコーディネイを着た男がムンフォークをしながらサトルとソウタに近づいてきた。

ヘボイとトロイの様子を伺ったその男はダンスをやめるとサトルとソウタに向かい合った。

「ほんと、だらしのないわね。あんた達は！こんなお子様に負けるなんてね」

「まさかおまえがそいつらの親玉か！」

ソウタが叫んだその直後、一つのモンスターボールが空高く放たれると、オレンジ色の体を身に纏ったポケモンが翼を広げてサトルとソウタを呆然と見つめていた。

すぐにピカチュウとクチートを向かい合わせると、アフロヘアーのその男はサンングラスを掲げると不敵な笑みを浮かべながら、指示を出した。

「【ダークストーム】！！？」

~~~~~

「もう一人は一体何処へ行つたんだ?」

「隠れ宿らしき建物すら見当たらないようだね」

まだ親玉の足に追いつけない事に疑問を浮かべたりリーリエ達の足が止まった。

その直後、すぐ後ろから大きな爆発音が鳴り響いた。

「爆発!」

「サトルとソウタがいた方角からじゃない?」

「まさか!!!」

「しまった!鉢合わせたのね!!!」

リーリエ達は急いでサトルとソウタの元へと全速力で引き返した。ひたすらに駆け出していくと薄っすらと特徴的なアフロヘアーを持った人物の影が見えてきた。

そして、その男に近づいていくと、その足元にはサトルとソウタがぐったりと倒れ込んでしまっていた。

「サトル!!!ソーちゃん!!!」

背後から突然に聞こえたカノンの呼び声にミラーボは振り向いた。その先のミラーボの目には倒れている二人と同じ年頃の少年少女とジュンサーの姿があった。

「大丈夫よ……この子達に危害を与えるつもりはないわ。ただ、この子達のポケモンちゃん達を私のミラーボ組織に入れて上げようとしていた所よ♪」

得意げなダンスと一緒に陽気に返答するミラーボにリーリ工達はポケモン達を前にして一斉に身構えた。

すると、ミラーボが持っていたラジカセから新しい曲をかけると同時に五個のモンスターボールを取り出した。そのモンスターボールからは頭に大きなオオニバスを被ったポケモン達がミラーボと共に踊りながら出現した。

「あのポケモン達は？」

『任せるロト！』

そのポケモンをロトムはいつも通り解説し始めた。

『ルンパツパ のうてんきポケモン

水・草タイプ

陽気な音楽を耳にすると踊り出す習性がある。陽気なリズムで体を動かす事でパ

ワーを増幅させている』

ミラーボを中心に円を囲むようにして、リズムに合わせて踊っていた。踊っているルンパツパは陽気そうに見えるが、何処となく見透かされているような気ではなかった。

「ルンパツパ！」

「それに五体とわね」

私含めて五人と一人一体を相手に出来る数ではある。だが、まだ初心トレーナーとはいえサトルとソウタは多くの戦いを経験してはもうベテラントレーナーに負けないぐらいの力をつけてきている。

しかし、そんな二人を同時に倒したトレーナー。尚且つ、手下二人を高度かつ纏める統率者。そんな人がタイマン勝負を許すわけがない。一気にリズムを狂わされてしまえば勝算が限りなく低くなる。それに……トレーナーが持てるポケモンの数は六体。残り一体の手持ちも気になるところだ。

それらの事を慎重に頭に入れたリーリエ達は一人ずつ前へと身構えた。

「貴方をポケモン密漁の疑いで逮捕します！」

「やれるものならやってみなさいよ！ ミュージックスタート♪」

ミラーボの合図と一緒にルンパツパ達のステップがだんだんと早くなってきた。狂わされる前に此方からリズムを崩していくしかない。

「ゼニガメ消防団！一斉に【みずてつぽう】よー！」

「シロン！【こなゆき】です！！？」

「ゼニツ！！？」

「コン！！？」

ゼニガメ団の水流とシロンの冷気がルンパツパ達に向かって放たれた。しかし、すぐにミラーボの指示が流れるとルンパツパ達は一斉に体を曲げるなりして技を躲した。

「It's s! o n s t a g e!!!ルンパツパ【あまごい】♪」

「パルンパ♪」

「ルンパツ♪」

「ルンパツパ♪」

三体のルンパツパはさらにダンスを大きく表現し始めると、湿った空気が広がってきた。やがて形成された小さな雲が一つ一つと重なって膨張し合う事で大きな雨雲を発生させた。

「お願い！エビワラー!!!」

「行くぞ！グレッググル!!!」

「頼んだよ！エルレイド!!!」

「エビシエ!!？」

「グウウ!!？」

「エルレイ!!？」

降り注ぐ雨の中、リーリエ以外のみんなもそれぞれのポケモンを繰り出した。

「グレッグル！【どくばり】だ!!？」

「グウウ!!？」

「エビワラー！【メガトンパンチ】!!？」

「エルレイド！【サイコーカッター】!!？」

「エビシエ!!？」

「エルレイ!!？」

ポケモンを繰り出したタケシ、カノン、ノゾミはすぐに技の指示を行なった。

「躲しなさい」

迫る三体の格闘ポケモンの技をルンパツパ達は物凄い速さでいとも簡単に躲した。

だが、躲された事よりもその見かけから予想だにしない素早さにリーリエ達は退いてしまった。

「hey!もつとテンポ上げて!ワンチュウ!ワンチュウ!」

ミラーボの手拍子によるリズムに合わせて、ルンパツパ達はステップを踏みながら、アイススケート選手のような速さでリーリエ達を攪乱していく。

「なんてスピードなんだ!!!」

「あれはルンパツパの特性《すいすい》による効果だ！雨の時は素早さが通常よりも二倍になるんだ！」

ノゾミの答えにタケシは率直に返した。

ルンパツパは特防が高くてその他は平均的な能力値ではあるが、決して低いわけではない。雨のおかげで水系タイプの技が通常よりも高くなつてもいるし、特性《すいすい》のおかげで素早さも増している。

つまり、今のルンパツパ達は攻撃も素早さもトップクラス級であるという事だ。そして、それが目の前に五体といるのだ。

《すいすい》には《すいすい》ですね！」

今のルンパツパ達の能力を把握しているリーリエはすぐにそれに対等に渡り合えるポケモンを選んだ。

「お願いします！コイキング!!!」

「ココツ!!?」

「【たいあたり】です!!?」

「コオ!!?」

「ルンパ!!!」

ルンパツパと同じく特性《すいすい》であるコイキングはモンスターボールから飛び出すと、すぐに一体のルンパツパに向かって光の矢のようなスピードで体当たりを繰り出した。

「ちっ!ルンパツパ!」  
「ギガドレイン」!!?」

「エビワラー!」  
「バレットパンチ」!!?」  
「ヒコザル!」  
「ひっかく」よ!!?」

「エビシエ!!?」  
「ヒコオ!!?」

コイキングの攻撃を受けたルンパツパは持ち堪えて技を繰り出そうとするが、エビワラーの先制攻撃とヒコザルのスピード攻撃に間に合わずしてその二体の攻撃を受けてしまった。

一体のルンパツパが後退すると、さつきまで陽気に踊っていたルンパツパ達が急に慌ただしくなってきた。一体が欠けてしまった事によりリズムを崩されてしまったからなのか。ミラーボが軽く舌打ちをしていた事からなんとなく推測が出来る。

結果的にルンパツパ達は先程までのコンビネーションとは打って変わって、分裂しては各々で攻撃を繰り出し始めた。

「躲せ!!!」

「いいぞグレッグル! 【どくづき】だ!!?」

「グルル!!?」

その内の一体のルンパツパの攻撃を躲したグレッグルはそのまま毒を纏った手刀をルンパツパの下顎目掛けて突き飛ばした。

【しんくうは】!!?」

「エビツ!!?」

「今よヒコザル! 【あなをほる】!!?」

「ヒココ!!?」

「ルンパア!!!」

エビワラーの真空波で吹き飛ばされたルンパツパはその後のヒコザルの地中からに  
よるアツパーで吹き飛ばされた。

「ルンパツパ! 【かみなりパンチ】!!?」

「受け止めろ!」

「エルレイ!!?」

「そのまま 【インファイト】!!?」

「エルレイ!!?」

ルンパツパの電気を帯びた拳を両腕でガードしたエルレイドはそのまま連続攻撃を浴びせた。

勝手に動いたルンパツパ達を見てはミラーボは喝を入れると、手拍子でルンパツパ達のリズムを戻し始めた。

「ルンパツパ達！さらにテンポアップよ!!!」

ミラーボの声と手拍子によりルンパツパ達はもう一度リズムに合わせてステップをし始めた。もう一度、感覚を掴めてきたルンパツパ達は横一列に並んで身構えた。

「ルンパツパ！全員で「ハイドロポンプ」よ!!?」

口を開けたルンパツパ達は「ハイドロポンプ」を一斉に放射した。雨の中でのその威力は押し寄せてくる濁流かのようにリリーリエ達に迫ってくる。

「シロン！【こなゆき】です!!?」

「ヒコザルは【ひのこ】!!?エビワラーは【しんくうは】!!?」

「グレッグル！【どくばり】だ!!?」

「エルレイド！【サイコカッター】!!?」

「ゼニガメ！【ハイドロポンプ】!!?その他の団員は【みずてつぼう】!!?」

それぞれの特殊攻撃技でルンパツパ達の「ハイドロポンプ」に対抗した。しかし、水系技最強クラスの技の前に為すすべも無くに押し負けてしまった。

何とか直撃は避けて、押し出した事により威力も多少落ちていた事もあって、戦闘不能は免れたのだが、リーリエ達は少しだけ吹き飛ばされてしまった。雨によって泥濘んだ泥を払いながらリーリエ達はもう一度立ち上がった。

しかし、ルンパツパ達もかなりのレベルの上にコンビネーションも厄介だ。天候をも味方に行っている故に真つ向から挑んでも勝算は少ない。

「カノン！ タケシ！ ノゾミ！ 少しだけルンパツパ達の気をそらして下さい！」

「えっ……うん！」

「分かった！」

「やってみるよ！」

リーリエの掛け声にカノンにタケシにノゾミはルンパツパ達の注意を引き寄せた。意図は分からないがリーリエを信じて三人はルンパツパ達を言われた通りに攪乱させる。

「ジュンサーさん！」

次にリーリエはジュンサーとゼニガメ団にその意図をミラーボに聞こえないように話した。それを聞いたジュンサーはゆっくりと頷いた。

「よし！ いいみんな!!! ひたすらに【みずてっぽう】よ!!!？」

「ゼニユユ!!!？」

次にゼニガメ団はルンパツパの足元目掛けて水鉄砲を放った。

「闇雲に打った所でそんな攻撃は怖くはないわよ〜♪」

ミラーボの言った通り水草タイプのルンパツパには水鉄砲は大して怖いものではない。だけど、リーリエの狙いはダメージを与えることではなかった。

「今ですシロン！【こなゆき】!!？」

「コーン!!？」

シロンの冷気がルンパツパ達の足元に広がって行く。すると、ゼニガメ団の水鉄砲もあつて急激に冷やされた地表の水分が柱状に凍っていくと、地表は大きく持ち上がってきた。

平らだった地表の形状が変わり、凍った氷柱を踏みつけては鳴る音に気が立つルンパツパ達は徐々にフォーメーションが再び乱れ始めてきた。

ミラーボのルンパツパ達の強さとなる一つの要がフォーメーションダンスだと思つたりリーリエはそのテンポをまず崩して行くべきだと考えたのだ。それはコイキングの体当たりを受けた一体のルンパツパによって一瞬でも隙をつく事が出来たからだ。

「コイキング！【たいあたり】です!!？」

「ゼニガメ！【ロケットずつき】よ!!？」

「コオ!!？」

「ゼニ!!?」

コイキングとサトシのゼニガメの突進によって、リズムバランスが取れなくなったルンパツパ達を一齐に吹き飛ばした。

「ルンパツパー!もつとテンポを上げて行くわよ!!」

ダンスを取り柄としたフォーメーションを考えていたミラーボは音楽を流してルンパツパ達を立て直そうと、ラジカセのスイッチに手をかけた。

「ピカチュウ!あのラジカセに【10万ボルト】だ!!?」

「ピツカチュ!!?」

気がついたサトルの指示にピカチュウは電撃でミラーボが持つラジカセを破壊した。立て直させる術が無くなったルンパツパ達は個人でリズムを取ろうとするのだが、もう先ほどまでのキレがなくなっていた。

「グレッグル!【どくづき】だ!!?」

「エビワラー!【スカイアッパー】!!?」

「エルレイド!【サイコカッター】!!?」

畳み掛けるかのようにルンパツパ達はそのままミラーボの方へと吹き飛ばされていく。

「嘘だろ!!!」

「ミラーボ兄貴のルンパツパ達が!!!」

「しつかりなさい!ルンパツパ達が!!!」

「ル…ルンパ…」

何とか立ち上がろうとするルンパツパに頃合いを見たリーリエはすぐにシロンを自分の前へと置いた。

「カノン!ノゾミ!お二人をすぐに此方の方へ!」

「分かった。エビワラー!サトルとソーちゃんをこつちに連れ戻して!」

「エルレイドも頼む!」

ふらついているルンパツパ達の間を見て、サトルとソウタの救出を行なった。すぐに二人を抱きかかえたエビワラーとエルレイドは急いでリーリエ達の元へと戻って行った。

「ありがとう!」

「助かったぜ!」

こちら側へと戻れたサトルとソウタを確認したりリーリエはバックからバングルを取り出すとそれを自分の右腕に装着した。

「これで決めますわ!シロン!!!」

「コーン!!?」

中心部に光る宝石がリーリエの掛け声と一緒に白く輝き始めた。それを光景したカノン達はリーリエに注目が集まった。

「えっ…あれってメガバングル？」

「いや、違う！」

キーストンの輝きと匹敵するぐらいの光を灯している。その光を灯しながらリーリエはシロンの呼吸に合わせてポーズを取り始めた。

「何する気よ！ルンパツパ達！」「ハイドロポンプ」よ!!？」

嫌な予感を察したミラーボはルンパツパ達に攻撃の指示を送るも、ポーズを取り終えたりーリエから灯された光が一気に解放すると、そのまま前にいるシロンにその光が集まった。

「天から静かに降り注ぐ雪」

「無数に煌めく氷の結晶」

「熱き我がソウルとともに」

「今再び 天へと昇れ！」

【レイジングジオフリーズ】  
!!!

足元から氷の氷柱が出現すると、その上にシロンを乗せたまま天高くと聳え立つ。その上からルンパツパ達を見下ろしたままシロンは巨大な冷凍砲を一気に撃ち込んだ。直撃したルンパツパ達は一瞬で氷の華にその身体の自由を奪われると、一気に爆散した氷の花びらとともにその場に崩れ落ちていく。

光り輝く氷の破片が舞う中でルンパツパ達は目を回していた。

「す……凄いい」

氷タイプ最強技の【ぶぶき】よりも上回るその力にカノン達は呆然と立ち尽くしてしまった。

「久しぶりでですけど上手く出来ましたね。シロン！」

「コーン!!?!」

膨大な力を放ったシロンを抱きかかえながらシロンの頭を優しく撫でた。

リーリエとシロンの力に驚いたジュンサーもルンパツパ達の戦闘不能を確認すると、バックから手錠を取り出した。

「観念しなさい！貴方達をこのまま連行させて貰うわ！」

戦闘不能となったルンパツパ達を戻したミラーボはゆっくりリーリエ達の方へと顔を向けた。

「勝った気ではまだ早すぎなくいかしら♪そうよね！二人とも」

「全くもってその通りですぜ！ミラーボの兄貴！」

「兄貴はまだこれっぽっちも本気にしてないんだからな！」

「だけど、ミラーボ達はリーリエ達に向かって小刻みに体を動かしながら挑発をしてきた。」

『負け惜しみ口ト！ただのハツタリ口ト！』

「だと思いたい。だが、そう指摘する口トムにサトルとソウタはゆつくりと怖々しく口を開いた。」

「みんな!!ハツタリなんかじゃないよ！」

「ああ…あいつらはもう一匹、ポケモンを持つてやがるんだ！」

プライドが高く前向きなソウタもその発言をした途端に背筋が凍る表情を向けていた。普段のソウタとは違う様子にリーリエ達にもその嫌な予感が爪先から頭の先まで一気に駆け上がってきた。

ミラーボは最後のモンスターボールを取り出すと、軽くキスをすると上へと大きく放り投げた。

「さあ、行くわよ！私の可愛いカイリニューちゃん!!」

繰り返されたのは、カントーに登録されているドラゴンポケモンの中でも高い能力値を持つポケモンのカイリニューだった。

『カイリユー ドラゴンポケモン

ドラゴン・飛行タイプ

心優しいポケモンで海で溺れた人やポケモンを助けたという話を良く聞く。しかし、普段は穏やかであるがその逆鱗に触れると全てを破壊し尽くすまで止めることはない』

「出たな…カイリユー」

「知ってるのか？ソウター！」

「ああ…俺とサトルはあのカイリユーにやられたんだ」

リーリエ達は上空から見下ろしているカイリユーに目が集まった。その表情は凶鑑に明記されている事とは違っていた。目は隈のような跡があり、何かに操られているような生気が感じられない目をしていた。身構えようともせず、呆然とこちらを見つめている。

「え…」

「リーリエ！どうしたの!?？」

カイリユーに何かを感じたのか分からないが、突然にリーリエの顔が青ざめていくのに気づいたカノンはリーリエに呼びかけた。

そして、リーリエはそのままカイリユーを見つめたまま口を開いた。

「同じです…」

「えっ!?？」

わたくしのズルズキンの時と同じです。

一体…何なのですか。

あの…

黒いオーラは…

怖がるリーリエから連鎖していくかのように、その恐怖心は他の者へと強制的に伝わってしていく。人数も手持ちポケモンもリーリエ達の方が多いのではあるが、その安心感を凌駕させるほどの恐怖をカイリユは漂わせていた。

ミラーボのカイリユウの危険度を察したノゾミはすぐにキーストンを取り出した。

「行くよエルレイド！メガシンカ!!!」

「エルレイド!!!」

メガシンカしたエルレイドは両腕の刃を構えた。

「ほお！それがメガシンカね。良いわね♪」

余裕たっぷりのミラーボを無視してすぐさまメガエルレイドはカイリユウの元へと飛び出した。

「エルレイド！【サイコカッター】!!?」

「エルレイド!!?」

「待つてください！ノゾミ!!!」

リーリエの注意は間に合わずノゾミはメガエルレイドに指示を出した。メガエルレイドはサイコパワーを放つ両手でカイリユウの上を取った。カイリユウもその接近には気づいていたのだが、まだ身構える事もなく呆然と迫るメガエルレイドに視線を向けていた。

そして迫るメガエルレイドと距離を詰めた事を確認したミラーボはカイリユウに攻撃の指示を送った。さつきまでの甲高い声ではなく、その曇った攻撃の指示のトーンはこれから始まる恐怖の幕上げとなった。

「カイリユ…：【ダークラッシュ】!!？」

ミラーボの声を聞いたカイリユはドス黒いオーラを纏った拳でメガエルレイドの【サイコカッター】ごとと跳ね返したまま地上へと叩き落とした。

攻撃を決めたカイリユの目には闘志はなかった。

「エルレイド!!!」

砂煙が晴れた中ではエルレイドのメガシンカは解けてしまっていた。メガシンカエネルギーが解けたという事は戦闘不能を意味するものだ。一撃で倒されたエルレイドをノゾミは唇を噛み締めながら抱きかかえた。

「そ…そんな…」

「メガシンカポケモンでも歯が立たないって言うの…」

メガシンカポケモンが倒された事に慌てふためくりーリエ達に容赦なくカイリユールの牙が剥かれた。

「続けてカイリユール! 『ダークストーム』!!?」

翼を大きく広げたカイリユールはりーリエ達に向かってさつきと同じドス黒いオーラを纏わせた竜巻でりーリエ達のポケモンを一斉に吹き飛ばした。

「シロン!!! コイキング!!!」

「ヒコザル!!! エビワラー!!!」

「グレッググル!!!」

「みんな!!!」

吹き飛ばされたりーリエのポケモン達はそのまゝ一瞬で戦闘不能となってしまうた。

「良いぞ! 兄貴! 兄貴!」

「流石はダークポケモン！技の威力も他のポケモンとは一味も二味も違うぜ！」

戦闘不能になったポケモン達の元へと急ぐリーリエ達の耳にはミラーボの手下の一人が発したキーワードがひかかった。

「ダーク…ポケモン？」

「何よ！それ!!!」

苦し紛れの問いに答えてやるつもりはない。ミラーボはいますぐにでもカイリユーに指示を出しそうな笑みを浮かべていた。

『解析不能！解析不能！何ロトか!!!あのカイリユーは!!!』

ロトムもカイリユーをスキャンしては調べるものの情報が出てこない。

リーリエの方へと顔を向けたソウタは緊張が走る自分の気持ちを抑えながらリーリエに問いました。

「リーリエ！さっきシロンがやったやつ！あの技！あの技をもう一回撃つ事は出来ないのか!!!？」

「で…出来ません。あれは…Z技は一回の戦闘でしか撃てない技なのです！」

「そんな…」

これはリーリエの誤算だった。ルンパツパ達を倒せばミラーボの手持ちは残り一体。それに対してリーリエ達の全員の残りポケモンの数は数十体はいた。ルンパツパ達を

倒せば残り一体なら押し通せると思って先にZ技を放ってしまったのだが、あのカイリユーは普通ではない。真面に戦った所で勝ち目はないと悟ってしまった。勝機も同時に吹き飛ばされてしまい、カイリユーの恐怖に支配されてしまったリリーリエ達は残りのモンスターボールに手をかける事さえ出来なくなってしまうた。

「さあ、そろそろあんた達のポケモンを纏めてミラーボ組の戦力として頂くわよ」

軽く指を鳴らした音に反応したカイリユーを連れてミラーボはゆっくりとリリーリエ達の方へと近づいていく。

近づくミラーボに警戒するよう視線を向けたままリリーリエはシロンとコイキング。そして近くに吹き飛ばされていたシロンと仲良くなった雌のゼニガメの三体の上へと覆い被さった。

「嫌です！絶対に渡しません！」

その声で気がついたシロンはリリーリエを守ろうとボロボロの体を引きずりながら、ミラーボに強く威嚇した。

「シロン！その怪我じゃ危ないです！早く下がって!!」

リリーリエの悲痛な声に反応はあったが、シロンは戻ろうとはしなかった。そんな姿に哀れに思ったミラーボの口がゆっくりと開いた。

「カイリユー…【ダークラッシュ】で止めを刺しちゃて」

「カイウオオオ!!!」

カイリユーの雄叫びに地面は震え、ドス黒いオーラを体全体に纏わせた。そして、その攻撃はリーリエとシロンに向かって放たれた。

「リーリエ!!!」

「やめろ!!!」

迫るカイリユーの攻撃を前にリーリエはすぐに体を起こしてシロンを抱きかかえた。しかし、ほぼ時速約2400kmで滑空するカイリユーの速度を前に躲す時間はなかった。

自分の身を盾にシロンとコイキングを庇いながらリーリエはゆっくりと目を閉じた。

「リザードン！【かえんほうしゃ】!!？」

カイリユーに向かって一直線に放たれた火炎放射。そのパワーに押し返されたカイリユーは上空へと吹き飛ばされた。

火炎放射が放たれた方へと顔を向けるとそこには一体のリザードンがカイリユーに威嚇していた。

『リザードン かえんポケモン

炎・飛行タイプ

ヒトカゲの最終進化系。強い相手を求めて空高く飛び回る。苦しい戦いを経験したリザードンほど炎の温度は高くなると言われている』

「〔ドラゴンクロー〕!!?」

「グウオオ!!?」

さらにリザードンは一気にカイリユーの前へと移動すると、その鋭い竜の爪でカイリユーを切り裂いた。全く歯が立たなかったカイリユーを相手にダメージを与えているリザードンの強さに驚くばかりだ。

そしてそのリザードンのパトナーである一人の青年がリーリエ達を守るような形で姿を現した。

「おいおい!良いところで!」

「何なんだよ!お前は!」

「お前達に答える必要はない」

さつきまで勝利を確信していたヘボイとトロイの焦りの返答に対して青年は答えるのを拒否した。拒否したのと同時に腕に装着されたメガバングルに埋め込まれたキーストンを飾した。

「我が心に応えはキーストーン！進化を超越ろ！メガシンカ!!!」

「グウオオオオ!!!」

メガシンカ!?!?!自身のみが輝きだすと、リザードンの体は立ち待ちに黒いウロコに覆われた。メガシンカをした事に火力が上がった炎はオレンジが混じった赤い炎から白が混じった青い炎へと変化した。

「マノン！今のうちに!!!」

「うん！ハリサ！【つるのムチ】でここまで引っ張って!!!」

「ハロ!!?」

すぐにアランの呼び声に応答したマノンはハリマロンのハリサの蔓でリーリエや他のみんなを安全な後ろの方へと運んだ。

「大丈夫!!!しっかりして!」

「すみません…ありがとうございます」

押し殺されそうな声を振り絞って、リーリエはマノンにお礼をする。

全員の無事を確認したアランはリザードンと一緒にカイリユーに身構えた。

「リザードン！ 【ドラゴンクロー】 !!?」

「カイリユー！ 【ダークラッシュ】 !!?」

アランとミラーボの同時による指示でリザードンとカイリユーも同時に距離を詰めた。リザードンの爪とカイリユーの拳が重なるとリザードンは力一杯腕を振り下ろすと、そのまま空を飛んでいるカイリユーを地面へと叩き落とした。

「な!!!」

リザードンの想像以上の攻撃力にミラーボは逆に追い詰められてしまっていた。

「【ダークダウン】 よ!!?」

「躲せーリザードン!!!」

起き上がるカイリユーは次の攻撃をリザードンに放つが、すぐにリザードンはその技を躲した。

「防御まで下げられたら、厄介だからな」

その発言にミラーボから初めて焦りが生まれた。

「ダーク技を把握している。あ…あ…あ…何者よ!」

「言ったはずだ。答えるつもりはないと!」

アランの力強い声に反応したりザードンも雄叫びを上げた。そのリザードンの強さ

に押されたミラーボは急いでカイリユーに指示を出した。

「生意気いいい!!!カイリユー!」「ダークストーム!!?」

「かえんほうしや」で押し返せ!!!」

カイリユーの黒い竜巻とリザードンの火炎放射がぶつかり合った。しかし、リザードンの火炎放射はそのまま黒い竜巻を簡単に消し飛ばしてしまった。リザードンの火炎放射がカイリユーに命中するとその熱風にミラーボは顔を引っ込めてしまった。

再び顔を上げた頃にはリザードンはカイリユーの真ん前に位置すると、ありったけの炎エネルギーを身体中にへと溜め込んでいた。

「リザードン!」「プラスチックバーン!!?」

「グウオオ!!?」

「カイウオオ!!!」

カイリユーを拳で地面へと叩きつけたその直後、その威力に大地が割れると、マグマのように地中から炎が噴き上がると、大きな爆発が起こった。

爆発が晴れた頃にはカイリユーは地面に伏せたまま起き上がる力が無くなっていた。

「そ…そんな…バカな」

リザードンのレベルに開いた口が塞がらないミラーボは呆然と立ち尽くしてしまっ  
た。

カイリユールの戦闘不能を確認したアランは一つのスナッチボールをカイリユールに向かって投げ入れた。

開閉スイッチが開いたスナッチボールはそのままカイリユールを中へと吸い込まれていった。完全にカイリユールが入ったスナッチボールはそのままアランの手の中に収まった。

「兄貴のカイリユールが…!!!」

「もしかして、あいつはスナッチ団なのか!」

「どうでもいいわよ! キイイ!!! 今度会った時! 覚えてなさいよ!!!」

またダークポケモンをスナッチされたミラーボは悔しながら今まで奪ったモンスターボールをそのままにして一目散に逃げ去ってしまった。

深追いするよりも、まずはリーリエ達をポケモンセンターへと運ぶことを優先としたアランはメタグロスの「サイコキネシス」でリーリエ達の救助を始めた。

「(ハハ)は…」

目が覚めたらそこは病室のベッドの中にいた。気がついたリーリエに二体のポケモンが飛び出した。

「きゃー！シロン!!!それに貴方はゼニガメ！」

「コン!!?」

「ゼニ!!?」

その二体の声に反応したロトムもリーリエの元へと向かった。

『リーリエ!よかったロト。目を覚ましたロト!』

「ロトム…貴方も無事で…よかったです」

シロン達の安否の確認も取れたリーリエは急いで起き上がった。

「カノン!サトル!み…みなさんは!!!」

『大丈夫ロト!みんな大した怪我はしていないロト!みんなもゆっくりベッドで休んでいゝるロト!』

「はあ…よ…良かったです」

それを聞いて安心したリーリエはすぐに体を崩した。シロンとゼニガメの頭を撫でていると、一人の少女が病室へと入ってきた。

「良かった！気がついてくれて！」

「貴方は…たしか！」

「私はマノン！この子はハリサ！物凄い爆発音が聞こえたから何かなと思つて行つたら…よかつたよ。間に合つて！」

「助けて頂いてありがとうございます。わたくしはリーリエ。この子はシロン。本当に何てお礼を申したら…」

「寝てて！今は体を動かしてはダメだよ！」

「ハロロ!!?！」

起き上がるリーリエの体をマノンは急いでリーリエの体を支えた。そのままゆっくりと体を倒したリーリエはすぐに目を閉じると、そのまま眠ってしまった。

暫く寝て元気を取り戻したりリーリエはすぐにみんなとも合流した。カノンもサトルもソウタもタケシもノゾミもジュンサー。そして他のポケモン達の容体はそんなに大

したものでなかった。

「みなさん本当に御免なさい。私の責任だわ。なんて、謝れば!!!」

「ゼニガメエガ!!?」

「ジュンサーさんが謝る必要はありません。自分達から申し出た事ですから」

巻き込んでしまった事に謝罪するジュンサーをタケシは優しく口を開いた。

「みなさん！お身体の方は」

「ポケモン達も含めてもう大丈夫さ！」

「ああ、とにかくみんな大事に至らなくて良かったよ」

「本当にありがとう！マノンさん！マノンさんが来てくれなかったら、私たち……」

「お礼は私じゃなくてアランに言ってよ！」

「アラン……さん」

リザードンを使っていた青年の名前だろう。その名前を呟くと青いマフラーを掛けたその人物がリーリエ達の元へと向かってきた。

「マノン！怪我をした人たちはもう大丈夫なのか？」

「うん！みんなもう大丈夫そうだよ！」

マノンの言葉に安心した表情をアランは浮かべた。すると、サトルは彼の元へと向かった。

「やっぱりアランさんですよね！カロスリーグ優勝者の！」

「ああ…そうだ」

その答えにカノンとソウタも思い出したようで一斉に驚いた。カロスから来たトレーナーのアランはカロスリーグの決勝でサトシを倒した優勝者である事を聞いた。

サトシの実力を知っているリーリエとタケシとノゾミはその事を聞いて一緒になつて驚いたのも無理はなかつた。

カロスの優勝者を前にテーションが上がるのであつたが、それよりも先ほどのミラーボが使っていたカイリユーがどうしても気になっていた。その議題にリーリエはすぐにアランに質問した。

「そういや、アランさん！さっきのカイリユーって…あれは」

「大丈夫だ！このカイリユーはちゃんと国際警察本部の人に保護して貰う事になつている。何も心配する事はない」

「そうだよ！だから安心して！」

「ハロ…？」

カイリユーの安否は任せられる事をアランとマノンから聞いた一同は撫で下ろした。

怖かった感情はあつたが、悪い人たちに使われていたカイリユーに内心、心配していたからだ。

しかし、リーリエが言いかけた事はそれとは別の案件だった。

「黒いオーラ……」

その単語を聞いた直後、アランとマノンの表情が固くなった。

「あのカイリユーから微かに見えたんです！その黒くて……ただならないオーラという物が……」

リーリエの見た黒いオーラ。それに対してカノンも答える。

「リーリエ！それってオツキミ山の時も言っていたよね！ズルズキンからも黒いオーラみたいな物が見えたって！」

「はい！あの時は偶然かと思ったのですが！先程のカイリユーからも同じような黒いオーラが見えたのです！」

その証言にマノンはアランに顔を傾けた。マノンの心配そうな表情を見たアランはリーリエに言う。

「リーリエ。そのズルズキンを見せてくれないか？」

「えっ……はいはい」

何故ズルズキンをと思ったが、アランの真剣な目つきから、リーリエはズルズキンのモンスターボールを取り出した。

「ズツ!!？」

ズルズキンが出て来た直後にアランはスカウターみたいな物を取り出すと、ズルズキンを調べ始めた。調べる時間はものの数秒で終わった。スカウターを閉まったアランにマノンは問いかける。

「どう？アラン」

「ダークオーラは消えている。もうリライブもしなくていいかもしれない」

アランとマノンは納得したものの、リリーエ達には何んなのかさっぱり分かっていない様子でいた。それも当然だ。ダークポケモンの存在すら知られていないのだから。本来は国際警察からもダークポケモンについては内密にと言われていたのだが、肉眼でもダークオーラが見えるリリーエに隠し通すのも無理だと思ったアランはリリーエ達にダークポケモンについて話す事にした。

オーレ地方。ダークポケモン。戦闘マシン。シャドー。スナッチ。リライブ。

そしてこれからカントー地方に起こるかもしれない危険。

知っている情報を全てリリーエ達に話した。アランの話はどれも信じ難く非情的なものだった。話の最中でも顔が次第に青ざめていく者もいれば、空いた口が塞がらない者も出て来た。しかし、ミラーボの件を思い返せば節当たる部分は出ていた。

リリーエはゆっくりとズルズキンのモンスターボールを取り出すと只々それを眺めていた。アランからズルズキンのダークオーラの反応がないので心配はいらないと報

告された。今思えば、オツキミヤマでの戦闘時に見せていたズルズキンの攻撃技はダークポケモンのみが覚えるダーク技の中の一つである事も分かった。

ダークオーラが見えるリーリエについては一度、国際警察本部の人に伝える事になった。ただ、今日の事があつたため整理も難しいし、無理をさせる訳にはいかない。

アランからのダークポケモンの情報を聞き終えると、みんな各自の自室の方へと向かった。

~~~~~

その夜、アランとマノンはリーリエの事について話していた。

「リーリエさん。ダークポケモンのオーラは見えていたけど、ダークポケモンについては何にも知らない様子だったよね」

「ああ、流石に嘘はついていないだろ。ダークポケモンに関しては最近になってカントーのジュンサーさんの耳に入ったぐらいだからな」

「何でリーリエさんだけがそれを見る事が出来たのかな？」

「ダークオーラはポケモンの負の感情に反映されて浮かび上がる霧だ。もしかしたら、

ポケモンの気持ちをも本当に良く理解している人にはそれが見えるのかもしれないな。実際にオーレの英雄と言われた二人のうちの一人も裸眼でダークオーラを見る事ができた人だからな」

「リーリエさんは心の底からポケモン達の事を想いやれる優しい人なんだね」

「ああ。…だからこそ…余計にそういう人には見えてほしくないものだな」

今夜は満月がよく見える。夜風に吹かれながら手に届きそうなのを見つめていた。

隣の部屋では満月に手を合わせ、これ以上苦しめないポケモン達が出ない事を祈る少女の姿もあった。

第二十五話　アローラ祭！全員集合！

クチバはオレンジ。夕焼けの色。夕焼け色の港町。

朝からこの街では船舶だけでなく多くの人々の歓声が響き渡っていた。

ジュンサーが運転する一台のパトカーから飛び出した少女はパートナーのシロンと一緒にクチバシテイへと走り出した。街へと近くにつれて、目に映るもの。鼻に届く懐かしき故郷の香りが自然と入ってくる。

走って行く彼女は見覚えのある五人の人影に向かって大きく手を振った。事前に到着の知らせを受け取っていた彼らも彼女に向かって大きく手を振り返した。

リーリエ「マオ！カキ！マーマネ！スイレン！」

シロン「コーン!!？」

マオ「リーリエ!!!」

再開のハグを交わしたリーリエとマオ。後の四人も彼女の周りに集まってはスクール以来の再開を喜び合った。

リーリエ「お久しぶりですみなさん!!!」

スイレン「リーリエ久しぶり!」

カキ「ククイ博士から聞いたぞ。リーリエ!ジム巡りをしてるんだってな!」

マーマネ「なんか見ないうちにシロンも遅しくなっちゃみたいだね」

シロン「コン!!?」

トゲデマル「モギユ!!?」

アママイコ「アーマイ!!?」

アシマリ「アウアウ!!?」

バクガメス「ガアメス!!?」

シロンもトゲデマル達と久しぶりに会えた事に大喜びでいた。すると、リーリエは残りのモンスターボールを手に出すと一斉に解き放った。

リーリエ「みなさん!出て来てください!」

中から現れたのはここまでリーリエがカントーを旅して出会った仲間達。リーリエのポケモン達にマオ達は目を光らせていた。

リーリエ「この子達はわたくしがここまで旅をした中で出会った仲間達です。アママ

イコ達もよろしくお願いします！」

リーリエの紹介を終えると、キモリ達もアママイコ達の元へと駆け寄ると改めて挨拶や握手を交わした。しかし、等のズルズキンは近づこうとはしなかった。

ズルズキンの事についてマオ達に説明をしていると、カノン達もリーリエの元へと合流した。

リーリエ「ジュンサーさん。ここまで送って頂いてありがとうございます」

ジュンサー「いいのよ。私も警備の仕事でクチバシテイに戻る予定だったし！それじゃあ、みんな楽しんで！」

サトシのゼニガメ「ゼニゼニ!!？」

クチバシテイにリーリエ達を送り届けたジュンサーとゼニガメ消防団はそのまま仕事へと戻ろとしていた。

ゼニガメ「ゼニ…」

ただ、シロンと仲良くなったゼニガメは少しリーリエ達と離れるのが寂しいようだった。それに気づいたジュンサーはリーリエに声をかける。

ジュンサー「リーリエさん。この子の事お願いできないかしら？すつかりシロンちゃんと仲良くなったみたいだから」

リーリエ「分かりました！わたくしは大丈夫です！」

その声を聞いたゼニガメは喜んでシロン達の輪の中へと入って行った。

ジュンサーを見送ったその後、リーリエは改めてカントーで出会ったカノン達を紹介し始めた。

リーリエ「皆さん!こちらにいるのは、わたくしが通っていたポケモンスクールの仲間。マオにカキにマーマネにスイレンです」

アローラ組「!!!よろしく!!!」

カノン「カノンです♪」

サトル「サトルです。初めまして!」

ソウタ「ソウタだ!よろしく!」

タケシ「俺はタケシだ」

ノゾミ「私はノゾミ。よろしく!」

マノン「私はマノン。この子はハリサ。それから隣にいるのがアラン」

アラン「宜しく」

お互いに自己紹介が終わると、カノンはすぐにマオ達のポケモンを見つけると、好奇心満載に近づいて行った。

カノン「うわああ!!!見た事ないポケモン達だ!可愛い!!!この子はカッコいい!!!
きやああ//////」

ソウタ「こいつはすげーぜ!!!なあ!誰か俺とバトルしようぜ!なあ!」
サトル「二人とも。とにかく落ち着いて」

見た事ないポケモン達を前に興奮気味のカノンとソウタをやれやれといった表情でサトルが押さえた。

『アママイコ フルーツポケモン

草タイプ

いつも元気に飛び跳ねている。元気な姿と甘い香りで周りにポケモンが集まってくる』

『バクガメス ばくはつがめポケモン

炎 ドラゴンタイプ

背中の中身の甲羅の棘は爆発物。うっかり触ると爆発してしまう。火山を住処にしている』

『アシマリ あしかポケモン

水タイプ

水のバルーンを作り上げるのが得意。大きなバルーンを作るためコツコツと練習を繰り返している』

『トゲデマル まるまりポケモン

電気 鋼タイプ

背中の針は普段寝かせていて戦闘になると一気に逆だてる。長い毛は避雷針の役割を持ち落雷を引き寄せると電気袋に溜め込む』

ロトムの登場を確認したマーマネとカキはロトムの方へと向かった。

マーマネ「ロトム図鑑も久しぶりだね!」

ロトム『カキ！マーマネ！また会えて嬉しいロト！』

ロトムとも久しぶりに再会したマオは一番気になっていることをリーリエに告げた。

マオ「そーいやリーリエ！サトシは！サトシには会えたの？」

サトシの言葉にカキ達もリーリエにサトシに関して質問し始めた。その質問に対してリーリエはマオ達が期待している答えを応えることができなかった。

リーリエ「あの…それが」

スイレン「そうか。リーリエもサトシとは再開できていないんだ」

カキ「また会えると思っただけだよ」

スクールを卒業してから、久しぶりに会えると楽しみにしていたマオ達であったが、リーリエもサトシと再開出来ない事を知り残念そうに肩を落とした。

暫く話してから、カノンはリーリエに声を掛けた。

ローラのポケモン達の生態に興味を持った他地方の幾多のトレーナーがククイ博士の元へと集まっていた。その中で一際一番高い声でやたらとテーションが高いトレーナーがいた。

ククイ博士「おお！そうか！このお祭りではその他にもアローラ出身のポケモンが沢山いるから楽しんでくれよ！」

???「ありがとおつちゃん！良しいろんなポケモン達に会いに行くぜ！ルカリオ！」

そのままそのトレーナーはパートナーのルカリオを連れて屋台の方へと神速の如く走り去って行った。

ククイ博士「サトシに似て元気な子だったな」

その少年の後ろ姿を見届けたククイ博士に一人の少女が走ってきた。その呼び声に振り向いたククイ博士はその少女に向かって大きく手を振った。

リーリエ「ククイ博士!!!」

ククイ博士「おお!!!あはは！リーリエ。久しぶりだな！」

リーリエ「お久しぶりです！博士！」

カントーへと旅立った我がスクールの卒業生であるリーリエだ。ククイ博士の元へと駆けつけたリーリエはそのまま博士の胸へと飛び込んで行った。

急に飛び込んで来たリーリエに押し倒れそうになりながらもククイ博士はリーリエ

との再開を喜んだ。

ククイ博士「ロトムもリーリエのサポートありがとな」

ロトム『どういたしましてロト!』

ロトムを胸を張って答えると、聞き覚えのある声がりーリエの元へと向かって来た。

オーキド校長「こうして卒業生に会える事ができてうれシシビル!」

カントーのロコンを抱きかかえ、ポケモンギャグを得意とするその人物を見てりーリエはすぐに挨拶に向かった。

りーリエ「お久しぶりです!オーキド校長先生!」

卒業以来の再会にりーリエはさらに胸が高鳴っていた。だが、あることを質問すると同時に顔に雲がかかったかのように少し不安げな表情へと変わった。

りーリエ「博士。アローラ地方の方はどうですか?」

りーリエが母のルザミーネの治療のためにカントー行きの船へと乗る時も、まだアローラ地方の至る所ではウルトラビーストによる被害で崩れている所が目立っていた。

身内が犯してしまった事もあって、旅をしている時も気にかかっていたりーリエの不安な表情に察したククイ博士とオーキド校長は安心した表情で答えた。

ククイ博士「ああ:君のお兄さんグラジオ君が率いるエーテル財団のおかげもあって、何とか立て直しつつあるよ。ここカントーでこんなお祭りを開くことが出来たぐら

いだ。もう大丈夫さ！」

オーキド校長「それにこのアローラ祭は復興祭でもあるのじゃ」

リーリエ「復興祭ですか？」

オーキド校長の言葉にリーリエは首をかしげた。

オーキド校長「アローラ地方の魅力を広めるだけでなく、かつてのアローラの活気を取り戻す事もこの祭りを開催する目的でもあったのジャランガ！」

マオ「それに向こうにはイリマさんも来てるんだよ！」

リーリエ「そうなのですか！」

マーマネ「ねえ！挨拶しに行こうよ！」

一旦、オーキド校長と別れたリーリエ達はイリマがいる方へとククイ博士の案内の元、向かう事にした。

ククイ博士によると、イリマはデイグダの穴と呼ばれるダンジョンの近くで祭りの手伝いをしていると聞いた。

リーリエ「イリマさん！」

自分の名前が呼ばれたイリマは駆け寄るリーリエ達に目をやると、自分のパートナーであるイーブイを抱えて、自分もリーリエ達の方へと駆け寄った。

イリマ「これはリーリエさん！お久しぶりです」

リーリエ「イリマさんも参加なされていたんですね」

イリマ「もちろん。アローラの復興を祈願してお祭りなのです。参加しない訳にはいきませんよ」

イーブイ「イーブイ!!?」

イリマとの久しぶりの再会に喜んでるリーリエ達に一人の青年が歩み寄る。

???「イリマ！友達か？」

その人物にイリマは直ぐに答えた。

イリマ「はい！彼らは僕のスクールの後輩なのです」

???「じゃあ俺の後輩でもある…って俺は途中で引越したからそうではないか」

イリマと親しげに話す青年にリーリエ達の目が集まった。自分の後輩でもあると耳

にしたがアローラ出身のトレーナーなのか。その人物をリーリエ達の誰一人も知らなかった。

マオ「イリマさん。そちらの人は？」

マオの問いにイリマはその青年をリーリエ達の前へと紹介した。

イリマ「彼は僕のスクール時代の同期のユーゴです。今はカロス地方に住まわれているのですよね」

イリマの口から出たそのユーゴという青年はイリマとポケモンスクールの同級生であつたようだ。生まれ育ちはアローラ地方であるが、母親の仕事の都合で今はカロス地方に住んでいる。その後もイリマとは連絡を取り合う中であるため、もちろんウルトラビーストの件については聞いていた。

「ジュナ!!？」

そして、ユーゴの後方で物静かに直立している一体のポケモン。葉っぱで出来た大きなフードを被り、オレンジ色の模様で覆われているその眼光は歴戦を潜り行けて来た勇姿を感じさせる迫力だ。

カキ「このポケモンは…たしか」

ロトム『ボクにお任せロト!』

『ジュナイパー やばねポケモン

草・ゴーストタイプ

翼に仕込まれた矢羽を番えて放って攻撃する。100メートル先の小石を貫く程の制度がある』

スイレン「か…かつこいいい!」

カキ「歴戦の勇者って感じだな」

ユーゴのジュナイパーの風格にスイレンは目を輝かせ、カキは勝負と交えて見たい感情が出ていた。みんなの目線に気づいたユーゴは優しくジュナイパーの首筋を撫で始めた。さつきとは変わってジュナイパーは目を閉じて気持ち良さそうにじやれ始めた。

ユーゴ「ジュナイパーとは長年の連れ染めなんだ。俺のパートナーというよりも、家族みたいな奴さ」

ジュナイパー「ジュナ!!？」

優しくあやすユーゴを前に続いてイリマはユーゴについて話し始めた。

イリマ「ちなみにユーゴさんは僕なんかよりも素晴らしいトレーナーですよ。もしかしたらアローラ最強のトレーナーになっていたかもしれない人ですから」

ユーゴ「おいおい大袈裟に言うなよ。イリマ」

ポケモンスクールでは最強の卒業生と言われるイリマがユーゴの実力を賞賛している様子にリリーエ達はユーゴについて質問し始めた。

マーマネ「えっ、そんなに凄い人なんですか？」

マーマネはの発言にイリマは自分の事のように話し始めた。

イリマ「もちろん。彼はアローラの全ての試練を達成しており、全てのZクリスタルを揃えております。それにカロス地方へと引越してから、幾多のポケモンリーグで実績を上げているのですよ」

カキ「全ての試練！それってつまり島キングのハラさんや島クイーンのライチさんにもポケモンバトルで勝っているという事なのですか！」

スイレン「す…凄すぎる」

アローラの全てのZクリスタルを手にしてる事にも驚いたが、まだそれは序の口だった。聞けばポケモンリーグでも数々の実績を残していた。

初めての挑戦したカロスリーグでは大人でも勝ち上がるのが難しい本戦トーナメントにまで進みベスト8まで勝ち上がっている。その後は他の地方にも転々とジムバッジを集めてはリーグに参加をし、ホウエンとジョウトのポケモンリーグでは準優勝を果たしているのだ。

聞けば聞くほど写し出されるユーゴの実力と権威にリーリエ達は驚かされた。そして、さらに驚かされる事をイリマの口から告げられたのだ。

イリマ「そして今はカントーリーグに挑戦中なのですよね」

ユーゴ「まあな」

一同「カントーリーグ!!!」

マオ「それって、リーリエのライバルって事」

イリマ「と言いますと?」

リーリエ「はい!わたくしも今シロン達と一緒にジム巡りの旅をしているのです!」

イリマ「リーリエさんが!それは驚きましたね」

マーマネ「だけど、ユージさんは他のポケモンリーグにも出てる実力者なんだよね」

スイレン「強敵ライバルここに現る!」

ユーゴ「それじゃあ、リーリエ。お互いにポケモンリーグに出場できるようジム巡りの旅頑張つて行こうな」

リーリエ「はい！いまからでもカントーリーグが楽しみになってきました！」

シロン「コーン!!？」

ユーゴというポケモンリーグの優勝候補トレーナーを前に自分の闘志を燃え上がらせた。

ユーゴだけではない、カノンにサトル。ソウタとノゾミとライバルが現れる事にリーリエは彼らとポケモンリーグと戦える事に胸を弾ませていた。

マオ「リーリエ。暫く見ないうちにサトシに

似てきてない？」

カキ「見たいだな」

スクール時代では見ないリーリエの成長にマオ達は驚かされるばかりであった。

~~~~~

一方、リーリエと別行動を取ってアローラのポケモンを見て回っているカノンとサト

ルとソウタは一体のポケモンに釘付けになっていた。

カノン「嘘…これがナツシー…なの?」

ソウタ「何食つたらここまで首が長くなるんだよ…」

ナツシー「ナツシ〜♪」

カノンとソウタが呆気にとられて見ているのはカントー地方のナツシーとは違う姿をしたナツシーだった。カノン達が見ているナツシーはアローラ地方の強い日差しを浴び続けた結果、首部分が急激に成長して通常のナツシーよりも全長が5倍近くとなっているアローラのナツシーだ。

サトル「そういや、アローラのナツシーは草とドラゴンタイプみたいだね」

カノン「えっ!!!ドラゴン!!!」

ソウタ「何処にドラゴン要素があるんだよ!」

他のドラゴンタイプのポケモンと見比べてみると、鋭い爪や牙。翼を持たないアローラのナツシーにカノン達は頭を悩ませた。

アローラのナツシー以外にもリージュンフォームを成し遂げたポケモンやアローラにしか生息しないポケモンと触れ合う事が出来た。

ソウタ「サトルも珍しくソワソワしてるな!」

カノン「普段は私達の保護者係なのにな」

サトル「そ…そりや！アローラのポケモンをこんなに身近で見れるんだよ！そりや僕だ…」

すると、一体のポケモンがカノン達の前に姿を現した。

??? 「クウ…!!？」

そのポケモンは大きく手を上げて万歳した状態でカノン達に手を振っていた。

ソウタ「おお!!あれもアローラのポケモンか！」

カノン「可愛い!!手振ってる！」

??? 「クウ!!？」

カノン達が自分の元へと近づいてくると、そのポケモンはサトルを優しく抱擁した。

サトル「あはは！モフモフしてて気持ちいい！」

始めて目にする人懐っこいポケモンに感激していると、後からリーリエ達の姿が見えてきた。

ソウタ「リーリエ！あのポケモンなんだ!!？」

カノン「もう人懐っこくて可愛いすぎるの♡」

そう言つてカノン達はそのポケモンに指を指すと、リーリエ達の顔は一気に真っ青になつた。

リーリエ「サトル!!すぐに離れて下さい!!!」



遅かった…

『キテルグマ ごうわんポケモン

ノーマル 格闘タイプ

圧倒的な筋力を身につけている非常に危険なポケモン。大きく手を振るがこれは警戒の印。アローラではもつとも危険視されているポケモンである』

キテルグマの図鑑明記を確認したカノンとソウタも一気に青ざめた。

ソウタ「非常に…危険」

ククイ博士「ああ、まあ見た目があれだからな。初めて見る人にはそう危険とは思わないだろ」

被害を受けたサトルは背骨を抑えながら悶えていた。

リーリエ「サトルは…大丈夫ですか?」

カノン「こう見えてもタフだからね〜大丈夫。だいじょーぶ♪」

ソウタ「お前の言う大丈夫はあてになんねえからな」

~~~~~

一方、タケシとノゾミは同じくアローラのポケモンを興味津々と観察していた。

ノゾミ「アローラ地方だと見た目だけでなく、タイプも変わるんだね」

タケシ「ああ!これは他のものもいろいろ観ておきたいな!」

その二人に一人の大男が歩み寄って来た。

??「OH!誰かと思えば久しぶりだな!」

いきなり声をかけられたタケシとノゾミは声をかけられた方へと振り向いた。遅し
い上腕二頭筋を持ったその人物を見たタケシはその大男と握手を交わした。

タケシ「マチスさん！お久しぶりです！」

親しげにタケシと握手を交わしたのだが、ノゾミは自分の何倍もの身長で見下ろして
いるマチスの迫力に圧倒されていた。

リーリエ「タケシ！ノゾミ！」

途中でアランとマノンとも合流したリーリエ達はタケシとノゾミの方へと向かつて
行くと、タケシ達と一緒にいたマチスの姿を見たソウタとマノンは同時に声をあげた。

ソウタ マノン「マチスさん！」

マチス「おお！金髪ボーイにカロスガール！どうだ、その後のジム戦は？？」

二人の姿を見たマチスはソウタの髪を掻き乱しながら頭を撫でては、マノンに対して
は大きくハグをした。

リーリエ「タケシ。この方はどちら様ですか？」

タケシ「あつりーリエ。みんな。この方はマチスさん。ここクチバジムのジムリーダ
だよ！」

リーリエ「ジ…ジムリーダですか！」

クチバジムのジムリーダとしたリーリエは声をあげると、マチスはリーリエの方へ

と視線を変えた。

マチス「HEY! WELCOME TO! クチバシテイ!」

リーリエと近づいたマチスはそのまま少し怯えてるリーリエに大きく挨拶代りのハグを交わした。

マチス「嬢ちゃん!もしかしてクチバジムに挑戦する気かね?」

リーリエ「え…ええ」

マチス「OK!ここジムリーダーのマチスはいつでも君の挑戦を待っているよ!」

見かけによらずフレンドリーなマチスにリーリエはたじたじになるもの、しっかりと返事を返した。マチスの隣にいるポケモンも頬の電気袋から電気を帯びながらリーリエ達を見つめていた。

??? 「ライライ!!?」

そのポケモンに気づいたマーマネは自分がいるアローラ地方とは全く違った姿をしたそのポケモンに驚いていた。

マーマネ「もしかして…ライチュウ!!!」

ククイ博士「この地方のライチュウだ!」

マーマネの言葉に説明を付け加えたククイ博士。ロトムもマチスが連れいるライチュウの写真を撮ると、新しくデータに加えた。

『ライチュウ ねずみポケモン

でんきタイプ

ピカチュウの進化系。身体に電気が貯まっていくと攻撃的な性格に変わってしまう。長い尻尾はアースの役割になっている』

マオ「こっちのライチュウは電気単体なんだ」

カノン「電気単体？」

ククイ博士「ああ！ライチュウにもアローラの特有の姿があつてな！アローラのライチュウは電気とエスパータイプなんだ」

ソウタ「エスパー持ちかよ！強そ！」

そんな会話が始まった矢先、ククイ博士はリーリエやマオとかつての教え子達の前へ

と立った。

ククイ博士「そうだ!みんなに聞いてもらいたい事があるんだ!」

みんなの視線が自分に集まった所でククイ博士は両手を大きく広げては満面の笑みでリーリエ達にこう告げた。

ククイ博士「我々アローラ組とその他の同盟地方組で燃えるピックバンのようなバトルを行おうじゃないか!」

第二十六話 Z技VSメガシンカ 前半

『まもなくバトルエリア5でアローラのトレーナー対同盟地方組によるポケモンバトルを開催いたします！ご観戦になられたいお客様は時間内に中央に設置されたバトルフィールドまでお集まり下さい』

四六時中賑わうポケモンバトル施設。その中央エリアに位置するバトルスタジアムの周りには多くの人達が押し寄せていた。

遙々カントーから出向いてくれたアローラのトレーナーの実力も見ようと、その熱気

はバトルが始まる前から湧き上がっていた。

マオ「あつ、カノン！みんな！こっちこっち！」

カノン「ありがとうマオ！席取つて貰っちゃって！」

先に席を取っていたマオ達は後から来るカノン達に大きく此方へと手招きした。

マーマネ「あれ？ソウタは出なかったの？」

ソウタ「ま……まあな」

カノン達が遅れた理由は同盟地方組として参加するトレーナーを決める話し合いをしていたためであった。試合形式は各5名による1体1のシングルバトルだ。みんな席へと着いた瞬間にバトルフィールドへと一人の人物が足を運んだ。

オーキド校長「アローラ！アローラから参られました。ここカントーの世界的ポケモン研究員オーキド・ユキナリの従兄弟に値します。ナリヤ・オーキドと申します」

観戦に来た人達に丁寧に挨拶をするとオーキド校長はそのまま深く一礼をした。一礼をしたオーキド校長に観戦客から拍手が巻き起こった。

オーキド校長「ポケットモンスター。縮めてポケモン。この世界にはわしら人間と同じく伸び伸びと暮らしています。その数は400と500と日に日にその数は新種が確認されるたびに増えていきます。そして、数々の研究の中では、まだ誰も知らないポケモン達に隠された秘めたる力が確認される事もしばしばであります」

するとオーキド校長はポケットから二つのある物を取り出すと観戦客のみんなに見えるやすいように高く上へとあげた。モニターにも写されたその二つの宝石は太陽の光に照らされ、神々しく輝いていた。

オーキド校長「これはキーストンとメガストーンと呼ばれる物です。これは多くの人達の耳に入ったと思われます。そう！メガシンカです。カロス地方で確認された特定のポケモン達に起こる戦闘中のパワーアップ現象。それと同じように私等のアローラ地方でも良く似た力があります」

そして、反対側のポケットからはひし形状に形成された光り輝く小さな宝石を取り出した。

オーキド「その名をZ技！このZクリスタルと言われる宝石を使うことで一回の戦闘の中で一度だけ発動させる事が出来るいわば、技のパワーアップ現象です。今日の試合の中で、その二つの力を存分に味わっていきたいと思います。長々とした前置きはもうこれぐらいにして、早速、計10名のトレーナーによる熱き燃えるポケモンバトルを行なって貰いまソーナンス！」

バトル開始の宣言を下されると会場は一気に大きな声援に包まれた。メガシンカとZ技を課題とされたポケモンバトル。観戦席にいる他のポケモントレーナー達の中には空のモンスターボールを握りしめている人がチラホラ見かけた。それほどみんな、ど

んなバトルが見られるか待ち遠しくて仕方がないのであろう。

会場が盛り上がりを見せる中、第一試合目が始まろうとしていた。

??? 『あ：あく♪おつとご来場の皆さま。まもなくチームアローラ対チーム同盟地方によるポケモンバトルを始めさせていただきます。実況は私達、スイクン・ヤマトと!』

??? 『ライコウ・コサブロウがお送りさせていただきます。さらに特別ゲストとしてクチバジムのジムリーダー、マチスさんにも起こし頂きました!』

マチス 『ベリーハードなポケモンバトル!俺も見るのが楽しみだぜ!両者の健闘を祈る!』

実況者の紹介も終わった所で一人目のトレーナーがバトルフィールドへと姿を現した。

カキ 「アローラの先鋒は俺だ!」

アローラ組の一番手はカキだ。カキはウラウラ島の島クイーンライチの試練を突破し、Z技を発動させるために必要なZリングを授かったトレーナーだ。次期島キング候補にも上がっているその実力が、Zリングに装着されている炎のZクリスタルと共に熱く燃え上がる。

《観戦席》

マオ「頑張れ！カキ!!!」

マーマネ「カキ！ファイト！」

サトル「こっちは誰が出るんだろ」

《バトルフィールド》

カキに続いて反対側のトレーナーサイドからも一人の青年が姿を現した。腕にかざしたキーストンを輝かせながら、カキと向かいあった。

アラン「こっちの先鋒は俺だ。カキ」

アランの登場にカキは笑みを浮かべた。サトシを倒した強敵。それが脳裏に張り付いた彼はさらに闘志を燃え上がらせた。

ヤマト『先鋒戦！カキ選手VSアラン選手！』

コサブロウ『試合開始!』

? カキVSアラン?

カキ「行くぞ!バクガメス!!!」

アラン「行けっ!リザードン!!!」

同時に投げ込まれたモンスターボールから出てきた二体のポケモンは炎を身体中に巻き上げながら向かいあった。

バクガメス「ガアメエス!!?」

リザードン「グウオ!!?」

互いの対戦相手を見つめ合う二体のポケモン。ここは炎タイプ同士らしくカキとアランは同じ技を同時に指示を出した。

カキ「バクガメス!【かえんほうしゃ】だ!!?」

アラン「こっちも!【かえんほうしゃ】だ!!?」

放たれた両者の火炎放射は混じり合い爆炎を生んだ。吹き荒れる熱風に体が焼かれそうになるその感じはさらに二人のトレーナーを熱きバトルへと誘った。

アラン「飛べ！リザードン!!!」

バクガメスと違って飛行タイプを合わせ持つリザードンは武器の一つでもある翼を広げて大きく滑空し始めた。

カキ「バクガメス！もう一度【かえんほうしゃ】だ!!?」

バクガメス「ガアメス!!?」

空中戦を得意とするリザードンに対してバクガメスには遠距離攻撃でしか技が届かない。飛び回るリザードンに何発ものの火炎放射を放射するも、リザードンはそれを容易く躲していく。

アラン「【ドラゴンクロウ】!!?」

リザードン「グウオ!!?」

さらに躲すだけでなく、その鋭利な爪でバクガメスの技を打ち消した。

カキ「くっ!!!」

バクガメス「ガアメス!!!」

スピードだけでなくパワーも魅せられたアランのリザードンにカキに汗が流れる。

アラン「そのまま急降下！【かみなりパンチ】!!?」

バクガメス「ガアメエ!!!」

今度は電撃を纏わせた拳で攻撃を仕掛けた。【ドラゴンダイブ】のような迫り来る迫

力に怯んだバクガメスにその技が炸裂した。

アラン「押さえつけろ!!!リザードン!」

さらに拳に纏わせた電撃がバクガメスの身体中へと帯びて行く。駆け巡る電流にバクガメスは苦しみながらも耐え続けた。リザードンも負けじと押し付けながらその手を引くことをしない。倒されるのも時間の問題かと思うアラン。しかし、リザードン共に気づいていなかった。帯びた電流がバクガメスの手や足にそして…甲羅にへと流れていることを

カキ「バクガメス!〔トラップシエル〕!!?」

バクガメス「ガアメス!!?」

リザードン「グウオオ!!!」

甲羅の棘は爆発物。電流がバクガメスの甲羅の棘を刺激した事で大きな爆炎がフィールドを包み込んだ。その威力に思わず吹き飛ばされたリザードンはすぐに立て直す事が出来ず、その技の威力と反動がリザードンの全身の動きを止めてしまった。

カキ「今だバクガメス!〔からをやぶる〕!!?」

怯んでいる隙にカキはバクガメスの攻撃力と素早さのステータスを上げた。さっきの攻撃力を見ればうかうかと攻撃をする訳にいかない。多少の防御を捨てることになろうとも、全力でぶつかって行くしかない。

カキ「行けっ！【ドラゴンテール】!!？」

アラン「リザードン！【ドラゴンクロウ】!!？」

体を駒のようにフル回転させたバクガメスはエネルギーを貯めた尾を振り回しながらリザードンの方へと飛んで行く。アランの声を聞いたリザードンも竜の爪でバクガメスの攻撃に対抗する。

アラン「飛べリザードン！」

リザードン「グウオ!!？」

もう一度、バクガメスの出方を伺うためにアランはリザードンを空中へと移動させた。リザードンが飛んだ事を確認したアランはバクガメスの方へと目をやると、バクガメスはゆっくり後ろへと倒れると仰向け状のままリザードンの方へと体を向けた。

カキ「行けっ！バクガメス！」

カキの指示を聞いたバクガメスは甲羅の棘を爆発させるとその衝撃波で体を一気にリザードンの方へと飛ばした。

アラン「何!!!」

カキ「そこだ!!!【ドラゴンテール】!!？」

空中戦を得意としないバクガメス。しかし、カキの機転で空中にいるリザードンへ近づくことに成功した。その勢いのままバクガメスは尾をリザードンの頭部へと叩きつ

けると、そのままリザードンは地上に向かって落下した。

衝撃音と一緒に地面へと叩きつけられたリザードンは砂埃が舞う中、すぐに立ち上がった。無事に着陸したバクガメスもリザードンへと向かいあった。第一試合から奇想天外な戦いに会場は盛り上がる。その歓声の中、アランとカキは互いの実力を確かめ合う事が出来た。

アラン「まさか…そんな使い方をしてくるとはな！」

カキ「これは彼奴の受け売りみたいなものだ！」

アラン「それじゃあ、そろそろ全力を出させて貰うぞ！」

腕のキーストンに手を置くとその輝きは辺り一面へと発光し始めた。

カキ「来るか…」

その強い光はアランとリザードンの闘志を反映させているようだ。リザードンのメガストーンも輝きだすと、より一層リザードンは翼を大きく広げてはその体を大きく見せ始めた。

アラン「我が心に応えよ！キーストン！進化を超えろ！メガシンカ!!!」

リザードン「グウオオオオオオ!!!」

七色の光に包まれたリザードンはそのまま炎の色と共に姿を変貌させた。

カキ「これがメガシンカか！面白い!!!」

バクガメス「ガアメス!!？」

目の当たりにしたメガリザードンにカキとバクガメスは武者震いを立てた。初めてのメガシンカポケモンとのバトルにもう一度気合を入れ直した。

アラン「リザードン!」【ドラゴンクロー】!!？」

カキ「バクガメス!」【ドラゴンテール】!!？」

再びぶつかり合う両者の攻撃。弾ける火花を散らしながら互いのパワーをぶつけ合う。

カキ「バクガメス!!!」

しかし、メガリザードンの一振りにバクガメスは一気に押し負けてしまった。吹き飛ばされたバクガメスは後ろへと後退させられてしまった。

カキ「【からをやぶる】で攻撃力を上げたのにも押し返されるとは……」

アラン「俺のメガリザードンXはメガシンカをすると特性《かたいつめ》になるんだ。この特性によって【ドラゴンクロー】の威力はさっきよりも数倍は跳ね上がっている」

カキ「くっ!!!バクガメス!」【かえんほうしゃ】!!？」

アラン「リザードン!」【かえんほうしゃ】!!？」

マオ「メガリザードン…X？」

マーマネ「Xってどういう意味なの？」

両者の火炎放射が交える中、マオとマーマネはアランが言っていた事に対して疑問を浮かべていた。その議題に対してマノンポケモン図鑑を取り出しながら口を開いた。

マノン「リザードンのメガシンカは他とは違って二種類に分かれているの。アランのリザードンはドラゴンタイプが追加された物理攻撃重視のメガリザードンX。もう一方は日差しを強くさせる特性【ひでり】が追加された高い火力を備えた特殊攻撃重視のメガリザードンYなんだよ！」

カノン「へえ、メガシンカはパワーだけじゃなくてタイプや特性が変わるのもいるのね」

《バトルフィールド》

カキ「バクガメス!!!【ドラゴンテール】!!？」

アラン「リザードン！もう一度【ドラゴンクロー】!!？」

【からをやぶる】でもう一度攻撃力を上げたバクガメスは今度は負けじとリザードン

のパワーに応戦した。だが、「からをやぶる」の効果で防御力は大幅にダウンさせてしまっている。バクガメスの体力はもう長くは持たない。

カキ「一気にケリをつけるぞ！バクガメス!!!」

カキはZリングを掲げた。ホノオ乙から感じるオーラに気づいたバクガメスもゆっくり後退すると、大きく身構えた。

カキ「俺の全身！全霊！全力！全てのZよ！アーカーラの山の如く！熱き炎となって燃えよ！」

赤く光るホノオ乙のパワーがバクガメスに集まって行く。そのパワーを受けたバクガメスは太陽のように燃え上がる大きな火炎玉を形成し始めた。

カキ「【ダイナミックフルフレイム】!!!」

バクガメス「ガアメエエエエエエ!!!」

そのパワーをリザードンに向かってバクガメスは大きく放った。リザードンは躲す様子はなく両腕を前に出すと、迫るバクガメスのZ技を迎え撃った。逃げる事なくZ技を受けて立ちたいリザードンの気持ちを考慮し、アランも一言も発さず迫るZ技に目をやっていった。

放たれたホノオZ技はリザードンを飲み込むと、密集されたパワーが一気に解放された。吹き荒れる熱風に顔を手で押さえながらも、ジツとカキはアランのリザードンの様子を伺う。発された爆煙がフィールドに包みこむ中、観戦トレーナー達も固唾を飲んでZ技を受けたリザードンに注目した。徐々に晴れてくるバトルフィールドからは低い獣のような呻き声が聞こえた。晴れてくるその爆煙の中からは口から漏れ出す青い炎を燃やしなから、リザードンが立っていた。

カキ「ま、まさか!!!」

アラン「これがZ技か。大した威力だな」

ホノオZ技を耐えたアランのリザードンにカキは唾然としてしまった。再び吠えるリザードンに我に返ったカキはすぐにバクガメスに指示を出した。

カキ「くっ!!!バクガメス!【ドラゴンテール】だ!!?」

カキの声を聞いたバクガメスもすぐにリザードンの方へと突進して行く。だが、それは焦りから生まれた誤算。アランはバクガメスを射程範囲まで引き寄せるまでリザードンを待機させた。

アラン「リザードン！『プラストバーン』!!？」

射程範囲に入ったバクガメスを確認したアランの合図にリザードンは炎を纏わせた拳で地面を割った。中からは吹き出す炎が迫り来るバクガメスに向かって放たれた。

カキ「バクガメス!!!」

ホノオ乙と同等の攻撃がバクガメスを飲み込んだ。爆炎が晴れるとそこには俯せ状態で倒れているバクガメスのその姿があった。目を回しているバクガメスを確認した審判は旗を大きくリザードン側に大きく掲げた。

ヤマト『バクガメス戦闘不能！リザードンの勝ち！』

コサブロウ『先鋒戦の勝者は同盟地方チーム、アラン選手!!!』

第一試合から白熱した熱い戦い！会場からは二人を讃える声援が鳴り響いた。
カキ「よく頑張ったな。バクガメス」

バクガメス「ガアメス…」

バクガメスを支えるカキにメガシンカが解けたリザードンと一緒にアランが向かっていった。

アラン「熱いバトルをありがとうカキ。炎のZ技か。流石に俺のリザードンも耐えてくれるかどうかまでは分からなかった」

リザードン「グウオ!!？」

カキ「こちらこそありがとうございました！良い体験をさせて頂きました！」

バクガメス「ガアメエス!!？」

カキ「また俺とバトルをしてくれませんか!?!？」

アラン「もちろん。だけど、その時は俺とリザードンもさらに強くなっているからな
！」

握手を交わす二人にさらに声援が起こった。だが、バトルはまだ終わっていない。次のバトルが始まろうとしていた。

コサブロウ『次鋒戦！両者前へ』

??? 「はいー」

次に始まる第二試合目。二人のトレーナーがバトルフィールドへと姿を現した。

ヤマト『次鋒戦！スイレン選手VSノゾミ選手！』
コサブロウ『試合開始！』

？スイレンVSノゾミ？

ノゾミ「行くよ！エルレイド！Ready go!!!」

エルレイド「エルレイ!!？」

スイレン「お願いね！アシマリ！」

アシマリ「アウ!!？」

バトルフィールドへと勢いよく放たれたエルレイドは鋭く磨き上がった刃を振り回し、アシマリは大きなバルーンを形成させて爆発させては自身の力を大きくアピールした。

試合開始のコールと同時にスイレンとアシマリはすぐに動き出した。

スイレン「アシマリ！」「バブルこうせん」！！？」

アシマリ「アウ！！？」

ノゾミ「エルレイド！」「サイコカッター」！！？」

エルレイド「エルレイ！！？」

アシマリの泡光線とエルレイドの光の刃が相殺されると、ノゾミは怯むことなく次の指示を出した。

ノゾミ「【つるぎのまい】！！？」

光り輝きだしたエルレイドの刃はさらに鋭くなった。

ノゾミ「もう一度！」「サイコカッター」！！？」

もう一度放たれた光の刃がアシマリに向かって放たれたる。向かってくるサイコパワーを蓄えた光の刃を前にアシマリは大きく身構えた。スイレンの方へと視線を合わせる。スイレンはアシマリの考えている事がわかったようにゆっくりと頷いた。

スイレン「バローン！！！」

スイレンの合図でアシマリはバトル開始前と同じぐらいの大きな水風船を形成した。その中に「サイコカッター」が吸い込まれると、その衝撃もバローン諸共吸収された。

スイレン「よし！良いよアシマリ！」

アシマリ「アウアウ〜♪」

ノゾミ「へえ、なかなか見せてくれるじゃない!?」

エルレイド「エルレイ!!?」

【つるぎのまい】で攻撃力が上がったのにもかかわらずエルレイドの技を受け止めたアシマリの水風船の強度にノゾミは驚いていた。

スイレン「よし!」【バブルこうせん】!!?」

アシマリ「アウ!!?」

アシマリの【バブルこうせん】はエルレイドに向かって放たれる。エルレイドはアシマリと同様に躲す様子はなく、迫るアシマリの攻撃に向かって拳を立てた。

ノゾミ「エルレイド!」【しんくうは】!!?」

エルレイド「エルレイ!!?」

何か思いついたノゾミはエルレイドに指示を出すと、エルレイドは大きく体を回転させ始めた。小さな竜巻を巻き起こしたエルレイドの【しんくうは】はアシマリに放つ事なくエルレイドを取り囲むようにして巻き起こっている。すると、アシマリの【バブルこうせん】はエルレイドの【しんくうは】と接触すると打ち消すどころか、次々と放たれた泡を巻き込み始めた。

スイレン「何これ!」

打ち碎かれる事なく、浮遊する【バブルこうせん】を纏う竜巻の中心にいるエルレイ

ドは迫力があり鬼神の如く、ノゾミの次の指示を待つかのようにしてアシマリを見つめていた。

ノゾミ「エルレイド！【サイコカッター】!!?」

そのまま紫色に輝かせた刃のエネルギー波を竜巻の中へと流すと、サイコパワーとアシマリの【バブルこうせん】の二つのエネルギーを取り組んだ竜巻が作り出された。

ノゾミの得意とするコンテスト技を前にスイレンとアシマリの雲行きが怪しくなってきた。

スイレン「このままだと負ける」

自分たちの今の状況がまずいと感じたスイレンはミズZをはめたZリングをかざした。

スイレン「行くよ！アシマリ！」

飾れたミズZのエネルギーはアシマリへとその力を授けた。Z技を撃つためにスイレンとアシマリはお互いに同じポーズを取り始めた。

スイレン「届け！水平線の彼方まで！」

エネルギーが集まったアシマリは大きくジャンプすると、水の衣を体へと纏った。そして、空を切るかのように回り始めると大きな渦潮が発生し始めた。

スイレン「スーパーアクアトルネード!!!」

アシマリ「アシャアアアアアア」

!!!!!!

大きな渦潮に乗りながらアシマリはエルレイドの方へと放った。目にしたZ技の威力に刺激を受けたノゾミはキーストンを飾した。

ノゾミ「行くよエルレイド!メガシンカ!!!!!!」

エルレイド「エルレイイイイイイイ!!!!!!」

サイコパワーとアシマリの「バブルこぼせん」のパワーを纏った竜巻をアシマリのZ技へとぶつけた。激しい突風に吹かれながら押し出される両者の攻撃であったが、若干、メガエルレイドの方がパワー負けしているかのように見えていた。

ノゾミ「くつ…エルレイド!「インファイト」!!?」

エルレイド「エル…エルレイイ!!?」

さらにメガエルレイドは「インファイト」で自信が作り上げた竜巻を押し出すと、そのパワーが重なって二つの技は互いに相殺された。打ち消された技の衝撃にアシマリ

とメガエルレイドは吹き飛ばされた。だが、先に体勢を戻したアシマリが先に攻撃を繰り出した。

スイレン「〔ハイドロポンプ〕!!?」

ノゾミ「〔サイコカッター〕!!?」

アシマリの水タイプ最強クラスの技を前に躲す術がなかったメガエルレイドは二刀の刃でクロスするようにしてアシマリの「ハイドロポンプ」を防いだ。

押されながらもなんとか技を耐えきったメガエルレイドであったが、その様子を見たノゾミは審判にコールした。

ノゾミ「すいません。参りました」

ノゾミの降参宣言聞いた審判はアシマリの方へと旗を大きく上げた。

ヤマト『ノゾミ選手の棄権により』

コサブロウ『勝者スイレン選手!』

二試合目の戦いを終えて二人は互いに握手を交わした。

ノゾミ「ごめんスイレン。こんな形で勝負を終わらせてしまって…」

実のところ、以前戦かったダークカイリユートのダメージが残っていたのであった。みんなからの推薦で事もあって本調子でもないのに戦いを挑んでしまったスイレンに

対してノゾミは深く謝罪をする。そんなノゾミにスイレンは和かに笑顔で返した。

スイレン「じゃあ、いつかまた何処かで本気でぶつかり合おうよ！私、それまで楽しみにするから！」

その言葉に励まされたノゾミはもう一度スイレンと握手を交わした。

ノゾミ「うん！いつか必ずね！」

バトルを終えたスイレンは戦ってくれたアシマリを抱きかかえて、ゆっくりと会場からは出て来た。

リーリエ「お疲れ様です！スイレン！」

スイレン「うん！次はリーリエ！頑張つてね！」

リーリエ「はい！」

アシマリ「アウアウ！！？」

シロン「コーン！！？」

スイレンとハイタッチを交わしたリーリエはバトルフィールドへと足を踏み入れた。

リーリエ「行きますよ！シロン！」

シロン「コーン！！？」

マオ「リーリエだ！頑張れ！リーリエ!!!」

アママイコ「アアマイ!!？」

マーマネ「行けー！リーリエ！」

トゲデマル「モギユユ!!？」

《バトルフィールド》

歓声が包まれる中、相手選手が現れるのを待つリーリエの前に、一人のトレーナーが姿を見せた。

タケシ「手加減はしないぞ。リーリエ！」

リーリエ「はい！」

ヤマト『中堅戦！ジャリ：リーリエ選手VSタケシ選手！』

コサブロウ『試合開始！』

?リーリエVSタケシ?

リーリエ「行きますよ！シロン!!!」

シロン「コーン!!?」

リーリエの声と一緒にシロンは元気よくバトルフィールドへと飛び出した。久しぶりの公式戦に胸が踊るタケシは自身の最高のパートナーが入ったモンスターボールを大きく振り投げた。

タケシ「俺はこいつだ！出てこい！ハガネール!!!」

ハガネール「ネエエル!!?」

モンスターボールから解き放たれたそのポケモンはダイヤモンドのように輝いていた。体長約9メートルのその巨体の迫力にリーリエとシロンには緊張が走ってきた。

ハガネールはリーリエのシロンと同じくタケシが初めて手にした相棒だ。このバトルに参加するにあたってジロウから転送してもらったのだ。

《観戦席》

カノン「大きい!!!」

マーマネ「あのポケモンは!!?」

サトル「ハガネールだ！」

『ハガネール てつへびポケモン

鋼・地面タイプ

地中の高い圧力と熱で鍛えられた体はあらゆる金属よりも高い。丈夫なアゴで岩石を噛み砕き進む』

マオ「強そう……」

ソウタ「タケシの切り札みたいだな」

《バトルフィールド》

久しぶりのバトルとも合ってハガネールはとても気合が入っていた。タケシは元ニビジムのジムリーダー。タケシとの本気のバトルにリーリエとシロンはだんだんと燃えてきた。

リーリエ「シロン！【こなゆき】です!!？」

シロン「コーン!!?」

先に動いたのはリーリエとシロンだ。シロンの冷気が一気に放たれると、フィールドの地面を凍らせながらハガネールに向かっていく。ジロウとのジム戦と比べて技の威力が上がっているシロンの技にタケシは感心を持つ。

タケシ「ハガネール! 『ジャイロボール』だ!!?」

ハガネール「ネエエル!!?」

攻撃技も上手く使えば防衛に徹する事も出来る。攻撃こそが最大の防衛って事だ。かつての旅の友から教わった技術でタケシはリーリエに立ち向かう。

リーリエ「もう一度! 『こなゆき』です!!?」

シロン「コーン!!?」

冷気を放射させたシロンの攻撃が再びハガネールへと迫って行く。バトルを楽しむハガネールの表情につられて、タケシはある策をリーリエに見せた。

タケシ「次はこれを見せよう。ハガネール! 『ジャイロボール』!!? カウンターシールドだ!!!」

ハガネール「ネエエル!!?」

ハガネールは体を高速回転させると、シロンの『こなゆき』を防いだ。ここまでではさつきと同じ光景であったが、それだけでは終わらなかった。

シロンの技を防いただけでなく、ハガネールはさらに高速回転のスピードを上げると、【ジャイロボール】の攻撃エネルギーは範囲を大きく広げてはそのエネルギー波をシロンに向かって放たれた。

シロン「コーン!!!」

リーリエ「シロン!!!」

ハガネールの以外な攻撃防御にリーリエは驚いてしまった。リーリエだけではない。このバトルを見ていた観戦客達もハガネールの予想だにしない攻撃方法に魅了され、会場の歓声により一段と高くなってきた。

リーリエ「こなゆき」を防いだけじゃなくて、同時に攻撃技へと変動されたのですか!!!」

攻撃を防御に使う戦法はサトシの戦いぶりから学んだ所もあったが、タケシが見せた防御と同時に攻撃を仕掛けるカウンタースールドにリーリエは少し圧倒されてしまった。

タケシ「勝負はこれからだぞ！ハガネール！【あなをほる】!!?」

ハガネール「ネエエル!!?」

攻撃の手を緩めないハガネールは【ジャイロボール】を解除したすぐに地中へと潜り始めた。一瞬にして消えた巨体の体を持つハガネールにリーリエとシロンはさらに焦

りが生じてしまった。地響きがなり、その振動がだんだんと大きくなると、辺りを一目散に目を凝らすシロンの真下からハガネールは一気に地上へと飛び出した。

リーリエ「シロン!!!」

ハガネールの攻撃によってシロンは真上へと吹き飛ばされてしまった。身動きが取れないシロンに対してハガネールは攻撃体勢へと再度切り替えてきた。

タケシ「そこだ!〔しめつける〕攻撃!!?」

向かって来るハガネールはその長い尾でシロンを捕らえようと仕掛けてきた。それを見たリーリエはすぐさま指示を出した。

リーリエ「シロン!〔こおりのつぶて〕です!!?」

シロン「コン!!?」

ハガネール「ネエール!!!」

リーリエ「続けて〔ムンフォース〕!!?」

シロン「コン!!?」

ハガネール「ネエエル!!!」

近づいてくるハガネールに向かってシロンは氷の弾丸をハガネールの頭部に向かって放った。シロンの攻撃に怯むハガネールに今度は「ムンフォース」をぶつけると、そのパワーにハガネールは大きく後ろへと倒された。自分よりも何倍の大きさのハガ

ネールに負けじを取らないシロンの勇姿に会場はさらに盛り上がりを見せた。だが、バトルの経験上からもタケシ達の方が一枚上である事は分かっている。覚悟を決めたリーリエはZリングを前に出した。

リーリエ「シロン！長引かせてはこちらが不利です！Z技で一気に勝負を決めます！」

シロン「コーン!!?」

タケシ「受け立つぞリーリエ！行くぞハガネール！」

リーリエ達がZ技を仕掛けてくる事がわかったタケシは自分の上着を大きく脱ぎ捨てた。

リーリエ「あれは!!!」

カキに負けないぐらい鍛え上げられた肉体。そして胸元にぶら下がっているキーストンにリーリエの目が集まった。

タケシ「俺達は強くて硬い石の男！ハガネール！メガシンカ!!!」

ハガネール「ネエエエルウウ!!!」

タケシのキーストンとハガネールナイトが共に光り輝き出すと、ハガネールの体はさらに硬く、大きく、光沢にさらに磨きがかかってきた。メガシンカによりさらに厳つさが増したハガネールの姿にリーリエとシロンはさらに身構えた。

リーリエ「メガ：ハガネールですか」

メガシンカを遂げたハガネールを前に、今度はリーリエのコオリ乙が白く光り輝きだした。

乙リングからパワーを受け取ったシロンの体は白い光に包まれた。それに対してハガネールは躲そうともせず、タケシと一緒にシロンの乙技が繰り出されるのを岩のように大きく待ち構えていた。元ジムリーダーとしての血筋が走ったのか、タケシとハガネールはリーリエとシロンの本気の力を真つ向から受け止めようとしている。それに答えるように解放されたシロンの乙技が勢いよく撃ち出された。

リーリエ「[レイジングジオフリーズ]!!!」

シロン「コオオオオオン!!!」

シロンの雄叫びと一緒に氷柱が次々と形成され逃げられないようにメガハガネールの周りを包围する。その一本の氷柱の頂に立つシロンは狙いを定めて大きな冷凍光線を発射した。発射された冷凍光線は大きなメガハガネールの体を冷気で発生した霧にシロンごと包み込んだ。コオリ乙の放つ冷気で一気に下がった気温が徐々に標準値まで戻ったのと同時に冷気の霧も晴れてきた。

その中から一呼吸を終えたメガハガネールがリーリエを睨みつけていた。

タケシ「よし！よく耐えたぞ。ハガネ…」

Z技を耐えてくれる事を信じていたタケシはシロンの姿を確認し始めた。しかし、それを見てタケシは驚いた。そのシロンはメガハガネールの側まで距離を詰めていたのだ。

タケシ「何だと！」

リーリエ「今よ！【こおりのつぶて】!!?」

シロン「コーン!!?」

シロンを確認したリーリエはすぐに先制技でメガハガネールに攻撃を決めた。

Z技を決めた事にリーリエは決して安堵していなかった。相手は自分達よりも幾多の経験を積んできたトレーナーだ。自分たちの今の実力で一気に戦闘不能まで持ち込める可能性は低い。リーリエはZ技を決め技としてではなく、あえてタケシとメガハガネールの注意を払って、シロンを近づけさせるためにZ技を利用したのだ。

リーリエ「【こなゆき】です!!?」

タケシ「くっ！ハガネール！【ジャイロボール】だ!!?」

蹠踏めくメガハガネールにシロンはさらに攻撃を重ねていく。しかし、やられっぱなしには行かない。すぐにメガハガネールは【ジャイロボール】によるカウンターシールドを展開させて、シロンを技ごと吹き飛ばした。

タケシ「これでとどめだ！ハガネール！【ストーンエッジ】!!?」

ハガネール「ネエエエエル!!？」

メガハガネールは尾で一気にフィールドを叩くと、形成された岩柱が道を作るように一直線にシロンへと向かって行った。

リーリエ「シロン!!!」

連なる岩柱にシロンは攻撃を受けてしまった。立ちはだかる砂埃を前にリーリエはシロンの無事を願った。砂埃が晴れるとその中から大きな氷の球体が姿を現した。

タケシ「なっ！これは!!!」

リーリエ「凄いです！シロン!!!」

なんと、その氷の球体の中には身構えるシロンの姿があった。これはシロンの独自の判断によるものだろ。メガハガネールの攻撃が決まる瞬間にシロンは自分の周りを冷気で冷やし始めると、その作られた大きな氷の球体に自分の身を包み込ませたのだ。そのおかげでシロンは「ストーンエッジ」の直撃を凌いだみたいだ。そのシロンの判断にタケシは思わず拍手を送った。

タケシ「やるな！シロン！」

リーリエ「ありがとうございます！攻撃は最大の防御！シロンもしっかりと何処かのトレーナーさんの戦いを見ては学んでいたそうですね！」

シロン「コーン!!？」

タケシ「それは奇遇だな！さっきのカウンターシールドと言い、俺も何処ぞやのトレーナーから色々教えて貰っていたからな！」

ハガネール「ネエル!!？」

さっきまでの戦いから見せなかつた二人に少し笑顔が溢れた。そして、すぐにバトルの方へと目を向けた。

タケシ「さあ、もうそろ終盤戦だ！来い!!!」

リーリエ「勝たせていただきます！わたくし達の全力をもう一度ぶつけてみせます!!!」

気合いが入った自分達らのトレーナーに反応するようにシロンとメガハガネールは前へと進んだ。

リーリエ「【こおりのつぶて】!!？」

タケシ「【ジャイロボール】だ!!？」

シロンの次々に撃ち出される氷の弾丸をメガハガネールは体を高速回転させてその技を打ち消していく。

タケシ「【あなをほる】!!？」

ハガネール「ネエエル!!？」

シロンの連続攻撃が終わると、メガハガネールは咄嗟にその身を地中へと沈めた。地

中を潜ったことに現れた大きな穴。それを見たリーリエはシロンをその穴の側へと移動させた。

リーリエ「シロン！その穴に【こなゆき】です!!?」

地中では逃げられないメガハガネールにシロンはその穴を通して冷気をぶつけに入った。シロンの攻撃が入るその直後、その誘いに乗ってくれた事に笑みを見せるタケシの姿がリーリエの瞳の中に映った。はつとするリーリエを他所にタケシは指示を出した。

タケシ「ハガネール！【ジャイロボール】だ!!?」

シロンの攻撃が決まる寸前にハガネールは地中の中で体をフル回転させ始めた。そして、周りの土を掘り起こすようにして地中を巻き上げ始めると、一気に地表にまでその振動が差し掛かった。その振動に地面が割れてシロンはその中へと巻き込まれてしまった。

リーリエ「シロン!!!」

リーリエの声が虚しく、シロンはそのまま一気に空中へと放り出されてしまった。落下して地面に叩きつけられたシロンはそのまま目を回していた。

ヤマト『シロン…じゃなくて、ロコン戦闘不能！ハガネールの勝ち！』

コサブロウ『よって中堅戦の勝者はタケシ選手！』

勝負が決してリーリエはすぐにシロンを抱きかかえた。

リーリエ「シロン。頑張りましたね」

シロン「コーン……」

タケシ「お疲れ！ハガネール！」

ハガネール「ネエル!!？」

戦ってくれたポケモン達にお礼を言った後、リーリエとタケシは握手を交わした。

リーリエ「流石は元ジムリーダーですね。完敗でした」

タケシ「いや、正直勝てるかどうかは俺にも分からなかったさ！」

リーリエ「またお相手して下さい！」

タケシ「ああ！またやろう！」

二人の健闘に会場からは拍手が巻き起こった。傷ついたシロンを抱いてリーリエはすぐにバトルフィールドを後にした。

すると、向かいからは次にバトルを行うアローラ側のトレーナーがリーリエに近づいて行った。

ロイヤルマスク「リーリエ君！ナイスファイトだったぞ！」

リーリエ「ありがとうございます！ロイヤルマスクさんも頑張ってください！」

互いに一言だけ交わして、リーリエはカキとスイレンの元へと戻って行った。

ククイ博士 (カントーを旅して随分と成長したな。リーリエ)

教え子の成長に心を踊らせるククイ博士は切り替えて、多くの観戦人が待つバトルフィールドへと姿を現した。右拳を高く上げるとアローラの人達はその男の登場に歓声が高鳴り起こった。

マーマネ「来た！ロイヤルマスク!!!」

マーマネも自分用のロイヤルマスクと同じ覆面を被り始めた。マーマネの様子やアローラの人達の熱狂から物凄く強いトレーナーであることは伝わる。そして、そのロイヤルマスクと交える相手トレーナーの方へと目を傾けたのだが、ロイヤルマスクの登場から同盟地方組側のトレーナーが一向に姿を見せる気配がなかった。

カノン「全然出てこないよね」

サトル「どうしたんだろ」

マノン「まさか…出られなくなっちゃったとか？」

ハリサ「ハロ…」

ソウタ「何やってんだよ！罰金もんだ！」

ざわつく会場にヤマトとコサブロウは対処していると、慌ただしい声を発しながら全力疾走でバトルフィールドへと向かってくる一人のトレーナーとそのポケモンの姿が見えた。

??? 「だああああ!!!間に合えええ!!!」

全力で走り行くその少年は会場へと入るその直後に道端の小石に足を取られて躓いてしまうと、転がりながらトレーナーサイドの方へと向かって行った。

??? 「よっしやあ!間に合った!!!」

ルカリオ「リオ…」

何かと慌ただしかったその少年は自分のトレンドマークとも言えるバンダナを思いつきり引つ張ってはゴムのように額を叩きつけると、気合いを入れ始めた。

ククイ博士(あの子は…さっきの…)

その少年はさっき自分の講義を聞いてくれたトレーナーと知ったククイ博士はその少年の実力を知りたくなる衝動に思わず笑みが溢れてしまった。

ヤマト『副将戦！ロイヤルマスク選手VSコテツ選手！』
コサブロウ『試合開始！』

？ロイヤルマスクVSコテツ？

コテツ「さあ！行こうぜルカリオ！」

ルカリオ「リオ!!？」

コテツの呼び声に応じてルカリオはバトルフィールドへと華麗に降り立った。
ルカリオの登場をリーリエ達はそのバトルを控え室から見ていた。

リーリエ「あのポケモンはたしかルカリオですね」

ロトム『シャッターチャンスロト！』

『ルカリオ はどうポケモン

格闘・鋼タイプ

あらゆる物が発する波動をキャッチする能力を持つ。その能力で相手の考えや動きを読み取る事もできる』

ルカリオの登場に静かに燃え出したロイヤルマスクも一気にモンスターボールを空中へと解き放った。

ロイヤルマスク「行くぞ！ガオガエン!!!」

ガオガエン「ガオオオ!!？」

腰に巻いた炎のベルトを燃え上がらせたガオガエンはその闘志を対戦相手のルカリオに向けられた。

《観戦席》

カノン「ガオガエン…」

始めてみるそのポケモンにカノンはポケモン図鑑を開いた。

『ガオガエン ヒールポケモン

炎・悪タイプ

強烈なパンチとキックで戦う。闘争心に火がつくと腰のまわりにある炎もひと際激しく燃え上がる』

マーマネ「炎タイプのガオガエンに対して鋼タイプのルカリオか。それならガオガエンが有利だね！」

サトル「だけど、ルカリオには悪タイプのガオガエンに対して有利が取れる格闘タイプも持っているよ！」

ソウタ「五分五分ってところだな」

マノン「ねえマオ？あのロイヤルマスクっていう人はどれだけ強いのか？」

マオ「そりやもうメチャクツチャ強いよ！アローラでは負けなしの人だもん！」

《バトルフィールド》

両者のポケモンが出揃った所でコテツとルカリオは共にお揃いの腕のバンダに装着されたキーストンとルカリオナイトを輝かせた。

コテツ「ルカリオ！メガシンカだ!!!」

ルカリオ「リオオオオオオ!!!」

メガシンカしたルカリオはさらにガオガエンを鋭く睨みつけた。強敵とのバトルにさらに喜びの感情が湧いたガオガエンも大きく雄叫びを上げた。

コテツ「ルカリオ！「グロウパンチ」!!?」

メガルカリオ「ルオ!!?」

ロイヤルマスク「ガオガエン！【じごくづき】!!?」

ガオガエン「ガアオ!!?」

両者の拳が火花を散らしながら激しく交わり始めた。その衝撃波はモニター越しで見ているリーリエ達にも大きく体を痺れさせた。

コテツ「行くぞ！マスクのおっちゃん!!!」

ロイヤルマスク「来たまえ！少年!!!」

向かい合う強者の魂に会場はさらにヒートアップした。

そのバトルを控え室で観戦している少女も体を震わせながら、キーストンがついた
ネットレスを煌めかせながらモンスターボールを握りしめていた。

第二十七話 Z技VSメガシンカ 後半

試合開始15分前

カノン「まずはアランさんとノゾミは決定でしょ！」

サトル「そうだね。あのZ技に対抗するにはメガシンカポケモンの力が必要だと思うよ」

マノン「それじゃあ、あと3人だね。誰がいいかな」

前にリーリエがミラーボとの戦いに見せたZ技。その威力に対抗できるのはメガシンカポケモン達と睨んでいた皆んなはメガシンカを扱えるトレーナーを中心に同盟地方チームの出場選手を決めていた。

ソウタ「それじゃあ、この中でジムバッジの数が多いこの俺が出るとするかな〜♪」

いま現在、キーストンを所持しているトレーナーは二人のみ。残りは今いる中で実力が高い者から選ぶのが等しい。残りの出場メンバーを決めようとしたその時、一人のトレーナーが慌ただしくカノン達がいる方へと走って来た。

コテツ「なあなあ！ポケモンバトルするんだってな！俺も入れてくれよ!!!」
ルカリオ「リオ!!？」

サトル「ええ…と君はたしか…」

コテツ「いいだろ！いいだろ！俺もキーストンとルカリオナイト持つてるんだからよ
！」

ルカリオ「リオ!!？」

コテツを見て何かを思い出しかけたサトルを遮ってコテツは腕のバングルに装着されているキーストン。ルカリオはそのお揃いのバングルに埋め込まれているルカリオナイトをカノン達に見せて来た。

アラン「メガシンカ所持者なら尚更だな」

ノゾミ「そのようだね。それじゃあ、お願いして貰ってもいいかな」

コテツ「マジで！やった！任しとけ！」

こうしてコテツを入れて三人目が決定した。そして、すぐにサトルはもう一人のトレーナーを推薦した。

サトル「それからタケシだね」

タケシ「俺か？」

カノン「そうだよ！元ジムリーダーの実力見せてよタケシ！」

コテツ「ルカリオ！『グロウパンチ』!!?」

ロイヤルマスク「ガオガエン！『じごくづき』!!?」

ルカリオとガオガエンの気合いが入った攻撃が会場全体へと衝撃波が流れ込んで来た。体にひりつく感じを受けながら、コテツというトレーナーを見ていたサトルは口を大きく開いた。

《観戦席》

サトル「思い出した！そうだよ。コテツさんだよ！」

マオ「サトルの知り合いだったの？」

マオからの質問にサトルは首を横に振るが、その人物の事に対してはサトルは知っていた。

サトル「違うんだけど、彼はイツシユリーグでサトシさんと戦っていたトレーナーだよ」

ソウタ「そうか！あの人か！フルバトルだったのに五体でサトシさんに勝った人じゃんか！」

マオ「ちよつと…待って！」

マーマネ「サトシに勝ったトレーナー……」

サトルの発言につられて思い出したソウタも話に加わった。しかし、それよりもマオとマーマネが驚いたのは、サトシに勝った事があるというワードだった。

サトシの実力は二人も知っている。ロイヤルマスクがいくら強くてもその実力はアローラ地方のみでしか発揮されていない。世界の壁というのか、マオとマーマネは悪い予感が遮ってくる中、ロイヤルマスクの応援を続けた。

《バトルフィールド》

ロイヤルマスク「ガオガエン【かえんほうしゃ】!!?」

腰の炎のベルトから放射された火炎放射がルカリオへと放たれた。炎タイプの技を苦手とするルカリオであったが、その技を前に焦る様子がなかった。

コテツ「ルカリオ!【ボーンラッシュ】で防いじまえ!!?」

ルカリオは光る棒を具現化させると、円のように垂直回転させると、向かってくる火炎放射を意図も簡単に防いでみてしまった。

コテツ「そのまま!【はどうだん】!!?」

防ぎつた火炎放射の残り火が散らつく中でルカリオはすぐに波動エネルギーを球体に形成し始めると、気合いの入った声でガオガエンに向かって撃ち出した。

トレーナーとそのポケモンであるルカリオの一球入魂に撃ち出された【はどうだん】

を見たガオガエンは笑みを溢しながら右手にパワー集中し始めた。

ロイヤルマスク「ガオガエン! 『じごくづき』!!?」

苦手な格闘タイプの技をガオガエンは力一杯の突きでルカリオの『はどうだん』を打ち消した。

ロイヤルマスク「よし! ガオガエン! 『ビルドアップ』だ!!?」

鍛え上げられた筋肉をさらに膨張させたガオガエンは攻撃と防御を同時に高め始めた。その技を見たコテツはする賢そうな笑顔でルカリオに指示を出した。

コテツ「おっちゃん。その技頂き! ルカリオ! 『まねっこ』だ!!?」

精神を研ぎ澄ませて鋭い眼光でルカリオは肉体強化させたガオガエンを睨みつけた。同時にガオガエンの『ビルドアップ』を放つポーリングをイメージさせると、ルカリオはそれを真似た。見事にガオガエンとの行動をシンクロさせる事が出来たルカリオは覚えていないはずの技『ビルドアップ』を成功させた。

《観戦席》

カノン「何? あれ…」

ソウタ「ま…真似っこだ?」

サトル「言葉通りの技だよ。相手の技を真似てその技を自分の物のようにして発動でききる技だよ」

マノン「じゃあ、その技を使えばどんな技も発動出来ちゃうって事なの!!?」
 ハリサ「ハロツ!!?」

【まねっこ】の仕組みを理解した所でサトル達はバトルの方へと目を向けた。

《バトルフィールド》

ロイヤルマスク「【かえんほうしゃ】!!?」

コテツ「もう一回【まねっこ】!!?」

サトルの説明通り、ガオガエンの火炎放射とその技をまともや真似たルカリオの火炎放射がぶつかり合った。

コテツ「ルカリオ! 【グロウパンチ】!!?」

相殺された爆炎を蹴散らして、ルカリオはガオガエンに向かって走りながら、力一杯拳にパワーを集中させ始めた。

ロイヤルマスク「ガオガエン! 【ビルドアップ】!!?」

繰り返して打ち出した事で硬くなってきたルカリオの拳は徐々に攻撃力を上げてきている。自慢の【じごくづき】で受け止めようにもそうはいかなくなってきた事を感じたロイヤルマスクはガオガエンの肉体をさらに強化させる事に決めた。

再び身体を大きく見せたガオガエンの筋肉は降り注ぐ太陽の光に反射された事で鋼

の身体のように硬く見えた。ルカリオの攻撃を胸筋で受け止めて弾き返すと、両腕を大きく広げて後退するルカリオに向かって狙いを定めた。

ロイヤルマスク「〔DDラリアット〕!!?」

ガオガエン「ガアオ!!?」

身体を大きく駒のように回転させ始めたガオガエンは邪悪なエネルギーを纏いながらルカリオに向かって突進した。

ルカリオ「リオ!!!」

ガオガエンのエルボーがルカリオの喉元を捕えるとルカリオはその反動で吹き飛ばされた。

コテツ「大丈夫か!ルカリオ!」

ルカリオ「リオ!!?」

急所に当たったルカリオをコテツは必死に呼びかけた。その声に反応して戦闘不能寸前の所で持ち堪えたルカリオであったが、ダメージは大きい。

ロイヤルマスク「行くぞ!ガオガエン!」

そろそろ終盤の時と睨んだロイヤルマスクはここまで戦ったコテツとルカリオの実力に敬意を表じて、自分達のありったけの力をぶつける事に決めたのだった。

ロイヤルマスク「燃え上がれガオガエン!勝利の炎でリングを焼き尽くせ!!!」

ガオガエン「ガアオオオ!!!」

ガオガエンZの力が与えられたガオガエンはそのエネルギー源を大きく解き放った。まるでプロレスのリングに立たされたように感じさせるような威圧感を漂わしながらガオガエンは力一杯に吠え始めた。

ロイヤルマスク「ハイパーダーククラッシュャー」

ガオガエン「ガアオオオオオ!!!」

!!!!!!!

大きくジャンプしたガオガエン!は大の字に身体を広げると、ベルトから溢れ出た炎がその身を包み込ませると、そのままルカリオへと真つ逆さまに落ちて行った。

コテツ「ルカリオ!「まねっこ」だ!!?」

ルカリオ「リオ!!?」

ガオガエンから感じるパワーに対して同じパワーをぶつけてやると考えたコテツはZ技を真似させようとルカリオに指示を出す。ルカリオはガオガエンの動きを観察して真似しようと試みるも

ルカリオ「リオ?」

コテツ「ありや?」

ルカリオはガオガエンのZ技を真似したつもりが「DDラリオット」を発動してしまった。あまりにも強力なZ技を真似しようとしても、その力までも模倣する事は難し

かったみたいだ。元にした技を発動したルカリオであったが、ガオガエンのパワーに歯が立たず、その押し負けてしまった。煙が晴れた頃には勝利の雄叫びを上げているガオガエンと力無くし倒れたルカリオの姿があった。

ヤマト『ルカリオ戦闘不能！ガオガエンの勝ち！』

コサブロウ『副将戦の勝者はロイヤルマスク選手！』

ロイヤルマスク「エーンジョイ!!!」

ガオガエン「ガアオ!!？」

勝利の決めポーズを決めたロイヤルマスクの勝利に会場は大歓声に包まれた。戦闘不能となったルカリオを抱えながらコテツはロイヤルマスクの元へと向かった。

コテツ「あくあ！やっぱそのZ技を真似するには難しかったな。だけど、おっちゃん！すんげー面白い試合だったぜ！なあ！ルカリオ！」

ルカリオ「リオ!!？」

ロイヤルマスク「いや、もしその判断ミスが無ければ私もどうなっていたかは分からなかった。私達もギリギリであったのは定かだ」

ガオガエン「ガオ!!？」

コテツ「サイキューー！今度会った時はまたリベンジさせてくれ！」

ロイヤルマスク「おお！勿論だ！」

固い握手を交わした所で最後はコテツとルカリオを加えてロイヤルマスクの決めポーズを行なった。二人の熱い戦いに再度、観客席からはコールと同時に拍手が巻き起こった。

そして、次がラストバトルだ。

互いに二勝二敗での大将戦。その最後の戦いへと二人のトレーナーがバトルフィールドへと歩き出した。

ユーゴ「よし！」

幾多のバトルを経験しているとはいえ、どのバトルも気が抜けない。精神統一を行なったユーゴは一呼吸して気持ち落ち着かせた。

カキ「最後はユーゴさんですね！」

スイレン「みんなで全力で応援しています！」

リーリエ「頑張つて下さい！」

ユーゴ「もちろん。ここまでみんなが戦ってくれた分のためにも必ず勝ってみせるさ！」

リーリエ達からエールを受け取って、ユーゴはバトルフィールドへと立った。

《観戦席》

マーマネ「最後はユーゴさんだ！」

マオ「頑張れ！ユーゴさん!!」

最後のアローラサイドのトレーナーの登場に会場はバトルが始まってもないのに一気に高揚感が上がる。

そして、その歓声が賑わう中で、いよいよもう一人のトレーナーが入場した。腰まで下ろした髪を揺らしながら登場したそのトレーナーの姿に会場の目が奪われた。

マオ「うわぁ！凄く綺麗な人！」

マノン「なんか大人の女性って感じでかっこいい！」

《バトルフィールド》

最後の選手が出揃った所でいよいよ最後のバトルが始まろうとしていた。

ヤマト『大将戦！ユーゴ選手VSアイラ選手！』

コサブロウ『試合開始！』

?ユーゴVSアイラ?

試合開始の合図がなった途端、バトルフィールドの中心を回るようにして、突風が吹き荒れた。その風の吹き荒れに木の葉が舞うとそのせいで大半の人達の視界が遮られてしまった。視界がぼやけていても、必死にバトルフィールドの方へと目をやると、舞い上がる木の葉の中で黄昏ながら一体のポケモンが瞬時に現れた。

ジュナイパー「ジュナ!!？」

森の英霊のように翼のマントを翳しながら振る舞うジュナイパーの登場に会場からはさらに高い声援が鳴り響いた。

カキ「ユーゴさんはやっぱりジュナイパーか！」

スイレン「こっちまで緊張してくるね」

リーリエ「相手のアイラさんはどんなポケモンで来るのでしょうか」

なんとなくユーゴが繰り出すポケモンを予想していたリーリエ達。そして気になるのはアイラの繰り出すポケモンだ。そんな彼女に注目してみると：

アイラ「かつこいい!!その子がジュナイパーね♪アローラのポケモン相手は初めてだから頑張るぞ！」

初めて見るジュナイパーを前にはしゃいでいるアイラからは緊張感は全くなかった。

見た目のクールなギャップから子供のようにはしゃぎ出すアイラに可愛らしいさがあったが、

アイラ「それじゃあ、行くね」

モンスターボールを取り出したと同時にその目は一気に戦闘モードへと切り替えた。その鋭い眼光に背筋が凍るような衝撃を受けたリリー工達は息をのんだ。

アイラ「行くよ！バシャーモ!!!」

バシャーモ「バアシャ!!？」

モンスターボールから出現したバシャーモは腕から熱い炎を放射させると、勇ましくその場で気合の雄叫びを上げた。

ロトム『バシャーモロト!』

まだ無いデーターなため、ロトムは急いで撮影を行なった。

『バシャーモ もうかポケモン

炎・格闘タイプ

戦いになると手首から灼熱の炎を吹き上げ勇敢に挑み掛かる。相手が手強いほど激しく燃え上がる』

初めて見るポケモン。そしてアイラのバシャーモの気迫にリーリエ達は息をのんだ。そのバシャーモを眺めているのはリーリエ達だけではない。アイラを同じチームへと迎えたタケシ達も最後の勝負を見届けていた。

タケシ「バシャーモか」

ノゾミ「バシャーモは炎と格闘タイプだよね」

アラン「ああ、相性だとバシャーモの方が有利だが、バシャーモの打撃技はゴーストタイプのジュナイパーには効果はない。この勝負も五分五分というところだな」

互いの推測などが立てられる中、ユーゴとアイラは同時にポケモン達に指示を出した。

リーリエ「あれ？」

二人が合図を出すと、ジュナイパーとバシャーモは瞬時にその場から姿を消したのだ。

カキ「ジュナイパーとバシャーモは…どこに…」

突然と消えた二体に戸惑うリーリエ達。それはこの試合を見ている人達も急な光景に釘付けとなってしまう。誰一人も声が発さなくなったこの沈黙の中で、微かに空を

切る音が聞こえてきた。

スイレン「えっ!!! いつの間に!」

音がする方へと自然と首を上へと向けて見ると、ジュナイパーとバシャーモは真上で激しいぶつかり合いを行なっていた。目にも止まらぬ速さで二体は相交っていた。

リーリエ「お互に凄いいスピードです!」

その素早さにリーリエ達は悟った。明らかにレベルが違う。まるでポケモンリーグの決勝戦を見せられているような錯覚だ。

ユーゴ「ジュナイパー! 「リーフブレード」!!?」

ジュナイパー「ジュナ!!?」

バシャーモ「躲して!」

バシャーモ「バシャ!!?」

互いの実力を把握した所でここで初めてユーゴからの技の指示が下った。

ジュナイパーは鋭利な翼で刃のようにバシャーモに斬りつけにかかった。振りかざされる手刀をバシャーモはタイミングよく擦りもせず躲けて行く。その動きに全く無駄がない。

カキ「「みきり」を使っていないのになんて反射神経なんだ」

ノゾミ「この程度じゃ私達を倒す事は出来ない。そう感じさせているみたいだね」

アラン「それほどの修羅場を潜ってきたんだらうな。あんな動き…並大抵のトレイナーですら作り上げる事は難しい」

ここにいる全員がこの試合に誰一人と目を離していない。抱きしめている力が少し強くなってきている事に違和感を感じたシロンはリーリエの顔を覗き込んだ。シロンの目に映ったリーリエの表情は固かった。

ユーゴ「下がれジュナイパー！」

無駄な体力を消費させないためにもユーゴは一旦、ジュナイパーを下げた。バシャーモから離れた事を確認するとアイラは容赦なく攻撃を指示した。

アイラ「バシャーモ！【かえんほうしゃ】!!？」

バシャーモ「バシヤア!!？」

進化してさらに強力な業火となった火炎放射がジュナイパーに勢いよく放たれた。

ユーゴ「【リーフブレード】!!？」

苦手の炎技であろうともジュナイパーは焦る事なく火炎放射を素早く斬り裂いた。

アイラ「やくるく♪」

一瞬にして火花と散った火炎放射を見たアイラはジュナイパーに拍手を送った。

余裕そうなアイラを見たユーゴは少し挑発を送った。

ユーゴ「どうやったら、本気になってくれるかな？」

アイラ「貴方がその気にさせてくれたらね♪」
綺麗なロゼリアには棘がある。

アイラのその返答を後悔させてやろうと、ユーゴはジュナイパーに次の指示を送った。

ユーゴ「ジュナイパー！【リーフストーム】!!?」

ジュナイパー「ジュナア!!?」

ジュナイパーの周りを巡回し始めた木の葉は密集すると、竜巻となって暴風のようにバシャーモを襲い始めた。

アイラ「バシャーモ！【ブレイズキック】!!?」

バシャーモ「バシャシャシャ!!?」

荒ぶれる木の葉の刃を次々とバシャーモは炎を立ちのぼらせた足で蹴り飛ばし始めた。葉の一枚一枚を正確に逃さず蹴り落として行った。そして、蹴り飛ばしながらもバシャーモは【リーフストーム】を放ち続けているジュナイパーに向かって進んでいつている。

ユーゴ「バシャーモを近づけさせるな！【リーフストーム】を続ける！」

ジュナイパー「ジュナ!!?」

アイラ「何度やっても同じよ！」

怯まずに攻撃の手をやめないジュナイパーに対して疲れを感じさせないバシャーモの猛攻が続く。枯れた木の葉に互いの視界が遮られながらも一步も引かない。

アラン「うまいな」

リーリエ「えっ？」

何かに気づいたアランにリーリエは首を傾げた。

アラン「バシャーモのトレーナーは相手の策に気づいていないみたいだからな」

リーリエ「ユーゴさんの策ですか？」

アランが感づいた意図が分からないままリーリエは再びモニターへと目を向けた。

ジュナイパーは防がれながらも、「リーフストーム」で攻撃を続けた。バシャーモによつて枯れ果てた大量の木の葉がフィールドを覆つて行つた。しかし、それがユーゴの狙いだった。互いの姿が遮られるほどの多量な木の葉が充満された所で、ジュナイパーは翼に隠し持つてた羽根の矢を取り出して弓の弦に重ねて狙いを定めた。

ユーゴ「ジュナイパー！「かげぬい」!!？」

放たれた矢はバシャーモに向かって追撃された。漆黒の色に染まる矢はバシャーモの死角を捕らえていたため、気づかずにそのまま命中した。

ここで「かげぬい」の効果を知っていたリーリエにもユーゴの狙いというのを理解した。

ユーゴ「ジュナイパー」「ブレイブバード」!!?」

【かげぬい】が命中したその直後、ジュナイパーは次の攻撃へと切り替えた。翼を広げて高く飛び上がると、一気に急下降化してパワーを貯めると低空飛行でバシャーモ目掛けて突っ込んで行った。

接近するジュナイパーに目を配ったアイラは急いでバシャーモの様子を伺った。衝撃で起こった黒い霧が晴れると首の肩を回すバシャーモの姿があつた。大したダメージを負っていない様で、今にでも指示を出せばバシャーモの素早さなら簡単に躲す事が出来る距離でいた。すぐにアイラの指示を聞いたバシャーモはすぐに行動に移した。

バシャーモ「バシヤ?」

アイラ「バ：バシヤーモ?」

躲そうとしたバシヤーモであつたが、硬直されたかのように体を動かす事が出来なくなっていた。よく見ると自分の影が地面に射抜かれてしまつているように固定されてしまつていた。自分と体を結ぶ影の線に足を掴まれてしまった様な感覚だ。必死に足を動かそうにも影がそれを許さないでいた。走行している内に迫ってきたジュナイパーの攻撃がバシヤーモの胸元に炸裂した。

バシヤーモ「バシヤアア!!」

アイラ「あつ!!」

効果は抜群の飛行タイプの攻撃を受けた衝撃で吹き飛ばされたバシャーモは落下すると、強く背中を地面へと叩きつけられてしまった。何とか立ち上がるバシャーモであつたが、それを見たアイラの目にはさつきまでバトルを楽しんでいた余裕が消えていた。ゆつくりとキーストンを握りしめると、バシャーモナイトと共に光り輝き出した。

アイラ「バシャーモ！メガシンカ!!!」

バシャーモ「バアシャアアア!!!」

ユーゴ（やつと本気を出して!!!!れたようだね）

メガシンカしたバシャーモにユーゴは自然と笑みを浮かべた。アイラの指示でメガバシャーモは四方八方へと高速移動し、ジュナイパーを攪乱させ始めた。移動するたびに加速していくメガバシャーモに対して、逆に相手の視覚から消えて出方を伺われてしまっているジュナイパーは必死でメガバシャーモの姿を捕らえようと必死になっている。

アイラ「行けっ!!【つばめがえし】!!?」

何処から分らない見えない攻撃がジュナイパーを襲う。ジュナイパーも【リーフブレード】で対抗するもののメガバシャーモの攻撃をギリギリの所で受け流すのに精一杯だ。時間が押していくと不利と考えたユーゴはZリングを構えた。

ユーゴ「行くぞ!ジュナイパー!!!」

ジュナイパー「ジュナイ!!？」

ジュナイパーに宿るジュナイパーZの力がみなぎると、その光のパワーにメガバシャーモは思わず距離を引いてしまった。

Zパワーを身に空中へと飛び上がるジュナイパーはそのまま周りに羽根の矢を浮上させると、その矢を自分の周りで回転し始めた。おそらくこれが最後の攻撃となるだろ。ユーゴとジュナイパーは持てる限りの力を全部出し切る勢いでアイラとメガバシャーモに向かつて最後の一撃を放った。

ユーゴ「『シャドーアローズストライク』
!!!!!!」

ジュナイパー「ジュナアア

ア
!!!!!!」

一気に降下するジュナイパーの威圧に一瞬怯んでしまったメガバシャーモ。しかし、彼は逃げようとはせずに迫るジュナイパーに身を構えてはアイラの指示を待つ。

アイラも気合を入れるため男顔負けの気迫のある声を会場全体に放った。その声に答えるようにバシャーモも大きな声で炎を灯した足をジュナイパー目掛けて蹴り上げた。

アイラ「バシャーモ!!!!」「ブレイズキック!!!!」

バシャーモ「バシヤアアア!!!!」

互いの行進の一撃が相交る。爆発による爆風が一気に会場全体に吹き荒れた。飛ばされないように小物類を手で押さえながら観戦客の人達は飛ばされないように必死で耐えし乗っている。

控え室にいたリーリエ達もその衝撃による地響きに耐えながらも、モニターから目を逸らさないようにしていた。爆煙が晴れると、二体のポケモンは互いに見つめ合いながら直立していた。二体の雰囲気にも緊張が走る。暫くの静寂の中、小刻みに動く足を抑えようとする一体のポケモンはそのまま硬く目を閉じると、そのまま崩れ落ちてしまった。もう一度、立ち上がるうにも気力を出し尽くしてしまった体を支える事は出来ずに再びその場へと力尽くしてしまった。

ヤマト「バシャーモ戦闘不能!ジュナイパーの勝ち!」

コサブロウ「大將戦の勝者はユーゴ選手!通算でチーム・アローラの勝利です!」

結着のコールが宣言されると、観客席から拍手と歓声が一気に鳴り響いた。ユーゴとアイラは互いのパートナーを支えながら固い握手を交わした。会場から溢れた拍手は二人がバトルフィールドを退場した後でも、暫く鳴り止む事はなかった。

リーリエ「凄い試合でしたね。シロン」

シロン「コーン」

二人の試合を観戦したリリーエも暫くはその場を動けずにいた。ベテラントレーナー同士のバトルに圧倒され、世界のレベルの高さを身を持って知る事が出来た。

カントーリーグではこのレベルのトレーナーと戦っていかなければならない。リリーエにとってこの経験は今一度、自分たちの力不足に目を向け、自分とポケモン達のバトルをどう見つめ直すべきかと考えさせられる物になったのかもしれない。

~~~~~

アローラ祭が終わった翌朝、荷物を整えたりーリエ達はポケモンセンターへと出てき

た。

リーリエ「皆さん！ここまで本当にお世話になりました！」

リーリエはクチバシテイまで同行してくれたタケシ達に感謝を述べた。そう、アロー祭が終わったという事は、ここからみんなは各々の道へと渡ってしまふのだ。

リーリエの言葉にここまで一緒に旅をしてきたみんなも返答した。

タケシ「こつちこそ久しぶりの旅、楽しかったよ！」

ソウタ「次会った時は、もっと強くなってる俺を見せてやるよ！」

ノゾミ「旅に誘ってくれてありがとうね。リーリエ。また何処かの街で！」

アラン「ああ、また何処かで会おう」

マノン「うん！」

ハリサ「ハロツ!!？」

それぞれの言葉を聞いた後、リーリエはカノンとサトルの前へと歩み寄った。

リーリエ「カノン。サトル。オーキド研究所からここまでいろいろとお世話になりました」

慣れない地方での旅に心細かったリーリエを旅の最初からサポートしてくれたカノンとサトルとも今日で別々となってしまう。

もつと強くなるためにも

ここからは一人で旅を続けようと思う

それは昨夜にサトルとカノンの口から告げられた事だった。昨日のポケモンバトルを見て何かを感じたのはカノンとサトルも同じだったようだ。

カノン「こつちこそ！私もリーリエと友達に慣れて本当に良かったよ！」

サトル「楽しかったよリーリエ。ここからお互いジム巡りの旅。頑張ろうね！」

リーリエ「はい！じゃあ、もしまた何処かの街で出会う事ができましたら、その時は……」

そして、三人は同時に口を揃えた。

リーリエ「バトルしようぜ！」

カノン「バトルしようぜ！」

サトル「バトルしようぜ！」

ヒコザル「ヒココ!!？」

ピカチュウ「ピカピカ!!？」

シロン「コーン!!？」

より強くなった自分達と再開することを約束して、リーリエ以外のみんなはクチバシ

テイを後にした。

分かれ道に沿ってみんなの影が見えなくなるまで手を振り続けた。全員との別れを終えたリーリエはシロンと向かい合う。そんなリーリエにククイ博士が歩み寄る。

ククイ博士「それでリーリエはこれからどうするんだ？」

その言葉聞いたリーリエはシロンと同時に声を揃えた。

リーリエ「わたくしはもちろん！」

シロン「コン!!？」

リーリエ「クチバジムに挑戦です！」

シロン「コン!!？」

新たな決意と共にリーリエとシロンは新しい一歩を踏み出した。3個目のジムバツジに向けてリーリエは思いつきり拳を上へと突き出したのであった。

## 第二十八話 VSクチバジム 怒涛の雷撃

アローラ祭が終わり。カノン達とも別の道へと向かったリーリエはその夜、明日のクチバジム戦に向けて特訓を行っていた。

リーリエ「シロン！「こなゆき」!!？」

シロン「コーン!!？」

カキ「受け止めろ！バクガメス！」

バクガメス「ガアメス!!？」

シロンの冷気をバクガメスは自慢の甲羅で防いだ。効果はいまひとつではあるが、アローラの頃と比べ物にならない威力にバクガメスは後ろへと押されてしまった。

リーリエ「パワーは十分ですね！シロン！」

シロン「コーン♪」

カキ「見ないうちに本当に強くなったな。シロン！」

バクガメス「ガアメ!!？」

驚かされたカキとバクガメスもシロンの成長を賞賛した。

二人のバトルの特訓を見ていたマオ達も見違えたリーリエとシロンに関心していた。

マオ「明日がジム戦か。アローラという大試練みたいなものなんだよね。見るの楽しみだな」

アママイコ「アーマイ!!？」

マーマネ「リーリエは今ジムバッジは二つ。明日のジム戦に勝てば三つ目だね」

トゲデマル「モギユユ!!？」

スイレン「頑張ってるね。リーリエ！精一杯応援するからね」

アシマリ「アウアウ!!？」

リーリエ「はい！頑張ります！この調子で三つ目もゲットだけ！…です」

ククイ博士「サトシの口癖がうつったみたいだな」

オーキド校長「そのようですね」

アローラの仲間達に囲まれながら、リーリエは明日のジム戦に向けてさらに気合を入れ直した。

ククイ博士「それでリーリエは明日どのポケモンで挑戦するんだ？」

マオ「リーリエの手持ちからはムクバードとコイキングは電気タイプと相性悪いよね」

スイレン「あと、ズルズキンは言うこと聞いてくれないよね…」

カキ「となると、シロンとキモリとヒノアラシで行くのか」

リーリエ「そうですね。そうなりますね」

リーリエの現段階での手持ちは6匹。その中から3体選出しなければならぬが、明日のジム戦の相手であるマチスは電気タイプのエクスパートである事は分かったたので、選出させるポケモンもほぼ決まっていた。

マーマネ「それでいいと思うよ。リーリエのキモリには地面タイプの『あなをほる』を覚えているし、マチスさんはライチュウの他にコイルも使っているようだね。コイルは鋼タイプを持っているから炎タイプのヒノアラシはうってつけだよ！」

マオ「流石は電気タイプの事はマーマネにお任せだね♪」

ロトム『リーリエ！ボクのデータでもこのパーティでの勝率は90%と出ているロトム！』

リーリエ「わかりました！よっし！」

リーリエはシロン以外の2つのモンスターボールを取り出すと、その中からキモリとヒノアラシが飛び出してきた。

リーリエ「シロン。キモリ。ヒノアラシ。明日のクチバジム戦は貴方達で立ち向かいます！よろしくお願いしますね！」

リーリエの呼び声に明日のバトルメンバーとして選ばれたシロン達も同時に気合の声を上げた。逞しいシロン達の表情にリーリエは優しく微笑みかける。

この調子なら明日のジム戦も勝利する事ができるその気持ちがりーリエの緊張感を和らげていた。

~~~~~

翌朝、朝食を終えたりーリエ達はクチバジムに到着した。最初の頃と比べて下手な緊張はしていない。絶対調のこのうえなしです。

りーリエ「たのもー!!!です」

気合の入った声と一緒に勢いよく扉を開いたりーリエはジムへと入っていく。それについてマオ達も入っていくと、自動的に扉は閉じていった。一瞬の暗転の中、マーマネが慌て出す間もなくすぐに明かりがついた。

りーリエ達の目の前にはジムリーダーマチスを慕うトレーナーが出迎えにやってきた。

案内人1「おつとチャレンジャーか！」

案内人2「お出ましですぜ！リーダーー！」

その声に応えたマチスが暗い部屋の奥から姿を現した。身長2メートルと元軍人と

して鍛え上げられた筋肉を動かしながら、リーリエ達に近づいていく。一度会っているリーリエとその姿に光輝く目を向けているスイレンの他はその迫力に圧倒されてしまっていた。

リーリエの前に着いたマチスはゆっくりと手を前に差し出した。

マチス「グッドモーニング！キュートホワイトガール！待ってたぜ！リーリエちゃん」

リーリエ「グッドモーニングです。マチスさん！今日は宜しくお願いします」

お互いに握手を交わしたリーリエはマチスの案内でバトルフィールドへと向かった。

ジムのバトルフィールドはそのジムリーダーが得意とするタイプに沿って造られているのだが、このジムはとてもシンプルな造りになっていた。

リーリエとシロンはトレーナーサイドへと立ち、マチスもジムリーダーサイドへと移動した。観戦席で見守るマオ達の中で審判によるジム戦のルールが綴られた。

審判「OK!!! だいたいより、ジムリーダーのマチスとチャレンジャーのリーリエによるクチバジム、ジム戦を開始しマース！使用ポケモンは三体！どちらかのポケモンが全て戦闘不能になりますとバトル終了となりマース！なお、ポケモンチェンジはチャレンジャーのみ認められマース！それでは、ジムリーダーのマチス！最初のポケモンをフィールドへGO!!!」

審判の合図を聞いたマチスは一つのモンスターボールを取り出した。

マチス「それじゃあ、始めようか！GO！モンスターボール!!!」

勢いよく投げ込まれたモンスターボールから一体のポケモンが放電させながらバトルフィールドへと姿を現した。

??? 「ビリリ!!?」

《観戦席》

スイレン「えっ！本当にモンスターボール！」

スイレンのボケに転げ落ちる一同。すぐにマーマネが訂正に入る。

マーマネ「違う！あれはビリリダマだよ！」

マオ「あはは…でも私あのポケモン始めて見たよ」

《ジム戦》

マチスの一体目はモンスターボールと瓜二つと言つていいほど似ているポケモン。ビリリダマだ。

『ビリリダマ ボールポケモン

電気タイプ

発電所などに現れるポケモン。モンスターボールに似ているのは保護色のためと言われているが、簡単に爆発してしまう』

リーリエ「それでしたら、わたくしは……」

ロトムからビリリダマの情報を得たリーリエも一つのモンスターボールを取り出した。
た。

リーリエ「ヒノアラシ！お願いします！」

ヒノアラシ「ヒノツ!!？」

モンスターボールから飛び出したヒノアラシはそのまま背中を炎を一気に吹き出した。
た。

マチス「Oh! いい炎だ。暑いね! ベリーホット! その熱き魂をぶつけてこい!」
リーリエ「はい!」

最初は電気タイプと炎タイプでのバトルとなった。両者のポケモンが出揃った所を
確認した審判は試合開始のコールを宣言した。

審判「それでは、バトルSTART!」

リーリエの3回目のジム戦が今始まった。

?リーリエVSマチス?

試合開始と同時にビリリダマはヒノアラシの周りを高速移動した。動き回るビリリ
ダマに焦点を合わせようとするヒノアラシであるが、ビリリダマの脅威のスピードに目
が追いついていない。目線を合わせてもすぐに見失ってしまうビリリダマの動きにヒ

ノアラシは早くも翻弄されてしまった。

《観戦席》

マオ「なんてスピードなの！」

カキ「ビリリダマって、あんなに速いポケモンなのか！」

外見から素早いイメージのないビリリダマのスピードにマオとカキは手に汗を握りながら驚いていた。

ククイ博士「ビリリダマの進化系のマルマインは全ポケモンの中でも素早さは上位にあたるポケモンだ。その進化前となるとビリリダマの素早さは全ポケモンの中でも軍を抜くぞ」

《ジム戦》

ビリリダマのスピードに戸惑うヒノアラシ。しかし、リーリエがビリリダマに対してヒノアラシを選んだのはこのスピードに対抗させるためでもあった。

いろいろなポケモンの本を読んできたリーリエにはビリリダマの素早さに関しては何知の上であった。

リーリエ「ヒノアラシ！【ニトロチャージ】です!!？」

ヒノアラシ「ヒノツ!!？」

発動するたびにスピードを上げて行くという追加効果がある【ニトロチャージ】でヒノアラシは体当たりを仕掛けた。一発目を躲したビリリダマであったが、急いで方向転換させたヒノアラシの二つ目の攻撃を躲す事が出来ずにそのまま攻撃を受けてしまった。

さらに加速して行くヒノアラシをビリリダマは目で追っていた。立場が逆になってしまった状況下で、マチスはすぐにビリリダマに攻撃の指示を送った。

マチス「ビリリダマ! 【スパーク】!!？」

ビリリダマ「ビリッ!!？」

身体から電気を放電させたビリリダマは電気を纏ったまま体当たりを仕掛けた。ヒノアラシの炎の体当たりとビリリダマの電撃の体当たりは激しい火花を散らしながらぶつかり合っている。

だが、【ニトロチャージ】は使うたびに素早さが上がる技だ。これ以上使わせる訳にはいかないマチスはここで戦法を変えるためにビリリダマを一度、後退させる。

マチス「NEXT! 【ソニックブーム】!!？」

横に高速回転するビリリダマはそのまま空気の衝撃波をヒノアラシに向かって放った。

ヒノアラシ「ヒノオオ!!!」

足を狙われたヒノアラシはその衝撃波によって宙へと飛ばされた。しかし、飛ばされながらも体勢をビリリダマの方へと向けたヒノアラシは背中の炎をもう一度勢いよく立ち上らせた。

リーリエ「頑張つて下さいヒノアラシ!」【かえんほうしゃ】です!!?」

ヒノアラシ「ヒノオオ!!?」

ビリリダマ「ビリィ!!!」

リーリエ「続けて!」【スピードスター】です!!?」

ヒノアラシ「ヒノオ!!?」

火炎放射を受けて動きが止まったビリリダマに対して、ヒノアラシはさらに「スピードスター」も畳み掛けた。ヒノアラシの連続攻撃に次々とダメージが蓄積されていく。

《観戦席》

マオ「凄い!リーリエが押してるよ!」

マーマネ「行っけー!リーリエ!!!」

見る限り流れはリーリエの方へと吹いている。風に乗ったリーリエとヒノアラシの攻撃は嵐のように巻き上げられていた。

このまま押し切れば一勝は間違いないと思われるこの場面。

カキ「だが：マチスさんはなぜ攻撃の指示を出さなくなったんだ？」

しかし、自分のポケモンがやられているのに全く指示を出さないマチスにカキは違和感を覚えていた。

《ジム戦》

怒涛の攻撃を受けたビリリダマは苦しそうに蹲っているようであった。戦闘不能まで持ってこれたと確信したリーリエは力一杯に拳を前へと突き出しながら指示を出した。

リーリエ「止めの「ニトロチャージ」です!!？」

ヒノアラシ「ヒノオ!!？」

全身の身体を炎で燃え上がらせたヒノアラシは一直線に走り出した。向かう先にいるのはビリリダマだ。ふらつくビリリダマにヒノアラシはどんどん距離を詰めていく。あと数センチの所まで近づき、技が決まりそうになったその瞬間にここでマチスは口を開いた。

マチス「ビリリダマ! 【じばく】 !!？」

ビリリダマ「ビリリリ!!」

その瞬間にビリリダマの身体が眩く光始めた。ビリリダマの懐に飛び込んで行ったヒノアラシは急に止まることが出来ずにその光にのみこまれてしまった。激しく発光

する光に視界を奪われてしまったリーリエは微かに残るヒノアラシの影を見つめるも、その直後、激しい爆発音と共に大きな衝撃波がバトルフィールド一帯に轟いた。

リーリエ「ヒノアラシ!!!」

シロン「コーン!!？」

凄まじい衝撃と突風に襲われるもリーリエは必死にヒノアラシを呼びかけた。爆煙が晴れたバトルフィールドの中央でリーリエが見たのは横倒れる二体のポケモンの姿だった。

審判「ビリリダマ！ヒノアラシ！共に戦闘不能！」

残りの体力ゲージを攻撃エネルギーに使って自身の戦闘不能を引き換えに放った捨て身の攻撃にヒノアラシは耐えることが出来なかった。

《観戦席》

マオ「じ…自爆って」

ククイ博士「まさか、こんな手を使ってくるとはなあ」

攻めきっていたリーリエの攻撃を全て無に返したその技にみんなもマチスの行動に啞然とした。

《ジム戦》

リーリエ「ごめんなさいヒノアラシ。ゆっくり休んで下さい」
戦闘不能となったヒノアラシをモンスターボールへと戻した。

ビリリダマは爆発する危険なポケモンである事は多くのトレーナーは認識している。もちろんリーリエもだ。しかし、爆発系の技を使えばそのポケモン自身も戦闘不能になってしまう技である。覚えていたとしても、余程自分が不利な状況でない限り使つてこないはずだとリーリエはその技に対してあまり警戒していなかった。

なのにマチスは自分の手持ちが一体失われるリスクを負つてきた。このタイミングでの自爆攻撃を仕掛けてきた事にリーリエは動揺してしまった。

マチス「よくやったぞ！ビリリダマ！」

当のマチスは自己犠牲であつてもその技に伝えてくれたビリリダマに感謝の言葉を述べながらモンスターボールへと戻した。

そして、すぐに審判の合図よりも先に次のポケモンを繰り出した。次に繰り出されたポケモンはマチスの最高の相棒であるあのポケモンだった。

マチス「GO！ライチュウ！！」

ライチュウ「ライイ!!？」

マチスと同じように仁王立ちを構えたライチュウはチャレンジャーであるリーリエを見つめた。クチバジムの切り札でもあるここでのライチュウの登場がさらにリーリエを焦らせる。勇ましいライチュウの表情に恐縮するリーリエは次のポケモンを選び始めた。

リーリエ「え…えっと、次は…どの子に」

シロン「コン!!？」

気持ちの整理がつかないリーリエの表情を見たシロンは自ら名乗り出た。シロンの声を聞いたリーリエはゆっくりと頷いた。

リーリエ「分かりました。シロン！お願い致します！」

シロン「コン!!？」

勢いよく飛び出したシロンは毛を逆立てては威嚇する。ライチュウもそんなシロンに対して頬の電気袋から微力な電気を放出させていた。

マチス「次はアローラのロコンか。さあ、何処からでもかかって来い！」

マチスの自身に満ち溢れた声に応えて、リーリエから攻撃が仕掛けられた。

リーリエ「シロン！【ごこえるかぜ】です!!？」

まずはライチュウの動きを鈍らせるために素早さを下げに行く。

リーリエ【ムーンフォース】!!？」

そして、そこを尽かさず威力の高い「ムーンフォース」を放った。月の神秘的な光に包まれたシロンから溢れたエネルギー砲がライチユウへと撃ち出された。

マチス「ライチユウ！【10万ボルト】!!?」

それに対してライチユウは力一杯の電撃でシロンの技と交差した。相殺されるかのように見えたが、ライチユウのパワーは桁違いの強さを誇っていた。「ムーンフォース」を破るとそのままシロンに向かって電撃が襲いかかってきたのだ。

リーリエ「か！躲してシロン!!!」

驚くリーリエはすぐにシロンに指示を出した。かろうじて躲す事ができた電撃はそのまま地面に当たると激しく爆散した。その威力はバトルフィールドに大きな穴が出るほどであった。「ムーンフォース」を打ち破ったのにも関わらないその威力がリーリエをさらに驚かせる。マチスのライチユウの強さに戸惑うリーリエに関係なしにシロンに向かって新たな攻撃が仕掛けられた。

マチス「NEXT！【アイアンテール】!!?」

アースの役割を持つ長くて鋭利な尻尾の先端を鋼のように硬質化させると、そのままシロンに向かって振り下ろされた。

リーリエ「躲して！」

シロン「コン!!?」

鞭のように攻撃してくるライチュウの技を避けたシロンはライチュウに向かって大きな口を開いた。

リーリエ「（こおりのつぶて）です!!?」

シロン「コーン!!?」

氷の弾丸をライチュウに向かって撃ち出した。空を切るそのスピードに乗った氷の弾丸は一直線に飛んで行くのだが、

ライチュウ「ラアイ!!?」

それをいとも簡単に尻尾で命中する前に一瞬にして打ち砕いた。飛び散る氷の破片が煌めく中、その煌めきと負けないほどの電撃をライチュウはシロンに向かって放った。

マチス「ライチュウ!【10万ボルト】!!?」

ライチュウ「ライチュウ!!?」

生き物のように蠕く電撃はバトルフィールドを削りながらシロンに向かって走って行く。

シロン「コオオオン!!!」

リーリエ「シロン!!!」

命中した電撃はシロンをそのまま壁際の方へと飛ばした。壁に激突したシロンは痺

れる身体を振り払いながら、痺れた足を震わせながら立ち上がった。

シロン「コオ…コ…」

リーリエ「戻って下さい！シロン！」

これ以上戦わせるといけないと判断したリーリエはシロンをモンスターボールへと戻した。

《観戦席》

不安が漂う空気は観戦席に座っているマオ達にもそれが伝わっていた。

ククイ博士「リーリエ。攻め止まっているようだな」

カキ「すぐにシロンを戻した事ですか？」

スイレン「なんで急に…最初は結構強気に攻めていたのに…」

オーキド校長「さっきのマチスさんのビリリダマによる【じぼく】の所為じゃの。マチスさんの破天荒振りの戦いを受けてリーリエ君は最初よりも慎重になってしまったみたいじゃの」

ククイ博士「ええ…その所為でリーリエのさっきまでの勢いを吹き飛ばしてしまった

んだ。流石はジムリーダー。相手のポケモンを倒すだけでなく、こんな形で挑戦者の心理を揺さぶってくるどわな」

マーマネ「リーリエはマチスさんの術中にはまっちゃったって事なんだね」

《バトルフィールド》

シロンを戻したリーリエは大きく深呼吸した。そして自分自身を落ち着かせると、ライチュウの分析に入った。

リーリエ（ライチュウの攻撃を避けつつ、少しずつダメージを与えた後、一気にスピードに乗って倒すしていくしかありません）

技を打ち破ったのに関わらず、フィールドを破壊するほどの威力からライチュウの攻撃力は力的避けるべきであること。シロンの【こごえるかぜ】の効果でライチュウの素早さは通常よりも下がっているはず。

シロンの頑張りのおかげで、その分には有利に持っていかけている事を頭に入れたリーリエは次のモンスターボールを投げた。

リーリエ「お願いします！キモリ！」

キモリ「キヤモ!!？」

登場するなり、すぐにキモリは敵意を出すライチュウに身構えた。

リーリエ「キモリ！【あなをほる】です!!?」

キモリ「キャモ!!?」

キモリはそのまま拳を床に向かって一気に振り落とした。衝撃で舞う砂埃が一瞬マチスとライチュウの視界を遮った。砂埃が晴れるとそこにキモリの姿はなく一つの大きな穴があった。ライチュウの攻撃を通さない地中から攻める戦法に出たリーリエの案。

しかし、弱点である地面タイプの技の対策が出来ていないほどジムリーダーは甘くはなかつた。

マチス「【でんじふゆう】!!?」

ライチュウ「ライ!!?」

ライチュウは自分の足の裏から帯び始めた電気で磁力を作ると、その力で自分の身体を宙へと浮かべた。

キモリ「キャモ!!?」

リーリエ「そんな!!!」

足元から攻撃を仕掛けたキモリと同じタイミングに浮上したライチュウにその攻撃

は届かなかつた。この状態ではライチュウに地面タイプの技を当てることが出来ない。技の一つを封じられたキモリにライチュウは大きく尻尾を回し始めるとキモリに向かつて叩きつけた。

マチス「【アイアンテール】!!?」

ライチュウ「ライイ!!?」

ライチュウの攻撃を躲したキモリであったが、鞭のように動かすライチュウの尻尾は軌道を変えると、再びキモリに攻撃を仕掛けた。

キモリ「キヤモ!!!」

見切れなかつたキモリは鋼のように硬い尻尾に打たれると、そのまま地面へと叩きつけられてしまった。

リーリエ「頑張って下さいキモリ! 【エナジーボール】です!!?」

すぐに起き上がったキモリは【エナジーボール】を放った。翡翠色に輝くエネルギー砲を前に力に自信があつたライチュウは電気を電気袋へと貯め始めた。

マチス「ライチュウ! 【10万ボルト】!!?」

強烈な電撃が放たれると、【エナジーボール】を打ち消しながらキモリへと迫って行った。

リーリエ「キモリ! 【でんこうせっか】でライチュウを攪乱するのです!」

キモリのスピードを利用して、ライチュウの電撃攻撃を躲すと、電光石火でライチュウの周りを走り始めた。キモリのスピードに翻弄されたライチュウに対して、キモリは四方八方から体当たりを仕掛けた。

リーリエ（やった…これなら少しずつですがダメージを与えることが出来ます。）

キモリのスピードに手も足も出ないようなライチュウに次々とキモリの電光石火が決まって行くのに安堵するリーリエであったが、その油断が次なる不幸を招いた。

キモリ「キャ…モ…」

リーリエ「えっ…どうしたのですか？キモリ！」

突然キモリの動きが鈍くなった事にリーリエはある事を思い出したかのようにして、思わず声を上げてしまった。

リーリエ「ああ…そうでした！」

電気タイプのライチュウの特性。その注意がなかった。

《観戦席》

マオ「キモリどうしちゃったの！」

アママイコ「アーマイ?!？」

リーリエが途中から思い出した事も踏まえて、ククイ博士がみんなに説明を始めた。

ククイ博士「カントーのライチュウの特性は《せいでんき》なんだ。《せいでんき》は

ほとんどの電気タイプのポケモンが持っている特性であって、物理攻撃を仕掛けたそのポケモンを麻痺状態にしてしまうんだ」

《せいでんき》による物である事はわかった。しかし、それ以前に驚いたのはまた別の事だった。

スイレン「リーリエらしくない。リーリエならカントーのライチュウの特性についてだつて知つてたはずなのに…」

アシマリ「アウアウ!!?」

カキ「くっ…焦り始めているからだ。落ち着け!リーリエ!!!」

バクガメス「ガアメ!!?」

ガラガラ「ガアラガラ!!?」

ポケモンの知識が豊富な彼女ならライチュウの特性にだつて知つていたはずだ。しかし、ピンチな状況がリーリエに冷静さを失わせ、思考の範囲を狭わしてしまつたのだ。一度、思考が鈍るとミスは連鎖していく。ポケモンバトルの恐ろしさの一つをいま、リーリエは体験してしまつているのだ。

《ジム戦》

リーリエ「いつ…一体どうしたら…」

自分の失態が悔やまれる。スカート裾を固く握り締めながら歯を食いしばる。気持ちに押しつぶされそうになるリーリエを見たキモリは会場全体に響き渡るようか雄叫びを上げた。

キモリ「キヤモ!!？」

ライチュウ「ラアイ？」

キモリ「キヤアアモモ!!!」

リーリエ「キモリ…」

自分の主人に喝を入れたのか。それとも、気合を入れ直したのか。分からないけど、そのキモリの行動がリーリエの力になった。両頬を自分の掌で軽く叩いたリーリエはキモリ視線を合わせた。

マチス「ん〜！ガッツあるじゃねえか！」

キモリの行動に試合中でありながらも、思わず拍手をしてしまうほど感心してしまった。キモリの強気にさらに闘志を燃やすライチュウ。リーリエとキモリはゆっくりと領くと早くも次の攻撃へと移った。

リーリエ「キモリ！もう一度【あなをほる】です!!？」

キモリ「キヤモ!!？」

マチス「残念だが、その技は喰らわなげ！ライチュウ！【でんじふゆう】!!？」

ライチュウ「ライ!!?」

さつきと同じ手でキモリの攻撃を躲すライチュウの足元から瓦礫が一気に砂埃と一緒に飛び出した。キモリの登場を見計らってライチュウはもう一度、自分の尻尾を前に突き出した。キモリの姿を捕らえようとする、そのキモリは穴の中から翡翠色のエネルギー砲を形成し始めていた。これはニビジムでゼロウのイシツブテに倒した時と同じ戦法なのだ。

リーリエ「【エネルギーボール】!!?」

キモリ「キャモ!!?」

ライチュウ「ラアイ!!!」

マチス「OH!!!」

放たれた【エネルギーボール】はライチュウへと命中した。浮上していたライチュウにダメージが入ると磁力が解けては地面へと倒れ込んでしまった。

リーリエ「もう一度、【あなをほる】!!?」

攻撃の手をやめないキモリは再び穴を掘って身を隠した。その行動にマチスはライチュウに指示を出す。

マチス「ライチュウ!穴に向かって【10万ボルト】だ!!?」

ライチュウは電気袋を貯めると、すぐに電撃を撃ち込む体勢に入った。すると、その

背後から掘り進んでいたキモリが一気に飛び出してきた。

リーリエ「そこです！【はたく】攻撃!!?」

キモリ「キャモ!!?」

背後を取ったキモリはすぐにライチュウに向かって尻尾で攻撃に入った。ライチュウの後ろを取った事にリーリエとキモリは手応えを感じた。だが、キモリの攻撃が当たる直前にライチュウも自分の尻尾を大きく回し始めた。

マチス「捕まえろ！」

ライチュウ「ライ!!?」

すると、ライチュウは長い尻尾を利用して向かってくるキモリをガツチリと拘束したのだ。

キモリ「キャモ!!?」

予想外の攻撃の防ぎようにキモリは方向転換する事が出来なかった。

リーリエ「キモリ！振りほどいて下さい！」

慌ててリーリエも指示を送るが、がっしりと巻きついているライチュウの尻尾から必死に逃れようとするものの、脱出する事ができないでいた。マチスはゆつくりと右腕を天を仰ぐようにして伸ばすと、そのままライチュウにとどめの一撃の指令を送った。

マチス「ライチュウ！【かみなり】だ!!?」

ライチユウ「ラアイチユウ!!?」

ライチユウの雄叫びと一緒に発生した磁場によって雷雲を呼び起こした。雷鳴を轟かせながらキモリとライチユウの上へと膨張していく雷雲はそのまま雷を突き落とした。

キモリ「キヤモモ!!!」

リーリエ「キモリ!!!」

アースの役割を果たすライチユウの尻尾に向かって落ちた雷はキモリを直撃した。バトルフィールドを光り輝かせるその雷に視界が奪われてしまった。

雷が止んで目を開けた直後リーリエが見たのはライチユウの前へで痺れ動けなくなっているキモリの姿だった。

審判「キモリ戦闘不能!ライチユウの勝ち!」

草タイプのキモリであったが、ライチユウのパワーを耐える事ができなかった。リーリエはキモリをモンスターボールへと戻した。

リーリエ「戻って下さいキモリ。ありがとうございました。ゆっくり休んでください」

キモリが倒れてしまった事により、リーリエの手持ちはシロンのみとなってしまう。リーリエの額からは少しずつ汗が流れ始めていた。リーリエはマチスのライチユ

ウの圧倒的な強さを前に思わず尻込みしてしまっていた。

《観戦席》

マーマネ「キモリ…やられちゃった」

カキ「後はシロンだけか。マチスさんにはライチュウを含めて後二体いる。」

ジムリーダーの怒涛の戦法に弱気な発言が出てしまうのも仕方がない。心配になる故に自然と口が閉じてしまっているみんなを見てスイレンはその場に立ち上がった。

スイレン「でも！まだ負けたわけじゃないよ！ポケモンバトルは最後までどうなるかわからないんだからさ！」

スイレンの声を聞いたマオも一緒になって立ち上がった。

マオ「スイレンの言う通りだよ！まだ終わってない！さあ、私達も名一杯応援するよ！」

マーマネ「うん！」

カキ「だな！」

後から続いてマーマネとカキも立ち上がった。そして全員の声を合わせて、めい一杯の声でリーリエにエールを送った。

「「「頑張れ！リーリエ！！」」」

《ジム戦》

リーリエ「みなさん」

マチス「いいフレンド達じゃねえか！なあライチュウ」

ライチュウ「ライイ!!？」

マオ達からの声援はもちろんリーリエに届いていた。勇気をもたらったリーリエはモンスターボールからシロン出現させた。

モンスターボールから出てきたシロンの目を見てリーリエは驚いた。全く迷いが無い目。諦めている者の目ではなかった。その目を見たリーリエは固い決意と一緒にシロンにゆつくりと頷いた。

リーリエ「シロン！ここから厳しくなっていくますが頑張りましょう！貴方の力をマチスさんに見せるのです！」

シロン「コーン!!？」

力一杯に吠えるシロンはそのままバトルフィールドへと向かった。汗を拭いたリーリエも深呼吸を入れてからすぐにマチスとライチュウと向かいあった。

それを見たマチスも自然と笑みが浮かんでいた。

マチス「OK！行こうかりーリエちゃん。FINALROUNDだ！」

りーリエ「まだ最後ではありません。諦めたりしません！わたくしたちは絶対に勝ちます！」

シロン「コン!!？」

それぞれの意気込みが語った所で試合は再開された。空かさず動いたのはマチスのライチュウだった。

マチス「ライチュウ！【10万ボルト】だ!!？」

ライチュウ「ラーイ!!？」

十八番の【10万ボルト】がシロンに再び襲いかかった。怒涛の雷鳴を響かせながら向かってくる技にりーリエとシロンを逃げる事はなかった。逃げるどころかシロンは自分の体を回転させ始めた。その動きに思わず眉間にシワを浮かべるマチス。そのシロンの不思議な行動はさらにマチスを驚かせた。

りーリエ「シロン！【こなゆき】!!？カウンターシールドです！」

回転しながら放った冷氣はシロンを囲みながら放たれた。遠心力が加わって通常よりもパワーが上がったシロンの【こなゆき】はシロンを守るバリアーとなり、ライチュウの電撃から身を守った。さらにそれだけではなく、そのままシロンの冷氣はライチュウ

の電撃を押さえるのと同時にライチュウへと攻撃が決まった。防御をしながら攻撃を決める。それがこのカウンターシールドの特徴だ。旅立つ前にタケシにこの戦法を教わったのが正解だったみたいだ。

マチス「おお！アンビリバーボ!!!」

奇想天外な攻撃にマチスは両手で頭を抱えた。同じくシロンの攻撃に驚いているライチュウも少し慌てている様子であった。リズムのテンポを崩す事が出来たリーリエはさらに攻撃の指示をシロンに伝えた。

リーリエ「次は【こおりのつぶて】!!？」

シロン「コーン!!？」

ライチュウ「ラーイ!!!」

バリアーを解いたシロンはそのまま氷の弾丸を撃ち込んだ。【こおりのつぶて】がライチュウの腹部に直撃すると、そのままライチュウは後ろへと後退した。

ライチュウ「ライ!!？」

しかし、シロンの攻撃を受けながらも、ライチュウは尻尾を使ってシロンをはたき出した。

リーリエ「シロン!!!」

飛ばされるシロンであったが、体勢を整えて倒れる事なく踏ん張ると、そのままライ

チュウに向かって全力ダツシユをした。

ライチュウ「ライチュウ!!？」

マチス「何だと!!!」

捨て身の根性でライチュウの懐へと入ったシロンはさらに攻撃の体勢へと入った。

リーリエ「シロン!【ムーンフォース】!!？」

シロン「コーン!!？」

またもや技が命中すると、ライチュウは後ろの方へと吹き飛ばされしまった。なんとか踏みとどまったのだが、足元が蹠跟めいて来ている様子でいた。圧倒的な力を見せてきたとはいえ、察しのライチュウにも限界が近づいていた。今までに貯めてきた体へのダメージがここにきてリーリエ達にチャンスを与えた。

リーリエ「今ですシロン!【こなゆき】!!？」

シロン「コーン!!？」

吹雪に該当するほどの猛烈な冷気を放ったシロン。力を振り絞って放たれた冷気はライチュウへと向かっていく。

しかし、マチスも負けてはいられなかった。会場全体に響き渡るような声を振り絞った。

マチス「ライチュウ!【10万ボルト】!!？」

マチスの声を聞いたライチユウも今持てる力を振り絞って、電撃を放った。

両者の技がぶつかり合うとそのまま押し合いに発展した。今まではどの技も蹴散らしていたライチユウの「10万ボルト」であったが、最初に比べて明らかにパワーダウンしているのか、シロンの猛烈な「こなゆき」に対して抑えるのに精一杯の様子であった。

リーリエ「頑張って！シロン!!!」

マチス「負けるな！根性を見せろ！ライチユウ!!？」

自身のパートナーの応援に応えようと、二体は一步も引き下がらなかつた。押されては押し返すのが繰り返されてが二体の体力ゲージを減らしていく。辛い表情を浮かべながらも根性で立ち向かっていく。気力だけで体を支えている中、決着の時が近づいてきた。

ライチユウ「ラアアアイ

!!!!!!

」

マチスに負けないぐらいの雄叫びを上げると、さらに電撃の威力を高めてきた。火事場の馬鹿力が加わった電撃はついにシロンの冷気を振り払った。

そして…

シロン「コーン!!!」

ライチュウの電撃に飲み込まれたシロンはそのまま後ろの壁へと激突されてしまった。

シロン「コオ…」

痺れた体をうまく動かす事が出来ないままシロンはライチュウへと一点に見つめていた。足元がおぼつかず、静電気が体を蝕んでいく。

しかし倒れそうになりながらも、シロンは根性でバトルフィールドの方へと歩いて行った。

リーリエ「ありがとう…シロン」
シロン「コ…オン…」

気がつくと、シロンはリーリエに抱きかかえられていた。さっきまで自分の足で歩いていたのにと錯覚する意識と困惑されるが、全く動けない自分の体への感覚を受け止めたシロンは全てを理解した。

涙ぐむリーリエの表情に安心したのか、疲れが溜まったシロンはそのまま眠りについた。

審判「ロコン戦闘不能！ライチュウの勝ち！

よってWINNERジムリーダー、マチス！」

勝敗が決まった。事務を終えたライチュウの頭をマチスは優しく撫で始めた。

マチス「よくやったな。ライチュウ」

ライチュウ「ライ!!？」

疲れが溜まったのはライチュウをマチスはモンスターボールへと戻した。

シロン抱えたリーリエも涙を拭うと、そのままマチスに向かって一礼をした。

リーリエ「マチスさん！ありがとうございます！」

リーリエの言葉に合図を送ったマチスはそのままたルフィールドを跡にした。マチスが奥の部屋へと消えていった後でも、リーリエはその場を動けずにいた。

試合が終わって観戦席から降りてきたマオ達もリーリエにかける言葉を失っていた。

ククイ博士「こうゆう時もあるさ。トントンの拍子に勝ち進んで行けるほど、ジム戦と

「いうのは甘くはない」

ククイ博士の言葉が現実を通す。ジムはポケモンリーグへの登竜門。ポケモン協会が認めたプロのトレーナーとのバトルだ。簡単に勝てるものではない。

だけど、それが分かかっていても悔しいものは悔しい。こみ上げてくる涙を引っ込めようとシロンに顔を埋めながらも、リーリエは必死に自分の気持ちを押しさえつけていた。

第二十九話 再スタート

クチバジムから飛び出したリーリエは傷ついたシロンを抱えながら急いでポケモンセンターへと駆け出した。美しい白い毛並みが焦げた痕のように黒ずんでボロボロになっっているシロンは初めて見た。痺れが取れずにシロンの白い体毛から流れる静電気がリーリエの体を刺す。そんな痛みを感覚神経から脳へと伝達されているはずだが、リーリエの頭の中はそんな情報を受け取っていない。いまはシロンや他のポケモン達を一刻も早く治療させなければならぬ事で一杯だからだ。立ち止まる事なくポケモンセンターまで全力疾走したリーリエはすぐにシロン達をジョーイさんに任せた。

ジョーイ「お待ちせしました。お預かりしたポケモン達はみんな元気になりましたよ」

リーリエ「ありがとうございます。ジョーイさん」

シロン達の回復が終わる頃にはすっかり日が沈んでいた。それと同じようにモンスターボールから出て来たシロン達の表情も沈んでいた。

シロン「……」

キモリ「……」

ヒノアラシ「……」

バトルに負けてしまった事に肩を落とす三体にリーリエは軽く手を叩くと皆の目をリーリエの方へと向けた。

リーリエ「そんなに落ち込まないで下さい。また修行を積んで再挑戦すればいいのです。」

次こそは絶対に勝ちましょう！」

マオ「リーリエは大丈夫？」

無理に笑い繕っているのではないかと心配していたマオであったが、振り向いたリーリエのその顔には落ち込んでいる様子があった。

リーリエ「負けてしまった事に対しては勿論悔しかったです。ですが、今回の敗北は決して無駄ではありません。今回は私もマチスさんとライチュウの力に萎縮してしまつた事にも原因がありました。次はそうならないようにポケモン達と一緒に研鑽して行くまでです！そして、次は必ずクチバジムを攻略してみせます！」

その言葉にシロン達も顔を上げた。自分たちのトレーナーが気持ちに押し負ける事なく目標を蚊がけて前へと見る。その姿にさつきまで落ち込んでいたキモリ達の曇っ

た表情が消えていた。リーリエの前向きさに影響されたキモリとヒノアラシも合図を送った。

キモリ達の返事に応えると、奥から他のみんなもリーリエへと近づいて行つた。

スイレン「そうだよ！リーリエ！」

カキ「俺たちも出来ることがあつたら協力させてくれ！」

マーマネ「こういう時こそ、僕たちに頼つてよね♪」

ロトム『持つべきは仲間ロト！』

アローラのみんなもリーリエに励ましの言葉をかけた。その言葉を聞いて嬉しかったリーリエは満面の笑みで皆んなにお礼をした。

リーリエ「ありがとうございます。みなさん！」

そんなリーリエの表情を見たククイ博士とオーキド校長の心配の種もすっかり消え去つて行つた。

オーキド校長「どうやら、心配は要らなかつたようですね。ククイ博士」

ククイ博士「ええ、リーリエは強い子です。なんとたつて俺の教え子ですから」

元氣を出したところで、リーリエ達は食堂へと向かつた。

シロン「……………」

しかし、シロンだけはまだその曇つた表情がまだ消えていなかつた。

~~~~~

リーリエ「シロン！何処ですの！シロン!!!」

翌朝、ヤマブキシテイで連絡を取っていたジエームズからルザミーネの容態を聞いていたリーリエは一度顔を見せにと、マサラタウンのオーキド研究所へと戻ろうとしていた。しかし、その出発の日の朝にリーリエの目の前からシロンが姿を消してしまったのだ。

マオ「見つかった？」

スイレン「ダメ…」

マーマネ「こつちもだよ」

ロトム『ダメだ。シロンの気配も感知できないロト…』

カキ「何処いったんだ。シロン」

別々に探したみんなと合流するものの、シロンを見つけた者はいなかった。

リーリエ「ムクバード！シロンは見つかりましたか？」

ムクバード「ムク…」

カキ「リザードンはどうだった？」

リザードン「グウオ…」

空から探しに出たムクバードとリザードンにも聞くが、二体とも同じように首を横へと振った。

ククイ博士「どうやらスランプしてしまったのはシロンの方だったみたいだな」

オーキド校長「ここは二手に分かれて探した方が宜しいですな！」

もう一度、二手に分かれて搜索しようとした。その時…

???「ジュラ？」

一体のポケモンがリーリエ達の方へと近づいて来た。突然現れたそのポケモンに驚くリーリエ達であったが、そのポケモンは何かを抱えているように見えた。すると、リーリエはその正体がわかるとすぐにそのポケモンの方へと近づいて行った。

リーリエ「あつ！シロン!!!」

シロンはそのポケモンの腕の中で眠っていた。リーリエに続いて他のみんなもシロ

ンの方へと向かった。

『ルージユラ ひとがたポケモン

氷・エスパータイプ

腰を振るようにして歩いてる。油断すると釣られて人も思わず踊ってしまうほど軽やかだ』

シロンを抱きかかえるようにしてリーリエ達の前に現れたのはルージユラだった。スキャンしたロトムはすぐにルージユラのデータをアップロードした。

ククイ博士「だが、ルージユラは寒い地方に生息するポケモンだ。それが何故？」

ククイ博士の言う通りでルージュラは主に寒い地域に生息しているポケモンであつて、街外れにいる事自体珍しいポケモンであつた。

リーリエ「ルージュラ！その子はわたくしの大切な友達なんです！」

ルージュラ「ジュラ!!？」

リーリエの言葉を聞いたルージュラは長く伸ばした銀髪をリーリエのおでこへと押し当て始めた。そして、同じようにシロンのおでこにも当てると目を閉じては瞑想に入った。

カキ「何だあれ？」

オーキド校長「おそらく二人の記憶を辿っているようじゃの。」

ルージュラはサイコパワーを使ってリーリエとシロンの記憶のページをめくり始めた。リーリエとシロンとの出会いまで二人の絆をまとめた集を見通すとルージュラは納得したように頷くと眠っているシロンをリーリエと渡した。

リーリエ「ありがとうございます。ルージュラ」

シロン「コーン……」

ルージュラにお礼を言うリーリエの声に気づいたシロンはぼやける視界の中、リーリエの顔の方へと見上げた。

リーリエ「シロン！もう心配かけて！」

眠りから覚めたシロンをリーリエは固く抱きしめた。その様子を見たマオ達も急いでリーリエの元へと駆け寄った。どこも怪我をしていないシロンの様子に安心する一同の前に一人の人物が歩み寄ってきた。

??? 「ルージユラ! その子のパートナーは見つかったの?」  
ルージユラ 「ジユラ!!?」

その主の声に応えたルージユラはそのままその人物の方へと向かっていく。それを見たと同時にみんなの疑問が一気に解消された。野生のポケモンではないと分かった以上、その人物はルージユラのトレーナーであることが分かった。

すぐにリーリエはその人物の方へと駆け寄って行った。

リーリエ 「シロン: わたくしのロコンを見つけて頂きありがとうございます!」

??? 「いえ: 私は特には。無事にトレーナーの元へ帰れて良かったわね。シロンちゃん」

シロン 「コン!!?」

深々と礼をするリーリエの前にもう一人の人物が茂みの掻き分けてやってきた。キテルグマに間違えそうな見覚えのある体型をした男性はリーリエを見つけると軽く手を上へと挙げた。

マチス 「HEY! もしやっと思ったがやっぱりか」

リーリエ「マチスさん!!!」

こんなにも早く再開する突然のマチスの登場にリーリエは驚いた。

マチス「ここでもばったりとカンナさんと会ったもんで挨拶しにと行ったら、白いロコンを抱えていたもんだから、もしかしてと思ったがびっくりしたぜ!」

大らかに笑いながら彼女の名を口にしたマチスの言葉にククイ博士とオーキド校長は互いに顔を見合わせた。驚いている二人にリーリエ達は何のことだか分からないままククイ博士はルージュラのトレーナーの前へと立った。

ククイ博士「カンナさん…もしかして貴方は四天王のカンナさんでは?」

マーマネ「四天王?」

マオ「何ですか。それ?」

四天王とは各地方にいるチャンピオンと同等の実力を誇る4名のトレーナーの事である。ジムリーダーと同じように得意とするエキスパートがあり、ポケモンリーグのチャンピオンがチャンピオントレーナーと戦う前に立ちはだかる登竜門となっている。ククイ博士「つまりカンナさんはここカントー地方でチャンピオンを含めた最も強い四人のトレーナーの内の一人って訳だ」

カンナ「そんな、大それた事ではありませんわ。それよりもこの子を無事にトレーナーさんの元へと帰せてよかったですわ」

謙遜しながらカンナは優しい目でシロンを見つめた。すると、その視線に感じたようにシロンはゆっくりと目を覚ました。目を覚ましたシロンを見たリーリエの腕に力が入った。どこも怪我はないことを確認した後、リーリエはシロンを自分の目線に合わせるようにして抱きかかえた。

リーリエ「シロン。何故、飛び出してしまったのですか？」

シロン「コーン……」

シロンはリーリエの顔を見るなり不安げな表情を浮かべてしまっていた。そんな答えにくそうにしているシロンの頭をカンナは撫で始めた。

カンナ「私が見つけた時はその子。一人で特訓をしていたわ」

リーリエ「特訓ですか……」

それを聞いたリーリエはシロンの考えていることが理解できた。

リーリエ「悔しかったのですね。シロン」

初めての敗北。それはリーリエの頑張りに応えられなかった事になる。その悔しい気持ちを抱えてしまったシロンに気づいてあげられなかった自分をリーリエは悔いってしまった。

リーリエ「貴方の気持ちを分かっていた気でいたようです。ごめんねシロン……」

シロンの頭を優しく撫でると、囁き声でシロンに謝った。そんなリーリエの頬にシロ

ンは舌で舐めると、リーリエはシロンの頬に自分の頬を合わせるようにして擦り合わせた。そんな二人の幸せそうな表情を見た一同も不思議と笑みが溢れていた。

ルージュラ「ジュラ!!？」

カンナ「貴方が珍しいわね。あの子が気になるのね」

ルージュラ「ジュラ!!？」

突然カンナに訴え出したルージュラにリーリエ達は首をかしげた。自身のポケモンであるルージュラの気持ちをカンナはすぐに理解すると、リーリエの方へと歩いていった。

カンナ「リーリエちゃん…だったかしら。もしよかったら私達でよかったら、シロンちゃんのバトルを見てあげましょうか？」

リーリエ「シロンをですか？」

カンナ「ルージュラが見てあげたいってね。もし良かったら話だけど…」

カンナのその発言に少し驚いているリーリエの肩をククイ博士は軽く手を置いた。

ククイ博士「折角だから見て貰ったらどうだリーリエ。四天王に付き合つて貰うなんて滅多にない事だぞ」

ククイ博士の言葉にリーリエとシロンの顔つきが一気に変わった。カントー最強のポケモントレーナーの一人でもあるその人物にバトルを教える。断る理由なんて

なかった。

リーリエ「よろしくお願いします!」

シロン「コーン!!?」

~~~~~

カンナ「こちらは大丈夫よ」

リーリエ「はい!」

リーリエ達はもう少し歩いた先にある大草原へと移動していた。本来ならポケモンセンターのバトル施設で行ないたかったのだが、四天王のカンナが訪れたとなれば、多くのギャラリーがカンナの元へと集まってくるのは予想が出来ている。

多くの人達が注目している中ではリーリエとシロンも落ち着いた稽古をつけてあげられる事が出来ない。なので、この離れで行なう事にした。幸いにも周りには野生ポケ

モンはいないようだ。

リーリエ「シロン！【こなゆき】！！？」

シロン「コーン！！？」

シロンの放った冷気は一直線にルージュラへと放たれた。しかし、ルージュラは躲す素振りを見せずに両手を前へと差し出した。シロンの粉雪を受け止めると、一気にそのパワーをかつ消した。

カンナ「パワーはなかなかね」

シロンのパワーに関心していると、すぐにリーリエは他の技をシロンに指示を出した。

リーリエ「次は【ムーンフォース】です！！？」

リーリエの指示を聞いたシロンは高く飛び跳ねると、月のエネルギーを蓄えたパワーを放った。

カンナ「ルージュラ！【れいとうパンチ】！！？」

迫る【ムーンフォース】に対して、ルージュラは冷気を纏わせた拳を叩きつけた。互いのパワーは相殺されて爆煙が生じた。ルージュラの様子を伺うリーリエとシロンの前にはダメージを諸共しないルージュラが平然と立っていた。その優雅な姿にリーリエとシロンは思わず足を引いてしまった。

シロンの実力を大体引き出す事が出来たカンナは今度はこっちから攻撃を仕掛けてみる事にした。

カンナ「ルージュラ! 【サイコキネシス】!!?」

ルージュラのサイコパワーにより金色に光る髪が生き物かのように蠢き始めた。パワーが溜まりきったサイコパワーはそのままシロンに向かって放たれた。青白く光る光線を前にすぐにリーリエは指示を出す。

リーリエ「シロン! カウンターシールドで防御です!」

シロン「コン!!?」

迫る【サイコキネシス】をシロンはカウンターシールドで対抗する。しかし、四天王が育てたポケモンの力は伊達ではなかった。押し返すどころか防ぎきれなかったシロンはそのまま吹き飛ばされてしまった。

シロン「コーン!!!」

リーリエ「シロン!!!」

飛ばされたシロンへとリーリエはすぐに駆け寄った。シロンには大したダメージは無く、問題なく起き上がるとリーリエの腕へと寄り添った。練習に付き合ってくれたルージュラと共にカンナはリーリエの方へと歩み寄る。

カンナ「パワーの方は申し分ないわ。それに攻撃を防御に補う戦法も素晴らしかった

わ。少しだけだけど、良く育てられているわ」

リーリエ「ありがとうございます！褒められましたよシロン」

四天王に褒められた事にリーリエとシロンは太陽のような笑顔で喜んだ。そんなリーリエの元へとマオ達も駆け寄った。

マネ「うん！この短期間でシロンは本当に強くなっているのは私達も感じてるよ」

スイレン「リーリエ達がカントーに出発した日と比べて見違えてたもん」

強くなったシロンにマオとスイレンもそれぞれの感想を述べ始めた。マオ達の言葉にカントーに上陸してからこれまでいろいろな経験して来た事が十分に力の糧になっている事をリーリエとシロンは改めてそれを感じた。

しかし、強くはなっているがこれ以上に強くなる方法はあるのか。その議題に少し頭を悩ませる様子を見たカンナはある一つの質問をリーリエ達に聞いてみる事にした。

カンナ「ポケモンを強くさせるにはみんなは何をしたらいいと思う？」

カンナの質問にリーリエ達は一斉になって考え始めた。

カキ「もつと強くさせるには…やっぱりもつといるんなトレーナーとバトルさせるのが一番か？」

ロトム『それか新しい技を取得させるのも一つの手であるロトよ！』

マーマネ「それか…進化だね」

各々思つた事を口に揃えて自分の答えを言い始めた。そして、マーマネの解答にリーリエは何かを思い出したかのように、自分のバック探り始めた。

リーリエ「進化…」

シロン「コン…」

何かを見つけたリーリエはそれをバックの中から取り出した。

オーキド校長「おや？リーリエ君。それはもしや」

リーリエの手に握られているのは涼やかな水色の光を纏うまるで氷のような石だった。

それはかつてラナキラマウンテンの洞窟で手に入れた物だった。

リーリエ「はい。こおりのいしです」

カンナ「アローラのロコンをキュウコンへと進化させる石ね」

リーリエ「はい」

あれからシロンに使わずバックの奥へと眠っていた氷の石を見てわ進化という単語がリーリエの脳裏を過つていく。少し戸惑いながらも氷の石をシロンの前へと差し出した。

リーリエ「シロン。貴方はどうです？」

シロン「コン…」

氷の石を前にシロンは少し困り果てた顔を浮かべていた。手にした時も一緒だった。自分の姿が変わる事が怖いのか。シロンは進化をあまり望んでいなかった。だからリーリエはあの日から氷の石を取り出すことはなかったのだ。それにリーリエ自身もこの氷の石を使う事を少し拒んでいる事も確かだ。

リーリエ「シロン。わたくしの正直な事を言ってもいいかな」

シロン「コン？」

リーリエ「わたくしは強くなるためという理由で貴方を進化させたくはありません。進化をすればステータス等が上がるのは確かですが、一度進化させてしまったら、元にも戻りません。貴方が姿形が変わってしまうのが怖いのはわたくしは知っています。しかし、それはあくまでわたくしの思考です。貴方が進化を望んでいるのならわたくしは貴方の意志に任せようと思っています」

リーリエの言葉にシロンは何を浮かべたのか分からないが、恐る恐ると氷の石へと近づいて行った。しかし、眺めるだけで触れようとはしなかった。その様子にリーリエだけでなくマオ達も不安げであった。一刻の沈黙の中でマチスはリーリエの元へと向かった。

マチス「石での進化はレベルアップで進化させるとは違う意味である事は分かっていた方がいいぜ」

リーリエ「え？」

マチスの言葉にリーリエとシロンは振り向いた。そして、相棒のライチュウの頭を撫で始めた。

マチス「俺のライチュウはこいつがまだピカチュウだった頃にトキワの森で捕まえたポケモンなんだ。そして、俺はゲットしたこいつを直ぐにかみなりの石で進化をさせたんだ」

マーマネ「すぐに？」

マチス「進化をすればポケモンはより強くなると思っていたからだ。案の定、俺とライチュウは幾多の挑戦者達を返り討ちにしてやったぜ」

ライチュウ「ラーイ♪」

マチス「BUT：だけど、ある挑戦者との出会った事で俺は強さは進化が全てじゃないと思ひ知らされたんだぜ」

気持ちよさそうにマチスに合図をしたライチュウ。そして、撫でる手を引つ込めると真剣な目つきで話を進め始めた。

マチス「その挑戦者は俺のライチュウの進化前のピカチュウを連れて挑戦しに来やがったんだ。生意気なベイビーだった。勿論、この試合は俺のライチュウの圧勝だった。もう二度とクチバジムに挑戦しに来れなくなるほどのトラウマを植え付けたぐら

いに負かしてやったんだ」

カキ「それで…その挑戦者は？」

マチス「驚いた。そいつはその翌朝にまた再チャレンジしに来たんだ。しかもピカチュウのままだ。そしたら直ぐに進化させたライチュウの欠点を逆手に取ってだな」

マチスはあの日の事を思い出すとたまげた様な表情で大きく手を横に広げた。

マチス「俺のライチュウはピカチュウの時に覚えられていたスピード技術を十分に身につけさせないまま進化せちまったんだ。つまり、俺のライチュウは他よりも素早さに欠けちまっているって事だ。ピカチュウを連れたそのベイビーはピカチュウの武器である素早さを生かして見事に俺のライチュウに勝っちまいやったんだ！」

その経験がマチスが思う強さというものをひっくり返した。それ以来、マチスはライチュウにスピードで補えられなかった分を攻撃力と防御力でカバーして行く戦法に変えてきた。元からの素早さのステータスを考えるとスピードを捨てる案は惜しいと思うが、今でもマチスはクチバジムのジムリーダーとしての実力を轟かしている。

それにその戦法にたどり着けとのもマチスがライチュウの事を強く信じていたのも一つだろう。出なければ、他のライチュウとは違うバトルスタイルを作る事も出来なかったと思っただからだ。二人の絆の強さにリーリエとシロンは強さとは何か…少しわかったかもしれない。

カンナ「レベルアップとは違って石で進化させる事は能力値が上がるだけで、努力値が上がる訳ではないわ。進化させようがさせまいが、その分に経験や力をトレーナーとポケモンが一緒になって強くなつていくのは変わりないわ。経験。力。そして進化。どれも強くなる事に対して間違いでないわ。でもね。私は強くなるために一番大切な事は信頼関係にあると考えているわ」

カンナは再びリーリエの方へと振り返ると、再度リーリエに質問した。

カンナ「リーリエさん。貴方が今手にしているバッジは貴方の力で勝ち取った物？」
その問いに対する答えは考える間もなかった。リーリエは首を横に振ると、シロンを抱き抱えたまま立ち上がった。

リーリエ「いいえ。シロンやわたくしのポケモン達が頑張ってくれたお陰です」

カンナ「そう。」

その答えにカンナは微笑んだ。答えが済んだ所で、もう一度稽古をつけて貰おうとリーリエの足がカンナの方へ一歩踏み出したその直後、突然の爆発と共に二人の影がリーリエ達の前へと立ちはだかる。

スイレン「何！なんなの？」

ヤマト「なんだかんだと聞かれたら」

コサブロウ「答えないのが普通だが」

二人「まあ！特別に答えてやろう」

ヤマト「地球の破壊を防ぐため」

コサブロウ「地球の平和を守るため」

ヤマト「愛と切実な悪を貫く」

コサブロウ「キュートでお茶目な敵役」

ヤマト「ヤマト！」

コサブロウ「コサブロウ！」

ヤマト「宇宙を駆けるロケット団の二人には」

コサブロウ「シヨッキンキング桃色の明日が待ってるぜ」

ツボツボ「ボツツ!!？」

リーリエ達の目の前に現れたのはコイキングと出会った湖以来の登場となるあの二人だった。リーリエはすぐにその二人を睨みつけた。

リーリエ「ヤマトにコサブロウ！何しに来たのですか!!？」

コサブロウ「違あう！コサンジだつて…いや、当たってるな」

思わず条件反射的に否定し始めたコサブロウはその口を閉じると、ヤマト共にモンスターボールを取り出した。

マオ「他にもロケット団がいるのね！」

ロケット団と対峙するのは初めてではないマオ達もリーリエと一緒に身構えた。

ヤマト「メンバーは変わっているみたいだけど、ジムリーダーに四天王もいるなんてね。ゲットのチャンスよ！行くわよ！コサンジ！」

コサブロウ「お前は間違えるのかよ!!!」

ヤマトの合図に二人は同時にモンスターボールを投げ入れた。

ヤマト「行くのよ！デルビル!!!」

コサブロウ「行けっ！ツボツボ!!!」

デルビル「デエル!!？」

ツボツボ「ボツツ!!？」

モンスターボールから飛び出したデルビルとツボツボは体を大きく広げて此方を睨みつけ始めた。ロケット団のポケモンを見たリーリエ達はそれぞれ各自のモンスターボールへと手を伸ばし始めた。すると皆がそれぞれのポケモンを繰り出そうとしたその時、カンナの手がリーリエの肩へとそつと置かれた。

カンナ「ここは私とリーリエちゃんだけでやらせて貰えないかしら」

リーリエ「カンナさんとタッグですか!!？」

突然の申しにみんなの手が止まった。カンナの言葉に承諾するとリーリエはシロン

をカンナはルージユラを前に出した。

それぞれのポケモンが場に並ばれると、相性の良さを考えてヤマトのデルビルの先制攻撃からバトルが始まった。

ヤマト「デルビル！【かえんほうしゃ】！！？」

リーリエ「シロン！【こなゆき】！！？」

デルビルの火炎とシロンの冷気がぶつかり合った。しかし、すぐにシロンの冷気がデルビルの火炎を打ち消すかのように押し始めた。オーキド研究所の時はいとも簡単に押し返されてしまったが、もうあの頃のシロンではない。以前よりも大幅に上がったシロンの攻撃はデルビルに直撃した。

コサブロウ「ツボツボ！【ヘドロばくだん】だ！！？」

冷気を放ち終わったシロンに向かってヘドロ攻撃が襲い掛かった。攻撃を撃ち終わったシロンはすぐにその攻撃を躲す事が出来ない。その様子を見たカンナはルージユラに指示を出す。

カンナ「ルージユラ！【サイコキネシス】！！？」

サイコパワーでツボツボの攻撃を制止させると、そのままツボツボに向かって撃ち返した。

リーリエ「【こおりのつぶて】！！？」

自分の攻撃を浴びたツボツボに向かって氷の弾丸が放たれた。鋭く一直線に放たれた氷の弾丸の威力にツボツボは主人であるコサブロウの手前まで放り出されてしまった。苦手な炎タイプの技を打ち消す冷気。その小さな体格には似合わない威力を発揮した氷の弾丸。それを見て確信を持ったカンナはリーリエの耳元へそつと呟いた。

カンナ「リーリエちゃん。次は「れいとうビーム」を支持してみて!!?」

突然の言葉に一瞬にしてリーリエの目線はカンナの方へと向けられた。

リーリエ「「れいとうビーム」!!?ですが、シロンはまだその技を使った事が…」

カンナ「ないだけで、その技を使えるぐらいの力はこの子にあるわ。「こなゆき」のパワーを全体に放出させるのではなく、「こおりのつぶて」の様にエネルギーを一点に集中させて糸を針穴に通すようなイメージで撃ってみて」

カンナの提案にリーリエとシロンは見つめ合う。すると、シロンは尾を振り回しながらリーリエに向かって鳴き始めた。自身に満ちたその声を聞いたリーリエは決心した。

リーリエ「やりますよ!シロン!」

シロン「コーン!!?」

合図と共にシロンは固く目を閉じると、エネルギーを貯め始めた。そのシロンにシンクロするか様にしてリーリエも固く目を閉じ始めた。

ヤマト「デルビル!「かえんほうしゃ」やっちゃって!!?」

そんなシロンに向かってデルビルは再度火炎放射を放ち始めた。迫る火炎放射に対してカンナとルージュラは手を出す事なく、真剣な目でリーリエとシロンの様子を伺う。徐々に近づいてくる火炎放射の熱風が顔に当たるが二人に焦りはない。そして、同時に目を開けるとリーリエは力一杯にシロンに向かって新しい技を指示をした。

リーリエ「シロン！【れいとうビーム】です!!？」

シロン「コオオオン!!？」

冷たい冷気が放射された。そしてその冷たいエネルギーが光線のように帯び始めると、一気に火炎放射を打ち消した。

打ち消しながら地面を凍らせながら走る【れいとうビーム】はデルビルを吹き飛ばした。

リーリエ「やった…出来ました！」

初めて出来た新しい技にバトル中ではあるが、リーリエとシロンは互いに喜び合った。

ヤマト「デルビル!!!」

コサブロウ「くつつつポツポ！【ジャイロボール】だ!!？」

後退したデルビルに代わって今度はツポツポの攻撃が向かった。シロンの力を引き出した事を確認したカンナはルージュラに対して静かに指示を出す。

カンナ「ルージュラ【あくまのキッス】!!?」

ルージュラ「ジユラ♡」

ルージュラの投げキッスを受けたツボツボの回転が少しずつ弱まっていくと、静かにツボツボは地面へと倒れ込んだ。

ツボツボ「Zzz」

カンナ「次は【サイコキネシス】!!?」

眠りについたツボツボをサイコパワーでロケット団に向かって投げ返した。投げ返されたツボツボにヤマトとコサブロウは逆に吹き飛ばされてしまった。

一箇所に纏められたロケット団に向かってリーリエとカンナはトドメの攻撃へと入った。

リーリエ「シロン!【れいとうビーム】!!?」

カンナ「ルージュラ!【ふぶき】!!?」

二体による同時の氷攻撃がロケット団を空高くまで吹き飛ばした。

ヤマト「久しぶりの登場なのに!!!」

コサブロウ「あんまりだ!!!」

「「やな気持ちいい!!!」

ロケット団は氷に閉じ込められたまま、流れ星のように空の彼方へと消えてしまっ

た。

ククイ博士「やったな。リーリエ！【れいとうビーム】の習得もおめでどう」

マオ「カツコ良かったよ！リーリエ！」

アママイコ「アーマイ!!？」

マーマネ「凄い！凄いよ！」

トゲデマル「モギユユ!!？」

二人の戦いぶりにマオ達はリーリエの元へと駆け寄った。リーリエもシロンを抱き抱えながら照れ臭そうに頬を赤くした。

そんな二人にカンナはルージユラをモンスターボールへと戻すとリーリエを呼び止めた。

カンナ「ポケモンはトレーナーのためにトレーナーはポケモンのためにと、強さは貴方たちのような信頼関係にもある事は覚えておいて。これからも互いを信じて、時には笑ったり、喧嘩したり、泣いたり、一緒にいる時間を大切に行ってね。その時間が貴方達をもっと成長させて行くわ」

その言葉にシロンの悩みも吹き飛んだかのようにリーリエに向かって元気よく鳴いた。その声にリーリエも嬉しくなつてはシロンの頬を自分の頬と擦り合わせた。そして、カンナの方へと目を向けると、深々とお辞儀で返した。

リーリエ「ありがとうございました！カンナ先生！」

シロン「コン!!？」

その声にカンナもクスリと笑い出した。

カンナ「ふふ！それじゃあ、私はこれで。また何処かで会いましょう」

そのままカンナはリーリエ達に別れを告げるとそのまま森の奥へと行ってしまう。カンナの姿が見えなくなるまで見届けたリーリエはすぐにマチスの方へと振り返った。

リーリエ「マチスさん！わたくしたちはもつと修行を積んでまたクチバジムに挑戦します。その時は必ずジムバッジをゲットしてみせます！」

マチス「グレイト！その時でも容赦はしないぜ」

ライチュウ「ライ!!？」

再チャレンジの意思を固めてはリーリエとシロンの闘志が燃え始めた。ここから二人の再スタートとなったリーリエとシロン。二人のこれからポケモン修行の旅はまだ続くのであった。

【マサラタウン】

くオーキド研究所く

翌日の朝、チャイムが鳴った。リーリエ達が一旦戻って来ると知ったジェームズは、デイナアの支度の中、玄関の方へと向かうと、その扉を開いた。

ジェームズ「お帰りなさいませ！お嬢様！」

扉を開けたジェームズの目に飛び込んだのは……

「ピッカ!!？」

ピカチュウだった。そして、そのピカチュウが自分の主人であるその少年の肩へと登り始めた。ピカチュウを追いかけるようにして追っていた目はやがてその少年と目が合った。その少年を見たジエームズの目は大きく見開いた。

ジエームズ「これは…またお会いすることが出来るとは…お久しぶりです」

サトシ「お久しぶりです！ジエームズさん！」

ピカチュウ「ピツカツチュ
!!？」

第三十話 サトシ

マサラタウンへと帰ってきたリーリエは皆を引き連れてオーキド研究所のドアを開けた。

リーリエ「ジエームズ！ただいま戻りました！」

玄関の扉を開けたリーリエはジエームズの名を呼んだ。しかし、いつもだったらリーリエが到着する五分前には使用人を引き連れて出迎える筈なのだが、待とうにもそのジエームズの姿はなかった。時間厳守の彼には珍しい事でありリーリエは少し戸惑ってしまふ。

スイレン「ジエームズさんどころか、誰からの返事もないね」

ククイ博士「何かあったのか？」

オーキド校長「おーい！ユキナリ!!!着いたぞ！」

オーキド博士の名を叫んだが、その声にも反応がなかった。妙な静けさに嫌な予感があるリーリエ達であったが、どうする事も出来ず、ただその場を立ち尽くしている他なかった。

『ベトベトン ヘドロポケモン

毒タイプ

ヘドロが溜まる場所や湿気が多い場所を好んで生活している。身体から染み出している体液は鼻が曲がるほどの強烈なおいを放つ』

ククイ博士達を飲み込んだその正体はアローラの姿とは違うカントーのベトベトンだった。三人の男性を呑み込んだベトベトンの体格の大きさにリーリエ達は驚く一方であった。そんなリーリエ達の前に一人の顔がベトベトンの体から飛び出してきた。

オーキド博士「ぷはあ!!!」

間違いないオーキド博士だ。

リーリエ「オーキド博士!!!」

オーキド博士「おお!リーリエ君。帰って来たかね」

ジエームズ「お帰りなさいませお嬢様!」

リーリエ「ジエームズも!!!」

誰からの声もなかった理由が分かった。みんなこのベトベトンに捕まってしまっていたようだ。

オーキド校長「ユキナリ!」

オーキド博士「おお!ナリヤ!」

ククイ博士「お会いできて光栄です。オーキド博士。私はククイと申します」

カキ「今は挨拶よりも何とかしませんか!!!」

ベトベトン「ベトベト〜ン!!?」

軟体の体を持つベトベトンから脱出しようにもどうする事も出来ない一同に向かって奥から人影がこちらに向かってきた。

ケンジ「いた!あそこだ!」

ピカチュウ「ピカチュウ!!?」

駆けつけてきたのはケンジと…ピカチュウ?リーリエにはそのピカチュウはどことなく初対面ではないような感じがしてきた。そう思っていると、奥からもう一人の影が

現れた。

??? 「戻れベトベトン!!!」

その人物はモンスタールボールを向けると、ベトベトンをボールの中へと戻した。ベトベトンに解放させてへトへトなみんなの前に現れたのは赤い帽子と青いシャツを身につけた一人の少年。

リーリエ 「えっ…」

その人物を見たリーリエ達は目を大きく見開いては釘付けとなった。当たり前だ。スクール時代を友に過ごした仲間の一人がそこに立っていたのだからだ。

サトシ 「みんな！久しぶり!!!」

ピカチュウ 「ピッカチュウ!!？」

!!!!!!
サトシ
!!!!!!

みんなは早走りにサトシの方へと駆け出した。久しぶりの再会にサトシもみんなと手を取り合いながらこの喜びを分かち合った。

マオ「サトシ！サトシだ！」

カキ「久しぶりだな！サトシ！」

スイレン「元気にしてた!?？」

マーマネ「あくなんだか僕：涙が出てきたよ」

ロトム『サトシ!!!久しぶりロト!』

サトシ「あはは!!!」

抱きかかえていたシロンもピカチュウの姿を見るとアママイコ達と一緒にピカチュウの元へと駆け出した。揉みくちやになりながら楽しそうにしているポケモン達の様子に微笑ましく見つめていたリーリエにサトシは目をやった。

サトシ「リーリエも久しぶり！オーキド博士から聞いたぜ！ジム巡りしてるんだってな！」

リーリエ「はい！お久しぶりです！サトシ…」

いつも通りサトシと再会の握手を交わそうと手を握ろうとしたのだが…

サトシ「どうした？リーリエ」

リーリエ「えっ／＼い…いやいや！な！何でもありません／＼／＼／＼」

サトシの手を取ろうとしたリーリエの右手は時を止められたかのように固まってしまった。徐々に顔に熱がともり、心臓の鼓動が早くなる。何故、握手する手を止めてしまったのか自分でも分からないリーリエはサトシの声に反応して我に帰る。顔を真っ

赤にしなから両手で表情を隠すと、そのまま背を向けてしまった。

落ち着かせようと念じていると、ニビシテイで言われたカノンの言葉を思い出した。

リーリエはサトシの事好きなの？

その言葉を思い出すと、さらに茹でタコのように真っ赤になってしまった。

リーリエ（はああくカノンが変な事言うからですよ／＼／＼／＼別にサトシとは本当にただの友達なのです！な…なので／＼／＼あああ…そういうんじゃないのに／＼／＼／＼）

必死にその言葉の呪縛から逃れようと懸命に格闘するリーリエの姿から何かを察したマオとスイレンはニヤニヤしながらリーリエを見つめていた。

サトシ「どうしたんだ？リーリエは」

カキ「お前は…」

マーマネ「サトシらしくていいんじゃない？」

サトシ「？」

~~~~~

応接室に鞆を下ろしたリーリエはジエームズと一緒にルザミーネの元へと向かった。旅の途中もジエームズから母の容体については聞いていたのだが、こうして自分の目で確認する事が出来たリーリエはそつと胸を撫で下ろした。オーキド博士からは容体は変わらず安定。グラジオオから受け取ったウツロイドのデータから神経毒の解毒剤の調合を進めていると聞かされる。まだ完成には遠いが、脳や他の臓器には何の外傷もなく、解毒剤が投与されればすぐに目を覚ます事を告げられた。

無事に回復へと進んでいる事を聞かされたリーリエは改めてオーキド博士達に礼をした。再び応接室へと戻ると同じようにリーリエの母を心配に思っているマオ達にもリーリエは案件を伝えた。自分の母のせいで危険な目にあわされたのにもそれを聞いたみんなは自分のことのように喜んでくれていた。マオとスイレンに抱きつかれた途端、リーリエは一滴の涙を零した。

~~~~~

サトシ「グレーバツジにブルーバツジ！すげえよりりエ！まさかジロウとカスミに勝っちゃうんだなんて」

りりエ「そんな…シロン達が頑張ってくれたおかげですよ」

ソファアでくつろぐサトシ達はここまでのりりエの kantong 地方の旅の話で盛り上がっていた。ソファアの背もたれに寄り添うとサトシは自分が kantong 地方を旅していた頃を思い出した。

サトシ「タケシにカスミかく懐かしいな。それにノゾミもジム戦をしに kantong に来てるのかく久しぶりに会いたいな」

マオ「それと、アランさんとマノンにも会ったんだよ」

サトシ「それは知ってるんだ」

サトシはそう返事をする、さつきとは深刻な顔つきに変わった。サトシの表情にりりエ達は息を飲んだ。一瞬の間の後、サトシは口を開いた。

サトシ「実はアランから聞いてたんだ。ダークポケモンの事とりりエの事は」

「ダークポケモンのワードにただ一人、リーリエが動いた。

リーリエ「それはつまり：サトシはダークポケモンの事はご存知だったのですか！」
サトシ「ああ！今は俺も国際警察の人と協力してダークポケモンの足を辿っているんだ」

ピカチュウ「ピカピカ!!？」

リーリエ「やはり：それほど深刻なのですな」

カキ「あのさ、悪いんだけど」

スイレン「ダークポケモンって何のこと？」

ここまでのサトシとリーリエがそれぞれ旅の道中で出くわしたダークポケモンの事をマオ達にも説明した。本当は秘匿すべき内容であったが、二度もダークポケモンに襲われている事もあり、危険性を考慮してカントー地方に残っているマオ達にも身の安全のため話す事にした。

話の内容からマオ、スイレン、カキ、マーマネの表情は曇ってきた。そんなみんなの顔を見たサトシは話題を変えようと立ち上がると、リーリエの方へと視線を向けた。

サトシ「そうだ！リーリエやろうぜ！」

リーリエ「や／／やるって!!!何をですか？」

突然のことに驚くリーリエであったが、モンスターボールを手にした右手を向けられ

た事でサトシが次に言おうとしている事が何となく察しがついた。

サトシ「何ってポケモンバトルだよ！強くなったらリーリエとやってみたいんだ！いいだろ？」

リーリエ「わたくしが…サトシと」

このサトシからバトルの誘いはスクールの時にかけられた誘いとは違う感じをリーリエは捉えていた。少しの笑みを浮かべるとすぐにその場を立ち上がると、真剣な眼でサトシに向けた。

リーリエ「やるからには勝ちますよ。サトシ！」

お淑やかなお嬢様として育つて来たリーリエからのイメージとは正反対の言葉にマオ達は驚いた。

マオ「おっ！リーリエがサトシに対して強気だ！」

マーマネ「サトシとリーリエのガチバトルか…」

カキ「面白そうだな！」

スイレン「うん！見てみたい！」

サトシとリーリエとの暫くぶりの再会を果たしたマオ達も今の二人の実力が気になっていたので、その提案に一同は賛成した。そうと決まれば全員は中庭の方へと飛び出していった。

~~~~~

ケンジ「審判は僕がやるよ！二人とも準備はいいか？」

サトシ「頼んだぜケンジ！」

リーリエ「よろしくお願いします！」

中庭へと場所を移したリーリエとサトシは向かい合わせになるようにして位置にいた。スクール頃とは違う緊張感がマオ達も伝わっていた。その感情はリーリエもサトシも同じだった。

サトシ「ピカチュウ！君に決めた！」

ピカチュウ「ピカチュウ!!？」

相棒のピカチュウの名を叫ぶと、ピカチュウはサトシの肩から勢いよく飛び降りた。

リーリエ「やっぱりピカチュウですね。わたくしは勿論！シロンです！」

シロン「コン!!?」

ピカチュウに対してリーリエは迷わず自分の相棒の名を叫んだ。顔を見合わせるピカチュウに対してシロンは一声をあげた。まるで負けないよと言っているみたいであり、その返答に対してピカチュウも軽く返事をした。

久しぶりのサトシとのバトル。だけどあの頃とは違うのは、これは授業の一貫ではなくトレーナー同士の真剣勝負である事だ。

そして、サトシの視点から言わせると目の前に立っている相手はポケモンスクールのリーリエではなく、ポケモントレーナーのリーリエである事だ

ケンジ「試合開始!!!」

? サトシVSリーリエ?

サトシ「ピカチュウ! 【10万ボルト】!!?」

ピカチュウ「ピツカアチュウ!!?」

リーリエ「シロン！「れいとうビーム」!!？」

シロン「コオオン!!？」

開始の合図と共にピカチュウの電撃とシロンの冷氣が炸裂した。爆煙が晴れるとサトシとリーリエは狙い通りの表情を浮かべた互いの顔を見合わせた。

シロンの得意技「こなゆき」から最上位となった「れいとうビーム」はシロンの挨拶代りの技となった。ピカチュウが最初に繰り出す技を予想していたリーリエはその技に「れいとうビーム」を決めることが出来た事に思わず笑みを浮かべた。その顔を見たサトシもリーリエの心情を感じたのか同じように笑みを浮かべた。

リーリエ「「こごえるかせ」!!？」

切り替えてリーリエは次の指示を唱えた。身震いしてしまいそうな冷氣が風のようにピカチュウに向かって押し寄せて行った。咄嗟にその技をジャンプして躲したピカチュウはシロンの頭上を捕らえた。

サトシ「次は「アイアンテール」だ!!？」

リーリエ「真上です！「こおりのつぶて」!!？」

硬化させた尾を叩きつけるようにして向かってくるピカチュウに向かってシロンは氷の弾丸を飛ばした。目に止まらない速さの氷の弾丸はピカチュウの腹部を捕らえた。反動で飛ばされたピカチュウは何とか地面へと着地するが、思った以上に重い攻撃がの

し掛かっていたピカチュウの足は蹠踉めいていた。

リーリエ「シロン！【ムーンフォース】です！！？」

シロン「コーン！！？」

シロンの【ムーンフォース】がピカチュウに炸裂した。しかし、ずっと友に戦つてきた相棒の身体能力を信じていたサトシは地面を転がって行くピカチュウに向けてすぐに指示を出した。

サトシ「ピカチュウ！【でんこうせっか】！！？」

ピカチュウ「ピツカ！！？」

サトシの声を聞いたピカチュウは地面を強く蹴ると、光のような速さでシロンに向かって飛び込んで行った。光のような速さで迫るピカチュウの攻撃を躲す事が出来なかったシロンはそのまま後ろの方へと吹き飛ばされてしまった。

シロンに攻撃を浴びさせたピカチュウは高くジャンプすると電気を帯びた尻尾をシロンに向け始めた。

サトシ「今だ！【エレキネット】！！？」

【エレキネット】は網目状に帯びた電気の包囲網で相手を捕縛する技だ。尻尾で大きくその技をシロンの方へと放つと、シロンを包み込もうと電気の網が襲いかかった。

【でんこうせっか】を受けた直後での次の攻撃にシロンはすぐには回避移す事が出来

ずにいる。その様子を察したリーリエはすぐに指示を送った。

リーリエ「シロン！「れいとうビーム」!!? カウンターシールドです!!!」

リーリエの声を聞いたシロンはそのまま氷のバリアーを展開させた。「エレキネット」を防いだ「れいとうビーム」はそのままピカチュウに向かって攻撃し始めた。

ピカチュウ「ピツカア!!?」

シロンの予想外な攻撃にピカチュウは思わず後退してしまった。その技を見たサトシも呆気にとられた様子でいた。ジム戦や他の試合でも使ってきたカウンターシールドをリーリエとシロンは十分に物にしたようだ。

サトシ「リーリエ！それってカウンターシールドじゃん！」

リーリエ「はい！サトシが編み出したこの戦術にはわたくしもシロンも助かっています！」

昔に自分が考え出した戦法を使ってくれた事に驚きと嬉しさがこみ上げてきたサトシとピカチュウにさらに闘志を燃え上がってきた。その直後にピカチュウはシロンに向かって突進し始めた。無防備に突っ込んでくる様子に何かしらの違和感があったリーリエだったが、そのままシロンに攻撃の指示を唱えた。

リーリエ「シロン！連続で【こおりのつぶて】です!!?」

シロン「コーン!!?」

サトシ「今だピカチュウ！『アイアンテール』だ!!？」

突っ込んでくるピカチュウに対してシロンは無数の氷の弾丸を放ち始めた。迫る氷の弾の嵐に怯むことのないピカチュウは尻尾を硬化させたままその速度を緩めようとはしなかった。そのうちの「こおりのつぶて」の一発がピカチュウへと命中しそうになったその瞬間、ピカチュウは「アイアンテール」をぶつけた。

しかし、驚くのはここからだ。ピカチュウはそのまま弾き返すのではなく氷の弾を一発ずつ伝ってシロンとの距離を詰めに行った。

リーリエ「えっ!!」

サトシ「どうだリーリエ！名付けて氷のつぶて封じだぜ！」

そのまま高い位置まで飛び上がったピカチュウは頬袋に溜め込んだ電気を放電し始めた。サトシとピカチュウの奇想天外な戦法に戸惑うまでもなくリーリエとシロンもピカチュウに狙いを定めた。

リーリエ「シロン！『れいとうビーム』です!!？」

サトシ「ピカチュウ！『10万ボルト』!!？」

双方の技は互いを譲らずにそのまま相殺された。巻き起こる爆煙が晴れると、シロンは「エレキネット」により拘束されてしまっていた。電気を帯びた網を振りほどくも出来ないシロンの様子を見たリーリエは右手を審判を務めたケンジに合図を送った。

リーリエ「参りました〜」

シロン「コ〜ン」

降参を宣言したリーリエとシロンを見てケンジはコールした。勝負が決したピカチュウとシロンはお互いの主人の元へと戻っていった。

サトシ「お疲れピカチュウ！」

ピカチュウ「ピツカア!!？」

リーリエ「頑張りましたね。シロン！」

シロン「コン!!？」

サトシ「シロンもやるようになったじゃん！技のどれも強力だったし、すんげー強くなってる！」

リーリエ「流石はピカチュウですね！サトシ達もさらに磨きをかけているのが分かりました！」

リーリエとシロンは見合わせると互いに笑い合った。サトシの強さに助けられ、旅の中ではその強さを目標に進んでいたリーリエとシロンにとって、今回のサトシとピカチュウとの試合はアローラの頃の自分と比べて大きく成長している事を実感する事が出来た思われる。

自分達のこれからの高みへと目指してくためにも負けた経験も大切する事の大切さ

をシロンにも伝わったであろう。その様子は負けた事よりもピカチュウを相手に頑張って闘うことが出来た嬉しそうな表情から伝わっていた。

サトシ「リーリエ！続けて行くぞ！」

リーリエ「はい！」

~~~~~

翌朝、荷物をまとめたリーリエは再びジム巡りの旅へと出発しようとしていた。

リーリエ「ジエームズ。引き続きお母様の事よろしくお願いします」

ジエームズ「お嬢様もお気をつけて」

ククイ博士「頑張ってこいリーリエ。俺もオーキド博士と一緒に一刻も早くルザミーネさんの体調が戻られるよう最善を尽くして行くよ！」

リーリエ「ありがとうございます。ククイ博士!」

そして、研究所を出たリーリエに遅れて残りの五人も急いで研究所を飛び出した。リーリエと肩を並べると、皆はオーキド博士達の前へと立った。

オーキド校長「みんなも慣れない土地であるが、気をつけるんじやぞ!」

オーキド博士「サトシ。みんなの事頼んだぞ!」

サトシ「はい!」

ピカチュウ「ピカツチュ!!?」

みんなが出揃った所でリーリエの合図で見送るオーキド博士達に旅立つ挨拶を交わした。

リーリエ「それでは…」

行つて来ます

!!!!!!!

こうしてサトシ、マオ、カキ、スイレン、マーマネを加えて新たなスタート切ったリーリエは振り返ることなく走り出した。その跡に続いてサトシにマオとカキにスイレンに転びそうになりながらも跡を追うマーマネも走り出した。輝き様の輝きにも負けな

い朝日に向かって走り行くリーリ工達の影が見えなくなるまで、その後ろ姿をオーキド博士達は見送ったのだった。

第三十一話 うずまきカップ

サトシ「行くぞ！みんな!!!」

ピカチユウ「ピツカア!!？」

ロトム『待つロト!』

マサラタウンで再開を果たしたサトシを含めて、再びトレーナー修行へと旅立ったリーリエ達はクチバシテイの港町で海水浴を楽しんでいた。

カキ「青い空。白い砂浜。アローラの輝きに負けない日差しにヴェラ火山のようなこの暑さ。俺は今、それを全身に浴びてい……うおご!!!」

潮の香りを楽しみながら太陽の光を全身に浴びていたカキに向かって水鉄砲が放たれた。目に入った水を拭いた目線の先には卑しく笑っているサトシとマーマネの姿があった。

マーマネ「カキ！訳わからない事を言っていないで早く来なよ！」

サトシ「そうだぞ。カキ！」

カキ「つたく……やったな！お前ら！」

勢いよく海へと飛び込んだカキはサトシとマーマネに向かって仕返しに手のひらで

掬った水を浴びさせた。トレーナースクールの頃と変わらぬにはしゃいでいる三人の甲高い声に答えるようにして他の三人も海水浴場へと向かった。

スイレン「どう？準備できた二人とも？」

マオ「うん！」

リーリエ「ええ！」

遅れて着替えを済ませた三人もサンダルに履き替えると、熱く燃える砂浜の上に足を置いた。

一番最初に着替えを終えたスイレンはスクール時代の頃に着ていたスク水ではなく、少し大人びた赤いハイビスカスがプリンされた紺色のワンピースを着用している。

二番目に出てきたマオはエメラルドグリーンホルターネックの水着を着用していた。胸元とおへそ辺りのフリルのパンツについている黄色い紐がとてもチャーミングであり、身長が高いマオのスタイルをよく写している。

最後に出てきたリーリエは自分の肌の色とも似合う白を中心としたバンドウフレアビキニと少し片足が見えるぐらいのロングパレオを使用した水着となっている。

マーマネ「もう遅いよ三人とも！」

マオ「仕方ないでしょ！色々準備があるんだから！」

スイレン「マーマネ。そんなんじゃモテないよ」

トゲデマル「モギユユ!!?」

マーマネ「ト……トゲデマルまで」

するとマオは久しぶりの水着に恥ずかしそうにしているリーリエの肩を掴むと、サトシの前へと押し出した。驚いてこちらを見ているリーリエに意地悪そうな目を送ってはサトシに問い出した。

マオ「ねえねえサトシ! どう? リーリエ似合ってる?」

リーリエ「えっ! な／＼マ／＼マオ!!」

マオの発言にさらに戸惑い出したリーリエは慌ててサトシの方へと振り向いた。

リーリエ「……………」

水着を見られる恥ずかしさとどんな返事が来るであろう期待と不安に早くも押しつぶされそうになる。だんだんと早くなる鼓動の音が聴こえる中、口を開く事が出来ないリーリエは黙ってサトシを見つめる。

サトシ「ああ! リーリエってやっぱり白色が似合うよな!」

リーリエ「そ／＼／＼そうですか!」

その返しに顔をさらに赤くするリーリエは見られないように自分の頬に両手を当て始めた。それでも赤らみは薄れていく事はなく目の前にいるサトシの顔を直視出来ずに困っていると、向こうから聞き覚えのある声にはそれは助けられた。

??? 「サトシ！リーリエ！」

二人の名を呼ぶ声に顔を向けると、そこには見覚えのある顔があった。

サトシ・リーリエ 「カスミ!!!」

ピカチュウ 「ピツカア!!？」

久しぶりにカスミの顔を見たピカチュウは尻尾を大きく振り出すと、一直線にカスミの方へと飛びだした。

カスミ 「ピカチュウ！久しぶり！」

ピカチュウ 「ピカチュウ♪」

サトシ 「それよりも何でカスミがここに？」

カスミ 「まあオーキド博士から聞いてたつてもあるけど、理由はこれ！」

すると一枚のチラシを取り出すと、その見覚えのある文字にサトシは真つ先に反応した。

サトシ 「うずまき…カップって…ジョウト地方での」

そこに記されていたのはうずまきカップの開催日時だった。かつて、ジョウト地方を旅していたサトシはその大会に一度だけ出場した経験を持っている。その大会が明日、ここクチャシティで行なわれるのであった。

カスミ 「そう！水タイプのポケモンを使うジムリーダーとして参加しない訳には行か

ないわ！」

さらに水系ポケモンを極めていくためにもこの大会に参加せざる理由などはなかった。ハナダジムをカントー地方で一番のジムにする事を目標に突き進むカスミには絶好の修行の場でもあるのだ。

サトシ「面白そうだな！よし決めた。俺も出るぞ！」

そしてこの大会を耳にして参加しないサトシでもない。サトシの出場宣言を聞いたカスミもそのことばを待っていたかのようにして微笑んでいた。

カキ「そうなれば俺もだ！」

スイレン「よし！私も出る！」

サトシに続いてバトル好きのカキに水系ポケモン使いのスイレンも参加の意義を述べ始めた。他のみんなの参戦を喜んでるとサトシはある事に気がついてしまった。

サトシ「ちよつと待つてよ。カスミ！うずまきカップって事は……」

慌てふためいているサトシを宥めるようにしてカスミは頷いた。察したサトシも言いつらそうに此方に視線を変えてきたのだが、リーリエ達はその様子にからも何を言いたいのか分からなかった。見かねたカスミはリーリエ達に説明した。

カスミ「あのね。この大会に出場するためには最低でも水系ポケモン二体以上が必須なのよ」

サトシ「実はそうなんだ」

それを聞いたカキ達は残念そうに肩を落としてしまった。

カキ「水系ポケモンじゃないとダメなのか」

スイレン「ええ、残念……」

マオ「なら、二人の応援だね」

大会に出られないみんなと同じように残念がるリーリエであったが、そんな彼女に向かって一体のポケモンが此方に向かって走ってきた。そのポケモンを見たシロンは大きく尻尾を振り始めた。

ゼニガメ「ゼニ!!？」

喜ぶシロンの目線の先へとリーリエも振り向くと、一体のゼニガメがリーリエへに向かって飛び込んできた。

リーリエ「もしかして……貴方」

突然のことに驚いたが、それよりも見覚えのあるこのゼニガメとまた会えた事に驚いていた。すると、もう一つの人影がリーリエ達の前へと現れた。

ジュンサー「久しぶりねリーリエさん！それとサトシ君とカスミさんも！」

再会したジュンサーの後ろからもう一体のゼニガメが姿を現した。そのゼニガメは他の子とは違ってサンングラスをかけていた。取ったサンングラスの中から覗かせる瞳は

光り輝き出すと真つ先にサトシの方へと走って行った。

ゼニガメ「ゼニゼニ!!?」

サトシ「ゼニガメ!」

ピカチュウ「ピツカア!!?」

自分の方へと飛び込んでくるゼニガメをサトシはその勢いを受け止めきれずにそのまま尻もちをついてしまった。だが、そんな事はお構いなしだった。何にせよ、長年の友と再会を果たしたからだ。

サトシ「久しぶりだなゼニガメ!」

ゼニガメ「ゼニゼニ!!?」

カスミ「ゼニガメ!久しぶり!」

ピカチュウ「ピカチュウ!!?」

お互いの再会を喜びあっているサトシとゼニガメの様子をリーリエ達は遠くからその様子を微笑ましく眺めていた。

マオ「あのゼニガメって?もしかして」

リーリエ「ええ!サトシのポケモンですよ!」

ゼニガメ「ゼニツ!!?」

スイレン「それで、その子は?」

リーリエ「この子はサトシのゼニガメがリーダーとして務めているゼニガメ消防団の団員なのです」

マーマネ「ゼニガメ消防団?!?!」

ゼニガメ「ゼニツ?!?!」

なんて話を進めていくと、サトシはある提案をゼニガメに持ちかけた。

サトシ「なあ!ゼニガメ。俺たちうずまきカップに出場するんだけど、どうだ?久しぶりに一緒にバトルしないか?!?!」

それに断る理由はなかった。久しぶりのサトシの手持ちに戻つてのバトルにゼニガメはピカチュウと一緒にはしやぎ始めた。

するとサトシのゼニガメはリーリエの元へと向かったゼニガメに話しかけ始めた。ゼニガメが話している事を理解したサトシはリーリエにも提案を持ちかけた。

サトシ「リーリエ!そのゼニガメ凄く懐いているみたいだし、一緒に参加してみたらどうだ?そうしたら、うずまきカップに出場に必要なラインに届くんじやないかな!」

リーリエ「えっ?!?!」

少し驚いたリーリエはゼニガメの方へと目を向けた。暫くゼニガメと見つめあつてみるとゼニガメの方からリーリエに対して大きく頷いた。

リーリエ「いいのですか?」

そう聞くとゼニガメは目を大きく輝かせ始めた。ジュンサーも優しく微笑み返してくると、リーリエはジュンサーにお礼の返事を返した。

リーリエ「宜しくお願ひしますね！」

ゼニガメ「ゼニツ!!？」

ジュンサーからの許可を貰ったリーリエはゼニガメを加えてカスミに連れられて大会への出場登録を済ませに向かった。無事に登録を済ませると、そのまま太陽が沈むまで遊び続けた。

~~~~~

翌朝、リーリエ達はうずまきカップが行われるクチバのバトルドームへと向かった。そこで参加登録を済ませると、サトシ、カスミ。そしてリーリエは選手控え室へと案内された。

フィールド形式はハナダジムと同じく足場を置ける複数の浮島が浮かんでいる水のフィールドとなっている。天井も開いており、そこから流れ込む太陽の光が緩やかに流れる水面に光を与えていた。

リーリエ（水着とは聞いてなかったのですが…）

他の選手が次々とバトルを繰り返す中、いよいよ自分の番が来たリーリエはバトルフィールドへと向かい始めた。うずまきカップは水系ポケモンのみを使用したルールであるためなのか。出場選手はみんな水着着用での参加となっていた。海水浴イベントでもあるためか観戦している人達のほとんども水着を着用しているのだが、バトルフィールドに立つと大きなモニターに自分の姿がくつきりと映し出されるため、恥ずかしくないと言ったら嘘になってしまう。

リーリエの対戦相手が見えると審判による試合開始の合図が下された。集中力を高めるため深呼吸し終えたリーリエはモンスターボールを取り出した。

リーリエ「出てきてください！コイキング！！」

コイキング「ココツ!!？」

コイキングは登場と同時に水中へと潜ると勢いよく水の中から飛び出して行った。久しぶりのバトルとも合ってやる気は十分だ。大きな水しぶきを巻き上げたコイキングの自慢の跳躍による力強さを見た観客から大きな声援が響き渡った。気合の入るコ

イキングにリーリエの恥ずかしさも吹き飛んで行った。

互いにエールを呼び合っていると、対戦相手であるトレーナーのダイはリーリエのイキングを見ると少し鼻笑いをした。

ダイ「コイキングとは：お嬢さんにしては似合わないポケモンを繰り出しますね」  
リーリエ「似合わない？」

ダイ「君の美しさにはどうも釣り合いそうにないポケモンってことさ！」  
すると会場からは何処ともなく大きな女性陣による歓声があつた。

ダイは資産家の父を持つ御曹司である御坊ちやまトレーナーだ。長くて煌めかなストレートな茶髪に飲み込まれてしまいそうなブルーアイ。色白の肌の美貌には多くの女性達を虜にされた：のであろう

ダイ「それに寄りによって、美しさだけでなく強さにも浮かばれないコイキングが相手では、僕のポケモン達の美しさや強さを十分にこの会場にいる人達に披露することが出来ないではないか…」

リーリエ「むっ！」

コイキング「ココツ!!？」

マオ「何なの！あの人！」

スイレン「感じ悪い〜」

ダイの言葉にリーリエとコイキングは少しの怒りが込み上げてきた。その感情は観戦席で観ているマオ達にも伝わっていた。

前髪を大きく払うと、ダイは百数個のダイヤモンドが付けられたゴージャスボールを取り出した。

ダイ「君のような女性には可憐でゴージャスなポケモンがお似合いさ！僕のポケモンのようにね！」

ダイが繰り出したそのポケモンは太陽の光によつて全身の鱗から七色の光を会場内に光り輝かせた。

リーリエ「綺麗……」

コイキング「ココツ……」

その美しさに息を飲んでしまうもののリーリエはすぐに口トムに凶鑑の解説をお願いした。

『ミロカロス うつくしきポケモン

水タイプ

ヒンバスの進化系。人々が争いを始めると湖の奥から現れてはその神秘的な美しさで荒んだ心を癒すと言われている。世界一美しいポケモンと言われていて絵画や彫刻のモデルにもなっている』

淑やかそうに見えるポケモンであるが、コイキングの姿を見るなり、すぐき警戒モードへとミロカロスは鋭い目つきで睨みつけた。しかし自分の何倍の大きさを持つミロカロスであるも、そんな事にビビるリーリエのコイキングではなかった。

審判「それでは試合開始！」

？リーリエVSダイ？

ダイ「さあミロカロス！【しんぴのまもり】!!?」

ミロカロス「ミロロロ!!?」

試合開始と共にミロカロスはさらに自分の美しさを光り輝かせた。

コイキング「ココッ!!」

その光に目を奪われたコイキングは思わず目を瞑ってしまった。相手の姿を捕らえられないコイキングの様子を見たダイはすぐに攻撃技へと切り替えさせた。

ダイ「ミロカロス！【たつまき】!!?」

ミロカロス「ミロッ!!?」

尻尾を大きく回し始めたミロカロスは竜巻を発生させると水を巻き上げながら、コイキングを大きく空中へと放り出した。

マーマネ「まづい!!!」

カキ「あの高さに放り出されたら身動きが取れないぞ！」

力強い攻撃からダイのミロカロスは見掛け倒しではない強さを誇っている事が分かった。冷静にコイキングへと視線を向けたリーリエは指示を送った。

リーリエ「コイキング！そのまま【とびはねる】です!!?」

コイキング「ココッ!!?」

リーリエの声が届いたコイキングも空中でありながらも体勢を整えると、そのままミロカロスに向かって急降下する。空のエネルギーを纏わせた体当たりがミロカロスへと迫っていく。

ダイ「僕のミロカロスの「たつまき」を利用して攻撃を仕掛けてくれるとはね…」  
余裕そうに眺めるダイは次の攻撃をミロカロスに送った。

ダイ「「ハイドロポンプ」!!?」

ミロカロス「ミロツカア!!?」

コイキング「ココオ!!」

強烈な水流攻撃をコイキングへとぶつけた。何とか押し切ろうと「ハイドロポンプ」による水流に立ち向かっていくコイキングであったが、圧倒的なパワーを前に弾かれてしまった。そのまま水面に叩きつけられてしまったが、すぐに水面から顔を出すとリーリエに自分の安否を伝えた。

ダイ「進化前と進化系。その壁もこのポケモンバトルに置いては勝敗を大きく左右させるものだ。その穴を状態異常や天候操作で補って活路を見つけるトレーナーもいるが、神秘のベールに包まれた私のミロカロスの前では…それはあまり期待できない」

自分の狙いを見透かれてしまった様なダイの目つきにリーリエは少し息をのんでしまった。「とびはねる」の追加効果で麻痺を狙いに行くものの、神秘のベールに護られて

いるミロカロスにその効果は見込めない。さらに特性《ふしぎのうろこ》を前ではその状態異常も裏目に出してしまうのも確かであった。

ダイ「それに世界一の美しさと強さを持つ僕のミロカロスが世界一弱いコイキングになんかに負ける未来も見えやしませんがね！」

リーリエ「……………」

ロトム『リ：リーリエ。落ち着くロト…』

さらコイキングに対して無礼極きまりない言葉を並べていくダイに対してリーリエからは少しずつ黒いオーラが溢れ出ていた。自分の大切なポケモンが馬鹿にされたのなら当たり前だ。

サトシ「あれ…相当…怒っているよな」

ピカチュウ「ピカチュウ…」

カスミ「怒って当たり前よ！やっちやえリーリエ！」

おこリーリエの怖さは何となく知っているサトシはモニター越しからでもリーリエの氷のように冷たい目に背中を刺されるような感覚に襲われた。それは同じようにピカチュウにもサトシ同様に思わず身震いを立ててしまっていた。

ダイ「もう勝利は決した！私の美学の波にこのまま飲まれるが良い！ミロカロス！

【なみのり】だ!!」

ミロカロスの神秘的な光が放つと同時に観客席まで飲み込んでしまうほどの高波を発生させた。そのまま高波はコイキングに向けて流れていく。

スイレン「た…高い」

アシマリ「アウ…」

カキ「あれじゃあ、逃げられないぞ！」

逃げ道はないように見えるこの状況であるがリーリエに焦りはなかった。その様子に追い詰めている様に見えるダイの方が少しの違和感を感じていた。

リーリエ「コイキング！ 思いっきり【はねる】です!!？」

コイキング「ココッ!!？」

リーリエの合図を待っていたコイキングは思いっきり尻尾を水面に叩きつけると、その反動で上に向かって飛び出した。雲に届きそうな位置まで高く飛んだコイキングに会場の視線は一気に釘付けになった。その驚異の飛躍力にはダイもミロカロスも驚いた。

リーリエ「そのまま最大パワーで【とびはねる】!!？」

コイキング「ココッ!!」

そのままミロカロスに向けて垂直落下したコイキングの突進はミロカロスの【なみのり】とぶつかり合った。お互いの攻撃エネルギーが爆散すると、その衝撃によって蒸発

してしまった海水は一気に天に昇ると、一つの雨雲を生み出した。コイキングの攻撃力  
に他のコイキングに無いものを感じたダイはリーリエのコイキングを睨みつけた。

ダイ「貴方のコイキングは他のコイキングと比べてパワーがあると認めよう！しかし  
所詮は最弱の分類！それでもまだ僕のミロカロスにとっては…」

ポツツ：

鼻に冷たい感触にダイの言葉は途切れてしまった。上を見ると、発生させた雲から少  
しずつ雨が降り始めていた。

雨：

リーリエ「さあ、コイキング！ここから貴方の本領を發揮するところですよ!!!」

コイキング「ココツ!!？」

リーリエの声と同時にコイキングはミロカロスに向かって泳ぎだした。

リーリエ「コイキング！【たいあたり】!!？」

ミロカロス「ミロツ!!!」

ダイ「早い!!!」

まるで電光石火の如くのスピードに乗ったコイキングの体当たりがミロカロスの懐

に入った。その後、コイキングはその機敏な速さを生かしたままミロカロスの周りを泳ぎ始めた。明らかにさつきまでとは違う動きにダイもミロカロスも驚愕していた。

ロトム『コイキングの特性は《すいすい》！雨の中では素早さが上がるロトム！』

そのままコイキングは連続での体当たり攻撃を仕掛けていった。ダメージが重なっていくにつれて目で追いつらくなっていくそのスピードを前にミロカロスは如何するも出来なくなっていた。

ミロカロス「ミ……ロ」

追い詰められていくミロカロスと牽制が逆転されて来た事にダイの余裕が一気に打ち消されてしまった。コイキングの素早さの対処法が全く掴めないダイは考える時間を稼ぐべく防御にへと徹し始めた。

ダイ「ミロカロス！【じこさいせい】だ!!?」

ダイの指示にミロカロスは回復技を繰り出した。だが、ミロカロスのダメージは想像以上に受けており、完全に回復するまでにはいかなかった。

リーリエ「トドメの【たいあたり】です!!?」

コイキング「コオオオ!!?」

全身全霊の力で繰り出した体当たりはそのまま自分の倍以上の大きさのミロカロスを後方へと吹き飛ばした。

ミロカロス「ミ…ロオ…」

そのままミロカロスは水面から起き上がることなく目が回っていた。

審判「ミロカロス戦闘不能！コイキングの勝ち！よって勝者はリーリエ選手！」

試合終了のコールが鳴った。見事勝利を収めたコイキングはリーリエの元へと戻っていった。

リーリエ「お疲れ様です！コイキング！」

コイキング「コオ！！？」

シロン「コーン！！？」

ダイ「そ…そんな。僕たちの美しさが…」

マオ「やったああ！リーリエ！！！」

カキ「ナイス試合だったぞ！！！」

そのまま会場からはリーリエとコイキングに向けて大きな歓声と拍手が沸き起こった。おそらくコイキングの勝利を疑っている者が多かったのか分からないが、殆どの人はスタンディングオベーションで健闘を讃えていた。リーリエ達が退場するまで止むことない拍手に向かってリーリエは喜びを胸に大きく手を振り返した。

カスミ「どう？サトシ。リーリエの戦い」

サトシ「ああ、リーリエ。本当に強くなったんだな」

ポケモントレーナーとして戦うリーリエの姿にサトシ達も拍手を送ったのであった。

~~~~~

ポケモンセンターに戻ったリーリエはコイキングと一緒に誰もいない屋外プールで今日の試合を振り返っていた。

リーリエ「自分よりも大きなポケモンを相手に貴方は負けじと戦う姿はとてもカッコ良かったです。最後までわたくしの事も信じてくれてありがとう。またわたくしはポケモン達に助けられてばかりでダメですね。明日はもっと的確な指示を送れるように頑張ります」

そう言い終えた直後に勢いよく跳ねたコイキングは水しぶきをリーリエへと浴びせ始めた。

リーリエ「きやつ！もう／＼冷たいですよ！」

シロン「コーン!!？」

そうコイキングの方へと目をやると、コイキングは真剣な目でリーリエに何かを訴えるように見つめていた。

自分の頑張りだけではない。リーリエのお陰で助けられた場面はいくつもあつたと、そう言っているかのように感じた。

リーリエ「コイキング？わたくしが貴方の主人で良かったですか？」

その問いにコイキングは嬉しそうに飛び跳ねていました。明日も頑張ります！

第三十二話 最弱から最強へ

「ブイ？」

潮の香りが混じったイタズラ風が自分の目を隠すまでに伸びた前髪を思いつきり吹き上げた。風が吹く方へと視線を向けたイーブイの目に写ったのは大きなバトルドーム。そこから絶え間なく鳴り響く歓声が響いていた。

うずまきカップ2日目。問題なく勝ち進んだリーリエは遂に準決勝への駒へ進めた。『さあ、出張うずまきカップ！残す試合はあとわずか！果たして優勝のしんびのしずく』を手にするのは一体誰なのか！まもなく準決勝第一試合が始まります！』

観客のヒートアップした歓声はリーリエの耳にしっかりと届いていた。ここまで一

緒に力を合わせて戦ってきたコイキングとゼニガメに目を合わせた。

リーリエ「行きましょう。コイキング！ゼニガメ！」

リーリエの声に二体はそれぞれ返事を返したと同時にリーリエ達はバトルフィールドの方へと向かつて歩き出した。

一足先にバトルフィールドへと立ったリーリエは次の対戦相手に心を躍らせていた。サトシとカスミ。この二人も順当に勝ち進んでいればいつかは当たることは予想はついている。

そして、ついにその時が来た。

『準決勝第一試合！サトシ選手対リーリエ選手！』

リーリエ「準備はいいですか。ゼニガメ！」

ゼニガメ「ゼニツ!!？」

サトシ「ゼニガメか。それなら俺はこいつだ。ワニノコ！君に決めた！」

ワニノコ「ワニワニ」

カキ「ワニノコか！」

スイレン「あの子可愛い！踊ってる！」

ロトム『踊るワニノコ！データアップロードロト！』

早くもこのような形でサトシとの再戦となるリーリエであったが、このバトルはいつもよりも実力が伴われる試合になると言われても過言ではなかった。それは研究所の時はアローラにいた頃から良く知るピカチュウとシロンとのバトルであったため技や癖などあらかじめ情報をお互いに知った上でのバトルであったからだ。

この試合は事実上、トレーナーの腕が試される模範解答が付いていない白紙のバトルなのだ。

『!!試合開始!!』

?リーリエVSサトシ?

リーリエ「ゼニガメ!【みずてつぼう】です!!?」

ゼニガメ「ゼニツ!!?」

サトシ「ワニノコ!こつちも【みずてつぼう】だ!!?」

ワニノコ「ワニヤア!!?」

共に放たれた水鉄砲は一直線に水面を切りながら互いの攻撃を打ち消しあった。

『両者放たれた水鉄砲は相打ちに終わった！共に攻撃力は互角のようだ！』

ジョウト地方から幾多の試合経験を積んでいるサトシのワニノコは進化はしていないが、進化系ポケモン相手にも劣らないパワーは持っている。しかし、ゼニガメ消防団として日々訓練し続けているゼニガメも負けていなかった。相殺された水鉄砲の冷たい水しびきが肌に優しくかかる中、リーリエは次の攻撃を支持した。

リーリエ「【こうそくスピーン】!!?」

ゼニガメ「ゼニイ!!?」

技を打ち終えたにも関わらず、甲羅に潜ったゼニガメは身体を横回転し始めると、そのままワニノコに向かって突進し始めた。速攻攻撃を仕掛けたゼニガメにさつきまで陽気に踊っていたワニノコは鋭く目を尖らせて静かにサトシの支持を待っていた。

サトシ「ワニノコ！【かみつく】攻撃!!?」

ワニノコは大きく開いたその牙でゼニガメの甲羅をガツシリと受け止めてみせた。

『なんとワニノコ！その大きな口でゼニガメの攻撃を受け止めた！その鋭く尖った歯で身体を固定されたゼニガメは身動きが取れないぞ！』

実況者の言う通り、回転を止められたゼニガメは抜け出そうと身体を大きく揺らし始めたのだが、甲羅の溝にガツシリとはまったワニノコの歯はそんなゼニガメを逃そうと

はしなかった。

サトシ「いいぞワニノコ！そのまま離すなよ！」

それでも、逃げ出そうと藻がこうとするゼニガメを見つめながらリーリエは突破口を探り当てた。

リーリエ「ゼニガメ！ワニノコの口に向けて【みずてつぼう】です!!?」

ゼニガメ「ゼ…ゼニイ!!?」

リーリエの支持を聞いたゼニガメは頭をワニノコの口の方へと向けると、思いつき水鉄砲をお見舞いしてやった。

口の中へと溢れかえるぐらいの水量に顎が外れそうになるワニノコはよろけ始めると、体勢を崩した瞬間にゼニガメはジェット噴射みたいにワニノコの口からの脱出に成功した。

リーリエ「ゼニガメ！そのままもう一度【みずてつぼう】です!!?」

脱出に成功したゼニガメはさらに空中から狙いを定めてワニノコに向かって水鉄砲を放った。

サトシ「ワニノコ！躲して【きりさく】攻撃だ!!?」

怯んだワニノコであったが、サトシの声を聞くと一瞬にして我へと返った。そのまま迫ってくる水鉄砲の先にいるゼニガメを見つけると、ターゲットに向かって大きくジャ

ンブしてゼニガメの攻撃を躲した。

ゼニガメへと接近したワニノコは鋭利な爪を立てると大きく切り裂いた。

ワニノコ「ワニヤア!!？」

ゼニガメ「ゼニツ!!」

ワニノコの攻撃を受けたゼニガメはそのまま浮島へと叩きつけられてしまった。急に当たりやすい攻撃でもあつてその威力にゼニガメはかろうじながらも、立ち上がつてみせる事が出来た。

リーリエ「大丈夫ですか!!？」

リーリエの声にゼニガメは何とか返答する。しかし、バトルに対して手加減するのは懸命に立ち向かっている相手に失礼な事だと思つているサトシはトレーナーになつたばかりのリーリエに対してもその攻撃の手を緩めようとはしなかつた。

サトシ「【みずてつぼう】!!？」

リーリエに次の手を考えさせる間も与えないようにすぐにサトシは攻撃の支持をワニノコに送つた。

リーリエ「でしたら!」

ワニノコの水鉄砲がゼニガメに直撃するその瞬間、ゼニガメは一つ水柱を立てるとそれを体に纏わせながら勢いよくジャンプした。

リーリエ「ゼニガメ! 「アクアジェット」です!!?」

ロトム『ゼニガメは「アクアジェット」を使えるロトか!!!』

通常では覚えない水タイプの新制攻撃でゼニガメはワニノコの攻撃を躲しながら腹部めがけて飛び込んだ。

ワニノコ「ワニヤア!!!」

攻撃を受けたワニノコはそのまま後方へと吹き飛ばされてしまった。効果はいまひとつであるが、そのパワーにサトシとワニノコは驚いていた。しかし、その中でリーリエとこうして公式試合する事に微かな喜びがあった。

サトシ「水の中へ潜れ!」

ワニノコ「ワニヤ!!?」

『水タイプならではの戦法! ワニノコは水中に潜って身を隠しました!』

ワニノコに攻撃を決めた後もゼニガメは「アクアジェット」で辺りを泳ぎながら、ワニノコの出処を探り始めた。警戒しながら見渡すも、互いの攻撃が止んだ事で歓声も聞こえない静寂に満ちた空間がリーリエとゼニガメに不安と緊張感を仰いでいく。

その感じがピークになってきた直後にワニノコはゼニガメの背後から飛び出してき

た。

リーリエ「後ろです！ゼニガメ！」

サトシ「ワニノコ！【かみつく】だ!!?」

素早く気づいたリーリエであったが、背後から攻撃に急に体を後転させる事が出来なかつたゼニガメは再びワニノコの頑丈な顎に捕まってしまった。

サトシ「ワニノコ！【こわいかお】!!?」

ワニノコ「ワツ!!?」

ゼニガメ「ゼニツ!!?」

ゼニガメが慌てて顔を出した瞬間を狙ってワニノコは鋭い眼光でゼニガメを睨みつけた。その迫力ある顔に怯んだゼニガメは一瞬にして固まってしまった。

サトシ「今だ！そのまま叩きつけろ！」

ワニノコ「ワニヤア!!?」

怯んだ隙にワニノコはゼニガメの甲羅を啣えたまま大きく首を振り回すとそのまま地面にゼニガメ叩きつけた。

リーリエ「ゼニガメ!!」

叩きつけられた衝撃に耐えられず、再び顔を出したゼニガメの目はグルグル回っていた。

審判「ゼニガメ戦闘不能！ワニノコの勝ち！」

まだ自分のポケモンでないためモンスターボールへと戻せないゼニガメの元へと駆け寄ったリーリエは優しく抱き抱えると、急いで自分のトレーナーサイドへと戻って行った。

リーリエ「頑張りましたね。ゼニガメ」

ゼニガメ「ゼニツッ……」

リーリエ「貴方の分まで頑張ります。ここから見ていて下さい」

シロンの励ましもあって元気を取り戻したゼニガメはシロンと一緒にリーリエの応援を始めた。そしてリーリエは二体目のポケモンが入ったモンスターボールを取り出した。

リーリエ「お願い！コイキング！」

コイキング「ココオ!!？」

『リーリエ選手の二体目はコイキング！ここまで圧倒的なパワー見せつけてきたコイキング！今回もどんなバトルを披露してくれるのか！』

コイキングの登場に会場にいる人から大きな歓声が飛びかかった。出場者の中でも

選出されにくいポケモンでもあって、ここまでのバトルを繰り広げてきたリーリエのコイキングの実力はこの場にいる多くの人達に印象付けていた。大きく飛び込んだコイキングは気合の入った目でワニノコと対峙し始めた。

サトシ「気を引き締めろワニノコ!このまま行こうぜ!」

ワニノコ「ワニワニ!!?」

サトシの声に一段と気合を入れ直したワニノコ。リーリエの次のポケモンが現れた事で試合開始のゴングがもう一度鳴り響いた。

リーリエ「たいあたり!」です!!?」

ワニノコ「ワニヤア!!!」

渾身のスピードが加わった体当たりがワニノコに向かってヒットした。コイキングの驚異のスピードを間近で見たサトシはこれには驚きを隠せないでいた。しかし、すぐに切り替えるとジャンプして空中にいるコイキングを捉えた。

サトシ「ワニノコ!【かみつく】で捕まえる!!?」

すぐにワニノコも攻撃を耐えてはコイキングに向かってジャンプした。しかし、ゼニガメとのバトルの中でワニノコのバトルスタイルを分析出来たリーリエには口を大きく空けて接近していくワニノコの行動は読んでいた。

リーリエ「コイキング!【じたばた】です!!?」

コイキングは大きく尻尾を揺らし始めると、そのまま接近してくるワニノコに向かって、その尾で往復ビンタのような攻撃で跳ね返した。

サトシ「ワニノコ！」

リーリエ「今です！【たいあたり】!!？」

そのままフィールドに叩きつけられたワニノコを起き上がらせる間も与えず、コイキングの体当たりによる追い討ち攻撃がワニノコに決まった。コイキングの怒涛の攻撃に耐えられずワニノコはそのままダウンとなってしまった。

審判「ワニノコ戦闘不能！コイキングの勝ち！」

『決まった！コイキングの渾身の体当たりにワニノコはダウン！両者共に残るポケモンは一体となった！』

サトシ「よく頑張ったなワニノコ！ゆっくり休んでくれ」

ピカチュウ「ピカチュウ!!？」

ワニノコ「ワニヤア!!？」

そう頭を撫でられたワニノコは嬉しさのあまりサトシの頭目掛けて嘯り付いた。久しぶりのバトルが楽しかったのか。負けはしたが二人にはとても満足がいくバトルが出来たみたいだ。もう一度、感謝を述べたサトシはワニノコをルアーボールへと戻し

た。

『さあ、サトシ選手！最後のポケモンは何か！』

サトシ「やるなコイキング！次はこいつが相手だ！ブイゼル！君に決め…」

ブイゼルの入ったモンスターボールを投げようとしたその時、別のモンスターボールから一体のポケモンが飛び出してきた。

ミジユマル「ミジユマ!!？」

ピカチュウ「ピカ!!？」

サトシ「おい！ミジユマル!!!」

『サトシ選手！最後のポケモンはミジユマルだ!!!』

マオ「あれ？」

スイレン「勝手に出てきちゃった！」

ミジユマルの登場に観客達からは最後のバトルともあって、大きな歓声が鳴り響いた。その歓声に応えるように観客に向かって大きく手を振り始めるミジユマルでいた。

これからバトルが始まるも知らない様子にサトシは頭を抱えていた。そんなミジユマルの様子が可笑しくてリーリエは少し笑ってしまった。

リーリエ「お茶目な子ですね。サトシ！」

サトシ「あ…ああ！まあ、いつか。頼んだぞミジユマル！」

ミジユマル「ミジユマ!!？」

本当に分かっているか分からないが、自信満々なその様子に心配の余地はないみたいだ。二体のポケモンが出揃った所で最後のバトルが始まった。

リーリエ「初めて見るの子ですが。焦らず行きましょう！【たいあたり】!!？」

コイキング「ココツ!!？」

又もや、先制して攻撃を仕掛け始めたコイキングは一直線にミジユマルに向かって突っ込んでいった。そのスピードはワニノコ戦のダメージを諸共しない様子であった。

サトシ「面白い！受けて立つぞリーリエ！ミジユマル！こっちも【たいあたり】だ!!？」

ミジユマル「ミジユマ!!？」

コイキングの根性に火を付けられたサトシは同じ技での真っ向勝負を仕掛けた。そんなサトシの熱に同じように灯されたミジユマルもコイキングに向かって突っ込んでいった。ぶつかり合う両者の体当たりはそのままお互いを後方へと飛ばした。

サトシ「ミジュマル!」【アクアジェット】だ!!?」

そのまま水の衣を纏ったミジュマルはコイキングへと向かって行つた。ジェット機のようなスピードが乗った先制攻撃はそのままコイキングを吹き飛ばした。

サトシ「次は【シエルブレード】だ!!?」

リーリエ「躲して【たいあたり】です!!?」

お腹に装備されているホタチを手に取ると、今度はそこに水で形状させた刃を纏わせると、続けてコイキングに向かつて行つた。

しかし効果はいまひとつであつたのが救いだったコイキングはダメージを受けながらも迫るミジュマルの姿を捉えられた事によりすぐに躲す事が出来た。

リーリエ「もう一度【たいあたり】です!!?」

攻撃を決め損ねて体勢を崩したミジュマル目掛けて、コイキングは突進して行く。

サトシ「ホタチでガードしろ!」

だがすぐに躲せないミジュマルをトレンドマークであるホタチを使わせてコイキングの体当たりを阻止させた。衝突した反動で弾き飛ばされた二体は後方へと押されて行く。

サトシ「良くやつたぞミジュマル!」

リーリエ「ミジュマルの性質を生かした見事な防御ですね」

サトシ「サンキューー！」

サトシの起点を生かした指示にリーリエは賞賛する。同じようにミジユマルとコイキングも互いの力を讃え始めていた。そして、サトシの次の指示が分かっているようにミジユマルは両手を大きく広げて大技を発動させる体勢へと移っていた。

サトシ「ミジユマル！【ハイドロポンプ】だ！！？」

ミジユマル「ミジユマ！！」

大きな水流を巻き上げたミジユマルはそれを一気にコイキング目掛けて放水された。

リーリエ「【はねる】です！！？」

コイキング「ココッ！！？」

リーリエ「【とびはねる】！！？」

サトシ「迎え撃て！【シエルブレード】！！？」

ミジユマル「ミジユ！！？」

巨大な水流を前に躲したコイキングはそのまま空中落下を加えたスピードでミジユマルに向かって突進して行く。それを迎え撃つようにしてミジユマルは攻撃を仕掛けた。

二体の攻撃力は直角である。ぶつかり合うその衝撃によりお互いは吹き飛ばされた。しまった。

マオ「相打ち！」

マーマネ「どつちが立ってるの？」

水面に浮かび上がった二体を見た審判のコールにより試合終了のアナウンスが流れた。

審判「コイキング戦闘不能！ミジュマルの勝ち！よって勝者はサトシ選手！」

サトシ「やったぜミジュマル！」

ピカチュウ「ピカチュウ！！？」

ミジュマル「ミジュマ！！？」

バトルに勝利したミジュマルはサトシの胸の中へと流星の如く飛び込んでいった。ミジュマルの強烈な体当たりを受け止めたサトシはミジュマルの頑張りを褒めながら頭を撫でいく。コイキングもリーリエに抱えながらシロンとゼニガメのいる方へと戻っていった。

リーリエ「お疲れ様ですコイキング。良く頑張りましたね」

シロン「コン！！？」

ゼニガメ「ゼニツ！！？」

コイキング「ココツ…」

バトルを終えたリーリエはサトシと一旦別れると、マオたちの方へと一人戻っていつ

た。

マオ「お疲れリーリエ！惜しかったね」

カキ「だけど熱い試合だったぞ！」

リーリエ「はい。どの子も良く育てられていました。やっぱりサトシは強いです／＼

／＼

その顔はバトルで負けた事よりもサトシとあれだけのバトルをする事が出来た喜びの方が強かった事を表していた。試合の勝ち負けだけでなく、負けた事から何かの経験を得た事の大切を知れる事が出来た様子からリーリエの成長の大きさを改めて知る事が出来たマオ達であった。

そして、遂に決勝戦のコールが知らされた。急いで観戦席へと座ったリーリエはいまから出てくる二人のトレーナーにエールを送った。うずまきカツプ決勝戦。戦うのはもちろんこの二人だ。

サトシ「遠慮しないからな！カスミ！」

カスミ「あんたがどれ程成長したのか。確かめてあげるわ！」

『決勝戦！サトシ選手対カスミ選手！試合開始！！』

サトシ「ゼニガメ！君に決めた！！」

カスミ「私はこの子よ！行くのよニョロトノ！！」

ゼニガメ「ゼニツ!!？」

ニョロトノ「トニョ〜ロ」

試合開始と同時に二体のポケモンが繰り出された。サトシはカントー地方で知り合ってから長年の友達のゼニガメ。一方カスミはニョロモの頃にゲットして、今はニョロゾの分岐進化による最終形態のニョロトノをくりました。

サトシ「久しぶりだな！ニョロトノ！」

サトシの声に気づいたニョロトノは陽気なダンスを踊り始めた。かつて一緒に旅をしてきた旧友との再会に喜ぶゼニガメとニョロトノは挨拶がわりのこの技を放ち始めた。

サトシ「ゼニガメ！【みずてつぼう】だ!!？」

カスミ「ニョロトノ！【みずてつぼう】よ!!？」

打ち出された両者の水鉄砲はそのまま相殺された

サトシ「やるな！ゼニガメ！【こうそくスピン】だ!!？」

その水しぶきの中を滑走とゼニガメは甲羅に潜り高速回転しながらニョロトノの方へと飛び出していた。

カスミ「ニョロトノ！【おうふくビンタ】!!？」

ニョロトノは突っ込んでくるゼニガメをそのまま弾き返した。返されたゼニガメは

頭と四肢を甲羅から出すと、すぐに体勢を立て直した。浮島に無事に着地したゼニガメであったが、ニヨロトノは腕を組みながら鋭い目つきでゼニガメを睨みつけていた。

カスミ「【いばる】よ!!?」

ニヨロトノ「トニヨ!!?」

ゼニガメ「ゼニ?」

サトシ「ゼニガメ!!!」

カキ「ゼニガメはどうしたんだ?」

ロトム『【いばる】によって混乱してしまっているロト!!?』

混乱し千鳥足になるゼニガメをサトシは必死で呼びかけるも正気が戻る気配がなかった。そこへ空かさずニヨロトノの攻撃が襲いかかってきた。

サトシ「しつかりしろゼニガメ!」

カスミ「ニヨロトノ!【みずてつぼう】!!?」

直撃を受けたゼニガメはそのままプールの方へと投げ飛ばされた。同じ水タイプ同士でも混乱状態に陥ってしまった分、完全に相手に主導権を握らせてしまった。その上相手は水タイプのジムリーダー。長年の付き合いでもあるカスミの強さやポケモン達のレベルの高さはよく知っている。常に綱渡りをしているかのような戦いに気を抜けてはいけないのだ。

サトシ「ゼニガメ!〔ハイドロポンプ〕だ!!?」

混乱状態は決してトレーナーの声を完全に遮断させる事ではない。そのため何度も呼びかける必要はあったが、力の籠ったサトシの声はゼニガメの耳へと届いた。瞬時にゼニガメは甲羅の中へと体を引つ込め始めた。

サトシと長年の付き合いであるカスミもサトシの強さやポケモン達のレベルの高さ。そして信頼度の高さは誰よりも知っている。混乱させただけで安心しきっていないかったカスミはすぐにニョロトノを構えさせた。高速回転させた甲羅の四方向から激しい水流が巻き上げられた。だが、声は届くも狙いが定まらないゼニガメの技はニョロトノとは外れた方へと向かってしまった。

カスミ「闇雲にやっても意味ないわよ!」

サトシ「狙いはニョロトノじゃないぜ!」

サトシの狙いは別にあつた。外れた〔ハイドロポンプ〕は天高く巻き上げられると、そのまま滝のようにゼニガメへと浴びせられた。水を被ったゼニガメは濡れた顔を拭うと鋭い眼でニョロトノへと向けた。混乱状態から見事抜け出させる事ができたのはその目を見れば分かっていた。

マーマネ「混乱が解けた!」

マオ「まさか自分に〔ハイドロポンプ〕を浴びさせて目を覚まさせたっていうの!!?」

カキ「無茶苦茶な事を考えるな。こう上手く行くもんでもないだろう！」

と言いつつもカキ達も彼なら自分たちも驚かせる戦術をやってくれるだろうとは期待していた。強さやレベルに信頼度。何よりもサトシと対戦して怖いのは常人には考えられない土壇場での発想力だ。

カスミ「ニヨロトノ！【とびはねる】よ!!?」

サトシ「ゼニガメ！【ロケットずつき】だ!!?」

高くジャンプしたニヨロトノはそのままゼニガメに向けて急降下しだした。そんなニヨロトノに向かってゼニガメも力一杯エネルギーを頭部へと貯め始めると、そのままロケットのように相手目掛けて突っ込んで行った。

両者の技が激突する。落下の加速分のパワーが加わっているニヨロトノが有利だと思えるが、一つの誤算がこの勝敗を左右させた。それはゼニガメの攻撃力が上がっているという事だ。

カスミ「あつ！ニヨロトノ!!!」

【いばる】の追加効果により攻撃力が上がった【ロケットずつき】はそのままニヨロトノの【とびはねる】を押しつけながら吹き飛ばした。強烈な一撃に叩きつけられたニヨロトノはその場でダウンしてしまった。

審判「ニヨロトノ戦闘不能！ゼニガメの勝ち！」

カスミ「やるわねサトシ！」

サトシ「まあな！さあ次来いカスミ！」

次のポケモンを出そうとカスミがモンスターボールを投げようとした瞬間、突如プールの中から大きなメカが現れた。

カスミ「何なの!!!」

メカの登場に驚くも頭部のコックピットが開くと、その中からまたしてもいつもの二人が姿を現した。

ヤマト「なんだかんだと聞かれたら」

コサブロウ「答えないのが普通だが」

二人「まあ！特別に答えてやろう」

ヤマト「地球の破壊を防ぐため」

コサブロウ「地球の平和を守るため」

ヤマト「愛と切実な悪を貫く」

コサブロウ「キュートでお茶目な敵役」

ヤマト「ヤマト！」

コサブロウ「コサブロウ！」

ヤマト「宇宙を駆けるロケット団の二人には」

コサブロウ「シヨツキングピンク桃色の明日が待ってるぜ」

ツボツボ「ボツツ!!？」

またしても現れた二人組。だが、サトシとカスミにとつては久々の登場を前に驚いていた。

サトシ・カスミ「ヤマト!!!コサンジ!!!」

コサブロウ「違う!だからコサブロウだつて行ってるだろ!!!」

カスミ「どうでもいい奴の名前なんて覚えることはないわ!」

コサブロウ「…そんなはつきり言わなくても…」

ヤマト「もう構うことはないわ!さつきと出場トレーナーのポケモンたちを根こそぎ頂くわよ!」

カスミの一言に胸が突き刺さり落ち込むコサブロウを宥めるようにヤマトはコサブロウの声をかけた。立ち直らせたコサブロウを引っ張ってヤマトと一緒にメカの中へと戻っていった。

サトシ「させるか!ピカチュウ!」
「10万ボルト」!!?
ゼニガメ!「みずてっぼう」だ!!?」

カスミ「出てきてサニーゴ!」
「トゲキヤノン」よ!!?」

ロケット団の目的が分かったサトシとカスミは一齐に攻撃を仕掛けた。突然の口

ケット団の登場に慌てて避難していく人達を避けながら観戦席にいたリーリエ達も急いでバトルフィールドの近くまで走って行った。

カキ「俺たちも行くぞ！バクガメス！【かえんほうしゃ】!!? ガラガラ！【ほねブーメラン】だ!!?」

マオ「アママイコ！【マジカルリーフ】!!?」

カキとマオ達の攻撃も加わるが、メカはとても頑丈に作られており、すべての攻撃を跳ね返してしまう。

スイレン「ダメ！効いてない！」

マーマネ「あのボディ固すぎる！」

コサブロウ「当たり前だ！この日のために有り金を全て使って作ったんだからな！」

ヤマト「今日という今日は失敗するわけにはいかないわ！全てはサカキ様のために！」

メカの中から現れた複数のマジックハンドがリーリエ達のポケモン達に目掛けて飛んできた。

シロン「コーン!!!」

ゼニガメ「ゼニツ!!!」

リーリエ「シロン!!!ゼニガメ!!!」

捕まったシロンとゼニガメはメカに内蔵されたカプセルの中へと閉じ込められてしまった。二体を助けようと前に出たリーリエであったが、暴れまわるメカの振動によって起きた波に足場が揺らされてしまい、そのままプールの中へと足を踏み外してしまっ

た。

リーリエ「きやあああ!!!」

マオ「リーリエ!!!」

コイキング「ココツ!!?」

リーリエ「……………」

水の中へと放り出されたリーリエはなんとか這い上がろうと必死にもがくも、嵐のよう

うに荒ぶる波の勢いに逆らえずどんどん呑み込まれてしまっていた。沖に上がろうと手を伸ばすリーリエの手の先に一体の黒い影が見えた。視界がぼやけているが薄っす

らと見える赤いボディに誰かはすぐに分かった。

コイキング「ココツ!!?」

リーリエを見つけたコイキングは必死に尾びれを掻き回しながら一刻も早くリーリエの元へと辿り着いた。急いでリーリエを抱えて戻ろうとするが、底へと引きずり込もうとする波が容赦無く襲いかかる。時間が無い。空気の泡が漏れないように口を抑え込むリーリエの顔はみるみる青くなっていく。苦しそうにしているリーリエにコイキングは必死に泳ぎ続ける。だが…

リーリエ（ゴボツツ!!!）

コイキング「ココツ!!?」

身体を波に大きく揺さぶられてしまった事でその反動で全ての息を吐き出してしまった。そのまま気を失っていくリーリエにコイキングの焦らせる。そんなリーリエとコイキングを嘲笑うかのようにして波はどんどん光が届かぬ底へと引きずり込もうと襲いかかる。

カスミ「早くしないとリーリエが！」

サトシ「ゲッコウガ！頼っ……」

リーリエを助けるべくサトシは一つのモンスターボールを投げようとしたその時……

!!!
ギヤアアアアアアア!!!

水の中から神経を震えさせるほどの大きな鳴き声が会場内に響き渡った。何事だと辺りを見渡すと青白く光る水の中から一体のポケモンが姿を現した。

ロトム『ギヤ……ギヤラドスロト!!!』

サトシたちの目の前に現れたのは凶悪ポケモンのギヤラドスであった。しかし、そのギヤラドスはカスミのポケモンではなかった。みんなが釘付けに見つめるその先には、ギヤラドスの青く長い三叉の角に跨っているリーリエの姿があった。

リーリエ「ここ……ここ……は？」

気がついたリーリエは今の自分の状況を確認しようと思いを見渡し始めた。リーリエが目覚めた事に気付いたギヤラドスはその凶悪なイメージとかけ離れたような笑顔をリーリエへと向けた。

リーリエ「ギャラドス…もしかして！」

何処か漂う雰囲気は自然とリーリエに教えてあげていた。確信付いたリーリエはギャラドスに指示を出す。

リーリエ「ギャラドス！シロンとゼニガメを助けて下さい！」

ギャラドス「ギヤア!!？」

リーリエの指示を聞いたギャラドスはロケット団の方へと向かっていく。その様子を見たマオ達も突然現れたギャラドスの正体がわかってきた。

マオ「まさか!!！」

スイレン「コイキング。進化したの！」

リーリエを助けたいという一心で新たな姿を手にしたコイキング…いやギャラドスは力一杯ロケット団のメカに向かって体当たりを仕掛けた。

ヤマト・コサブロウ「うわあああ!!！」

物凄いパワーに押されたメカは蹠踉めき出したその隙にシロン達が捕らわれていたカプセルをギャラドスは鋭い歯で噛み砕くと、粉々に砕けた中からシロン達はリーリエの元へと帰ってきた。

リーリエ「シロン！ゼニガメ！良かったです！」

シロン「コーン!!？」

ゼニガメ「ゼニツ!!?」

シロン達の無事を確認したギャラドスは怒りを露わに鋭い目つきでロケット団を睨みつけた。自分の主人と仲間を傷つけたのであれば許すわけがない。

ヤマト「ねえ…これって」

コサブロウ「非常にまずい状況だよな…」

ギャラドスの凶悪なオーラに身震いするロケット団にギャラドスは強烈な雄叫びを上げ始めた。

リーリエ「ギャラドス!〔りゅうのいかり〕!!?」

ギャラドス「!!!ギャアアアアアア!!!」

そのままギャラドスは青白い炎を吐き出すと、あつという間にメカは包み込まれてしまった。そのままメカはその熱に耐えきれず、オーバーヒートを起こすと、そのまま大爆発を起こした。

ヤマト「よりによって進化するなんて!!!」

コサブロウ「ずるいぞ!!!」

ヤマト・コサブロ「やな気持ちいい!!!」

そのままロケット団はいつも通り空高くへと吹き飛ばされました。

ケット団の乱入もあって、慌ただしくなつたうずまきカップも無事に閉会式を始めることができた。優勝商品の《しんぴのしづく》を手にサトシは満面の笑みを浮かべていた。

マオ「サトシ！優勝おめでとう！」

サトシ「まあね！」

カスミ「もうゲツコウガが強すぎよね。ねえ貴方！うちのジムに来ない？」

ゲツコウガ「コオウガ……」

サトシ「ダメに決まってるだろ！」

カスミ「もう冗談よ！」

サトシの慌てぶりを見てみんなは思わず笑い出してしまった。

リーリエ「サトシ優勝おめでとう！」

サトシ「サンキューー！リーリエもギャラドスへの進化おめでとう！」

リーリエ「ありがとうございます！」

ギヤラドス「ギヤア♪」

優勝はできなかったとしても、強くなりたいたいというギヤラドスの背中を押すことが出来てリーリエも優勝したぐらいの嬉しさを表現した。そんなリーリエの背中を押し出してちよつかいを出すギヤラドスと目を合わせた。

リーリエ「これからも宜しくね。ギヤラドス」

ギヤラドス「ギヤア!!？」

それにギヤラドスは水平線の彼方まで聞こえるような声を上げて返事を返した。

見事コイキングからギヤラドスへと進化を遂げさせる事ができたリーリエ。そんな二人の冒険もこれからも続いていく。

第三十三話　デイグダの穴の荒くれ者

うずまきカップを終えた翌日、ハナダジムへと戻っていったカスミと別れたリーリエ達はクチバジムへと向かった。再戦との事もあつて気合十分に臨んでいたはずだったのだが……

リーリエ「そうですか……残念でしたねシロン」

シロン「コン……」

ジムを訪れた境に門番をしていたジムトレーナーからマチスは急ぎの用でクチバジムの暫くの間、休館する事を知らされた。思わぬタイミングにやる気を漲らせていたリーリエとシロンは肩を落とした。ジムリーダーが不在であるならジム戦は出来ない。リーリエ達は今後について考えるべく再びポケモンセンターへと戻っていった。

サトシ・マーマネ「美味い！」

スイレン「マオちゃん！これ美味しいよ！」

マオ「ありがとう！アイナ食堂の新作メニュー……みんなにこうして食べて貰えてよかった！」

お昼の時間までまだ早い、腹の虫が想像以上に鳴り響くサトシとマーマネの様子か

ら昼食を取る事にした。食堂ではなく中庭に出たリーリエ達はマオが腕によりをかけた料理を無我夢中に頬張っていく。

成長したのはリーリエだけではない。卒業後、店の手伝いをしながら料理の修行をしてきたマオも料理のレパートリーを増やしながらもいつかアローラで一番の店にするためべく奮闘していたのだ。

サトシ「マオ！このコロツケも凄んげー美味いよ！」

パチリスのように頬を膨らませているサトシにマオは微笑みながらリーリエの方へと目をやった。

マオ「サトシ！それはリーリエが作ったんだよ」

サトシ「えっ!? そうなの？」

リーリエ「あっ／＼はい！」

もつと女の子らしさを磨こうとマオに少しずつ料理を教わっていたリーリエが振舞ったコロツケを口の中に一杯に詰め込んだサトシは一気に食べきると改めて料理の感想を述べた。

サトシ「美味かったぞ！リーリエ！」

リーリエ「あ／＼ありがとう／＼／＼」

初めて誰かのために作ったため、若干の不安があつたが、サトシの率直な感想にリー

リエは嬉しかった。

マーマネ「それでこれからどうするの？」

マチスが暫くの間、不在であるならクチバシテイに長居する理由はなかったため、リーリエ達は他のジムを巡ってから再度クチバジムに挑む事にした。そうなると、ロトムはカントーのマップを表示すると、此処からの最短ルートを計測し始めた。

ロトム『ここからなら、ヤマブキシテイかタママシシテイが近いロト！』

指定されたのは二つのルート。以前訪れたヤマブキシテイのジムと東西に位置するタママシシテイのジムの二箇所だった。選択肢を設けられた事に悩むリーリエにサトシは口を開いた。

サトシ「だったらタママシシテイのタママシジムならどうだ？リーリエ！」

リーリエ「タママシジムですか？」

サトシ「ああ！タママシジムのエリカさんは草タイプの使い手なんだ。リーリエの今の手持ちからしてタママシジムの相手に相性が良いからな！シロンもそうだろう！」

シロン「コン!!？」

草タイプ。確かにリーリエの手持ちの中でもそれと対等に戦えるポケモンはいる。一度ジム戦の敗北を覚えてしまっているポケモン達もいるため、再挑戦を兼ねて相性的に負担が見えないタママシジムが良いのかもしれない。

サトシ「だけど、相性だけでどうにかなる試合は無いつて事はリーリエもわかってい
るはずだ！旅をしながらしつかり対策を一緒に練って行こうぜ！」

ロトム『いつも無茶なバトルを仕掛けてるサトシが言うと言力がないロト！』

論破され顔を赤くするサトシにリーリエ達は笑ってしまった。相性だけで勝敗が決
まる訳がない事は十分に分かっている。こうしてリーリエ達の次なる目的地はタマム
シシティと決めたのだ。

今後の旅の目的を決めたリーリエ達は出発するべく後片付けを始めた。すると、どこ
からともなく地中から覗き込んできた一体のポケモンがリーリエ達の前へと現れた。
それに連なるようにしてまた一体また一体と顔を出してきた。

マオ「何？この子達？」

アママイコ「アーマイ？」

スイレン「ポケモン？」

『デイグダ もぐらポケモン

地面タイプ

暗いところを好む。ほとんど地中で過ごす光の届かない洞窟の中ではよく顔を出している。デイグダが通った跡の大地は程よく耕されて最高の畑になると言われている』

『ダグトリオ もぐらポケモン

地面タイプ

デイグダの進化系。凄い力の持ち主でどんなに硬い地面でも地下100キロまで掘り進んでいく事が出来る。三つの頭が互い違いに動くのは周りの土を柔らかくして掘りやすくするためでもある』

カキ「俺の…俺のカツラを被って下さい！」

ダグトリオ「ダグ？」

サトシ「こつちのダグトリオはツルツルなんだよ」

アローラのダグトリオと違って金色の髭が生えていない事に虚しさで涙を流すカキは自分が持つ金色のカツラをそっとダグトリオの頭に被せてあげた。何のことか分からない様子でいるダグトリオの前で号泣するカキをサトシはなだめ始めた。

デイグダ　　デイグダ　　ダグダグダグ

リーリエ「まるで歌を歌っているみたいですね！」

シロン「コーン!!？」

そんなデイグダ達の合唱会を眺めていると、こちらに向かって大きな笛音を鳴り響かせるジュンサーの姿が見えた。

ジュンサー「コラー!!! 貴方達止まりなさい!!！」

サトシのゼニガメ「ゼニガメガア!!？」

ジュンサーの声に気づいたデイグダ達は慌てて一目散に地中へと逃げて行つた。

ジュンサー「逃げられちゃったわね」

サトシのゼニガメ「ゼニツ!!？」

サトシ「何があつたんですか! ジュンサーさん！」

ジュンサー「サトシ君。あのデイグダ達のお陰で大変な事になってるの！」

~~~~~

カキ「なんだこれは……」

マーマネ「僕たちが今朝通りかかった時はこんな事になっていなかったよね！」

訳を聞いたリーリエ達はジュンサーに連れられてポケモンセンターの外へと出てみると、地面が大きく掘り返されており至る所が穴だらけになっていた。朝見た違う風景に驚くりーリエ達は突然現れたデイグダ達の姿が頭の中を過っていた。

デイグダやダグトリオは地下百キロまで掘り進んでしまったため、それが原因となり地盤が緩んで地震を引き起こしてしまう。この事態の大きさの深刻さを理解したりーリ

工達はジュンサーと協力してこの事件を突き止める事にした。各々に意見を述べ合う中、そんなリーリエ達の後ろから一人の男性の声が聞こえた。

??? 「デイグダ達はここから近い洞穴に生息しているんだ。その洞穴は掘り進んで行ったデイグダ達によって造られたクチバシティとニビシティを繋げた地下通路となったんだ。それに更して、その洞穴は『デイグダの穴』と呼ばれるようになった」

自分たちに言っているか。その声に気づいたリーリエ達はその方角へと振り返えてみると、スラツと立っていたその見覚えのある二人の人物の顔にリーリエ達はその者達の名前を叫んだ。

ユーゴ 「久しぶりだね。みんな」

リーリエ 「ユーゴさん!!!」

アイラ 「ヤッホー♪サトシ！久しぶり！」

サトシ 「アイラ!!!」

~~~~~

思わぬ再会にリーリエ達は自然とユーゴとアイラの元へと向かった。アローラ祭で行われた団体戦で二人の強さの貫禄を感じたりリーリエ達は向かい合うだけでも緊張が走ってきた。そんな中、何を言えば分からないリーリエ達の前に出たサトシは事情を知っている素振りを見せる二人に訳を聞き始めた。

サトシ「つまり：ユーゴさんにもダークポケモンの調査を……」

アイラ「そう！彼の實力は天下一品よ！加入理由なんて聞くまでもないわ！」

話を聞くとアローラ祭が終わった後、実際に戦ってユーゴの強さを知ったアイラはすぐに彼にもダークポケモン調査の依頼を頼みに行ったそうだ。サトシと出会った時と比べると、ダークポケモンの存在を他言せず、協力を要請しなかったアイラからしてその行動に疑問を浮かべていた。

アイラ「それと：サトシ君♪」

サトシ「???」

そんなサトシに和かに近づいていくアイラは彼に向かって顔を覗かせた。その笑顔の裏に黒いオーラが漂わせながらだ

アイラ「ダークポケモンの事は内密にしてと言ったよね。なのにどうしてあの子達に

喋っちゃった訳？」

「ダークポケモンの存在を言わない事を約束していた事もあってサトシはそんなアイラから少し目線を逸らした。弁解の余地を与えないと言わんばかりかアイラは殺気を忍ばせた笑顔を向けると距離を詰めてきた。ユーゴにも協力を要請した自分はもうなんだと思つたが約束は約束だ。」

サトシ「違うんだよアイラ。リーリエ達も無関係とは行かなくなつたんだよ」

サトシの言葉にアイラは少し顔を歪めると、詳しくサトシの話に耳を傾けた。ダークオーラが見える。それも裸眼でとの事もありアイラは少し考え事を始めた。

「オーレを救つた英雄の仲間にと似た眼を持つ少女もいるとの情報もある。また裸眼でダークオーラが見える淡い金髪の少女がいるとの知らせを受けていた事を思い出したアイラはリーリエの姿を確認した。」

アイラ「確かに前にアランが言っていた通りね」

サトシ「アランを知ってるの!?!?」

アイラ「同じダークポケモン調査隊員よ!当たり前じゃない!」

アローラ祭でもアランと親しげにしていた様子を見ていた事もあり、ダークオーラが見える少女はリーリエである事に間違いない。

アイラ「その話が本当なら…見せてくれない」

リーリエ「見せるって…何をですか？」

アイラ「貴方が捕獲したとおもわれるダークポケモンよ！」

そう言われるとリーリエはバックの中から一つのモンスターボールを取り出した。中から出てきたのはリーリエ達に背を向けては無愛想にこちらを見つめるズルズキンであつた。

ズルズキン「ズツ…」

ズルズキンが現れるとアイラはすぐに調べ始めた。ダークオーラは完全に消滅している事がわかつたアイラはそのままズルズキンの様子を観察し始めた。特に何とも思わないズルズキンはそのままそっぽを向くと静かに居眠りを始めた。その態度にリーリエは注意するも聞く耳を立てようとしなかつた。

マオ「あはは…」

マーマネ「ズルズキン…全くリーリエの言うこと聞いてくれないんだよね」

若干、空気が怪しくなつたと感じたマオとマーマネは急いでフォローに回つた。しかし、その二人の発言によりアイラは疑いの眼をリーリエの方へと向けてしまった。

アイラ「貴方…本当にダークオーラを見たの？」

リーリエ「えっ…」

アイラ「ダークオーラはね。心を許したトレーナーと一緒にいる事でその閉ざされた

心の扉を解放させてあげることができないリライブっていう解除法があるの。何も特別な事をしていなければ、貴方のズルズキンがダークオーラから解放されるのはその方法しかないはずなのに……どうしてズルズキンは貴方に懐いていないの？」

リーリエ「そ……それは」

オツキミ山でダークオーラを纏わせていたズルズキンを見た事もあの時に放つていた技がダーク技だとしたら説明はつく。自分が見た物に間違いはないと分かっているが、その証拠がない。ダークポケモンについて完全に理解をしている訳でもないため反論ができなかった。俯くリーリエに飽きたアイラは頭を掻き始めた。

アイラ「ただの見間違いよ。手懐けられてないそのズルズキンの愛想の悪さからそう目に写ったんじゃないの？」

すると突然に身体中から電気が走った様な感じにサトシ達は襲われた。電気タイプポケモンによるものではない。その原因がわかったサトシ達はみんな揃ってリーリエの方へと視線を向けた。アイラの一言に逆鱗が振れたリーリエの目は死んだ魚のよう冷たい目をしていて。その嫌な感じにシロンも恐る恐るリーリエから離れていった。そのダークな感じは離れにいるズルズキンも目を見開きながら嫌な汗を少し流していた。

リーリエ「自分のポケモンと心を通わせられていない原因は主人であるわたくしにあ

ります。初めてお会いした貴方にズルズキンの事を悪く言われる筋合いはありません！

リーリエが怒った理由はズルズキンの事を悪く言ってくれたことだった。自分に懐かないポケモンであっても、大切な仲間である事に変わりないリーリエにとってはそれは自分の事を悪く言われるよりも許さない事であった。

アイラ「ふーん。見た感じ貴方と仲良くなれそうな気配なんて一ミリも感じないけどね」

リーリエ「そうやって貴方みたいに直ぐに見切りをつけるような事はしませんので心配しなくとも大丈夫です！」

アイラ「心配じゃなくて忠告ですよ！」

リーリエ「あーそうですか！あーそうですか！お気遣い頂きありがとうございますね！」

サトシ「落ち着け二人とも！」

エスカレートしていくリーリエとアイラの口論の間に入ったサトシは二人を止めた。中立の立場にいるサトシの声に我に返ったリーリエは自分の言動に驚き、恥ずかしくなり顔を赤くした。

ユーゴ「言い過ぎだったぞ。アイラ」

アイラ「だけど、彼女の話が嘘だったら……」

ユーゴ「リーリエさんの話が本当という証拠も無ければ嘘だという証拠もないだろ。君がやっているのはただの尋問だ」

アイラ「……………」

ユーゴに言われた事が胸に刺さったか。反省の顔を浮かべてはリーリエと同じように顔を赤くした。

ユーゴ「とにかく、デイグダ達が街に出て来た理由は実際にデイグダの穴に向かった方が早いかもしれない」

サトシ「そうですね！ だったらそこへ行きましょう！ 考えるよりも目でみた方が早い！」

ピカチユウ「ピカチユウ!!?」

程通りが済んだ事で話題を戻したみんなはユーゴの言うデイグダの穴という場所へと向かう事にした。

デイグダの穴の出口はニビシテイへと続いているため抜け穴として通路に使用されたりもする。そのためランプが設備されているがその全てが消灯している。何者かが意図的に消したのか分からないが、デイグダ達が暴れ出したのと何か関係があるかもしれないと思う。薄暗さに怯えるシロンとゼニガメを抱えながらあまり慣れないデコボコした地面を歩いていく。その覚束ない様子を見たアイラは一体のポケモンをモンスターボールから解き放った。

アイラ「ルクシオ〔フラツシユ〕!!?」

ルクシオ「シオ!!?」

アイラのルクシオによる蛍光が回り一面を照らした。これで視界が良くなった四人は迷わず奥へと探索する事が出来るようになった。地下水脈が滴る音だけが鳴り響く様な静けさに四人の警戒心は強くなる。その証拠にある気配に気づいた四人は一斉に地面の下へと視線を向けた。

サトシ「ダークポケモンかもしれない。気をつけるよ!」

ピカチュウ「ピカピカ!!?」

その気配にピカチュウにシロン。サトシのゼニガメと消防団のゼニガメが四方八方に囲む中心から一体のポケモンが飛び出した。

ナツクラ「デイグ!!?」

ユーゴ「なんだ…デイグダ達か」

アイラ「何よ…脅かさないでよ」

デイグダの登場に安心した一同であったが、何処となく慌ただしい様子に嫌な気を感じた。そんなデイグダにピカチュウは話しかけた。

デイグダ「デイグダ!!?」

ピカチュウ「ピカ!!?」

デイグダ「デイク!!?」

サトシのゼニガメ「ガアメ!!?」

シロン「コーン!!?」

ピカチュウ達の声に不安がついていたデイグダの顔から笑顔が戻った。怖い思いはあったが、それよりも洞窟の中へと進むリーリエ達が心配であったのかもしれない。そんなデイグダにリーリエはデイグダと視線を合わせようと前に歩いていくと、そのまましやがみ込み始めた。

リーリエ「ありがとうデイグダ。ですけど心配しなくても大丈夫です。貴方が暮らしたこの場はわたくし達が必ず取り返してみせます!」

その言葉に元気を貰ったデイグダは小さく歌い始めた。その声にシロン達も思わず

その場ではしやぎ始めた。緊張感や不安から解放されたデイグダの様子を見たアイラはリーリエの行動に驚いた。原因を片付ければデイグダ達の生活は元には戻る。ただし、事件は解決してもデイグダ達の心の傷は解決されないままに終わる。それを考慮した上での行動では無いかもしれないが、それを自然とやるリーリエの心の温かさにアイラは感心を持ったのだ。

アイラ「大人しく見えて大した自身ね！」

リーリエ「えへへ／＼」

そう照れ臭そうになると、突然と地響きが起こり始めた。持ち堪えなければ倒れてしまう大きな揺れの中、デイグダとは別のポケモンが急にリーリエ達の目の前に現れた。

!!!
!!!ドリュウユウウウウウ!!!

両腕と頭に装備されている鋼の様な硬いボディを身につけるそのポケモンはリーリエ達の前へと現れた。

サトシ「あいつはドリュウズ！」

ピカチュウ「ピツカ!!？」

『ドリユウズ ちていポケモン

地面・鋼タイプ

鋼に進化したドリルは鉄板をも砕いてしまう破壊力を持っている。トンネル工事では大活躍する』

リーリエ「あっ!!!」

サトシ「どうしたんだリーリエ!」

ドリユウズのデータを解説し終わったその時、ドリユウズを見つめたリーリエは何かを思い出したかのような声を上げた。その様子をみたアイラはすぐにオーラサーチャーでドリユウズをスキャンリングし始めた。スキャンリングし終えたアイラは驚くようにしてリーリエの方へともう一度振り返った。

『ビビッ！研究所の時にアップデートして貰ったオーラサーチャーが反応しているロト！』

「それが反応しているって事は……」

研究所から出発する前の日にククイ博士から新しくバックアップされた事によりダークポケモンのオーラ感知出来るようになったロトムはドリユウズをダークポケモンと認定した。モンスターボールを片手に身構える四人はドリユウズの背後に潜む怪しい影を見つけた。薄暗い洞窟の中でははつきりとその顔は見えなかったが、アイラのルクシオの「フラッシュ」が眩く辺りを照らす範囲を広げた。今度ははつきりと見えたその顔にリーリエは思い出したかのように眼を見開いた。

サトシ「誰だお前ら！」

ヘボイ「hey！さすらいのミラーボの兄貴の名前を知らないなんて飛んだ時代遅れも居たもんだな！トロイ！」

トロイ「そうだな！ヘボイ！オーレではその名を知らない奴なんていないぜ！」

サトシの返答に対し茶化すようにして答える二人のゴロツキの後ろにいるアフロヘアーが特徴的な人物は前へと出た。間違いはなかった。ダークポケモンを扱うトレーナーの一人、ミラーボだった。

ミラーボ「落ち着きなさい。あんた達！あらか？どこかの誰かと思っただけど、久しぶりねホワイトちゃん」

リリーエ「……………」

ミラーボはリリーエを見つけると手を振りながら和かに挨拶をした。その挨拶に対しリリーエは返す気もならず、ただあの時の光景を思い出しながら冷や汗を流してはミラーボを睨みつけるようにして見つめていた。

サトシ「知ってるのか？」

ロトム『あいつらはダークカイリユウの時にいた奴らロト！』

アイラ「ミラーボ……」

聞き覚えのあるその名前にアイラは声荒げた。

アイラ「あんた！元シャドー幹部の一人よね！」

ミラーボ「んゝ私の名前どころか組織の名を知っている所、あんた国際警察か何か？まあ、これから痛い目に会う奴に説明しても意味ないわよね！ドリュウズ！やつておしまい！」

ドリュウズ「ドリュウズ!!!」

鉄のように硬い両腕の鉤爪を大きく広げると、大きく身構え始めた。戦闘に入るもそのドリュウズの目からは誠意というものが感じ取れなかった。命令のまま、ただ目の前の相手を叩き潰す事しか見れない悲しい眼をしていた。

ドリュウズを助けるべくリーリエはモンスターボールを取り出した。

リーリエ「出てきて下さい！ヒノアラシ!!!」

ヒノアラシ「ヒノツ!!？」

鋼タイプの弱点となる炎タイプのヒノアラシを繰り出したリーリエに続いてサトシも踏み込んだ。

サトシ「なら俺もだ。行けえ！マグマラシ!!!」

マグマラシ「マグツ!!？」

その進化系のマグマラシを繰り出すと、二体は背中から猛烈な火柱を立て始めた。力強く燃え上がるその炎に怯むことなく睨みつけるドリュウズにヒノアラシとマグマラシも負けじと睨み返した。

サトシ・リーリエ「【かえんほうしゃ】!!？」

指示を聞いた二体は高くジャンプすると、ドリュウズに向けて火炎放射が放たれた。ダブルで放たれた炎はまるで巨大な生物のように大きく揺らめきながらドリュウズの

方へと迫っていった。

ミラーボ「ドリリュウズ！【ドリルライナー】!!?」

そんなドリリュウズも大きく回転し始めるとそのまま火炎放射を振り払いながら一直線に二体に向かって走っていった。

サトシ「マグマラシ！【つばめがえし】だ!!?」

リーリエ「ヒノアラシ！【二トロチャージ】です!!?」

接近して行くドリリュウズに向かって二体も一斉になつて飛びかかつて行つた。しかし、ドリリュウズの殺気立つ猛烈なパワーに二体はいとも簡単に弾き返されてしまった。

マグマラシ「マグウウ!!!」

ヒノアラシ「ヒノオオ!!!」

二体の同時攻撃をも押し返すそのパワーに圧巻される。いとも簡単に吹き飛ばされた二体は何か持ち堪える事に成功したが、早くも息が上がっていた。

アイラ「私も！出て来てバジャー……」

トロイ「おっと！お前らは俺たちが相手しやるぜ！そうだよな！へボーイ！」

へボーイ「その通りだぜ！トロイ！兄貴のような華麗なバトル見せてやるぜ！」

押されているリーリエとサトシを見たアイラも助太刀に向かおうとするも、ミラーボを慕うゴロツキの二人に行く手を阻まれてしまった。

ユーゴ「あつちはリーリエさん達に任せよう」

アイラ「分かったわ！行くよルクシオ！」

ルクシオ「シオツ!!？」

ダークポケモンを前にすぐに向かいたい気持ちを抑えたアイラはサトシとリーリエに任せて自分のバトルに集中し始めた。

リーリエ「シロン！〔ごごえるかぜ〕!!？」

シロン「コーン!!？」

体を悴ませる冷気を浴びるドリユウズの動きが鈍くなる隙にサトシのゼニガメの攻撃が加わる。

サトシ「よしゼニガメ！〔ハイドロポンプ〕だ!!？」

ゼニガメ「ガアメエ!!？」

スクリユー回転したゼニガメは大きな水流を巻き上げながらドリユウズに向けて放たれた。しかし、ダークポケモンの力を侮るなど言わんばかりミラーボは回避の指示ではなく攻撃の指示を送った。

ミラーボ「ドリユウズ！回っちゃって！回っちゃって」

ダンスのリズムに合わせてベイゴマのように体を回転させると、黒いオーラを纏う大きな竜巻を巻き起こした。とてつもない威力を肌で感じたサトシは過信でも自惚れで

もない力に圧倒された。

リーリエ「あの技！カイリユウも使っていました!!」

ロトム『この技は「ダークストーム」!!? 威力は最強クラスロト!!?』

ドリユウズ「ドリユウユ!!」

ダーク技最強との名の通りにドリユウズの技はゼニガメの「ハイドロポンプ」を簡単に打ち消した。範囲を広げて向かってくる竜巻に対して、狭い洞窟内で躲す場所や隙間はない。ここは総攻撃で相殺させるしかない。

サトシ「ピカチュウ!」【10万ボルト】!!? マグマラシ! 【ふんか】!!? ゼニガメ【ハイドロポンプ】だ!!?」

リーリエ「シロン!」【れいとうビーム】!!? ゼニガメ! 【みずてつぼう】!!? ヒノアラシ! 【かえんほうしゃ】です!!?」

一斉に繰り出されたピカチュウ達の攻撃はドリユウズの技とぶつかり合うと、なんとか相殺させる事が出来た。衝撃で生み出された爆風に吹き飛ばされそうになった。

サトシ「大丈夫かりーリエ!」

リーリエ「はい!」

ミラーボ「休んでいる暇なんてないわよ! ドリユウズ! 【じしん】攻撃よ!!?」

ふらついた身体をなんとか起こしたサトシとリーリエだが、ドリユウズが起こした地

震にさらに蹠踉めいてしまった。大きく揺れ始める大地を掘り起こすようにして地震波が攻撃エネルギーとして此方へと向かって来た。

サトシ・リーリエ「避け『ろ』て!!!」

しかし、体勢を保つのに精一杯だったため、一足判断が遅れてしまった。前方にいたヒノアラシとマグマラシにドリユウズの攻撃が命中してしまった。炎タイプの二体には大きなダメージとなりその場で倒れてしまった。

サトシ「戻れマグマラシ!!!」

リーリエ「ヒノアラシ! 戻って下さい!!!」

戦闘不能となった二体を戻すと、ピカチュウやシロンは代わって前へと出た。ドリユウズは爪研ぎにおける金属音を鳴らしながら威嚇し始める。まだ体力には自信がありそうなドリユウズにシロン達では二が重い。ここはあのドリユウズと互角に渡れるパワーを持ったポケモンが良いと判断したリーリエは別のモンスターボールを取り出した。

リーリエ「出て来てください!ズルズキン!」

ハナダシテイ以来、バトルをしてこなかったがもう彼に頼るしかない。大丈夫だと自分に言い聞かせたリーリエは指示を出した。

リーリエ「ズルズキン!【からてチョップ】です!!?」

力一杯送った指示であったが：

ズルズキン「zzzz」

ミラーボ「あららくその子お眠りタイムの時間らしいわよ」

ズルズキンは夢の中にいたその状況にミラーボに小馬鹿にされてしまった。まだダメだったと落ち込むリーリエであったが、すぐに切り替えてシロン達に指示を送った。

サトシ「ピカチュウ！【エレキネット】!!?ゼニガメ！【ハイドロポンプ】だ!!?」

ピカチュウ「チュウ!!?」

ゼニガメ「ガアメガ!!?」

リーリエ「シロン！【れいとうビーム】!!?ゼニガメ！【みずてっぽう】!!?」

シロン「コン!!?」

ゼニガメ「ゼニ!!?」

攻撃を放つその瞬間、ミラーボの合図によってドリユウズは大きな雲を形成させ始めた。黒紫色に浮かぶ気味の悪い雲から矢のように黒紫色の雨が降り始めた。その雨に打たれたシロン達には鋭いダメージが入ると、攻撃が止まってしまった。

ロトム『これは…【ダークウエザー】ロト!!?』

【ダークウエザー】天候系の技と同様。ダークポケモン以外にダメージを与えて、ダメージを大幅に強化させる技だ。

サトシ「みんな!!!」

ミラーボ「ダークポケモン! 最強♪止めよドリユウズ! 【ダークストーム】!!?」
ドリユウズ「ドリユウズ!!!」

再び回転し始めたドリユウズはまた大きな竜巻を作り出した。それも【ダークウエザー】の追加エネルギーを蓄えているため、さつきよりも大きくなっていった。あれを喰らえば間違いなく戦闘不能にさせられてしまう予感が二人の脳裏に過る。万事休すかと思つたその時、ドリユウズは足元を捕られたかのように蹠踉めき出すと回転させる体勢を止めてしまふまつた。

ミラーボ「ちよつと何が起きたのよ〜」

いきなりドリユウズの攻撃が止まってしまった事に意味がわからなくなったミラーボはドリユウズの片足が地面にはまってしまつた事に気づいた。硬い地面の上ではこんな事態になる訳がなく頭を抱えていると、一体のポケモンがミラーボの足元に出てくる。

デイグダ「デイグ!!?」

一体のデイグダが顔を出すと、それ続いて他のデイグダやダグトリオがどんどん地面から姿を現した。そしてさらに地面を掘り返し始めると、巻き起こる砂嵐でそのままミラーボとドリユウズを渦の中へと閉じ込めた。

ロトム『これはデイグダ達の【すなじごく】ロト!!?』

デイグダ達のおかげでドリユウズの動きを止めたその隙を逃す訳にはいかない。一斉にサトシとリーリエは反撃に出た。

サトシ「デイグダ達が動きを止めてくれている今がチャンスだ！出てこいガマガル！
【ちようおんぱ】だ!!？」

ガマガル「ガアマ!!？」

出て来たガマガルによる音波でまずはドリユウズの動きをさらに鈍らせた。大音波に頭を強く振るわせられたドリユウズは混乱へと落ちてしまった。そんなドリユウズにサトシはさらにドリユウズの動きを封じ始めた。

サトシ「今度はドリユウズの足元に【マッドショット】!!？」

ガマガル「ガアルマ!!？」

泥団子のように丸まった泥をドリユウズの足元に命中させた。

サトシ「リーリエ頼む！」

リーリエ「はい！ゼニガメ！【みずてつぽう】!!？」

ゼニガメ「ゼニツ!!？」

さらに泥が塗られた足に水を掛けられたことにより、水を吸った泥はさらに重くなった。その重みに足を捕られたドリユウズは大きく前方の方へと身体が倒れてしまった。

サトシ「ゼニガメ！ガマガル！【ハイドロポンプ】だ!!？」

リーリエ「ゼニガメ！【みずてっぼう】!!?」

ドリユウズ「ドリユキュキュ!!」

激しい水流を浴びさせられたドリユウズはそのまま後方へと吹き飛ばされてしまった。このピンチに憤りを感じたミラーボは残りのモンスターボールの中からポケモンを追加した。

ミラーボ「こうなったらあんた達も出て来なさい!!!」

ルンパツパ「ルンパアア!!!」

一気に飛び出した五体のルンパツパはそのままリーリエ達の方へと飛び出した。

サトシ「リーリエ！」

ロトム『危ないロト!!?』

その内の一体がリーリエとの距離を詰めて来た。咄嗟にリーリエの前に出たシロンも守るべく身構えた。ルンパツパの拳が振りかざされるその瞬間、別の何かがリーリエに迫るルンパツパを殴り吹き飛ばした。自分の後ろから飛び出して来たそのポケモンに目をやった。

ズルズキン「ズツキイイ!!?」

リーリエ「ズルズキン……」

シロン「コン……」

リーリエを守ったズルズキンはさらに「あくのはどう」でルンパツパ達に攻撃をし始めた。ズルズキンのパワーにルンパツパ達は返り討ちになってしまった。さらに終わることなく今度は五体纏めて空中へと浮かび上げられてしまった。

ミラーボ「何よ！」

見た感じエスパー技による「サイコキネシス」みたいだった。サトシとリーリエは後ろへと向くと、そこにユーゴとキツネポケモンのマフオクシーが立っていた。

ユーゴ「そのまま押さつけろ。マフオクシー」

マフオクシー「フオクシー!!？」

五体のポケモンをサイコパワーで止めたその力を前にミラーボは嫌な予感が次第に込み上げてきた。下っ端のゴロツキもユーゴとアイラに惨敗し抜け殻状態になっているため、助けを求める事も出来なかった。

サトシ「一気に畳み掛けるぞリーリエ！」

リーリエ「はい！」

サトシとリーリエ。そして二人の手元にあるZリングを見たユーゴも彼らと同じように自身のZリングも輝かせ始めた。

リーリエ「天から静かに降り注ぐ雪。無数に煌めく氷の結晶。熱き我がソウルとともに。今再び 天へと昇れ！」

Zパワーがシロンに集まると一気にそのパワーを解放させた。

リーリエ「レイジングシオフリーズ!!!」

サトシ「ちよぜつらせんれんげき!!!」

ユーゴ「ダイナミックフルフレイム!!!」

三体によるZ技がドリユウズとルンパツパ達に向かつて解き放たれた。あまりの威力にドリユウズが起こした地震とは比べものにならない衝撃波がミラーボ達を襲った。

サトシ「行っけ！スナツチボール!!!」

その攻撃を前に立つ事が出来ないのは言うまでもなかった。戦闘不能になったドリユウズに向けてサトシはスナツチボールを取り出した。

サトシ「ドリユウズ！スナツチだぜ！」

ピカチュウ「ピツピカチュウ!!？」

リーリエ「良かったです！」

サトシ「みんなもありがとな！」

ドリユウズを無事にスナツチ出来た事に成功した。サトシの一言にピカチュウ達だけだけでなくデイグダ達も喜んでいた。

ミラーボ「きいいい!!!何よ何よ！こんなの卑怯よ！ひ・きよ・うく!!!」

ユーゴ「おっと！忘れもんですよ」

マフオクシー「フオク!!？」

トロイ・ヘボイ「「ぎよえええ!!!」

せかせかと逃げるように退散したミラーボに向けてマフオクシーのサイコパワーによつてトロイとヘボイを投げつけた。

ミラーボ「覚えておきなさいよおおおおお！」

二人の下つ端にぶつかったミラーボもそのままロケット団のやな感じみたいに洞窟の奥へと消えて行つてしまった。

~~~~~

ジュンサー「みんな大丈夫だった！」

サトシ「みんな無事です。それと捕獲したダークドリユウズです」

ジュンサー「分かりました。私が責任を持つて国際本部へとお送りします」

デイグダの穴を抜けたサトシ達はジュンサーにダークドリユウズを預けた。散り散

りになったデイグダとダグトリオを集めたマオ達からリーリエ達の状況を説明してくれた事で自分達も加勢に来てくれ事を後から話を聞いた。ポロポロになっているお互いの姿を確認したリーリエ達は今回の勝利を喜んだ。

アイラ「リーリエちゃん!!!」

リーリエ「ア／アイラさん!!!」

そんなリーリエにアイラは思いつきり抱きついて来た。何のことかと混乱するリーリエの両肩を掴むとアイラと目があつた。

アイラ「まだトレーナーになったばかりなのに凄かったよ!それと…いろいろときつく当たって…御免…」

リーリエ「そんな…ダークポケモンの事をあまり知らないわたくしの発言でアイラさんを困らせてしまいました…本当に御免なさい!」

大人気ない発言にリーリエとアイラは改めて謝罪をした。そしてさらにリーリエは続いた。

リーリエ「此処まで関わって分かったことは…ダークポケモン達の強さは本物である事。そして、その示威はトレーナーとの信頼関係から生まれるものではない事です。心を壊してまでも得られるその強さに意味なんかありません。そんなポケモンを道具として生み出している人達の事をわたくしも許せません」



リーリエ「それじゃあ、わたくし達は次の街へと向かいます」

ジュンサー「気をつけてね。それから色々ありがとう。リーリエさんはこれからのジム戦頑張つてね！」

リーリエ「はい！」

サトシ「ゼニガメ！これからもしつかりな！」

ピカチュウ「ピカチュウ!!？」

ゼニガメ「ゼニゼニ!!？」

リーリエ「ゼニガメも消防団のお仕事。これからも頑張つて下さいね」

ゼニガメ「ゼニツ…」

それぞれの別れを告げるとリーリエ達はクチバシティを後にした。その後ろ姿を寂しげに見つめるゼニガメにサトシのゼニガメが彼らの方へと指差した。かつて自分も同じ思いをした。そんなゼニガメの気持ちを汲んであげたいのだ。リーダーとしてサトシのゼニガメはジュンサーの方へと目をやると、その合図に笑顔で返した。

ジュンサー「いいわよ。行つてらしゃいゼニガメ！」

ゼニガメ「ゼニツ!!？」

ジュンサー「これからリーリエさんの事を助けてあげてね！」

その一言に笑顔を取り戻したゼニガメはリーリエ達の方へと歩いて行った。でも連れて行って貰えるのか。心配になったりしてその足は覚束ない。

すると、その足を止めるリーリエ達を見てゼニガメもその場で立ち止まった。不安の中でゼニガメの目に映ったのは嬉しそうに此方を見つめたリーリエの笑顔だった。

リーリエ「一緒に行きませんか！」

シロン「コーン!!？」

その言葉にゼニガメはリーリエの胸の中へと飛び込んだ。

リーリエ「これからよろしくお願いね」

ゼニガメ「ゼニツ」

リーリエ「ゼニガメ！ゲットです！」

シロン「コーン!!？」

マオ「やったねリーリエ！」

スイレン「新しい仲間が増えたねアシマリ」

アシマリ「アウ!!？」

マーマネ「こんなゲットあり〜」

カキ「ありだよ。あり」

サトシ「そうだぜ！なあピカチュウ！」

ピカチュウ「ピカチュウ!!？」

デイグダの穴の騒動が無事に解決し、リーリエは新たにゼニガメを仲間に加えた。新たな仲間と共にリーリエのポケモンリーグへの挑戦のためクチバシテイを後にする。次に目指すはタマムシテイだ。

??? 「スナッチボールを使う三人のトレーナーとダークオーラが視える一人のトレーナー！つと！要注意人物であると報告しなきゃねえ」

その旅立つリーリエ達を見る人影。タムシジム挑戦の前にその人物と対峙する事になることをこの時のリーリエ達はまだ知らない。

## 第三十四話 育て屋の少女

次のジムがあるタママシティを目指すリーリエ達。その途中で大きな地響きがりリエ達を襲った。次第に此方に近づいてくると察したリーリエ達は慌てて辺りを見渡し始めてみると、こっちに向かって突進してくるの、一つ大きな影が見えてきた。

??? 「誰か！止めてくれ!!」

さらにその影を追いかける人物もリーリエ達に向かって走ってくる。その慌てた様子からリーリエ達はそのポケモンが何かしらの理由で混乱しているのだと把握した。

そしてリーリエ達に向かってくるそのポケモンとは…

サトシ「ケンタロスだ！」

マオ「こっちに来る！」

暴れ牛ポケモンのケンタロスだった。鬼の形相な顔で突然に迫ってきたためにリーリエ達は反射的に避けてしまった。ケンタロスは此方を見向きもせずそのまま走り去って行く。その後を追うケンタロスのトレーナーは体力が持たずそのまま膝をついてしまった。

スイレン「大丈夫ですか！」

カキ「しつかりして下さい！」

???「大丈夫だ！それよりもケンタロスが！」

自分のトレーナーの事を構わずに走り進んで行くケンタロス。このままにしておけばここを通る人達や野生のポケモン。さらにはケンタロス自身にとっても大きな被害が出てしまう。こうなってしまうた事情を聞く前にリーリエはケンタロスを止めにかかった。

リーリエ「キモリ！ケンタロスを止めて下さい！」

キモリ「キヤモ!!？」

モンスターボールから出てきたキモリは木々をつたってケンタロスを追いかけて行った。忍者のように軽やかに走り進んでいくキモリはあつという間にケンタロスに追いつく事ができた。

しかし、問題となるのはどうやって止めるかだった。自分の手持ちの中で最も足の速いキモリを出したのだが、カントー地方のポケモンの中でも最大の攻撃力を誇るケンタロスとの力の差は歴然でもあった。そう考えているとキモリは右掌をケンタロスに向けてそこから常盤色のような濃い緑色をした靄を放つと向かってくるケンタロスを一瞬のうちに包み込ませた。

ケンタロス「モオ…モオウ…」

キモリの技に捕まったケンタロスは一気に疲れ始めるとその場で眠るように静止し始めた。

マーマネ「ケンタロスの動きが止まった」

サトシ「あの技は?!?」

ロトム『あれは相手の体力を吸い取る技「ギガドレイン」ロト!!?』

リーリエ「キモリ…貴方はまた新しい技を…」

咄嗟に出たキモリの新しい技「ギガドレイン」により大人しくなったケンタロスを見た一同は急いでケンタロスの元へと向かった。

体力を吸い取る技であるが、キモリが威力を最小限に押さえてくれた事もあってケンタロスは特に目立った外傷が無く済むことが出来た。

ボーム「ケンタロスを止めてくれてありがとう。私はこの辺りで育て屋をしているボームと申します」

ボームによると買い出しの帰り道で鋭利な棘が並ぶ木の枝を危うく踏んでしまった事で驚いてしまったと言う。我を返したケンタロスも恥ずかしそうにしながら反省をしていた。

ボームはこの町外れで育て屋を経営していた。育て屋は主に都合により暫くの間、代わりにポケモン達の面倒を見て欲しいというお客様の代わりに預かってお世話する事

が主体となっている仕事である。また、それだけでなくポケモンの卵の世話もしていると聞くとリーリエ達は興味を持ち始めた。

ボーム「もし興味があるのでしたら、見学に来ませんか？」

サトシ「えっ！」

スイレン「いいんですか！」

ボーム「ケンタロスを助けてくれたお礼ですよ」

ポケモンの卵の話題になり目を輝かせながら話すリーリエ達を見てボームは自分が経営している育て屋にリーリエ達を招待した。勿論、全員一致でリーリエ達は言葉に甘えてお邪魔させて貰うことになった。

~~~~~

並木が並ぶ林のトンネルを抜けると、ここを訪れた人を歓迎するかのよう的一面に咲いている花畑の道が続いていた。そしてその先にある一軒家こそが育て屋を経営して

いるボームの家である。

家の周辺ではカントーのみならず様々な地方のポケモン達が楽しそうに穏やかに過ごしていた。

リーリエ「あの……このポケモン達はボームさんお一人でお世話をしているのですか？」

ボーム「私だけじゃなく家内や娘も一緒さあ。確かに大変そうに見えるが何よりも私はポケモン達を育てあげる事に生きがいを持ってしているしこの職に誇りを持っている。不思議と辛いという感情は今までに思った事はないのですよ」

カキ「ええ、ポケモン達も生き生きと過ごされている。うちの実家は育て屋ではなく牧場を経営しているのですが、ポケモンのお世話をするという同じ職務についている自分としては感心するばかりです」

そう和かに話すボームを見て一番に感銘を受けたのはカキだった。カキの言った通りポケモン達はストレスもなく自由気ままに過ごしている。町外れに建てたのも自然豊かな環境の中で伸び伸びと自然に育ってもらいたいがためとボームは口にしていた。

ボーム「妻のエミリーだ」

エミリー「こんにちは。どうぞ中へ」

金髪の綺麗なセミロングヘアをした女性は年下のリーリエ達に対しても深々とお

辞儀をすると中へと招き入れてくれた。エミリーは見るからにして二十歳後半の女性のようにボームとは十歳以上も年が離れていた。髭を生やした中年親父のような風貌のボームの奥さんであると紹介された時は嘘だと一瞬頭を過ぎってしまったのは言わないでおこう：

暫く庭で過ごしているポケモン達を観察しているとボームはリーリエ達をとある部屋へと案内した。その部屋にはある物が丁寧に保管されている部屋だった。それを見たリーリエ達は懐かしさも交差してそれらに見惚れていた。

カキ「これはもしかして」

ボーム「ポケモンの卵です！全てこの育て屋から見つかった物なのです」

そこには様々な模様がプリントされた卵がぎっしりと何十個いや何百個も保管されていた。育て屋では稀にポケモン卵が見つかる事もあるらしい。

するとある一個の卵が微動だにしていると神々しく光を放って輝きだした。光終えるとそこには新しい命が誕生していた。初めて目に入る日の光を眩しそうに目を擦るプリン誕生をリーリエ達は祝福した。

サトシ「やった！」

マーマネ「産まれた！」

そんなプリンにピカチュウ達も挨拶しに近寄っていく。ピカチュウの後に続いて

歩いていくアママイコ達の背中をシロンは呆然と眺めていた。シロンにとつては初めて目にする命の火が灯された光景でもあり、そんなシロンをリーリエは抱きかかえた。

リーリエ「シロン。貴方もこうしてわたくしの元へと産まれてきたのですよ」

マオ「そうだよシロン！シロンが産まれてくるまでリーリエが一生懸命お世話してたんだよ！」

シロン「コン!!？」

シロンとの出会いを懐かしそうに振り返るリーリエをある一人の少女が扉の陰から此方を覗いている事に気がついた。リーリエはふとその少女と視線が合うと、その少女は恥ずかしそうに顔が赤くすると顔を引っ込めてしまった。

リーリエ「こんにちは」

モネ「きやつ！こ…こんにちは」

リーリエ「ごめんなさい。びっくりさせちゃったね」

モネ「ううん。大丈夫」

ピンクのワンピースに肩ぐらいの長さのセミロングヘアに赤いカチューシャをした少女にリーリエはゆっくりと近づいていくと、それに連れてピカチュウ達も近づいて行った。

シロン「コン!!？」

ピカチュウ「ピカチュウ!!?」

トゲデマル「モギユユ!!?」

元気よく挨拶をするピカチュウ達。しかしピカチュウ達を目にした途端、モネは後退りを始めた。自分たちから離れていくモネの様子に驚いたピカチュウ達はその場で立ち止まった。何かに怯える表情。それを見たリーリエは何かを察したようだ。

モネ「ポ…ポケモン…」

リーリエ「だ…大丈夫?」

その様子から確信したリーリエは落ち着かせようとモネの手を優しく取ろうとするが、怖くなったモネはそのまま走り去ってしまった。

スイレン「今の子は?」

ボーム「娘のモネです。時々、私の育て屋を手伝ってくれるのですが、あの子…ポケモンが怖くて触れないのです」

カキ「そうなんですか…」

モネが去った後を見つめるリーリエは何かを決心したような顔を浮かべると、そのままモネの跡を追っていった。

リーリエ「わたくし少し席を外しますね」

シロン「ゴン!!?」

モネの跡を走っていくリーリエの姿を見たサトシとマオは微笑ましく互いに見合
せた。

サトシ「あの子がほっとけなくなったんだろうな」

マオ「そうかもね」

~~~~~

リーリエも同じだった。ウツロイドの襲撃によりポケモンが怖くて触れなくなつて  
しまった。今では昔の自分とは違う。サトシやシロンとの出会い。マオ達が背中を押  
してくれたお陰で、今ではカントー地方を旅する一人のトレーナーとして胸を張って歩  
く事ができた。だからポケモンが怖くて触れないという自分と同じ境遇に立ったモネ  
をほっとけなくなったのであろう。窓から庭で遊ぶポケモン達を眺めているモネを見

つけると、リーリエは彼女の名前を呼んだ。

リーリエ「モネちゃん。少しいいですか」

モネに追いついたリーリエは彼女の背丈に合うようしゃがみ込むと、彼女の顔を覗き込んだ。そんなリーリエにモネは静かに頷いた。

リーリエ「わたくしはリーリエ。この子はパートナーのロコン。名前はシロンです」

シロン「ロコン!!？」

モネ「うわあ！白いロコンなんて初めて見た！」

ピタッ

シロン「コーン？」

モネ「……………御免なさい…」

リーリエ「謝ることはないよ。少しずつ慣れていけばいいのですからね」

夢中になってシロンに手を伸ばそうとした所を見ると、ポケモンには興味があるみたいだった。だけど過去のトラウマのせいでその先へと踏み出す勇気が出ていないだけであつた。

モネ「私もお姉ちゃんみたいに触れるように慣ればいいのになあ」

落ち込むモネにリーリエは優しく語りかけた。

リーリエ「私もね。モネちゃんと一緒に昔、ポケモンに怖い思いをさせられちゃつて

ね。シロンと出会う前はわたくしもポケモンが怖くて触れることが出来なかったのですよ」

モネ「えっ…：そんなの!?？」

初めて自分と同じ悩みを抱える人に出会った事でモネはここ一番の声を上げた。

モネ「でもお姉ちゃんは今ほポケモントレーナー…：だよな?」

リーリエ「はい。ですけど、シロンが卵の時からお世話をしていく内に少しずつポケモン達と触れ合っていていけるようになったのです。前途多難な道であつたけど、モネちゃんもポケモン達と触れ合っていていきたい気持ちがあれば触れるようになりますよ」

リーリエの一言にさっきまで雲がかかった表情を浮かべていたモネの顔に陽の光が射し込んだかのように明るくなった。

その後モネを連れてみんなの元へと戻たリーリエは産まれたばかりのププリンの健康診断を行なっているボームとそれを見ているサトシ達と合流した。診断が終わると、風船のように元氣よく飛び跳ねるププリンを見て、モネは意を決心した。

モネ「お父さん!この子…：私が面倒みてみる。いいかな?」

ポケモンに近寄ろうともしなかったモネからの意外な言葉にボームとエミリーは二人して目を丸くした。娘の敬意にボームはモネの両肩に手を置いた。

ボーム「勿論だとも!しっかり頼むぞ!」

リーリエ「怖がらせないようにまずはこうやって目線の高さを合わせて話しかけてあげるといいですよ」

モネ「うん！」

とは言ったものの、やっぱりポケモンが怖い気持ちに負けてしまい、数秒で視線を逸らしてしまう。何かいい方法はないのかと模索していると、リーリエは昔にサトシが自分にやってくれたことを思い出した。

リーリエ「まずはシロンから行ってみましょうか！」

シロン「コン!!？」

モネ「よ…よろしく…お願いします」

勇気を振り絞って手を伸ばすも、あと一步の所でその手を引つ込めてしまった。人に

~~~~~


ゼニガメの突然の動きに驚いたモネはまた手を直ぐに引っ込めてしまった。作戦は失敗だ。

キモリ「……………」

モネ「……………」

リーリエ「もつと愛想良くして下さい…」

キモリ「キャモ…」

冷静なキモリならと思つたが、黙っていた方が逆に怖かつたようだ。怖がらせるつもりはないのだが、キモリも何故か腑に落ちない気持ちになつてしまった。

モネ「御免なさい…」

リーリエ「大丈夫ですよ！触れ合おうとする気持ちがあるだけでも大きな進歩ですよ！」

それでも自分の不甲斐なさに元気を無くしてしまった。リーリエはどうかかしようと考え始めると、窓から何者から家の中へと入ってくる気配を感じた。振り返ると、そのポケモンは大きな口を開いてリーリエとモネを威嚇していた。その様子からここで預かっているポケモンではなく、野生のポケモンであると察したリーリエはすぐにモネの手を引っ張ると自分の後ろへと下がらせた。

リーリエ「あれはアーボ！」

モネ「お姉ちゃん…」

二人の目の前に現れたのはへびポケモンのアーボだった。突然現れた野生ポケモンの襲撃にモネは恐怖の余りにリーリエのスカートの裾をギュツと握りしめた。震えるその手をリーリエは優しく握った。大丈夫とモネを安心させるようにして笑顔を見せると、シロン達を呼び集めた。

リーリエ「シロン！〔こおりのつぶて〕!!?」

リーリエ「ゼニガメ！〔アクアジェット〕!!?」

アーボが攻撃を始める前に先制を取ったシロンの氷の弾丸は見事にアーボに命中した。吹き飛ばされたアーボは立て続けに先制を取るゼニガメの攻撃を受けると、そのまま地面へと叩きつけられた。

リーリエ「今です！キモリ〔ギガドレイン〕!!?」

さらにキモリに体力を吸い取られてしまった事によりすっかり勢いを無くしたアーボはその場で救いを求めるかのように身を縮めてしまった。しかし怖がらせたその罪は重く許さなかったキモリは最後に「でんこうせっか」浴びさせるとアーボを窓の外へと吹き飛ばした。強烈な一撃を受けたアーボはそのまま林の中へと逃げ帰っていった。

リーリエ「大丈夫？モネちゃん…」

突然に怖い思いをしてしまったモネをリーリエは優しく語りかけた。小刻みに震え

だすモネの姿に慌ただしくなるリーリエであったが、それは恐怖によるものではなかったみたいだ。

モネ「凄い！カッコ良かったよお姉ちゃん！」

憧れをぶつけるような眼差しをリーリエに見せるとそのままシロン達の方にも目をやった。

モネ「アーボが襲ってきた時は怖かったけど、お姉ちゃんとシロン達を見てたら、そんなの吹き飛んじやった！ありがとう！」

再びリーリエに顔を見せると元氣よく笑顔を見せた。その様子にはつと胸を撫で下ろすと、何かに気づいたリーリエはふつと静かに笑みが溢れた。

リーリエ「同じようにモネちゃんにお礼を言いたい子がいるみたいですよ」

嬉しそうに喋るリーリエの姿を不思議そうに見つめるモネであったが、自分の腕に何かの感触があると気づくと、自分が抱き抱えている物に目をやった。それは今の自分では信じられない事だった。

ププリン「ププツ!!？」

モネ「ププリン！わ…私！触れてる！」

モネはアーボから守るように無意識に優しくププリンを抱き抱えている自分に驚いた。困惑しているモネにププリンは目線の高さを合わせてモネを覗き込むと、満面の笑

みをかけてあげた。その優しい表情に下手に緊張が走らなくなったモネはププリンの暖かさを感じると、そのまま優しくププリンをぎゅっと抱きしめた。

腕の中にある小さな命はモネの心をさらに暖かく包み込ませた。ポケモンへの恐怖心が消えてププリンを優しく抱くそのモネの姿にリーリエも自分の事のように嬉しくなっていた。

~~~~~

翌朝、ボーム一家と別れの挨拶を交わし出発の準備に取り掛かるリーリエ達の姿があった。

ボーム「皆さん色々と手伝って頂いてありがとうございます。」

カキ「こちらこそ色々と勉強させて貰いました」

スイレン「お世話になりました」

モネ「お姉ちゃん！私もポケモントレーナーになって、ジムにたくさん挑戦して、つかお姉ちゃんみたいな強いトレーナーになるように頑張る！」

リーリエ「はい。楽しみにしてるからねモネちゃん！」

二人だけの約束を交わすと、何かを抱えて持つて来たエミリーはリーリエの前に立った。

エミリー「それとリーリエさん。お礼と言ってはなんですが……」

大きな布が被さった物を渡されたリーリエは受け取ると不思議そうにその布を取ってみた。それは大きなショーケースであった。そしてその中には黄色い卵が一つその中に入っていた。そうポケモンの卵だった。

ボーム「大切に育ててあげて下さい」

リーリエ「ありがとうございます！」

お礼を言ったリーリエは目を輝かせながら懐かしそうにその卵を眺めた。

果たして一体どんなポケモンが産まれるのであろうか。そんな舞い上がる高揚感が溢れる中、リーリエ達はタママシティへと出発したのであった。

## 第三十五話 行方不明の研究員

タママシ。虹色。夢の色。虹色の大きな街

タママシテイのポケモンセンターに着くとジョーイから至急にハンサムから連絡がある。と伝えられたサトシは一人、テレビ電話へと向かった。

ハンサム『ドリユウズの件はご苦労だったね。サトシ君』

サトシ「いえ、アイラとユーゴさん。それからリーリエ達の助けもあってこそです！」  
ピカチュウ「ピカチュウ!!？」

サトシ「それとハンサムさん。急にどうしたんですか？」

サトシの疑問に答える前に悩むように眉間にシワを寄せるハンサムは一つ咳払いをし、話す姿勢を整えた。

ハンサム『うむ：実はオーレ地方から一人の研究者がカントー地方に来日される予定だったんだが、カントー行きの船に乗船する連絡を貰ったのを最後に連絡が途絶えてしまったんだ』

サトシ「それって行方不明って事じゃ？」

ハンサム『うむ。もしかしたらシャドーと接触した可能性が高い。あいつらも下手に嗅ぎ回されたくはないからな』

そう言いつつハンサムは何かを探るかのように胸ポケットに手を入れると、一枚の写真を取り出した。そこに写されていたのは白衣を着た男性だった。

ハンサム『クレイン所長。何を隠そうスナッチマシンやダークポケモンをリライブさせるリライブホールの開発者だ。もし足取りが見つかった際にはすぐに知らせてくれ』

サトシ「分かりました。ハンサムさんも気をつけて下さい」

ハンサムとの連絡を終えたサトシは伝えられた情報を整理し、リーリエ達の元へと戻って行った。

一方リーリエ達はポケモンセンター内に設備されているバトルフィールドへと集

まっていた。サトシがみんなと合流してみると、リーリエは偶然にもクチバシテイ以来に再開したソウタとポケモンバトルを始めようとしていた。

カキ「それじゃ始め!!!」

?リーリエVSソウタ?

審判を任せられたカキのコールと同時にリーリエとソウタはほぼ同時に一体目のポケモンをバトルフィールドへと放った。

リーリエ「お願いします。ゼニガメ!」

ゼニガメ「ゼニツ!!?」

ソウタ「一丁かましてやろぜ。ピジョン!」

ピジョン「ピジョ!!?」

リーリエの一体目はクチバシテイで新たに仲間になったゼニガメ。ゲットばかりしたポケモンだが、うずまきカップなど手持ちではない時からリーリエとは息の合うバトルを展開していた。

『ピジョン とりポケモン』

ノーマル・飛行タイプ

ポツポの進化系。広い縄張りを持っており、侵入する邪魔者は徹底的に突かれてしまう。とても視力が良くどんなに高い場所からでも獲物の動く姿を見分ける事が出来る』

ソウタの一体目に繰り出したピジョンは、リーリエが最初にゲットしようとしていたポツポの進化した姿である。ロトムの説通りピジョンは空高く舞い上がると、その鋭い目で監視するかのようにゼニガメの周りを飛んでいる。ピジョンの目つきに緊張感がジワジワと身体中を駆け巡ってくるゼニガメであったが、リーリエとアイコンタクトを交わし、気持ちを少しずつ落ち着かせた。

準備が出きた所でまずはソウタから指示でバトルが始まった。

ソウタ「【たいあたり】だ!!?」

ピジョン「ジョ!!?」

リーリエ「躲して【みずてっぽう】!!?」

翼を折り畳んだピジョンは低空姿勢のままゼニガメに向かって急降下を仕掛けた。ギリギリの所でピジョンの攻撃をゼニガメは左に転がるようにして躲した。

ゼニガメ「ゼニユウウ!!?」

ソウタ「【かぜおこし】で打ち消せ!!?」

ピジョン「ピジョ!!?」

攻撃が外れ距離を取るために再び上昇し始めたピジョンに向かってゼニガメは水鉄砲を放った。

一直線に空を切るような早さに躲すのは遅いと判断したソウタは攻撃を技をぶつけて相殺させる事を考えた。ピジョンは両翼を大きく拍手をするかのように羽ばたかせると、大きな風を巻き起こした。強烈な風は水鉄砲を打ち消すどころか、そのままゼニガメに襲いかかった。

風によって巻き上がった砂埃が攻撃と同時にゼニガメの視界を奪った。目に入らないように顔を下に埋めたゼニガメであったが、その様子を捕らえていたピジョンはそのまま急接近した。一瞬の隙をついたピジョンはゼニガメとの距離を見事に縮める事に成功した。

ソウタ「【つばさでうつ】だ!!?」

もう一度、翼を大きく広げたピジョンはそのままゼニガメへと振り落とした。しかし咄嗟の攻撃であつたにも関わらず、ゼニガメは消防団での訓練で身につけたその場での状況の判断力のおかげでリーリエの指示が無くとも、自らの意思でピジョンの攻撃を躲す事に成功した。

しかし、ただではおかなかつたピジョンはもう片方の翼も使つて、連続で「つばさでうっ」を攻撃を仕掛けて行つた。

リーリエ「頑張ってください。ゼニガメ！」

シロン「コーン!!？」

ソウタ「怯むなピジョン！攻め続ける！」

クチート「クチイ!!？」

両者による攻一心不乱な攻防にリーリエとソウタは声援を送つた。しかし、ピジョンの連続攻撃に足を取られたゼニガメはバランスを崩すと、ついにピジョンの攻撃がゼニガメの腹部に命中した。

ゼニガメ「ゼニイイイ!!!」

後ろへと大きく吹き飛ばされたゼニガメは地面に引きずられるかのようにして倒れ込んでしまつた。だが、戦闘不能とまで持つて行けなかつたピジョンは最後の力を振り絞るかのようにして大空へと舞い上がった。ゼニガメの攻撃が届かないぐらい高く飛

んだピジョンはそのまま翼を大きく広げて停止させると、ゼニガメに狙いを定め始めた。

ソウタ「今だ！【そらをとぶ】で決めろ!!？」

風のエネルギーを纏った身体でピジョンは一気に急降下した。

ソウタ「貰ったぜ！」

渾身に込めた力でピジョンはゼニガメへと向かっていく。その迫力を前に焦りを感じるゼニガメにリーリエは指示を放つ。

リーリエ「ゼニガメ！【しろいきり】です!!？」

ゼニガメ「ゼニイ!!？」

甲羅に籠って横回転し始めたゼニガメはそのまま自分の身体を白い霧で包み込ませ始めた。バトルフィールド一面に広がる霧のせいでゼニガメの姿を見失ったピジョンは体勢を崩してしまった。

ソウタ「何いい!!！」

もう一度立て直そうと空へと舞い上がったピジョンであったが、白い霧の中からピジョンの背後へと何かが飛び出した。

リーリエ「今です！【アクアジェット】!!？」

ゼニガメ「ガアメエ!!？」

互いの姿が臍に写るほど充満された白い霧の中でも消防団で培った目ははっきりとその姿を捕らえていた。

ピジョン「ピジョヨヨ!!!」

ゼニガメの攻撃はピジョンの腹部を捕らえ急所に当たった。そのまま押し出すようにして地面へと叩きつけると、水しぶきが飛び散る中、目を回すピジョンの姿がそこにあつた。

カキ「ピジョン戦闘不能!!!」

リリーエ「その調子です！ゼニガメ！」

ゼニガメ「ゼニイ!!?」

まずは一勝を得たリリーエとゼニガメは互いにガツポーズを交わした。

ソウタ「まだまだ！勝負はこれからだ！」

ピジョンを戻したソウタは二体目のポケモンを取り出した。

ソウタ「出てこい！アーボック!!!」

アーボック「シャーボック!!?」

ソウタの二体目は育て屋でリリーエ達を襲撃したアーボの進化系。コブラポケモンのアーボックだ。

『アーボック コブラポケモン

毒タイプ

アーボの進化系。恐ろしげなお腹の模様で相手を威嚇する。模様の種類は研究結果で6種類のパターンが確認されている』

試合開始されると、アーボックはその巨体に似合わないスピードでゼニガメへと急接近した。咄嗟の事に驚くゼニガメは身構えようとするも、凶鑑明記に合ったようにアーボックはお腹に描かれる模様を大きく身体を使って威嚇すると、その恐ろしさに思わず固まってしまった。

ソウタ「アーボック！【ポイズンテール】だ!!?」

アーボック「シヤアア!!?」

ゼニガメ「ゼニイイ!!!」

毒状に帯びた尾で動けないゼニガメに向かって思いっきり叩きつけた。吹き飛ばさ

れるも何とか堪えたゼニガメはアーボックを睨みつけた。

リーリエ「ゼニガメ！【アクアジェット】！！？」

お返しにアーボックの方へと飛び込んだゼニガメであったが、その様子をアーボックはチョロリと舌を出しながらそのまま身構え始めた。

ソウタ「そこだ！【どろばくだん】！！？」

十分に引きつけた所でアーボックは泥の玉をゼニガメへと発砲した。顔に泥がへばりついたゼニガメは命中率を失いそのままアーボックよりも左に逸れた所で地面へと叩きつけられてしまった。

リーリエ「ゼニガメ!!!」

ソウタ「トドメの【ポイズンテール】だ!!？」

不着したゼニガメに容赦なくアーボックの攻撃が襲いかかった。すぐにリーリエの指示が耳に入るも、泥で視界を奪われてしまったゼニガメは冷静さを取り戻すと事が出来ず、そのままアーボックの攻撃が決まった。

アーボック「シヤアア!!？」

ゼニガメ「ゼニイイ!!!」

上空へと吹き飛ばされたゼニガメは毒のダメージも加わってしまい、そのまま地面へと思いつき叩きつけられてしまった。

カキ「ゼニガメ戦闘不能！」

ソウタ「やったぜ！アーボック！」

アーボック「シヤア!!？」

勝ち星を取り返したソウタはアーボックと共にその場で喜んだ。

リーリエ「ゼニガメ。ゆっくり休んで下さい」

ゼニガメを戻したリーリエはアーボックとの体格差に渡り合えそうなポケモンをチヨイスすると、そのポケモンが入ったモンスターボールを取り出した。

リーリエ「反撃です！ギャラドス!!!」

ギャラドス「ギャラ!!？」

飛び出したギャラドスもアーボックと同じように鋭い牙で威嚇し始めた。そんなギャラドスに負けじとアーボックも口から漏らす空気の音も加えて再びお腹の模様を広げて威嚇し返した。

リーリエ「ギャラドス！【たいあたり】!!？」

ソウタ「アーボック！【かみつく】!!？」

それぞれの指示に両者とも真つ向からぶつかり合った。

リーリエ「今度は【アクアテール】です!!？」

ソウタ「だったら【ポイズンテール】だ!!？」

さらに自分たちの巨体を生かした尾を振り回すと、再び両者の攻撃がぶつかり合った。水と毒のエネルギーが激しく交差し、そのまま連続攻撃による猛攻が始まった。

リーリエ「その調子です。ギャラドス！」

ソウタ「負けるな。アーボック！」

一歩も引かない二体は疲れが出始めてもその尾を止めようとはしなかった。技を跳ね返したりしながら動きが鈍った隙を狙っては完璧に胴体へと攻撃を決めている。ダメージと疲れがどんどん重なり、体力と集中力が思った以上の早さで消費していく。

リーリエ「(りゆうのいかり)!!?」

ソウタ「(へドロばくだん)!!?」

猛攻を続けてきた二体は一歩下がると、次なる攻撃エネルギーを蓄え始めた。ほぼ同時に口から放射された青白い炎と毒々しいへドロがぶつかり合うとそのまま爆発した。

リーリエ・ソウタ「あっ!!!」

爆発の反動で吹き飛ばされた二体はそのまま目を回していた。

カキ「ギャラドスとアーボック!共に戦闘不能!」

ソウタ「戻れ。アーボック!」

リーリエ「ありがとうございます。ギャラドス!」

相打ちにより残りポケモンは互いに二体。ソウタよりも先にモンスターボールを

持ったリーリエは最後のポケモンを繰り出した。

リーリエ「キモリ！最後は貴方です！」

キモリ「キャモ!!？」

空中に一回転し華麗に着地を決めたキモリはそのまま拳を前に出して戦闘体勢に入った。そのキモリの姿にさらに熱を燃やしたソウタはありったけの大声でモンスターボールを放り投げた。

ソウタ「俺はカメックスだ！」

カメックス「ガアメ!!？」

ソウタが最後に繰り出したのはなんと甲羅に設置された二本の大砲が特徴的な大型のポケモン。カメックスであった。

スイレン「カメックス！カッコいい!!!」

ロトム『あの時のカメールが進化したロト！』

カントーの中でも最大の水系ポケモンを目にしてレーションが上がるスイレン。それに釣られるように身を乗り出したロトムは撮影を始めた。

『カメックス こうらポケモン

水タイプ

ゼニガメの最終進化系。甲羅の大砲から発射されるジェット水流は戦車並みの威力。その命中率は50メートル先の空き缶に当てるぐらいの正確さ。ピンチの時は甲羅に籠って身を守る』

マオ「だけど草タイプのキモリを相手に水タイプのカメックスって。大丈夫なの?」

ソウタ「俺のカメックスは最強のカメックスなんだ! 相性なんて俺たちの前では関係ないのさ!」

カメックス「ガアメエ!!?」

最後はまさに攻撃と防御にも優れている非の打ち所がない相手だ。体格差も何倍も

あるが、キモリのやる気に満ちた目を見ると不安は無かった。相性とキモリの武器であるスピードを生かした戦術で勝ちを取りに行く。

リーリエ「キモリ！【ギガドレイン】です!!?」

キモリ「キャモ!!?」

ソウタ「カメックス！【ハイドロポンプ】で迎え撃て!!?」

カメックス「ガアメエ!!?」

キモリとカメックスは同時に攻撃を放った。だが最終進化系の攻撃力を前に歯が立たず、カメックスの攻撃はそのままキモリの技を打ち消すと、勢いが衰える事なくキモリの方へと激しい水流が襲いかかってきた。

その技をキモリは咄嗟の判断で躲す事に成功したが、その水流は地面に直撃すると激しい水しぶきと一緒に爆風によってキモリは吹き飛ばされてしまった。直撃した部分は大きく風化していた。カメックスの驚異的な力を見せられた瞬間であった。

ソウタ「次は【みずのはどう】だ!!?」

リーリエ「躲してください！」

今度は微振動が加えられた水の玉が発射された。その攻撃に瞬時に気づいたリーリエの指示のおかげでキモリは高くジャンプをして躲す事が出来た。

リーリエ「【はたく】です!!?」

ソウタ「【ロケットずつき】だ!!?」

尾を大きく振り回し始めたキモリはカメックスの頭部目掛けて攻撃を仕掛けた。そんなキモリに向かってカメックスも真つ向勝負をけしかけた。甲羅に潜って頭頂部にパワーを溜めると、ジェット噴射を利用してキモリに向かって突っ込んで行った。

キモリ「キャモ!!!」

カメックスの猛烈な突進にキモリは受け止められずに吹き飛ばされてしまった。

リーリエ「【あなをほる】です!!?」

地面に叩きつけられる前にリーリエはキモリに指示を出す。かろうじてリーリエの声が届いたキモリは空中でありながらも何とか体勢を立て直すと地面の中へと身を隠した。

ソウタ「気をつけろよカメックス!」

カメックス「ガアメエ!!?」

カメックスは地面に潜ったキモリを注意深く観察し始めた。一転して静まり返ったバトルフィールドに二人の緊張が走る。互いの出方を見るかのようにトレーナー同士の駆け引きが始まる。

リーリエ「今です!」

リーリエの指示にソウタとカメックスは大きく構えた。その瞬間にキモリはカメッ

クスの背後から飛び出してきた。背を向いているカメックスに一撃を加えようと、再び尾を大きく回し始めたのであったが、それと一緒にカメックスはすぐに背後にいるキモリの方へと身体を向けた。

リーリエ「えっ!!?」

カメックスの思いもよらない行動に目を丸くしたリーリエにソウタは得意げに鼻の上を搔き始めた。

ソウタ「リーリエは注意深い性格してるからな！堂々と真っ正面から来るとは思ってたなかつたぜ！」

ソウタとカメックスはキモリの行動パターンとリーリエの考えている事をしっかりと把握していた。

行動が読まれたリーリエはすぐにキモリを自分の元へと戻そうとするも遅かった。

ソウタ「カメックス！【ふぶき】だ!!?」

カメックス「ガアメエ!!?」

キモリ「キヤアモモ!!!」

リーリエ「あっ!!!」

猛烈な吹雪によってキモリはそのまま天高く吹き飛ばされてしまった。極寒の息吹に包まれたキモリはそのまま地面へと不地着した。

キモリ「キヤ…モ」

目を回しているキモリを見てカキは勝敗コールを言い渡した。

カキ「キモリ戦闘不能！カメックスの勝ち！よって勝者はソウタ！」

ソウタ「よっしやああ!!!」

クチート「クチイ!!？」

カメックス「ガアメエ!!？」

すぐにリリーエは戦闘不能になったキモリの元へと駆け出した。下唇噛み締めながら悔しそうにしているキモリの頭に優しく手を置いた。

リリーエ「良く頑張りましたね。キモリ」

シロン「コーン!!？」

キモリ「キヤモ…」

キモリはリリーエの顔を見てゆっくりと頷くとそのまま眠ってしまった。バトルの疲れが溜まったキモリをリリーエはモンスターボールの中へと戻した。

ポケモンセンターへ戻ると一同は手持ちのポケモン達をジョーイさんに預けては昼食バイキングへと向かった。いつの間にかコロツケの大食い大会のように頬袋を膨らませながら食べているソウタにロトムは口を開いた。

ロトム『勝てたから良かったもののソウタは攻撃技ばっかで力任せに突っ走り過ぎ口

ト。ゼニガメの「しろいきり」のような補助技を上手く使いこなして行かないとこの先敵しくなるロトム!!?」

今回の二人のバトルからロトムは自分なりの分析があった。「しろいきり」のような補助技を使って場を攪乱させたり、「あなをほる」で身を隠させては勝利への活路を考えて戦うリリーエに対し、ソウタは攻撃技で攻めに迫った戦い方をしていた。この世界にはアイラやユーゴのような強敵トレーナーが立ち塞がっている。ロトムはソウタのその戦い方に今後のバトルで通用していくのには難しいと思っていた。

ソウタ「わかってないなロトム。ポケモン達のレベルだけでなく、ポケモン達との強い信頼関係も築いている俺たちの前ではどんな厚い壁が立ち塞がろうとも押し切って切り開いていけるもんなんだよ。それに攻撃こそが最大の防御を生み出すんだ!ですよね。サトシさん!」

サトシ「おう!その通りだぜ!」

マーマネ「それ:無責任すぎない?サトシ」

だが、自信家のソウタはそんな心配はないと言わんばかりに胸を張る。自分を尊敬してくれている事にいい気がしたサトシもソウタの言い分に賛同する。突っ走る性格が似ている所があるのかもしれないが:

カキ「だが、暫く振りなのはこの短期間で良くカメックスまで進化させたよな」

ソウタとクチバシティで別れから一週間しか流れていない。そう思うとまだカメラだった頃が懐かしいと思わせるぐらいの成長速度だ。その成長速度には驚かされるばかりだ。

ハナダシティで初めて会ったあの日も旅立った日はサトルとカノンと同日であるのにもソウタはすぐにゼニガメを進化させていた。力任せの性格であるが、ソウタにはポケモンへの愛情への注ぎ方や育て方は新人離れした力を持つているのかもしれない。

ソウタ「当たり前だ！俺たちは一分一秒無駄にしない主義だからな！これなら今度こそヤマブキジム攻略出来るかもな！」

リーリエ「ヤマブキジムのジムリーダーの方は戻られたのですか？」

ソウタ「おうよ！だけど…やっぱ強いわ」

さらに自信満々に声を張るソウタからヤマブキジムにジムリーダーが戻った情報を知った。だが、そのソウタがまたもや敗北してしまった事にリーリエに不安が煽られた。自分よりも実力が高い相手を負かすさらに上にいるトレーナーの存在がリーリエの手に汗を握らせた。

サトシ「ナツメさんか。俺たちも結構苦戦させられたよな。ピカチュウ」

ピカチュウ「ピカチュウ!!？」

ふと声を漏らしたサトシにリーリエ達はそこでのジム戦の事を聞き始めた。

スイレン「サトシはどうやってヤマブキジムに勝ったの？」

サトシ「そ…それは…その…そりや勿論！気合いだよ！気合い！」

ピカチュウ「ピ…ピカピカ!!？」

ソウタ「やっぱ凄げえぜ！サトシさんは！俺たちも気合いを入れ直してまた挑戦するぞ！クチート！カメックス！」

クチート「クチイ!!？」

カメックス「ガアメエ!!？」

スイレンの質問に対して言葉を濁すサトシに疑問は持つが、様子からサトシもかなり苦戦させられた相手である事は何となくわかった。

~~~~~

昼食を済ませたりリーリエ達は手持ちのポケモン達をジョーイさんに預けると、観光に

出かけた。

ソウタ「何だよ！すぐに挑戦しに行かないのかよ」

リーリエ「今朝に到着したばかりですからね。今日はゆっくり休んで明日挑戦しに行こうと思っていたのです！」

マオ「それにしても大きな街だよね」

マーマネ「ここだったら旅に必要な物。全部揃っちゃうよね」

サトシ「よし！今日はみんなでどっか遊びに行こうぜ！」

「!!!賛成!!!」

カントー「最大の大都市とだけあって何処もかしこもお祭り並みの賑わいだった。あの程度の色々な娯楽施設を見て回っていると、サトシとマーマネは飲食店で大食い対決。カキとソウタはバトル施設。日が暮れるまで別行動をとる事になった。

そんな中、リーリエとマオは暫く辺りを歩いていると、ある建物に興味を持ったマオはリーリエを呼び止めた。

マオ「リーリエ！ここ入ってみようよ！」

マオが指したのは光り輝くイルミネーションが建物全体を覆っている施設だった。

リーリエ「ゲームセンターですね！何だかとっても面白そうです」

アローラではあまり見かけない施設であって、外見の派手さから不思議とわくわくし

て来たリーリエはマオと一緒にゲームセンターの中へと入って行った。

ゲームセンターの中はスロットやカードなど色々なゲーム施設が並んでいた。さつそくゲームで使用するコインをそれぞれ10枚と課金したリーリエとマオはゲームを楽しんだ。暫く遊んでいると、カードで次々と勝ち星を手にしていくリーリエのコインが10枚から一気に500枚と膨れ上がっていた。ポケモンバトルでの読み合いの経験が生かされたのか、着々とコインを増やしていくリーリエの元へ一人のディーラーが近づいて来た。

ディーラー「随分とコインを集めましたねお客様。どうです!?景品交換のため換金致しましょうか?」

リーリエ「景品ですか?」

ディーラー「はい!トレーナーに必要な貴重な道具。さらには極めて珍しいポケモンなどもあります」

気さくに話しかけてきたディーラーは腰に付いているモンスターボールを取り出すと、その中から一体のポケモンが飛び出してきた。

ディーラー「例えば999枚と集められれば、このポリゴンというポケモンと交換する事が出来ます。野生での生息確認はあまりされておらず、非常に珍しいポケモンなのですよ」

驚異のコインの枚数にリーリエとマオは目を丸くした。初めて実物を見たリーリエはポリゴンの方へと顔を覗かせると、ポリゴンから黒い靄が薄つすらと見えて来た。それを目にしたリーリエは思わず声を上げてしまった。

リーリエ「ダークポケモン!!!」

驚いたリーリエは秘密他言であった事を思い出すと、口を両手を抑えるが、既に遅かった。ましてやさつきまで気さくに話しかけてきたディーラーはその名を口にしたリーリエを見ては急に顔を強張らせた。

店員「まさか…お前達。国際警察の人間か！」

そう言うと、モンスターボールからドガースを繰り出したディーラーはドガースを使って建物内を煙で充満させ始めた。火事かと勘違いした他の人達は大慌てで店の外へと飛び出していく。人の波に紛れて一緒に出ようとしたリーリエとマオであったが、他のディーラー達によって身柄を拘束されてしまった。

リーリエ（ダークポケモンの事を知っているのだとしたら…）

マオ（この人たち…もしかしてシャドーとかいう連中なの!?）

嫌な予感を感じたリーリエとマオはそのままディーラーを装うシャドーに連行されてしまった。ロトムはサトシと一緒にいるため連絡が取れない。如何にかこの場を乗り切る手段を考えるもそんなに簡単に出てこない。

一人のシャドーの戦闘員がカレンダーの裏側に隠されていた怪しげなスイッチを押すと、地響きと一緒に地下へ繋がる階段が出現した。なす術なく手錠をかけられたリーリエとマオはそのまま地下へと連れていかれてしまった。

地下へと入ったリーリエとマオはそのまま奥の部屋へと押し込まれてしまった。

マオ「リーリエ大丈夫！」

リーリエ「わたくしは平気です！シロン達は？」

シロン「コーン!!？」

アママイコ「アママイ!!？」

お互いの安否の確認をとったのだが、身体の自由を奪われたとなればどうする事も出来ない。脱出の案が出てこず焦るリーリエとマオに不安が募っていく。

度重なるシャドーとの遭遇。それだけカントー地方にシャドーの魔の手が広まっている事を思い知る。

???「だ…誰だね。君たちは」

すると、何処からか自分達に語りかける声がある方へと目を向けると、暗闇に慣れた目に一人の男性が映った。

???「こんな子供にまで…なんて酷いことを！」

その男性もリーリエとマオに気づくと、悔しそうに唇を噛み締め始めた。

マオ「貴方は…誰なんですか!?!?」

恐怖で震えながら質問したマオに対して男性は怖がらせないように離れた位置で自分の名を言った。

クレイン「私はクレイン。オーレ地方でポケモンの研究をしている者だ」

クレイン：ポケモンセンターでサトシが話した行方不明となった研究者と同じ名前であった。その名を聞いたリーリエとマオはお互いに見合わせた。

クレイン「君たちはなんで奴らに捕まったんだ?見た所、素行の悪い子には見えないと思うけど」

その人物がクレインと確信したリーリエとマオはサトシが自分達に話した事を含めて別名し始めた。二人の話から事情を聞いたクレインも知っている事を話し始めた。

ここタママシティのゲームセンターは裏を返せば、シャドーが作り上げた地下へと繋がるカントー地方の最初のダークポケモン研究所である真実をぶつけられた。そしてダークポケモンの心を解放させるリライブの第一研究員のクレインから逆に心を永遠に閉ざす研究を手伝わせられようとしていた事を話した。

クレイン「だから急がなければ…」

一通りの事を話したクレインは自分がこのまま本部へと連れていかれてはならないと、その場で立ち上がり始めると、脱出の糸口を考え始めた。

マオ「そうですね……手錠されたままでどうやって逃げたら……」

両腕の自由を奪われた状態ではなす術が無いと肩を落とす三人であったが……

リーリエ「ん？」

自分の両腕に何かしらの違和感を感じたりリーリエは少し腕を動かすと、手錠が外れる音と一緒に両腕の自由が効くようになった。

リーリエ「て……手錠が……」

自由になった両腕を見てはすぐにシロンの方へと目をやった。しかし当の本人であるシロンは自分ではないと首を横に振った。すると、リーリエと同じように自分の両腕にスライムのようなネットトリした感触がしたマオは恐る恐る自分の両腕に目をやった。

すると、そこに映っていたのは金属のメットのような物を被っている銀色のスライムのような体形をしたポケモン？であった。

マオ「何？この子達？」

クレイン博士「ポケモン……なのか？しかし、こんなポケモン今まで見た事ない」

知識が豊富なリーリエも研究員のクレインにも分からないナットを被った謎のポケモンはよく見ると複数存在していた。スライム状の身体で今度はマオとクレインの手錠にへばり付くとその部分を食べ始めた。リーリエに続いて自由の身になったマオとクレインもすぐにその場を立ち上がった。

リーリエ「何か何だか分かりませんが、助けてくれてありがとうございます」
怪我はないかお互いにチェックし終わると、リーリエはそのポケモン達にお礼を言うとしたのだが……

リーリエ「いませんね……」

マオ「何だったんだろ……あの子達」

とつくにその謎のポケモンはリーリエ達の前から姿を消していた。

クレイン所長「考えるのはここから出てからだ。さあ、行こう！」

謎のポケモンの助けもあってリーリエ達は出口に向かって走り出した。研究所内は迷路のように枝分かれした道がいくつもあったが、ここへ連れて来られた時の記憶を辿って迷う事なくエレベーターに辿り着いた。

しかし、辿り着いた直後、階段を降りてくる足跡が聞こえた。

シャドー「お前ら！ 一体どうやって外した！」

シャドー「ラブリナ様！ この者達です！」

降りてきたのはリーリエ達を連れ出したシャドーの戦闘員達。その中の一人の呼びかけに応じてシャドー戦闘員の中からピンク髪のパニーテールをした人物がゆっくりと姿を現した。そして、その人物は逃げ出すクレインを見つけると、少女のように無邪気に喋り始めた。

ラブリナ「何々!!? ちよつと〜! 何処行こつていうのよ〜」

そんなラブリナに対して額の汗を拭いながらクレインは口を開いた。

クレイン所長「何度も言わせるな! 君達シャドーの協力には応じない!」

ラブリナ「もおう! 聞き分け悪いんだから〜♪ ダークポケモンの何が気に入らないのよ〜 あんな強くてカッコいいのに〜! 博士見る目無さすぎ〜♪」

気の無いギャル系口調の喋り方に下手に緊張感を持たずに済んだリーリエとマオはクレインを護るようにして前へ歩いて行つた。

マオ「とにかく私たちはここから出て行かせて貰うからね!」

アママイコ「アーマイ!!?」

ラブリナ「だ〜か〜ら〜! 出て行くななんて聞いてないわよ〜! ってか、あんた達は誰?」
そんな二人にラブリナは鋭い目つきで睨み返してきた。氷のように冷たい視線がリーリエ達の胸へと突き刺さる。そんな凍てつく二人を嘲笑うように微笑むラブリナはさらに話を続けた。

ラブリナ「とにかくあんたに出て行つては困るのよ! リライブ不可能な究極のダークポケモン “X D O O 1” を作り上げるためにね!」

クレイン「ば…馬鹿を言うな! 私がそんな事に手を貸す訳がないだろ!」

シャドーが起こしたオーレでの事蹟はクレインは痛いほど知っている。そんな悲劇

の犠牲となったポケモン達の緩和ケアを行いながらリライプの開発に謹んでいた矢先に行われようとしているダークポケモン実験の勧誘に対して強く非難した。

そんなクレインを小馬鹿にするようにして苦笑し猛省しないシャドー戦闘員の様子にリリーエとマオにも憤りが募ってきた。

リリーエ「そんな恐ろしいことをなさるなんて言語道断です！」

マオ「あんた達！ポケモンを何だと思ってるの！」

三人からの叱責に耳が痛くなってきたラブリナは怠そうに天井へと視線を上げた。

ラブリナ「うるさいな…説教なんて聞きたくないのよね〜まあ、クレイン所長同様。この計画を聞いたあんた達二人も…ここから出すわけには行かないんだよ…ね！」

怠惰な様子から一気に戦闘体勢に切り替えたラブリナは二体のポケモンを繰り出した。

リリーエ「シロン！」

シロン「コン!!？」

マオ「アママイコ！」

アママイコ「アーマイ!!？」

そしてそれと同時にシロンとアママイコも前へと出た。他の戦闘員も応戦しようとするもラブリナはモンスターボールを投げようとするその手を止めた。ラブリナの余

裕そうな態度にリーリエとマオはおもわず身構えた。

クレイン所長「二人とも気をつけてくれ」

他のシャドー戦闘員やミラーボの時とは明らかに違うオーラを纏うラブリナ。そんな彼女の実力が嵐のようにリーリエとマオに襲いかかろうとしていた。

クレイン所長「彼女は新生シャドーの幹部の一人だ！」

一筋縄ではいかない初の幹部との対決が始まった。

第三十六話 幹部登場

タمامシシティに到着したリーリエはマオと一緒にゲームセンターへと踏み入れた。だが、そこは静かにシャドーが建設していたカントー地方のダークポケモン研究所であった。そこで閉じ込められてしまったリーリエとマオが出会ったのはカントーへと来日される前に行方不明となっていたオーレ地方の研究員のクレイン所長であった。謎のポケモンの助けもあつて脱出を試みるリーリエ達の前に現れたのはシャドー幹部の一人、ラブリナであった。

ラブリナは早々とモンスターボールからアゲハントとラブカスを場に出した。登場した二体は大きく鳴き始めると、氷のような冷たい視線をリーリエ達に向けた。可愛らしいポケモンから想像できない表情がリーリエ達の胸を突き刺した。

対してリーリエは二体を相手にマオとタックを組んで挑む事になった。余りバトル

の経験の無いマオに悪の組織の人間と戦わせる負担を掛けたくはなかったのだが、シロン以外のポケモン達はみんなポケモンセンターに預けたまま外へと出たので、今手持ちにはシロンしか残っていなかったのだ。そんなマオも心配するリーリエを気遣うように笑顔を向けた。恐怖心を紛らわそうとするその笑顔に胸が痛くなるものシロンだけで二体を相手にするのも厳しいのもまた事実である。お願いする他がなかった。

そして、シロンとアママイコが前に出たと同時にバトルは始まった。相手の二体はその瞬間にラブリーナの指示が無くともシロンとアママイコへと向かって勢い良く前進した。

ラブリーナ「アゲハント！」「いとをはく」!!?ラブカス！「みずてつぼう」!!?」

リーリエ・マオ「躲して!!」

アゲハントとラブカスの攻撃をシロンとアママイコは左右対称に躲した。お互いに反対方面へと移動したシロン達の立ち位置を追ったリーリエとマオはすぐに攻撃技を指示した。

リーリエ「シロン！」「ここえるかぜ」!!?」

マオ「アママイコ！」「マジカルリーフ」!!?」

二体を挟み撃ちする様にして取り囲んだシロンの冷気とアママイコの葉の刃がラブリーナの二体のポケモンに放たれた。しかし、左右からの攻撃が飛んでくる物の空を飛ぶ

事が出来るアゲハントはラブカスを抱えると真上へと飛び上がった。襲いかかってくる両方からの攻撃を寸前の所で躲したのだ。

攻撃を躲したアゲハントとラブカスはラブリナの合図でシロンとアママイコにそれぞれと対峙した。

リーリエ「わたくしはアゲハントをお相手します!」

マオ「ラブカスは私たちに任せて!」

睨みつけてくる二体にシロンとアママイコも身構え始めた。そんなシロン達の様子を見てリーリエ達にも緊張が走り出した。しかし、その一方で二人を相手にしているラブリナは何処と無く楽しそうに胸を張っていた。余裕そうな表情と絶対的な自信。相手の実力を過信してしまったリーリエ達は蛇に睨まれた蛙のように動けなくなってしまうそうだった。

ラブリナ「【メモメモ】!!?」

反撃して来ないリーリエ達を見て、先にラブリナは二体に指示を出した。技を繰り出した二体は睨みつけるような表情から一変、愛くるしい表情で誘惑し始めた。

リーリエ（何で【メモメモ】を…）

マオ（確かこの技は同性には効かないよね）

相手の意図が読めずリーリエとマオはただ立ち尽くすしかなかった。すると、たくさ

んのハート型のエネルギー波を量産していったアゲハントとラブカスは今度はそのエネルギー波を一箇所に集め始めた。収集されたハート型のエネルギー波はその場で大きく膨張し始めた。だんだんと大きくなるハートはアゲハントとラブカスの姿を遮る壁となって現れた。

二体の姿を見失って焦り始めたシロンとアママイコには大きな隙が出来てしまった。ラブリナ「「つばめがえし」!!?」「ハートスタンプ」!!?」

巨大なハートの壁の中から飛び出した二体はシロン達に向かって攻撃を仕掛けた。中央に位置する大きなハートの壁の所為で二体の行動ルートが見えなかった。

シロン「コーン!!!」

アママイコ「アーマイ!!!」

二体の技を受けてしまったシロンとアママイコは後方へと吹き飛ばされる。だが、鋭い攻撃が刺さりながらも二体は根性で立ち上がった。「メモメモ」をあんな風に使ってくる戦略とポケモン達の技術にリリーリエ達は固唾を飲んだ。

ラブリナ「アゲハント!」「ぎんいろのかぜ」!!?」ラブカス「みずてつぼう」!!?」

容赦のない攻撃がシロン達に襲いかかる。

鱗粉を乗せた風とスピアーの様に刺す水流が放たれた。

リリーリエ「シロン!」「れいとうビーム」!!?」

マオ「アママイコ！【マジカルリーフ】!!?」

相手の攻撃にシロンとアママイコも技で押し返し始めた。交じり合った双方の技はそのまま銀色の鱗粉を巻き上げながら相殺された。

ラブリナ「時間が無いわけだし一気に片付けるわよ。戻れアゲハント！」

紙吹雪のように舞い上がる鱗粉の中でラブリナはアゲハントを戻した。

ラブリナ「出てきな！エネコロロ!!」

次にラブリナが繰り出したのはおすましポケモンのエネコロロだった。そのエネコロロの背後から漂う黒い靄を見たリーリエは静かにマオに知らせた。

リーリエ「マオ：ダークポケモンです」

マオ「わ：：分かった」

ダークポケモンと聞いたマオは慎重にアママイコにも注意を促した。マオの緊張で震えた声にアママイコも前にいるエネコロロに注意を払った。

ラブリナ「へえ！スカウターなしで本当に見えちゃうんだ。まあ、そんな事はいいか♪」

毛並みを逆だてるエネコロロは技を繰り出す体勢へと切り替えた。

ラブリナ「エネコロロ！【ダークウェーブ】!!?」

黒い火の玉のような攻撃を繰り出した。その技を咄嗟の判断で躲したシロンとアマ

マイコはエネコロロとの距離を取った。

リーリエ「地面に「れいとうビーム」!!?」

真つ正面からの対抗を避けたリーリエはシロンに次の事を指示した。床に思いつきり冷凍光線は放射すると、エネコロロが立っている所が瞬くうちに氷の床へと変わった。

滑る床に肉球を突き刺す冷感に覚束ない状態になっていた。エネコロロの行動を制御する事に成功したリーリエはZリングを飾した。

「天から静かに降り注ぐ雪」

「無数に煌めく氷の結晶」

「熱き我がソウルとともに」

「今再び 天へと昇れ！」

リーリエ「!!!レイジングジオフリーズ!!!」

シロン「!!!コオオオン!!!」

氷の乙技が物凄い威力とスピードでエネコロロへと放たれた。いくら素早さに自身が持つエネコロロでも氷の床の上では思うようには動けない。決まれば勝利。そう脳内に過ぎったのも束の間であった。

ラブリナ「エネコロロ! 【まもる】!!?」

シロンの乙技を受ける直前にエネコロロは守りの壁を展開した。そのまま巨大な冷凍光線に呑み込まれると、大きな氷の華に包まれた。全ての技のダメージや効果を無効化にしてきた【まもる】であつても、強大な乙技を完全に防ぐ事が出来なかつたみたいだ。しかし、それだけで十分であつた。後に爆散した氷の中から出てきたエネコロロは戦闘不能を免れる事が出来た。

ラブリナ「【ダークラッシュ】!!?」

乙技を使った事でかなりの体力の消耗が出てしまったシロンにエネコロロは鋭い爪に黒いオーラーを纏わせると、そのままシロンに襲いかかった。シロンを護るべく前に出たアママイコ諸共、激しい衝撃波と一緒に辺りを吹き飛ばした。

リーリエ・マオ「きゃあああ!!!」

リーリエとマオはあまりの衝撃波によつて後ろへと吹き飛ばされてしまった。倒れ込んだ体を何とかして起こすと、急いでシロン達の方へと目を向けた。

シロン「コオ……ン」

リーリエ「シロン！」

煙が晴れたその先には、エネコロロの前足によって体を地面へと押さえ込まれてしまっているシロンがいた。何とか足を払いのけようとするも、力が足りずに抜け出す事ができない。

ラブリナ「ラブカス！【いやしのはどう】!!?」

さらに追い討ちをかけるように、ラブカスの力によってエネコロロの体力は回復されてしまった。

ラブリナ「エネコロロ。留めを刺してあげて」

リーリエ「シロン!!!」

絶望的な状況の中、リーリエの叫びと一緒にアママイコはシロンの方へと走り出した。アママイコの決死の行動にマオも立ち上がる。

マオ「アママイコ！【おうふくビンタ】!!?」

シロンを押さえている足に向かってアママイコは攻撃を仕掛ける。

ラブリナ「【ダークウエーブ】!!?」

しかし、エネコロロはそのまま黒い火の玉でアママイコを吹き飛ばした。立ち上がるもアママイコも体力の限界に近づいてきている。

マオ「アママイコ……」

シロンも動けず傷つくアママイコを見てマオはどうしたらいいのか分からなくなっ
てしまった。混乱すればするほど、悪い方向へと頭が働いていく。徐々にマオの体力も
削られていた。

ラブリーナ「楽にしてあげて【ハートスタンプ】!!?」

ラブカス「ラッブツ!!?」

アママイコの頭上へと跳んだラブカスは落下の速度を利用した体当たりを仕掛けた。

ラブリーナの声に反応したマオは我に帰った。ボロボロになっているアママイコにさ
らなる攻撃が襲いかかる。覚束ない足で懸命に立ち上がっているアママイコの姿を見
たマオは呼びかけた。

マオ「アママイコ!!!」

アママイコ「アーマイ!!?」

悲痛が混じったマオの声に反応したアママイコは力を振り絞ってラブカスの攻撃を
躲した。そして思いっきり地面へと叩きつけられたラブカス目掛けて、アママイコは渾
身の力を込めた足で踏みつけた。力の入ったアママイコの攻撃はさらにラブカスを地
面へとめり込んだ。コンクリート式の床が割れるほどの力にラブカスは戦闘不能と
なった。

クレイン博士「あれは…【ふみつけ】か」

マオ「アママイコ！」

今の攻撃でさらに蹠踉めいてきたアママイコはガツクリと足を落としてしまった。膝をつくアママイコは苦痛を和らげようと、アローラの時の思い出を思い始めた。

マオとの出会い。アイナ食堂での日々

そしてポケモンスクール

それらの思い出がアママイコに勇気を与えた。もう一度、アママイコは力一杯に立ち上がった。

決意込めたマオとアマージョは身構え始めた。その瞬間、スピードが上がったアマージョは一気にエネコロロの方へと飛び掛った。

マオ「アマージョ！【トロピカルキック】!!?」

アマージョ「アマアジョ!!?」

アローラのような暑い魂を込めた蹴りがエネコロロに炸裂した。そのパワーは強烈で一気にエネコロロをラブリナの後方への壁へと吹き飛ばした。その威力にラブリナも目を丸くした。

ラブリナ「エネコロロ！【みだれひつかき】!!?」

マオ「【おうふくビンタ】!!?」

指示を貰ったエネコロロは耐えながらもすぐにアマージョの方へと飛び出した。鋭利な爪と強靱な拳の攻防が始まった。進化した事でエネコロロのパワーにも対応出来るようになったアマージョは攻めに攻めていく。

シャドー「ラ：ラブリナ様！」

嫌な感じがした戦闘員は焦るようにラブリナへと呼びかけるが、そんな隊員に対してラブリナは強く睨み付けた。ダークポケモンが負けるはずがない。そんな想いにも決着がやってきた。

エネコロロ「ニャアア!!!」

ラブリナ「!!!」

アマージョの攻防に押されたエネコロロはアマージョと距離を取った。ラブカスの回復技を与えて貰いながらも、エネコロロの体力は限界に達していた。

マオ「行くよ!アマージョ!」

Zリングを取り出したマオはアマージョの両手を取った。マオとアマージョの祈りに乗せたその技はエネコロロへと放たれた。

マオ「!!!ブルームシャインエクストラ!!!」

アマージョ「!!!アマアジョ!!!」

一面花畑の固有結界が張られると、そのエネルギー波はエネコロロへと到達したと同時に満開に咲いた。花びらが舞い散る中、吹き飛ばされたエネコロロはそのまま地面へと叩きつけられた。

ラブリナ「あくあ、ここまでみたいだね♪それじゃあ、みんな!帰るよ」

戦闘不能寸前のエネコロロを見たラブリナは見捨てるようにして、リーリエ達に背を向けると、何処かへと行ってしまった。

クレイン博士「マオさん!これを!!!」

エネコロロの状態を見たクレインはあるものをマオへと渡した。受け取ったマオはそれが何かはすぐに分かった。ダウン寸前のエネコロロに向けてそれを投げ入れた。

マオ「お願い！スナッチボール!!!」

助けてあげたい気持ちを含めたスナッチボールへはエネコロロの腹部に命中した。スナッチボールに吸い込まれたエネコロロはそのまま納めること成功した。

リーリエ・マオ「!!!やった!!!」

戦いが終わったリーリエ達は急いでシロン達を抱き抱えようと、ゲームセンターの外へと出た。外に出たリーリエ達は駆けつけていたジュンサーや国際警察と思わしき人達に保護された。この騒ぎに駆けつけたサトシ達と無事に合流する事が出来た。サトシ達の顔を見たリーリエとマオは安心からかその場で膝を落とすと、暫く動けない状態が続いた。

今回対面したシャドー幹部の一人ラブリナ。国際警察がこの場に駆けつけてくる事が無ければ彼女達は早々と退散する事はなかったであろう。そう考えると、本当にどうなっていたか。自分たちの運の良さに感謝するしかなかった。

この旅での数々のシャドーとの戦い。それらはまだ序章に過ぎなかった。シャドーのさらなる脅威はまだ続いていく。

第三十七話 VSタمامシジム 苧環

ポケモンセンターでのその夜。ヤマブキジム攻略のためタمامシシテイを跡にしたソウタを見送った後、リーリエはタمامシジム戦に向けての特訓を始めていた。

リーリエ「シロン！〔こおりのつぶて〕!!？」

シロン「コン!!？」

リーリエ「ヒノアラシは〔ニトロチャージ〕!!？ムクバードは〔はがねのつばさ〕!!？」

ヒノアラシ「ヒノツ!!？」

ムクバード「ムツク!!？」

シロンから放たれた無数の氷の弾丸をヒノアラシは全身に炎を纏わせて防御を張り、ムクバードは硬化させた翼で次々に弾き返していく。攻防を同時に鍛えていくトレーニングに熱が入るリーリエ達をマオ達は遠くから見守っていた。

マオ「気合入ってるねリーリエ！」

スイレン「なんだって、リーリエの再スタートなんだからね！」

練習が一段落終えたシロン達を呼び寄せたとの同時にマオ達もリーリエの方へと歩

いて行つた。すると、カキは何処となくリーリエの釣れない表情が気になった。

カキ「どうした？」

その問いにリーリエは少し雲が掛かった表情で応えた。

リーリエ「ええ…久しぶりのジム戦つて事もあつて…変に緊張してきただけなのかも…しれません」

少しだけ身震いを立てるリーリエにサトシは静かに歩み寄つた。

サトシ「不安がつてるとシロン達にもその不安が伝わっちゃうぞリーリエ」

そつとリーリエの肩に手を置くとサトシは優しく笑いかけた。

サトシ「過去は過去だリーリエ！リーリエはこれまでシロン達と多くの戦いを積んできたんだ。その経験は絶対にリーリエ達の力になっていくはずだ！いつも通り楽しんでいけば大丈夫さ！」

ピカチュウ「ピカチュウ!!？」

サトシとピカチュウの励ましてくれたおかげで気持ちがあつたリーリエにシロン達も静かに歩み寄つた。明日のジム戦に向けてやる気の表情を見せると、その様子を見たリーリエに笑みが零れた。

リーリエ「ありがとうございます！明日のジム戦。このメンバーと一緒に生まれ変わったわたくし達をお見せします！皆さん！明日は頑張りましょう！」

リーリエの掛け声と共にシロン達も口を揃えて声を上げた。その気合の入った声はポケモンセンター内にいる多くの人達の耳にも入ったであろう。

~~~~~

ポケモンセンターを出たリーリエ達は通算で四番目となるタمامシジムの前に着いた。タمامシジムの内装は全面ガラス張りでの様子あらゆる種類の植物で溢れかえっていた。

マオ「うわあ！凄いい！」

ロトム『まるで植物園だロト!!?』

マーマネ「そのジムのエキスパートによって造りは他のジムとは全然違うんだね」

クチバジムとは明らかに違うジムにマオ達も驚きの声を上げていた。扉の前に立つと、薄つすらと花の良い香りが漂ってきた。その香りに惹きつけられるかのようにリリー達はタمامシジムへと入っていくと、それに気づいた和服を着た一人の女性がリリー達の元へと向かった。

エリカ「挑戦者の方ですか？」

スイレン「あつ！エリカさん！」

エリカ「あら！貴方は昨日の！」

マオ「知ってるの？スイレン」

スイレン「うん！昨日の別行動の時に会ったんだ！」

サトシ「お久しぶりです。エリカさん」

エリカ「まあサトシ君。お久しぶりございます。ピカチュウも元気そうでなによりです」

ピカチュウ「チャア〜♪」

久しぶりにサトシとピカチュウに会ったエリカはピカチュウの顎を摩りながら挨拶を交わした。するとエリカの後ろに見えた影に目が止まったサトシは嬉しそうに声をかけた。

サトシ「おーい！クサイハナ！」

クサイハナ「クサア!!?」

このクサイハナはタمامシジムでサトシと仲良くなったポケモンだ。クサイハナは主に臭い匂いを撒き散らすと言われているが、それは身を守るための行為であって、心を許した人には悪臭を振り撒いたりはしないのだ。

リーリエ「ジム戦の申しをいただきたく存じます。アローラ地方から参りました。リーリエと申します。」

深々と頭を下げたリーリエを見てエリカはゆつくりと歩み寄った。リーリエの手を優しく取ると、頭を上げたリーリエと目が合うと和かに笑顔を交わした。

エリカ「アローラ地方のトレーナーの方が訪れてくれるなんて嬉しく思います。こちらこそ本日は宜しくお願ひ致します」

リーリエ「あつ：はい／／よ：宜しくお願ひ致します!」

気品で華麗な立ち振る舞いと対応に女性であるリーリエもその姿に見惚れてしまった。お互いに挨拶を交わした後、エリカはリーリエ達を連れてバトルフィールドへと案内した。その道中では色んな植物と色んな草ポケモン達が気持ち良さそうにしている様子が目に入るためか、自然の中にいるみたいで一瞬ここが建物の中であることを忘れてしまいそうであった。

そして、生い茂る木々の洞窟を抜けたその先に一面の花畑に囲まれたバトルフィールド

ドがリーリエ達の前に姿を現した。対戦するエリカとリーリエを除いて、サトシ達は観戦席の方へと移動した。

審判「ただいまより、ジムリーダーのエリカとチャレンジャーのリーリエによるタマムシジム、ジム戦を始めさせて頂きます。使用されるポケモンは三体。双方何方かのポケモンがすべて戦闘不能になりますとバトル終了となります。なお、ポケモンの交代はチャレンジャーの方のみ認められます。」

ジムリーダーであるエリカの手から先にモンスターボールが離れた。太陽の光に反射された事によりさらに輝きを放つモンスターボールの中からは大量の綿毛と一緒に一体のポケモンが飛び出した。

エリカ「参ります！ワタツコ！」

ワタツコ「ワツタア!!？」

白い絨毯から姿を現したのは大きく広げた三つの綿毛が特徴的なポケモン。ワタツコだ。

サトシ「エリカさんの一番手はワタツコだ」

マオ「可愛い!!」

初めて見る草タイプのポケモンにマオは有頂天になっていた。

『ワタツコ わたくさポケモン

草・飛行タイプ

一度風に乗ってしまうと綿帽子を巧みに操って世界一周だっってしまう。どんな風に煽られても綿毛を自由自在に操る事が出来る』

ロトムから基本情報を貰ったリーリエはそのワタツコに対抗できそうなポケモンを  
一体選んだ

リーリエ「先鋒は任せました！お願いします！ムクバード！」

ムクバード「ムックバー!!？」

勢いよく飛び出したムクバードは自慢のスピードでワタツコの周りを滑空した。一周し終えると、ワタツコの真正面に立ち止まると翼を大きく広げた。

カキ「リーリエはムクバードか！」

マーマネ「頑張れリーリエ！」

どちらも空中を得意とするポケモン。

風に身を任せ、ムクバードもワタツコも静かに精神を研ぎ澄ませていた。

いよいよ始まる。タママシジム戦。

審判の手が上がると同時に、森が騒めき、花々の香りがリーリエの鼻を突き刺さした。大自然が広がる森の中にあるような清涼感がリーリエの緊張の種を朗らかしてくれた。それは相棒のシロンにもバトルフィールドに立っているムクバードも同じ気持ちになつていた。両者ともに戦闘体勢へと切り替えると同時に吹き荒れる風によって木の

葉がバトルフィールドへと一気に舞い上がった。

審判「試合開始!!!」

?リーリエVSエリカ?

リーリエ「ムクバード！上昇して下さい！」

ムクバード「ムツクバー!!？」

先制を取ったムクバードはワタツコとの距離を離すため一気に上昇し始めた。同じ飛行タイプのポケモンであるが空を自由に飛び回るムクバードと違って、季節風に乗って空中での浮遊を保っているワタツコではムクバードがいる所までは飛んで向かう事も出来ない。ワタツコの生態を知ったリーリエの安全対策を装った指示ではあるが、焦る事なくエリカはワタツコに指示を送った。

エリカ「まずは天気を味方につけましょう。〔にほんばれ〕ですわ!!？」

ワタツコ「ワツタア!!？」

華麗に踊り始めたワタツコは眩い光が灯ったエネルギーを作り出すと、それを太陽に向かつて解き放った。するとエネルギーを吸い込んだ太陽はさらに強い日差しをバトルフィールドに向かって照らし出した。

リーリエ「ムクバード！【でんこうせっか】!!？」

ムクバード「ムツクバー!!？」

リーリエもすぐにムクバードに攻撃の指示を送った。目にも止まらぬ速さでワタツコに向かつていくムクバードであったが、攻撃が決まりそうになったその瞬間、ワタツ

コは煙のようにムクバードの前で消えてしまった。

ムクバード「ムツク!?」

突然として姿を消した事に驚いたムクバードはその場で急停止すると辺りを見渡し始めた。すると自分の真上でフワフワと浮かぶワタツコに気づいた。すぐに体の向きを変えたムクバードであったが、ワタツコはそのまま風に乗ってはムクバードの周りを高速移動し始めた。

リーリエ「速い!!!」

そのスピードは鳥ポケモンの目でも追いつくのも難しい程の速さになっていた。高速移動で周りを飛び回るワタツコにムクバードはまんまと翻弄されてしまった。

ロトム『あのワタツコの特徴は《ようりよくそう》ロト！日差しが強い時は素早さがいつもよりも倍になるロト！』

リーリエ「落ち着いて！ムクバード！」

シロン「コン!!？」

ふわふわと浮かぶイメージとはかけ離れたスピードをしたワタツコに戸惑い続けるムクバードにリーリエは必死に呼びかけた。そんな二人にエリカの容赦のない指示がワタツコに送られた。

エリカ「素早くなっただけでは御座いませんわ。お次はこの技です！【ソーラービー

ム!!?」

ワタツコ「ワツタア!!?」

ムクバードの背後を取ったワタツコは太陽の光を集めると、それをエネルギーに変えた太陽光線をムクバードへと放った。通常は溜めるのに時間がかかる技であるが、日差しが強いこの天気の中ではその打点を改善する事が出来る。

リーリエ「上昇して!!」

ムクバード「ムツク!!?」

何処から攻撃されているか分からないムクバードであったが、リーリエの機転によりすぐに飛び上がる事で、その場を回避し「ソーラービーム」を躲す事に成功した。さらに飛び上がったムクバードはバトルフィールドを広く俯瞰する事が出来たお陰でワタツコの姿を捕らえる事が出来た。

リーリエ「ムクバード!」つばめがえし!!?」

一気に急降下し始めたムクバードはワタツコへとそのまま突進して行く。いくらスピードをあげたワタツコであっても百発百中の攻撃を前では意味が為さない。しかし、気迫の表情で向かってくるムクバードに対しエリカは慌てることなく常に冷静でいた。

エリカ「【コットンガード】!!?」

ワタツコ「ワツター!!?」

ワタツコは三つの綿を小刻みに振り始めると、辺りに綿毛が散りばみ始めた。みるみる内に一つに凝縮されていく綿毛はそのままワタツコの身体全体を包み込んで行った。

ムクバード「ムツク!!?」

風を切りながら進み続けていくムクバードの力強い攻撃は綿毛に覆われたワタツコへと決まった。しかし衝撃により吹き飛んだ綿毛の中からはその攻撃に対し全く動じていないワタツコの姿があった。

桁外れの防御力を手にしたワタツコを前にムクバードは悔しそうに見つめる。リーリエは次のプランへと移った。

リーリエ「「かげぶんしん」です!!?」

大量の分身を作り出したムクバードはワタツコを周りを取り囲んだ。

リーリエ「そのまま【でんこうせつか】!!?」

エリカ「もう一度【コットンガード】!!?」

四方からの一斉攻撃を仕掛けたムクバードであったが、再び体に纏わり付かした綿帽子によってワタツコはダメージを軽減させた。

エリカ「【アクロバット】ですわ!!?」

ムクバード「ムクク!!!」

さらに辺りに散らばる綿帽子の中、風に乗ったワタツコによる軽やかな連続攻撃がムクバードに襲いかかった。

リリーエ「頑張つて!【つばめがえし】!!?」

ムクバード「ムツクバー!!?」

ワタツコの怒涛の攻撃に耐えながらも、力一杯に翼を広げたムクバードは綿帽子を突き切りながら上空へと逃げる事に成功した。

そして、そのまま急転回させると嘴にパワーを込めるとワタツコに向かって一気に急降下した。

エリカ「焦りは禁物ですわ。【ソーラービーム】!!?」

ワタツコ「ワツタア!!?」

だが正面から向かってくるムクバードの姿を捕らえていたワタツコはそのまま【ソーラービーム】をムクバードに向けて放射した。

ムクバード「ムツクバア!!!」

リリーエ「ムクバード!!!」

草タイプ最強クラスの技を諸に受けてしまったムクバードはそのまま墜落してしまった。タイプの相性が有利な方が押されているこの状況に観戦席にいるマオ達も驚

いていた。お淑やかに振る舞う女性の目から燃える熱い眼にリーリエも押されそうになつてゐる。

リーリエ「ムクバード…まだ行けますか？」

ムクバード「ムツク!!？」

心配するリーリエの声を聞いたムクバードは根性で再び空へと飛び上がった。ひとまず安心したリーリエであったが、ワタツコの「コットンガード」を攻略しなければこの状況を打破する事は出来ない。

リーリエ「(「コットンガード」…どうすれば…)」

ワタツコの様子を暫く観察しながら落ち着いて突破口を探っていると、リーリエに一つの策が浮かんできた。

リーリエ「ムクバード!連続で「でんこうせっか」です!!？」

ムクバード「ムツク!!？」

防戦一方に防がれ続けていた「でんこうせっか」をリーリエは再びムクバードへと指示した。最善策も立てずに当てもなく突進していくのはあまり利口ではないと思うが、それでもリーリエを信頼しているムクバードには迷いはなかった。

そのまま光の速さで再びワタツコに向かって翼を広げた。

エリカ「ワタツコ!「コットンガード」ですわ!!？」

もう一度綿毛を周りに集めたワタツコにムクバードの「でんこうせっか」が決まった。しかし案の定、ワタツコに対してダメージを与えられずにいた。

カキ「何やってるんだリーリエ！このままじゃあ、やられるぞ！」

スイレン「リーリエは無鉄砲に突っ込んだりしない。きつと何か閃いたんだよ！」

アシマリ「アウ!!？」

バクがメス「ガアメス!!？」

ヤケになったと思うようなムクバードの攻撃に不安が募るサトシ達であったが、リーリエを信じて固唾を飲んで見守っている。

そんなリーリエとムクバードの攻撃に何かしらの違和感がジワジワと登ってきたエリカの顔にも雲がかかってきた。

エリカ（まだ攻撃の手を緩めようとしな……このままでは体力が尽きるのも時間の問題ですわ）

油断せずに自身のパートナーのワタツコに目を向ける。相手の意図が掴められない中、流れを一気に変えようとワタツコに指示を送ろうとしたその時……

ワタツコ「ワタツ……」

微かに蹠踏めき始めたワタツコにエリカは驚いた。防御を極限まで高めたのにも関わらず、苦痛を訴えた。何が起きたのか分からないエリカはワタツコを見つめた。そし

て、ワタツコのある一点の箇所だけにダメージが集められていた事に気付いた。

エリカ（一箇所に向けて集中的に攻撃を当て続ける事でその部位にダメージをどんどん蓄積させていたのですね。確かにそれでしたらいくら全体の防御を高めようとも、その一点を崩してしまえば大きなダメージを与えられます）

一点狙いの攻撃。これがリーリエの策であった。限界がきたワタツコはそのままムクバードの強烈な体当たり攻撃を前に後方へと吹き飛ばされた。

ムクバード「ムック!!？」

ワタツコ「ワッター!!！」

ワタツコの鉄壁の防御が瓦解された事により流れは一気にリーリエの方へと傾いてきた。逆に追い詰められて来たエリカはすぐにワタツコを立て直させた。

エリカ「頑張つてワタツコ!「ソーラービーム」ですわ!!？」

ムクバードに狙いを定めて太陽光を集めだしたワタツコ。しかし…

ワタツコ「ワッターア…」

エリカ「あっ!!!日差しが…」

ロトム『日差しがさつきよりも弱まってるロト!!？』

マーマネ「チャンスだ!リーリエ!」

トゲデマル「モギユユ!!？」

「にほんばれ」の効力が切れた事により力を集めにくくなってしまった。完全に風向きが変わりテンポが崩されたワタツコはどうする事も出来ず、迫り来るムクバードを前にしても立ち尽くす事しか出来なかった。

リーリエ「でんこうせっか!!?」

ムクバード「ムクバー!!?」

一直線に突っ込んできたムクバードの攻撃にワタツコは吹き飛ばされた。さらにムクバードの攻撃はこれだけで終わらず、嘴に力を溜めた状態で迂回すると、再び飛ばされたワタツコに向かって攻撃を仕掛けた。

リーリエ「つばめがえし」でフィニッシュです!!?」

ムクバード「ムックバア!!?」

ワタツコ「ワタツア!!!」

ムクバードの渾身の一撃によりワタツコはそのまま勢いよく地面へと叩きつけられてしまった。

エリカ「ワタツコ!!!」

ワタツコ「ワッタ…」

審判「ワタツコ戦闘不能!ムクバードの勝ち!」

勝利の雄叫びを上げながら飛行するムクバードの様子に目をやったエリカは静かに

ワタッコをモンスターボールへと戻した。

エリカ「お疲れ様ですワタッコ。貴方の可憐で高貴なバトルはとても美しかったですわ！」

まずは無事に先制点を取れたリーリエはそつと胸を撫で下ろした。

リーリエ「やりましたね！ムクバード！」

ムクバード「ムツク!!？」

リーリエの声にムクバードも元氣よく返した。二人の友情に微笑ましく感じたエリカは次のポケモンをフィールドへと繰り出した。

エリカ「お出でなさい！モジヤンボ!!!」

モジヤンボ「モンジャ!!？」

エリカの二体目はモジヤンボだ。モンスターボールから飛び出したその巨体はフィールドへと着陸したと同時に大きな地響きが起こった。ワタッコと違ってパワー溢れるモジヤンボの登場に場の空気はまた一気に緊張感に包まれた。

マオ「大きい!!!」

アマーシヨ「アジヨ!!？」

サトシ「俺たちが戦ったあのモンジャラが進化したのか」

『モジャンボ ツルじようポケモン』

草タイプ

モンジャラの進化系。植物のツルで出来た腕を伸ばして獲物を絡め取る。再生能力が高く切つても切つてもすぐに生えてくる』

あのパワーに一撃でも当たれば一溜まりないだろう。疲れが出てるムクバードを続投させる事に危険を感じたリーリエはモンスターボールを取り出した。

リーリエ「ムクバード！休んでください！」

ムクバードを戻したリーリエは次のモンスターボールへと手にかけてた。

リーリエ「ヒノアラシ！お願いします！」

ヒノアラシ「ヒノオ!!？」

エリカ「今度は炎タイプですわね！」

交代して出てきたヒノアラシは背中から炎立たせるとすぐに身構えた。苦手なタイプが相手であってもモジヤンボは恐れる事なく、すぐに攻撃を仕掛けた。

エリカ「モジヤンボ！【げんしのちから】！！？」

モジヤンボ「モジャア！！？」

タイプの相性で狼狽えない凛としたエリカの立ち振る舞い。それを真似るかのようにモジヤンボも気迫を込めた【げんしのちから】をヒノアラシへと放った。

リーリエ「躲して！【かえんほうしゃ】！！？」

ヒノアラシ「ヒノオ！！？」

その技を跳んで躲したヒノアラシはそのまま火炎放射をモジヤンボに向けて放った。

モジヤンボ「モジャア!!!」

轟々と畝りを上げた火炎がモジヤンボの巨大な体を包み込んだ。絶大なダメージを貰った瞬間を狙ってヒノアラシはダッシュした。

リーリエ「【二トロチャージ】！！？」

ヒノアラシ「ヒノツ！！？」

炎を纏ったヒノアラシの攻撃がモジヤンボへと向けられた。効果は抜群の炎タイプ  
の技を受けたモジヤンボはすぐに立て直すことが出来ないと思っていたが…

エリカ「跳ね返しなさい！」

モジャンボ「モジャア!!?」

ヒノアラシ「ヒノオ!!?」

火の粉が身体の蔓状に燃え移っていながらも、モジャンボは両腕でヒノアラシの攻撃を受け止めると、そのままヒノアラシを後方へと跳ね飛ばした。その力をアピールするかのようにはモジャンボは両腕を振り回したりして力強さをリーリエ達に見せつけた。

マオ「うっそー!!!」

マーマネ「草タイプのモジャンボに炎タイプの技は効果は抜群のはずなのに!!!」

炎技を受けていながらも怯むどころか平気な様子の子のモジャンボを前に警戒心が高くなったヒノアラシはその場で立ち止まってしまった。

リーリエ「ヒノアラシ!「スピードスター」です!!?」

攻め焦っているヒノアラシの背中を押してあげるようにリーリエはすぐに指示を送った。

リーリエ(ダメージが入っていないなんて事はない。何かカラクリがあるはずです。)平気そうなモジャンボであるが、ダメージを与えていない訳ではない。攻撃を続けるヒノアラシのためにもその謎を探るべくリーリエはモジャンボへと注意を傾けた。

エリカ「捕まえなさい!!!」

モジャンボ「モジャ!!?」

攻撃を受けながらも大きく伸ばしたモジャンボの腕はヒノアラシへと走り出した。枝分かれする複数の触手を前にヒノアラシは攻撃を止めると、「ニトロチャージ」で上げた素早さを生かして躲していくが、その勢いを押し殺すように迫るモジャンボの触手を前に遂に捕まけてしまった。

エリカ「モジャンボ! 【しびれごな】!!?」

モジャンボ「モジャ!!?」

ヒノアラシ「ヒ:ヒノオ:」

ヒノアラシを捕まえたモジャンボは自分の元へと引き寄せると、黄色い粉を全身にヒノアラシに浴びさせた。

ロトム『【しびれごな】は相手を麻痺状態にさせる技!!?これでは折角上げた素早さも意味がないロト!!?』

硬直状態になったヒノアラシに向けてモジャンボは畳み掛けるように攻撃を仕掛けてきた。

エリカ「【げんしのちから】!!?」

リーリエ「ヒノアラシ! 【えんまく】です!!?」

ヒノアラシを捕縛している以外の触手でモジャンボはエネルギーを溜め始めた。その瞬間を狙ってヒノアラシは自由が利く口を大きく空けると、痺れる身体に堪えながら

もモジャンボの顔に目掛けて煙幕を張った。

突然に目の前が真っ暗になった事に驚くモジャンボは捕らえてる触手を思わず緩めてしまった。その隙にヒノアラシは脱出するとモジャンボからすぐに離れた。命中率も下げる事にも成功し、流れを掴んだと思いきやそんな様子に、やはりエリカは表情を崩さず、決して狼狽える様子はなかった。

エリカ「残念ですが目眩しにもなりません。モジャンボ！「パワーウィップ」!!?」  
モジャンボ「モジャア!!?」

エリカの指示に我に返ったモジャンボは地面を掘り起こすと、地響きと一緒に巨大な植物の蔓を出現させた。

ヒノアラシ「ヒノ!!?ヒノ!!?ヒノ!!?」

地中から現れたその蔓に大きく空へと打ち上げられたヒノアラシは身動きが取れない空中でジタバタし始めた。

リーリエ「落ち着いてヒノアラシ!そのまま「かえんほうしゃ」!!?」  
エリカ「モジャンボ「パワーウィップ」ですわ!!?」

同じくリーリエの声に落ち着きを取り戻したヒノアラシはそのまま火炎放射を放った。迫る火炎放射をモジャンボは大きく腕を振り回しては、いとも簡単に打ち消してしまった。苦手なタイプの技を躲す事なく力で押し返したモジャンボを観察したリーリエは

ある事に気付いた。

リーリエ（そういうえば：モジヤンボは躲そうともしないどころか、あの場から一步も動こうともしていませんよね…）

躲すだけでなくモジヤンボはヒノアラシの技を同じく技で相殺させ、距離を取られても自分から向かおうともしない。一見にして複数の触手があれば近づく必要はないと思えるが、これに違和感を覚えたリーリエはすぐに行動に移した。

リーリエ「ヒノアラシ！モジヤンボの足元に向かって「かえんほうしゃ」です！！？」  
ヒノアラシ「ヒノオ！！？」

再び放たれた火炎放射は今度はモジヤンボの両足へと命中した。

エリカ「お見事」

焼け野原となったモジヤンボの足元を見てみるとある事が起こっていた。それは観戦席にいるサトシ達からでもはっきりと見えていた。

マオ「モジヤンボの足元に根が生い茂ってる！！」

カキ「モジヤンボが倒れない理由はあれみたいだな！！」

モジヤンボの足元で黄緑色に光る複数の根。それはまるでモジヤンボに不思議な力を与えているように見えた。

ロトム『あの技は「ねをはる」！！？根から吸い上げた養分を使って少しずつ体力回復

させる技口ト!!?』

つまりその技でモジャンボは少しずつ体力を回復していたという真相に辿り着けた。倒れないモジャンボのクラクリを見破ったリーリエにエリカは賞賛した。

エリカ「素晴らしい観察力です！リーリエさん！ですが、タネがお分かりになった所でわたくしのモジャンボを攻略なされたとは限りませんわ！」

モジャンボ「モジャ!!?」

身体を大きく広げたモジャンボはヒノアラシを威嚇するが、負けじとヒノアラシも背中  
中の炎を燃した。

エリカ「〔げんしのちから〕です!!?」

リーリエ「〔かえんほうしゃ〕!!?」

ほぼ同時に攻撃の指示が送られた二体の攻撃は大きな爆発と共に相殺された。

ヒノアラシ「ヒノオ…」

モジャンボ「モジャア…」

勢いよく吹き荒れる爆風に二体は飛ばされないように地面に這い蹲るように踏ん張っている。

リーリエ「今です！〔えんまく〕!!?」

少し躊躇めいたモジャンボのその隙を見逃さなかったリーリエは爆風が止んだ瞬間

を見計らってヒノアラシに指示した。指示を聞いたヒノアラシもモジヤンボが動き出す前に再び煙幕でモジヤンボを包み込ませた。

辺り一面が真っ暗になったモジヤンボはヒノアラシを直ぐに見失ったという焦りからさらに慌ただしくなってしまった。

エリカ「払いなさい！」

そんな喝を入れたような鋭い指示が動揺したモジヤンボを落ち着かせた。冷静になつたモジヤンボは腕を大きく振り上げると、一瞬にして煙幕を振り払つた。

エリカ「パワーウィップ」!!?」

リーリエ「スピードスター」!!?」

その勢いのままモジヤンボはヒノアラシに向かって「パワーウィップ」を仕掛けたのだが、広範囲に降り注ぐ星屑の前に思わず攻撃の手を止めてしまった。

リーリエ「そこです！【かえんほうしゃ】!!?」

ヒノアラシ「ヒノツ!!?」

モジヤンボ「モジャア!!!」

防御体勢を取つたモジヤンボに今度は火炎放射が襲いかかる。

エリカ「モジヤンボ！【げんしのちから】!!?」

しかし渾身の力で身体に燃え移つた炎を振り払うと、すぐに溜め込んだ原子エネルギー

ギーをヒノアラシに向かって放った。

リーリエ「躲して！【ニトロチャージ】!!?」

次の攻撃を仕掛けて一気に決めに行こうとしたリーリエであったが：

ヒノアラシ「ヒ…ノオ」

運が悪く。【しびれごな】によって身体の痺れに襲われてしまったヒノアラシに【げんしのちから】が決まってしまった。爆発音と共にヒノアラシは氣力を失ったかのように空中へと吹き飛ばされてしまった。

リーリエ「頑張って！ヒノアラシ!!!」

ヒノアラシ「ヒノオ!!?」

だが、リーリエの声によって目が覚めたヒノアラシは空中で受け身を取ると、そのまま【ニトロチャージ】を発動させてモジャンボに向かって突進した。

モジャンボ「モジャア!!?」

ヒノアラシのまさかの行動に判断が遅れたモジャンボはヒノアラシの攻撃を真正面から受けてしまった。

モジャンボ「モ…ジャア…」

エリカ「モジャンボ!!!」

爆炎に包まれたモジャンボは何とか持ち堪えようと試みたが、そのままゆっくりと背

中から地面へと倒れ込んだ。

審判「モジャンボ戦闘不能！ヒノアラシの勝ち！」

エリカ「御免なさいモジャンボ。判断が遅れたわたくしのミスですわ。後はゆっくり休んで下さい」

詫びながらエリカはゆっくりと取り出したモンスターボールにモジャンボを戻した。モンスターボールに戻した後、エリカは勝利を喜び合うリーリエとヒノアラシの姿を見た。

指示が遅れてしまったこともあるが、何よりも勝敗が別れたのは土壇場でのヒノアラシの起死回生の一撃である。エリカは思った。そしてそのヒノアラシを動かしたのはリーリエの根気強さとパートナーを信じる気持ちにあったのだと感じた。

華奢な少女から溢れ出るリーリエの力強さにエリカはすっかりと惹かれてしまった。そしてそんな挑戦者との邂逅に感謝を込め、エリカは最後のポケモンを繰り出した。

エリカ「我がタمامシジムの守護神！参ります！！」

エリカの最後に繰り出したのは洋紅色に染まった大きな花が特徴的なポケモンだった。

『ラフレシア フラワーポケモン

草・毒タイプ

クサイハナの進化系。世界一大きな花びらで獲物を引き寄せてから毒の花粉を浴びさせる。花粉を振りまいている時は物凄い音も響き渡る』

強敵を倒した後での更なる強敵の前にリーリエは無闇な連戦は避けた。

リーリエ「お疲れ様ですヒノアラシ！休んでください！」

ヒノアラシ「ヒノツ!!?」

リーリエ「ムクバード!もう一度お願いします!」

ムクバード「ムックバー!!?」

再びバトルフィールドに現れたムクバードは上空へと舞い上がると両翼を広げてはラフレシアを「いかく」し始めた。ワタツコとのバトルでの疲れを感じさせない力強いその姿を見たエリカはよく育て上げられていると感心した。

エリカ「ラフレシア!【にほんばれ】!!?」

ラフレシア「ラツフウ!!?」

強い日差しが再びバトルフィールドへと照らされた。同じ特性の《ようそうりよく》を持つラフレシアは軽やかにステップをし始めた。

リーリエ「【かげぶんしん】!!?」

ムクバード「ムック!!?」

《ようそうりよく》のスピードに対抗するべくリーリエはムクバードの回避率を上げてきた。無数の分身でラフレシアの周りを取り囲み始めたのだが、それを待っていたかのようにエリカは笑みを浮かべた。

エリカ「【はなふぶき】ですわ!!?」

ラフレシアは不思議なパワーを解放させると、自分の周りに強い突風を巻き起こし

た。その突風に吹かれながら流々と舞う花びらが一斉に全てのムクバードを飲み込んだ。

ムクバード「ムック!!!」

吹き飛ばされたムクバードはおもわずリーリエの方へと後退した。

リーリエ「大丈夫ですか?!?」

ムクバード「ムック!!?」

少し苦しそうな様子を見せたムクバードだが、リーリエは慌ててモンスターボールを取り出した。

リーリエ「戻ってください!」

ムクバードを戻すと、そのまま別のモンスターボールへと手にかけて。

リーリエ「!ヒノアラシ!もう一度お願い!」

ヒノアラシ「ヒノツ!!?」

リーリエ「【かえんほうしゃ】!!?」

エリカ「【はなふぶき】!!?」

ヒノアラシを投入してからすぐに火炎放射が放たれた。迫る火炎放射を前にしてもラフレシアは再度、花吹雪を巻き起こした。モジャンボ戦でのダメージを引きずっていたヒノアラシの【かえんほうしゃ】は日差しが強い中でも思った以上のパワーを出すこ

とが出来なかったためか、ラフレシアの「はなぶき」はそのまま炎を消し飛ばすとそのままヒノアラシを後方へと吹き飛ばした。

ヒノアラシ「ヒノツ…」

リーリエ「戻って！」

ダメージを溜め込んでしまっているヒノアラシをモンスターボールへと戻したリーリエはシロンへと目をやった。

リーリエ「お願いします！シロン！」

シロン「コン!!？」

やる気に満ちたシロンは元気よくバトルフィールドへと飛び出した。

リーリエ「シロン！【ごごえるかぜ】!!？」

シロン「コーン!!？」

バトルへと降り立ったシロンはすぐに冷気をラフレシアに向かって放った。ヒノアラシの炎技とは逆に【にほんばれ】の効果でいつもより威力は下がっているはずだが、それに負けじと取らないパワーがラフレシアへと向けられた。

エリカ「【かげぶんしん】ですわ!!？」

シロンの技が命中する前にラフレシアは複数の分身を作り出した。【ごごえるかぜ】を受け流したラフレシアはそのままクバードと同様にシロンを取り囲むかのようにし

て対峙した。

リーリエ「跳んで！」

複数のラフレシアを前に強張るシロンはすぐにリーリエの指示通りにその場で思いつき飛び跳ねた。

リーリエ「真下へ！【こごえるかぜ】!!？」

シロン「コーン!!？」

ラフレシアの頭上を捕らえたシロンは真下に向かって思いっきり冷気を流し込んだ。大きく広がる冷気はそのまま分身共々飲み込むと、分身を打ち消しながらラフレシアにダメージを与える事が出来た。

リーリエ「【こおりのつぶて】!!？」

ラフレシア「ラッフウ!!!」

本体だけを残す事が出来たリーリエはさらに先制攻撃を畳み掛けた。

リーリエ「【れいとうビーム】です!!？」

シロン「コオオン!!？」

エリカ「【はなぶぶき】ですわ!!？」

さらに【れいとうビーム】を仕掛けていくが、やられてばかりではいる訳がない。直ぐに体勢を立て直したラフレシアは【はなぶぶき】でシロンの技を相殺させた。

その後ヒートアップしていくシロンとラフレシアの戦いを見ていたサトシ達の応援にも熱が入ってきた。

サトシ「頑張れ！リーリエ!!!負けるな！シロン!!!」

ピカチュウ「ピツカアチュウ!!？」

冷たい冷気と花びらの風に包まれたバトルフィールドの中でのバトルであるが、混戦攻防を繰り広げる暑いバトルは終盤に差しかかろうとしていた。

リーリエ「ムーンフォース」!!？」

エリカ「ヘドロばくだん」!!？」

双方の技がぶつかった衝撃を気に二体の動きが止まった。

シロン「コオ…コオ…」

リーリエ「シロン…」

シロンの体力が限界に差し掛かってきたのを見てリーリエはその場で固まってしまった。見つめる先はボロボロになりながらも必死に相手の姿を喰らい付こうとするシロン。何とかしてシロンを救い出す方法を絞り取ろうとするも極度の激しい鼓動により焦りが始めた。

エリカ「ラフレシア。少しの間だけ待ってあげて下さい」

ラフレシア「ラツフウ!!？」

静止した相手を前に攻撃を止めたエリカの指示にラフレシアは素直に従った。トラウマのスイッチが入ったかのように冷静さが欠けてきたリーリエをエリカは静かに見守った。

リーリエ（もう一度、ムクバードかヒノアラシに交代するべきでしょうか…ですが交代したところで突破口を見つけられていけないのであれば二の舞です。ムクバード達の体力も限界に達している状態でそんな無責任な判断はできない。だけど、このままだとシロンの体力が…）

考えれば考えるほどクチバジム戦での記憶が蘇ってきた。その度に頭を過る敗北の二文字の言葉を振り払いながらもリーリエは頭を働かせるが、乗り越えたと思っただけが背後から迫ろうとする恐怖が邪魔をする。

絶対に勝たなければならないというプレッシャーに押し潰されるリーリエに声が届いた。

シロン「コオン!!!」

そんな事を考えているリーリエに向けてシロンは叱責した。その声に我に返ったリーリエの目にシロンの姿が入った。凛々しく立つその姿にリーリエは一呼吸を入れた。

リーリエ「ありがとう…シロン」

ポケモン達を勝利に導くために適切な指示を送ろうとしていたリーリエ。しかし、自分の思考ばかりに気にと取られて、シロン達の気合と根性に応えてあげようとしなかった事を恥じた。モジャンボ戦で勝つ事が出来たのも最後までヒノアラシの事を信じていたからこそ勝ち星を上げられたのではないか。

ポケモンバトルは頭で考えるものではない。ポケモン達と心をつなげて目の前の勝利に向かって一緒に走り続ける事が大切なのだ。初心へと逆戻りしていた自分に言い聞かせた。

リーリエ「余計な事はもう考えません！参ります!!!」

シロン「コン!!？」

目に光が戻ってきたリーリエは気合を入れ直した。固く決意したリーリエとシロンを見てエリカとラフレシアも動き出した。

エリカ「ラフレシア！わたくし達も最後まで気を引き締めていきましょう！」

ラフレシア「ラツフウ!!？」

その言葉と同時にラフレシアは体を横方向へと高速回転させ始めた。攻撃の準備に入ったラフレシアは再び花吹雪を巻き起こした。

エリカ「ラフレシア！【はなふぶき】!!？」

花吹雪がシロンの方へと吹き飛ばされるのと同時にシロンも勢いよくジャンプをすと、空中で縦方向に高速回転をし始めた。次第に冷んやりした体毛により冷やされた空気がシロン包み込ませた。

リーリエ「シロン！【こおりのつぶて】!!?」

シロン「コオン!!?」

指示を聞いたシロンは攻撃を仕掛けた。その時、シロンのある行動がこの場にいる者達を驚かせた。

冷気に包まれたシロンはそのまま突進を仕掛けて行くと、シロンを包んでいた冷気が次第に凍り始めると、シロンを閉じ込めたまま巨大な氷の球を作り上げたのだ。

氷の球の中にいるシロンはそのまま花びらが舞う風の中を突っ走って行くとそのままラフレシアに向かって強烈な体当たりを叩き込んだ。氷の体当たり攻撃を受けたラフレシアにダメージが入った。衝撃で砕けた氷の球の中から飛び出したシロンは思いつき空気を取り込んだ。

リーリエ「シロン！【れいとうビーム】!!?」

シロン「コオオン!!?」

ラフレシア「ラアフ!!!」

強烈な冷凍光線を受けたラフレシアはかなりのダメージが入ったものの何とか立ち

上がろうと踏ん張った。

エリカ「ラフレシア！しっかり！」

ラフレシア「ラア…フ…」

しかしシロンの怒涛の攻撃にダメージが溜まってきたラフレシアは返事をするだけで精一杯みたいだ。蹠踉めくラフレシアを見てリーリエは留めの一撃を指示した。

リーリエ「【こおりのつぶて】！！？」

シロン「コン！！？」

猛スピードで放たれた氷の弾丸はラフレシアの急所に当たった。氷の破片が舞い散り、爆煙が晴れた頃にはラフレシアはゆっくり後ろへと倒れていた。

ラフレシア「ラアフ…」

明らかに目を回しているラフレシアを確認した審判はリーリエ達に向けてコールした。

審判「ラフレシア戦闘不能！ロコンの勝ち！よって勝者はチャレンジャー、リーリエ！」

勝利を得たリーリエの足はシロンの方へと走り出した。喜びの涙と笑顔を浮かべながらシロンの名を呼んだ。

リーリエ「シロン!!!」

シロン「コーン!!?」

リーリエの方へと走り出したシロンもそのまま勢いよくリーリエの胸へと飛び込んだ。  
だ。

マオ・スイレン「やった!!!勝った!!!」

マーマネ「しかもリーリエのポケモンは一体も倒されてないよ!」

カキ「ああ!文句なしの完全勝利だ!」

サトシ「凄かったな!ピカチュウ!」

ピカチュウ「ピカチュウ!!?」

サトシ達もリーリエの勝利に喜んでいた。健闘してくれたラフレシアをモンスターボールへと戻したエリカはリーリエの方へと向かった。

リーリエ「ありがとうございます!」

エリカ「諦めない力強さ。そしてポケモン達との信頼。とても良いものを見せて頂きました」

そう言うのと、エリカはリーリエにジムバッジを授けた。

エリカ「これからの貴方とポケモン達の未来への健闘を祈ってこれを授与します。タマシジムを降した証。レインボーバッジです!」

レインボーバッジを受け取ったリーリエはバッジを持っている右手をを空へと突き

上げた

リーリエ「レインボーバッジ！ゲットです！」

シロン「コオン!!？」

ムクバード「ムツクバー!!？」

ヒノアラシ「ヒノツ!!？」

こうして三つ目のジムバッジを獲得したリーリエはさらに喜びの声を上げた。そんなリーリエ達の後ろから関係者の一人が慌ててジムへと入ってきた。

弟子「先生！ただいま参られました！」

エリカ「分かりました！こちらに通して下さい！」

エリカがそう言うとな人のトレーナーがジムへと入ってきた。その人物と目が合ったリーリエはその者の名前を挙げた。

ノゾミ「あれ？久しぶりだね！みんな！」

リーリエ「ノゾミ!!？」

## 第三十八話 スイレンとイーブイ

? 数週間前?

場所はカントー最大のフィールドワークでもあるトキワの森。ペンドラの騒動の後はまた落ち着きのある居処を取り戻していた。

イーブイ「イーブイ♪」

目元が隠れるぐらいに伸びた前髪を靡かせながら一匹のイーブイが鼻歌を歌いながら、上機嫌に歩いていた。

デデンネ「デデ?」

そんなイーブイを木の影から眺める一匹のポケモン。皆さんは覚えているだろうか。

デデンネ「デッ!?」

見ない顔ぶれに興味を持ったデデンネはせつせと木から降りると、そのイーブイの方へと向かって走り出した。

イーブイ「イーブイ？」

デデンネ「デデエ!!？」

イーブイ「イーブイ♪」

デデンネ「デデ!!!」

何処から来たのかと尋ねるデデンネに向かってイーブイは思いつきり体当たりを食らわした。このイーブイなりの挨拶だったみたいなのか、倒れたデデンネに対して遊びに誘うようにしてはしやぎ始めた。その無邪気な様子に敵意はないと分かったデデンネは改めてイーブイに質問しようとしたのだが…

イーブイ・デデンネ「!!」

突然、二匹に向かって振り降ろされた捕獲網にイーブイとデデンネは気づく事が出来ず、そのまま捕まってしまった。脱出しようと腕く二匹に向かって二人の男が歩いてきた。

シャドー要員A「捕獲成功だな」

シャドー要員B「流石はトキワの森。色んなポケモン取り放題だぜ！」

シャドー要員A「さっさと此奴らを研究所へ引き渡そうぜ」

そう言うと、イーブイとデデンネを捕まえた網を持つと、そのまま車のトランクへと二匹を放り込んだ。放り込まれた二匹の目に映ったのは、自分たちと同じように捕まっているポケモン達の姿だった。為すすべもないイーブイとデデンネを乗せた車はトキワの森を飛び出すと、目的地に向かって車を走らせた。

さらに数日立ったその日、二人の少女の活躍によりシャドー研究所は壊滅。そこで捕まっていたポケモン達も国際警察の人達の手によってみんな解放された。

晴れて自由の身になったイーブイは見知らぬ街の活気に吸い寄せられるようにそのまま走り出して行った。そして知らぬ土地へと出てしまったデデンネも一人になる不安から、イーブイの後を急いで追いかけて行ったのであった。

? 現在?

サトシ「久しぶりだなノゾミ!」

ピカチュウ「ピカチュウ!!?」

ノゾミ「久しぶりサトシ!ピカチュウ!また会えて嬉しいよ!」

ニヤルマー「ニヤル!!?」

シンオウ地方以来に再会を果たしたサトシとノゾミは堅い握手を交わした。ピカチュウとニヤルマーも頬を擦り合わせたりして、お互いの再会を大いに喜んでいた。

サトシ「ここに来たって事はもしかしてジム戦か!?!?」

ノゾミ「いや、だけどタママシジムは攻略したよ!」

そう言うのと、ノゾミの手にはタママシジムのジムバッジであるレインボーバッジが光り輝いていた。

ロトム『じゃあ、ここには何をしにロト?』

ジム戦が目的でないとすれば他の用はと尋ねると、ノゾミに変わってエリカが口を開いた。

エリカ「わたくしがお呼びしたのです。ノゾミさんにポケモンコンテストの稽古をつけて頂くためにです」

スイレン「ポケモン…コンテスト？」

~~~~~

場面は変わって、自然とかけ離れた大都会に高揚感が舞い上がっている二匹のポケモン。

イーブイ「イーブイ!!!」

デデンネ「デデデ!!!」

興味があるものばかり目に映る二匹は人混みを恐れようともせず、手当たり次第お店に立ち寄っていた。そんな二匹の愛くるしさに胸を打たれた店主も木ノ実やらお菓子らをイーブイ達にご馳走していた。

無我夢中に頬張る人懐っこいその様子を見ていた人達もまさか野生のポケモンとは思わなかったたのであろうか。視界に入るもゲットしようとする人はいなかった。

タマムシシテイを満喫した二匹は次の場所へと移動しようとする、鼻を突き刺す花の香りに揺られると、その香りがする建物の方へと向かって走り出した。

~~~~~

エリカの言ったポケモンコンテストというワードに聞き覚えのないマオ達はそれは何なのかと目を丸くしていた。言葉で説明するより実践した方が早いと思ったノゾミはニヤルマーを前に出し、モンスターボールからネオラントを呼び出した。

ノゾミ「ニヤルマー！【でんげきは】!!？ネオラント！【アクアリング】!!？」

ノゾミの指示と同時にジャンプした二匹。まずはニヤルマーが尻尾を大きく振り回すと、毛並みが静電気によって逆立てると、そのまま電撃をまるで花火のように辺り一

面に展開した。

次にネオラントが水のベールをニヤルマーと共々包み込ませると、ニヤルマーが放った電気を取り込んだ水のベールはネオンライトのように光り輝き始めた。水しぶきも相まってニヤルマーの毛並みの艶やかさやダイヤのように輝くネオラントの鱗が二匹をさらに美しく光立たせた。

演技が終わった二匹は華麗に着地すると、ノゾミの合図で観戦者であるリーリエ達に向けて深々とお辞儀した。見たことのない光景にリーリエ達は大きな拍手をノゾミ達に送った。

マオ「凄い！凄く綺麗だったよ!!!」

ロトム『こんな「でんげきは」と「アクアリング」の使い方。初めて見たロト!』

マーマネ「二つの技同士を組み合わせる事でこんな魅せ方を披露する事が出来るんだね！」

カキ「くううう!!!俺は猛烈に感動したぞ!!!」

幻想的な世界に囚われたリーリエ達はすっかりポケモンコンテストというのに興味が湧いたみたいだ。

サトシ「ポケモンコンテストってのはポケモンの技を使ってアピールを競う一次審査とコンテストバトルの二次審査があるんだ」

続けて演技を終えたノゾミに変わってサトシは今のを踏まえて詳しく説明した。

《ポケモンコンテスト》

まずはポケモンとコーディネーターによるパフォーマンスが行われる。これが最初の一次審査であるのだ。そして一次審査を突破した後、トーナメント形式によるコンテストバトルが始まる。これが二次審査でのコンテストルールであるのだ。

二次審査はシングルとダブルの二つ形式のポケモンバトルが行なわれる。しかし普通のポケモンバトルとは違ってあくまでも一次審査と同じく如何にポケモン達を華麗に見せるかが問われている。コーディネーターには一定量の持ちポイントを持っていて、自身のポケモンがダメージを受けたり、相手のポケモンの作法が良いものと審査員に判断されたりするとポイントが失われる。対戦時間の五分間の中で相手よりも多くのポイントを残す事が勝利条件である。しかし、タイムアップまでに自身のポケモンが戦闘不能になるとバトルオフ。どれだけ有利に立ち振る舞っていても、戦闘不能になったその瞬間で敗北となる。

優勝を果たすとその証であるコンテストトリボンが授与される。それを各地で行なわれるポケモンコンテストに挑戦し、五つ以上のコンテストトリボンを獲得すれば、コンテ

ストのポケモンリーグ版であるグランドフェスティバルへと出場することができただ。

リーリエ「そしてノゾミはシンオウ地方のグランドフェスティバルの優勝者。トップコーデイネーターであるのです！」

スイレン「そうだったんだ！凄いい！カッコいい!!!」

ノゾミの経歴をした一同は御ぞってノゾミの周りへと集まった。久々にコンテストに戻れたノゾミも嬉しそうに皆の質問へと答えていく。

サトシ「エリカさんとポケモンコンテストの練習って事は、もしかして近々何処かでポケモンコンテストが開かれるって事ですか？」

エリカ「ええ、ここタマムシティで開かれるのですわ。わたくしもジムバトルだけでなくコンテストならではのバトルの経験して、ジムリーダーとして自分自身をさらに磨いていこうと思ひ、挑戦しようと思んだのです！」

マオ「それでノゾミにコーチをつけて貰ったのですね！」

ノゾミ「そう！」

ルールも異なってしまうえばジムとコンテストは別物と考えると思うがそうでもない。

コンテスト演技では威力だけでなく、ポケモンを技を使って表現させるには繊細のコントロールが必要とされる。タママシジム戦でのエリカのラフレシアの「はなふぶき」も技の威力だけでなく花びら一枚一枚を上手くコントロール出来ているからこそシロンの技を防ぎきってみせたとも頷ける。

ジムリーダーとして一つでも強くなる作法があるとなれば、かつてのチャレンジャーであつても稽古を申し出るエリカの姿はかつてタケシが言っていたことと理になつていた。

スイレン「あの…見学していても大丈夫ですか？」

エリカ「もちろんよ！」

コンテストの魅力に惚れ込んだ一同はお言葉に甘えて見学させてもらうことにした。すると、一匹のポケモンがこちらに向かって勢いよく走つてきた。

イーブイ「イーブイ!!？」

カキ「うわあ!なんだ!?!？」

ロトム『物凄いスピードで向かってくるロト!!?』

急に現れたイーブイにリーリエ達の着目点が一気に向けられた。一斉に視線を向けられたイーブイは何事かと首を傾げていた。

マオ「タママシジムの子ですか？」

エリカ「いいえ。何処からか迷い込んだのかしら？」

ロトム『このイーブイは95%の確率で野生のイーブイで間違いないロトム!!?』

サトシ「だけど、凄え人懐っこいぞ！」

リリーエ「ええ！シロン達とも打ち解けてますね！」

そうピカチュウ達はイーブイの方へと近づくと、それに気づいたイーブイは猛烈な体当たりで挨拶をしてきた。急な事にさらに慌ただしくなったピカチュウ達であったが、成されるがままにイーブイの体当たりを受け止めた。

カキ「そ…そうか？」

マオ「あはは…」

元氣一杯なイーブイの前に呆然とする一同にさらにもう一匹が姿を現した。

デデンネ「デデ!!?」

イーブイ「イーブイ!!?」

何とかイーブイに追いつくことが出来たデデンネはイーブイの近くで力尽きたようにして倒れた。そんなデデンネに前足で背中を押してやるイーブイ。こんなにヘトヘトになるまで走らされたのは誰のせいだと言わんばかりの視線をイーブイに浴びさせた。

マーマネ「あつ！デデンネだ！」

マオ「うわあ！可愛い!!!イーブイの友達かな？」

サプライズで登場したデデンネにも注目が集まった。するとただ一人、リーリエはふと思い出したかのようにしてデデンネを覗き込んだ。

リーリエ（この子…何処かで見たような…）

そう記憶を辿るリーリエの前にシロンがデデンネへと近づいた。

シロン「コン!!？」

するとシロンを見たデデンネは驚いたように起き上がるとシロンに返事した。人見知りしないシロンの様子からリーリエはデデンネの方へと向かい始めた。

リーリエ「デデンネ…わたくしの事…覚えていますか？」

そう尋ねるリーリエを見たデデンネはゆっくりと頷いた。間違いない。トキワの森で出逢ったあのデデンネだ。

リーリエ（ですが…どうしてここにいますか？）

トキワの森からだいぶ離れた土地にいる事に疑問を浮かべている矢先、また元気よく飛び跳ねたイーブイは今度はアシマリに向かって体当たりを仕掛けた。

息つく間もなく向かってくるイーブイに向かってアシマリはバルーンを作り上げた。

アシマリ「アウ!!？」

バルーンの中へと入ったイーブイはそのままフワフワと宙へと浮かんだ。

イーブイ「イブイ♪」

初めての感覚に好奇心のボルテージが高まったイーブイは楽しそうにアシマリのバルーンの中でも無邪気に身体を動かし始めた。その様子を見て嬉しくなったアシマリも小さなバルーンを作りながらイーブイを楽しませた。

マーマネ「アシマリのバルーンが気に入ったみたいだよ！」

スイレン「うん！そうみたい！」

ノゾミ「アローラ祭で対戦した時も思ったけど、これだけ大きなバルーンを作りあげるなんて相当な練習をして来たんじゃない？」

スイレン「うん！いつか大きなバルーンの中に入って海の中を見るのが私とアシマリの夢なの！」

アシマリ「アウアウ♪」

イーブイ「イブイ♪」

すっかりアシマリが作り上げたバルーンに夢中になっているイーブイ。そんなイーブイを眺めていると、突如として空から黒い球が放り込まれた。それと同時に小爆発を起こした球の中から煙幕が放たれた。

サトシ「何だ!!!」

すると高笑いが聞こえた方へと目をやると、あの二人組が立っていた。

ヤマト「なんだかんだと聞かれたら」

コサブロウ「答えないのが普通だが」

二人「まあ！特別に答えてやろう」

ヤマト「地球の破壊を防ぐため」

コサブロウ「地球の平和を守るため」

ヤマト「愛と切実な悪を貫く」

コサブロウ「キュートでお茶目な敵役」

ヤマト「ヤマト！」

コサブロウ「コサブロウ！」

ヤマト「宇宙を駆けるロケット団の二人には」

コサブロウ「シヨッキンクピンク桃色の明日が待つてるぜ」

ツボツボ「ボツツ!!？」

突如として現れたロケット団を前にリーリエ達は身構えた。

マオ・スイレン「ヤマト!!!」

カキ・マーマネ「コサンジ!!!」

コサブロウ「コサブロウだ!!!毎度毎度に何故間違える!!!」

サトシ「お前らまた何しに来たんだ！」

コサブロウ「おほん！今日の我々の目的はここタムシジムのポケモンを頂くことだ！」

ヤマト「ホワイトジャリガールとのジム戦が終わるまでこの時を待っていたのよ！」  
そう言うと、ロケット団はモンスターボールを手に取った。

ヤマト「行くのよ！デルビル!!」

コサブロウ「行けえ！カポエラー!!!」

デルビル「デエル!!？」

カポエラー「カアポー!!？」

コサブロウ「カポエラー！【こうそくスピン】!!？」

登場と同時にカポエラーは高速回転させながらリーリエ達の方へと攻撃を仕掛けてきた。だが、咄嗟に前へと出たニヤルマーはスプリングのような尻尾で開店するカポエラーを掬い上げるようにして受け止めた。回転を失ったカポエラーは呆然と立ち尽くす。

ノゾミ「やるなら容赦しないよ！ニヤルマー！【アイアンテール】!!？」

ニヤルマー「ニヤル!!？」

そのまま硬化させた尻尾で捕まえたカポエラーをそのまま地面へと叩きつけた。

サトシ「出てこいルガルガン！【アクセルロック】だ!!？」

ルガルガン「ルガア!!？」

サトシはルガルガンを繰り出した。赤く染まった目はカポエラーを睨みつけると、そのまま岩のような硬い角を向けて、カポエラーに向かつて体当たりを仕掛けた。スピードが乗った重い攻撃を受けたカポエラーはそのままコサブロウの方へと飛ばされた。

ヤマト「負けるんじゃないよデルビル！【かえんほうしゃ】!!？」

次にデルビルが火炎放射を放った。相手が炎なら水だ。すぐさまスイレンも先制技をアシマリに指示した。

スイレン「アシマリ！【アクアジェット】!!？」

アシマリ「アウアウ!!？」

デルビル「デエェル!!!」

火炎放射を打ち消しながら進んでいくアシマリの攻撃はそのままデルビルに決まった。フラつく相手ポケモン二体を前にさらに攻撃を仕掛けて行った。

スイレン「もう一度！【アクアジェット】!!？」

再び水流を巻き上げてきたアシマリは、その水流を身体に纏わずおもいつきり地面へと叩き込んだ。その反動で起こした津波にアシマリは波に乗りながら、その津波を口ケツト団の方へと向けて行った。

ロトム『ビビツ!!!こ!この技は「なみのり」ロト!!?』

新しく覚えたアシマリの「なみのり」を見たイーブイは勢いよくジャンプした。

イーブイ「ブーイ!!?」

スイレン「えっ!な…何?!?」

アシマリがいる頂上に向かって飛び跳ねたイーブイはそのままアシマリが起こした波に乗ることに成功した。絶妙なバランスを保ちながらアシマリと一緒に波に乗るイーブイの姿にスイレンは目を見開いた。

イーブイ「イーブイ!!?」

波乗りのまま身構えたイーブイはパワーを溜め始めると、それを一気に解放するかのようにしてロケット団に向かって突進して行った。アシマリの「なみのり」による水のエネルギーを纏っているイーブイの体当たりはそのままロケット団へと直撃した。

ヤマト「またこうなるのねえ!!!」

コサブロウ「次こそは我らに勝利を!!!」

ヤマト・コサブロウ「やな気持ちいい!!!」

キラッ!

ロケット団を空高く吹き飛ばしたイーブイは反動によつて目を回していたが、すぐに立ち直すと、アシマリの方へと向かつて行つた。

ロトム『さっきのは「すてみタックル」ロト!!?』

ノゾミ「アシマリの「なみのり」が加わつてさらに威力が増したようだね！実にインパクトがあつたコンビネーション技だつたよ！」

エリカ「アシマリとイーブイ。とても息が合つていましたわ！」

力を合わせてロケット団を倒したアシマリとイーブイは手に手を取つて喜び合つていた。そんな二匹について嬉しくなつたスイレンも駆け足で二匹の元へと向かつた。

スイレン「頑張つたね！二人とも！」

スイレンの声にアシマリとイーブイは一緒に合図した。すっかり仲良くなつた二匹をスイレンは静かに笑つていた。その様子を見たカキがスイレンに声をかけた。

カキ「なあスイレン！ゲットしてみたらどうだ？」

スイレン「えっ？」

カキの突然のゲットの提案に驚くスイレンはそつとイーブイの方へと視線を下ろした。アシマリと並んで波に乗るその姿が目に見え浮かんできたスイレンはアシマリと親しげなイーブイを見て確信した。

大好きなんだね。  
海…

渚…

スイレン「…ナギサ…」

マオ「ナギサ？」

スイレン「名前！あの子の！」

マーマネ「ゲットする前から決めちゃったね！」

リーリエ「ナギサ…スイレンらしいですね！」

スイレン「えへへ／／」

スイレンはダイブボールを片手にイーブイの方へと向かった。近づいてくるスイレンに気づいたイーブイはスイレンの前へと歩み寄った。

スイレン「居てくれる？一緒に！」

ナギサ「イーブイ!!？」

スイレンを受け入れたイーブイにダイブボールが開いた。ダイブボールへと吸い込まれたイーブイはそのままボールの中へと収まった。

スイレン「イーブイ！ゲットだぜ！」

アシマリ「アウ!!？」

こうしてスイレンは新たにイーブイを仲間にした。新しい愉快な仲間とともにリーリエ達の旅はまた始まるのであった。

リーリエ「ところで…貴方はどうします？」  
デデンネ「デデ？」

## 第三十九話 彼岸の守り神

シオンは紫。尊い色。

尊さの滲む町

タمامシシテイで新たにスイレンの手持ちとなったナギサとトキワの森以来に再会したデデンネを連れてリリーエ達はタمامシテイから近い町、シオンタウンへと立ち寄っていた。

シロン「コン♪」

ナギサ「イブイ♪」

デデンネ「デデ♪」

デデンネはというと、トキワの森へと帰る手段を見つかるまでリーリエ達と同行する事となった。シロンや他のリーリエの手持ちとは面識があったり、ピカチュウ達がフレンドリーに迎えてくれたお陰ですっかり皆んなとは打ち解けていた。

水辺の近くではしゃいでいるピカチュウ達の側ではたまたま開催されていた釣り大会に出場したリーリエ達が釣り糸を垂らして、水辺のポケモンがヒットするのを静かに待っている。そんな中、アローラーの釣り名人が本領を発揮していた。

スイレン「チョンチー！ラブカス！ヒンバス！メノクラゲ！シエルダー！クラブ！シードラー！ホエルコ！」

吸い込まれるようにして竿にヒットしていく水系ポケモンをスイレンは次々と釣り上げて行った。その光景には釣り歴50年のベテラン名人も豆鉄砲を食らったかのようにならんとしていた。

スイレン「あつ！カイオーガー!!!」

一同「「えっ!!!」」

スイレン「嘘です♪」

あからさまの嘘であったも、つい本気に信じてしまう程のスイレンのその腕前には周りの人達からは拍手が喝采されていた。

リーリエ「流石ですねスイレン！」

マオ「よっ！名人！」

そしてその隣にはマーマネの自作の釣竿に興味津々に目を輝かせているサトシがいた。

サトシ「おお!!!カッコいい!!!」

マーマネ「まあね！」

ロトム『これは興味高い発明ロト!!?』

トゲデマル「モギユユ!!?」

マーマネ「ふふっ！例えホエルオーが相手でも折れないコシの強さを誇るハイパーロッド！1秒間に300回巻き上げるスーパーリール！全てを兼ね揃えた夢の釣り竿！名付けてウルトラDXマスターゼロツー！」

サトシ「化学の力って凄げえ!!!」

ピカチュウ「ピカチュウ!!?」

各々釣りを楽しんでいる中、ため息を吐きながらピクリともしない竿を静かに見続けている人もいた。

カキ「俺は相変わらず水ポケモンとの相性は良くなさそうだな」

揺れない竿と一緒に見つめていたバクガメスとガラガラもカキに釣られて深いため息を吐いていた。周りの人よりも時間が経つのが遅く感じるほど退屈な三人の前に一

人のトレーナーが話しかけてきた。

デント「それなら釣りソムリエとして君にキリツと爽やかに色々教えて上げようかな！ イッツ！ フィッシングタータイム！！」

いきなり話しかけられて戸惑うカキ達にお構いなく、デントは直ぐに釣りのレクチャーを始めた。

デント「いいかい！ ルアーを垂らした時はいつでも花の香りに吸い寄せられるバタフリーを迎え入れてあげるように全集中の感覚をロッドを握ってる手に傾むけるんだ！」

カキ「お：：おう！」

言われるがままにカキは自分の竿へと全集中へと傾けた。息を殺して静かに待つていると糸が引つ張られている感覚が腕に伝わってきた。

カキ「来た！！」

確信ついたカキは右手で素早くリールを回そうとしたが、その手を空かさずにデントは押さえた。

デント「おっと！ 急いで竿を上げてはダメだよ！ 釣り上げる前の駆け引きこそが大勝負！ しつかりと相手の動きを見て、引き上げるその隙を見つけるんだ」

その言葉を聞いたカキは言われ通りに竿を引つ張る力が弱くなつていく瞬間を静かに待った。そして、竿の軋み具合が緩くなった所でデントはすぐさま声をあげた。

デント「今だ！花嫁の美しいバールのようにしなやかにソフトにリールを巻き上げるんだ！」

慌てずにゆっくり、カキは焦る気持ちを押さえながら釣り糸を巻き上げた。そしてその糸の先には小さなテツポウオが姿を現した。

カキ「釣れたああ!!!」

バクガメス「ガアメエス!!？」

ガラガラ「ガラガアラ〜♪」

これにはバクガメスもガラガラも飛び上がったのはカキと一緒に輪になって喜び合った。始めての釣りを成功させたカキはデントと握手を交わした。

カキ「ありがとう！お陰で初めて釣り上げる事が出来た！」

デント「僕も釣りの楽しさを少しでも感じてくれただけでも嬉しいよ！」

リーリエ「カキ！」

マーマネ「もしかして釣れたの!?!？」

カキの喜びの声を聞いたリーリエ達はカキの方へと向かい始めた。カキの元へと向かう仲間達と一緒に見つけたデントは目を丸くした。かつての旅仲間の姿が目に入ると、その人物の名を喜んで叫んだ。

デント「サトシ！ピカチュウ！」

サトシ「デント!!!」  
ピカチュウ「ピカチュウ!!?」

~~~~~

スイレンの優勝で幕を閉じた釣り大会の後、一同は近くの喫茶店で身体を休める事にした。デントは胸元の蝶ネクタイを正して軽く咳払いをした。

デント「初めまして。僕はポケモンソムリエのデントです!サトシとピカチュウとはイツシユ地方で知り合っただんだ」

リーリエ「リーリエです!」

ロトム『ロトムロト!!?よロトしく!』

マオ「マオです!宜しく!」

カキ「俺はカキだ!」

スイレン「スイレンです!」

マーマネ「僕はマーマネ!よろしく!」

各々自己紹介を終えると今度はポケモン達がデントの元へと集まった。それを見たデントも子供のように目を輝かせると、初めて目にするアローラのポケモン達に軽く挨拶をした。

デント「アローラのポケモン達は初めて見たよ！こんにちは！」

シロン「コン!!？」

すると再び蝶ネクタイを結び直すと、何かを始めるかのように軽く指を鳴らした。

デント「イツツ！テイスティングタイム!!」

アローラ一同「!!!!」

何が始まるか分からず戸惑うリリーエ達を見てサトシとピカチュウはその懐かしい感じを思い出しながら「また始まった」と言わんばかりの顔で笑っていた。

《ポケモンソムリエ》

トレーナーとポケモンとの相性を診断し、友好を深めていくためにはどうしたら良いかをアドバイスしてあげたりするのが主な仕事である。

当初はイツシュ地方以外ではあまり知られてはいなかったが、今はソムリエ協会の設立やデントのようなポケモンソムリエの活動もあってその名は知られるようにはなった。

ちなみにポケモンソムリエには階級がS、A、B、C、と存在してデントは上級クラスのアランクを所得している。

大勢のポケモン達の中からデントは真つ先に挨拶をしに来てくれたシロンの方へと駆け寄った。しばらくシロンを観察したデントは満足げな笑顔をリーリエの方へと目をやった。

デント「素敵なトレーナーと出逢えてこの子は幸せみたいだね。もしかして卵の時から大切に育てきたんじゃないかな？」

リーリエ「あつ！は…はい！」

デント「やつぱりそうだ！この毛並みの艶やかさ。毎日しっかりと手入れをして貰ってる。それにこの小さな体から思えないしつかりとした足の筋力。幾多の困難を一緒に乗り越えてきたんだね。あーありがとう。君たちのような強い絆で結ばれたトレーナーに出会えて僕はとても感動しているよ」

そのデントの発言に対し、驚いたカキは直ぐに口を開いた。

カキ「ど…どうしてシロンがリーリエのポケモンって分かったんですか？」

デント「別に特別な事はしてないよ。釣り大会の時、この子が一番近くにいたのは彼女だったし！すぐに誰のポケモンなのかはあの時に分かっていたさあ！」

スイレン「それでも、シロンが卵の時から育てられた事も言い当てましたよ…」

デント「凄くトレーナーを信頼しているとても純粋な目をしていた。この力強い信頼関係はゲットして出逢ったよりも、もっと大きな出逢いがあったんじゃないかなって思っただけだよ！」

当たり前のように答えるデントであったが、初めて目にするポケモンの特徴や様子を瞬時に見ただけで、トレーナーに応接する事なんて相当な目利きに自信が無ければ出来るものではない事は素人のリーリエ達の目からも感じ取れていた。デントの腕前もあつてリーリエ達はこの短時間でポケモンソムリエの魅力を大きく味わらせられたのであつた。

サトシ「ところでデント！何でカントーに戻つて来たんだ？」

イツシユ地方からの旅を終えて、アイリスと共にジョウト地方へと旅立つた以来の再会でもあつた。デントはシオンタウンの地図を広げると、ある場所へと指をさした。

デント「ここに来た本命はポケモンタワーさあ！」

リーリエ「ポケモンタワー？」

シロン「コーン？」

ロトム『そこは僕にお任せロ…』

デント「ポケモンタワーはこの世を離れる魂達が迷わずに無事に天へと送り出してあげるために、この町の長であるフジ老人という人が建築をなされた魂の家なんだ。そ

んな立派な建物を是非一目見ようと思ってここに来たんだ」

マーマネ「へえ、随分と詳しいんですね」

デント「僕はタワーソムリエでもあるんだ！」

ロトムの出る間も与えない淡々と饒舌に話すデントは鼻を高くして胸を張っていた。

スイレン「ねえ！私達も行ってみない!? ポケモンタワー！」

カキ「そうだな！次の予定も決めていなかったしな！」

マーマネ「賛成！」

デントの話の中でポケモンタワーに興味を持ったリーリエ達もデントと一緒にポケモンタワーへと向かう事となった。

~~~~~

デント「ここ……ここが……ポケモンタワー……な……中々……ダークなテイストを。た……漂わせる……雰囲気では……ないか」

マオ「デントさん…大丈夫なのかな？」

サトシ「そういやデント。幽霊とか苦手だったけな！」

ポケモンタワーに近づくにつれ少しずつ身震いを立て始めるデントにみんな薄々と気づき始めていた。

所々に古びた面影を残しつつ人の気配もない所に建てられているだけでもあって、足が竦んでしまいそうな雰囲気は充分に漂わせていた。

カキ「それじゃあ、何で行こうと思っただ？」

デント「そ…それは…タワーソムリエとして…む…無視は…出来ないからさあ！」

マニアとしての根性なのか分からないが、デントはガチガチに固まった足を一歩ずつ前へと出しながら、ポケモンタワーへと近づいて行つた。そして、ここまで長く続いた林の道を抜けたと同時に一体のポケモンかデントと目が合った。

デント「うわあああああああああああ！！！！」

???「ヒトオオオオオオオオオオ！！！！」

急に現れたポケモンにデントの悲鳴が鳴り響いた。その叫び声に驚いたそのポケモンも四方八方に飛び回りながら慌て始めた。

『ヒトツキ　とうけんポケモン』

鋼・ゴーストタイプ

魂が古代の剣に宿って生まれたポケモン。剣の柄を握った人の腕に青い布を巻きつけて生命力を吸い取ってしまう』

空かさずシャッターを切ったロトムはヒトツキのデータを読み込むとそのままリリーに解説し始めた。ヒトツキは隠しきれてない鞘が突き出しながら草むらの中へと身を隠し震えていた。

スイレン「あつちも凄く驚いたみたい」

ロトム『怖がりなゴーストタイプのポケモンロト！』

デント「御免よヒトツキ。驚かせるつもりはなかったんだ」

ヒトツキ「ヒトト…」

落ち着いてきたヒトツキは音を立てないようにゆっくりと此方へと寄ってきた。近づいてくるヒトツキを見つめる中、不意に凶鑑の方へと目を向けたマオは疑問を浮かべた顔で首を傾げた。

マオ「この子：凶鑑のヒトツキと何か違うよね」

マオに言われ一同も凶鑑に分布されているヒトツキを見た。たしかに通常のヒトツキとは違って全体的に赤紫色を主体としていた。

デント「この子は色違いのヒトツキだよ！希少でかなり珍しい個体だよ！」

するとそのヒトツキの後ろから此方へと向かってくる影が見えた。その影がはつきりに見えるとサトシとピカチュウはそれに向かって大きく手を振り始めた。

サトシ「おーい！ゴース！ゲンガー！」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

ゴース「ゴース!!？」

ゲンガー「ゲンガー!!？」

ヤマブキジム攻略のためゴーストタイプのポケモンを捕まえるために訪れた以来に再開を果たしたサトシ達は手と手を取り合っていた。

リーリエ「サトシのお友達なのですね！」

サトシ「ああ！ここで仲良くなってたんだ！」

するとその後ろからも二体のポケモン達がりーリエ達の様子を伺っていた。その二体も恐る恐るに近づいてきたのだが、ゲンガー達の様子を見て安心したようにりーリエ達の元へと近づいて行つた。

カキ「カゲボウズにヨマワルか！」

サトシ「お前からこんなに仲間が増えたんだな！」

久しぶりに会つた最中であつたが、何かを思い出したように途端に表情を沈めたゲンガーがピカチュウに話し始めた。

ピカチュウ「ピカチュウ？」

ゲンガー「ゲンゲン!!？」

ピカチュウ「ピカピカ!!？」

ピカチュウの様子からしてゲンガー達は何かに困っているみたいなのはポケモンの言葉が分からないりーリエ達にも察しがついた。りーリエ達に分かりやすく説明するためにロトムはゲンガー達から改めて事情を聞き出した。

ロトム『そんな事があつたロトムか…』

マーマネ「ゲンガー達は何を言ってるの？ロトム!!？」

ロトム『ポケモンタワーに入れなくなつた。助けて欲しいと言ってるロトム!!？』

激しく頷くゲンガー達はポケモンタワーの方へと指をさした。肉眼からではポケモ



リーリエ「中は夜みたいで暗いですね」

サトシ「だったらニヤヒート！君に決めた！」

ニヤヒート「ニヤアブ!!？」

モンスターボールから飛び出したニヤヒートは首の付け根にある炎袋を照らし出した。高い鈴の音を鳴り響かせながら明るく照らす炎袋はゲンガー達の不安な気持ちを優しく癒してあげた。

灯の確保が出来たリーリエ達は勇気を振り絞ってポケモンタワーへと向かった。遠くからでは分からなかったが、内部は微かな霧に包まれていた。

リーリエ「えっ…」

ポケモンタワーへと足を踏み入れた途端、リーリエ達の気配を感じたみたいさらに濃い霧が現れると、前から順番にサトシ・デント・リーリエそしてマオと包み込んでしまった。

スイレン「リーリエ!? マオちゃん!?」

カキ「サトシ!? デントさん!?」

マーマネ「どうなってるの!!!」

ロトム『急に4人の姿が消えたロト!!?』

~~~~~

四人を呑み込んだ霧は互いの姿をkarouうじて確認出来る程に深くポケモンタワー内部に充満していた。逸れないようシロンを抱き抱えたリーリエはサトシ達を呼びながら歩き始めた。

リーリエ「みんな！何処ですの!!!」

デント「この霧の所為で逸れてしまったみたいだ。だけど…こんなに直ぐに離れてしまうなんておかしいね」

リーリエ「この霧も…一体何処から…」

幸いにも一人になる事はなかったリーリエはデントと一緒にさらに奥へと進んで行く。すると…

シロン「ゴン!?」

何かの気配を感じたシロンはリーリエ達を守るようにして身を屈め始めた。シロンの様子に危機感を感じたりリーリエ達もシロンが見つめる先へと注意をやった。そして

サレ…ココ…カラ

??? 「タチサレ…ココカラ…タチサレ！」

その声と一緒に青白い火の玉がリーリエ達の目の前へと現れた。自然発火によるものでもない。意思を持ったそれはリーリエ達の前に立ちはだかった。

デント「!!!で!!!出えたあああああ!!!」

青白い火の玉に包まれた正体不明の謎の物体。パニックになりかけた自分自身を振り払う気持ちでリーリエは力強くシロンに攻撃の指示を送った。

リーリエ「シロン! 『こおりのつぶて』です!!!?」

シロン「コオン!!!?」

恐怖に負けじとシロンは氷の弾丸を放った。一直線に空を切りながら進んでいくが、氷の弾丸は当たらず、そのまま擦り抜けると後方の壁へと打ち込まれた。

リーリエ「当たらない!!!」

シロン「コン!!!?」

ゆっくり近づいてくる実体の無い相手を前に足が竦むデントも勇気を出してモンスターボールを片手に取った。

デント「マイビンテージ！ヤナツプ！」

ヤナツプ「ヤナア！！？」

デント「ヤナツプ！【タネマシンガン】！！？」

ヤナツプ「ヤナツツ！！？」

モンスターボールから飛び出したのはデントの長年の相棒であるヤナツプ。すぐにヤナツプも指示通りに攻撃を仕掛けるも、シロンの攻撃と同様にダメージを与える事が出来ずに擦り抜かれてしまった。しかし手の内様もない相手を前にでもリーリエとデントは何か無いかと二人で模索し始めた。硬直する二人に向かって一つの技がリーリエ達に向かって放たれた。

デント「今のは!!!」

リーリエ「【ムーンフォース】です！てことはポケモン！！？」

ポケモンの技がヒントになったデントは一緒に迷い込んだカゲボウズ達に目を向けた。

デント「君たち【みやぶる】を使えるかい！！？その技でこれの正体を見破って欲しいんだ！」

カゲボウズ「カアゲボ！！？」

ヨマワル「ヨオマ!!?」

直ぐに答えたカゲボウズとヨマワルは両目のスポットライトをその影へと当て始めた。「みやぶる」によってその姿がはつきりとしてきた時、その姿を確認したリーリエは声を上げた。

リーリエ「カ!カプ・レヒレ!!!」

シロン「コーン!!!」

カプ・レヒレ「レーシ!!?レシ!!?」

なんと霧の中に潜んでいたのはアローラの守り神と崇められている四体の守護神の内の一体であるポケモン。カプ・レヒレだった。姿を見破られたカプ・レヒレはそのまま楽しげに回りながらリーリエへと元へと近づいて行った。何が起きてるか分からないままある一つの物をリーリエは渡された。何かを握った手の中を見みるとそこにあったのはZクリスタルだった。

リーリエ「これは…フェアリーZ!!!」

シロン「コン!!?」

受け取った事を確認したカプ・レヒレは呼び止めるリーリエに応じずに霧の中に隠れるとそのまま何処かへと消えてしまった。それと同時に深い霧はそのまま晴れてきた。どうやらこの霧もカプ・レヒレが作り出したものであったみたいだ。

デント「行ってしまったみたいだね…」

ヤナツブ「ヤナ…」

リーリエ「はい…それにしても何故アローラの守り神であるカブ・レヒレがカントー地方にいたのでしょうか…」

シロン「コ…ン」

不自然に思う点が脳裏を過るも束の間。

他のみんなの心配かけまいとリーリエとデントはとりあえず外を出るために降りることにした。

~~~~~

ポケモンタワーの外に出ると、カキ、スイレン、マーマネと合流した。急に姿をくらました二人の無事の確認取れたカキ達はすぐさまリーリエとデントの元へと駆け寄った。

カキ「カプ・レヒレが…」

スイレン「不思議…なんでこんな所に居たんだろ…」

デント「何かわからないけど…まるでここに来る者を試してみた。みたいな…感じがしたよ」

リーリエ「はい。この通りフェアリーZのクリスタルを頂きました！」

マーマネ「えっ!!? そうなの!」

カキ「まるで試練みたいだな」

カプ・レヒレの目的は何なのか。悩みに悩んでいるとポケモンタワーから逸れてしまったサトシが出てきた。

サトシ「おーい! みんな!」

ピカチュウ「ピカチュウ!!?」

ニャヒート「ニャブ!!?」

見た感じ怪我はなく無事みたいだ。サトシ達の安否を確認できて一安心かと思いきや、まだマオとアマージョの姿が見えないことに気づいた。

デント「サトシ! マオとは一緒にいなかったのかい?」

サトシ「えっ!!? 戻って来てないの!!?」

とその直後、マオとアマージョもポケモンタワーから外へと姿を現した。心配してい

るリーリエ達に向かってマオは大きく手を振った。

マオ「みんな！私は大丈夫だよ！」

アマージョ「アージョ!!？」

スイレン「マオちゃん!!！」

マーマネ「良かった無事で！」

何がどうあれ無事に合流が出来一安心だ。そしてゲンガー達もいつものポケモンタワーに戻った事に大喜びするとタワーの周りを飛び回った。嬉しそうなゲンガー達を見ている中でリーリエはマオが抱えてる一体のポケモンへと目をやった。

リーリエ「マオ？その子は？」

マオが抱えているそれはピンク色に輝くグラシデアの花を持つ小さなポケモンだった。

シエイミー「シエイミ!!？」

デント「シエイミだ！これは中々珍しいポケモンだよ！」

幻のポケモンを前にリーリエ達は暫くシエイミーに釘付けとなった。

後から分かったことだが彼岸の守り神であるカプ・レヒレはあの世とこの世を繋げる力を持っている。中で何があったのか聞こうとマオの方へと顔を向けたが、目尻の下が僅かに赤いマオの目を見て辞める事にしたのは正解だったのかもしれない。

サトシ「ともあれ！一件落着って事で良いよな！」

ゴース「ゴース!!？」

ゲンガー「ゲンガー!!？」

デント「そう！それに正体はカプ・レヒレというポケモンだったし！幽霊のような非科学的な物は存在しない事も立証出来たからね！」

スイレン「そうだね！貴方の右肩に白い手が置かれているなんて私の見間違いよね！」

デント「……………」。



赤い光がリュックサックの中で光り輝き出した。輝き出したのと同じタイミングで暴れまわっていたリュックサックも静かになった。まさかと思いいりりりエはリュックサックの中に手を入れると僅かに微動打にしているモンスタールボールを手を取った。そして赤く点滅している開閉スイッチはそのまま静かに鳴り止んでしまった。

りりりエ「入って…しまいました…」

嵐のような静けさからサトシ達の驚愕した声がポケモンタワーの周りで響き渡ったのであった。想像が及びしないりりりエ達の旅はこれからも続いていく。

## 第四十話 前向きロケット団

次の街へと向かうリーリエ達。そんな彼らは突然として現れたロケット団に行く手を阻まれてしまっていた。

ヤマト「デルビル！「かみつく」!!？」

コサブロウ「ツボツボ！「ジャイロボール」!!？」

リーリエ「シロン！「れいとうビーム」!!？」

サトシ「ピカチュウ！「10万ボルト」!!？」

勢いよく攻撃を仕掛けに行つたデルビルとツボツボであったが、シロンとピカチュウの攻撃により後方へと吹き飛ばされると、ヤマトとコサブロウを巻き込んだ後、大爆発が起きた。爆音が響き渡る中、いつものようにロケット団はまた空の彼方まで吹き飛ばされてしまった。

ヤマト・コサブロウ「「やな気持ちいい!!!」」

キラッ！

~~~~~

ロケット団員ヤマトとコサブロウ。リーリエ達の前に現れてはポケモン奪おうと企むも、毎度のように返り討ちにあつては空高くへと吹き飛ばれている。最近では目欲しい活動成果が得られていない事に苦悩する日々を送っている。ボロボロになりながらも、その場で立ち上がった二人は今日もまた日頃のストレスを大いに叫び始めた。

ヤマト「もう！何で失敗するのよ！」

コサブロウ「あのジャリボーイが旅に加わった事で彼奴らの戦力も倍増したしなく」この二人もまたサトシとは顔見知りでもあつて彼の実力は嫌という程知っている。只でさえ、日々トレーナーとしてかなり手強くなつてきているリーリエ達にも返り討ちにされるのに対し、新たにサトシとピカチュウまでもが加わったとなれば鬼に金棒だ。

ヤマト「ロケット団の名に懸けて失敗の連続はいただけじゃないわ！」

コサブロウ「おう！こうなれば特訓あるのみだ！」

悩み落ち込む二人であつたが彼らにも悪のカリスマ、ロケット団としてのプライドは持っている。このままボスであるサカキの顔に泥を塗るような事が続く訳にはいかな

いと二人は奮起した。

熱い志を乗せた拳を天高く突き上げると、空から一体のポケモンが二人に向かって此方に近づいて来るのが見えた。

デリバード「デリ〜!!？」

ヤマト・コサブロウ「えっ！デリバード!!？」

雪景色が写らない季節外れな格好をしたそのポケモンは大きな袋を担いで手を振りロケット団達に向かって降下した。ロケット団員にポケモンを支給する役目を持つデリバードの登場に二人の心は高ぶっていた。大きく手を振り誘導を送る二人はもう一体、デリバードの背中に乗っているもう一つの影に気がついた。

コサブロウ「あのニヤースは確か…」

見えた影の正体はニヤース。それも先日秘書の補佐役としてアローラ地方から入隊してきた悪タイプの子ヤースであった。

不思議に思う二人の前へと着陸したデリバードはすぐに袋の中からスマホロトムを取り出した。

ヤマト「何？」

コサブロウ「もしかして本部からか？」

新しいポケモンを支給される訳では無い事に不満が募る二人であったが、渋々、スマ

ホの画面に顔を覗かせた。映像が読み込み始めると、そこにサカキの秘書を務めるマトリの姿が映し出された。見たくもない顔に嫌気が指している二人にマトリは話を進めた。

マトリ『ヤマトにコサンジ！このところの成果は著しくも見積もってはいませんが、今どのような現状ですか？』

痛いところを突かれた二人は渋々と答え始めた。

ヤマト「わ：私たちなりに！やってはいるわよ！」

コサブロウ「そうだ！この前だつてアローラ祭に潜り込んでZ技だけじゃなくてメガシンカの情報を纏めた資料も本部に送ったんだぞ！」

マトリ『潜り込んだのなら、何故アローラのポケモンの一匹や二匹を捕獲しなかったのですか？それに貴方達を送ったこの情報は先月にアローラから戻ったあの三人から伝達された内容ばかりです』

頑張って掴んだ収穫も切り捨てられた二人は何も言い返す事も出来ず、悔しさのあまり下唇を噛み締めた。

マトリ『それと貴方達にデリバードを送ったのはまた別の理由です』

ヤマト「な：何よ？」

次に耳をしたのは二人にとって今後の活動に影響が出てしまう内容であった。一呼

吸を整えたマトリは静かに口を開いた。

マトリ『いまの手持ちの一体だけ残して、残りのポケモン達は直ちに本部へと預けなさい』

ヤマト・コサブロウ「!!!はあ!!!」

突然の事に驚く二人は「台のス McMahon に顔を近づけると激しくマトリを睨み始めた。二人の猛烈な態度に少し畏怖したマトリであったが、軽く咳払いをした後、二人に納得して貰うように話を続けた。

マトリ『今このカントー地方に別の地方の組織が動き出している情報が出ました』

ヤマト「別の組織？」

それを聞いて落ち着いた二人はマトリの話に耳を傾けた。いつも自分達を卑下しているマトリの真面目な顔つきを見れば、ただ事ではない事は何となく感じた。

マトリ『ええ…。その組織はオーレ地方でダークポケモン騒動を引き起こしたと言われるシャドーという組織です』

コサブロウ「ダークポケモン？シャドー？」

ヤマト「何その？デルビル愛好家みたいな集団…」

マトリ『とにかく、我々が拠点としているここカントー地方で好き勝手させる訳にはいきません。彼らと戦うためにも少しでも戦力が欲しいのです！』

その言葉にヤマトとコサブロウは互いの顔を見合わせた。正直な所、自分達の手持ちよりも遥かにレベルが高いポケモンの殆どは本部でスタンバイされている事は知っている。しかしそれでも団員であるヤマトとコサブロウのポケモン達の手も借りたいと頼んでくる様子から、過去最大の危機が本部に待ち受けようとしている事はこれ以上言わなくても理解した。

ヤマト「だ…だからと言って！何でわたし達のポケモンを送らないといけないのよ！」

コサブロウ「そ…そうだ！俺たちの戦力が減るだろう！」

しかし、それでも自分達の仕事に支障が出るかもしれないのもまた事実である。何とか訴える二人であったが、いつも通りの冷たい目になったマトリは眼鏡を軽く上げた。

マトリ『定期連絡もよこさない。成果も得られない。そんな貴方達がポケモンの五体や六体持ったところで宝の持ち腐れだからです』

その言葉に深く胸に突き刺さった二人は仕方なくその命令に従う事にした。

マトリ『それで貴方達の定期連絡がこれ以上お拘らないようにそのニヤースが貴方達の監視役として旅に同行して貰うようにしました。それでは、これからの定期連絡。お忘れなきように』

こうして通信は切れた。言われた通りほとんどの手持ちをデリバードに預けると、受

け取った事を確認し、本部へと帰っていくデリバードを見送りながら二人は静かに黄昏れ始めた。自分達の愚かさと同甲斐なさ。それがまた一気に爆発した。

ヤマト「何なのよ！戦力倍増どころか！低下じゃない!!!」

コサブロウ「まあ、失敗続きだもんな。最近の俺たち……」

落ち込む二人は一緒に頭を深く下げると、本部から一緒に来たアローラのニヤースと目が合った。

ヤマト「そんでこのニヤースが私達の監視役？大した戦力にも成りそうにもないし、居てもいなくてもどっちでも良いんだけど……」

軽く愚痴を叩くヤマトに呆れた表情でニヤースは口を開いた。もちろん二人からしてポケモンの言葉が分かる訳がない。何を言ってるか分からないと首をかしげる二人の前に、本部から支給されたスマホロトムがニヤースの横に立つと、画面にメッセージが映し出された。どうやら、ニヤースが言った言葉を翻訳してくれているようだ。

ニヤース『ふん！それはこっちのセリフだニヤ!!？ニヤーは本部でゆつくりとお前達の様子を傍観していれば良かったものの、なんでおめや達の監視係にならないといけないのニヤ!!?』

コサブロウ「なるほど。その機械で俺たちと会話ができる訳か」

ヤマト「何を偉そうに……ふざけるんじゃないわよ！最近入ったペーパーが何言ってる

のよー！」

その問いかけにソツポを向くニヤースの姿にさらに苛立ちを見せたヤマトは悔しさを爆発させた。そんなヤマトを落ち着かせる余裕もないコサブロウは少しの弱音を吐き出した。

コサブロウ「なあ…もしかして俺たち…コジロウ達よりも影が薄くなっているんじゃないのか？」

ヤマト「そんなの絶対嫌よ！ムサシよりも下に見られるなんて!!!」

だんだんライバル視している彼等の方が実績を高く評価されている事に良く思わない二人はさらに落ち込んでしまった。弱々しい声で二人はお互いの現状を報告し合った。

ヤマト「ところで…あんたは何を残したの？」

コサブロウ「ツボツボだ。こいつの砂嵐は逃げるときには助けられているからな。ヤマトは？」

ヤマト「私はデルビルよ。なんだかんだ私の手持ちの中では攻撃力が一番高いし〜ダメ出しを貰った挙句に戦力も減らされた二人は悔しさを通り越して今の自分たちに腹を立て始めた。その想いが炎のように灯り始めた二人は一斉に立ち上がった。

ヤマト「こうなったら新しいポケモンをゲットよ！コサンジ!!!」

コサブロウ「おう！こうなれば俺たちの分だけじゃなく、強いポケモンをどんどん本部に送ってサカキ様に俺たちの実力を知って貰うんだ！」

奮起に満ちた二人は固い握手を交わすと、目の前に聳え立つ岩山に目を向けた。そこへ向かって二人は歩き出した。強いポケモンを手に入れるために

ヤマト・コサブロウ「いざー！イワヤマトンネルへ!!!」

~~~~~

イワヤマトンネルはカントーで最も長いトンネルが続いているダンジョンだ。日の光を通さない程に深く長い洞窟を探索するには光を照らすポケモンが必須となつている。残念なことに懐中電灯すら所持していない彼らは仕方なく洞窟の中でなく、岩山を登り始めた。

洞窟に生息するポケモンの殆どは岩や地面タイプポケモン。たまに地上へと顔を覗かせに出てくる所を見計らって、そこを狙うことにした。暫く登っていくと岩に擬態している一体のポケモンと目が合った。そのポケモンもロケット団に気がつくど、オレンジ色の結晶を光らせ始めた。それは攻撃の合図と言っているものだろう。

コサブロウ「あのポケモンはギガイアスだ！」

ヤマト「向こうから来てくれるなんてゲットして下さいって言っているもんじゃない！」

ニヤース『そう上手く行くもんかニヤ？』

不思議と自信がみなぎっているロケット団はモンスターボールを手にとると、ギガイアス目掛けて走り出した。

ヤマト・コサブロウ「ギガイアス！ゲットだぜ!!!」

ギガイアス「ギガアアア!!!」

勢い良く駆け出した二人であったが、太陽光線を吸収していた事で先にギガイアスの【リスターカノン】が仕掛けられた。急なことにすぐに対処に移れなかったロケット団は呆気なく天高くへと再び吹き飛ばされてしまった。

ヤマト・コサブロウ「二度目のやな気持ちいい!!!」

キラッ!

~~~~~

ダンブカーも簡単に吹き飛ばしてしまうギガイアスのパワーを前に全く太刀打ちできなかつたロケット団は作戦会議を開く事にした。

ヤマト「強すぎよああのギガイアス…」

コサブロウ「俺らの手には負えないな。こりや〜」

ニヤース「レベルの差があり過ぎるのニヤ!!?」

ヤマト・コサブロウ「「だったらお前も何かしら考えろ!!!」」

そんな彼らに二人のトレーナーが近づいてきた。

???「あの…大丈夫ですか?」

ヤマト「オホホホ!大丈夫ですわ」

コサブロウ「こりやお気遣いどうも…」

振り向いたロケット団は彼らの顔を見て絶句した。

カノン・サトル「ロケット団!!!」

ヤマト・コサブロウ「げげっ!!!」

リーリエと一緒に旅をしていた頃から何度かいがみ合っていたカノンとサトルと思わぬ形で会ったロケット団はすぐに立ち上がった。

ヤマト「ここで会ったが百年目!」

コサブロウ「こうなればお前らのポケモンをゲットしてやる!」

サトル「そんな事させるもんか!」

ピカチュウ「ピカチュウ!!?」

カノン「やるなら相手になるわ! 何でそんなにイライラしているか分からないけどね!」

ヒコザル「ヒココ!!?」

リーリエと別れた後、幾多のジム戦で力をつけて来た二人は恐れおののく事はなく、向かい合った。今にもバトルが始まりそうな時、ロケット団はカノンとサトルの後ろから近づいてくる一人のトレーナーに気がついた。

???「あら? 何の騒ぎかしら」

その声に気づいたカノンとサトルも振り向いた。

サトル「パキラさん！」

カノン「この人達！ロケット団と言って人のポケモンを取る悪い人達なんです！」

赤いサンングラスを着用したパキラと名乗るトレーナーに聞き覚えがあつたコサブロウは口を開いた。

コサブロウ「パキラって…もしかしてカロス地方の四天王…」

パキラ「あら！カントー地方の人が私の事を知ってくれているなんて光栄だわ！」

ヤマト「だったら、あんたのポケモンから頂いてやるわ！」

コサブロウ「ええ!!!ちよつと待てヤマト！俺たち野生のギガイアスにも負けたのに四天王にも、勝てるわけないだろう！」

ヤマト「そんなのやってみないと分からないでしょうが!!!」

ニヤース『結果は見えてるニヤ…』

ヤマト「あんたは少しは黙ってなさい!!!」

サトル「ギガイアス？」

カノン「それってイワヤマトンネルにいたあのギガイアスの事…」

ギガイアスの名を口にした二人に一悶着を終えたロケット団はカノン達の方へと振り向いた。

ヤマト「何よ？あのギガイアスは私たちが見つけたのよ！」

コサブロウ「そうだ！そうだ！横取りしようとはなんて卑怯な奴らなんだ！」

カノン「あんた達に言われたくないわよ！」

怒るカノンの肩を優しく置き、落ち着かせたパキラはロケット団の方へと歩み寄った。こちらに向かつてくる四天王を前にロケット団は固唾を飲んだ。警戒する彼らの様子が可笑しくてつい笑みが溢れたパキラは一つの交渉をロケット団に持ちかけた。

パキラ「ねえ？もしよかつたら手伝ってくれないかしら？」

ヤマト「手伝う？」

コサブロウ「もしかしてギガイアスゲットにか？」

パキラ「ええ：貴方達が見つけたそのギガイアスはダークポケモンである可能性が高いの！だから一刻も早く被害が出る前に保護して置きたいのよ」

ヤマト「ダークポケモン：」

コサブロウ「あの秘書が言っていたなあ」

二度目にして聞くその呼び名に二人は顔を見合わせた。他の地方の四天王まで訪れる辺り、自分達が考えている以上の一大事件がここカントー地方で起こるような予感が彼らに再度、植えつけられた。

戦力が削られている今こそ、彼らに同行してダークポケモンを自分達の目で確認して置くのも良いと考えたが、悪のプライドがそれを邪魔をした。

ヤマト「冗談じゃないわよ。それに私らがあんた達を手伝うメリットはございません」

コサブロウ「おう！それにあのギガイアスは俺たちが頂くんだ。お前達の手伝いなんかするもんか！」

ロケット団の名にかけて頼まれて付いてくるような安い集団と思われたくないのか、二人はパキラの頼みを強く拒否した。しかし、二人の言動から彼らもギガイアスにもう一度、立ち向かおうとしている姿勢に気づいたパキラは曇ったサングラスのレンズを拭きながら話を続けた。

パキラ「タダとは言わないわ。手伝ってくれたら、良いものをあげるわ」

ヤマト・コサブロウ「「え!? 良いもの!!!」」

そう。これは頼みではなく交渉の話。パキラから報酬の話に耳が動いたロケット団は目を光らせながら彼女の元へと近づいた。

フレア団に協力していた経験を持っていた彼女。悪の組織の一員である彼らが自分達に利益がない話に素直に首を縦に振るとは最初から思ってもいなかった。案の定、報酬の話になった途端に掌を返したロケット団はその交渉を呑む事にした。

ヤマト「そうと決まればやってやろうじゃない！」

コサブロウ「おう！カントー地方の危機を救うのは俺たちロケット団だ！」

カノン「単純すぎる〜」

サトル「あはは…」

ヤマト・コサブロウ「いぎ！イワヤマトンネルへ!!!」

ニヤース「やれやれだニヤ…」

~~~~~

もう一度ギガイアスが居た場所に戻った一同は刺激を与えないよう岩陰に隠れて、寝ているギガイアスの様子を伺った。目を細めてジッと見つめても、ダークポケモンの特徴である黒いオーラは見え、全く変わらない普通の野生ポケモンでしか彼らの目に写らなかった。本当にダークポケモンなのか。疑わしい目をパキラに向けるヤマトに彼女は深く頷いた。

パキラ「アラン君とマノンちゃんが戻ってくるまで何とかあいつを足止めしておきま

しよう」

サトル「分かりました」

カノン「あんた達！変な企みは辞めてよね！」

ヤマト「やらないわよ！」

コサブロウ「今日ばかりは一時休戦だ」

互いに協力の有無を確認した後、それぞれギガイアスの方へと向かって歩き出した。

ギガイアス「ギガ!?」

ロケット団達の気配に気づいたギガイアスは彼らに憎しみの念を向けてきた。

ヤマト「ギガ？と聞かれたら」

コサブロウ「答えないのが普通だが」

二人「まあ！特別に答えてやろう」

ヤマト「地球の破壊を防ぐため」

コサブロウ「地球の平和を守るため」

ヤマト「愛と切実な悪を貫く」

コサブロウ「キュートでお茶目な敵役」

ヤマト「ヤマト！」

コサブロウ「コサブロウ！」

ヤマト「宇宙を駆けるロケット団の二人には」

コサブロウ「シヨッキングピンク桃色の明日が待ってるぜ」

ツボツボ「ボツツ!!？」

ギガイアス「ギガアア!!」

口実が終わると同じタイミングにエネルギーチャージを終えたギガイアスはそのまま「ラスターカノン」をロケット団に向けて放射した。ロケット団の少し前に爆発した「ラスターカノン」の衝撃により、ロケット団は大きく後ろへと吹き飛ばされた。

ヤマト「ちよつと! あんた!」

コサブロウ「いきなり攻撃だなんて卑怯だぞ!」

尻もちをついた彼らは拳を突き上げて訴え始めた。自分たちのこれまでの事を棚に上げてギガイアスを非難しているその様子をカノンとサトルは冷めた目で見つめていた。

ギガイアス「ギガアア!!？」

ルールが存在しない野生ポケモンの戦闘は自分達のターンを待つてはくれない。攻撃エレルギーをさらに溜め込み始めたギガイアスを見て、カノンとサトルはすぐに有利とされるポケモンを繰り出した。

サトル「ブイゼル! 「アクアジェット」だ!!？」

ブイゼル「ブイブイ!!?」

カノン「出て来てフシギソウ!」【やどりぎのタネ】!!?」

フシギソウ「ソオウー!!?」

モンスターボールから飛び出した直後、ブイゼルの攻撃はギガイアスに命中した。目にも止まらない早さに一瞬の隙を作ったギガイアスに向けて、今度はフシギソウによる攻撃によって、ギガイアスは身体中の自由を奪われてしまった。

さらにそのまま続くブイゼルとフシギソウの猛攻撃を浴びせられたギガイアスは弱点を付けられた二体の攻撃の前にすっかり怯んでしまった。

パキラ「やるわね!二人とも」

ヤマト「あれま!」

コサブロウ「俺たちの順番は：無しって感じ?」

さつきと打って変わって、此方側が優勢している事に緊張感が解れたロケット団の台詞にデルビルとツボツボも軽く頷いていた。

サトル「ブイゼル!」【みずのはどう】!!?」

相性の良い水技で一気に叩き込むブイゼルは水の力を中心に集めだした。しかし、そう遣られているばかりでもなかった。ギガイアスも力を込めた【ダーククラッシュ】で技を発動する前のブイゼルに大きなダメージを与えた。

サトル「ブイゼル!!!」

ブイゼルを仕留めた勢いでギガイアスはコアを光らせながら、今度はロケット団に向かって突進して行った。

ヤマト「仕方ないわね! デルビル! 【かえんほうしゃ】!!?」

デルビル「デエル!!?」

コサブロウ「ツボツボ! 【ジャイロボール】だ!!?」

二人の指示にデルビルとツボツボは動き出した。しかし、水タイプと違って相性の悪い炎タイプを技を前に、ギガイアスは怯むことなく突っ込んでいった。そして前方で【ジャイロボール】を仕掛けるツボツボ諸共、二体を後方へと吹き飛ばした。

デルビル「デエル!!!」

ツボツボ「ボツツ!!!」

飛ばされた二体に向かってさらにギガイアスは攻撃を仕掛けて来た。エネルギーを溜め込んだ【ラスタークノン】をデルビルに向けて放射した。

コサブロウ「ツボツボ! 【ヘドロばくだん】だ!!? デルビルを守れ!!!」

ツボツボ「ボツツ!!!」

極度な防御力を持っているツボツボはコサブロウの指示を聞くと、倒れているデルビルの前に立つと、【ヘドロばくだん】を放った。しかし、ギガイアスの圧倒的なパワーの

前で押し切られてしまい、直撃を受けてしまった。

コサブロウ「ツボツボ!!!」

ロケット団のポケモン達を見て、カノンとサトルもすぐに攻撃の指示を送った。

サトル「ピカチュウ!」【10万ボルト】!!? ブイゼル! 【みずてっぽう】!!?」

カノン「ヒコザル!」【かえんほうしゃ】!!? フシギソウ! 【はっぱカッター】!!?」

ギガイアス「ギガアアアアア!!?」

圧倒的な攻撃と防御を前にカノンとサトルはピカチュウ達による一斉攻を仕掛けた。ギガイアスはピカチュウ達の存在に気づくも、素早い攻撃にはすぐに躲す事は出来なかった。攻撃を受け、後方へと押し出されたギガイアスを見てカノンとサトルは確かな手ごたえを感じた。

しかしギガイアスは負けじとその場に踏ん張り止まると、身体中を廻るエネルギーその場で一気に解き放った。その衝撃波に飲み込まれたピカチュウ達はおもいつきり吹き飛ばされてしまった。

サトル「ピカチュウ!!! ブイゼル!!!」

カノン「ヒコザル!!! フシギソウ!!!」

二人のポケモン達がやられる所を見たロケット団に勝てないという文字が浮かび上がった。自分達のポケモンの状態からでも、この状況でギガイアスに勝つ手段が見つ

らない。歯をくいしばる二人にニヤースはゆっくり歩み寄った。

ニヤース『相手が悪いニヤ。さっさとこの場を離れた方が良いニヤ』

スマホロトムに映し出されたニヤースの言葉に二人の悔しきはさらに込み上げてきた。デルビルとツボツボを戻そうと、モンスタールボールに手をかけたが、二人は無言のままデルビルとツボツボの方へと目を向けた。

ヤマト「デルビル…行ける?」

コサブロウ「ツボツボ…お前はどうか?」

その声を聞いた二体も無言のままその場を立ち上がった。しかし、彼らはそれでもガイアスの前から逃げようとはしなかった。ダメージを引きずりながらも、もう一度ガイアスの方へと向かい会おうとする。そんな二体の様子を見たロケット団に薄っすらと笑みが溢れた。

コサブロウ「毎度毎度!やられっぱなしで行くもんか!」

ヤマト「ええ!見せてやるわ!我らのロケット団魂をね!」

デルビル「デエル!!?」

ツボツボ「ボツツ!!?」

ニヤース『……………』

ヤマトとコサブロウの想いを受け取ったデルビルとツボツボは根性を入れ直した。

その二体にギガイアスは怒涛の「ストーンエッジ」を繰り出した。

ヤマト・コサブロウ「「躲せ!!」」

両腕を大きく地面へと叩きつけたギガイアスにより地面から無数の岩が連なると、口ケツト団達に向けて放たれた。ダメージを負っていながらも、それ程にも速くない「ストーンエッジ」を難なく躲す事が出来ると、すぐに二体はギガイアスに向けて技を放つ体勢へと移した。

ヤマト「デルビル! 【かえんほうしゃ】!!?」

デルビル「デェル!!?」

コサブロウ「今だ! ツボツボ! 【ジャイロボール】!!?」

ツボツボ「ボツツ!!?」

デルビルの火炎放射がギガイアスを包みんだまま、同じ炎タイプに強いツボツボの攻撃はそのままギガイアスへと命中した。しかしツボツボの攻撃を受けるも、持ち堪えたギガイアスは攻撃を繰り出すツボツボをそのまま地面へと叩きつけようとしていた。前足が振り下ろされようとするその瞬間、ツボツボは【ジャイロボール】を止めた。

コサブロウ「やれ! ツボツボ!」

するとツボツボの甲羅の中から青紫色の液体が放射された。その液体が全身に浴びたギガイアスは突然のことに驚いた。

カノン「な…何!??あの液体?」

パキラ「あれはツボツボの体内で熟成されたジュースね」

思い寄らない攻撃?にギガイアスは怯んでしまった。その隙を逃さなかったデルビルはすぐにギガイアスの懐へと潜った。

ヤマト「デルビル!『ほのおのきば』!!?やっちゃって!!!」

その瞬間をデルビルは口から吹き荒れる炎を纏わせた牙でギガイアスにダメージを与えた。だが、またしても持ち堪えたギガイアスによりさらなるピンチが襲ってきた。またしても攻撃を仕掛けるギガイアスを前に身構えるデルビルとツボツボであったが、その直後、何かに足をとられたギガイアスは前方へと大きく倒れ込んだ。

何が起きたか呆然とする一同が目にしたのは、ギガイアスの片方の足が埋まっていた様子であった。その所為でバランスが崩したとは分かるが、この「あなをほる」によって作り出された穴の正体に疑問を浮かべた。すると、背後に地面から何かが出てきた気配に気づいたロケット団は振り向くと、そこにはニヤースの姿があった。

サトル「この『あなをほる』って…」

ヤマト「もしかして…あんた?」

身体の土埃を払いながら、吐き捨てるように口を開いた。

ニヤース『ふん…ふん…』であいつの捕獲に失敗したらニヤーマまで本部にどやされる

ニヤ。ニヤの気が変わらない内に早く片付けるニヤ」

出逢つても間も無い彼らに信頼関係は作れていないが、同じロケット団として、何よりも彼らのロケット団としての誠意に心が突き動かされたのか分からないが、ニヤースは背を向けたまま照れ臭そうに言い放つた。

コサブロウ「助かったぜ！ツボツボ「ジャイロボール」だ!!？」

ヤマト「デルビル！「かえんほうしゃ」!!？やっちゃって！」

怒涛の攻撃を繰り出すロケット団達。そしてこの闘いの最中、デルビルは溢れ出てくるパワーに踊らされ、その闘争心はさらなるステージへとデルビルを案内した。

デルビル「!!ウオオオオ!!」

溢れ出るパワーを解放するかのよう、雄叫びをあげたデルビルの身体は突然として青白く光始めた。

サトル「あの光！」

カノン「もしかして！」

ヤマト「もしかすると!!!」

コサブロウ「そのもしかしてだ!!!」

徐々に甲高くなるその声はまるで地獄の底から響き渡るかのように聞こえ、思わずギガイアスは身震いを立てた。胴体が長くなり、悪魔の角を生やしたそのポケモンの雄叫

びは山びこのように周りを反響し始めた。

ヘルガー「ヘエエエルウウウ」

ヤマト「きやああ!!! ヘルガーは進化したわ!!!」

カノン「あれがヘルガー」

『ヘルガー ダークポケモン』

悪・炎タイプ

デルビルの進化系。口から吹き出す炎で火傷するといつまで経っても傷口が疼いてしまう。不気味な遠吠え聞いたポケモンはその恐ろしさに一目散に巣へと戻ってしまふと言われている』

この時を待っていたかのようにパキラは静かにロケット団の方へと歩み寄った。

パキラ「もうそろそろかと思っただけど、思っただよりも早く進化したわね。受け取りな

！」

そしてある物をヤマトとヘルガーに向けて投げ渡した。それを受け取った二人は目を丸くして、互いに目を向けた。

ヤマト「こ……これって!!!」

コサブロウ「キーストンと……メガストーン!!!」

パキラ「知っているなら、説明は要らないわね」

ギガイアス「ギガアア!!?」

ニヤース『考えてる時間はないみたいニヤ!』

コサブロウ「ヤマト! やるしかないぞ!」

ヤマト「ええ!」

キーストーンが装着されたメガバングルを腕に巻いたヤマトはすぐにヘルガーに合図を交わした。

ヤマト「行くわよヘルガー!」

ヘルガー「ヘエエル!!?」

それに応えるかのようにヘルガーは再度、雄叫びをあげると、その声に反応して、ヘルガーのメガストーンも光り輝き始めた。

ヤマト「気持ちだけでもみんな一緒!」

コサブロウ「地獄の底から解き放て! 我らの力よ!」

ニヤース『今こそ！その新たな力を呼び覚ますのニヤー！』

ツボツボ「ボツツ!!？」

それぞれの口実が終わると、キーストーンとメガストーンは一筋の光の線となって、互いを結び合わせた。ロケット団の絆の力が強くなると、その光を全身に浴びたヘルガーはさらなる進化を得た。

ロケット団「ヘルガー!!!メガシンカ!!!」

ヘルガー「!!!へエエエル!!!」

虹色の光に身を包んだヘルガーは全身を発熱させると、赤く染まった角はさらに大きく伸び、骨を模した装飾を形成した。さらに高熱の炎の手にした事により、幻影のように揺らめくヘルガーの姿がこの世に降臨された地獄の使いのようにも見えた。メガヘルガーへとメガシンカを完了させると、ヤマトの指示を待つ間もなく、ギガイアスへと駆け出した。

ヤマト「ヘルガー！【かえんほうしゃ】!!？」

ヘルガー「へエエル!!？」

ギガイアス「ギイガアアア!!!」

ニヤース「凄い威力ニヤー!!？」

コサブロウ「メガシンカのお陰で技の威力もパワーアップしてるんだ！」

デルビルの時よりもはるかに火力が増していて、その炎は一瞬にしてギガイアス全体を包み込んだ。凄まじい熱風に目も開けられず、動けない状態でいたギガイアスであったが、少しずつ目を開けると、負けじとロケット団の方へと歩き出した。安心が出来ないこの状況に緊張が走るロケット団の頭上から一つのモンスターボールが通り越した。

サトル「行けえ！キテルグマ!!!」

キテルグマ「クウ!!？」

サトルが投げたモンスターボールから出てきたのはごうわんポケモンのキテルグマだった。アローラ祭で出逢ったあのキテルグマだ。炎を振り払ったギガイアスはキテルグマに向かって突進する。そのギガイアスを前にキテルグマは両腕を大きく広げて待ち構えた。

サトル「キテルグマ！ギガイアスを止めるんだ!!!」

ギガイアスを掴んでその猛攻を止めたキテルグマはその力を緩める事なく、取っ組み合いが始まった。

カノン「大丈夫?!? ロケット団!」

ヤマト「まったく!」

コサブロウ「来るのが遅いぞ!」

カノンとサトルの復活に大いに喜ぶロケット団。敵として向い合っているも、この場

に置いては強い味方であった。サトルに続いてカノンもモンスターボールを投げ入れた。

カノン「よし！出てきて！エビワラー!!!」

エビワラー「エビシエ!!？」

カノン「マツハパンチ!!？」

出てきたエビワラーは持ち前のフットワークで近づくと、すぐに目にも止まらない早さのパンチをギガイアスにヒットさせた。岩も砕くその強烈なパンチに蹠踉めくギガイアスにキテルグマも渾身の力を拳に乗せた。

サトル「今だ！キテルグマ！『アームハンマー』!!？」

キテルグマ「クウウ!!？」

アローラ最強の怪力がギガイアスの全身を震わせた。この一撃によりこれまでのダメージが一気に重く重なったギガイアスはもうすっかり戦う気力が無くなっていた。その場を離脱しようと穴を掘り始めると、イワヤマトンネル内部へと逃げ込み始めた。

コサブロウ「すなあらし」だ!!？」

空かさず甲羅に潜ったツボツボは全身をフル回転させると、そのまま巻き上げた砂埃をギガイアスに向けて放つと、その猛風に踏ん張りが利かず、倒れないよう身体を支えるために掘り進める手を止めてしまった。さらに急に巻き上げられた砂嵐の所為でへ

ルガーの接近に気づけず、ヘルガーの鋭い牙がギガイアスに向けられた。

ヤマト「止めよヘルガー！【かみくだく】攻撃!!？」

ヘルガー「ヘエエルウ!!？」

ギガイアス「ギイガアア!!!」

急所に当たったその攻撃が決め手となり、ギガイアスは倒れた。戦闘続行不能と見たパキラはスナッチボールを取り出した。

パキラ「スナッチボール!!!」

スナッチボールが見事に命中すると、ギガイアスそのままスナッチボールの中へと吸い込まれ、そのまま捕獲された。

サトル「やりましたね！」

パキラ「ええ、一先ずはこの辺りは大丈夫そうね」

カノン「今回ばかりはロケット団のおかげね！ありがとう！ロケット…」

目的が達成され、気が緩んでしまった隙を突かれてしまった。ロケット団にお礼を言おうと、振り向いたその瞬間、突然飛び出してきたマジックハンドがパキラが持っているスナッチボールを奪い取ったのだ。

ロケット団「…だあははは!!!」

そこにはギガイアスが入ったスナッチボールを手にし、高笑いを上げているロケット

団の姿がそこにあった。

ヤマト「このギガイアスをゲットできたのは私のヘルガーのお陰♪」

ヘルガー「ヘエル♪」

コサブロウ「よって！このギガイアスは我々の物だ！」

ニヤース『さらばニヤ！』

抜け目のないロケット団は奪う物も奪った所でその場を立ち去ろうとしたその直後、頭上から降り注いだ「はっばカッター」がロケット団達の行く手を遮った。

空へと目をやると、リザードンの背に乗っているアランとマノンがいた。

アラン「悪いがそのダークポケモンは返して貰うぞ！」

リザードン「グウオオ!!?」

サトル「アランさん！」

カノン「マノン！」

すでにメガリザードンXへと進化しているリザードンは青白い炎を吐きながら、ロケット団に対し威嚇し始めた。しかし、メガシンカという力を手にした今の彼らには負けるビジョンが見えていなかった。アラン達に向けて胸を張るロケット団はヘルガーを前に出した。

ヤマト「あらら、いいのかしら〜！」

コサブロウ「今回の俺たちは一味も二味も違うんだぜ！」

ニヤース「いや、おニヤー達ちよつと待つニヤ!!?」

且つ、一人冷静だったニヤースは二人を止めに入つたが、もう素手に遅かつた。ニヤースの忠告を無視して、ヤマトはヘルガーに指示を送つた。

ヤマト「ヘルガー! 【かえんほうしゃ】よ!!?」

ヘルガー「へエエエル!!」

ヘルガーの火炎放射はリザードン目掛けて放たれた。しかし、その炎をリザードンはあつさり鋭い爪で掻き消してしまつた。

ヤマト・コサブロウ「あ・れ?」

唾然としているヤマトとコサブロウに容赦なくリザードンによる攻撃が襲いかかつて。

アラン「リザードン! 【ブラストバーン】!!?」

リザードン「グウオオオオオオオ!!?」

地面から吹き上がった炎に吞まれたロケット団はそのまま上空へと吹き飛ばされた。爆発の衝撃でおもわず手放してしまつたスナッチボールはそのままパキラの手の中へと返つて行つた。結局いつものようにロケット団は遥か彼方へと飛ばされてしまつたのであつた。

ニヤース「メガシンカしても力の差は歴然だニヤー!!!」

コサブロウ「慢心は良くないって訳だな!!!」

ヤマト「折角良い流れだったのに!!!」

ロケット団「二三度目の…やな気持ちい〜!!!」

キラッ

カノン「だけど…メガシンカの力がロケット団の手に渡っちゃった…」

パキラ「良いのよ。元々あれが報酬の元だったし!」

パキラ「悪の組織と言っておきながら、あの人達、ちゃんとポケモンを大切に思っているのね!」

~~~~~

一日三度も吹き飛ばされて流石に身体が堪えたロケット団であったが、全身の痛みよりもヘルガーの進化にメガシンカを手にした事への余韻に浸っていた。ダークポケモンの捕獲はならなかったものの、彼らにとってはそれ以上の成果を得られたようだ。

ヤマト「キーストンにメガストーン！この力があれば、減らされた戦力分を補えられるわ！」

ニヤース『寧ろ、それを本部に送った方が良いと思うニヤ…』

コサブロウ「いいや！この力を使えば強いポケモンをどんどんゲット出来ることも夢じゃないぞ！」

ヤマト・コサブロウ「なんだかともいい感じ!!!」

ニヤース『先が…思いやられる…ニヤ!!?』

アローラニヤースの加入。そしてメガシンカを手にしたロケット団。彼らの今後の活躍にも注目だ。

には興味を持たないカビゴンは自分の腹の上で遊ぶナギサ達に気にもとめず、朗らかに眠り続けていた。

『カビゴン いねむりポケモン』

ノーマルタイプ

一日に食べ物を400キロ食べないと気が済まない。多少カビが生えた食べ物であっても気にせず食べる。お腹を壊したりはしない。食べ終わると眠ってしまう』

カキ「だけど、これじゃあ通れないぞ！」

クチバシシテイに向かうためにはこの道を通らなければならなかった。僅かに通れそうな隙間も見当たらないため、完全に行く手を遮られてしまった。

サトシ「仕方ない。クチバシシテイまでは遠回りになっちゃうけど、別の道で行こう」
リーリエ「そうですね。起こすのも可愛そうですから」

ロトム『それなら！新たなルートを検索するロトム!!?』

リーリエ達は進路を新しく決めるべく、近くにあるポケモンセンターへと向かう事にした。その場を離れても、カビゴンの存在感はリーリエ達の視界から見えなくなるまで消えることはなかった。

~~~~~

何処か古ぼけた村にあるポケモンセンターに着いたリーリエは育て屋さんで貰ったポケモンの卵の手入れをしていた。シロンの時から経験している事もあって、慣れた手つきで卵を優しく磨いていた。その度にくすぐったいのか。時々、卵が僅かに動いている様子も日に日に見かけるようになった。

スイレン「あつ!またちよつと動いた!」

マオ「何が産まれてくるんだろ!楽しみだね!」

カキ「卵の模様から想像すると電気タイプのポケモンって感じがするな!?」

「マーマネ「だとしたら、エレキブルかデンリユウみたいなカッコいいポケモンになるのかな？」」

スイレン「サンダーとか！」

一同「「それはない……」」

黒の縞模様に含まれた黄色の卵。その色や模様から産まれてくるポケモンを考察し合うリリーエ達をサトシとデントは微笑ましくその光景を眺めていた。

デント「ポケモンの誕生は何度見ても良いものだからね。ズルツク達は元気かい？」

サトシ「ああ！みんなオーキド研究所で楽しく過ごしてるよ！」

するとイツシユ地方で旅した思い出を語る二人の前に一人の男が映った。

サトシ「あれって……もしかして！」

特にサトシはその人物を見た途端に飛び上がると、一目散に駆け出した。

サトシ「おーいタケシ!!!」

タケシ「おっ？」

長年、サトシの成長を見届けていた人物。自分の名が呼ばれた方に振り返るタケシもそつちへ向かって駆け出した。

タケシ「お姉ーさん!!!」

サトシ「ええええええ!!!」

しかし、タケシの目に映ったのはまた別の人物であった。サトシを通り越すと、その後ろにいる女性の方へと駆け寄ったタケシはそつと手を取った。

タケシ「この村を救いに参りました。自分はタケシ。あなたのナイトでございます」  
ドシュ!!!

タケシ「しびれびれ〜!!!」

グレッツグル「ケツケケケ!!!」

グレッツグルに引きずられるタケシを呆気に取られる様子で見るリーリエ達。そんなリーリエにもう一人、薄紫のセミロングヘアアの少女が呼び止めた。リーリエもその声の方へと振り返ると、振り返るリーリエの頬に指を立て、イタズラを仕掛けた。

カノン「久しぶり〜♪リーリエ!」

リーリエ「カノン!」

ヒコザル「ヒココ!!!」

シロン「コーン!!!」

~~~~~

カノン「初めまして！カノンです！きゃー!!!本物のサトシさんだ!!!尊敬してます！」
サトシ「あ…ああ！ありがとう！」

同じマサラタウンの出身でもあって、彼のファンでもあるカノンはマサラのヒーローを前に自分を押しさえられなかった。嬉々と迫るカノンを前に押され気味なサトシにマオ達は面白がしく笑っていた。

タケシ「おお！すっかりマサラのヒーローだな！サトシ！」

サトシ「えへへ！」

ピカチュウ「ピカチュウ!!？」

グレッグル「グルウ!!？」

そんな熱烈俊彦なカノンに嫉妬？したのか少しふくれっ面なりーリエはカノンをサトシから引き離そうとした。

りーリエ「カノン！そんなにグイグイ行ってしまうと、サトシが困ってしまいます！少し離れて下さい！」

カノン「ええく!!!いいじゃん!何でそんなに…」

………。

カノン「そっか／＼／」

リーリエ「そ／＼／そういう意味ではありません／＼／／」

サトシ「ん?なんの話だ?」

リーリエ「聞かなくて大丈夫です!!!」

忘れた頃にやってくる擲楡うカノンの口を押さえながらリーリエは強く否定した。

デデンネ「デデデ!!?」

カノン「あれ?もしかしてこの子…トキワの森の…リーリエゲットしたの?」

リーリエ「いえ、これには事情がありました…」

カノンの事もすっかりと覚えていたデデンネもヒコザルを見つけるなり挨拶を交わした。久しぶりでもあつて驚くヒコザルもデデンネとの再会を大いに喜んでいた。

デント「そういえばタケシ。村を救いに来たとは一体どういう意味なんだい?」

タケシ「ああ…それが…」

先程タケシが口説き文句の中で伝えていた言葉がひかかっていたデントはタケシに質問した。ちなみにこの二人も互いに面識がある仲である。

何処か古ぼけた村と感じていたリーリエ達であったが、実は此処はあらゆる作物が豊富に育ちやすく、とても恵まれた環境に位置した村であったのだ。しかし、食べ物求めて山から降りて来たあるポケモンが此処の作物を気に入ってしまった、そこに移り住むかのようにして毎度、作物を荒らしては食い尽くしてしまうのだ。その所為で食糧不足に陥ってしまった村の住人の中には栄養失調で倒れる人も出てきてしまった。タケシはそのヘルプを受けてこの村に立ち寄ったのだ。

そして、この作物を食い荒らす者の正体はリーリエ達がこの村を訪れる前に出会ったあのカビゴンだったのだ。

マーマネ「そんな…大変な事になってたんだ…」

カキ「だったら！あのカビゴンにはここから離れて貰わないとな！」

この村の一大事に気づいたリーリエ達は協力して野生のカビゴンを追い払う計画を立て始めた。しかしその最中、サトシとタケシは憂鬱そうに難しい顔で頭を抱えていた。

サトシ「カビゴンか…」

タケシ「そうなんだ…それが問題なんだ…」

スイレン「何で?そんなに悩んでるの?」

カノン「うん。野生のポケモンなら誰かがゲットしてしまえば、事が済むんじゃない?」

簡単そうに言うが、みんなが思っている以上に簡単な事では無いのはこの二人がよく知っていた。そのまま疑問の顔を浮かべられるみんなにサトシとタケシは自分達が知っているカビゴンの事について話し始めた。

サトシ「カビゴンは眠ったままでの戦闘だと、眠っている最中に自力で体力を回復させちゃうんだ。だから弱らせるには、まずはカビゴンを起こさなくちゃならないんだ!」

タケシ「だけどカビゴンは滅多な事では早々に起きる事はないポケモンだ。ダメージを与えられない以上、ゲットがとても難しいポケモンなんだ!」

ロトム『二人とも。随分とカビゴンに詳しい口ト!!?』

サトシ「ゲットした事があるからな」

マオ「へえ、そうだったんだ」

余談だがサトシとカビゴンとの出会いはオレンジ諸島。ザボンを食い荒らすカビゴンを止める事にその村の人と協力した事をきっかけに出逢った。何となく今回の件と類似した点もあつて話しているうちにとっても懐かしく感じていた。

その後、サトシとタケシからある程度の情報を得たリーリエ達はその後どうやってカビゴンを止めるか考える事にした。

リーリエ「それでしたら！サトシはどうやってカビゴンをゲットしたのですか!??そこから何かヒントが掴めるかもしれません！」

リーリエの言葉にサトシは今一度、カビゴンとの出会いから記憶を巡ってみた。そしてものの数分である一つの策が閃いた。

サトシ「そっか！食べ物だ!!!」

食いじが張っているカビゴンにとってそれは小さな弱点でもあった。食べ物をメインにしてリーリエ達はカビゴン捕獲作戦を立てて行く事にした。

~~~~~

場面は変わって、リーリエ達はカビゴンと会った場所へと戻った。相変わらずカビゴンはあの時会った時と同じで場所を変えずに静かに寝入っていた。

タケシ「試しにだ!一度やってみようか!」

リーリエ「はい!」

要は試してみるのも一つの手だ。状態異常のポケモンは通常よりも捕獲の成功率は伸びる。まずはこのままゲット出来るかどうかリーリエは空のモンスターボールを取り出した。

リーリエ「お願いします!モンスターボール!」

寝ているため当てるのは簡単だった。命中させると、巨大な身体を持つカビゴンは小さなモンスターボールの中へとそのまま吸い込まれて行った。しかし、一度も微動打にせず、カビゴンはすぐにモンスターボールから出てきてしまった。

ロトム『やつぱりダメージを与えない限りゲットは難しいロト!!?』

そうなったら、みんなで考えた捕獲作戦に切り替えるだけだ。

マオ「みんな!お待たせ!」

シエイミ「シエイミ!!?」

遅れてみんなと合流したマオとデントは小さな紙ケースを持っていた。中を開けると甘酸っぱい香りがリーリエ達の鼻の奥へと突き刺した。

マオ「デントと自作して作った木の実をふんだんに使ったカップケーキだよ!」

マーマネ「わああ!美味しそう!」

カノン「この香りは私でも目を覚ましちゃうかも」

様々な木の実をブレンドして作ったカップケーキ。これを餌にしてカビゴンを起こそうという作戦だ。

マオ「よおし！これでカビゴンにはばっちり起きて貰っ…」

シユユ!!!

マオ「て…」

と言いかけた途端、カップケーキが入った紙ケースごと、マオの手から一瞬にして消えてしまった。何が起こったか分からないリーリエ達は呆然としてしまった。

スイレン「マーマネ？」

マーマネ「僕じゃないよ!!!」

すると、寝息しか聞こえなかったカビゴンの方からとても満足そうにあげている声が出ている事に気がついた。

カビゴン「カア〜ビ♪」

生クリームを口いっぱいにつけて幸せそうに寝ているカビゴン。つまりあの瞬間で奪い取っていた事に一同は驚きを隠せなかった。

スイレン「なんて早技…」

リーリエ「食べ物になると…こんなに早く動けるのですね!勉強になります!」

カノン「今はしなくていいから!」

タケシ「これじゃあ、食べ物で吊る作戦はダメか…」

振り出しに戻ったと思えたこの状況でサトシは覚悟を決めた顔でカキの方へと向かい始めた。

サトシ「カキ!体力には自信があるよな!」

カキ「お?おお!勿論だ!」

サトシ「よし!ならこの手を使うぞ!手伝ってくれ!」

カキ「何かは分からんがオツケー!任せろ!」

~~~~~

カキ「サトシ？これはどういう事だ？」

サトシ「許せ：俺も一緒にやる」

不安そうにサトシの方へと目をやるのは無理はない。作戦に乗ったカキはサトシと一緒にりんごの着ぐるみを着せられていた。これから起きる恐怖にカキはまだ気づいていない。

キモリ「キヤモ!!？」

リーリエ「キモリ！サトシ達をお願いしますー！」

キモリ「キヤモ!!？」

デント「ヤナツプも頼むよ！」

ヤナツプ「ヤナツ!!？」

リーリエ達はというと茂みの中に隠れてはサトシとカキを見守っていた。まだ何を始めたのか聞いていないカキを横にサトシは静かにアキレス腱を伸ばしたりと準備運動を始めた。それを見て走る準備をしていることに気づいたカキの顔はどんどん真っ青になってきた。嫌な予感的中した。

マオ「カビゴン!!!美味しそうなリンゴがそこにあるよ!!!」
カビゴン「カアビ?」

マオの声に反応したカビゴンはゆっくりと起き上がると、すぐに目の前にいるサトシとカキに気づいた。しかし、その目は人間を見る目では無かった。二人を見てある物に見えたカビゴンは口から溢れ出す唾液を舌で拭いながらゆっくりと立ち上がった。

カキ「おい…これって…まさか…」

サトシは全てを理解したカキの肩を掴むと後ろの方へと振り向かせた。

サトシ「走れ!!!カキ!!!」

カキ「!!!そういう事なのかああああ!!!」

全速力でその場を逃走する二人に向かってカビゴンもその巨体に似合わないスピードで二人を追いかけて行った。カビゴンが踏み出す一歩による地響きが背後から襲いかかる恐怖に二人は涙目になりながら全速力で走って行った。

タケシ「俺たちはハガネールに乗って移動しよう!」

作戦が上手くいった事を確認したりーリ工達もあらかじめ決めていた誘導ポイントへと向かい始めた。

必死にカビゴンを誘導するサトシとカキは木々をつたって移動しているキモリとヤナツプの合図を頼りに彼らも誘導ポイントへと向かって走って行った。生い茂る木々

を抜けた先の平面地へと到着したサトシとカキはその場で倒れた。

カキ「もう…ダメだ…」

サトシ「お…俺も…」

カビゴンと戦いやすい場所へと誘導できたのだが、当の本人は動かなくなったりんごを見て喜んでいた。今にも二人に飛び掛かろうとしたその時、リーリエはカビゴンに向かつてギャラドスを繰り出した。

リーリエ「ギャラドス！【たいあたり】です!!？」

ギャラドス「ギャラ!!？」

モンスタールボールから飛び出したギャラドスはそのままカビゴンの腹部へと強烈な体当たりを仕掛けた。

カビゴン「カアビ!!!」

突然の攻撃を前にカビゴンは後方へと押し倒されてしまった。

リーリエ「サトシ！カキ！無事ですか!!？」

サトシ「ああ…なんとか…」

カキ「サトシ…俺はもう…お前の作戦には…乗ら…ない…から」

二人の無事を確認したリーリエ達は一安心したその直後、上空から何かがリーリエ達の前に降ってきた。

ギヤラドス「ギヤラアア!!!」

リーリエ「ギヤラドス!!!」

投げ飛ばされたギヤラドスはその場でぐったりと倒れてしまった。

マーマネ「あの大きなギヤラドスを投げ飛ばしたの!!!」

トゲデマル「モギユユ!!!?」

投げ飛ばされたギヤラドスをリーリエはすぐにモンスターボールへと戻した。カビゴンはいうと騙された事に腹を立てながら片腕を大きく振り回していた。穏やかに寝ていた様子から一変したカビゴンの様子に食べ物への恨みの怖さを思い知った。

カキ「行けっ!ガラガラ!」【アイアンヘッド】だ!!!?」

ガラガラ「ガアラ!!!?」

急いで着ぐるみを脱いだカキはガラガラをカビゴンへとぶつけた。喧嘩っ早いガラガラはそのまま頭突きをカビゴンの腹部へと命中させた。しかし、さつきとは違い相手の出方を伺っていたカビゴンはガラガラの攻撃を受け止めると、パワーを貯めた拳をガラガラへと振り落とした。

タケシ「あれは【かいりき】だ!!!?」

カビゴン「カアビ!!!?」

カキ「躲せ!ガラガラ!!!」

躲されたカビゴンの攻撃は地面へと打ち込まれると、凄まじい大きな地ならしが起きた。

モクロー「クロツ!!?」

サトシ「起きたか!モクロー!」

その地響きにサトシのリユクの中で眠っていたモクローは何事かと驚いては咄嗟に飛び出した。一気に目が覚めたモクローは辺りを見渡すと主人であるサトシに向かって攻撃的なカビゴンの姿が目映った。

サトシ「よし!モクロー!【たねばくだん】だ!!?」

モクロー「クロツ!!?」

サトシの危機を感じたモクローは口の中に眠らせているかわらぬのいしをカビゴンの顔に目掛けて命中させた。蹠踉めくカビゴンにさらにリーリエ達は追い討ちを仕掛けた。

リーリエ「キモリ!【はたく】攻撃です!!?」

デント「ヤナツプ!【かみつく】攻撃!!?」

カビゴン「カアビ!!!」

ダメージのお代わりを貰ったカビゴンは受け止めきれず後方へと吹き飛ばされてしまった。眉間にシワを寄せている様子から相当なダメージを貰った事を知り、デントは

空のモンスターボールを手にした。

デント「良し!モンスターボール!!」

デントが投げたモンスターボールにカビゴンは吸い込まれた。リーリエが最初に投げた時と違い、赤いランプを点滅させながらモンスターボールは小さく微動し始めた。ついに捕獲成功かと誰もが思っていたが、惜しい所でカビゴンはモンスターボールから飛び出してしまった。

マーマネ「えっ!ダメなの!」

カキ「中々タフだぞ!あのカビゴン!」

いい感じにダメージが入ったと思っていたが、モンスターボールから飛び出したカビゴンはぐっすりと眠りに入っていた。さっきのバトルでのダメージが嘘のように消えてしまったのか。気持ちよさそうに眠っていた。

ロトム『あのカビゴン!ゲットされる直前に「ねむる」を使って体力を回復していたロト!!?』

スイレン「でも、眠っている今がチャンス!ナギサ!「すてみタックル」!!?」

ナギサ「イブイ!!?」

マオ「私達も行くよ!アマージョ!「トロピカルキック」!!?」

アマージョ「アツジョ!!?」

隙を見せたカビゴンにナギサとアマージョは攻撃を仕掛けた。するとカビゴンは大きなイビキをかき始めると、それは個体の文字へと変化すると、そのまま向かってくるナギサ達にダメージを与えた。

ナギサ「ブイイ!!!」

アマージョ「アツジョ!!!」

その技を食らった二匹はいとも簡単に吹き飛ばされてしまった。

タケシ「あれは…【いびき】か!」

ロトム『あの技は眠っている時でも攻撃を繰り返す事ができる技ロト!!?』

眠り対策も決めていて油断の隙が無い事が分かったリーリエ達は攻撃の手を止めてしまった。当のカビゴンはそんなリーリエ達に眼もくれずに何事も無いような様子で眠っている。外敵から身を守る事なく何処でも眠る事ができるのはマイペースな性格だからでは無く、その圧倒的な攻撃力と防御力を合わせ持っているからこそだと思いはらされた。

カノン「ヒコザル!【かえんほうしゃ】!!?」

マーマネ「トゲデマル!【ほうでん】!!?」

さらにヒコザルとトゲデマルの攻撃がカビゴンへと向けられるも、カビゴンによる【いびき】攻撃が二体の技を相殺させた。

デント「なんてズツシリとした重いテイストなんだ!」

総攻撃を仕掛けているのに対し、それを物事もしないカビゴンに苦戦が悩まされる。下手に攻撃ばかり仕掛けていれば、いずれ体力が底を突いてやられるのは此方側である。

デデンネ「デデデ!!?」

終始息詰まる中、前へと飛び出したデデンネは自分の頬から電流を発生させながら、リーリ工達に訴えかけた。両手で頬を擦り合わせている動作からある一人の人物が声をあげた。

サトシ「そうだ!デデンネの技を使えば、いけるかも!」

何かに閃いたサトシはデデンネの方へと視線を向けると、視線に気づいたデデンネもサトシの方へと振り向くと、何かを感じ取ったみたいにサトシに向かって頷いた。

そのあと、デデンネはカビゴンに向かって走り出した。体格差からどう考えても押し切られる場面、サトシは空かさずデデンネに指示を出した。

サトシ「行くぞ!デデンネ!」
「ほっぺすりすり」だ!!?」

デデンネ「デデデ♪」

近づいてくるデデンネに向かって「のしかかり」攻撃を仕掛けたカビゴンの腹部に向かってデデンネは放電を浴びさせた。

しかし、ダメージが思った以上に入っていない事を知ったカビゴンは標的を目の前にいるデデンネへと向けた。

カノン「危ない!!!」

しかし、拳を振りかぎそうとしたカビゴンの動きが急に止まった。見ると、電流が身体中に帯びていて、苦しそうなカビゴンがいた。

デント「なるほど！麻痺状態にしてカビゴンの技を出にくくさせたんだね！」

サトシ「そういう事！」

【ほっぺすりすり】は攻撃力が低い相手を必ず麻痺状態にさせる事が出来る相手からにしてはとて厄介な技だ。麻痺状態になったカビゴンは【ねむる】で回復をしたいものの痺れの所為で技を発動する事が出来ないでいた。

「よし！今だよクワガノン！【いとをはく】だ!!?」

クワガノン「クワツ!!?」

タケシ「ハガネール！【しめつける】攻撃!!?」

ハガネール「ネエル!!?」

クワガノンの糸にハガネールの攻撃によってカビゴンはさらに身体を奪われてしまった。力が入らざったりし始めたカビゴンにヒコザルは全速力で駆け出した。

カノン「よおし!ヒコザル!「かえんぐるま」行っちゃって!!?」

カビゴン「カアビ!!!」

ヒコザルの「かえんぐるま」がカビゴンの顔面へと命中すると、その威力を受け止めきれず、カビゴンは後方へと倒れてしまった。バランスを崩した瞬間を見てカノンは空のモンスターボールを投げた。

カノン「行け!モンスターボール!!!」

三回目の捕獲にリリーエ達はカビゴンが吸い込まれたモンスターボールに目が集まった。そして、微動だにしていた赤く光る開閉スイッチは静かに鳴り止んだ。

リリーエ「やりましたね!カノン!」

カノン「うん!新しい仲間が増えたよヒコザル!」

ヒコザル「ヒッコトヒッコトヒッコト」

捕獲に成功したカノンはモンスターボールを手にとるとヒコザルと一緒に喜び合った。

カノン「あつ!」

すると、はしゃいでたヒコザル身体は青白く光り輝き出した。リザードのように長い尻尾が生え、高く築き上げた拳にカノンは優しく自分の拳を当てた。

モウカザル「モオウカ!!?」

カノン「これからも宜しくね！モウカザル！」
モウカザル「モオウカ!!？」

~~~~~

ポケモンセンターへと戻ったリリーリエ達はカビゴン捕獲の報告を村の人達に伝えた。村に平和が戻り、村の人達はリリーリエ達に感謝を述べた。

タケシ「カノン！さつきオーキド博士に頼んで送って貰ったんだ！」

カノン「これは？」

カノンが受け取ったのはポロックというハウエン地方で伝わるお菓子だった。タケシ「カビゴン専用のポロックだ！この一粒でカビゴンの一日の食分量と同じくらいの満腹量が含まれているんだ」

スイレン「これなら食費に困らなくて済むね！」

カノン「本当に！それだけが心配だったよ！」

若干そつちの心配もなっていたカノンはお礼を言つてタケシからポロツクを受け取つた。すると、男子三人組の腹の虫が一斉にポケモンセンター内に鳴り響いた。

サトシ「なんか：俺も腹減つてきた」

カキ「俺もだ：」

マーマネ「僕も」

タケシ「よし!だつたら寄りに手をかけて作らせて貰うぞ!」

デント「なら!僕も手伝うよ!」

村の危機を救つたりーリエ達はその後、タケシとデント二人の特性フルコースを大いに堪能した。何故か始まつたサトシとカキの大食い勝負を面白おかしく見ていたりーリエにカノンは声を掛けた。

カノン「りーリエ!絶対にポケモンリーグ一緒に出ようね!」

モウカザル「モオウカ!!?」

りーリエ「勿論です!約束ですからねカノン!」

シロン「コン!!?」

そして二人はさらにポケモンリーグへの決意を固めたのであつた。今日は大変な一日であつたのかもしれないけど、逆にそれが互いに大きな刺激になつたのかもしれない



## 第四十二話 三番勝負 VS アイラ

クチバシテイへと向かうリーリエ達一行はお昼も近くなつて来た事でランチ休憩を取ることにした。料理担当を行なうデントの指示で各自、必要な食材を探しに出かけていた。

リーリエ「ありました！タポルの実です！」

シロン「コーン!!?」

デデンネ「デデ!!?」

リーリエはマオとスイレンと一緒にタポルの実を探しに出掛けていた。そんなリーリエ達に向かって一人のトレーナーが近づいてきた。その人物を見たリーリエ達は驚いた顔を見せた。

アイラ「なにになにに!!? そんなに驚かなくてもいいじゃん♪久しぶり！三人とも！」

リーリエ「アイラさん!!!」

シロン「コーン!!?」

久しぶりにアイラとの再会にリーリエ達は一旦、木の実の採取を中止して、木陰の側にある石段に腰を下ろした。初めて会話を交わした時と違ってリーリエとアイラの間

から邪険なムードは一切なく、まるで本物の姉妹のように和んでいた。あの時の二人の口喧嘩の怖さは今でもシロンやマオとスイレンの脳裏に焼き付いていた。

アイラ「そういえば！リーリエはジムを巡ってるんだったよね！」

リーリエ「はい！次はクチバジムに再挑戦するつもりでいるのです！」

アイラ「そうなんだ！頑張ってるね！」

マオ「アイラさんはジム巡りはしてないんですか？」

アイラ程の実力を備えているのであれば彼女がジムを巡る旅をしていないのは少し不思議に感じる。マオの問いに対して少し残念そうにアイラは答えた。

アイラ「興味はあるけど、私はシャドーを追ってカントー地方に來たわけだし、寄り道は出来ないかな……」

残念そうに言いつつアイラは立ち上がると、長くて綺麗な髪を靡かせながらクルリとリーリエの方へと振り返った。覗き見るようにして顔を近づけて來たアイラに驚いたリーリエは思わず頬を赤くした。

アイラ「じゃあ、バトルしようよ！」

リーリエ「えっ!?」

アイラ「一回リーリエとバトルしてみたいなって思ってたさあ！ねえ、やろうよ！」

突然、アイラからのバトルの誘いにリーリエはハッと息を呑んだ。アローラ祭やデイ

グダの穴での戦い。サトシからもアイラの実力に対してかなり評価していただけあって、今の実力でアイラと真面に戦えるかどうか、少し弱気になっている自分がいたのだが、アイラと戦ってみたい気持ちは前からあった。そんなリーリエの気持ちを讀み取ったのかシロンは優しい笑顔を彼女に向けた。

リーリエ「それではお願いします！」

~~~~~

マオ「どつちも頑張れ！」

スイレン「フアイト！」

バトルが出来そうな場所へと移動したりリーリエとアイラはモンスターボールを片手に互いに距離を取った。髪結び目をしっかりと結び直したりリーリエは軽く頬を叩いて気合を入れた。

リーリエ「ルールはどう致しましょうか？」

アイラ「じゃあ、三対三の勝ち抜き戦はどう？交代なしで先に二勝取った方の勝ち！」
リーリエ「分かりました！」

その提案にリーリエは承諾した。そしてアイラは静かに一呼吸を終えると、バトルモードへと変貌した。鋭く尖った氷のような冷たい目を向けられたリーリエは息をのんだ。アローラ祭でユーゴと対戦した時にも見せたアイラの本気の姿は観戦しているだけでも身震いを立てさせられた。それがいざ、自分の方へと向けられたのであればかなりのプレッシャーであった。

アイラ「コダツク！宜しく！」

コダツク「コフア!!？」

スイレン「コダツクだ！可愛い!!!」

アイラが一番手に選出したのはコダツク。アイラの手持ちの中で初めて目にするポケモンであった。コダツクは水タイプでありながら念力といったエスパー系の技も得意とする。それらに注意するよう自分に言い聞かせた後、リーリエもおもいつきりモンスターボールをフィールドへと投げ入れた。

リーリエ「ゼニガメ！お願いします！」

ゼニガメ「ゼニイ!!？」

勢いよく飛び出したゼニガメは空中で一回転させると着地と同時に少量の水を口か

ら噴水させた。光り輝く水しぶきによって神々しく体を光らせるゼニガメの自身に満ちた顔にアイラも思わず顔がにやけていた。

？アイラVSリーリエ？

アイラ「行くよリーリエ！コダック！【みずてつぼう】！！？」

コダック「コファ！！？」

リーリエに合図を送った後、アイラのコダックはお腹の底から力一杯に込めた水鉄砲をゼニガメに向かって放たれた。

リーリエ「ゼニガメ！此方も【みずてつぼう】！！？」

ゼニガメ「ゼニイ！！？」

互いの水鉄砲はそのまま相殺させられた。パワー互角であった。

アイラ「そのまま【ひっかく】攻撃よ！！？」

コダック「コファ！！？」

リーリエ「ゼニガメ！【こうそくスピン】！！？」

ゼニガメ「ゼニイ！！？」

バトル前の緩慢な動きと打って変わって、急速に接近したコダックは鋭く尖らせた爪

で攻撃を仕掛ける。しかし、ゼニガメもすぐに甲羅の中に潜って身を籠らせると、高速回転でコダックを弾き返した。

アイラ「怯んでる暇はないわよ！【みずてつぽう】!!?」

アイラの迅速な指示のおかげで直ぐに立て直したコダックはもう一度水鉄砲で攻撃を仕掛けた。しかし、効果は今ひとつなだけでもあつて大したパワーも見込めなかつた。コダックの水鉄砲は高速回転をし続けているゼニガメの前では歯が立たなかつた。

リーリエ「この技を前にはどんな攻撃も通りませんよ！」

アイラ「攻撃技を防御に使うなんてサトシみたいね！じゃあ…」

アイラの次の指示が分かっているみたいなのにコダックは頭を抑えていた両腕を前に突き出すと、今度は目を鋭く尖らせた。アイラと一緒に顔つきが変わつたコダックにリーリエは少し身震いを立てた。

アイラ「【かなしばり】!!?」

ゼニガメ「ゼニイ!?」

リーリエ「あつ!!!」

金縛りにより【こうそくスピン】を封じられたゼニガメは一瞬にして動きを止められてしまった。身体の自由を奪われた訳ではないが、これによりゼニガメは覚えている技の一つを使えなくなつてしまった。

アイラ「これで暫く大人していてね！」

リーリエ「でしたら！【アクアジェット】です!!?」

ゼニガメ「ゼニイ!!?」

隙を作らせない為にリーリエはすぐにゼニガメに攻撃の指示を繰り返した。地面を思いつきり蹴ったゼニガメは水を纏いその勢いのままコダックに向かって体当たりを仕掛けた。しかし、その接近技を待っていたかのように慌てる事なく冷静にアイラもコダックに指示を送った。

アイラ「コダック！【サイコキネシス】!!?」

コダック「コファ!!?」

ゼニガメ「ゼニイ!!!」

コダックのサイコパワーにより勢いを止められたゼニガメはそのまま捕まってしまった。その場で脱出しようともがくも、一度捕らえられてしまったら、もう逃げようがなかった。

コダック「コファ!!!」

サイコパワーを一気に高めたコダックはそのまま青白いエネルギー波でゼニガメを後方へと投げ飛ばした。投げ飛ばされたゼニガメは太い木の幹へと体を強く叩きつけられてしまった。

リーリエ「ゼニガメ!!!」

シロン「コーン!!!」

ゼニガメ「ゼニイ…」

その一撃にゼニガメは目を回した。試合続行不可能と判断したリーリエは右手を高く挙げてアイラに合図を出した。それを見たコダックもアイラの所へと戻って行った。

リーリエ「ありがとうゼニガメ! ゆっくり休んで下さい」

ゼニガメをモンスターボールへと戻すと、アイラもコダックの頭を優しく撫でてあげると、そのままモンスターボールの中へと戻した。

アイラ「ちよつと安心してすぎたのがいけなかったわね。さあ! 次はどの子でくる?」

まずは一勝得て余裕を見せるアイラにリーリエは次のポケモンをぶつけた。

リーリエ「わたくしの二番手はこの子です!」

キモリ「キャモ!!?」

軽やかに飛び出したキモリは対戦相手であるアイラに向かって拳を構えた。

アイラ「私はジャノビーよ!!!」

ジャノビー「ビイノー!!?」

リーリエの前に繰り出されたのはこれはまた初めて見るアイラの手持ちであった。連続で同属タイプのポケモンを出して、一回戦での敗北をフラッシュバックさせるアイ

ラの魂胆にリーリエの目つきは一段と鋭くなった。

アイラ「また私からいくよ！」【リーフブレード】!!?」

ジャンビー「ビィノ!!?」

リーリエ「はたく」で迎え撃って！」

キモリ「キヤモ!!?」

互いにスピードが自慢の二体は電光石火のように接近すると、ジャンビーは鋭利な尻尾でキモリは太い尻尾で対抗した。暫く攻防が続いた後、最後の一撃を喰らわずと二体は様子見のため一旦、距離を取った。

リーリエ「キモリ！」【ギガドレイン】!!?」

着地した同時にキモリはジャンビーの体力を吸収し始めた。キモリが作り上げた緑色の靄に包まれたジャンビーは体力を吸い取られた結果、その場で足が纏れてしまった。

リーリエ「今です！【でんこうせっか】!!?」

動きが鈍ったジャンビーを見てキモリは風を切るスピードで接近を開始させた。

アイラ「立てジャンビー！」【グラスミキサー】!!?」

しかし、ジャンビーは尾をスクリユーのように回転させると、木の葉を纏わせた竜巻をキモリに向かって放った。

リーリエ「【あなをほる】です!!?」

キモリ「キヤモ!!?」

荒れ狂う暴風を前であつても、落ち着いて状況を見ていたリーリエは冷静にキモリに指示を出した。地中に潜つたキモリは攻撃を躲すだけでなく、そのままジャノビーに向かつて掘り進んで行つた。

ジャノビー「ビイノー!!」

真下に到達したキモリは地中から飛び出すと同時にジャノビーに強烈な一撃を浴びせた。キモリの攻撃にジャノビーは空中へと放り出されてしまった。

リーリエ「【はたく】攻撃!!?」

キモリ「キヤモ!!?」

アイラ「ジャノビー! 【いあいぎり】!!?」

ジャノビー「ビイノー!!?」

向かつてくるキモリに対し、空中で受け身を取つたジャノビーは攻撃を構えながらキモリとd十分に距離を縮む瞬間を狙つた。それをキモリは僅かな距離でジャノビーの技をギリギリ見切ると、躲したと同時に大きな尻尾をジャノビーの頭部に叩き込んだ。

ジャノビー「ビイ…ノ」

地面へと思いつき叩きつけられたジャノビーはその場で目を回した。

リーリエ「やった！凄いわキモリ！」

シロン「コーン!!？」

アイラ「くっ…」

二回戦目はキモリの活躍によりリーリエに軍配が上がった。こみ上げて来る悔しさに下唇を噛みしめながらアイラはジャンプを戻した。

スイレン「これでお互いに一勝ずつ！」

マオ「次で決まるね！」

勝利を得て満足したキモリをモンスターボールへと戻した後、今度はリーリエから最後のポケモンが繰り出された。

リーリエ「わたくし側の大将はヒノアラシです！」

ヒノアラシ「ヒノツ!!？」

アイラ「私はこの子よ！行けっ！ルクシオ！」

ルクシオ「ルシイ!!？」

お互い最後に繰り出したポケモンがフィールドに到達すると、リーリエは思わず拳を固く握りしめた。一勝ずつといったこの状況でリーリエの士気はさらに高まってきた。それはアイラも同じだった。そんな主人達の闘志が伝わったのか。ヒノアラシの背中の炎は吹き上げ、ルクシオの牙からは静電気がひりついていた。

リーリエ「ヒノアラシ！」「かえんほうしゃ」！！？」

アイラ「ルクシオ！」「でんげきは」！！？」

同時に繰り出された技はあつという間に相殺させた。今のでヒノアラシの攻撃力を見切ったアイラはルクシオに次なる指示を送った。

アイラ「【じゆうでん】！！？」

ルクシオ「ルクウ！！？」

身体中から発する電気によってルクシオの毛並みは一斉に剣山のように立ち上がった。その姿に一瞬驚くもヒノアラシも負けじと炎を立ち昇らせて対抗した。

リーリエ「このまま攻め込みます！ヒノアラシ！」「かえんほうしゃ」！！？」

ヒノアラシ「ヒノオ！！？」

動けないルクシオにヒノアラシの火炎放射が突き刺さった。力を蓄える技というのは次の攻撃の威力を上げる利点に繋がるが、それと代償に大きな隙を作ってしまう。炎の海に吞まれるルクシオであったが、身体中に流れる電気のお陰で自分の特防を上げた事により何とか耐え凌げた。

そしてルクシオの体力を信じて見守っていたアイラにむけてルクシオは力が漲ってきた合図を視線を合わせてアイラに送った。

アイラ「ルクシオ！」「スパーク」！！？」

ルクシオからの充電完了の合図を貰ったアイラは攻撃の指示を送った。エネルギーを一気に解放させたルクシオはヒノアラシの火炎放射を振り払うと、身体中から電気を発生させて、それを身に纏う感じでヒノアラシに向かって走り出した。

リーリエ「ヒノアラシ! 「えんまく」です!!?」

充電により上がったルクシオのパワーは離れているリーリエにもビリビリと伝わってきた。火炎放射をやめたヒノアラシは向かってくるルクシオに向かって煙幕を放った。ヒノアラシ側からもルクシオの姿が全く確認できないほどの煙幕がフィールドを覆った。

目眩しが成功したと思ったりリーリエは次の策を考えたが、その煙幕を突き破ったルクシオはそのままヒノアラシに向かって体当たりした。

ヒノアラシ「ヒノオ!!!」

技の威力を上げていたルクシオの猛烈な攻撃を受けたヒノアラシはそのまま後方へと吹き飛ばされた。

リーリエ「ヒノアラシ!!!」

互いの姿が見えなくなるほど深い煙であったのにも関わらず、迷う事なくヒノアラシに攻撃を決めたルクシオにリーリエは驚いていた。

アイラ「そんな煙幕では私のルクシオの目を誤魔化す事なんて出来ないわよ」

そういえば本で読んだことがあった。ルクシオの進化系であるレントラーというポケモンの眼は暗闇の中でも相手の姿を捕らえる暗視スコープの役割をしている事があった。進化の予兆でもあるのかわからないが、進化前のルクシオにその能力を既に手に入れさせていた事にアイラのポケモントレーナーとしての能力に感心した。

後方に飛ばされたヒノアラシは何とか立ち上がる事が出来た。そして、ヒノアラシの闘志が化身となって赤いオーラが身体中を溢れ出した。そう《もうか》が発動した合図だ。

リーリエ「ヒノアラシ！【かえんほうしゃ】!!?」

《もうか》が発動したという事はヒノアラシの体力は相当無くなっている事も意味していた。さらに背中の炎を燃え上がらせたヒノアラシの火炎放射は先程とは比べものにならない火力となっていた。その熱はアイラにも伝わっていた。

アイラ「ルクシオ！【でんげきは】!!?」

素早く繰り出されたルクシオの電撃は雷のように轟かせながら地面を掘り進んで行った。炎と電気がぶつかり合うとまたもや互いを相殺させて、爆発が起きた。

リーリエ「【ニトロチャージ】!!?」

アイラ「【かみなりのきば】!!?」

爆風に煽られながらも負けじとリーリエとアイラはありったけの声を腹の底から上

げた。二人の声の力を貰った二体は最後のエネルギーを身体に身に纏わせながら走り出した。

ヒノアラシ「ヒノオオオ!!!」

ルクシオ「シオオオ!!!」

二人に負けないぐらいの声を上げて走る二体は真つ正面からぶつかり合った。二体のエネルギー波が混じり合うと、そのまま爆発によって二台同時に後方へと飛ばされた。

ヒノアラシ「ヒノオ…ヒノオ…」

ルクシオ「ルクウ…ルクウ…」

地面に引きずられた身体を起こした二体は四本の足で踏ん張りを見せるとそのまま静かに互いを睨み合った。呼吸を荒くする二体に二人の緊張が走った。静寂に包まれながら目線を逸らす事はなかった二体はそのまま静かにその場で倒れ込んでしまった。目を回す二体を見て勝敗が決した事を悟った。

リーリエ「相打ち…」

アイラ「そのようね…」

二人は最後まで戦ってくれた二体の頭を優しく撫でたと後、モンスターボールへと戻した。

リーリエ「ご苦勞様でした。ヒノアラシ」

初めてのアイラとのポケモン勝負を終えて緊張が解けたリーリエはその場に座り込んだ。汗だくなリーリエをシロンは優しく冷気を吐きながら涼ませていた。

マオ「うわあ！息が詰まったあゝ」

スイレン「どつちも凄いバトルだった」

二人の緊張感は観戦していた二人にも伝わっていた。ホツとした二人は互いに拍手を送りながらリーリエとアイラの方へと歩いて行った。

アイラ「ん／＼引き分けとはいえ勝てなかったああ!!!悔しいいいいい!!!」

リーリエ「ア…アイラ…さん？」

急に頭を掻き蒸しながら声を上げるアイラにリーリエは少し驚いてしまった。公式戦だろう野試合だろうアイラにとって敗北の二文字はとも自信の身体に受け付けないものなのであろう。その後はブツブツと今回の試合について一人、大反省会を開いていた。

マオ「アイラさん。やっぱ、すごく負けづ嫌いな人だね」

スイレン「サトシとカキみたい」

アイラの新たな一面を見れたリーリエ達はその姿に少し面白おかしくなってしまう。笑みが溢れたリーリエ達を見てただ一人恥ずかしくなったアイラは軽く咳払いす

ると、リーリエの元へと近づいていく。

アイラ「でもリーリエとのバトル。楽しかったわ！またやりましょう！さあ、バトルを終えた後は互いの健闘を讃えて握手よ！」

リーリエ「はい！」

最後は互いの健闘を讃える。このような配慮を心がけている様子からもアイラのポケモンバトルに対する熱意や闘志を今一度感じる事ができた。握手を交わしたリーリエは少しアイラの握力が強くなった事に気づいた。ゆつくりとアイラの顔を見ていると、アイラは真剣な眼でリーリエを見ていた。

アイラ「だけど、次は勝つ！」

リーリエ「いいえ、次に勝つのはわたくし達です！」

こうして二人は再戦の約束をした後、アイラはリーリエ達と別れた。ポケモンリーグに出場となるとサトシやアイラのような凄腕トレーナー達と戦う事になるであろう。今回の試合はそんな実力派トレーナー達と戦うためにも、さらに精神一倒を貫きもつとバトルに対して精進しないといけないと思わせる、そんなきっかけを与えてくれた物になったのである。それを胸にリーリエはクチバジムへの再戦に向けてさらに闘志を燃やして行くのであった。

サトシ「遅いなくりーリエ達」

ピカチユウ「ピカピイ」

カキ・マーマネ・デント「二うん」

第四十三話 二人の絆

クチバシテイを直指して旅を続けるリーリエ達。旅の道中で野試合を申し込まれたリーリエはポケモンバトルを行なっていた。

トレーナー「サンドパン！【どくばり】だ!!？」

サンドパン「サンツ!!？」

相手のサンドパンは無数の毒針を発射させた。相手の攻撃が襲いかかると同時にリーリエは素早く指示を送り出した。

リーリエ「ズルズキン！【あくのはどう】です!!？」

攻撃の指示を送ったリーリエであったが、ズルズキンはそんなリーリエからの指示を聞くつもりはなく、一直線に突き進むと無数に飛び交う毒針を手刀で叩き落とした。だが全弾を防ぎ切れる訳でもなくズルズキンは追加効果の毒を食らってしまった。毒によって身体が蝕まれているがズルズキンは痩せ我慢をしながら不敵にサンドパンを睨みつけていた。

リーリエ「ズルズキン！まずは相手の出方を良く見るんです！それから…」

ズルズキン「ズルツ!!？」

リーリエ「あつ!ま:待ってください!!」

勢いよくジャンプしたズルズキンは膝小僧にパワーを貯めると一気にサンドパンに向かつて急降下した。向かってくるズルズキンにサンドパンは「ブレイクロー」で対抗した。技がぶつかり合うとズルズキンはありつたけの力で技ごとサンドパンを後方へと吹き飛ばした。岩壁に叩きつけられたサンドパンはそのまま目を回しながらその場で倒れてしまった。

トレーナー「サンドパン!!!」

サンドパン「サ:サンドオ:」

デント「そこまで!サンドパン戦闘不能!ズルズキンの勝ちだ!」

勝負には勝つ事が出来たが、ズルズキンの独壇場であったため、リーリエは遣る瀬ない気持ちであった。

リーリエ「あの:ありがとうございます」

バトルの礼を言いに向かったリーリエであったが、サンドパンを戻したトレーナーは不満そうにリーリエの方へと振り向いた。

トレーナー「あんたに負けたんじゃない!そのズルズキンに負けたんだ!」

そう吐き捨てたサンドパンのトレーナーはそのまま去っていった。

マオ「何!?? あの人!」

ロトム『互いの健闘を讃えるまでがポケモンバトルロト! 感じ悪いトレーナーだロト!』

デント「まあ勝利には変わらない訳だし、いいんじゃないかな!?」

確かにトゲのある言い方であったが、あんなバトルをされたのであれば納得する方が難しいことは分かっていたりーリエはただ相手に申し訳ない気持ちでいた。バトルを終えたズルズキンの方へと目をやるとそんなりーリエの気持ちには気にもとめず昼寝に入っていた。

オツキミ山からここまで一緒に旅をしてきたのだが、今だにりーリエに心を開いてくれない様子でいる。心の底からズルズキンと一緒にバトルが出来る未来は遠のくばかりでいるこの関係性にりーリエはため息を吐くばかりであった。

ソウタとのポケモンバトルの時のように急に暴れたりするような事は無くなっただけでも良かったと思うが、それはりーリエやポケモン達に対して興味を示さなくなった様子である事を捕らえていた。

そんなズルズキンを見てサトシは今日のためにオーキド博士から転送して貰っていた、あるポケモンの入ったモンスターボールを持ってりーリエとズルズキンの元へと歩き出した。

サトシ「よし！出てこい！」

ズルツク「ズルツ!!？」

元氣一杯に飛び出したのはサトシがイツシユ地方で仲間になったポケモン。ズルズキンの進化前でもあるズルツクであった。

ズルツク「ズルツ」

ズルズキン「キィ…？」

リーリエと出会う前はズルツクの群れのリーダーを務めていた事を聞いていたサトシはズルツクとなら打ち解けてくれるはずだと考えていた。

ズルツク「ズル♪」

ズルズキン「……………」

いずれ自分が進化するであろうズルズキンにズルツクは警戒する事なく首を長くしながら大きな目で、その姿をマジマジと覗き込み始めた。しかし、その視線に居心地が悪くなったズルズキンはそっぽを向くような感じですぐにその場から離れると、すぐ側の岩壁に寄り添う形でもう一度寝入ってしまった。

マーマネ「ああ…ダメか」

トゲデマル「モギユユ…」

いつもと同じ結果に肩を落とす一同。仕方ないとリーリエ達は暗くなる内に山を降

戒して岩壁に身を隠しながらそつと頭を出した。するとそこでは二人のトレーナーによるバトルが繰り広げられていた。

??? 「ガブリアス!」【ドラゴンダイブ】だ!!?」

ガブリアス 「ガアブ!!?」

??? 「サワムラー!」【メガトンキック】だ!!?」

サワムラー 「サワイ!!?」

ガブリアスとサワムラーによる激しいポケモンバトル。そして、そのガブリアスを使っているトレーナーはリーリエ達がよく知る人物であった。

マーマネ 「あれ! ユーゴさんだ!」

スイレン 「相手は…誰だろ?」

一人はユーゴである事が分かったリーリエ達はそのユーゴと戦っている道着姿のトレーナーの方へと目を向けた。そして一番早く気づいたサトシが声をあげた

サトシ 「シバさんだ!」

デント 「シバさんって…もしかして! カントー地方の四天王! 格闘王のシバさんの事かい!!?」

リーリエ 「四天王ですか!!?」

ロトム 『四天王のバトル! これはデータに押せめない訳にはいかないロト!!?』

シバは格闘タイプを扱うパワーファイトを好むカントー地方の四天王の一人である。以前その一人である氷タイプ使いのカンナと出逢っていたリーリエ達は四天王の強さとはどれ程のものかは知っていた。

シバ「サワムラー！」「ブレイズキック」！！？」

サワムラー「サワア！！？」

ユーゴ「ガブリアス！」「つるぎのまい」！！？」

戦いの最中、大きく振りかぶったサワムラーは足に炎を纏わせるとガブリアスに向かって攻撃を仕掛けた。「ブレイズキック」を仕掛けに近づいてくるサワムラーにガブリアスは両腕の釜を硬化させると、そのまま回転しながらサワムラーの技を受け流した。火花散るサワムラーの連続キックをガブリアスは怯む事なく立ち向かっていった。

カキ「【つるぎのまい】を防御に使ってるぞ！」

ロトム『本来この技は精神を研ぎ澄ませて攻撃力を大幅に上げていく技ロト！こんな使い方見たことが無いロト！！』

さらにそのままサワムラーの攻撃を弾き返すと、思いつきり天高くジャンプした。

ユーゴ「今だ！ガブリアス！」「ドラゴンダイブ」！！？」

ガブリアス「ガアブ！！？」

シバ「サワムラー！」「とびひざげり」だ！！？」

サワムラー「サアファイ!!？」

物凄い勢いで滑空するガブリアスは攻撃エネルギーを最大値まで跳ね上がらせると、サワムラーへと向かった。空を切る音がまるで龍の唸り声のように周りを響かせる。しかし、それに怯むことなくサワムラーも最大エネルギーをガブリアスへとぶつけた。ぶつかった瞬間に巻き起こった爆煙から二体は膝をつく事なく地に着地すると、すぐに二体は互いを身構えた。自分達の力量を測る事が出来たユーゴは満足げにシバにかい降参の合図を送った。

シバ「ふむ！この辺で良いだろうか？」

ユーゴ「はい！ありがとうございます！」

ガブリアスの大地をも震え上がせる攻撃。そして、「つるぎのまい」で上がっていたその攻撃を受け止めたサワムラーのレベル。両者のバトルにすっかり見惚れてしまったリリーエ達はユーゴの元へと走り出した。

リリーエ「ユーゴさん！お久しぶりです！」

ユーゴ「おっ！リリーエ！みんな！久しぶりだな！」

サトシ「シバさんも！お久しぶりです！」

シバ「おっ！君はいつぞやの少年！サトシ君だったなあ！」

こちらに駆け寄るリリーエ達に気づいた二人も彼らの元へ振り返った。

『ガブリアス マツハポケモン

ドラゴン・地面タイプ

身体を折り畳み翼を伸ばすとまるでジェット機のように音速で飛ぶことができる。
狙った獲物は逃がさない』

サトシ「ガブリアスも持っていたのですね！」

ユーゴ「ああ！よく頑張ったなガブリアス！」

ガブリアス「ガアブ〜♡」

初めて目にしたユーゴのガブリアスに自然と皆は集まった。さっきのバトルと違い無邪気にユーゴに寄り付くそのギャップがとても愛くるしく見えた。

すると、ユーゴのバックに入ってる一つのモンスターボールから一体のポケモンが飛び出した。

マフオクシー「フオクシー!!!」

ガブリアス「ガアブ!!!」

現れたマフオクシーはそのままガブリアスをユーゴから引き離すと、鋭い目で睨みつけた。

ラプラス「ラアッブ!!?」

スイレン「あつ!ラプラス!!!」

二体の殺気に気づいたのか?!? マフオクシーに続いてユーゴのリユクからはもう一体、ラプラスも現れた。ラプラスはすぐに二人の仲裁に入ると、喧嘩を始めようとした二体を静めた。

ピカチュウ「ピカチュウ!!?」

シロン「コーン!!?」

ラプラス「ラアッブ!!?」

ラプラスに説得された二体はそのままソツポを向いた。その様子に軽いため息をつくラプラスに同情したのか:ピカチュウやシロンは慰めに向かった。

サトシ「何でマフオクシーは急に起こり出したんだ?」

ユーゴ「それが分からないんだ。つたく!もう少し仲良くしたらどうだ!」

マオ「ひよつとして、ユーゴさんのガブリアスとマフオクシーって女の子ですか?」

ユーゴ「おお!よく分かったね!」

マオ「つまり…」

リーリエ「そうですよね」

スイレン「女の戦い…」

何かを察した女性陣に対しハテナを思い浮かべるサトシとユーゴ。この二人…何処か似ているようであった。

それを他所に一体のポケモンがシバの方へと向かった。

シバ「ん!？」

リーリエ「何をしているのですか!?!?ズルズキン!」

ズルズキン「ズルウウ!!?」

リーリエの忠告を無視してズルズキンはズカズカとシバがいる前へと進むと、鋭い目つきで何かを訴え始めた。もう一度ズルズキンを呼び止めようと向かうリーリエであったが、いつもの相手を見下すような目つきではなく、何かを決意した真剣な眼差しを送っていた。普段と違う様子にリーリエは驚いていた。すると、ズルズキンが何がいかに気づいたサトシはリーリエの元へと向かった。

サトシ「もしかしてズルズキン!シバさんと戦ってみたいんじゃないかな?」

デント「うん!同じ格闘タイプだからシバさんのポケモン達の強さにどうやら惹かれてみるみたいだね」

暫くズルズキンとにらみ合った後、シバは今度はリーリエの方へと目を合わせた。

シバ「このズルズキンのトレーナーは君か？」

リーリエ「あつ！は：はい！！」

シバの鋭い眼光を向けられたリーリエはおもはず背筋がピンつと立った。同じようにその迫力に押されたマオ達も同じようにその場で固まってしまった。ズルズキンと同じように暫くリーリエを見続けたシバはこちらに来るように合図を送った。それを受け取ったリーリエはズルズキンと一緒にシバの方へと向かうのであった。

~~~~~

シバ「私はニヨロボンで行くぞ！ウツハアー!!!」

ニヨロボン「ニヨロ!!？」

バトルを承諾してくれたシバはリーリエとズルズキンをバトルが出来る広い平地へと案内した。シバが繰り出したニヨロボンを見てズルズキンはより一層気合が入っていた。今だに息が合わせられない事に不安なリーリエであったが、やる気を見せている

ズルズキンの為にもバトルへと意識を傾けた。

マオ「大丈夫かな…リーリエ」

サトシ「今は二人を見守るしかないさ」

ピカチュウ「ピカチュウ!!？」

トゲデマル「モギユユ!!？」

デデンネ「デデ…」

？リーリエVSシバ？

リーリエ「ズルズキン！まずは…」

ズルズキン「ズツキイ!!？」

リーリエ「待ってください！まだ指示を…」

対戦相手はカントーの四天王の一人。慎重に相手の出方を見る為に指示を送るリーリエであったが、そんなリーリエの声に耳を貸さないズルズキンはそのまま真っ向から攻撃を仕掛けに行った。手刀はニョロボンの頭上へと振り下ろされた。

シバ「ん…なるほど。ニョロボン！【たきのぼり】だ!!？」

ニヨロボン「ニヨロ!!？」

攻撃してくるズルズキンを見計らってはニヨロボンは自分の前に水流を立ち昇らせた。目の前に出現した天へと登る水流の壁にニヨロボンの姿を見失ったズルズキンの動きが止まった。

ズルズキンの動きが止まった事を確認したニヨロボンは水の壁を突っ切ると、呆然と立ち尽くしているズルズキンにしがみついた。

ズルズキン「ズッ!!？」

身体を自由を奪われたズルズキン。そのままニヨロボンはすぐに攻撃の体勢へと切り替えた。

シバ「行けっ!【じごくぐるま】だ!!？」

ズルズキンにしがみついたまま前転へと高速回転をさせたニヨロボンはそのまま自分ごと地面へズルズキンを叩きつけた。

ズルズキン「ズッキイイイ!!!」

リーリエ「ズルズキン!!!」

悪タイプも備え持つズルズキンには効果は抜群だった。攻撃を決めたニヨロボンはそのままズルズキンを後方へと投げ飛ばした。しかし、負けじとズルズキンは再び地面へと叩きつけられる前に体勢を立て直すと、ニヨロボンに向かって【あくのはどう】を

放った。

ニヨロボン「ニヨロロ!!?」

ズルズキンの技を受けたニヨロボンは後方へと押し戻された。技が決まったのを見たズルズキンは高くジャンプすると、今度は右膝にパワーを貯め始めた。

シバ「躲せ!!!」

ズルズキンの攻撃をニヨロボンはシバの指示のお陰ですぐに躲す事が出来た。

ズルズキン「ズキイ!!!」

リーリエ「ズルズキン!!!」

【とびひざげり】が躲された事により自身にダメージが入ってしまったズルズキンはその場で怯んでしまった。

シバ「「れいとうビーム」だ!!?」

リーリエ「「あくのはどう」です!!?」

ニヨロボンが繰り出した【れいとうビーム】を見てすぐに指示を出したリーリエであつたが間に合わず、攻撃を受けたズルズキンはそのまま凍りついてしまった。

シバ「決めるぞ!【きあいパンチ】!!?」

拳を高く築き上げたニヨロボンはそのまま精神を研ぎ澄ませた。氷状態で動けない

ズルズキンから攻撃される事なく十分なパワー貯めたニョロボンはその拳をズルズキンへと放った。

ズルズキン「ズツキイイイ!!!」

そのパワーに氷が割れ、ズルズキンは後方へと吹き飛ばされるとそのまま岩壁に身体を叩きつけられた。

ズルズキン「ズルツ…」

ズルズキンはダメージで負った身体を引きずりながら、対戦相手のニョロボンの方へと歩いて行く。そんなズルズキンを止めようとするリーリエであったが、殺気を漂わせるその表情に畏怖してしまい、声を出せなかった。

リーリエ（何で…わたくし…まだ貴方に認められてないの?…:…:貴方は今…何を考えるの?）

今のズルズキンは目の前のニョロボンを倒す事にしか頭に入っていない。だんだんと怒りが立ち昇っていくその時、予想だにしていなかった事態になってしまった。

リーリエ「あっ!!!」

リーリエの目に移ったのはズルズキンを覆っている黒い靄だった。

ユーゴ「まさか!ダークオーラ!!!」

サトシ「逃げろ!リーリエ!!!」

ピカチュウ「ピカチュウ!!?」

シロン「コーン!!?」

異変に気付き、スカウターで確認したサトシとユージはすぐにリーリエの方へと走って行った。リーリエはというと、あまりの事態に整理が出来ず此方に近づいてくるズルズキンを呆然と見ているしか出来なかった。

しかし、ニョロボンとの戦いで負ったダメージが身体中を回りきったのか。黒いオーラが晴れると、ズルズキンはその場で気絶してしまった。

リーリエ「ズルズキン!!!」

シロン「コーン!!?」

倒れたズルズキンを見て我に返ったリーリエは急いでズルズキンの元へと走り出した。

~~~~~

スイレン「サトシとマオちゃんは…リーリエの側に居てあげて…」

サトシ「ああ…」

マオ「うん」

スイレン「行こう！アシマリ！ナギサ！」

スイレンを始めとした一同は目を覚ましたズルズキンの為に食べ物や水と必要な物を探しに出かけた。あれからズルズキンはバトルの疲れもあってかグツスリと眠っていた。

だが、リーリエは混乱とショックが大きい所為で下を向いたまま一言も喋らなくなってしまった。そんなリーリエにサトシとマオも苦しくなった。

しかしこうなった以上は事実をリーリエの口から聞かないといけなくなる。ユーゴはサトシ達に軽く合図を送ると、リーリエの元へと向かった。

ユーゴ「ダークポケモン…だったのか？」

リーリエ「もう普通に一緒にいましたし…もう…だ…大丈夫かと…」

ユーゴ「済まない。責めている訳ではないんだ」

リーリエ「いいえ。黙っていたわたくしにも責任があります」

その後はみんなが戻ってくるまで沈黙が続いた。ただズルズキンの寝息だけが静か

に聞こえていた。気持ちよさそうに寝ている様子からズルズキンの容体は少しずつ回復に向かっている事が分かって安心した。

サトシ「気持ちよさそうに寝てるな」

リーリエ「はい」

抜けたような返事と一緒にリーリエは顔を伏せたまま口を開いた。

リーリエ「ズルズキンを：ハンサムさんに預けようと思います」

カキ「なあっ!!!」

マオ「どうして!」

リーリエの発言に一同は声をあげた。ズルズキンと真つ直ぐに向き合って行くリーリエの姿を見てきたため驚くのも無理はなかった。どんなに軽蔑の目を向けられても無視をされても、トレーナーとして諦めたりしなかったからだ。

みんなの視線が集まっている事に感じていたが、それでもリーリエは顔を上げなかった。

リーリエ「旅を通して行けばズルズキンと心を通わせる時がいつか来るのだと信じてここまで来ました。ですが、それは軽率な考えだったのです。そもそも人間に悪用されて戦闘兵器として扱わされたズルズキンがわたくし達、人間と向き合おうだなんて、そんな簡単な事ではなかったんです。ちゃんと治療を受けて元の生活に戻してあげるこ

との方がズルズキンにとって一番良かった選択だったのかもしれない

自分の未熟さにリーリエの目からは大粒の涙が溢れて出てきた。弱音を吐かないと決意した矢先、また自分の弱さを皆の前で見せてしまったためかさらに深く顔を埋めてしまった。悔しさに体を震わせるリーリエに掛ける言葉が見つからず、マオ達も意気消沈していた。しかしそんな中、サトシとデントはゆっくりと口を開いた。サトシはリーリエの肩に手を置くと優しく微笑みかけた。

サトシ「そうかな。俺は短い間だったけど、ズルズキンはリーリエの事を一ミリも信頼を寄せていないとは思わなかったぜ！」

デント「うん！ポケモンソムリエとして僕もサトシと同じ意見かな！確かにリーリエとは距離は取っていたかも知れど、一度も目は離さなかった事はなかっただろ!!？」

二人の言葉にゆっくりと顔を上げたリーリエ。悲しげな表情を浮かべるリーリエにサトシとデントは優しく微笑んでいた。

デント「無愛想に見えていたけど、ズルズキンもリーリエとは一体どんなトレーナーなのか!?!知りたかったじゃないのかな！」

マオ「確かに：リーリエが作ってくれたポケモンフーズ。一度も残したりしていなかったもんね」

信頼は微かだが寄せられていた!?!二人の言葉にリーリエはゆっくりズルズキンの

方へと顔を向けた。ディグダの穴の時は相手のルンパツパ達の喧嘩を買ったように見えたが、本当は後ろにいたリーリエ達を守ったのかもしれない。真実がわからないモヤモヤとした気持ちが悪化する中、ユーゴもゆっくりと口を開いた。

ユーゴ「俺のガブリアスも：フカマルの時は全然俺には懐いてくれなかったんだ」

マーマネ「え!? そんな感じには見えないのに」

その言葉にサトシ達はユーゴの方へと視線が集まった。

さっきのシバとのバトルでの二人の息のあったコンビネーションを見る限りではそうとは思えないが、驚く一同の前にユーゴはゆっくりガブリアスの頭を撫でた。

ユーゴ「こいつは俺より前のトレーナーに捨てられていてな。そのせいで俺たち人間の事を信じられなくなってしまったんだ。ゲットしたばかりの時は俺に対しては敵意むき出しで、あちこち噛まれたもんだよ!」

ユーゴ「だけど!俺も負けずに何度も何度も話しかけたりしては、仲良くなるために色々奮闘したんだ。そして一緒に特訓をして、その前のトレーナーにリベンジを果たせた事でこいつとやっと本当の仲間になる事が出来たんだ。あの時、初めて俺に向かって嬉しそうに飛びついてきたその瞬間は今でも覚えているよ!」

マフオクシー「フオクシー!!?」

ガブリアス「ガアブ!!？」

ユーゴ「だから！リーリエも今までズルズキンと向き合っていたその時間は決して無駄ではなかったはずだ。そうやって紡いできた想いはちゃんとズルズキンにも届いているはずだよ！」

ユーゴの話を聞いたリーリエは滲んだ涙を拭いながら笑い始めた。いつも通りの笑顔を見せたリーリエにサトシ達は一安心した。

するとその直後、地面が大きく揺れ出すと、リーリエ達の目の前に大きな穴掘りドリルを携えた大きなメカが現れた。

ユーゴ「一体なんなんだ!?!？」

お決まりのセリフが流れた所でコックピットからロケット団が姿を現した。

ヤマト「なんだかんだと聞かれたら」

コサブロウ「答えないのが普通だが」

ニヤース『まあ！特別に答えてやるニヤ』

ヤマト「地球の破壊を防ぐため」

コサブロウ「地球の平和を守るため」

ヤマト「愛と切実な悪を貫く」

コサブロウ「キュートでお茶目な敵役」

ヤマト「ヤマト！」

コサブロウ「コサブロウ！」

ニヤース『ニヤース！』

ヤマト「宇宙を駆ける我らロケット団には」

コサブロウ「シヨツキングピンク桃色の明日が待ってるぜ」

ニヤース『ニヤーんてな！』

ツボツボ「ボツツ!!？」

セリフを言い終えたロケット団は自信ありげにリーリエ達を見下ろした。そのメンバ―にアローラニヤースも加入している事にピカチュウとシロンも毛並みを逆立て警戒している。

サトシ「ロケット団!!!」

ヤマト「はいはい！そんなわけで！」

コサブロウ「今度こそお前らのポケモンは頂くぜ！」

と、ロケット団のメカからマジックハンドが飛び出すと、そのまま近くで寝ているズルズキンに向けて襲いにかかった。

ズルズキン「ズルツ!!!」

リーリエ「ズルズキン!!!」

サトシ「リーリエ!!!」

ズルズキンを守ろうと飛び出したリーリエもまたマジックハンドに捕まってしまい、そのままズルズキンと一緒にメカの中へと引きずり込まれてしまった。

ニヤース『おまけも付いてきたニヤ!!?』

ヤマト「まあいいわ! 一体だけでも手に入った訳だし、欲張らずにひとまずここは撤収よ!」

コサブロウ「ラジャ!」

ズルズキンの捕獲を確認したロケット団は全速前進でその場を立ち去ろうとサトシ達に背を向けた。追いついて来れないようにとロケット団は平地でなく岩壁を登って逃げて行った。

ロトム『まっ…待つロト!!!』

岩壁を登って行かれたら追いつけないとみたロケット団であったが、それに有効なポケモンをサトシは手持ちに入れていた。そのポケモンが入ったモンスターボールを手にしたサトシはすぐに解き放った。

サトシ「ドダイトス! 君に決めた!!!」

ドダイトス「ドオダア!!?」

歩く大陸と語られた、たいりくポケモン。

サトシがシンオウ地方で仲間にしたポケモンだ。モンスターボールから放たれると、サトシはすぐにドダイトスの背中の上へと飛び乗った。それに続いてシロンもドダイトスの背中へと移った。

サトシ「ドダイトス！【ロッククライム】でロケット団のメカを追ってくれ！」
ドダイトス「ドオダ!!？」

4本足の鋭い爪を硬い岩へとめりこませると、ドダイトスはサトシの指示通りにロケット団のメカの方へと身体を向けると、地響きを立てながら岩壁を登り始めた。

リーリエ「大丈夫ですか!?ズルズキン！」
ズルズキン「ズルツ…」

暗闇に目が慣れてきたリーリエはズルズキンに目立った外傷が無いことを確認した後、自分達の状況を確認しようと辺りを見渡した。太腿から伝わる冷たい肌触りから鉄製のカプセルに閉じ込められている事が分かったが、その先どうすれば良いか悩んでしまう。

すると方法を考えているリーリエを置いて脱出を試みようとカプセルに向かつてズルズキンは「からてチョップ」を繰り返した。しかし頑丈なカプセルにヒビの一つも付けれないままズルズキンはその場で膝をついてしまった。

リーリエ「大丈夫！ここはわたくし達に任せて下さい！」

まだ回復仕切っていないズルズキンを休ませたりーリエは二つのモンスターボールを手を取った。

りーリエ「ヒノアラシ！ゼニガメ！お願い致します！」

ヒノアラシ「ヒノツ！！？」

ゼニガメ「ゼニツ！！？」

りーリエ「ヒノアラシは「かえんほうしゃ」！！？ゼニガメは「みずてっぽう」！！？」
出てきた二体はりーリエの指示通り、カプセルに向かって交互に技を繰り出し浴びさせた。ポケモン達を信じて指示を繰り返すりーリエと主人のピンチを助けるべく奮闘するポケモン達。そんな彼らの後ろ姿をズルズキンは目を逸らさずジッと見つめていた。

ヤマト「これはうまく行ったわね！」

コサブロウ「今度こそ俺たちの勝利だな！」

ニヤース『いや：何かが近づいてくるニヤ！！？』

作戦が成功し逃げ切ったと有頂天になっているロケット団であったが、何かに気づいたニヤースの一言に二人は振り返ってみた。

ニヤースの予感は的中していた。その後を巨体に似合わないスピードで追いかけてくるドダイトスの姿にロケット団はおもわず目を丸くしていた。

サトシ「待て！ロケット団!!! リーリエ達を返せ!!!」

シロン「コーン!!?」

ピカチュウ「ピカチュウ!!?」

ズルツグ「ズルウ!!?」

ロトム『止まるロト!!!』

ヤマト「本当にしつこいわね!」

追つて来るサトシ達を追い払おうと、コックピットから身体を乗り出したコサブロウは攻撃を仕掛けた。

コサブロウ「やれツボツボ!【ヘドロばくだん】だ!!?」

ツボツボ「ボツツ!!?」

サトシ「ドダイドス!【エナジーボール】だ!!?」

ドダイドス「ダア!!?」

コサンジ「なら【ジャイロボール】だ!!?」

サトシ「ズルツク!【ずつき】で迎え撃て!!?」

追いかけてくるサトシ達に向かって放たれたツボツボの攻撃をすぐにドダイトスとズルツクはそれぞれの技をぶつけて相殺させた。それでもロケット団は何とかドダイトスの猛威を振り払おうと、怯まずにそのまま攻撃を続けた。

しかし、サトシ達ばかり気にしてしまった事により、ロケット団は前方からのもう一組のチームに気づけなかった。

デント「マイビンテージ！イワパレス!!!」

イワパレス「イワア!!？」

先回りする事が出来たデント達もそれぞれのポケモン達を前に出して身構えていた。まずはメカを止めるために、デントはイワパレスをモンスターボールから繰り出した。

デント「イワパレス！あのメカを押しさえるんだ！」

イワパレス「イワア!!？」

イワパレスは二本の大きなハサミを使って走ってくるメカを受け止めた。

コサブロウ「うおおお!!!」

ニヤース『なら！このまま押し倒してやるニヤ!!？』

メカを止められた事に気付いたニヤースはアクセルレバーを全開にしてメカの走行力を上げたが、四角い形にくり抜かれた巨大な岩石ブロックを背中に乗せて歩いているイワパレスの脚力を前には歯が立たなかった。

ヤマト「何とかしなさいよ！ニヤース！」

ニヤース『ポケモン使いが荒い奴ニヤ!!？』

操縦をヤマトに変わったニヤースはコックピットから顔を出すと、イワパレスに向

かつて「10万ボルト」を放った。

マーマネ「トゲデマル！行っけー!!!」

トゲデマル「モギユ!!？」

その電撃を飛び出したトゲデマルが《ひらいしん》により吸収し、イワパレスを守った。

カキ「バクガメス！お前も行け！」

バクガメス「ガアメ!!？」

さらにバクガメスの増援にやりロケット団のメカはすっかり動きを止められてしまった。

ヤマト「ちよこまかと鬱陶しいわね！」

コサブロウ「なんて！しつこい奴らだ！」

ニヤース『なんか変な音が聞こえないかニヤ!?!?』

まるで煎餅を齧るような鈍い音が響いている事に気づいたロケット団は辺りを見渡した。その音がリーリエを捕らえた鉄製のカプセルから聞こえた事に一齐に振り返ると、予想だにしない事が起きていた。熱と冷気を交互に与えた事により伸縮と膨張を繰り返した鉄壁には大きな亀裂が入っていた。それを確認したリーリエはキモリをモンスターボールから出した。

キモリ「キャモ!!？」

リーリエ「キモリ!はたっ…」

ズルズキン「ズルツ!!？」

キモリに指示を送ると一緒にズルズキンもリーリエの前へと飛び出した。キモリに軽く相槌を立てると、キモリもゆっくり頷いた。ズルズキンも協力してくれる事を悟った。リーリエは同時に指示を送った。

リーリエ「キモリ【はたく】攻撃!ズルズキン【からてチョップ】です!」

キモリ「キャモ!!？」

ズルズキン「ズキイ!!？」

ロケット団「なあ!何い!!!」

二体の一撃によりカプセル全体に一気にヒビが入った。カプセルを粉々に割ることが出来た。リーリエ達は脱出を図る事に成功した。

リーリエ「やりましたね!みなさん!ズルズキンもありがとう!」

ヒノアラシ「ヒノツ!!？」

ゼニガメ「ゼニツ!!？」

キモリ「キャモ!!？」

ズルズキン「……………」

突然お礼を言われたズルズキンはどう返せば良いか分からず思わず目を丸くしてしまった。その後、一斉に抱きつくヒノアラシとゼニガメをリーリエは優しく受け止める。とその光景を見ながらキモリは一息つくようにして軽く腕組みをして微笑んでいた。楽しそうにポケモン達に愛情を向けているリーリエの姿にズルズキンの口元が一瞬だけ緩んだようにも見えた。

ヤマト「やつてくれたわね！出てきなさいヘルガー！【かえんほうしゃ】!!?」

ヘルガー「へエル!!?」

作戦が破られた事に逆上したロケット団の攻撃がリーリエ達を襲った。

ズルズキン「ズキイ!!!」

リーリエ「ズルズキン!!!」

リーリエ達に向けられたヘルガーの火炎放射をズルズキンは身を呈して飛び出すと、そのまま技を受け、後方へと吹き飛ばされてしまった。

さらに岩壁に強く身体を打ち付けられた事により、シバ戦でのダメージの所為もあってか、その場で蹲ってしまった。

ズルズキン「ズツ…ズキイ」

身体中に走るダメージに耐えながらなんとか立ち上がろうと奮起するズルズキンの様子はまたもや、だんだんと薄暗いものへと変わっていく。

ヤマト「何なのよあれ？」

コサブロウ「何だか……」

ニヤース『様子が変だニヤ？』

ヘルガー「ヘエル……」

ツボツボ「ボツツ……」

ロケツト団の目には見えないが、リーリエにはそれがまたハッキリと目に焼き付いていた。

カキ「まさか……またか！」

マオ「逃げて！リーリエ！」

再びダークオーラを見に纏わせたズルズキンは充血した両目をリーリエ達に見開きながらゆっくりとこちらに向かって歩いてきた。様子が違うズルズキンにキモリ達はリーリエを守るようにして前へと出た。攻撃の準備に入るキモリ達を見たリーリエは皆に止めるように伝えた。

リーリエ「みんな！待ってください！」

リーリエの声を聞いたキモリ達は攻撃態勢を止める。その後、リーリエは逃げるよう呼び止めるマオ達の声を振り切り、一人でズルズキンの方へと歩んで行く。

リーリエ「わたくしは……」

まだズルズキンの気持ちをちゃんと理解してあげられてないかもしれないし、お互いの信頼を結ぶのにもまだまだまだ時間がかかるかもしれない。それでも何度時間が経っても、差し伸べるこの手を引つ込めようとはしない事を決めた。

落ち着く気配のないズルズキンにリーリエは怯む事なく距離を詰めていく。離れた場所にいるサトシ達はその様子を固唾を飲んで見守るしかなかった。そしてリーリエは右手でズルズキンの頬に優しく手を置いた。

リーリエ「貴方を信じています！」

荒々しい唸り声が徐々に鳴り止むと、ズルズキンはゆっくりリーリエを見つめた。

そして…

ズルズキン「ズキイ!!？」

ニヤリと笑いながらリーリエに頷いた。血走ってる目はまだ引いてないが、リーリエにはいつものズルズキンに戻っている事に気づくとゆっくり微笑みかけた。

スカウター越しでその様子を見つめていたユーゴもゆっくりサトシ達に伝えた。

ユーゴ「リライブ成功だ！」

ダークオーラが消えた事によりズルズキンはロケット団を大きく威嚇した。

ズルズキン「ズツキイイ!!！」

雄叫びを上げながら身体中からパワーを解放させると、その声に反応するかのよう
に地響きが鳴り上がった。岩の破片がズルズキンの周りを浮上すると、ズルズキンは一
気に青白い光を放ちながらパワーを一気に解放した。

スイレ「見て！ズルズキンの様子が！」

デント「もしかして新しい技かい？」

デントの言った通りだ。すぐにロトムはスキャンして調べ始めた。

ロトム『ビビッ!!？あの技は「もろはのずつき」!!？最強のずつき技ロト!!？』

そして思いっきりジャンプをしたズルズキンは身体中から溢れるパワーをおでこに
集めると、その力をロケット団へと向けた。

ロケット団「えっ…えっ…えっ…」

肌を突き刺す攻撃エネルギーを前にロケット団は一気に消沈してしまった。

ズルズキン「ズキイ!!？」

ありつただけの力でロケット団のメカにぶつけたズルズキンはその衝撃波をメカの内部に流し込んだ。その力に耐えきれなかったメカはその場で大爆発を起こした。

コサブロウ「有り金を全部つき込んだというのに!!!」

ヤマト「新技なんてずるいわよ!!!」

ニヤース『結局いつも通りなのかニヤ!!!』

ロケット団「やな気持ちいい!!!」

ヘルガー「へエル〜!!!」

ツボツボ「ボツツ〜!!!」

キラツ!!!

マオ「リーリエ!」

スイレン「大丈夫!?？」

リーリエ「はーい！大丈夫です！」

シロン「コーン!!？」

リーリエ「シロン！御免なさい！心配をかけて！」

ロケット団を撃退したサトシ達はすぐにリーリエの元へと駆け寄った。

ロトム『だけど急に何で新しい技を覚えたロト!!？』

ユーゴ「おそらくズルズキンが本来、覚えていた技なんだと思うよ。ダーク技が消え去った事で本来覚えていた技を思い出す事が出来たんだらうね」

カキ「つまり！これでズルズキンは元のポケモンに戻ったわけだな！」

マーマネ「よかった…本当によかったああああ!!!」

マオ「もうっ！何でマーマネが泣いてるのよ！」

シバ「悪い奴らもズルズキンの頭突つきで月の彼方まで飛んだ訳だな！ワツハハハ!!!」

和やかなに談笑している中、ズルズキンは再びシバの元へと歩み寄った。それを見たリーリエも覚悟を決めると、ズルズキンの横へと並んだ。

リーリエ「シバさん！もう一度わたくし達とバトルしてくれませんか!？」

ズルズキン「ズキイ!!？」

そのままリーリエとズルズキンはゆっくりお辞儀をした。もう一度、シバにバトルを申し込んだリーリエ達にシバはまたズルズキンの方へと目をやった。そしてゆっくり

と微笑んだ。

シバ「いいだろ！」

リーリエ「ありがとうございます！やりますよズルズキン！」

ズルズキン「ズルツ!!？」

今まで彼女と心を通わせず自分の力を知らしめるために戦っていたズルズキン。それが初めて彼女と視線を交わした。その瞳は真つ直ぐ曇りなき眼であった。

~~~~~

ユーゴとシバが闘っていた場所に着くと、リーリエとシバは直ぐにバトルの準備に取り掛かった。リーリエの前へと出たズルズキンは両腕を大きく振り回しては闘争心を高めた。遠くでサトシ達が見届けてる中、リーリエはシバに一礼した。

シバ「その闘志に見込んで我が最強が相手だ！ウツハァー!!!」

二人の熱い心に胸が刺さったシバは中央のベルトに装着されていたハイパーボール

を取り出すと、大きく投げ入れた。

カイリキー「リイキ!!？」

現れたのは四本の腕を巧みに扱うカントーを代表とする格闘ポケモン、カイリキーがリーリエ達の前に立ちはだかった。

『カイリキー かいりきポケモン』

格闘タイプ

発達した4本の腕は2秒間に1000発のパンチを繰り出す事ができる。スーパーパワフルなパンチを喰らった者は地平線まで吹っ飛んで行ってしまおうという』

?リーリエVSシバ?

シバ! 「カイリキー! 「いわなだれ」だ!!？」

カイリキー「リキイ!!?」

先行を貫つたカイリキーは四本の拳を思いつきり地面に叩き込んだ。地響きと共に衝撃で吹き飛んだ無数の岩石が雨のようにズルズキンの頭上へと降り注いできた。

リーリエ「躲して下さい!」

ズルズキン「ズキイ!!?」

リーリエの声と共にズルズキンは鋭い反射神経とフットワークを使って見事、無数のカイリキーの「いわなだれ」を躲す事に成功した。

カキ「躲したぞ!!」

スイレン「ズルズキン!ちゃんとリーリエの指示を聞いてるよ!」

ロトム『ピピッ!ズルズキンのリーリエに対する信頼度は100%ロト!』

その変わりようにサトシ達の手も熱くなった。ようやくパートナーという関係になったリーリエとズルズキン。その姿にシバも嬉しそうに頷いた。

シバ「クロスチョップ!!?」

接近戦を得意とするカイリキーにとっては好都合であった。腕を前にクロスした状態で近づいてくるズルズキンを待ち構えた。

リーリエ「ズルズキン!それも…」

攻撃を仕掛けるカイリキーを見て、リーリエはズルズキンを後退させようと呼び止め

ようとしたが「いわなだれ」を躲しながらカイリキーへと向かうズルズキンはとても楽しそうにしていた。

リーリエ（自分のポケモンの気持ちを優先してあげる事もポケモントレーナーとしての役目です！）

真つ向勝負を望んでいるズルズキンの気持ちを優先したりリーリエはありつたけの声で攻撃の指示をズルズキンに送ったのだ。

リーリエ「ズルズキン！【からてチョップ】で向かい撃つのです!!？」  
ズルズキン「ズルツ!!？」

その言葉を待っていたように微笑むズルズキンはカイリキーの頭上を取ると、そのまま力一杯に手刀を振り下げた。

ズルズキンの渾身の一撃をカイリキーは受け止めた。両者の技がぶつかり合うと激しい火花を散らしながら互いを押し合い始めた。シバのエースとも言えるカイリキーの攻撃に負けじと劣らない様子にサトシ達は目を見開いて驚いていた。

リーリエ「次はカイリキーの足元に向かって【あくのはどう】です!!？」

次の指示を聞いたズルズキンはカイリキーの腕を振り払うと、一歩下がってから【あくのはどう】を放った。

カイリキー「リキイ…」

一歩手前に撃ち込められたズルズキンの攻撃は激しい砂埃と黒い靄を撒き上げてはカイリキークの視界を奪った。姿を見失ったカイリキークは慌ててズルズキンの影を探し始めた。

だが、気配に気づき空中へとジャンプしていたズルズキンを見つけたものの、もう膝小僧に攻撃エネルギーを貯めていたズルズキンはカイリキークに向かって降下した。

リーリエ「今です！【とびひざげり】!!？」

ズルズキン「ズツ!!？」

カイリキーク「リキイ!!」

【あくのはどう】を目くらましに使って、【とびひざげり】を確実に命中させる作戦は成功した。隙をつく事が出来たズルズキンの技はカイリキークの腹部へと命中した。昨日とは違い技を当てる事が出来た事にズルズキンの顔からは笑みが零れた。

シバ「カイリキーク！【バレットパンチ】だ!!？」

カイリキーク「リキイ!!？」

リーリエ「前の皮を伸ばして受け止めて下さい！」

ズルズキン「ズキイ!!？」

シバの気迫ある声に反応したカイリキークはその場で踏ん張るとすぐに攻撃を仕掛ける。切り替えの早さに驚くリーリエであったが、ズルズキンの性質を利用した防御指令

で何とかカイリキーの攻撃を防ぐ事が出来た。

サトシ「おお！いいぞ！」

ズルツク「ズルツ!!？」

リーリエの機転のお陰で難を逃れたかに見えたが、それだけで四天王のポケモンの勢いを止める事は出来なかった。

シバ「だが！カイリキーには4本の腕がある事を忘れるな！」

カイリキー「リキイ!!？」

直ぐに次の攻撃の一手を指示した通りにカイリキーはもう二本の腕でズルズキンに攻撃を与えた。

ズルズキン「ズキイ!!!」

後方に飛ばされたズルズキンは何とか地に足をつけて踏ん張った。今の一撃を耐える事が出来たズルズキンは踏ん張りながら頭部に攻撃エネルギーを集中させ始めた。

リーリエ「ズルズキン！【もろはのずつき】!!？」

ズルズキン「ズルツ!!!」

この一撃に全てを賭ける気持ちで指示を繰り返すリーリエ。そしてそれに応えるように声を上げるズルズキンは一気にパワーを解放させた。地響きを立てながらカイリキーに向かって地面を蹴り上げた。

シバ「魂を込めろ!!!」〔ぼくれつパンチ〕だ!!?」

カイリキー「リイキ!!!」

二人の覚悟をズルズキンの攻撃エネルギーに載せ、それを肌で感じ取ったシバはその闘志に見合った技でズルズキンの猛攻に立ち向かう事にした。それはカイリキーも同じだ。全ての拳にパワーを貯め始めると、ズルズキンが近づいてきたその瞬間に全てを力をぶつけた。互いの技がぶつかり合ったと同時にその衝撃波は周りにいる人達に襲いかかった。砂埃が目に入らないよう飛ばされないように堪えるリーリエはその決着がつくまで目を離すことはなかった。

地響きがおさまると二体はその場で睨み合うように立ち尽くしていた。そして、一体のポケモンの膝が地に着くと、その場で倒れてしまった。

ユーゴ「ズルズキン戦闘不能!カイリキーの勝ち!よって勝者、四天王のシバ!」

勝負が決したと同時にリーリエは自分の肩にズルズキンの腕を回した。起き上がるのと一緒に目を覚ましたズルズキンはリーリエの方へと目をやった。

リーリエ「大丈夫でしたか!ズルズキン!」

シロン「コン!!?」

ズルズキン「ズキィ…」

リーリエ「負けてしまいました、この初陣はわたくしと貴方がさらに強くなる大き

な一歩になったと思います。なにより、わたくしは貴方と本当のバトルが出来て凄く嬉しいです！」

リーリエの満足げな笑顔にズルズキンはゆっくりと頷いた。その顔もまた満足げであつた。

サトシ「二人とも！息が合つた最高のバトルだつたぞ！」

デント「うん！互いを信じるフレイバーが二人の絆をさらに成長させたんだね！」

その言葉にリーリエは応援してくれたみんなに向けて笑顔で返した。ズルズキンと蓄積してきた時間は無駄ではなかつた事が示された事にサトシ達も仄々とした。

~~~~~

シバ「ここを降りればポケモンセンターが見える！今日はそこで休むと良い！」

日が暮れる前に峠を降りる事が出来たリーリエ達はシバの案内のお陰で今日中に着

く事が出来そうだな。そんな中、身体が疼いてしょうがない様子でいるリーリエとズルズキンを不思議そうにマオは見つめていた。

マオ「どうしたの？リーリエ」

リーリエ「なんだか！先程のバトルでの熱が冷めないせいなのか分かりませんが、身体がともうずうずしているのです！」

ズルズキン「ズキイ!!」

リーリエ「さあ！行きましようズルズキン！ポケモンセンターに向かって競争です！」

ズルズキン「ズキイ!!？」

と：変なスイッチが入ってしまったリーリエはズルズキンと一緒にポケモンセンターに向かって走り出した。その様子を楽しそうにシロンとデデンネも後を追って行った。

マオ「ちよつと待ってよ！リーリエ!!」

スイレン「変なスイッチ入っちゃった！」

デント「これは中々暑いフレイバーだね！」

サトシ「おもしれ！俺も付き合うぜ！」

カキ「よし！俺たちも負けられないぞ！バクガメス！ガラガラ！」

マーマネ「ええええ!!!ちよつと!待つてよ!置いていかないでく!!!」
シバとユーゴと別れたサトシ達もリーリエを追って走り出した。

長い長い旅の中でようやくズルズキンと心を通わせる事が出来たリーリエ。今後の二人の活躍に目が離せないであろう。

第四十四話 どんどん行くよ!ドンバトル ①

クチバシテイへ目指しているリーリエ達にカノンからの連絡を受け取っていた。どうやらクチバシテイの近くの街でポケモンのバトル大会が開かれるという内容であり、その話を聞いたリーリエ達は腕試しも兼ねて参加してみる事にした。

最近、公式バトルをやっていたサトシとカキはバトルしたい欲に飢えに飢えている状態もあって、開催場所が見えてくるなり一目散に走り出していった。その跡を追うようにして待ち合わせの場へと向かっていたリーリエ達はサトルとソウタと一緒にいるカノン達と合流したのであった。

カノン「リーリエ! みんな! こっち! こっち♪!!」

マオ「みんな、久しぶりだね!」

スイレン「あれからジム戦の方はどう?」

カノン「みんな順調よ! サトルはここに来る前に四つ目を手に入れたんだよね!」

サトル「うん!」

そう言うのと、サトルのバッジケースにはその四つ目となるピンクバッジが光り輝いていた。

マーマネ「おめでとう！サトル！」

サトル「うん！ありがとう！」

サトシ「ピンクバツジって事はセキチクジムか！」

ソウタ「そうなんですよ！まあ、あのジムならサトルでも楽勝だろうな！」

リーリエ（楽勝……？）

バトル大会が開催されるスタジアムには大勢の人達が集まっていた。その半数以上は観覧希望の人達で埋め尽くされており、参加者はリーリエを除いてあまりいないみたいだ。何故なら、この大会は余り知名度が無いようである。突発的に開かれる事も多いらしく、カノンもリーリエに連絡入れたその日に知ったぐらいであったからだ。しかしそんな中、かつての旅を思い出すかのようにサトシとピカチュウは目をキラキラさせながら会場を見つめていた。

サトシ「ドン・ジョージさんか！懐かしいな〜！」

ピカチュウ「ピカチュウ!!？」

デント「今はイッシュだけでなく、定期的に他の地方でも開催したりしてるみたいだね！」

そうこの大会はサトシがイッシュ地方を旅してきた時に毎度の腕試しとして良く参加していたバトル大会！バトル施設のオーナー、ドン・ジョージ主催のドンバトルで

あったのだ。思い出がフラツシユバツクし、イツシユで出会った仲間たちの顔が流れ、懐かしさに物思いに更けていると、何かを感じ取ったピカチュウは辺りを見渡し始めた。

サトシ「おい!どうしたピカチュウ!!?」

ピカチュウ「ピツカ!!?」

何かの気配に気付いたピカチュウは走り出すと、その跡を追ってサトシも走りだした。人混みを抜け、その場で立ち止まったピカチュウの前にはルカリオの姿があった。

ルカリオ「リオツ!!?」

ピカチュウ「ピカチュウ!!?」

ピカチュウに気づいたルカリオは穏やかな笑顔を向けた。するとピカチュウは少し驚いた表情でルカリオに声を掛けると、尻尾を使ってルカリオとハイタッチを交わした。

サトシ「このルカリオ…まさか」

まるで昔の友達と再会したかのように喜んでいる二体の様子。そしてルカリオから感じる波動。それはサトシの頭からつま先までと全身を駆け巡った。脳裏によぎるイツシユリーグでのある試合。確信に変わったサトシはルカリオの主の名前を上げようとしたと同時にオレンジ色のバンダナを被った少年がサトシの元へと駆け寄って来

た。

コテツ「おおお!!!サトシじゃんか！」

サトシ「コテツ！やっぱりお前か！」

サトシの元へと着いたコテツはそのままサトシと拳を合わせてグータッチを交わした。それに気づいたデントも二人の元へと急いだ

デント「久しぶりだね！コテツ！」

コテツ「うお！デントも久しぶりじゃん！」

デントに気づいたコテツは大の字に飛び跳ね、再開の喜びを身体を使って大きく表していた。

コテツ「こんな所で会えるなんてなあ！つまりサトシもホウエンリーグに出場するって訳だな！」

サトシ「ホウエン……リーグ？」

あれ……？と首を傾げるサトシにコテツも同じようにして首を傾げた。もしやと思つたデントは苦笑しながらコテツに問いかけた。

デント「コテツ……？ここは何処だか分かるかい？」

コテツ「えっ……？ここ……？……ホウエン地方だろ？」

サトシ「何言つてんだよ！ここはカントー地方だよ！」

デント「君も相変わらずそそっかしいねベル…」

ベル「えっ!?? 何で私の名前知ってるの?」

自分の名前を呼ばれた事に驚いたベルは顔を上げた。デントの顔が瞳に映ると、緑のベレー帽を被り直すと、満面の笑みでデントの両腕をとった。

ベル「あつ! デント君! それにコテツ君も!」

久しぶりの再会に心躍るベルはその両腕を上下に激しく振り上げた。デントは腕を持つていかれそうになりながらも、一旦ベルを落ち着かせると噴水広場へと指を指した。ベルは首を傾げながらその方角を見ると、その顔は一気に青ざめた。

ベル「うわあああ!!! サトシ君!!!」

サトシ「やつぱお前か…ベル…」

ピカチユウ「ピカチユウ…」

~~~~~

ベル「御免なさい! 御免なさい! 御免なさい! 御免なさい! 御免なさい! 御免なさい!

!」

サトシ「もういいよ…ベル」

濡れた身体を拭いているサトシに向かってベルは謝罪を連呼しながら何度も頭を下げていた。

サトシ「それにしてもベルも何でカントーに居るんだ?」

ベル「あつ!それはね!今はパパとママと旅行中なのよ!そしたら偶然ドン・ジョージさんの主催の大会が近くで開催されるからって聞いたから、慌てて来ちゃった!」

カントーに來た経緯を話した後、サトシの後ろにいるリーリエ達に気がつくとき大きく手を振って挨拶を交わした。そして、リーリエに抱き抱えられているシロンとその足元にいるデデンネに目が行くと、目をキラキラさせながら、猛スピードでリーリエの元へ駆け寄った。

ベル「うわあ!!!何?!?この子達!可愛い!!!」

お淑やかさうに見えてパワフルなベルにリーリエはきよとんとししながら言葉を失っていた。

ベル「ねえ!ねえ!この子と私のエンブオーと交換しない?」

リーリエ「え…ええと…」

ベル「だったら!シユバルゴは?それとも!」

リーリエ「いえいえ!シロンは交換に出しません!それとデデンネは…」

ベル「大丈夫!この子達に聞くから!」

リーリエ「えっ……えええ!!!」

ベル「ねえ貴方達！私のポケモンにならない!?!?」

シロン「コオオオン!!!」

デデンネ「デデデ!!!」

危機を感じたシロンとデデンネは咄嗟にそれぞれの技を浴びさせ、ベルをそのまま氷漬けにしてしまった。しかし、サトシ達は慌てること無く手持ちの炎タイプのポケモンを使ってベルを氷の中から救出した。この天真爛漫な性格にはいつも振り回されていたサトシとデント。別れてから全然変わっていない様子に頭を抱えるも、コテツ同様に変わらないその様子に安心する自分もいた。

???「おっ！何だかちよつとした同窓会って感じだな！」

また聞き覚えのある声にサトシとデントは振り返る。その先には赤毛でサトシ達よりも大柄な、ゼブライカに跨る一人の少年がいた。

ケニヤン「よお！元気にしてたか！サトシ！」

サトシ「ケニヤン！久しぶり！お前も元気にしてたか！」

ケニヤン「アクセントが違うけど……まあいいか！勿論だぜ！」

ピカチュウ「ピカチュウ!!?」

ゼブライカ「プロロ!!?」

ロトム『このポケモンは初めて手に入るデータロト!』

『ゼブライカ らいでんポケモン

電気タイプ

稲妻のような瞬発力を持ち全速力で走り出すと雷鳴が響き渡る。気性が激しく怒ると立髪から四方八方に電気を撃ちまくる』

ケニヤン「何だ…これ?」

サトシ「ロトム凶鑑さあ!気軽にロトムって呼んであげてよ!」

サトシとケニヤンが別れた後の事を話していると、その隣でピカチュウとゼブライカは互いの電気を浴びながら戯れあっていた。その電気に引き寄せられるようにしてトゲデマルも二体の輪の中へと入って行った。

ケニヤン「おお!なんだ…これもまた見ないポケモンだな!」

マーマネ「トゲデマルって言うんだ!宜しくね!」

トゲデマル「モギユユ!!?」

ケニヤン「おう!こいつはゼブライカ!俺の事もケニヤンって呼んでくれ!」

フレンドリーな性格もあって、ケニヤンとはすぐに打ち解けるには時間は掛からなかった。他のポケモン達も出してあげては、リーリエの他のポケモン達とも交流を交わっていた。

デント「トゲデマルも電気タイプのポケモンだからね!ケニヤンくんのゼブライカの立髪から流れる痺れるテイストに引き寄せられたみたいだね!」

ケニヤン「だから…アクセントが…」

そのソムリエに邪険に思った人物がデントへと近づいて行く。

???「カントーに行つてからも相変わらずダメダメなテイストね!アクラスソムリエとして、もっと真つ当に貫いた刺激的なフレイバーを醸し出せないのかしら」

デント「この声は…まさか…」

またしても聞き覚えのある挑発的な台詞。その目が捉えたのは特徴的な紫色のポプヘアーの少女であった。

カベルネ「ここであつたが百年目よ!デント!今度こそ貴方より私の方が上である事を証明してやるわ!」

そう言い残し、すぐさばこの場を後にした。どうやらデントにしか見向きもしなかつ

たのか、サトシ達もいる事には全く気付いていない様子だ。

カノン「凄く敵意むき出しだったよね…」

ソウタ「デントさんはあいつに何かしたのか?」

デント「さ…さあ…何でだろうね…」

それは当の本人が聞きたいのであろう。カベルネは思い込みの激しい性格の持ち主の事であつて、デントとの回想シーンではデントはまるで悪人のように語っていたといふ。しかし、難関であるソムリエの資格を短期間で所得するなど、努力家に置いては一目置かれている。ちなみにランクはCクラスであり、女性ソムリエの事はソムリエールと呼ばれている。

???「あんた達がいる、なんでアイリスが居ないわけよ!」

もうお約束なのか分からないが、またまた聞き覚えのある声がある方へと振り返る。そこにいたのはやはり、青緑色のタイツ型のワンピースにピンク色に近い赤髪のシヨートヘアを持つ少女がそこにいた。

サトシ「ラ! ラングレー!!!」

デント「君もカントーにきたのかい!?!」

ラングレー「私がカントーに居ようがこの大会に参加するかしないかはどうでもいいわ! それよりアイリスよ! アイリスは何処にいるわけ!」

この気迫にアイリス以外のトレーナーには眼中向けない勇ましいいき。押されながらも答える。

デント「アイリスとは昔にカントーで別れたんだ！サトシとはこの前、再会したばかりなんだよ」

ラングレー「そ…そうなんだ…」

サトシ・デント「……………」

ラングレー「まあ、いいわ！まだ未熟なままの彼奴に勝った所で勝った気にはなれないわ！立派なドラゴンマスターになるまで待つといてやる！」

敵意を出す、あの様子からアイリスと再会を僅かながら期待していたみたいだったようだ。そう言い残してラングレーもその場を去って行った。

マオ「アイリスって？」

サトシ「イツシュ地方を旅していたもう一人の仲間さあ！」

デント「彼女はドラゴンタイプのポケモンを極めたドラゴンマスターを目指して修行の旅を続けているんだ！」

聞き慣れない人物の名に反応したりリーリエ達にサトシは答えた。

デントからは一緒にジョウトへと向かったアイリスは到着すぐに別れて、ドラゴンジムのジムリーダーのイブキが住むフスベシティへと直ぐに向かったと言う。この広い

空の下で今もこうして夢に向かって走っているアイリスの事を浮かべると一段と気合が入る。両腕を伸ばして背伸びをし、ゆっくり目を開けるとまたも見慣れた人物の顔を確認した。

カメラを片手に旅の記録を収めている少年もサトシの存在に気付いた。しかし、サトシを見るなり顔を若干赤らめるとすぐにそっぽを向いてしまった。その様子にしかめ面になったサトシはその人物の名前を大きく叫んだ。

サトシ「おーい! シューティー!!!」

シューティー「……………」

サトシ「聞こえてないのか? おーい! シューティー!!!」

シューティー「……………」

サトシ「おーい! シュー……!」

シューティー「やめてくれ／＼／＼聞こえてる!」

どうやら大袈裟に自分の事を呼び止められた事が恥ずかしくなってそっぽを向いていたようだ。

ケニヤン「イツシュリーグ以来だな!」

デント「相変わらずトレーナー修業に勤しんでるようだね!」

シューティー「ポケモントレーナーとして強さを求めるならもつと各地を旅をして色

んなトレーナーと勝負する！基本ですよ！」

サトシ「シユーター！出るなら全力で相手になるぜ！」

シユーター「それは僕も同じさ！」

そう言つて和かに合図を交わしそのままサトシ達の元から離れて行つた。初めて出会つた時に見せた険悪な様子は無く、一人のライバルとして自分を見てくれた事にさらに闘志に火がついたようだ。

久しぶりのドンナマイトはサトシにとつてはリーリエ達を含めた、さらに成長してきたライバル達との波乱の闘いになる事は間違いないだろう。

~~~~~

今回のドンバトルのルールは二対一のシングルバトルとなっている。登録ポケモンの数は三体までと決まっていた。ここまで色々なポケモン達を仲間にしてきたリーリエにとつては悩みどころである。

リーリエ「選出は三体……どの子にしましょうか……」

受付にて出場ポケモンを記入する欄に手が止まっていた。ジムと違つて事前情報なしでの選抜。この経験はポケモンリーグに出場する前にやって置いて良かったと思う。

難しい顔で用紙と睨めっこしているリーリエにシロンはテーブルに乗り移るとその顔をマジマジと覗き込んだ。

シロン「コン!!?」

ピカチュウ「ピカチュウ!!?」

サトシ「勿論!ピカチュウには出てもらうさあ!」

リーリエ「シロンもですよ!」

互いの相棒のやる気を見て笑うリーリエは選抜するポケモンを選び終わると、管理人の案内でバトルフィールドへと通された。

~~~~~

長い通路を抜けると、大歓声と共にそこは白熱した光景が広がっていた。円を書くようにして出場者の登場を待ちわびていた観客達。その渦の中でスポットライトに照らされるトレーナー達。そして中央のモンスターボールがプリントされたバトルフィールド。試合前からこの場にいる全員のボルテージは一気に跳ね上がっていた。

タケミツ『今回の実況解説!テレビライモンのタケミツが務めさせて頂きます!』

さあ、カントー地方での開催！どうでしょうか。主催のドン・ジョージさん！」

ドン『イツシュ以外のポケモン達を見られる事にワクワクが止まらなかつたりする！』

タケミツ『それでは対戦の組み合わせを発表しましょう！』

大画面モニターには出場者の顔写真が一斉に並べられ、トランプのようにシャッフルされた。二人一組と組まれたカードを見て、各トレーナーはそれぞれの組みと顔を合わせた。目と目があったらポケモンバトル。その瞳に映ったトレーナーが第一試合の対戦相手だ。

第一試合 サトシVSコテツ

第二試合 スイレンVSラングレー

第三試合 リーリエVSベル

第四試合 シューティーVSカノン

第五試合 サトルVSデント

第六試合 マーマネVSソウタ

第七試合 マオVSケニヤン

第八試合 カキVSカベルネ

サトシ「第一試合目からコテツか!」

コテツ「早くもサトシとかよ!わくわくしてきた!!!」

ラングレー「悪いけど、きっちり勝たせて貰うから!」

スイレン「その言葉そのまま返してあげる!」

リーリエ「ベルさん！宜しくお願い…」

ベル「きゃあ！シロンちゃん！一緒に他の人のバトルを観ていきましょうよ！」

リーリエ「…します…」

カノン「宜しくね♪」

シューティー「イツシュ以外のポケモンの実力。見させて貰いますよ！」

デント「さてと！トレーナーとしての君の力量！しっかりとテイステイングさせて貰うよ！」

サトル「はい！宜しくお願いします！」

ソウタ「しゃあ！容赦しないからな！」

マーマネ「僕だつて負けないよ!」

ケニヤン「悪いけど!女の子だからって手加減はしないからな!」

マオ「大丈夫!そうして貰うつもりはないから!」

カベルネ「デント!私と当たる前に負けるんじゃないわよ!貴方を倒すのはこのカベルネよ!」

カキ「その前に対戦相手は俺なんだが…」

それぞれの意気込みを語った所で早くも第一試合が幕を開けようとしていた。

タケミツ『まずは第一試合!サトシ選手VSコテツ選手です!』

ドン『赤い帽子を被った少年とは久しぶりだったりする!』

名前を呼ばれたと同時に二人のトレーナーはそれぞれのトレーナーボックスへと入っていた。一人は赤い帽子を被り直し、もう一人はオレンジ色のバンドナを伸ばして自分の額にぶつける。気合を入れ直した二人はさらに意気込みをぶつけた。

サトシ「イツシユリーグでのリベンジマッチ!ここで果たさせて貰うぞコテツ!」

ピカチュウ「ピカチュウ!!？」

コテツ「ししっ！あれから俺たちもさらに強くなったんだ！覚悟しろよな！サトシ！」

ルカリオ「リオッ!!？」

審判「それでは第一試合！サトシ選手VSコテツ選手！試合開始！」

？サトシVSコテツ？

試合開始のコールが鳴ったと同時に二体のポケモンがバトルフィールドへと放たれた。

サトシ「俺はピカチュウ！君に決めた！」

ピカチュウ「ピカチュウ!!？」

コテツ「俺は勿論！ルカリオで勝負だ！」

ルカリオ「リオッ!!？」

フィールドに入ったピカチュウは頬の電気袋から電流を発し、それに対しルカリオは

群青色のオーラを発した。この二体はイツシユリーグでも対戦した事もあり、ピカチュウはそのリベンジに燃えている。そんなルカリオもピカチュウともう一度闘える事に笑みを浮かべていた。

タケミツ『ピカチュウとルカリオでのバトル!両選手の相棒同士のバトルとなりました!』

ドン『漲る闘志!解説席にいる私の所まで届いていたりする!』

熱の入った実況により観客達のボルテージもマックスになった。轟く歓声はサトシとコテツの心を燃やし二人の調子を上げていく。

コテツの闘志から溢れてる波動を感じたルカリオはバングルが取り付けられている右腕を天に向かって掲げた。

コテツ「最初から飛ばして行こうぜ!ルカリオ!」

ルカリオ「リオツ!!?」

サトシ「まさか!あれって!」

ルカリオの合図を見たコテツは同じようにキーストンを持っている右腕を天へと掲げた。共鳴した二つの石は光の線を繋ぎ合わせると、コテツからパワーを貰ったルカリオの身体は七色の虹のように光り輝き出した。

それを見て驚くサトシだったが、知らない間にさらに成長したコテツとルカリオと戦

えると解つた瞬間、その胸は高鳴り始めていた。

コテツ「ルカリオ！メガシンカだ!!!」

ひとまわり身体が大きくなつたルカリオはさつきよりも大きい波動パワーを身体中から解き放つていた。冷静沈着なイメージから爆発的な闘争本能を得たルカリオは全神経を全ピカチュウへと全集中した。

ケニヤン「ルカリオの姿が変わつたぞ！コテツのやつ！いつの間にあんか力を手に入れたんだ！」

ラングレー「噂で聞いたことがあるわ！あれがメガシンカなのね！」

カベルネ「ルカリオから感じてくるこのテイスト！さらに強い力を感じるわ！」

いきなりのメガシンカに驚く他の選手達であつたが、しかしそんな事で怯んだりするサトシのピカチュウではなかつた。メガルカリオを目の当たりにしたピカチュウの闘争心もさらに高まつていた。

サトシ「メガシンカかよ！凄えぜ！コテツ!!!」

コテツ「だろだろ♪凄えだろ！」

武者震いが起きたサトシは足を小刻みに踏み込んでいた。

ケニヤン「相変わらずだなサトシは……」

カキ「ああ！彼奴は相手が強ければ強いほど燃えるからな！」

「マオ「それに最初からメガシンカで来るなんてね!」

スイレン「うん…」

最初からパワー全開で向かう姿勢でいるコテツとルカリオ。さっきまでのお調子者とはまるで別人であった。言わずも何もコテツ超本気モードを目の当たりにしたりリー工達は息を飲んだ。

リーリエ「それだけコテツさんはサトシに本気つて事です!」

そしてすぐさま二体はそれぞれの主人が一発目に指示を出す前に同時に動き出した。それはもうこの技を指示をする事が分かっていたからだ。

サトシ「ピカチュウ!〔10万ボルト〕だ!!?」

ピカチュウ「ピカチュウ!!?」

コテツ「ルカリオ!〔はどうだん〕!!?」

ルカリオ「ルオ!!?」

タケミツ『両者の技は相殺された!パワーは互角のようだ!』

サトシ「攻めろ!〔でんこうせっか〕!!?」

爆煙が晴れた同時に、ピカチュウは光の速さでルカリオに向かって走り出した。

コテツ「ルカリオ!こっちは〔グロウパンチ〕で対抗だ!!?」

拳にパワーを貯めたルカリオはそのままピカチュウに向かって攻撃を仕掛けた。ル

カリオの攻撃に気づいていたが、ピカチュウはパワー勝負に応じるかのようにして、そのままルカリオに自分のパワーをぶつけた。またもや反動で吹き飛ばされた二体はその俊敏なスピードですぐに巻き返しに向かった。

コテツ「そのまま連続で『グロウパンチ』!!?」

サトシ「こっちは連続で『アイアンテール』だ!!?」

ピカチュウ「ピカアアア!!?」

ルカリオ「リオオオオ!!?」

続けてピカチュウは硬化させた尾で反撃を試みた。ルカリオももう一つの拳にも力を貯めると、そのままボクシングのような猛烈なラッシュを叩き込んだ。暫く両者の攻防が続くのだが、

ピカチュウ「ピツ!!」

攻撃が決まるたびに、ピカチュウの方が徐々にルカリオのパワーに押されている事に気づいた。

ロトム『『グロウパンチ』の効果でルカリオの攻撃力はどんどん上がっているロト!!?』

このまま打つかり合いあえば力負けしてしまうロト!!?』

ルカリオ「リオツ!!?」

ピカチュウ「ピツカア!!!」

ロトムの言った通り。力を増幅させたルカリオは更新の一撃が込めた右ストレートでピカチュウを後方へと吹き飛ばした。受け身が取れないピカチュウが壁に叩きつけられるのも時間の問題だ。しかし、機転をきかせたサトシはすぐにこの状況を対処した。

サトシ「ピカチュウ!後方に「エレキネット」!!?」

サトシの指示を聞いたピカチュウは電気エネルギーを尾を使って、自分の後方へと弾き飛ばした。壁に網目上に広がる電気のネットを貼り付けたピカチュウはそのネットに包まれると、そのままランポリンのようにしてルカリオに向かって勢いよく弾き飛ばされた。反発力によって数倍のスピードを手にしたピカチュウは目にも止まらぬ速さで、ルカリオの腹部に「アイアンテール」を決めた。

鋼タイプを持つルカリオには効果は薄いはずがスピードが乗った「アイアンテール」を受け止める事は出来ず、後方へと吹き飛ばされてしまった。

サトル「凄い!相手の攻撃を利用してのカウンター攻撃だなんて!」

デント「それに応えるピカチュウも流石だよ!今まで目にしてきたトレーナーの中でもサトシとピカチュウのコンビの強さは別格だ!」

サトシ「どうだよ!コテツ!」

コテツ「へえん!そんな事ぐらいで驚かねえよ!」

壁に叩きつけられたルカリオの様子を伺うコテツにルカリオは無事を知らせる。ルカリオはまだ動ける事を見越したコテツはすぐに指示を出した。

コテツ「ルカリオ! 【グロウパンチ】!!?」

再び【グロウパンチ】を発動させたルカリオ。それを見たピカチュウは前のめりになってルカリオの動きをしつかりと目で確認をする。いつ向かって来ていいように待っていたサトシとピカチュウであったが、ニヤリと笑みを浮かべたコテツは地面へと指差した。

コテツ「フィールドを利用しろ! 地面を叩き割れ!!!」

ルカリオ「リオツ!!?」

視線を下へと映したルカリオは思いつ切り地面を叩き割った。足が纏れそうになる程に揺れるその衝撃によって、岩の破片が空中へと舞い上がった。

コテツ「攻めろ!!!」

雨のようにフィールドに降り注ぐ雪崩にルカリオは岩の軌道を読みながら、ピカチュウに接近を図った。

サトシ「来るぞピカチュウ! 【10万ボルト】だ!!?」

ルカリオの動きを止めるべくピカチュウは電撃で対抗するも、降り注ぐ岩石がルカリオの身を守る壁となってしまう。

司会者『なんと!ピカチュウの攻撃が防がれてしまった!』

ドン『フィールドの地形を利用した見事な戦略だったりする!』

攻撃が通らないまま、安全に距離を詰めに来たルカリオにピカチュウはいったん後退する事にした。

コテツ「捕まえろ!」

ルカリオ「リオツ!!?」

しかし、尻尾を掴まれたピカチュウはそのままルカリオに捕まってしまった。

コテツ「ルカリオ!そのまま【ともえなげ】!!?」

ルカリオはピカチュウの身体をしっかりとホールドする。そのまま身体を丸めて後ろの方へと転がると、蹴り上げて頭越しに投げ入れた。

サトシ「それならピカチュウ!岩を足場にして飛び回れ!」

投げ技を喰らったピカチュウは岩石に身体が当たる直前に【アイアンテール】を使ってガードした。そのまま【でんこうせっか】に切り替えると、降り注ぐ岩場を足場にして飛び移るかにようにルカリオの周りを周回し始めた。作戦を逆手に取られたルカリオは必死にピカチュウの姿を捉えようとしている。

カキ「この咄嗟の判断力!流石だな!」

シユーター「相変わらず無茶苦茶な戦法を取るね…」

ピカチュウの高速移動にその姿を捕らえる事が出来ないルカリオに焦りが生まれる。このままではまずいと感じたコテツはバンドナを思いつ切り引つ張つた後、額に強く当たると何かを閃いたかのように、威勢の良い声を上げた。

コテツ「閃いた!!!ルカリオ!目で追うな!ピカチュウの波動を感じとれ!」

指示を聞いたルカリオもコテツの声に我に変えると、両目を閉じてピカチュウの波動を嗅ぎ分ける。ルカリオの性質を生かした機転だ。

コテツ「そこだ!〔はどうだん〕!!?」

全集中、波動の呼吸によりピカチュウの位置を捕らえたルカリオは〔はどうだん〕を打ち放つた。

サトシ「ピカチュウ!〔10万ボルト〕だ!!?」

立て直して来たルカリオにサトシは慌ててピカチュウに指示を送る。サトシの声に反応したピカチュウは踏み込んで、真上へと高くジャンプすると、電気袋にエネルギーを貯め始めた。しかし、先に攻撃を仕掛けたルカリオに間に合わず、ピカチュウに〔はどうだん〕が命中してしまった。

タケミツ『攻撃を決めたのはルカリオだ!!!』

ドン『いや!!!』

煙が晴れると、ダメージを引きずりながら何とか耐え凌いだピカチュウは〔10万ボ

ルト」をルカリオに放つ。

ピカチュウ「ピカチュウ!!!」

ルカリオ「リオオオオ!!!」

タケミツ『おっと!サトシ選手のピカチュウ!吹き飛ばされながらも攻撃を決めた!!!』

周りの岩石を粉碎しながら、ピカチュウの電撃はルカリオに命中した。しかし、パワーを一気に解放させた反動により着地に失敗したピカチュウは地面に叩きつけられてしまった。ルカリオもピカチュウの攻撃に思わず膝を落とすも、自身に流れる電撃を振り払って何とか耐える事ができた。

両者の猛攻に釣られて会場からは大きな歓声が鳴り響いた。

ルカリオ「リオツ!!?」

ピカチュウ「ピカチュウ!!?」

その声に元気を貰った二体は体勢を立て直した。両者の力を認め合っている二体は公式戦で再び対戦できた事に高揚していた。その感覚はもちろん。それぞれの主人にもしつかりと伝わっている。

サトシ「やるな!コテツ!」

コテツ「お前こそ!くっとう!!!すげえ楽しいぜ!」

コテツの声と共にルカリオは波動エネルギーを貯める構えを見せた。その姿にサトシとピカチュウも背を丸めて構え始めた。

コテツ「ルカリオ! 【はっどうだん】!!!」

会場の隅まで響き渡った声量にに応じて、ルカリオは身体中から波動エネルギーを放出させた。球体状に形成されていくエネルギーは掌に収まりきれない程に膨張していく。

マオ「大きい!!!」

カノン「あんな大きさ…防ぎきれないよ!」

リーリエ「いいえ…サトシとピカチュウなら」

誰から見ても為す術が無いと思えるこの状況下の中でサトシとピカチュウは笑っていた。これが二人の最後の一撃となる事を感じたサトシはZリングを前に翳した。

サトシ「行くぞ! ピカチュウ!」

ピカチュウ「ピツカア!!?」

マーマネ「サトシ達もZ技で迎え撃つきだ!」

電気Zの力を貰ったピカチュウはルカリオと同じように大きな電撃玉を形成し始めた。二体の攻撃エネルギーを受けて、会場は地響きを立てながら唸り始めた。解説席にいる人達も含めて、観戦席にいる人達は身体が吹き飛ばされないように椅子に必死にしがみついていた。

ピカチュウとルカリオもそのパワーに押し潰されそうに足が地面にめり込んで来ているような感じがした。エネルギーが限界まで跳ね上がった事を確認したサトシとコテツは同時に指示を送った。

サトシ「コテツ!!!受け取れ!!!これが俺たちの全力だ!!!」  
 ピカチュウ「!!!チュウウウウウウウウ!!!」  
 コテツ「打て!!!ルカリオ!!!」  
 ルカリオ「!!!リオオオオオオオ!!!」  
 「!!!!!!」  
 「!!!!!!」  
 「!!!!!!」

両者の攻撃は激しくぶつかり合い、そして混じり、激しい爆発と共に会場全体を震わせた。二体の安否を確かめるべくサトシとコテツは相棒の名を呼び続けた。煙が晴れたフィールドにはフラフラになりながらも立っている一体とその場で倒れている一体

の姿が見えた。勝敗が決したと分かった二人のトレーナーは歩き出した。そして、戦いを終えたその内の一匹は主人の肩に飛び乗り、もう一匹は主人の肩に捕まっていた。

審判 「ルカリオ戦闘不能！ピカチュウの勝ち！一回戦の勝者はサトシ選手！」

司会者 『ダイナミックなエキサイティングなバトルを制したのはサトシ選手だ!!!』

ドン 『これはもはや事実上の決勝戦だったりする！いい試合だった!!!』

勝負を終えたサトシとコテツは手を取り握手を交わした。

コテツ 「完敗だけサトシ！お前ら二人ともさらに強くなつたな！」

サトシ 「俺たちも受け取ったぜ！コテツとルカリオの本気をな！」

ピカチュウ 「ピカチュウ!!？」

ルカリオ 「リオツ!!？」

ピカチュウとルカリオも互いの健闘を称えて握手を交わした。お互いに全力を出し切ったのは二体の表情から読み取れる。そのまま両者は静かにフィールドを後にした。

~~~~~

第一試合の盛り上がりそのまま、早くも第二試合が始まろうとしていた。入場音楽と共に二人のトレーナーがフィールドへと歩き出した。

司会者『続けて第二試合! スイレン選手とラングレー選手の本バトルです!』

ドン『スイレン選手はアローラ地方出身のトレーナーであり、ラングレー選手はイツシユ地方出身のトレーナー! さて、どんなバトルを届けてくれるか見ものだったりする!』

アシマリとナギサと一緒にトレーナーボックスに立ったスイレンは深呼吸をした後、両頬を軽く叩いて気合を入れた。アローラに広がる夕風の穏やかな海に立っているかのように落ち着いていた。

スイレン「私たちもサトシ達に負けないバトルをしなくちゃね! よし! 行くよアシマリ」

アシマリをフィールドへと指示をしようとしたその時、そのアシマリを差し置いてナギサが飛び出して行った。

ナギサ「イブイ!!?」

スイレン「ナギサ……？」

ナギサはスイレンを見るなり、尻尾を振って猛烈にアピールをし出した。やる気は充分とみたスイレンはゆっくりと頷いた。

スイレン「分かった！アシマリごめんね！ここはナギサに行かせてあげて！」

アシマリ「アウ!!？」

ナギサのやる気を買ったスイレンに対してアシマリもご機嫌に手拍子をしながら承諾した。自分に決めてくれたナギサはそのまま対戦相手の方へと向いた。

ラングレー「出陣よ！バイバニラ！」

バイバニラ「バニイ!!？」

ソウタ「おっ？何だあのポケモン!!？」

サトル「バイバニラだよ！」

ソウタは徐に凶鑑を開いた。

『バイバニラ ブリザードポケモン

氷タイプ

大量の水を飲み込んで体の中で雪雲に変える。怒ると猛吹雪を巻き起こす』

ナギサに対してラングレーが出したのはソフトクリームのような形状をしたポケモン。バイバニラであった。

ラングレー「見覚えのあるポケモンで助かったわ!」

スイレン「私のナギサを甘く見ないでね!」

ナギサ「イブイ!!?」

バイバニラ「バイバニラ!!?」

審判「試合開始!」

?スイレンVSラングレー?

ラングレー「バイバニラ!まずは【あられ】だよ!!?」

バトル開始と同時にバイバニラはすぐに体内に含めた水分を使って雪雲を発生させた。その雪雲は他の雲を取り込む事によって、膨張した雲は空一面を暗くした。そして

気温は一気に下がりが雪が降り始めた。

タケミツ『フィールド上に雪が降り始めました!』

ドン『会場の皆さん! 風邪をひかないように気をつけるべし!』

その忠告通り会場の熱は一気にバイバニラの「あられ」によって下げられてしまった。フィールド外にも影響を及ぼしているバイバニラの力に早くもスイレンはその身を知る事となった。

スイレン「ナギサ! 『スピードスター』!!?」

ナギサ「イブイ!!?」

相手にペースを掴まれないようにスイレンは先に攻撃を仕掛ける事に決めた。高くジャンプしたナギサは大きな尻尾を振り回しながら、形成させた星形のエネルギー玉をバイバニラ目掛けて放った。

バイバニラ「バニイ!!?」

スイレン「よし! 命中した!」

ナギサ「イブイ!!?」

技を決める事が出来たスイレンとナギサであつたが、バイバニラは大した事がない感じで笑いながらその場で回り始めた。余裕そうな雰囲気漂わせるバイバニラを見てラングレーも指示を送った。

ラングレー「バイバナラ!【ふぶき】!!?」

バイバナラ「バニイ♪」

ナギサ「イブイ!!!」

天候によって技と命中率も格段にパワーアップした【ふぶき】がナギサに襲い掛かった。吹き飛ばされないうように何とか足を踏ん張って耐えたのだが、ナギサは両後足を凍らされてしまった。

タケミツ『なんと!イブイの足が凍ってしまった!』

ドン『あの様子じゃ逃げる事も不可能だったりする!』

ナギサは跪いてみるも脱出する事が出来ない。急なピンチにスイレンはすぐに対処出来ずにいる。その間にもバイバナラはナギサとの距離を詰めにかかった。その行動がさらにスイレンとナギサを焦らせてしまう。バイバナラの接近に気づいたナギサはパニックを起こしてしまった。

スイレン「落ち着いてナギサ!【スピードスター】!!?」

ナギサ「イブイ!!!イブイ!!!」

タケミツ『おっとイブイ!スイレン選手の声が届いていないようだ!』

デント「ナギサはしつかりとバイバナラのフルコースに掛かってしまっているね!それを味わうのも時間の問題だよ!」

サトシ「落ち着け！ナギサ！」

ピカチュウ「ピカチュウ!!？」

しかし、ナギサの声はスイレンどころか周りの声すらも耳に届いてないみたいだ。暴れるナギサに対し、バイバニラの次の攻撃が容赦なく襲い掛かった。

ラングレー「バイバニラ！【ふぶき】!!？」

バイバニラ「バニイ!!？」

ナギサ「イブイ!!！」

バイバニラの強烈な【ふぶき】にナギサは再度飲み込まれてしまった。針が刺さるかのような冷たい冷気にナギサは尻込みしてしまった。

ラングレー「これで終わりよ！【ミラーショット】!!？」

吹雪を止めたバイバニラはダイヤのように輝く磨き込まれたボディから閃光から生まれたエネルギーを使って、ナギサに向けて放たれた。

ナギサ「イブイ!!！」

その攻撃によって足を捕われていた氷が砕かれると、その衝撃によってナギサは空中へと放り出されてしまった。その攻撃により戦闘不能寸前の所で追いやられたが、ナギサの耳にスイレンの声がようやく届いた。

スイレン「頑張って！【すてみタックル】!!？」

スイレンの声援によって再び覚醒したナギサは空中で受け身を取ると、そのまま空をも切り裂く攻撃エネルギーを身に纏いながらバイバニラに向かつて突進を仕掛けた。気迫に全力で向かうナギサに対し、バイバニラは怯む様子はなく、めい一杯に空気を取り込み始めた。

ラングレー「【こおりのいぶき】!!?」

そのままバイバニラはナギサに対し強烈な冷気を吹きかけて対抗した。勢いよく突進してきたナギサであったが、空中にいるため踏ん張る事は出来ない。「すてみタックル」が決まる寸前でバイバニラの攻撃に押し返されそのまま【こおりのいぶき】をダイレクトに浴びてしまった。

スイレン「ナギサ!!!」

吹き飛ばされたナギサはそのまま地面に叩きつけられ、そのまま戦闘不能となつてしまった。

ナギサ「イブイ…」

審判「イーブイ戦闘不能!バイバニラの勝ち!よって勝者はラングレー選手!」

ナギサの初戦は惜しくも敗北というかたちに終わってしまった。審判のコールを聞いたスイレンは急いでナギサの元へと駆け寄るとそのまま優しく抱き抱えた。

ラングレー「上出来だよ!バイバニラ!」

バイバナラ「バニイ!!?」

勝利を取めたバイバナラはラングレーの周りを回りながら喜んでいた。そしてバイバナラの鬨気が鎮まったように、空から太陽が顔を出し雪は止んだ。

スイレン「大丈夫ナギサ:~?」

気がついたナギサに声をかけるもバトルに負けたショックで落ち込んでしまった。

スイレン「初めてにしては頑張ったよ!ここから一緒にバトルに慣れていこう!」

アシマリ「アウアウ!!?」

そうナギサの頭を優しく撫でながらスイレンはフィールドを降りたのであった。そして、次はリーリエの番がやってきた。

マオ「次はリーリエだね!」

デント「イツシユでは8つのバッジを集めた実力者でもある。ああ見えてベルはかなり腕が立つトレーナーだよ!」

リーリエ「はい!油断はしていません!」

自分の番が回ってきて気合が入るリーリエに対し、ベルは相変わらずシロンを追いかけ回していた。

ベル「ねえねえ!私のポケモンになつてよ!」

ケニヤン「やめとけよベル!次はお前の番だぞ!」

ベル「えっ!私の番!それなら早く行かなきゃ♪」

ケニヤンが助け船を出してくれたお陰でベルの意識は試合へと向けられた。

スイレン「嵐のようにやって来て嵐のように去って行った。不思議な人…」

ソウタ「なんだか落ち着きのない奴だな!」

少しの静寂の後、頭を軽く撫でたシロンをリーリエはマオに託した。

リーリエ「マオ!シロンをお願い!」

マオ「うん!分かった!」

サトシ「ん?シロンじゃないのか?」

リーリエ「ええ!最初はどうしても試してみたい子がいるのです!」

ロトム『ビビツ…試したい子?』

それだけを言いつつリーリエもフィールドへと向かって行った。

タケミツ『それでは第三試合!リーリエ選手VSベル選手です!』

選手紹介を終えると、ベルはバックの中からモンスターボールを取り出そうとする

も、なかなか目当てのモンスターボールが見つからないでいるみたいだ。

カキ「本当に強いのか…?」

マーマネ「もうそうには見えないよ…」

ようやく見つけると、そのまま持ち手をグルグルと回し始めると審判のコールを待た

ず、すぐにフィールドへと投げ入れた

ベル「よっし！行くわよシュバルゴ！」

シュバルゴ「シュバ!!？」

ベル「シュバルゴ！貴方のカツコ良さ！会場にいる人達に見せつけちゃって!!!」

シュバルゴ「シュバ!!？」

ソウタ「うおっ！何だあのポケモン！カッケェ〜!!!」

ベルが繰り出したのはシュバルゴ。アララギ博士との交換で手に入れたポケモンである。ベルの掛け声と共に二つの槍を掲げては体を大きく見せた。一段と磨き上げられた金属のボディを持つポケモンだ。

『シュバルゴ きへいポケモン』

虫・鋼タイプ

高速で飛び回り鋭い槍で相手を突く。不利な相手にも勇敢に立ち向かう』

サトシ「シュバルゴか！」

デント「あの様子からにして、さらにシュバルゴとの絆が深まっている感じがするね

！」

最初は馬が合わなかった二人だが、旅を通してさらに絆を高めている事は二人の様子からそう感じ取れる。シユバルゴの登場に続いてリーリエもあらかじめ手にしていたモンスターボールを握りしめた。

リーリエ「参ります!出てきて下さい!ヒトツキ!」

ヒトツキ「ヒト…」

サトシ達「「ええ!!」」

司会者『リーリエ選手はヒトツキを繰り出しました!この勝負は鋼タイプ同士のパトルとなりました!』

ドン『それにあのヒトツキは色違い!非常に珍しかったりする!』

モンスターボールから出てきたヒトツキに歓声の嵐が巻き起こった。現状が分からないヒトツキは何のことか分からず、警戒しながら周りを見ていた。そんなヒトツキの様子にリーリエは声援を送った。

リーリエ「大丈夫ですよヒトツキ!わたくしも一緒ですから!」

ヒトツキ「ヒト…」

リーリエの顔を見て若干落ちたヒトツキはシユバルゴへと目を向けた。ヒトツキとの初めてのバトル。どうなるかわからないが、この子の力を最大限に生かしてあげようと、リーリエは戦闘体制へと切り替えた。

審判「試合開始！」

？ベルVSリーリエ？

リーリエ「まずは〔きんぞくおん〕です!!？」

ヒトツキ「ヒトオオ!!!」

タケミツ『まずはリーリエ選手のヒトツキから動き出しました!』

ドン『まずは相手の能力値から下げたから相手の出方を見る作戦だったりする!』

リーリエの指示を聞いたヒトツキは金属同士を擦り付け合うような音をフィールド全体に響かせた。キィという音にシユバルゴだけでなくシロンを始めとしたこの場に
いるポケモン全てが耳を塞ぎ身震いを立てていた。

ロトム『ビビッ!!頭に響くロト!!!』

モウカザル「モウキヤ…」

カノン「モウカザル!大丈夫?」

サトル「フィールド外にまで影響するなんて…」

マオ「以外なパワーの持ち主なのかも?」

フィールドに入っていないシロン達にこれほどの影響を及ぼしているとなると、一番近くにいるシュバルゴには溜まった物ではないようだ。同じ鋼タイプであるのにシュバルゴも頭を抱えていた。

ベル「負けちゃダメよ!シュバルゴ!」【シザークロス】!!?」

シュバルゴ「シュバ!!?」

タケミツ『シュバルゴ!果敢に挑みます!』

ドン『トレーナーの想いが届いたりする!』

音に支配されたこの場面であつても、主人の微かな声がシュバルゴの力となつた。二歩の槍を大きく掲げると前にクロスした状態でヒトツキへと接近した。シュバルゴの迫力ある攻めを前に動揺したヒトツキはおもわず飛び上がった。しまった。

ヒトツキ「ヒトオオ!!」

【きんぞくおん】が解除された今、こちらに風が吹いたシュバルゴはその勢いのまま【シザーグロス】を仕掛けた。

リーリエ「落ち着いてヒトツキ!」【れんぞくぎり】です!!?」

ヒトツキ「ヒトオ!!?」

無駄に大きく振りかざしたのがいけなかつたのか。リーリエの音が届いてから数秒の時間であつたが、シュバルゴの動きを見えたヒトツキは【シザークロス】を躲す事に

成功した。

ベル「シユバルゴ！【てっぺき】!!？」

躲したヒトツキは指示通り鋭い刃で今度は攻撃を直ぐに仕掛けるも、ベルの素早い指示でシユバルゴはその身を鋼のように硬くして防御に徹した。ヒトツキの短剣が突き刺さるものの、傷一つ付く事はなく金属音と共に弾かれてしまった。「れんぞくぎり」は斬れば斬る程に威力が増してくる技だが、チョボマキから授かった頑丈な盾の前では歯が立たない。

カキ「ダメだ！ヒトツキの技が一切通ってない！」

それはその二人のバトルを観ていたカキ達にもリーリエに武が悪い事を悟っていた。

鋼タイプのポケモンは鎧に被われている物が大多数を占めており、格闘技術をなし得ていない物理では歯は立たず、鋼より脆い岩や氷は難なく砕かれては、その無機物は毒をも通さない。言わば弱点が少ないタイプだけでなく、相性の良いタイプも多く存在している。

守りこそ最大の攻撃ともいえる鋼タイプのシユバルゴの前では猛攻を続けているヒトツキの方が不利であるのは厳然たる真実なのだ。

リーリエ（確かにシユバルゴの殻は頑丈ですが、殻に被われていない部分を狙えばダメージはあるはずです！）

しかし論理的結論としてはそうだが、それが全て通用するとは限らない。こちらの攻撃が通らないとなれば、為す術がないと悟った相手には何処かか安心感が生まれる。その隙を狙って風向きを一気に変えれば勝ち筋がある。その隙が作れるも勝利を確信し出しているベルの様子から分かっていった。

ベル「行けてる♪行けてる♪シユバルゴ!【はかいこうせん】!!?」
シユバルゴ「シユバア!!?」

ベルはここでなんと物理技最強クラスの技をシユバルゴに指示したのであった。ベルの指示に耳を疑うサトシ達であったが、もうエネルギーをチャージしたシユバルゴは【はかいこうせん】をヒトツキに向かつて放射した。全てを破壊し尽くすそのエネルギー砲に飲み込まれたヒトツキであったが、何事もなかったように平然と立っていた。ベル「ええ!!!何で何で!!?効いてないの?」

リーリエも目を丸くして呆然としていたが、ダメージを受けていない事に慌てるベルの様子からにして、ヒトツキのタイプを理解していなかった事に気付いた。攻撃するタイミング見計ろうとはしていたが、まさかこんな形で隙を作れたとは思ひもしなかったため、若干戸惑ってしまった。

コテツ「何でだ?!?当たったのに」

デント「ヒトツキはゴーストタイプでもあるから、【はかいこうせん】は効果が無いん

だ……」

カベルネ「ゴーストタイプにノーマルタイプの技を撃つちやうなんて超バッドエンドなテキストだわ!」

自分の愚策に自ら自滅したベルの様子をみたリーリエはヒトツキに反撃の指示を送った。

リーリエ「今がチャンスです! ヒトツキ! 殻が被われていない所へ【かげうち】です!!?」

ヒトツキ「……。」

リーリエ「ヒトツキ?」

しかしリーリエからの指示が聴こえていないのか、ヒトツキは時間が停止したかのようにな少の間だけ微動だけに動こうとしなかった。そして、後から遅れるかのように影の中へとゆっくりと消えていった。

ベル「シユバルゴ! どっから現れるか分からないわ! 気をつけて!」

シユバルゴ「シユバ!!?」

【かげうち】は影を通じて素早く移動して相手に叩き込む技である。ヒトツキが動き出した直後、シユバルゴも辺りを見渡してヒトツキの出方を伺っている。しかし一向にヒトツキは姿を見せずにいる。【かげうち】は先制攻撃技でもあるため、もう現れてもい

い頃なのに出てこないヒトツキの気配にリーリエに不安が走った。

リーリエ「あれ?ヒトツキ…ヒトツキ!!!何処ですの!!!」

リーリエの声にヒトツキは応じる事はなかった。リーリエの焦り具合を見て、観客達も動揺し始めていた。サトシ達も必死にヒトツキを呼びかけるもその後、再びフィールドへと姿を現す事はなかった。

審判「ただいまの結果、リーリエ選手のヒトツキは戦意喪失と見なします!よつて勝者はベル選手とします!」

ドン『なんと!!!これは意外な決着がついてしまった!!!』

審議の結果、リーリエの負けが決まってしまった。ベルもこの決着に驚いていたが、すぐにシユバルゴの元へと駆け寄った。

ベル「シユバルゴ!やったわ!私達の勝ちよ!」

シユバルゴ「シユバ!!?」

勝敗を決したリーリエはすぐにフィールドから降りると会場の外へ向かって走り出した。

リーリエ「わたくし!探しに行つてきます!」

サトシ「俺も行くよ!」

ピカチュウ「ピカチュウ!!?」

スイレン「私も！」

リーリエに続いて試合が終わつてゐるサトシとスイレンもヒトツキの搜索に当たる。何故ヒトツキがあつた場から逃げてしまつたのか。今はその答えは分からないが、早く見つけてあげるべく、リーリエ達は無我夢中に駆け出した。

~~~~~

会場の外へと飛び出したリーリエはサトシ達と二手に分かれて搜索を始めた。何度もヒトツキを呼びながら走つてゐると丁度、日陰になつてゐる壁の隅に身を埋めてゐるヒトツキを発見した。最初にシロンが近寄り呼び止める。その声に気づいたヒトツキは顔を上げると、此方に向かつてくるリーリエの姿も捉えた。

リーリエ「良かった！ここにいたのですね！」

シロン「コン!!？」

怯えきつたその様子からリーリエはヒトツキが怖がつていた事に気づいた。

リーリエ「御免なさい。貴方には怖い思いさせてしまいましたね」

ヒトツキ「ヒトオ……」

恐怖かバトルから逃げ出した罪悪感なのか。ヒトツキの震えは止まっていなかつた。

その様子を見たりーリエはそっとヒトツキの鞆を優しく撫でた。

練習試合もした事がないのにこんな大観衆の前でいきなり戦うことを命じられたら怖いと思うのも、ちゃんと分かってあげたら分かる事であった。試合を楽しむシロン達やポケモンバトルが当たり前と思ひ込んでしまったりする点が今回を招いてしまった種である事をりーリエはヒトツキに謝りながら深く反省した。

サトシ「りーリエ!良かった!見つかつたんだな!」

りーリエ「さあ、皆んなの元へ戻りましょう!」

シロン「コン!!?」

ヒトツキ「ヒトオ…」

~~~~~

ヒトツキを見つけたりーリエ達は急いで会場へと戻つて行つた。そして帰つてきた時には第四試合が終わつていた。

審判「モウカザル戦闘不能!ジャローダの勝ち!よつて勝者はシューティ―選手!」
タケミツ『勝利を手にしたのはシューティ―選手!ジャローダとの息もピッタリでしたな!』

ドン『ジャローダの性質を活かした見事なバトル!実に素晴らしかつた!』

タケミツ『さて次は第五試合！サトル選手とデント選手のバトルです！』

ドン『サトル選手は現在カントーリーグに向けてポケモン修行に励んでいる新人トレーナー。対してデント選手はイツシユ地方のサンヨウシテイのジムリーダーである。このバトルはトレーナー対ジムリーダーの対決となったりする！』

マオ・カキ・「えっ！デントってジムリーダーだったの!?？」

デント「あはは…：そいういや言つてなかったね！」

新事実が発覚した所で試合は後半へと入ろうとしていた。次に出場するサトルとデントはポケモン達を引き連れて、フィールドに向かって歩き出した。

ソウタ「マサラ魂を見せていけ！サトル！」

カノン「肩の力を抜いて！リラックスよ！」

サトル「あはは…」

ソウタとカノンの熱の入った声援におもわず顔を赤くしてしまったサトルは急ぎ足にトレーナーボックスへと向かった。

デント「初めましてサトル！いいバトルをしよう！」

サトル「はい！宜しくお願いします！」

硬い握手を交わした直後、ヒトツキを連れてリーリエ達は第五試合が始まるまでには戻ってくる事が出来た。

カノン「良かった!ヒトツキ見つかったんだね!」

リーリエ「はい!心配おかけしました!」

ヒトツキ「ヒトオ!!?」

サトシ「おっ!丁度始まりそうだな!」

リーリエに続いてヒトツキもサトシ達に何度もお辞儀を繰り返し謝り続けた。そんなヒトツキをピカチュウとシロンを初めとした仲間達が慰めていた。少しずつ元気を取り戻した様子を見て安心してると、次のバトル。第五試合目が始まるうとしていた。

サトル「よし!行くよ!リザード!!!」

リザード「ザア!!?」

デント「方丈たる森の香り!マイビンテージ!ヤナップ!!!」

ヤナップ「ヤナア!!?」

タケミツ『サトル選手はリザード!デント選手はヤナップです!』

ドン『どんどん行くよ!ドンバトル!』

審判「試合開始!」

白熱し続けるドンバトル。次回はどんな戦いが待っているのか。

第四十五話 どんどん行くよ！ドンバトル ②

ドンバトル大会に参加しているリーリエ達。

第一試合はサトシとコテツ。一進一退の攻防の末、サトシの勝利となる。第二試合はスイレンとラングレー。スイレンはナギサで挑むもののバトルの経験不足が響き、ラングレーのバイバニラの前に敗れてしまう。第三試合はリーリエとベル。リーリエはヒトツキとの初めての公式試合であったが、バトル慣れしていないヒトツキはバトルへの恐怖で足が竦み、結果としてヒトツキの戦線離脱によりベルの勝利となってしまった。第四試合とシューティーとカノンであったが、相性の悪いモウカザルを相手に怯むことなく、その力強さでジャローダが勝利の星を獲得した。

そして白熱したバトルは第六試合目と進んでいた。

サトル「リザード！【かえんほうしゃ】!!?」

リザード「ザアツ!!?」

デント「躲すんだ！ヤナップ！」

リザードの口から放たれた炎が波のようにヤナップの方へと迫っていくが、素早さに

自信があるヤナツプはデントの指示もあつてすぐにジャンプをして難なく躲す事が出来た。

しかしサトルは一度の攻撃に躲されても怯むことなく直ぐにリザードに次の指示を送った。

サトル「リザード!連続で【かえんほうしゃ】!!?」

リザード「ザアツ!!?」

デント「全て躲すんだ!」

ヤナツプ「ヤナツ!!?」

タケミツ『ヤナツプ!自慢の素早さでリザードの火炎放射を躲していきます!』

ドン『相性の悪さを感じさせない軽やかな身のこなし!流星はジムリーダーが育てたポケモンだったりする!』

連続攻撃でヤナツプの体力を奪う事を狙った指示であつたが、ヤナツプは体力を最小限に押さえては、無駄な動きをせず、ギリギリの所で紙一重に攻撃を躲していた。攻撃が擦りもしない状況にリザードはだんだん苛立っていた。その怒りが冷静さを掻き乱す形となつてしまい、だんだんと攻撃の速度が遅くなつてきてしまった。

リザード「リザア…!!?」

サトル「リザード!焦れば相手の思うツボだ!気をつけて!」

サトルの声に冷静になったリザードは一度ヤナップへの攻撃を止めた。我を失いかけたリザードは深呼吸をして心を落ち着かせた。平常心を取り戻したリザードは心配をかけたサトルに大丈夫のサインを送り、再びヤナップの方へと身構えた。

デント「今の指示は素晴らしいね！ポケモン達の事をよく見ている！」

熱くなりすぎてその冷静な判断も欠けてしまう事もあるバトルの中でも、自分のポケモンの様子をしっかりと見ていたサトルの判断力をデントは高く評価した。

デント「さて、次はこちらの番だ！ヤナップ！【タネマシンガン】!!？」

ヤナップ「ヤナップ!!？」

今度はヤナップが先に動き出した。その場で高くジャンプをすると、リザード目掛けて勢いよく種を発射した。空を切る音を立てながら迫る弾丸からにして、効果はいまひとつでのダメージだけでは済まされない事は分かる。火炎放射で焼き払う手もあるが、それを突き破ってくるような猛スピードで突っ込んでくる【タネマシンガン】に対してそれは難しいであろう。

サトル（あつ！そうだ！）

迫ってくるヤナップの攻撃の前に焦る気持ちが出てしまったが、落ち着いて導き出した答えをサトルはリザードに指示送った。

サトル「リザード！【メタルクロウ】だ!!？【タネマシンガン】を弾き返すんだ！」

リザード「ザアツ!!?」

爪を鋼のように硬化させたりザードは体を回転させながらその爪でヤナツプの「タネマシンガン」を弾き飛ばした。防御に使っただけでなく弾き飛ばした「タネマシンガン」はそのままヤナツプの方へと飛ばされた。

ヤナツプ「ヤナツ!!」

タケミツ『なんと!リザードが弾き返した「タネマシンガン」がヤナツプを強襲!』
ドン『相手の力を利用した見事な戦略だったりする!』

自分の攻撃を浴びてしまったヤナツプはふらつきながらもなんとか地面へと着地に成功した。ヤナツプの気が逸れた瞬間を狙ってサトルは素早く攻撃の指示を出した。

サトル「今だ!「かえんほうしゃ」!!?」

すぐに放たれた火炎放射はヤナツプへうねりを上げながら放たれる。オレンジ色に業火はそのままヤナツプを包み込んだ。

サトシ「あつ!!!」

カノン「やったの!?!」

と思ったが、リザードの足元から飛び出したヤナツプは空かさず攻撃を決めた。予想外な動きを見せたヤナツプにサトルもリザードはすぐに対処する事が出来ずまま、リザードはそのまま地に叩きつけられてしまった。リザードが立っていた場所に大きな

穴があつた所から、どうやらヤナップは火炎放射を浴びる寸前に「あなをほる」を使つて躲していたみたいだ。ある程度のサトルとリザードの実力を見定めたデントは蝶ネクタイを結び直した。

デント「イツツ！ テエイステイングターイム!!!」

タケミツ『出ました！ デント選手のテエイステイングターイム！』

マオ「あく始まつちやつた…」

カベルネ「そのテエイステイグ失敗しろ!!! 失敗しろ!!!」

ソムリエの血が騒ぎ出したデントはサトルのリザードをテイスティングし始めた。それに合わせてヤナップもデントの動きに合わせながら一緒にポーズを取り始めた。

デント「パワーとテクニク！ 成長途中でありながらもそのリザードは最高級のフレイバーを醸し出している！ トレーナーがポケモンを想うのと一緒にポケモンもまたトレーナーを信頼している。君とリザードとのマリアージュは全てのトレーナーの手本となるだろうね！」

サトル「ええつと、ありがとう…:ございます」

試合中にも構わず、自分のポケモンに対し褒め言葉を貰ったサトルは戸惑いながらも会釈した。その直後デントはソムリエモードからまたバトルへと切り替えた。その目にサトルは身構えると、リザードへ相手から目を離さないようにと指示を送った。

デント「さあ続きを始めよう!【あなをほる】!!?」

ヤナツプ「ヤナツ!!?」

タケミツ『ヤナツプ!再び地中に潜って身を隠しました!』

ドン『何処から現れるか分からなかったりする!』

ヤナツプの気配を感じ取ろうと神経を集中させるものの、捕らえる事が出来なかったリザードはそのままヤナツプの攻撃を受けてしまった。そしてヤナツプは再び地中に潜ると、四方八方にと連続攻撃を浴びさせた。

リザード「ザア!!」

タケミツ『ヤナツプの連続攻撃!リザードはヤナツプの姿を捕らえられない!』

ドン『地面タイプの子は炎タイプに効果は抜群!このまま受け続けるのも厳しい展開だったりする!』

その通りもあって、リザードは身を固めてダメージを最小限に防ごうとしているが、効果抜群の技をいつまでも耐え凌ぐ事が出来るはずがない。ダメージが重なっていきだんだんと膝が地面につき始めていた。

ソウタ「何やってんだよ!サトル!負けちまうぞ!」

カノン「サトル!リザード!頑張れ!!」

次第にボロボロになっていくリザード。何とか策を考えたサトルはヤナツプが掘っ

た穴目掛けて指を指した。

サトル「リザード！穴に向かって【かえんほうしゃ】!!?」

リザード「リザア!!?」

サトルの指示からパワーを貰ったりザードはダメージを振り払いながら、穴に向かって大きく口を開いた。しかし、それを見たデントは全てを見透かしたような笑みを浮かべた。

デント「そう来ると分かっていたさあ！ヤナップ！ジャンプだ！」

ヤナップ「ヤナップ!!?」

すぐに穴から脱出したヤナップは火炎放射を浴びる事なく空高くへと上っていく。さらに空中で受け身を取ると、両手を広げて力を貯め始めた。

デント「お見せしよう！最高のフレイバーを！【ソーラービーム】!!?」

太陽の光を集め始めたヤナップはそのエネルギーを撃つ準備へと入った。

サトル「でも！こつちの方が早い！リザード！そのまま【かえんほうしゃ】!!?」

チャージに時間がかかる事は分かっていたサトルは効果抜群の技で一気に蹴りを付けようとした。しかし、リザードが技を放つ準備へと入ったとの同時にエネルギーを貯め終えたヤナップは【ソーラービーム】を放った。

ヤナップ「ヤナップ!!?」

リザード「リザ!!」

サトル「えっ!」

予定よりも早い攻撃にサトルは目を丸くした。しかも運が悪いことに「ソーラービーム」を浴びた事により口の中に貯めていた炎エネルギーが暴発してしまったのだ。二連ダメージを受けてしまったリザードはその場で膝をついてしまった。

デント「ヤナツプ!急降下で【かみつく】攻撃う!!?」

サトル「リザード!【あなをほる】で躲すんだ!!?」

「ソーラービーム」を放った直後であるのにも関わらず、空かさずヤナツプは次の攻撃体勢へと切り替えた。ヤナツプの接近に気づいたサトルも素早く回避の指示を送るも、ダメージを受けていたリザードがすぐに動くことが出来ず、ヤナツプの鋭い牙がリザードの懐を捉えた。

サトル「頑張れリザード!頑張れ!」

リザード「リザア…」

ヤナツプの追加攻撃を受け、背中から倒れたりリザードは力を振り絞って立ち上がろうとする。しかしジワジワと身体を蝕んでいくダメージに体力を奪われた結果、その場で力尽きてしまった。

審判「リザード戦闘不能!ヤナツプの勝ち!よって勝者はデント選手!」

タケミツ『決まった！勝ったのはデント選手だ！』

バトルが終わるとサトルはゆっくりとリザードの元へと向かった。

サトル「大丈夫!?!リザード！」

リザード「リザッ…」

サトル「良かった…」

サトルの声により目覚めたリザードは負けてしまった事でガツクリと肩を落としてしまった。だけど、ジムリーダー相手に懸命に戦ってくれたリザードはサトルは優しく頭を撫でて励ましていた。

しかし、サトルにはどうしても気になる事があった。それはヤナップの「ソーラービーム」がリザードの技が発動する前に撃ち出された点だ。効果は今ひとつのリザードに対して、瀕死に持っていくほどのフルパワーに近い威力をどうしてあんなに早く撃ち出したのか。

そんな二人にバトルを終えたヤナップを肩に乗せたデントが歩み寄ってきた。二人は互いの健闘を讃えて握手を交わした。

デント「太陽の恵みを攻撃エネルギーに変えて撃ち出す技！あの状況なら地に着いている時よりも早い段階で撃ち出す事が出来るんだ！」

実はデントは「ソーラービーム」が撃ち出される時間を短縮するべく、ヤナップが太

陽との距離を縮めていた事が鍵となっていたのだ。つまり日差しが強く差し込む程、太陽のエネルギーを早く回収する事が出来るという訳だ。そのためヤナツプはジャンプする事によって日差しが強く当たる場所まで移動していたのだ。

デントの戦略にしてやられたサトルは感心するあまり肩の力が抜けたようにして、その場に座り込んでしまった。そんなサトルの様子を心配になったピカチュウとリザードはすぐに彼を呼び止めた。しかし、そんな二匹の不安を取り除くような満足げな笑顔を見せたサトルは二匹の頭に手を置いた。

サトル「僕たちもまだまだだね二人とも!もつと頑張ろう!」

サトルのピカチュウ「ピカチュウ!!?」

リザード「リザア!!?」

~~~~~

タケミツ『どんどん行きましょう!ドンバトル!残すところは三試合!』

ドン『第六試合!マーマネ選手とソウタ選手の入場です!』

白熱したバトルが続き大歓声が鳴り止まないバトルフィールドにまた新たな出場者がフィールドへと立っていた。初めての出場に心配していたサトシ達であったが、この

歓声に吞まれている様子はなく、マーマネは凜とした表情をしていた。

サトシ「落ち着いているみたいだな！」

カキ「マーマネのやつ！いい顔してる！」

マオ「マーマネもサトシやリーリエを見て感化されたんだと思うよ！」

スイレン「リーリエのジム戦を観てる時も、人一倍暑くなったりしてたもんね！」

リーリエ「わたくしもいつもその応援に力を貰っています。日頃の感謝を込めて精一杯応援します！頑張って！マーマネ!!!」

シロン「コーン!!？」

アローラみんなの応援を受け取ったマーマネは相棒の名を叫んだ。

マーマネ「頼むよ！トゲデマル！」

トゲデマル「モギユユ♪」

ソウタ「良し！頼むぜ相棒！」

クチート「クチイ!!？」

マーマネと同じようにソウタも自分の相棒のクチートをバトルフィールドへと出した。

審判「試合開始！」

? マーマネVSソウタ?

ソウタ「クチート! 【アイアンヘッド】だ!!?」

クチート「クチイ!!?」

マーマネ「躲して! トゲデマル!」

試合開始と同時に頭を硬化させたクチートはそのままトゲデマルに向かって一直線に突っ込んでいく。ソウタの速攻に驚くマーマネはすぐに自分もトゲデマルに回避の指示を送った。

マーマネ「トゲデマル! 【ほうでん】!!?」

トゲデマル「モギユユ!!?」

攻撃を躲したトゲデマルはそのままクチートの上を取った身体中の電気を辺り一面に放電させた。それを見たソウタも焦る事なく素早く指示を送った。

ソウタ「【ようせいのかぜ】!!?」

クチート「クチイ!!?」

拳を思いつ切りぶん回したクチートはその風圧で発生させたピンク色の風でトゲデ

マルの電撃を纏わせて攻撃を防いだ。

小爆発とともに吹き飛ばされたトゲデマルにクチートは大きな顎で捕らえにかかる。

ソウタ「よっしやあ！今だ！〔かみつく〕攻撃!!?」

クチート「クチイ!!?」

空中へ放り出されているトゲデマルにクチートの攻撃が迫る。躲す事が出来ないトゲデマルは慌てた様子でじたばたと逃れようと必死に抵抗している。

ロトム『ダメロト！捕まるロト!!?』

マオ「逃げて！トゲデマル!!」

誰も捕まると思った中、マーマネはニヤリと笑っていた。

マーマネ「トゲデマル！〔ニードルガード〕!!?」

瞬時にトゲデマルは身を丸くすると、全身の針を一気に逆立てた。トゲデマルの新しい技に思わず驚いたサトシ達。しかし栗のイガのようになったトゲデマルを見てもクチートは怯む事なく突っ込んでいく。鋼のように硬く鉄骨すらも噛み砕いてしまう自慢の大顎に相当な自信があるのか。構う事なくクチートはトゲデマルに思いつ切り噛み付いた。

カキ「あつ！」

マオ「トゲデマル!!!」

呑み込まれてしまったトゲデマル。一瞬の静寂が包み込まれた後、これ以上の試合続行は不可能と判断した審判はクチートの勝利を宣言しようと口を開いた。が、その時：クチート「クチイ？」

何かしら違和感を感じたクチートにソウタも何事かと首を傾げた。顎が徐々に開き始めると、なんと身体を丸め全身の針を伸ばして必死に抵抗しているトゲデマルの姿があった。

タケミツ『なんと！クチートの顎にトゲデマルがガツチリとはまってしまった！』

ドン『何というアクシデントだったりする！』

そう。トゲデマルは呑み込まれたと同時に【ニードルガード】で防御に入ると、その針が歯の隙間に挟まってしまったのだ。

ソウタ「クチート！早く吐き出せ！」

クチートはトゲデマルを吐き出そうと大きく顎を振り回し始めた。しかし、ガツチリと挟まってしまった針を一本も抜くことが出来なかった。また同じように身動きが取れないトゲデマルもどうしたらいいか分からず、そのまま目を回している。別に牽制が逆転となった訳でもないこの状況に慌てるマーマネ。しかし咄嗟の閃きにより、この状況を打破する手段を考えついた。

マーマネ「トゲデマル！そのまま【ほうでん】だ!!？」

トゲデマル「モギユ!!？」

マーマネの声に我に帰ったトゲデマルは指示通り体内に溜め込んだ電気を一気に解放させた。

クチート「クチイ!!!」

トゲデマルの電撃をしかもゼロ距離で浴びてしまったため、クチートに強烈な痺れが身体中を襲った。そのままクチートが膝を落としたと同時に脱出したトゲデマルはその場で転がり始めると発電し始めた。

マーマネ「トゲデマル! 【びりびりちくちく】!!？」

トゲデマル「モギユユ!!？」

電気を帯びたその身体のままトゲデマルはクチートに向かって転がっていく。トゲデマルの攻撃に気づいたソウタも避けるようにクチートに指示を送ったが、さっきの攻撃により麻痺状態になってしまったクチートは思うように動かす事が出来ず、そのままトゲデマルの攻撃を受けてしまった。

激しい爆雷とともにまたもや強烈一撃を叩き込まれたクチートはゆっくりと倒れてしまった。

クチート「ク…チイ…」

ソウタ「クチート!!!」

審判「クチート戦闘不能!トゲデマルの勝ち!よって勝者はマーマネ選手!」  
タケミツ『運を味方につけたか!勝ったのはマーマネ選手とトゲデマルだ!』

ドン『まさしく奇跡の大逆転劇だったりする!』

自分の勝利を理解したトゲデマルは一目散にマーマネの方へと走り出した。

マーマネ「やった!よく頑張ったねトゲデマル!」

トゲデマル「モギユ」

自分の胸に飛び込んでくるトゲデマルをマーマネは力強く抱きしめていた。

ソウタ「お疲れクチート!ゆっくり休んでくれ!……。だあああ!!!負けた!!!クツ

ソオオ!!!」

健闘したクチートを戻したソウタは悔しさ全開に頭を掻き回し始めた。しかし、咄嗟のハプニングに対して対処が遅れてしまった事や的確な指示を送れなかった自分に敗因があることは分かっていた。それらの反省を自分の胸の中に受け止めたソウタはマーマネと握手をした後、フィールドを後にした。

サトシ「おお!マーマネが勝った!」

ロトム『偶然が重なったいえ、見事な勝利ロト!!?』

カキ「やったな!」

スイレン「おめでどう!」

マーマネ「ありがとう！みんな！」

仲間の一人がまた勝ち上がった事にスイレンもリーリエも自分のことのように大いに喜んでる。そして、ただ一人。その光景を眺めて次の試合へと切り替えるものがない。

マオ「さて！アマージョ！私達もマーマネに続くよ！」

アマージョ「アジョ!!？」

~~~~~

ドン『続いて第七試合！マオ選手とケニヤン選手の入場だったりする！』

ケニヤン「毎回アクセントが違うけど、今はそんなことどうでもいいぜ！頼むぞ！ダゲキ！」

ダゲキ「ダアキ!!？」

マオ「準備はいい!?アマージョ！」

アマージョ「アジョ!!？」

両選手のポケモンが出揃った事を確認した審判は試合開始のコールを取った。

審判「試合開始!!!」

?マオVSケニヤン?

マオ「アマージョ!【マジカルリーフ】!!?」

高くジャンプしたアマージョはそのまま先制して攻撃を仕掛けた。七色の虹のように鮮やかな光を放つ木の葉は一直線にダゲキの方へと向けられた。

ケニヤン「ダゲキ!【インファイト】だ!!?」

ケニヤンも怯む事なくすぐにダゲキに指示を送った。ダゲキは目にも止まらない速さのパンチを次々に繰り出すと、そのまま【マジカルリーフ】一枚一枚を粉碎させた。避けることが不可能な攻撃に対して見事な防御とも言えよう。

マオ「うつそー!!!」

ケニヤン「どうだ!これが俺のダゲキの防御技だ!」

タケミツ『攻撃は最大の防御となり!見事な対処です!』

ドン『拳一つ一つのパワーも凄まじいものであった!よく育てられてたりする!』

ダゲキのパワーに圧倒させれ動きが止まったマオ達を見たケニヤンは風向きが変わらないうちにすぐに次の指示を送った。

ケニヤン「次はこれだ！【ビルドアップ】!!?」

上腕二頭筋。胸筋。あらゆる筋肉を膨張させたダゲキは攻撃と防御を上げた。光に照らされた筋肉はダイヤモンドのように輝いていた。

ケニヤン「そのまま連続で【からてチョップ】!!?」

能力を上げたダゲキはアマージョに向かって走り出すと、空かさずアマージョの頭上に手刀を振り下ろした。

マオ「避けてアマージョ！」

咄嗟に躲したアマージョであったが、ダゲキの攻撃はそのまま続いていた。なんとか相手の攻撃を見切つて躲しているが、ダゲキの勢いにも押されてどんどん後ろの方へと足が竦んでしまっている。流れが一気にケニヤンの方へと傾き始めたマオは打開策をとる。

マオ「そうだ…アマージョ！【あまいかおり】!!?」

アマージョ「アジョ!!?」

ダゲキ「ダ…キ」

アマージョの身体が漂ってきた香りにダゲキは思わず静止してしまった。

タケミツ『おっと!ダゲキの動きが止まりましたね!』

ドン『この甘い香りに闘争本能を押しえられてしまったのかもしれない!』

動きが止まったダゲキにケニヤンは必死に呼びかけるも、その声は届いていない。

アマージョが放つ甘い香りは会場にいるもの全員を惚気させていた。その馥郁たる香りはフィールドへと飛び出そうとするモクローを必死に止めているサトシが物語っている。

マオ「今よ!〔トロピカルキック〕!!?」

アマージョ「アジョ!!?」

ダゲキ「ダツキイ!!!」

その隙を狙ってアマージョの渾身の蹴りがダゲキの懐へと見事決まった。

サトシ「やるな!マオ!」

ロトム『これは良い試合ロト!』

アマカジの頃から家族同然であってマオの一番のパートナー。息が合うバトルをしている様子に驚くことにはないと思えるが、あまり多くのバトル経験を積んでいないトリーナーが慌てる事なく状況において的確に指示を送るのはそう簡単に出来るものではない。なによりもアマージョと一緒にバトルを楽しんでる姿がとても微笑ましい光景であった。

タケミツ『マオ選手のアマージョ！見事な動きであります！』

ドン『まるでバタフリーのように舞いスピアーのように刺すといった感じだったりする！』

会場の声援はマオとアマージョへと向けられていた。ダゲキはなんとか立ち上がるもアマージョの攻撃が急所へと入っていたのか立ち上がるだけでも精一杯の様子だ。しかしその声援に押しつぶされる事なくケニヤンは一気に空気を吸い込んだ。

ケニヤン「ダゲキ!!!」

ダゲキ「ダツキ!!？」

マオ「えっ!？」

アマージョ「アツジョ!？」

会場の声を一気に消し飛ばしてしまう程のケニヤンの声量が鳴り響く。ケニヤンの声を聞いたダゲキは自分の頬に一発拳を入れた。その光景にマオとアマージョは思わず目を丸くした。

リーリエ「自分に攻撃ですか！混乱しているわけでもありませんが！」

サトシ「そうじゃないさ！」

自滅行為と思われるその行動はその場にいた全員に驚きを与えた。しかしダゲキの鋭い眼光はアマージョへと向けられていた。

ケニヤン「気合い入れ直していけ!ダゲキ!」

ドン『自分自身に喝を入れたみたいですね!この根性!まさに格闘ポケモンだったりする!』

拳を前に攻撃体勢を取るダゲキの姿にアマージョも身構えた。睨み合う両者の緊張感は何トレーナーにも伝わっている。しばらくの静寂の中、地面をおもいつき蹴り飛ばしたダゲキはアマージョへと一直線に走り出した。

ケニヤン「【インファイト】!!?」

マオ「アマージョ!ここは【おうふうビンタ】よ!!?」

ダゲキの連続攻撃に合わせてアマージョも全力で応戦する。目にも留まらぬ速さで繰り出される両者の攻撃は火花を散らしながら拳と拳がぶつかりあう。

アマージョ「アジョ!!?」

ダゲキ「ダツキイ!!?」

最後の一撃が決まった瞬間、その反動で二体は後ろの方へと押し込まれた。そして踏みとどまったダゲキは高くジャンプすると右腕にパワーを貯め始めた。

ケニヤン「渾身の【からてチョップ】だ!!?」

マオ「【マジカルリーフ】で迎え撃って!!?」

頭上を捕らえられたダゲキに向かって虹色に輝く葉の刃が襲いかかる。アマージョ

の攻撃を受けたダゲキは爆煙に包み込まれた。攻撃が決まりマオの勝利を確信したリーリエ達は口を揃えて喜んだが、その想いはケニヤンの気迫によって打ち消された。

ケニヤン「怯むな！行っけええ!!」

ダゲキ「ダツキイイイ!!」

爆煙から姿を現したダゲキは一瞬にしてアマージョの頭に手刀を振り下ろした。

マオ「アマージョ!!!」

シエイミ「シエイミ!!?」

落下のスピードで威力が増したダゲキの攻撃を受け止めきれず、アマージョは目を回してそのまま倒れてしまった。

アマージョ「ア…:ジョ」

審判「アマージョ戦闘不能！ダゲキの勝ち！よって勝者はケニヤン選手！」

ケニヤン「だから…:アクセントが違う!!!」

白熱した試合は終わりを迎えたマオはすぐにアマージョの元へと駆け寄った。

マオ「お疲れアマージョ！かつこよかったよ！」

アマージョ「アジョ…」

そんな二人にダゲキと一緒に向かったケニヤンはそつとマオに手を差し伸べた。

ケニヤン「良い試合だったぜマオ！お前の分まで頑張るからな！」

マオ「私もすごく楽しかった!ありがとう!ケニヤン!」
 ケニヤン「だからアクセントが違うけど…まあいいか!」
 最後は両者の握手によって第七試合は幕を閉じた。

~~~~~

タケミツ『それではこれが本日のラストバトルです!』

ドン『本日のラストバトルはカキ選手VSカベルネ選手!』

カキ「うおおお!!! ついに俺の番が来たああああ!!!」

自分の名前が呼ばれるのを待ってたばかりか、アナウンスが入るとカキの目はメラメラと燃え始めた。

ロトム『も…燃えてるロト!!?』

カノン「ずっとソワソワして待ってたもんね!」

デント「これはグレン火山のような熱いテストだね!」

カベルネ「暑苦しいテストね…どうせ勝つのは私なのに!」

カキとは違ってカベルネは呆れた様子で淡々としていた。最終試合、フィールドへと

立ったカキは今日のバトルで決めていたポケモンをフィールドへと放った。

カキ「頼むぞ！ガラガラ!!!」

ガラガラ「ガアラ!!？」

マオ「いつけええ！カキ!!!」

マーマネ「頑張れ!!!」

タケミツ『カキ選手はガラガラを繰り返しました！カキ選手のガラガラはアローラ地方で確認されているリージョンフォームの一種！タイプは炎とゴースト。二つのタイプを合わせ待っています!』

ドン『どんなバトルを披露してくれるのかわくわくが止まらなかつたりする!』

骨棍棒を振り回してウォーミングアップをし始めたガラガラを見て、選抜するポケモンを決めたカベルネもフィールドへと放った。

カベルネ「出てきなさい！マイビンテージ！フタチマル!」

フタチマル「タアチ!!？」

デント「カベルネはフタチマル。セオリー通りで来たね!」

サトシ「タイプの相性なんさ！カキには関係ないさあ!」

炎と水のバトルとなった対戦カード。最後の試合が始まる。

審判「試合開始!」

?カキVSカベルネ?

カベルネ「イツツ! テイステイングタータイム! シルブプレ!」

カキ「……………」

カベルネ「ソムリエールとしてクールでエレガントな技で倒させて貰うわ!」

カキ「そうは行くか! ガラガラ!」【フレアドライブ】!!?」

ガラガラ「ガアラ!!?」

突然のカベルネのテイステイング宣言に戸惑いを見せるも、カキはすぐにガラガラに指示を送り先手を取った。

タケミツ『カキ選手! いきなり大技による速攻です!』

骨棍棒を振り回し始めたガラガラは先端に灯っている炎を身体に纏わせた。炎の鎧を身につけたガラガラはそのまま突進を仕掛ける。しかし、フタチマルはガラガラの猛火を前にしても慌てる事なく、二本のホタチを手に取り身構えた。

カベルネ「フタチマル!」【シエルブレード】!!?」

水の刃を形成させたフタチマルはガラガラに向かつて飛び出した。二つの技はぶつかり合い、その反動によって二体は後退した。

タケミツ『ガラガラの猛攻に怯むことなくフタチマルも負けじと応戦していきました！』

ドン『よく育てられている！激戦の予感が漂っていたりする！』

マーマネ「カキのガラガラのパワーに対抗出来るなんて！」

ケニヤン「ソムリエだけでなくトレーナーとしての実力も付けてきたみたいだな！」  
タイプ相性にも負けじと劣らないカキのポケモンのパワーを前にして怯まず受け止めたフタチマルの根性に一目置かれた。

デントへの対抗心に燃えるばかりにソムリエに酷使するばかりでトレーナーとしての実力は然程、成長が感じられない面があると思っていたが、今の姿を見ればトレーナーとしての実力も日々磨いていた事も分かった。

カベルネ「フタチマル！続けて「みずのはどう」!!？」  
フタチマル「タツチ!!？」

ガラガラは攻撃を受け流したフタチマルはすぐに別の攻撃を仕掛けた。球体状に形成された水のエネルギー砲を放つも、すぐにその波動エネルギーを察知したガラガラはすぐに後退して躲した。

カキ「いいぞ!次は【アイアンヘッド】だ!!?」

同時に頭部を鋼の鎧のように硬くさせると、地面をおもいつき蹴り上げてフタチマルに向かつて突進を仕掛けた。

カベルネ「フタチマル!【シエルブレード】!!?」

もう一度、ガラガラの技を受け止めたフタチマルであったが、勢いよく飛び出してきたガラガラのパワーに今度は押されてしまった。

カキ「ほねブーメラン!!?」

【アイアンヘッド】を決めたガラガラはすぐに別の攻撃を仕掛けた。

カベルネ「もう一度!【シエルブレード】!!?」

フタチマル「……」

カベルネ「ちよつと!フタチマル!」

ドン『おつと!フタチマル怯んで技が出せない!』

追加効果を受けてしまったフタチマルはカベルネからの指示が遅れて聴こえてきてしまい、気づいた時には骨棍棒が目の前に迫っていた。そして、そのまま攻撃を受けて後ろへと大きく飛ばされてしまった。

カキ「攻撃を続けろ!【ほねブーメラン】!!?」

ガラガラ「ガアラ!!?」

このチャンスを逃さないようガラガラはそのまま攻撃を続けた。再び襲いかかる攻撃にフタチマルは呆然としていた。

カベルネ「フタチマル! だったら【れいとうビーム】!!?」  
フタチマル「タ…タアチ!!?」

しかしカベルネの素早い判断のお陰で難を逃れた。フタチマルが放った【れいとうビーム】はガラガラの骨棍棒に命中すると、骨棍棒は凍ったまま地面へと落ちてしまった。

カキ「嘘だろ!」

ガラガラ「ガアラ!!!」

タケミツ『なんと! ガラガラの骨棍棒が凍らされてしまった!』

ドン『カキ選手とガラガラにとっては思わぬアクシデントだったりする!』

シューティー「流れが変わったみたいだね…早く取り返さないと彼に勝ち目はない!」

サトシ「カキ! 早く取り返すんだ!」

カキも急いで骨棍棒を取り返すよう指示を出した。慌てて取りに行こうとするガラガラであったが、そう簡単に行くわけがなかった。

カベルネ「させないわよ! 連続で【みずのはどう】!!?」

フタチマル「タアツチ!!?」

フタチマルの攻撃に邪魔をされて取りに行くどころか近づくことも出来ない。武器を失ったガラガラは逃げるしか出来ない。このまま何も出来なければ負けるのも時間の問題だ。

カキ(く…:そ。どうしたら…)

嫌な流れに飲み込まれそうになるカキは必死に打開策を見つけようも中々思いつかないことにだんだんと焦りが出てきてしまった。滲み出る汗を拭いながら必死に考える。

ガラガラ「ガアラ!!!」

カキ「ガラガラ!?!」

するとガラガラは弱気になる主人の姿に苛立ちを立たせていた。らしくない姿を見せてしまったカキは一呼吸を終えた後、ガラガラへと呼びかけた。

カキ「お前を信じるぞガラガラ!走れ!!!」

カベルネ「焼けになったのかしら!さあ、この技でガラガラのマリアージュにバツチり決めさせて貰うわ!【みずのはどう】!!?」

一気に走り出したガラガラは恐れることなく突き進んで行く。その様子を見ていたフタチマルは球体状に集めた水のエネルギーをガラガラへと放った。このまま進めば

技が決まってしまうも、カキは一切ガラガラに回避するよう指示を送らなかつた。

ケニヤン「あのままじゃ！決まっちゃうぞ！」

コテツ「早く躲してくれよ！」

間違ひなく炎タイプのガラガラには大きなダメージが入ってしまう。誰もが危機的状況であると分かっているにもかかわらず、ただアローラ組。サトシ達は誰一人として心配している様子を見せていなかった。

カキ「突っ込め!!!【アイアンヘッド】だ!!?」

頭を硬化させたガラガラはそのまま【みずのはどう】へと突っ込んだ。【アイアンヘッド】によってフタチマルの攻撃をかき消すと、そのままフタチマルに攻撃を決める事に成功した。

タケミツ『なんとガラガラ！苦手な水タイプの技を根性で打ち消してた!!!』

ドン『トレーナーの想いも乗せた熱き魂の一撃だつたりする!』

フタチマルを吹き飛ばしたガラガラはすぐに凍った骨棍棒を取り戻した。無事に所有者の手に渡つたと感じた骨棍棒にも青白い炎が灯つた。

カベルネ「こんなテキスト認めない！フタチマル！【シエルブレード】!!?」

カキ「ガラガラ！【フレアドライブ】だ!!?」

力を取り戻したガラガラは強大な炎を身体に包み込ませた。そのガラガラに対抗し

てフタチマルも飛び出した。両者の技がぶつかり合うもガラガラガラの根性パワーに押し負けられてしまい、フタチマルはおもいつきり地面へと叩きつけられた。

カベルネ「フタチマル!しつかり!」

フタチマル「タアチ…」

カキ「止めの『シャドーボン』だ!!?」

ガラガラ「ガアラ!!?」

起き上がるも間に合わずガラガラのカキの熱い魂と想いをのせた一撃がフタチマルの懐を捕らえた。

フタチマル「フタチイ!!!」

カベルネ「フタチマル!!!」

攻撃を受けたフタチマルはそのままゆっくりと地面へと倒れそのまま目を回した。

審判「フタチマル戦闘不能!ガラガラの勝ち!よつて勝者はカキ選手!」

タケミツ『勝負は決した!勝者はカキ選手だ!!!』

カキ「よつしや!!!良くやったぞ!ガラガラ!!!」

ガラガラ「ガラガラ!!?」

トレーナーがポケモンを信じ、ポケモンもまたトレーナーを信じる。お互いの信頼が生んだ見事なバトルとデントは賞賛していた。

カベルネ「フタチマル：よく頑張ったわ」

フタチマルを戻したカベルネはゆっくりとフィールドを降りた。そんなカベルネに近づいたデントは彼女の健闘を讃えた。

デント「君とフタチマルの刺激的なマリアージュをたっぷり堪能させて貰ったよ！さらに強くなっているようだね」

カベルネ「ふん！同情なんて聞きたくないわ！本当だったらあんたを叩きのめしてははずなんだからね！」

デント「ああ：君とも戦ってみたかったさあ。だけど僕はこの場でじゃなくても挑戦はいつでも受けるつもりだよ！」

その素直な対応に調子が狂ったのか顔を真っ赤にしてカベルネはデントから離れていった。

タケミツ『これにより本日の試合はここまで！明日のトーナメントに出る選手諸君はポケモンセンターでしつかりと休息を取って下さい！』

ドン『初日からにして甲乙付け難い熱戦による熱戦であった！明日の試合も楽しみだったりする！』

こうしてドンバトル大会初日はこれにて終了した。疲れたポケモン達や身体を休めるためリーリエ達は速やかにポケモンセンターへと向かった。

~~~~~

ロトム『すごい量のコロツケロト…』

リーリエ『本当に全部食べられるのですか…』

サトシ「もちろん!」

ケニヤン「10個は軽い!軽い!」

ポケモン達をジョーイさんに預けたリーリエ達は夕食をとっていた。バトルからの疲れから空腹気味のサトシとケニヤンの食いつぶりにリーリエ達は啞然としていた。

ケニヤン「サトシ!明日当たる事になったら全力で相手になってやるからな!」

サトシ「ああ!俺だって全力で相手になってやる!」

食うか喋るかどっちかにすればいいのにと、器用に喋るサトシとケニヤンの前に夕食を食べ終わったシューティーが早々と自室へと戻る姿が見られた。

サトシ「シューティーもう食べ終わったのか!」

シューティー「ああ!今から明日選出する一を決めないといけないからね!時間は無駄に出来ないさ!」

サトシ「シューティー!明日お前と当たる事になったとしても絶対に負けないからな

！」

シューティー「なら！僕と当たるまで負けなでくれよ！」

そう言つてシューティーはその場から離れて行つた。

サトシ「ケニヤンとシューティーに掛けた言葉はもちろん！三人にもだからな！」

デント「分かつてるさ！」

カキ「おう！容赦はしないからな！」

マーマネ「今でも凄く緊張してきたけど、僕だつて負けなよ！」

スイレン「うん！その粹だね！」

リーリエ「わたくし達も明日は目一杯応援しますね！」

マオ「うん！」

~~~~~

そして第二回戦を迎える朝。盛り上がり聞きつけたのか昨日よりも多くの観戦者が集まっていた。ほぼ満席状態となつた様子に多くの人に見られるプレッシャーも募るもさらに闘志が燃え上がったのもまた事実である。一回戦で負けたリーリエ達も特

別枠として試合が終わるまではフィールド外で試合を観戦する事も出来た。

ドン『選手諸君!昨日はゆっくり眠られたかね!昨日と同じ暑き戦いを期待している!』

タケミツ『それでは第二回戦による対戦カードを発表致します!』

第一試合 カキVSラングレー

第二試合 サトシVSデント

第三試合 マーマネVSベル

第四試合 シューティVSケニヤン

対戦相手が発表されると、すぐに第一試合の選手はフィールドへと案内された。

マオ「カキ！ファイト!!!」

リリーエ「頑張って下さい!!!」

二回戦目の朝の第一試合という事もあってカキの熱はさらに暑く胸を躍らせている。先攻後攻のフェアを無くすために同時にポケモンを投入するのが今のルールであるが、気分が高まったカキは先にポケモンをフィールドへと放った。

カキ「行くぞ！バクガメス！」

バクガメス「ガアメス!!？」

カキが二回戦目を選んだのは一番の相棒であるバクガメスだ。

ラングレー「バクガメス!?!？」

初めて見るポケモンにラングレーは図鑑を開いた。バクガメスの生態を調べているとタイプが分かった瞬間にその目は一気に鋭くなった。

ラングレー「なるほど！ドラゴンタイプね！ならドラゴンバスターの腕の見せ所！行くよ！ツンベアー!!!」

ツンベアー「ベアアア!!?」

相手がドラゴンタイプで来たとはわかったラングレーは彼女の中でも一番の切り札でもあるツンベアーを繰り出した。

タケミツ『バクガメス対ツンベアー!炎と氷の対戦カードとなりました!』

しかし、ドラゴンタイプとはいえ炎も持っているバクガメスに対してだと氷タイプのツンベアーの方が圧倒的に不利であるが、そこはラングレーのトレーナーとしての実力の見せ所だ。

審判「試合開始!」

?カキVSラングレー?

カキ「バクガメス!【かえんほうしゃ】!!?」

ラングレー「ツンベアー!【れいとうビーム】!!?」

互いの攻撃が衝突し、水蒸気がフィールド全体を包み込んだ。

カキ「バクガメス!【からをやぶる】!!?」

姿を隠した事によりカキはこの隙を狙ってバクガメスの攻撃力を上げた。元々防御

力が高いポケモンであって多少の防御力を捨てたところで問題はないという思い切った戦略であろうか。

カキ「そのまま【ドラゴンテール】!!?」

ツンベアー「ベエツ!!」

尻尾に攻撃エネルギーを貯めたバクガメスはそのまま高速回転し、水蒸気を払いのけながらツンベアーに攻撃を決めた。

カキ「もう一度! 【ドラゴンテール】!!?」

ラングレー「負けんじやないよ! 【いわくだけ】!!?」

しかし旋回して再び攻撃の体勢を取ったバクガメスに対して、なんとか持ちこたえたツンベアーも強烈な一撃を拳にのせて振りかぶった。攻撃力を上げたバクガメスに対して負けない馬鹿力を誇ったツンベアーの一撃はそのままバクガメスを地面へと叩き込んだ。

ラングレー「そこよ! もう一発かましてやりな!」

さらに追い討ちを仕掛けてきたツンベアーにバクガメスは甲羅の棘を逆立てた。

カキ「今だ! 【トラップシエル】!!?」

ラングレー「ツンベアー!!!」

ツンベアー「ベエツ…」

巨大な爆炎がツンベアーを飲み込んだ。「ドラゴンテール」重たいの攻撃。「トラップシエル」による最大火力。その二点は相性の悪いツンベアーにとって充分すぎる威力であった。

審判「ツンベアー戦闘不能!バクガメスの勝ち!よって勝者はカキ選手!」

タケミツ『決まった!!!第二回戦を最初に抜けたのはカキ選手だ!!!』

カキ「バクガメス!よくやった!」

バクガメス「ガアメス♪」

三回戦目の切符を手にしたカキはバクガメスと共に大いに喜んだ。

ラングレー「今回のバトルでそのバクガメスの戦い方はだいたい分かったわ!つまり

次はこうはいかないって事よ!」

カキ「は::はあ::」

ラングレー「覚えておきな!」

憎きドラゴンタイプポケモンに敗れた事は彼女にとってかなりの屈辱的なものとなっただろう。隠しきれない敵意を見せて再びカキとバクガメスに挑む姿勢を見せた後、フィールドを降りていった。

~~~~~

ドン『それでは続いていくよドンバトル!』

タケミツ『第二試合目はサトシ選手とデント選手です!』

次の試合に呼ばれた二名はフィールドへと立った。

サトシ「まさかデントと当たる事になるなんてな!」

昨日からずっと楽しみにしていたバトルであつたが、発表された対戦相手によりその楽しさをより加速させる事が起きていた。

無邪気にはしゃぐように嬉しそうに語るサトシにデントも笑って返した。

デント「サトシ!僕は君と別れてからもソムリエとしてだけでなくジムリーダーとしてもバトルの修行も方もヤナップ達と一緒に磨いてきたんだ!」

サトシと対戦する想いを語った後、デントは今日の試合に出すポケモンが入ったモンスターボールを固く握り締めた。

デント「僕たちが新たに作り上げてきた至高のフルコースを今!味あわせてあげるよ!」

サトシ「俺たちもあれからもっと強くなつたんだ!思いつきりやろうぜ!デント!」
サトシもモンスターボールを取り出すと、デントの前へと突きつけた。久しぶりに会った仲間とのバトルに胸を躍らせている二人の闘志はリーリエ達にも伝わっていた。

リーリエ「かつて一緒に旅をしてきた仲間同士の対決！」

スイレン「なんか…良いよね！」

さあ、準備が整ったところでサトシとデントは同時にモンスターボールをフィールドへと解き放った。

デント「頼んだよ！イワパレス!!!」

イワパレス「イワア!!？」

サトシ「ルガルガン！君に決めた！」

ルガルガン「ルガア!!？」

フィールドへと出現した二体のポケモンの登場に歓声は大きく湧き上がった。暑きドンバトルはまだ始まったばかりだ。

第四十六話 どんどん行くよ！ドンバトル ③

二日目となったドンナマイト。第一試合はラングレーを打ち破りカキが準決勝へと駒を進めた。そして第二試合、サトシとデントの試合が切つて落とされようとしていた。

？サトシVSデント？

ルガルガン「ガアル!!？」

イワパレス「イワア!!？」

審判の試合開始のコールと共に二人のトレーナーは同時に指示を出した。毛並みを逆立て鋭い爪と牙で果敢に挑むルガルガンに対してイワパレスは鋭い爪と頑丈な岩のブロックでその攻撃を受け止めた。

デント「イワパレス！「いわなだれ」!!？」

サトシ「ルガルガン！「ストーンエッジ」!!？」

距離を取るために一度後退したイワパレスは自分と同じぐらいのサイズの大きな岩

をルガルガンに向けて振り落とした。雨のように降り注ぐ無数の岩の弾丸がルガルガンを襲うも、それをルガルガンは両前脚を思いつきり地面に叩きつけて、地面から多数の岩の柱を出現させ相殺させた。

タケミツ『両者の力強い攻防が繰り広げられています!!?』

ドン『パワーをパワーで粉碎させていく!これぞまさに岩タイプの底力だったりする!!?』

大技を打ち込んだルガルガンは一度イワパレスとの距離を取るべく後退したのだが、すぐに後ろにある何かにぶつかってしまった。何にぶつかったか驚くルガルガンは後ろに目をやってみると、なんと大きな岩の壁がルガルガンを後ろへと引き下がれないように聳え立っていた。

ルガルガン「ガアル!？」

サトシ「しまった!!!」

突然として現れた岩石の正体は先程のイワパレスが繰り出した「いわなだれ」であった。攻撃と同時に、ルガルガンの逃げ場をも封じていたイワパレスはさらに大きな岩石を形成し始めた。

デント「今だ!『がんせきほう』!!?」

イワパレス「イツワア!!?」

発射された大きな岩石は後ろの岩壁と一緒にルガルガンを吹き飛ばした。

ルガルガン「ルガアア!!!」

サトシ「ルガルガン!!!」

岩の壁によりルガルガンの姿を確認できなかつた所為でサトシの判断は遅れてしまった。デントの罫にはまったサトシの額から嫌な汗が流れ出る。ルガルガンの安否を確認した後は迂闊に前へ出る事は避け、相手の出方を伺うのであった。

初っ端から追い詰められているサトシの様子にリーリエ達は真剣の目で忌憚なく容赦のしないデントの姿に目が集まった。

カキ「流石はジムリーダーだな。デントはサトシ達の先のその先を読んで指示を送っている!」

リーリエ「それだけではありません。先ほどの【いわなだれ】。パワーだけでなくコントロールも出来るようによく育て上げられました!」

サトシ「ごめん!ルガルガン!大丈夫か!」

ルガルガン「ガアル!!?」

デントの実力に圧巻を覚える中、一呼吸を終えたサトシは指示が遅れた事をルガルガんに謝罪すると汗を拭いだ。

サトシ「やってくれたなデント!」

デント「どうだい!イワパレスも前にもまして強くなったんだからね!」

イワパレス「イツワ!!?」

やられっぱなしで行くわけにいかないとルガルガンは前傾姿勢になりながらイワパレスを威嚇する。だんだんと目が純血し、興奮状態になっていくその様子を見てサトシは声を掛けて落ち着かせる。

サトシ「落ち着けルガルガン!無暗に接近を仕掛けるのは逆効果だ!ここはチャンスを伺うんだ!」

その声が届いたルガルガンも一呼吸をし、精神を落ち着かせた。ルガルガンの目は徐々に引いて行った。

デント「接近戦の技が多いのに、果たしてそう上手くいくかな!?イワパレス!「いわなだれ」!!?」

反動による痺れが解けたイワパレスは再び「いわなだれ」を発動する。降り注ぐ岩の雨の中をルガルガンは俊敏な動きで躲していく。

サトシ「ルガルガン!「アクセルロック」だ!!?」

ルガルガン「ガアル!!?」

デント「イワパレス!「シザークロス」!!?」

イワパレス「イツワア!!?」

躲すだけでなく隙を見つければ攻撃を仕掛けるも、ルガルガンの「アクセルロック」を簡単に受け止めたイワパレスのパワーに押されっぱなしでいた。

焦りが募る所為で前へと出るルガルガンをサトシは必死に落ち着かせていた。そのサトシの様子にデントは違和感を覚えていた。

デント「なかなか攻めてこないね！君らしくないんじゃないかな？」

サトシ「ルガルガン！まだだ…」

デント「……………。【いわなだれ】!!？」

それでも攻めてこないルガルガンにデントはもう少し様子見のためもう一度イワパレスに「いわなだれ」の指示を出した。

再び降り注ぐ岩の雨の中をルガルガンはイワパレスの周りを走り回った。全く大きな展開を見せない試合に観戦に来ている人たちの中には欠伸をあげ退屈そうにしている様子がちらほやと見当たるようになっていた。しかし、リーリエ達は気を緩めない試合である事は分かっている。

サトル「なんか…デントさんの方が焦っているように見えない？」

カノン「焦ってる？」

ソウタ「どう見たって、デントさんの方が優勢に見えるだろ！」

サトル「そうなんだけど…」

息を殺して見守る中、何かを感じたサトルは口を開いた。「いわなだれ」でルガルガンを追いついでいるデント側が有利に立っているように見えるが、さっきのデントの発言もあつて全く攻めに転じないサトシに動揺を隠せていないのも確かであった。

デント「「いわなだれ」だ!!?」

サトシ「躲せ!」

サトシの指示に従いつづけるルガルガンはさらに「いわなだれ」を躲し続ける。そして、連続攻撃を仕掛けたイワパレスに若干の疲れが見え始めていた。

サトシ「後ろに回れ!」

動きが鈍ってきた所を見計らったサトシはルガルガンをイワパレスの後方へと回した。

サトシ「「ストーンエッジ」!!?」

イワパレス「イワツッ…」

サトシ「「アクセルロック」!!?」

ルガルガン「ルガア!!?」

イワパレス「イッワ!!」

背後を取られたイワパレスも急いでルガルガンの方へと体を向けようとするも間に合わず、そのままルガルガンの連続攻撃を浴びせられた。

素早さ負けしてしまったと見て捉えられると思うが決してそれだけではない。イワパレスに疲れが見え始めていたように、いつ攻めてくるか分からない状況に加えて連続攻撃を繰り返すことによる疲れが重なり動きが鈍ってしまった事も原因であった。そして、今までルガルガンに攻撃の指示を出さなかつたのもその一瞬の隙を狙うためのサトシの作戦でもあつた事にデントは気づいた。

デント「イツシュを旅をしていた頃の君とは別人のように感じるよ。僕の知っているサトシはどんな強敵を前にしても攻めて攻めまくる！決して物怖じしない戦いを見せるトレーナーだったからね！」

サトシ「へへえ！そんな俺たちも成長したって訳さあ！」

今までのサトシではない。その言葉が再びデントの脳裏をよぎつた。昔のサトシとは違うバトルスタイルに戸惑うのと同時にサトシの新たななるフレイバーに酔いしれている自分がいた。なによりも楽しくて仕方がない！

デント「ならイワパレス！僕たちも更なるフレイバーを醸し出していくよ！」
イワパレス「イワツ!!？」

デントの声にイワパレスはもう一度気合いを入れ直した。

デント「【からをやぶる】!!？」

殻から飛び出したイワパレスは眠るパワーを一気に解放させた。

サトシ「くっ!!?」

ルガルガン「ガアル!!?」

パワーと俊敏な素早さを手にしたイワパレスはルガルガンの周りを囲い始めた。さつきと反対の立場となったルガルガンは素早くなったイワパレスの動きに翻弄されてしまった。

デント「【シザークロス】!!?」

ルガルガンの目を盗んだイワパレスは鋏のように交差させた二本の腕でルガルガンに【シザークロス】を浴びさせた。

サトシ「負けるな!【ストーンエッジ】!!?」

デント「【がんせきほう】だ!!?」

重たい一撃を食らったルガルガンはなんとか踏み止まると岩柱を出現させて反撃に出る。【シザークロス】の攻撃を耐えた事に驚くもデントも空かさずイワパレスに指示を出す。指示が遅れたものの【からをやぶる】のお陰で素早くなった事を生かして、すぐに攻撃へと移すことが出来た。

殻へと戻ったイワパレスは巨大な岩石を形成し、ルガルガンに向かって撃ち放った。【がんせきほう】と【ストーンエッジ】がぶつかると岩タイプ最高クラスのパワーを前にしては歯が立たず、技を打ち消されたルガルガンはそのまま【がんせきほう】を受けて

しまった。

サトシ「ルガルガン!!!」

ルガルガン「ルガア!!?」

受け身をとったルガルガンは地面に叩きつけられることはなかった。

タケミツ『ルガルガン!すぐに立ち上がった!』

ドン『「ストーンエッジ」で威力を和らげたのが幸いだったりする!』

しかしこの二撃でルガルガンはかなりの体力を消耗していることは見てわかる。しかし、「がんせきほう」を使ったイワパレスを前に、このチャンス逃すことは出来ない。

サトシ「走れ!ルガルガン!!!」

ルガルガン「ガアル!!?」

タケミツ『ルガルガン!走り出した!』

ドン『「がんせきほう」を打った後は暫く動けない。攻撃をするなら今がチャンスだったりする!』

【「がんせきほう」はそのとてつもないパワーを打つ込めると引き換えにその反動で暫く身体を拘束させてしまう技。しかし…

サトシ「流石に反動で動けない対処法は取っていたか…」

歩みを止めたルガルガンの先には殻に閉じこもっているイワパレスの姿があった。

「がんせきほう」を撃つ時に殻へと戻ったのはこのためであったのだ。殻へと潜られた状態ではルガルガンの攻撃は一切封じられてしまう。反動による弱点をそのままにして置くわけがなかった。対策もバツチリだったデントを前にサトシはさらに追い込まれる形になった。

マオ「全く隙を与えてない！」

スイレン「強い！」

気づけばまたデントに風向きが変わってきていることに驚くマオ達。デントの実力に圧巻される場面が続いていた。

デント「サトシ!もうおしまいかい!?」

サトシ「そんなわけないだろ！」

デント「そうだよね！」

イワパレス「イワア!!？」

デント「【いわなだれ】!!？」

イワパレスの攻撃により砂埃が巻き上げられた。視界を奪ったイワパレスは再度殻から飛び出した。

デント「もう一度!【からをやぶる】!!？」

タケミツ『ここでイワパレス!二度目の【からをやぶる】を発動した!』

ドン『次の一撃に全てを賭けているようにみえたりする!』

このバトルがもつと続いて欲しいと願うもいつかは終わりを迎えてしまう。悔いを残さないようデントは力一杯最期の指示を唱えた。

デント「〔シザークロス〕!!!」

急降下で突っ込んでくるイワパレスにルガルガンは身構えた。デントのありつたけの声に刺激を受けたサトシはデントの想いを受け止めるかのように一か八かの賭けに出た。

サトシ「受け止めろ! ルガルガン!!!」

リーリエ達「「「ええええ!!!」」」

ロトム『なんでロト!!? やられるロト!!?』

躲す指示を取らないサトシの判断にリーリエ達は声をあげたが、ルガルガン本人はそんなサトシの指示に一切の躊躇もなくイワパレスの〔シザークロス〕を受け止める体勢を取った。赤く充血した目に睨まれながらも怯むことなくイワパレスはルガルガンの頭部へとハサミを振り落とした。

イワパレスの重たい一撃を受け止めたルガルガン。その威力は地面に大きな亀裂が走った。

タケミツ『〔シザークロス〕が決まった!!!』

イワパレスの一撃により白目になったルガルガン。意識が飛びそうになる中、サトシの声がルガルガンに力を与えた。

サトシ「頑張れ!!!ルガルガン!!!」「カウンター」だあああ!!!」

ルガルガン「ガアルアアア!!!」

意識を保てたルガルガンは、イワパレスから貰ったダメージを逆に攻撃エネルギーに変えると、そのまま気迫で押し返した。

イワパレス「イワア!!!」

状況を一気に奪回させるほどの一撃は大きな身体を持つイワパレスを簡単に投げ飛ばした。勝利を確信したデントにとつてこのルガルガンの隠し球はミスティックであつた。

タケミツ『「カウンター」が決まったあああ!!!』

ドン『攻撃力が四段上がった「ジザークロ」!そのダメージの二倍の威力!これは相当なダメージが入ったりする!』

イワパレスを吹き飛ばしたルガルガンであつたが、もう立っているのがやつとの状態だ。そして、イワパレスも根性で立ち上がった。戦闘不能になつてもおかしくない一撃を受けたのにも立ち上がるイワパレスの姿に多くの人は驚いていた。イワパレスがまだ戦えるとみたサトシはすぐに指示を出す。

サトシ「ルガルガン!!!」【アクセルロック】!!?」

デント「イワパレス!!!」【ジザークロス】!!?」

防衛を捨てたいま、殻へと戻る時間もないと判断したデントもイワパレスに再び技の指令を下した。

先制攻撃を仕掛けたルガルガンの技が先に決まり、そのままイワパレスは大きなハサミで再びルガルガンは地面へと叩きつけた。

その衝撃で砂埃が二体を包み込んだ。

そして…

砂埃が晴れたフィールドには今にも倒れそうなルガルガンと目を回しているイワパレスの姿が…あった

審判「イワパレス戦闘不能!ルガルガンの勝ち!よって勝者はサトシ選手!」

タケミツ『大決戦の中!勝ったのはサトシ選手だ!』

ドン『出場するのはマーマネ選手とベル選手です!』

二日目のドンバトルはまだ終わっていない。第3回戦! マーマネとベルの試合が始まろうとしている。

ベル「さあ行くよ行くよ! エンブオー!!?」

エンブオー「エンブオー!!?」

ベルが選んだポケモンはエンブオーだ! 登場するなり大きな鼻から炎を吹く! 初めで見るとポケモンを前にマーマネは少しばかり怯んでしまっている。

タケミツ『ベル選手が選んだのはエンブオーだ!!!』

サトシ「エンブオーで来たか!」

ロトム『解析はお任せロトム!!?』

『エンブオー おおひぶたポケモン

炎・格闘タイプ

アゴの炎で拳を燃やして炎のパンチを繰り出す。パワーとスピードを兼ね備えた格闘の技を身につけている。とても仲間思いなポケモン。』

デント「エンブオーはベルの最初のポケモンだ! マーマネはどう戦うか見ものだね!
!」

深呼吸をし気を落ち着かせるとマーマネはモンスターボールを取り出した。

マーマネ「あつ: トゲデマル! 今回は休んでね」

トゲデマル「モギユ:」

マーマネ「行くよ! クワガノン!!!」

クワガノン「クワア!!?」

カキ「!? クワガノンでいくのか!」

ロトム『虫タイプを持つクワガノンは炎タイプのエンブオーとは相性が悪いロト!!

?』

ソウタ「なあくに! 炎タイプの技を受けなきゃいいんだ!」

コテツ・ケニヤン「「そうだな!」」

サトル「そう上手く行くものではないと思うけど:」

両者のポケモンは出揃った。ロトムの言う通り、マーマネの手持ちには炎タイプと相性のいいポケモンがないのがネックであった。だから今回マーマネは自分の手持ちの中でも攻撃力が高いクワガノンで勝負を挑む気だ。

両者顔を見合わせるとクワガノンはハサミから電気を帯び、エンブオーは火吹きで

各々のやる気をアピールする。そんな二体を前にマーマネもベルもやる気がさらに満ち溢れてきた。

ベル「宜しくね！マーマネ君！」

マーマネ「負けないよ！ベル！」

審判「試合開始！」

？マーマネVSベル？

ベル「行くわよエンブオー！【つつぱり】!!？【つつぱり】!!？」

エンブオー「エンボオ!!？」

マーマネ「避けて！」

クワガノン「クワツ!!？」

巨体に似合わないスピードで先制攻撃を仕掛けたエンブオー。その連続攻撃をクワガノンは全て躲していく。

マーマネ「いぞクワガノン！【シグナルビーム】だ!!？」

ベル「エンブオー！【かえんほうしゃ】!!？」

不思議な光を集めたクワガノンはそれを発射し、その技に対してエンブオーも火炎放射で対抗した。二つのパワーは混じり合い、爆発ともに相殺された。

タケミツ『両者の攻撃が炸裂しました!』

ドン『パワーは直角といった感じだったりする!』

煙がフィールドを包み込む中、怯まずマーマネは次の指示を出した。

マーマネ「今だ!『ワイルドボルト』!!?」

電気を体から放射されたクワガノンは雷鳴の如く、エンブオーに向かって突撃を仕掛けた。しかしクワガノンの「ワイルドボルト」が迫るとエンブオーは躲すどころか迎え撃つようにして両腕を前に出した。

エンブオー「エンボオ!!?」

クワガノン「クワツ!」

マーマネ「何!!!」

エンブオーの行動に驚く一同、しかしさらに驚きの展開が待っていた。エンブオーはクワガノンの両バサミを掴んで「ワイルドボルト」を受け止めた。身体中に電気が流れ込むもエンブオーはその手を離すことなくクワガノンの勢いを押し殺した。

ベルの無茶苦茶戦法に付き合っていたお陰なのか?ダメージを追いながらもクワガノンの「ワイルドボルト」を止めたエンブオー。その手はまだクワガノンを捕らえてい

た。

ベル「いいわよ♪エンブオー！そのまま【かえんほうしゃ】よ!!？」

エンブオー「エンブオ!!？」

クワガノン「クワアア!!!」

マーマネ「クワガノン!!!」

身動きが取れないクワガノンは至近距離で効果抜群の火炎放射を浴びてしまった。熱風に吹き飛ばされながらも顎を掴まれたクワガノンに逃げ場はなし。

タケミツ『あつと！クワガノンには効果抜群の炎タイプの技が決まりました!』

ドン『これはかなりのダメージだったりする!』

火炎放射を受けたクワガノンは苦しそうに地面へと着地してしまった。この様子からにして次の一撃で戦闘不能になってしまうであろう。次の攻撃が来る前に躲きたい所であるが火傷を負ったクワガノンはすぐに飛んで躲す気力がなかった。

ベル「もう一度!【かえんほうしゃ】!!? やっっちゃえ!」

しかしだからと待つてくれる訳はない。このチャンスを狙ってエンブオーは大きく息を吸い込み始めた。

デント「ここまでか…」

カキ「くっ…」

誰もがマーマネの敗北を過るが、そのマーマネ自身はなんとか打開策を練り始めた。クワガノンの残りの技を合わせて逆転の突破口を探り出したマーマネはある一つの技に注目した。この技にかけてすぐにクワガノンに指示を出した。

マーマネ「そうだ：クワガノン!「いとをはく」!!?」

マーマネの声を聞いたクワガノンは糸を発射した。そしてこの糸は攻撃をするためのものではない。発射された糸はエンブオーの顎を絡め取った。

エンブオー「エ!エンブオー!!」

ベル「ええええ!!」

タケミツ『なんとクワガノンの糸がエンブオーの口を塞いでしまった!!!』

ドン『うむ!この状態だと「かえんほうしゃ」を撃つことは出来なかつたりする!』
咄嗟の機転により風向きを大きく変えた。サトシと出会う前の頃は何かと諦め癖もあつたマーマネであつたが、マオやカキにスイレン。そして現在カントーリーグに向けてさらなる成長を遂げているリーリエに刺激を受けた事がマーマネに諦めない心の灯火を灯したのであろう。エンブオーの動きが止まったの見計らい、マーマネ達の逆襲が始まる。

マーマネ「クワガノン!連続で「でんじほう」だ!!?」

クワガノン「クワッ!!?」

エンブオー「エンボオオ!!!」

命中率の低い技であるが身動きが取れないエンブオーに当てるのは容易い事であった。クワガノンも主人であるマーマネのためにやけどを負った身体で反撃に出た。糸の所為で思うように動けないエンブオーはクワガノンの連続攻撃を浴びせられた。この逆転の状況にベルは焦り出した。

ベル「なんとかして！エンブオー!!!」

混乱したベルの必死の声にエンブオーはクワガノンの攻撃を受けながらも、顎に灯された炎を大きく燃えあげた。燃え上がった炎はそのまま口を塞いでいる糸に引火した。

スイレ「アゴの炎で焼き切っちゃった！」

アシマリ「アウアウ!!？」

ナギサ「イブイ!!？」

動きやすくなったエンブオーはクワガノンを見つめた。行動が自由になったエンブオーを見てマーマネは更新の一声を上げた。

マーマネ「攻めるよ！【ワイルドボルト】!!？」

ベル「迎え撃って！【アームハンマー】!!？」

突進してくるクワガノンに向けてエンブオーは拳を振り上げた。両者の技が激闘し、激しい押し合いが始まった。だが：

エンブオー「エン…ブオ…」

ここでエンブオーの動きが一瞬止まってしまった。そう!クワガノンの「でんじほ
う」による追加効果、麻痺状態だ。当たれば確実に相手の体の自由を奪う技にエン
ブオーは動きが鈍り、クワガノンの気迫に押し負けられてしまった。

エンブオー「エンボオオ!!!」

ベル「エンブオー!!!」

一瞬の緩みが勝敗を分けた。クワガノンの猛攻に耐えきれず、エンブオーはそのまま
背中から倒れてしまった。

審判「エンブオー戦闘不能!クワガノンの勝ち!よって勝者はマーマネ選手!」

タケミツ『大逆転!マーマネ選手!準決勝へ進出だ!!!』

勝敗が決し、クワガノンはマーマネの方へと戻った。マーマネ本人は勝てた事に驚き
そのまま立ち尽くしていた。

マーマネ「か…勝っちゃった…」

クワガノン「クワツ!!?」

そしてクワガノンの呼びかけに我に帰り、マーマネは強くクワガノンを抱きしめた。

マーマネ「ありがとう!クワガノン!」

クワガノン「クワツ!!?」

トゲデマル「モギユウ!!？」

勝利を嘯み締めたマーマネとポケモン達はしばらくの間、勝利を喜び合った。諦めない心が掴んだ勝利！見事であった。

ベル「ありがとうエンブオー！ゆっくりじっくりと休んでね！」

勝負に負けたベルはエンブオーに労いの言葉をかけてモンスターボールへと戻した。

ベル「おめでどう！マーマネ君！私に勝ったからには優勝してよね！」

マーマネ「ありがとう！ベル！僕、頑張るよ！」

~~~~~

二日目の大会。カキにサトシ。そしてマーマネと勝ち抜け、残る試合は最後となった。イツシュ地方ではライバルとしてサトシの前に立ちはだかるトレーナーである二人が今、このカントー地方で一戦を交える事となる。この対戦カードは二人と戦った事があるサトシですら分らない物となるだろう。

ケニヤン「こうして戦うのは初めてだよな！お互い悔いのないバトルをしようぜ！」

シューティー「ああ！よろしく！」

サトシ「二人とも！いいバトルを期待してるぞ！」

ケニヤンとシューティー。イツシュ地方では戦う機会がなかった二人がサトシと再

会を果たしたここカントー地方でぶつかる事となった。互いにトレーナーサイドに着くと、まずはシューテーターから今回戦うポケモンを選出した!

シューテーター「行けっ!ローブシン」

ローブシン「ローブシン!!?」

シューテーターが繰り出したのはローブシンだ!二つの柱を大きく振り回して、会場中にその力をアピールした!

サトシ「ローブシンか!」

リーリエ「あれがローブシン…」

『ローブシン きんこつポケモン

格闘タイプ

杖代わりのコンクリートの柱を筋力を使わず自在に振り回す技を持つ。コンクリートを作る技術は2000年前にローブシンから教わったと考えられている』

ケニヤン「悪いなゼブライカ!お前で行こうと思っただけど、今回もこいつで行かせてくれ!」

今回ケニヤンはゼブライカを繰り出すつもりであったが、相手が繰り出した格闘タイプを見てその考えは変わった。相手が筋肉を自慢とするポケモンであるのなら、ケニヤンが繰り出すのはあいつだ！

ケニヤン「今回も頼むぞ！ダゲキ！」

ダゲキ「ダツキイ！！？」

コテツ「ケニヤンの奴！またダゲキだ！」

ルカリオ「リオ！！？」

審判「試合開始！」

? シューティーVSケニヤン?

シューティー「【ビルドアップ】！！？」

ケニヤン「【ビルドアップ】！！？」

タケミツ『両選手！同時に【ビルドアップ】の指示を送りました！』

ドン・ジョージ『こりゃ、全身全霊！真っ向勝負とみたりする！』

お互いに格闘タイプなだけでもあつて、シューティーもケニヤンも考えることは同じだったようだ。物理技が飛び交うと思われるこの試合を制するのはどちらかの一手で決まってしまうと考えられる。

ケニヤン「行くぞ!ダゲキ!【ローキック】だ!!?」

まずはダゲキから仕掛けて行つた。ダメージを与えつつ素早さを下げてローブシンの動きを鈍らせるのも狙いだろう。

シューティー「ローブシン!【がんせきふうじ】だ!!?」

しかしシューティーはケニヤンと違う攻め方に切り替えた。【がんせきふうじ】も物理技のため【ビルドアップ】の恩恵を受けている。次々とローブシンの行く手に聳え立つ岩壁に接近をかけるダゲキを感わしていく。

デント「ダゲキは肉体強化の技と接近戦の技しか持っていない。遠距離攻撃ができるローブシンに今のところ部があると見えるね!」

一回戦目のマオとの試合でダゲキのバトルスタイルを観戦していたシューティーはもうすでにダゲキのバトルスタイルは把握していた。

シューティーがローブシンを繰り出したと見て、もう一度ダゲキを二回戦目に続投させたのだが手の内がバレてしまっている以上は一枚上手に攻めていかなければならないようだ。

シューティー「攻撃を続ける！」

さらにローブシンの「がんせきふうじ」はダゲキを追っていく。なんとか躲していくダゲキであつたが、突然として後方に出現した岩壁に身体をぶつけてしまった。

ケニヤン「しまった！」

ダゲキ「ダツキ!!!」

膝をついた隙に前方からも岩壁が出現し、ダゲキの包囲した。逃げ場のないダゲキに岩壁が邪魔でダゲキの姿を確認できないケニヤンは次の指示を出せないでいる。

サトシ「あれ！俺との試合でデントのイワパレスがやったのと同じだ！」

デント「僕とサトシの試合を観て、瞬時に自分のバトルスタイルに取り入れたようだね！」

シューティー「ローブシン！【いわなだれ】だ!!?」

ローブシンは身動きが取れないダゲキの頭上から無数の岩の雨を振り落とした。四方八方に塞がれてしまったため躲す場所が見つからない。ケニヤンはダゲキを信じて大きな賭けに出た。

ケニヤン「そうだ！ダゲキ！【ビルドアップ】!!?」

ダゲキ「ダキイ!!?」

ケニヤンの指示を聞いたダゲキはさらに自分の攻撃と防御を高めた。しかし、無数の

岩は滝のようにしてダゲキに振り落とされた。その衝撃で「がんせきふうじ」で出現させた岩壁も崩壊した。攻撃を食らったダゲキは瓦礫に埋もれてしまった思ったが、その岩が爆散すると、中からはほぼ無傷のダゲキが現れた。ケニヤンが「ビルドアップ」で狙ったのは攻撃ではなく防衛の方みたいだ。

ケニヤン「どうだ!俺のダゲキの鋼の肉体の前ではそんな攻撃は屁でもないぜ!」

わざと相手の技を受けてでの対処方法にシューティーは目を丸くした。しかし、それは同時にシューティーの魂を燃え上がらさせた。

シューティー「面白い!ローブシン!次は「かいりき」だ!!?」

ローブシン「ローブシン!!?」

小細工は通用しない相手と見たシューティーはローブシンが得意とする接近戦へと切り替えた。その指示に笑みが零れたローブシンは大きな鉄骨を持ってダゲキへと走り出した。

ケニヤン「【からてチョップ】だ!!?」

ダゲキ「ダキイ!!?」

対抗してダゲキも向かってくるローブシンに【からてチョップ】を仕掛けた。しかし、攻撃力を二段階あげたパワーを放つが、元から攻撃の種族値が高いローブシンの怪力に押されてしまった。勢いよく振り下ろされた鉄骨がダゲキを後方へ吹き飛ばした。

ダゲキ「ダキイイ!!!」

ケニヤン「負けるな!ダゲキ!!!」

ケニヤンの声にダゲキはすぐ起き上がり体勢を立て直した。しかし、シューテイーとローブシンの攻撃は容赦なく襲いかかってきた。

シューテイー「【かいりき】だ!!?」

ケニヤン「負けてたまるか!!!【インファイト】!!?」

さらに鉄骨をダゲキに振り下ろされるもダゲキは【インファイト】で押し返した。ダゲキの猛攻による連続攻撃をローブシンは鉄骨を盾にして攻撃を防ぐ。しかし、ダゲキの攻撃は一発一発とどんどんパワーが上がっていき、ローブシンは防御の体勢を取るだけで精一杯であった。そして、ついにはダゲキの攻撃はローブシンを押しつけた。

ローブシン「ローブシン!!!」

シューテイー「しっかりしろ!ローブシン!!!」

ダゲキの攻撃を受けたローブシンはそのまま倒れてしまった。なんとか起き上がるも、今度はケニヤンとダゲキが倒れ込んでいるローブシンを襲いにかかった。

ケニヤン「決めろ!最大パワーで【からてチョップ】だ!!?」

シューテイー「ローブシン!【ばぐれつパンチ】だ!!?」

渾身のパワーを溜め込んだダゲキは勢いよくローブシンの頭上へと手刀を振り下ろ

した。しかし、ロープシンにすぐに指示を出したシューティーの声に反応し、ロープシンも最大のパワーでダゲキへと攻撃を仕掛けた。

二体の拳がぶつかり合うとパワーが爆散し、大きな衝撃波がフィールドを大きく揺らした。地響きが鳴り止むと、まだ拳と拳をぶつけたまま硬直状態の二体が目と目を合わせていた。

ダゲキ「ダ…キイ…」

すると、ダゲキの両足が小刻みに震えだすと、ダゲキはそのまま倒れてしまった。

ケニヤン「ダゲキ!!」

審判「ダゲキ戦闘不能!ロープシンの勝ち!よって勝者はシューティー選手!」

第四試合の決着がついた。会場からは格闘タイプ同士の戦いに歓声が鳴り響いた。試合終了のコールが流れたと同時に倒れたダゲキの元へとケニヤンはすぐに走り出した。

ケニヤン「ダゲキ!大丈夫か!」

ダゲキ「ダツ…キ」

ケニヤン「よく頑張ってくれたな!すぐにポケモンセンターに連れて行ってやるからな!」

こうしてダゲキを戻したケニヤンはシューティーの元へと向かった。

シユータイー「良くやった！ローブシン！」

ケニヤン「いい試合だったぜ！次の試合も頑張れよ！シユータイー！」

シユータイー「君の気迫には何度も押し倒れそうになった。ケニヤンのダゲキの戦いはローブシンにとつてもいい刺激になったと思う！」

ケニヤン「そうか！だけどアクセント…違う…」

シユータイー「えっ…」

~~~~~

ドン『さて！二回戦の試合は全て終了だったりする！そして！勝ち上がった4名はモニターを見て欲しかったりする！』

そして、明日の最終戦のカードが発表された。

第一試合 サトシVSカキ

第二試合 マーマネVSシューティー

タケミツ『準決勝ならびに決勝は明日行われます!』

サトシ「カキとか!」

カキ「久々だな!いい試合しようぜ!」

マーマネ「僕の相手は…シューティーか…よ…宜しく!」

シューティー「こ…こちらこそ!」

暑きドンバトル、二日目は無事に終了した!さて、明日はラストバトル。優勝するのは果たして誰か!?

ポケットモンスターG 番外編

ACT 1

カントー ジョウト ホウエン シンオウ

イツシュ カロス アローラ

そして、この世界にはもう一つの地方が存在している。

【オーレ地方】

砂漠が広がる土地であり、街から街へは、かなり離れているためバイクやスクーターを利用しなければ少し移動には不慣れた地方である。

また、何かと問題が起こすとても治安が悪い地方でもあるためこれと言った観光名所もなければ観光客があまり来る事もない。

イツシュ地方とはそれなりに近い位置にあるためかポケモンジム等の施設も存在していない。その代わりにポケモンコロシウムやバトル山と言ったトレーナー同士の腕試しを試すことが出来る施設等が存在している。

そんなオーレ地方はバトルが盛んな地方であつて腕試しをしに強者のトレーナーが他方から訪れてくることもあつたが、十年前ぐらいに起きたある事件を境に完全に他の地方とは隔離されてしまう地方へとなつてしまったのだ。

【ダークポケモン計画】

ポケモンの心を完全に閉ざさせ戦闘能力を無理矢理上げさせることにより、ポケモンを戦闘兵器化とさせ悪事に利用させるオーレ地方全体を飲み込むほどの大事件である。後にその事件は勇敢な少年少女の活躍により、その計画は見事に打ち破ることが出来た。

今は二度とそのような悲劇を繰り返してはならないと、ポケモン協会はオーレ地方の復興に取り組んでいる。その事件で傷ついたポケモン達の心はリライブによって元の状態へと戻すことが出来、事件はこうして幕を閉じたように思えた……

クチバシティの港に一人の少女がこの地に足を踏み入れた。腰まで下ろした青色が少し混じった美しい黒髪を風に靡かせながら、その少女は船を降りた。

「おーい！その姉ーちゃん！よかつたら俺とバトルしてみねえか？」

いかにもチャラついた男性がモンスターボールを片手にその少女に近づいてきた。普通なら怖いなあという感情が表れてくるものだが、自分の出身にはこういうゴロツキがうろつき廻っているのは良くあることなので怖くはなかった。少女はその男に笑顔を向けると、自分のモンスターボールを取り出した。

「いいですよ、お手柔らかに♪」

バトルは一瞬にして決着が着いた。

そのバトルを見た他のトレーナー達もその少女にバトルを次々と申し込んでいく。もう二十人近くのトレーナーと戦ったのであろうか、その少女はあれだけの人数を十五分たらずで勝利を勝ち取っていった。彼女に挑もうとする輩はもうおらず、バトル施設を出るとポケモンセンターへと向かった。

くくくく

バトルに疲れたポケモン達を回復させている間、ソファアに腰を下ろすと、バックからポケギアを取り出した。

「アイラです。いまカントー地方に到着しました」

『おお！アイラか。長旅ご苦労であった』

「いえ、そんなに退屈するほどではありませんでした」

『そうか…』

少しの沈黙の後、連絡している相手から声が届いた。

『それでは君に早速やつてもらうことは、もちろんシャドーの生き残りの調査だ』

「もちろん、それは分かりますが具体的には何をなさればいいのですか？」

『おっと…そうだな。えっと…何を…か』

「勢いだけで計画性がない所は相変わらずですね。よくそれで国際警察のリーダーとしていられるとは…」

『君は…相変わらず言葉に棘があるな(笑)そうか薔薇のような美しさを持っている君なら仕方のないことであるが…』

「まずは聞き込みから始めさせて頂きます。その後、目星がついた所を私が独自で現場へと向かいます」

言葉を遮るようにしてアイラは言い放った。頭を突きつけるような鋭い彼女の声に

からかうのをやめたその国際警察の男は口を開いた。

『そうだ。少し気になることがあったのだ』

「気になること？」

『ああ：以前にイツシユで確認されているポケモン、ペンドラーというポケモンがトキワの森で保護されたという知らせを受けたんだ。だが、そのポケモンの進化前と分かるポケモンがトキワの森で確認されていなかったため、このペンドラーはトレーナーに捨てられたポケモンである可能性が高いんだが、少し私には妙に感じてな』

「妙ですか？」

『そのペンドラーはレベルもかなり高いポケモンなんだ。捨てられたにしても、そんなポケモンを捨てる理由がどこにあると思う？弱いならまだしも、強いポケモンを捨てるとは……』

確かにそれは妙だ。強すぎて手に負えなかったからか？いや、それでも戦力として考えているのなら手放す可能性は低いもの。

アイラは一つの可能性を感じた。

「わざと放たれたポケモンではないのでしょうか？」

『ん？わざとだと？』

「環境の生態を崩して、国際警察や保護施設官がそつちの問題に目を向けている時にま

た別の計画を企てている可能性も考えられます」

『つまり、領土を広げることと自分達の計画を悟られないようにするためのカモフラージュということか…』

暫くアイラの推理に考え込む国際警察は少し考えた所でアイラに指示を出す。

『カントーに生息していないポケモンが暴れまわっているのはシャドーの生き残りと関わっている可能性が高い。アイラ！君にはまずそのポケモン達の保護を任せて頂きたい！もしかするとシャドーに関わるヒントがあるかもしれない。頼むぞ！』

「了解致しました！」

その声とともに連絡は途絶えた。連絡が終わったと同時にポケモン達の回復終了のアナウンスが鳴り響いた。ポケモン達が入ったモンスターボールを六つ受け取ったアイラは聞き込みを始めた。

もう、あんな悲劇を引き起こしてはいけない。

何も出来ずにただ怯えることしか出来なかった私はもういないんだ。
今度は私が：奴らの計画を止めてやる!!!

私の名前はアイラ。出身はオーレ地方。

ACT 2

アイラは聞き込みを始めた。どんなに些細なことでも構わない。ポケモンセンターを訪れているトレーナー達からシャドーの情報を聞いて周った。

だが、もう他の地方のポケモン達がカントーにやってきていることが不思議とは感じなくなつた今の時代。それに困惑するトレーナー達はおらず、まともな情報を得ることが出来ずにいた。

休憩がてらにモモンの実のフロートジュースを飲んでいるアイラの元に一人の男性が歩み寄る。

「はーい！もしかして君は観光客かい？」

「ええ……まあ」

「そうかい！じゃあここカントーのパンフをどうぞ！」

「あ……ありがとうございます」

パンフを受け取るとその男は何処かへ行ってしまった。カントーの地形についてもちようど知っておきたかったアイラはパンフレットを開いた。トキワの森やオツキミ山、イワヤマトンネル、サファリパーク。カントーのポケモンスポットや出現ポケモン

…ある記事に目をやった。…
…ある記事に目をやった。…

【ふたごじま】

『カントーの海に浮かぶ氷に覆われた島

多くの氷タイプのポケモンが住んでいる。

捕まえに行くなら、厚木のコートと炎タイプのポケモンは準備しとけよ!!!
伝説のポケモンフリーザーに会えたら、君は超ラッキーだ!!!』

「…フリーザー…」

カントー地方で言い伝えられている伝説の鳥ポケモンのうちの一体だ。その記事を読んでいたアイラはシャドーの考えることを含めてある答えを出した。

「フリーザーの捕獲。その可能性は…」

否定できないものではない。シャドーの奴らはジョウトの伝説のポケモンと謳われる三体をダーク化させた前科がある。伝説のポケモンが拠点としている島なら、行ってみる価値はある。

アイラは洋服店でコートを購入すると、それを身に纏って、ふたごじままで行ってくれるボートへと乗り込んだ。

〃
〃
〃
〃

ふたごじまに近づくとつれ、周りの空気が冷やされていることが感じる。吐く息も冷やされた事により霧状となつては辺りを包み込んでいる。

異世界へと迷い込んでしまった様な感覚だ。何処かでは野生のラプラスの鳴き声が入魚の歌声のように奏でている。視界が霧によつて遮られ全く周りの様子が分からず、ボートに内蔵されたレーダーを元に島へと目指していく。

身体も少しばかりか震えてきたアイラはボートの操縦士から渡されたコーヒを飲んでみると、お互いを重ね合わせている二つの島が見えてきた。

「それじゃ、暫くしたら迎えに来るでな」

「はい。ありがとうございます」

礼を言ったアイラは一面氷に覆われたふたごじまへと足を踏み入れた。

「ムウマー！【おにび】 !!?」

モンスターボールから現れたムウマは自分の周りに青白い火の玉を出現させる。それがライト代わりとなり洞窟内を照らした。滑りやすい地面に気をつけながら奥へと進んで行く。中にはパウワウやヤドンといったポケモンがのんびりと過ごしていた。しかし、フリーザーの影が見当たらなければ、シャドーどころか人影の姿も見えなかつた。

「行つた損かな〜」

何の収穫も得られなかつたアイラは迎えが来るまで、もう少しふたごじまを探索してみることにした。すると奥から微かだが小さな光が照らされていた。不思議に思つたアイラはムウマを連れてその光が照らされた方へと歩いて行く。

アイラは通り道を抜けて一つの空間へと辿り着いた。辺りを見渡してみるとそこには一人のトレーナーとその相棒らしきポケモン、ピカチュウの姿があつた。どうやら、バトルの特訓をしているのかそのトレーナーの指示の元ピカチュウは次々と自分の倍近くある大きな氷の山に「10万ボルト」や「アイアンテール」を決めていく。そのピカチュウのレベルからベテランのトレーナーであると見たアイラは駆け足でそのトレーナーの元へと向かつた。

「こんにちは。少しだけ見せてもらつたけど貴方のピカチュウ凄いパワーね。あんな大きな氷の山を砕いちやうなんて」

アイラに話しかけられたそのトレーナーはピカチュウを自分の元へと呼び戻すと、深々とかぶっていた赤い帽子を少し上に上げた。

「サンキュ―！ なんとたつて、ピカチュウは俺の一番の相棒だからな」

「そうなんだ。ところで、君一人？」

「ああ、トレーナー修行の途中なんだ。いろいろな地形でも戦えるようにと思つて、こゝこゝ

ふたごじまに来たんだ」

「トレーナー修行か！じゃあ、ジム巡りの旅とかしてるの？」

「いや。俺、十歳の頃にこのピカチュウを連れてポケモントレーナーとして旅立ったんだ。カントー、ジョウト、ホウエン、シンオウ、イツシュ、カロスとポケモンリーグにも挑戦したんだ。で、今回はアローラ地方のポケモンリーグに挑戦するんだよ」

「凄い！そんなに出場したんだ！」

「まあ、優勝はまだだけどな。だからアローラリーグでは必ず優勝して、チャンピオンリーグに挑戦するんだ！なあ、ピカチュウ」

そのトレーナーの呼びかけにピカチュウはとびっきりの笑顔で応答に答えた。先ほど見たピカチュウのレベル、そしてそのトレーナーとの信頼関係を目の前にしたアイラの闘志は少しずつ燃え上がってきた。何にせよ目の前にいるのは六つのリーグに出場した経験のあるトレーナーだ。アイラのバトル魂が黙っていないかった。それはふたごじまに訪れた目的を忘れてしまうほどにだ。

「私ね。強そうなトレーナーを目の当たりにすると、バトルしたくて堪らない性格なんだよね。貴方にバトルを申し込みたいんだけど。受けて貰えないかしら？」

少し挑発じみた声でモンスターボールを片手に微笑むアイラにそのトレーナーも少し笑みを浮かべて返事を返した。

「いいぜ！受けて立ってやる！」

トレーナーの合図とともにピカチュウは両頬の電気袋から電気は発しながら、戦闘体勢へと切り替えた。

「私はアイラ！貴方の名前は？」

名を聞かれたその青年は赤い帽子のツバを掴みながら、洞窟内に響き渡るような声量で名を叫んだ。

「俺はサトシ！夢は世界一のポケモンマスターになることだ!!!」

ACT 3

一年中、寒さに覆われているここふたごじま。春夏秋冬をも存在していない極寒の島で二人のトレーナーによる熱いバトルが始まろうとしていた。

「さあ！出てきて!!!」

勢いよく上へと投げたアイラのモンスターボールから現われたのは…

「シヤモ!!?」

炎・格闘タイプのホウエン地方のポケモン、ワカシヤモだ。

「ピカチュウ！君に決めた!」

「ピツカ!!?」

互いの対戦相手を確認したピカチュウとワカシヤモは一步前へと出た。ピカチュウの頬から電気が、ワカシヤモの頭の鶏冠からは燃えさかる炎のように真っ赤に熱を帯びていた。

「お手柔らかにね♪」

「シヤモ!!?」

「それじゃあ！行くぞ!」

「ピッカ!!?」

アイラは軽くウインクで返すと、サトシも軽く頷いては返事を返した。目と目が合ったらポケモンバトル!それがトレーナー同士の決まりみたいなものだ。

「先手必勝!ピカチュウ!」【10万ボルト】!!?」

「ピイイカアアアチュウウウ!!?」

先に動いたのはピカチュウだ。軽く空中へジャンプすると、ワカシャモ目掛けて電撃を放つ。サトシのピカチュウの十八番である【10万ボルト】の威力はアイラの肌にも微力ながら感じていた。

「燃えろ!ワカシャモ!」【かえんほうしゃ】!!?」

「ワアアシャアアア!!?」

だが、これぐらいで怯むようなアイラとワカシャモではない。ワカシャモも【かえんほうしゃ】でピカチュウの【10万ボルト】に対抗した。ぶつかり合った技は爆風ともに相殺された。

「行っけ!」【でんこうせっか】!!?」

「ピッカア!!?」

「こつちも!」【でんこうせっか】!!?」

「シャア!!?」

技の威力の次はスピードだ。ピカチュウとワカシャモは足元が滑りやすい氷の上でも軽やかに走り出すと、そのままお互いに衝突した。反動によつて二体は後ろへと押された。

「上に飛ぶんだ！ピカチュウ!!」

さあ、小手調べはもう終わりだ。ピカチュウはさつきよりも勢いよく上へとジャンプした。鳥ポケモンの頭上を取るぐらいの高さまで上がり、その不安定な空中からすぐに電気袋から電気を発すると「10万ボルト」を撃つ体勢へと入った。

「逃がさないよ。ワカシャモ！「スカイアツパー」!!?」

「シヤツモ!!?」

「ピッ…カア!」

上空高くにジャンプしているピカチュウだがこの技の前に関係ない。空高く突き上げた拳がピカチュウの電撃が決まる前に命中した。「スカイアツパー」が決まったピカチュウはそのまま地面へと落ちていく。

「続けて「かえんほうしゃ」!!?」

さらにワカシャモの火炎放射が襲いかかる。地面へと真つ逆さまに落ちていくピカチュウに躲す手がない。

だが、ピンチをチャンスに変えるのはサトシの専売特許である。地形を利用してサト

シはピカチュウに指示を出す。

「地面に【アイアンテール】!!?」

「チュウウウウピツカアア!!?」

着地の瞬間を狙ってピカチュウは鉄の尾で氷を叩き割った。その衝撃で飛び散った氷の破片がそのまま壁となり、火炎放射を防いだのだ。

「うっそー!!そんな防ぎ方があるの!」

「ピカチュウ!【でんこうせっか】!!?」

「ピツカ!!?」

「シャー!」

予想外の事に驚くアイラ。だが、驚いている場合ではない。氷の破片と火炎放射がぶつかったことで発生した水蒸気がうまい具合にピカチュウの姿を消すことになった。ピカチュウの様子が捉えないワカシャモにピカチュウの電光石火が決まった。電光石火を食らったワカシャモはそのままアイラのいる方へと吹き飛ばされた。

「今だ!【エレキボール】!!?」

「ピカピカピカ…」

「【かえんほうしゃ】!!?」

「チュピイ!!?」

「シャアアア!!?」

ピカチュウはさらに電気を帯びた球体をワカシャモ目掛けて投げ入れた。吹き飛ばされながらもワカシャモも火炎放射でピカチュウの電撃玉を打ち消した。相殺されたことよって発生した煙が二体の前に発生した。再びお互いの姿が見えなくなったことにより、相手の出型を見て警戒し始める。

.....。

.....。

「つばめがえし」
!!？」

だが…

「シャモ!!?」

「ピイカアア!」

「ピカチュウ!!!」

発生した煙は空気よりも軽いため下の辺りはそんなに煙は密集してはいない。ワカシャモは視線を低くして煙が充満していない僅かな下からピカチュウの姿を捕らえたのだ。

「よっしやあ!続けて【かえんほうしゃ】よ!!?」

「シャ…」

すぐにワカシャモは火炎放射の体勢をとろうとしたのだが…

「ワカシャモ?」

「シャ…シャモ…」

突然、ワカシャモの身体からは電気が帯び始めていた。そのせいで身体が痺れてしま
いすぐに次の攻撃を移せなかったのだ。

「しまった。《せいでんき》…」

物理攻撃が裏目に出たか。ピカチュウの特性によって麻痺状態となったワカシャモ
はその場で行動停止となった。その瞬間をサトシは見過ぎなかった。

「チャンスだ！ピカチュウ【エレキボール】!!？」

動けないワカシャモにピカチュウの【エレキボール】が炸裂した。

「続けて【でんこうせっか】!!？」

「ピッカ!!？」

「シャアアア!!!」

「あっ!!!」

「どうだ!!!」

ピカチュウの電光石火がワカシャモの腹部に入る。戦闘不能は免れたもののワカ
シャモはフラつきながら立ち上がる。すると…

「シャアア…」

ワカシャモの鶏冠辺りから熱のような赤いエネルギーが発すると、徐々に赤いオーラ
のように身体へと纏わりつき始めた。

「《もうか》か…」

体力が寸前の所まで達すると炎タイプの攻撃力が上がるワカシャモの特性。ピンチをチャンスに変える。一発逆転を測る特性だ。

「【10万ボルト】!!?」

「【かえんほうしゃ】!!?」

両者の決め技とも言える技が交わる。

「ピィィ…」

「シヤア…」

爆風によって吹き飛ばされたピカチュウとワカシャモはなんとか体勢を止めた。炎タイプの威力が上がっているのにも関わらず、それと互角以上の力を発揮するピカチュウにアイラは驚きを隠せないでいた。

「やっぱリーグ功績者は違うわね!こんなに強いピカチュウ初めて会ったわ!」

「ああ…スツゲー強いな!アイラのワカシャモ!」

「だけど、負けないよ!」

「俺だって!」

サトシとアイラが次の指示を出そうとしたその時。

!!!
ツ
ン
ベ
ア
ア
ア
ア
ア
ア
ア
!!!

「何だ！いまの声は？」

突然の唸り声が洞窟中に響き渡った。それを聞いたアイラの表情は険しいものとなっていた。

「ごめんサトシ！バトルの方は中断させて!!急ごう！ワカシャモ！ムウマ！」

「待てよ！アイラ!!!」

ワカシャモとムウマを連れて声が出た方へと走り出すアイラにサトシも無我夢中となつてアイラの跡を追い始めた。

洞窟道を抜けて、さつきよりも広いホールへと着いたサトシとアイラ。そして、その目の前には一体のポケモンがサトシ達を睨みつけていた。そのポケモンは先ほどと同じ唸り声を上げると両腕を振り下ろして冰山を叩き割った。パワーを見せつけたそのポケモンは誇らしげた表情を浮かべて、こちらを睨みつけてきた。

「あのポケモンは？」

「ツンベアーだ！」

「サトシはそのポケモンの名を言ったと同時にポケモン図鑑を開き始めた。」

『ツンベアー どうけつポケモン

氷タイプ

クマシユンの進化系。吐く息を凍らせて牙や爪を作り戦う。泳ぎが得意で北の海を泳ぎ周り獲物を捕まえる』

凶鑑の解説が終わったと同時にツンベアーは白い冷気を放ってきた。その技はサトシ達の足元に目掛けて飛んでいき、大きな氷の山を形成させた。

「うわあ！ツンベアーの「れいとうビーム」!!?」

「おい！いきなり何すんだ！」

さらにツンベアーの「れいとうビーム」が四方八方に放ち始めた。その場で暴れ始めたツンベアーに野生のポケモン達も慌ててその場から逃げ出して行った。血走ったような目で攻撃を繰り返すツンベアーを見たサトシは話し合いが無理だと悟り、ピカチュウを自分の前へと出した。

「こうなったら、仕方ない。ピカチュウ！「10万ボルト」だ!!?」

「ピイイカアアチュウウ!!!」

「ベエエアアア!!!」

「【れいとうパンチ】で打ち消した!!!」

「ピカ…」

ピカチュウの電撃をツンベアーは氷エネルギーを纏わせた拳でその技を打ち消した。

「ワカシャモ! 【かえんほうしゃ】!!?」

「シヤアアア!!?」

「ベエツツツ!!!」

その際にワカシャモの火炎放射がツンベアーに放たれた。技を発動した直後であったため躲す体勢を取れてなかったツンベアーにそのまま火炎放射が決まった。

「ピカチュウ! 【アイアンテール】!!?」

「ワカシャモ! 【スカイアッパー】!!?」

ふらつくツンベアーに効果抜群の技を振りかぎすのだが、体勢を保ったツンベアーは突如黒いオーラを纏った拳で二体諸共なぎ払った。

「ピカチュウ!!!」

「ワカシャモ!!!」

二体はそのパワーに押し返されてしまった。倒れた二体に急いで駆け寄るサトシとアイラ。たった一発のはずがピカチュウとワカシャモにはかなりのダメージが入って

いた。

「何だ！いまの技は…なんてパワーだ」

サトシは見たことのないその技のパワーに唖然とする。ただ一人アイラはその技を使ってきたことにより、ツンベアーの正体がはつきりとした。

「やっぱり…」

さらにツンベアーは「つららおとし」で追い討ちをかける。サトシは一つのモンスターボールを取り出すと、それを上空へと投げた。

「リザードン！君に決めた!!!」

「グオオオオオ!!?」

ボールから飛び出したのはサトシの手持ちの仲間でもエース級の強さを誇るポケモン、リザードンだ。飛び出すと同時にリザードンは翼を大きく広げて飛び上がり、火の玉を軽く放射した。その様子を見たツンベアーは攻撃の対象をリザードンへと向けた。

「リザードン！【かえんほうしゃ】だ!!?」

「グオオオ!!?」

「ベエアア!!!」

リザードンの火炎放射がツンベアーに向かって放たれた。

「【ドラゴンクロー】!!?」

火炎放射からの連続攻撃。続けてリザードンは龍のような鋭い爪のように具現化されたパワーエネルギーを纏った爪でツンベアーに攻撃を仕掛ける。

すると、なんとか耐えたツンベアーは大きく息を吸い込み始めると、光り輝く白いエネルギーを口一杯に広げ始めた。その光りの輝きは「れいとうビーム」の比ではない。

「危ない！あの技は【ぜったいれいど】よ!!!」

「リザードン！【かえんほうしゃ】!!?」

ツンベアーは一撃必殺の絶対零度をリザードン目掛けて放った。氷タイプの技ではあるがこの技に相性など関係ない。喰らえば炎も凍らせてしまうぐらいの威力を發揮する一撃で戦闘不能とさせる技だ。リザードンも火炎放射で絶対零度に対抗する。両者の押し合いが続いたのだが、リザードンに軍配が上がる。リザードンの火炎放射はそのままツンベアーの絶対零度を打ち消すと同時にツンベアーに火炎放射を決めた。

「す……すいこ」

相性は有利とはいえ、異常なほどの強さを誇るサトシのリザードンにアイラは口を開けながらその戦いを呆然としてしまった。

「今だ！ツンベアーを抱えて飛べ!!!」

接近したリザードンはツンベアーを抱きかかえるとそのまま上空へと飛び始めた。

今までのダメージと飛び上がるリザードンのスピードによって生まれた風圧に身体中

を押さえ込まれたツンベアーに抵抗する力が働かなかった。

「リザードン！「ちきゆうなげ」だ!!!」

「グオオオオオ!!!」

そのままリザードンは地球の輪を描くように回り始めるとそのまま一気に急降下し、そのまま地面へと叩きつけた。

叩きつけられた衝撃による発せられた地響きがりザードンのパワーを思い知らされる。そのままツンベアーは立ち上がることはなかった。勝利を確信したりザードンは勝利の火炎放射を放つ。

「決まった!」

「やったな!リザードン!」

「グウオ!!?」

ツンベアーを倒したサトシ達はツンベアーの元へと駆け寄った。

「このツンベアーは一体何だったんだ」

「すぐに保護した方がいいわね」

アイラはモンスターボールを取り出すとツンベアーに向けて開閉スイッチを押さえようとボールをかざす。その時、何処からか飛んできたポケモンによる攻撃がサトシ達を襲い始めた。

「きゃあ!!!」

「な…なんだ!」

技が飛んできた方へと目をやると、そこにはツイントールに縛ったピンク色の髪をした女を先頭に同じ戦闘服を身につけた大勢の集団が現れた。

「とんだ邪魔してくれたわね。貴方達」

見るからに敵意を示している相手にサトシとアイラはポケモン達を前に出す。目の前の奴らは何者なのかも分からない。

ただ、感情には出てはいないが、アイラの視線や呼吸音から何処ともなく怒りを感じていた。一緒になって身構えるサトシの目には彼女がそう写っていた。

ACT
4

ダークポケモンの調査のため「ふたごじま」に訪れたアイラ。その途中に出会ったサトシと暴れまわっているツンベアーと遭遇する。ツンベアーを押さえる事に成功したのだが、洞窟の奥から現れた謎の集団からの奇襲攻撃に襲われた。

「一体何なんだ!」

突然、攻撃を仕掛けて来た集団にサトシは問いかけた。そんなサトシに対してリ

ダーと思われる女は見下すような目つきでサトシを睨みつけた。

「はあ？ あんた馬鹿なの？ 誰だって言われてすんなり名乗るわけないでしょ〜」

答えるつもりはないリーダーの合図に他の団員たちはそれぞれのポケモン達に指示を出す。サトシとアイラに向かってポケモン達の技が一斉になって降り注ぐ。

「ピカチュウ！ 【エレキボール】 !!?」

「ピツカ!!?」

ピカチュウは向かってくる攻撃をジャンプをして躲すと、ボール状に溜め込んだ電撃のエネルギを放った。

攻撃を仕掛けて来たピカチュウを目にしたリーダーは自身のモンスターボールからポケモンを繰り出した。

「アゲハント！ 【ぎんいろのかげ】 !!?」

モンスターボールから登場したと同時に相手のアゲハントは銀色に光る自身の鱗粉を乗せた強風でピカチュウの【エレキボール】を打ち消した。

「いとをはく！ !!?」

「ピツ!!?」

続けざまにアゲハントは糸で一瞬にしてピカチュウの身体を拘束した。アゲハントの糸で身動きが取れなくなったピカチュウはそのまま地面へと撃墜した。

「ピカチュウ!!!リザードン!」「かえんほうしゃ」だ!!?」

「グオオオ!!?」

ピカチュウを助けるべくリザードンに指示を出す。だが、リザードンが攻撃をするその瞬間に無数の氷柱がリザードンめがけて追撃された。不意打ちによる攻撃にリザードンはそのまま腹部にダメージを受けてしまった。

氷柱が飛んできた方へ目をやると、倒したはずだと思っていたツンベアーがより殺気を漂わしながら立ち上がったのだ。

「リザードン!」

「グオオオ!!!」

ピカチュウに絡んだ糸を解きながら、サトシはリザードンに呼びかける。その呼びかけに応じてリザードンは立ち上がると、鋭い雄叫びをあげた。

「よしリザードン!」「ドラゴンクロー」!!?」

あの程度の攻撃で怯むサトシのリザードンではない。そのまま龍の爪でツンベアーに攻撃を仕掛けた。だが、サトシの目にはツンベアーに接近してくるリザードンを見て軽く笑みを浮かべているリーダー格の女の素顔が映っていなかった。笑うのと同時にツンベアーの拳からはどす黒いオーラーが纏っていた。

「まさか!!!」

変な違和感にアイラは何かを察した様子でいた。慌ててサトシの方へと振り返ると、攻撃を中止するよう呼びかけた。

「ダメ！サトシ!!!」

だが、リザードンはすでにツンベアーの懐に入っていた。そしてリザードンが爪をふりかざそうとしたのと同時にツンベアーも黒いオーラを纏わせた拳をリザードンに振りかざした。

「ツンベアー！【ダークラッシュ】!!?」

「ベア!!!」

「グオオ!!!」

「リザードン!!!」

リザードンとツンベアーの攻撃が交わったその瞬間に一瞬でリザードンは後方で聳え立つ氷岩に叩きつけられてしまった。

「な…なんだ今の技は」

突然の事に驚き隠せないでいた。何よりもあのリザードンがこうも簡単にパワー負けしてしまった事とさっきまで戦闘不能寸前だったツンベアーの予想だにしないパワーにただサトシは呆然と立ち尽くしてしまった。

「へえ、あんた知らないの。最強のポケモンにしか使えない最強技なんだよね♡」

絶望満ちた顔したサトシを煽るように挑発すると軽くウインクをしては次の攻撃の指示を送ろうとしていた。しかし、ただ一人。ツンベアーが使った技を見て確信したのか、怒りを露わに拳を震わせているトレーナーが一人いた。

「そうやって…また罪のないポケモン達が苦しめているのね…」

「ア…アイラ？」

「どこまでお前達は…こんな…卑劣なことができるの。そのせいで、どれだけのポケモン達が心を失い傷つき、どれだけのトレーナーが悲しんでいるのか…分かっているのか!!!」

アイラのただならぬ怒りを見てはサトシは自分が思っていた以上にあの集団がいかに非道な連中であると分かった。

そして、すぐにアイラはその怒りをぶつけるように猛攻撃を浴びせ始めた。

「ワカシヤモ！【かえんほうしゃ】!!?」

「ムウマ！【おにび】!!?」

「シヤアアア!!!」

「マウ!!?」

「ぐっ!!!」

「ぐあああ!!!」

その怒りはツンベアーではなく、ツンベアーを苦しめた他の残党員に攻撃が向けられた。憤怒の炎に包まれた残党員はあまりの炎の勢いに前に出られないでいた。

ごめん…ツンベアー。すぐに助けてあげるから。我慢して…

「ワカシヤモ！【スカイアツパー】！！？」

「シヤアアア！！？」

「ベエア…」

「くっ！ツンベアー！【ダークウエーブ】！！？」

「グアアアア！！？」

「ムウマ！【サイコーウエーブ】！！？」

「ムマアアアア！！？」

「【つばめがえし】！！？」

「シヤア！！？」

「ベエツツ!!」

攻めては防いでのヒットアンドウェイで徐々にツンベアーの体力を削っていく。

「ちっ!二体同時じゃあ…」

やはりサトシのリザードンと戦った時のダメージが残っていたのか。明らかに動きが鈍くなっているツンベアーにアイラの二体のポケモンによる攻撃に押されてしまっている。すぐに他の手持ちで応戦しようと、別のモンスターボールを手に取りろうとしたその時、アイラの左腕にある装置を見ては急に敵の女の顔色がだんだんと青くなってきた。

なんで、あの女がああ装置を…

このままではまずいと思った矢先、すぐに残党員の方へと指示を出す。

「あんた達!加勢しなさいよ!」

「!!「おおおお!!」」

命令の元、すぐに残党員は残りのモンスターボールを手を一斉に投入しようとした。それを見たサトシはすぐに別のポケモンを繰り出してはそれを防ぐ。

「ベイリーフ!「はっばカッター」だ!!?」

「ベーイ!!!」

ベイリーフの攻撃はモンスターボールを投入しようとした残党員に向けて放たれた。

ベイリーフの攻撃に、足元が不安定な氷の道に足を滑らせては残党員の動きを封じた。

「サトシ!!?」

「アイラ!こいつらの事は俺たちに任せてくれ!」

「ありがとう!サトシ!」

残党員の方はサトシに任せてアイラはツンベアーとの戦いに集中した。

「ワカシヤモ!【でんこうせっか】!!?」

「シヤア!!?」

「かえんほうしや!!?」

【でんこうせっか】でツンベアーの腹部を攻撃してバランスを崩す。そこを効果は抜群の炎タイプの攻撃を浴びさせる。怒涛の「かえんほうしや」の威力にツンベアーはそのまま後方へと吹き飛ばされた。

「今だ!行けつ!!!」

次にアイラは利き腕でない方の左手でモンスターボールを握りしめた。すると、左腕に装着された装着が起動し始めると、神々しく左手に握りしめられたモンスターボールが輝き始めた。急いでツンベアーを戻そうと慌てるものもう遅かった。ツンベアーに目掛けて投げられた輝くモンスターボールはそのままツンベアーを捕らえた。捕獲のカウントダウンが始まらないまま、ツンベアーを捕らえたモンスターボールはアイラの

手の中へと収まった。

「スナッチ完了ー！」

その光景に敵の残党員だけでなく、サトシも驚いていた。そのはずだ。アイラが捕獲したツンベアーは紛れもなく野生ではなく、敵側のポケモンであったからだ。

「きiiiiiiii!!!退却よー!退却〜!!!」

敗北を確信した後、残党員を連れて奥の方へと走り去っていく。

「待て!!!」

その後をすぐにアイラはワカシヤモ達を戻すと後を追いかけていく。すぐにサトシもリザードンとベイリーフを戻してはアイラの跡を追う。暗い洞窟を抜けていくと島の外へと出て行った。敵の姿を探そうと辺りを見渡したのだが、冷気によって冷やされた空気によって生み出された霧が視界を邪魔をしているため姿を捉えることができなかった。

敵の逃亡を許してしまった事でアイラは悔しさのあまりその場で崩れ落ちてしまった。砂浜の砂を握りしめている様子にサトシはアイラに声かける事ができなかった。

~~~~~

クチバシテイのポケモンセンターへと戻ってきたアイラとサトシはポケモン達をジョーイさんに預けた後、すぐに国際警察本部へと連絡をかけた。

『ご苦労だったな。アイラ』

「ですが、すみません。幹部と思わしき人物の確保には至りませんでした」

『いや、奴らはふたごじまのポケモン達をダーク化させていたのかもしれない。それだけでも被害を抑えることは出来たものだ』

アイラは深々と下ろした頭を上げると、もう一度、謝罪の言葉を発した。

すると、アイラの後ろから何処か聞き覚えのある声が出た。

「お久しぶりです。ハンサムさん！」

『おお！サトシくん！そうか君もアイラと一緒に食い止めてくれたのか！』

その人物を見たハンサムの目は見開いた。彼は幾多の難事件にも共に行動した事がある人物でいたからだ。

サトシも久しぶりに再会出来た事に喜びを感じていたのだが、それよりも今日あった事についてどうしてもサトシはアイラとハンサムに説明してもらいたかった。

「アイラ！ハンサムさん！そのダークポケモンって何なんですか？」

やはりと悟ったハンサムにアイラも下唇を噛み締めては目線を下にやる。そんなアイラの気持ちも分かっているが、見てしまった以上は説明しない訳にはいかなかった。『ダークポケモン。ひと呼んでポケモン戦闘兵器。心を壊して感情を無にしたポケモンの戦闘能力を極限にまで上げて、ただ襲わせるためだけに使わされるポケモン達のことなんだ』

「心を壊す…戦闘兵器化したポケモン…」

その言葉にサトシは驚愕した。これまで旅の中でもロケット団やポケモンの売買を繰り返す密漁団であるポケモンハンターみたいな悪の組織と対面した事は何度もあった。だけど、これは非常すぎる。ポケモンの心を壊す事を平気にやってのけるその集団にサトシは怒りを通り越して呆然としてしまった。

それは相棒のピカチュウにも伝わっている。サトシは一旦呼吸を整えた。

「なあ、アイラは其奴らを追っているんだよな」

「ええ…」

決意を固めたサトシはアイラにその意を語る。

「俺にも手伝わせてくれないか」

「えっ…」

「俺！ いままで他の地方を旅をして、ロケット団みたいな悪の組織やポケモンハンターとも戦って来た。だけど、ハンサムさんの話からは其奴らのやっている事はあまりにも酷すぎる。ポケモンを戦闘兵器に…感情を消すだと…よくもそんな事を平然としてやるものだよ！ こんな話を聞いて黙っていられないぜ！」

「ピカチュウ!!?」

ダークポケモンの悲劇。そしてその悲劇が自分の生まれ故郷に差し伸べられいると知ってしまった以上は何もしない訳にはいかない。ピカチュウも両頬の電気袋から電力を発光させながらサトシと同じ思いである事を示した。

『サトシ君の実力はわたしも保証する。できる事なら私からもお願い…』

これまでサトシと共に悪の組織と対峙してきたハンサムはサトシの協力には賛同する。だが、その意見をアイラに告げた途端にハンサムの声を遮るようにして

「許せません!!!」

ポケモンセンターにいるトレーナーが一斉にサトシ達に集中が集まるぐらいの大きな声でサトシの意を強く否定した。

「アイラ?」

否定されたよりもアイラの気迫にサトシは驚いた。息を荒くしたアイラは落ち着くと鋭い目つきでサトシを睨んだ。蛇睨みを受けたかのようにサトシの身体は硬直した。背中から感じる寒気と頬から浸る冷や汗をかくサトシの顔をアイラは一歩ずつ踏み込んで顔を覗かせた。

「たしかに貴方は強い事は認めるよ。だけどね…そんな正義感だけで協力を要請するのはやめてくれない」

声が出ない。アイラの危機迫る表情に尻込みしてしまった。それはモニター先のハインサムも同じだ。

「私の出身聞いたわよね。オーレ地方って。サトシは聞いた事あつた？その地方の名を」

「えええと…」

「知ってるわけないよね。オーレ地方こそがダークポケモン発祥の地。その事件のせいで他の地方とも隔離された地方なのよ。ジムもなければポケモンリーグも開催されない。ポケモン協会もオーレ地方だけは他の地方とは全く別のものと避けているのよ！」

だんだんと震えていく右拳を左手で抑えながら、サトシに言い放つ。

「ダークポケモン達の恐ろしさも何にもわかってない癖に…一緒になつて戦うなんて言わないで！」

言い切ったアイラはサトシに背を向けると、ジョーイさんに預けたワカシヤモ達を引き取りに向かった。そんなアイラをサトシは引き止めた。引き止めたアイラはサトシを睨み返すと、さつきとは違って真剣な眼差しで見つめてきたサトシに驚いた。

そして今度はサトシの方から一歩ずつ歩み寄って行くとモンスターボールを片手にアイラに向けた。

「だったら、アイラに実力を見てもらえばいいんだな」

「えっ?」

サトシの取った行動に戸惑ったが、彼が何しようとしているのかはすぐに理解できなかった。

「アイラ!俺ともう一度一対一のポケモン勝負をやってくれ。口だけじゃない!俺達の覚悟を見せてやる!」

「…分かったわ」

サトシの言葉にアイラは承諾した。二人はそのままハンサムとの通信を終えると、バトルフィールドへと向かって行く。両トレーナーサイドに立った二人。先にアイラがポケモンを繰り出した。

「私はこの子で行くよ!」

「マアアアンダ!!?」

モンスターボールから飛び出したのは、ふたごじまで見たポケモンではない。赤い翼を広げて大空へと滑空する。

「ボーマンダか…」

ボーマンダに対して同じく空を飛びリザードンを出したい場面であったが、回復したとはいりザードンはツンベアー戦で疲れ果てている。リザードンを引つ込めたサトシは別のモンスターボールを握りしめると勢いよくフィールドへ放った。

「ゲッコウガ！君に決めた!!!」

「コウガ!!？」

モンスターボールから解き放たれるとゲッコウガは腕を組み直立した状態でボーマンダを睨んだ。

「ボーマンダ！「りゆうのはどう」!!？」

「ゲッコウガ！「みずしゆりけん」!!？」

二人のポケモンが出揃った直後、バトル開始の合図を送らないまま二体の攻撃が放たれた。そのバトルを見にきたトレーナー達には二つの技の衝撃波が身体中に走る。そして感じる。

誇りをかけた。強者同士のバトルが始まったと……

## ACT 5

カントーの港町クチバシテイ

朝早くから一隻の船が入港した。大勢の人が荷物を持ちながら続々とカントー地方へと入国して行くと、その中から四人の少年少女も初めての他国に胸を躍らせていた。

「ねえ！あつちの方で凄い歓声が上がってない!?？どんな人がバトルしてるんだろ！」

「アーマイ!!?」

「ヴェラ火山のような燃えるバトルか！確かに気になるな！」

「ガアメエス!!?」

「ダメだよ二人とも！今はアローラ祭の準備をしないとイケないんだから、まずはこっちが優先だよ！」

「モギユユ!!?」

「そうそう！リーリエもこっちに向かっているんだから、早めにやらないとイケないよ！」

「アウアウ!!?」

「は〜い……」

バトルを見学できずに残念そうな二人を引っ張って、四人はアローラ祭の準備に取り

掛かっていく。

~~~~~

その気になるバトルはあつという間に人盛りで埋め尽くされていた。あまりの人数に後方では背伸びをしながらも、なんとかこれから始まるバトルを観戦しようとするトレーナーもいた。

大勢のトレーナーに注目される中、二人のトレーナーによるバトルが始まろうとしていた。

「ボーマンダ！ 「りゆうのはどう」 !!?」

「ゲツコウガ！ 「みずしゆりけん」 !!?」

二体の同時攻撃は互いを打ち消しあつた。さらに発生した爆煙がフィールド場を包み込み始めた。辺り一面に広がる爆煙はフィールドおろか観戦しに来たトレーナーをも呑み込むほどであつた。

「つばめがえし」 !!?」

「コウガ!!?」

その爆煙を払うようにして、ゲツコウガは一直線に飛んでいるボーマンダに向かって飛び出した。

ゲツコウガの攻撃はボーマンダに命中する。だが、アイラは技を決めたゲツコウガの着地するの瞬間を見逃していなかつた。

「ボーマンダ！【かえんほうしゃ】よ！！？」

「ダアア！！？」

「くっ！あの状態から攻撃に移せるのか！」

空中で上手く回避できないゲッコウガにボーマンダは燕返しのだメージに絶えながらも、すぐにゲッコウガに火炎放射を放った。

アイラのボーマンダの咄嗟の切り替えに驚きながらもサトシはすぐに指示を出した。

「ゲッコウガ！【みずしゆりけん】！！？火炎放射を防ぐんだ！」

「コオウガ！！？」

サトシも水手裏剣で応戦させたのだが、その行為が裏目に出てしまった。

再びぶつかり合う両者の技により生まれた衝撃波にゲッコウガはそのまま押し出されてしまい、フィールド上に強く体を叩きつけられてしまった。

「今よ！【すてみタックル】！！？」

「ダアアア！！？」

立ち上がるゲッコウガよりも先にボーマンダは一気に急降下すると、そのまま突進していく。

「コウガア！！！」

「ゲッコウガ！！！」

身体中にパワーエネルギーを溜め込んだボーマンダの体当たりはゲッコウガを捕らえた。自らの命を燃やすようなエネルギーを放った捨て身の体当たりにゲッコウガは吹き飛ばされてしまった。

ボーマンダはというと、反動によるダメージを振り払いながらも一度、ゲッコウガ目掛けて突進する。

「ゲッコウガ！「かげぶんしん」!!?」

「かえんほうしゃ」で薙ぎ払って!!?」

危険を回避するためにゲッコウガは複数の分身を作り出した。しかし、ボーマンダは関係がないように火炎放射で全ての分身を打ち消してしまった。

「くっ！「みずしゆりけん」!!?」

向かってくるボーマンダに水手裏剣を放つ。その攻撃はボーマンダに命中するが、ドラゴンタイプには水系攻撃は効果はいまひとつ。何事かなかったかのようにボーマンダはゲッコウガとの距離をさらに詰めていく。

「すてみタックル」!!?」

「【つじぎり】!!?」

再びボーマンダの力一杯の突進をゲッコウガは常闇のエネルギーを放つ刃でボーマンダと迎え撃った。だが、ボーマンダの特性の《いかく》の影響もあったか、ゲッコウ

ガはそのままボーマンダとの押し合いに敗れてしまった。

吹き飛ばされたゲッコウガの安否を確認を図るサトシの声にゲッコウガは左肩を支えながら、ゆっくりと立ち上がった。

「これが…アイラの本気」

アイラとボーマンダの猛攻撃にサトシとゲッコウガの顔が次第に曇ってきた。

アイラとポケモン達の強さもそうだが、サトシはふたごじまで戦った時と明らかに違う雰囲気漂わせている感じがした。その証拠にアイラは楽しんでバトルをしているよりも、目の前の敵を全力で叩き潰しに行くような真剣な眼差しでサトシとゲッコウガを睨んでいた。

ひたすら攻撃を仕掛けてきたボーマンダの疲れと同じぐらいアイラも少し息を荒らし始めていた。ゆっくりと呼吸をした後、口を開いた。

「オーレ地方はね。ポケモンバトルが盛んな地域が有名だね。他の地方からも腕試しによくトレーナーが訪れていたの。そりやもう毎日がお祭りみたいなものだったの…」

「いつかはポケモンジムやポケモンリーグも建設してオーレ地方の魅力をもっと多くの人に見てもらいたいと思っていたのに…」

拳を少しずつ震わせながら悔しそうにアイラは話を進めた。しかし、それとは反対にその声は何処と無く弱々しいものでもあった。

アイラの怒りと悲しげな感情が伝わったのか、サトシもゲッコウガも構えるのを止めるとバトルを忘れてるみたいにアイラの話聞き始めた。

「それがだんだんとエスカレートして、スポーツとしてでなく、決め事や賭け事にもポケモンバトルで型を付けるようになってからは弱肉強食の世界へと変貌した。強い者が偉い！強い者が正義だ！弱者は逆らうな！弱者はずっと這い蹲ってる！」

感情が爆発したかのように、徐々に声を荒らし始めてきたアイラ。すると、胸ポケッタから輝しく放つ大きな宝石をぶら下げたネックレスを取り出すと前に差し出した。

その宝石に見覚えがあったサトシとゲッコウガは一気に緊張が走った。

「勝つ事に執着したトレーナーの末路がダークポケモンを生み出した！それを生み出したのはシャドーっていう最悪組織！だけど！オーレのトレーナーのみんなはダーク化のリスクを知っていながらも自身のダークポケモン化を受け入れた。もうオーレのトレーナー達はポケモンを一つの生き物っていう認識がなくなったの……」

その声の反応したかのようにさらに光り出すキーストーンとボーマンダに持たせてあったメガストーンが一気に光り出した。

「全ては支離滅裂な欲望のせいよ！シャドーが一度滅んだのに感謝どころか妬みを言う者の方が多かった！それを見て私は絶望した！復興して町は戻っても人の心はそう簡単に戻らない！ダークポケモンはいなくなっただけ、ダークトレーナーは増えてきた！」

もうオーレは救われないのよ！」

涙目になりながらも叫び続けるアイラをサトシは口を固く閉じながら、アイラの悲痛な感情を受け止めていた。

そして、キーストーンの光とメガストーンの光が結び始めると、ボーマンダの身体が一気に光り出した。

「それが…カントー地方にも同じ事が起きようとしている…させる訳にはいかない。私は!!!」

「ボオオオオ!!!」

「救えなかったオーレのためにもこの地方を守ってみせる!もう!ダークポケモンをこの世から完全に消してやる!!!」

光の強さが最高潮に達したメガストーンの光がフィールド一面に光り輝いた。アイラの募る感情の強さを表現しているかのようで、その光りは目を開けられないほどの眩しさを放っていた。

そして、アイラとボーマンダの叫びが響き渡った。

紅い三日月の如く。進化のエネルギーによって艶に磨きがかかるボディをボーマンダは空を切り裂いた。その姿をサトシにゲッコウガ。そして、観戦トレーナー全員を魅了させるほどの力強さを表していた。

「これで止めよ！ボーマンダ！『りゅうせいぐん』!!？」

右手を大きく空に向かって指したアイラの合図とともに、ボーマンダはエネルギー砲

「ボーマンダ!!メガシンカ!!!」
「ダアアアア」
「!!!!!!」

を一気に空高く打ち上げた。

打ち上げられたエネルギーは花火のように散乱すると、流星群のように一気にゲッコウガ目掛けて降り注がれた。迫り来る無数のエネルギー弾に観戦トレーナーの誰もがバトルの終焉を予感していた。

サトシとゲッコウガも迎え撃つどころか躲す気もないまま、ただ目線を下の方へ向けながら呆然と立ち尽くしていた。

しかし、それは決して勝負を諦めたという訳ではなかった。

本当に安易な答えだったよ。

自分の想いを貫こうとするだけで、アイラのダークポケモンに対する気持ちや自分の生まれ故郷に対する気持ちを考えてもいなかった。

考えていなかったけど……

だけど……これだけは言える

サトシとゲツコウガは同時に顔を上げた。勝負を諦めた者ではない。その力強く真剣な眼にアイラはサトシとゲツコウガに対して一瞬、恐怖を覚えた。

そして、またサトシもありつたけの声でアイラに今の自分の気持ちをぶつけに行つたのだ。

「俺もアイラと同じだ！ポケモンが好きだからこそ俺も救いたい！自分の生まれ故郷だからこそ守りたいんだ！悲劇を繰り返したくないアイラの気持ちも分かっているつもりだ！だから俺もその気持ちに応える！俺たちの全力でその想いを伝えてみせる！」

アイラと同様。サトシは右拳を高く天へと上げた。そして、その動きにシンクロするかのようにゲッコウガもサトシと同じポーズを取った。

そしてゲッコウガの目がメガボーマンダの紅い翼と負けないぐらいの紅い眼を放つと、とてつもないパワーを解放した。

自分の想いと覚悟は口だけじゃない。それはこのバトルで…

「行くぞ!!!!
ゲツコウガ!!!!
フルパワーだあああああ
!!!」

応えてやるぜ!!!!

「うおおおおおおおおお
「コオウガアアアアアアア

!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

サトシとゲツコウガの雄叫びと共にゲツコウガの力が大きな水流の渦を纏いながら一気に吹き出された。不思議な事にその光景を目の前にしたアイラにはサトシとゲツ

コウガが重なり合うかのように見えていた。

さらに水流の渦がゲツコウガの背中に集まると、大きな水手裏剣へと形成し始めた。そして、明らか姿が変わったゲツコウガにアイラは驚愕した。その姿はまるで：

サトシと瓜二つのように見えた。

「ゲッコウガ！【つじぎり】!!？」

「マアマダアア!!!」

「ボーマンダ!!!」

えっ…何?!?？　嘘…いつの間に

サトシの指示と同時にゲッコウガの姿が一瞬にして消えた。そして気がつくとき自分のボーマンダがゲッコウガの攻撃を受けていた。

忍びポケモンだからという訳ではない。ゲッコウガの姿に気を取られていた訳でもない。瞬間移動したかのようにボーマンダへ移動したゲッコウガのスピードにアイラは何が起きたのか分からなかった。

「くっ！」「かえんほうしゃ」！！？」

「みずしゅりけん」！！？」

ボーマンダの火炎放射にゲッコウガは一回り大きくなった巨大水手裏剣を放った。放たれた技は再び交わると発生された水蒸気により二体のポケモンは包み込まれてしまった。

煙が晴れるまで待つしかないみたいね：

晴れた瞬間に一気に攻撃を仕掛けようと、ボーマンダとゲッコウガの姿が見えるまでアイラは静かに待つ事にした。

「そこだ!!!ゲッコウガ！」「みずしゅりけん」！！？」

「コウガア!!?！」

「ええ!!!」

ゲッコウガの水手裏剣が決まるとボーマンダは爆煙の外へと放り出されてしまった。

「互いのポケモンが見えていないのはサトシも同じはずなのに何で！あんな事…ゲッコウガと同じ視線でないと分からないはずなのに！」

同じ…視線…

まさか…サトシにはゲッコウガの見える光景が見えているというの…

改めてサトシの方を見ていると、サトシとゲッコウガは同じ構えを取っていた。それに「つじぎり」や「みずしゆりけん」を指示した時も自分も一緒に戦っているようにゲッコウガと同じ動きをしていた。まさかと思うが、アイラにはサトシとゲッコウガは完全にシンクロしている様に感じていた。

「ボーマンダ！【すてみタックル】！！？」

「ゲッコウガ！【つばめがえし】！！？」

ボーマンダの追撃にゲッコウガは迎え撃つ。ゲッコウガはボーマンダの体当たりを

ギリギリ惹きつけてから、まず下に潜り込む。そして右拳で腹部に攻撃を決めると、そのまま左拳、右脚、左脚と連続攻撃でボーマンダを打ち上げた。

「ゲッコウガ！【みずしゆりけん】!!?」

打ち上げられたボーマンダの上に瞬時に移動すると、そのまま巨大水手裏剣を叩き込んだ。ボーマンダはそのまま地面に向かって落とされたのだが、左右に大きく首を振ると砂煙を払いながらゲッコウガを睨みつけた。

「来るぞ！ゲッコウガ!!!」

「コオウガ!!?」

あの猛攻に耐えたボーマンダにサトシはすぐにゲッコウガを構えさせた。両者の糸口を探り合う状況と思いきや…

「お疲れ！ボーマンダ！」

「え…」

ボーマンダのメガシンカが解けたすぐにアイラはボーマンダをモンスターボールへと戻した。一対一のバトルなためポケモンの交代はない。まだ、十分に戦えるボーマンダを戻したアイラにサトシは目が点になる。そんなサトシにアイラはさっさとサトシの元へと駆け出した。

「強いねサトシ！私達の負けだわ！」

「えっ、でも…」

「それよりも何よ！サトシのゲッコウガは!!!メガシンカじゃないわよね！本当に君は面白トレナーだよ！」

「えっ…えつと、ア…アイラ？」

「ピカ…」

「コオウ…」

さつきとイメージと違うアイラに両手を握られながらもサトシは戸惑ってしまった。そう感じたのはピカチュウもゲッコウガも同じだった。

~~~~~

「というわけで、サトシにもダークポケモン調査のお手伝いをさせて頂こうと思います

♪」

『お…おお！そうか。それではサトシ君よろしく頼むぞ！』

「はい！」

「ピツカ!!？」

人が変わったかのように和かな表情で語るアイラにハンサムも戸惑いを隠せないでいた。まあ、何事かあれ。サトシの実力をアイラは認めたのは確かな様だ。

「じゃあ、これを渡すね！」

するとアイラは複数のモンスターボールをサトシに渡した。だが、その渡されたモンスターボールは今まで見てきた物とは違う不思議な構造をしたモンスターボールだった。それをまじまじと見ていたサトシにハンサムが切り出した。

『それは国際警察部隊が開発したスナッチマシンを元にして改良した。スナッチボールだ！』

「スナッチボール!!？」

初めて聞く名前にさらに思考が止まっていくサトシにアイラは続けた。

「サトシはふたごじまで私が彼奴らのポケモンをゲットしたのを見たでしょ」

それを聞いてサトシは思い出した。あの時に出会った普通とは違う凶暴性があつたツンベアー。ふたごじまで遭遇したトレーナーの指示を従っていたためトレーナーのポケモンであつたのにアイラはそのツンベアーをゲットした。

そう、人のポケモンを別のモンスターボールでゲットすることができないのにアイラはそれを目の前でやった。

アイラはあの時、左手に装着されたマシンをサトシの前に出すと、他の人の目を気にしながら小声でサトシにこう話した。

「察しの通りよーそのボールは他人のポケモンを奪うことが出来るボールなのよ。そしてこれが私がつけていたこのスナッチマシン。モンスターボールをスナッチボールに変える道具なの」

アイラの話からスナッチマシンは元々はオーレにいた組織「スナッチ団」が開発した物であったという。

スナッチマシンは人からポケモンを奪うという悪の目的で作られたマシンだけど、今はすべてのスナッチマシンは国際警察本部に回収されて今はそういう悪い奴からポケモンを助ける物として使われているという。

「つまり、このボールで彼奴らによつてダーク化されたポケモン達を助けることができるんだな！」

『そうーだから使うときは他のトレーナーの目には十分に注意してくれ！奪われてしまったら、それこそ大問題だからな！』

ハンサムの言う通りそれがロケット団の耳にでも挟まれてもしたら一大事になる。

そんな危険な事に首を突っ込んだ事を改めてサトシはその責任の重さを自覚した。

『それじゃあ、一人とも！共にダークポケモン調査をよろしく頼む！』

その意思表示を示す様にサトシはピカチュウと一緒に敬礼した。

「ウルトラジャー!!!」

「くっ／＼／」

「くっ／＼／あははは!!何サトシそれ！超ウケるんだけど／＼／」  
「いや〜これは…その…」

アローラでのウルトラビーストを調査した時に発した台詞を思わず言ってしまった事にサトシは静かに赤面するのであった。

~~~~~

「じゃあ、何かあったら私のポケギアに連絡して！」

「分かったよ！アイラ」

「ここでアイラと別れて調査に当たる事になった。

「サトシって、今いくつ？」

「十六だけど…」

「ふん♪」

サトシの歳を聞いたアイラは小馬鹿にした表情でサトシを見つめた。

「ふふっ／＼／年下ね！それじゃあ、頼んだよ！後輩君♡」

そう言うと、アイラはボーマンダに乗って西の方へと移動した。

「よし、行くか！ピカチュウ!!!」

「ピッカ!!?」

アイラを見送った後、サトシの掛け声と共にピカチュウと一緒に走り出した。

微かに照らす光の一つになるべくに

サトシはカントー地方に迫り来る闇の渦へと飛び込んで行く。